

鳥取県羽合町



長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI

寄贈

天神川流域下水道事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

(本文編)

1983

財団法人 鳥取県教育文化財団

正 誤 表

頁	行	正	誤
300	6	両側	西側
	26	舌骨	舌角
301	30	烏口突起基部	烏口突起起部
	表	65関節突起幅	65関節突起幅
		69頤高	69頭高
302		脛骨	頸骨
	19	第2 楔状骨	第2、楔状骨
	25	錘体	錘体
303	32	錘体	錘体
	19	肋骨	助骨
304	21	場合に	場合の
	2	下顎骨	小顎骨
305	4	強いて	強いと
	13	奈良時代	(新しく挿入する)
	17	人骨は土葬のSX' 01を別とすれば、 淡褐色	人骨は、淡褐色
	20	同定は	同定に
	31	10数点	10点
306	10	以外には	以外は
		中手骨 7本、	中手骨 7本
	22	頭棘	頭棘
	26	かなり みられる。	かなり みている。
307	27	一般に	一般に
	3	頭頂骨が側頭骨、 蝶形骨	頭頂骨、蝶形骨
	7	下顎では	下顎は
	9	閉鎖して	鎖して
	12	坐骨結節	坐骨統節
	18	いるが、	いが、



## 序 文

天神川流域下水道事業に伴う長瀬高浜遺跡の発掘調査は、昭和52年8月開始以来5年半の歳月と多大の調査費を費して、57年度末で一応終了した。

この遺跡は、標高5～6mの黒砂層に所在していたため、調査は10mにも及ぶ白砂の除去にはじまり、季節風による飛砂や寒風、くぼ地における灼熱等々苦闘の連続であった。しかし、調査に参加していただいた皆さんの努力の結集で、砂丘の下から遺跡を発掘して遺構や遺物に新しい光をあて、歴史の解明に貢献するところ極めて大であったと思っている。

この調査で特筆すべきは、県下で初めて砂丘遺跡の本格的な調査が行われ、さまざまな時代にわたって、この地に営まれた多数の住居跡や各種の墳墓・古墳等の発掘によって、砂丘と人間のかかわり方、砂丘の形成過程、集落及び墓制の変遷、弥生時代の玉作り、さらに古墳時代の埴輪・祭祀等に関する貴重な資料を提供したことであろう。

最後の報告書を刊行するに当たり、終始この調査に温かい御援助・御指導をいただいた関係各位、関係機関の方々をはじめ、調査に従事していただいた皆さんに心から感謝を申し上げる次第である。

財団法人 鳥取県教育文化財団 理事長 西尾 邑次

## 例 言

本書は、天神川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の、昭和57年度調査地区の報告書である。

財団法人鳥取県教育文化財団が、県土木部下水道課の依頼をうけて発掘調査を実施したものである。発掘および整理・報告書作成作業の実施にあたっては、鳥取県教育委員会文化課・鳥取県埋蔵文化財センターの指導と、各研究機関・大学等の考古・人類・自然科学等の専門家の助言・協力を得た。

本書の作成については、中部埋蔵文化財調査事務所で昭和57年度調査者が行ない、下記の専門家の方々と昭和57年度調査関係者の方々の指導・助言を得た。

記して感謝の意を表します。



調 査 指 導	鳥取県教育委員会文化課・鳥取県埋蔵文化財センター
	県文化財保護審議会委員 山本清・佐々木謙・手嶋義之
	京都大学 池田次郎・家根祥多
	鳥取大学 豊島吉則・赤木三郎・井上晃孝・井上貴央
	奈良国立文化財研究所 田中琢・佐原真・沢田正昭・町田章
	東京国立博物館 本村豪章
	同志社大学 森浩一・石野博信・堀田啓一
	岡山理科大学 鎌木義昌・小林博昭・亀田修一
	和洋女子大学 寺村光晴
	平安学園高校 萩本勝
	北九州市立歴史博物館 小田富士雄・武末純一
	県立博物館 大谷博・清末忠人
	県教育研修センター 山名巖
	倉吉文化財協会 名越勉・真田廣幸・森下哲哉・根鈴輝雄

長瀬高浜遺跡の報告書の刊行は次のとおりである。

長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 I	北条バイパス調査地区	昭和55年3月刊行
〃	II—昭和53年度緊急調査地区	昭和56年3月刊行
〃	III—昭和54年度調査地区	昭和56年12月刊行
〃	IV—昭和55年度調査地区	昭和57年3月刊行
〃	IV— 〃 (埴輪篇)	昭和57年9月刊行
〃	V—昭和53・56年度調査地区	昭和58年3月刊行
〃	VI—昭和57年度調査地区	昭和58年7月刊行

## 凡 例

当遺跡の発掘調査は浄化センター工事の工事順位 (a～g)〔1 図参照〕に従って調査を進めている。53年度は b・f<sub>1</sub>地区の一部と a 地区、54年度は b 地区、55年度は c・d・e 地区と f<sub>1</sub>地区の一部を、56年度は f<sub>1</sub>・f<sub>2</sub>地区と g 地区の一部を、57年度は g 地区の残りの部分の調査を行った。

1. 本書における方位はすべて真北を示す。
2. 当遺跡では 20 m のメッシュを組み (1 図) ライン交点、大グリッド (地区) の名称を決め表わす。大グリッド間は 2 図のように座標を組み表わす。大グリッドを 10×10m のグリッドで区分する場合は (1 図) NEG・SEG・NWG・SWG と表わす。
3. 本書における遺構記号は次のように表わす。  
SA: 柵状遺構 SB: 掘立柱建物跡 SD: 溝状遺構 LSD: 大型方形周溝状遺構  
SE: 井戸跡 SF: 火葬墓 SI: 竪穴住居跡 SK: 土坑状遺構 SP: 祭祀用ピット SQ: 井戸状遺構  
SR: 道状遺構 SX: 古墳・墳墓 SX': 中世墓 (火葬墓を除く) SXA: 飛鳥時代の墳墓 SXY: 弥生時代の墳墓 SZ: 方形周溝状遺構
4. 遺構挿図中における遺物略記号は次のように表わす。  
B: 銅製品 C: 古銭 D: 土製品 H: 埴輪 J: 玉製品 M: 鏡 F: 鉄製品  
P<sub>o</sub>: 土器 S: 石製品 W: 木製品
5. 遺構挿図中における遺物略記号のはいらないものは次のように表わす。  
P<sub>o</sub>23 → 23 F15 → ⑮
6. 遺構挿図中における黒砂上層面を ↓↓↓, 発掘前の地表面を √√√ のように表わす。
7. 遺構挿図中, セクションの基準線標高は [L=] の記号で表わす。
8. 遺構挿図中における遺構検出面は  のように表わす。
9. 土器の拓本・実測図において粘土帯の継ぎ目がみられるものは  で表わす。
10. ピットの計数は (長軸×短軸-深さ) のように表す。

# 目 次

序 言	
例 言	
凡 例	
挿図目次	
表 目 次	

## 第 I 章 長瀬高浜遺跡の調査経過

第 1 節 発掘調査までの経過	1
第 2 節 遺跡の発見	1
第 3 節 試掘調査（昭和52年次）	1
第 4 節 昭和53年度調査	2
第 5 節 昭和54年度調査	3
第 6 節 昭和55年度調査	4
第 7 節 昭和56年度調査	4
第 8 節 昭和57年度調査	5

## 第 II 章 発掘調査の結果

第 1 節 竪穴住居跡	7
第 2 節 玉作工房跡	68
第 3 節 掘立柱建物跡	91
第 4 節 墳墓	107
第 5 節 中世墓	167
第 6 節 土坑その他の遺構	189
第 7 節 南側の遺構群	205
第 8 節 土塁状遺構	223
第 9 節 LSD〔大型方形周溝状遺構〕	229

## 第 III 章 遺物

第 1 節 遺構外出土の縄文土器・弥生土器	244
第 2 節 遺構外遺物について	259
第 3 節 石器・石製品	263
第 4 節 土錘	270
第 5 節 紡錘車	274
第 6 節 77号墳第 1 埋葬施設出土の小玉	277

第7節	銅製品・鉄製釣針	280
第8節	長瀬高浜遺跡より出土した人骨と動物遺体について	285
第IV章	考察	
第1節	建物跡	313
第2節	長瀬高浜遺跡における古墳群に関する一考察	322
	関係者名簿	339

## 挿 図 目 次

挿図	P		
1	5	長瀬高浜遺跡と周辺の遺跡…	30 S I 148遺物図その2 …… 30
2	6	長瀬高浜遺跡調査位置図…	31 S I 149 // その1 …… 30
3	7	S I 141遺物図 ……	32 // 遺構図 …… 31
4	8	// 遺構図・P 1 内土器出土状況図…	33 // 遺物図その2 …… 31
5	9	S I 142遺物図 ……	34 // // その3 …… 32
6	10	// 遺構図その1 ……	35 S I 150遺構図 …… 32
7	11	// // その2 ……	36 // 遺物図 …… 33
8	11	S I 143遺物図 ……	37 S I 151 // その1 …… 33
9	12	// 遺構図 ……	38 // 遺構図 …… 34
10	13	S I 144・145遺物図その1 …	39 // 遺物図その2 …… 34
11	14	// 遺構図その1 …	40 S I 152遺構図 …… 35
12	15	// // その2 …	41 S I 152 P 4 内 土器出土状況図…
13	15	// 遺物図 // …	42 // 遺物図その1 …… 36
14	16	// // その3 …	43 // // その2 …… 37
15	17	// // その4 …	44 S I 153遺物図その1 …… 37
16	17	S I 146遺物図 ……	45 // 遺構図 …… 38
17	18	// 遺構図 ……	46 // 遺物図その2 …… 39
18	20	S I 147 // その1 ……	47 // 遺物図その3 …… 40
19	21	// // その2 ……	48 // // その4 …… 41
20	21	// 遺物図その1 ……	49 10C・SK01遺物図…
21	22	// // その2 ……	50 S I 154遺構図 …… 42
22	23	// // その3 ……	51 // 鉄器・P 30土器図 …
23	24	// // その4 ……	52 // P 30内 土器出土状況図…
24	25	// // その5 ……	53 // 遺物図その1 …… 43
25	26	// // その6 ……	54 // // その2 …… 44
26	27	// // その7 ……	55 // // その3 …… 45
27	27	// // その8 ……	56 // // その4 …… 46
28	28	S I 148遺構図 ……	57 // // その5 …… 47
29	29	// 遺物図その1 ……	



58	S I 155遺物図その1	47	91	S I 156碧玉分布図	72
59	〃 遺構図	48	92	〃 瑪瑙・水晶分布図	73
60	〃 遺物図その2	49	93	〃 ・P 7 遺物分布図	73
61	〃 〃 その3	50	94	〃 サヌカイト・	
62	〃 〃 その4	50		黒曜石分布図	74
63	S I 157遺構・遺物図	50	95	〃 遺物図その1	75
64	S I 159遺構図	51	96	〃 〃 その2	76
65	〃 遺物図その1	52	97	〃 〃 その3	76
66	〃 〃 その2	53	98	〃 〃 その4	77
67	S I 160遺構・遺物図	54	99	〃 〃 その5	78
68	S I 161遺物図その1	55	100	〃 〃 その6	79
69	〃 遺構図その1	56	101	〃 〃 その7	79
70	〃 遺構図その2	57	102	〃 〃 その8	80
71	〃 遺物図その2	57	103	〃 〃 その9	80
72	S I 162遺構図	58	104	〃 〃 その10	81
73	〃 遺物図その1	59	105	S I 158遺構図	82
74	〃 〃 その2	60	106	〃 遺物図その1	82
75	S I 163遺構図	60	107	〃 遺物分布図その1	83
76	〃 遺物図その1	61	108	〃 遺物図その2	83
77	〃 〃 その2	62	109	〃 遺物分布図その2	84
78	〃 〃 その3	62	110	〃 遺物図その3	84
79	〃 〃 その4	63	111	〃 遺物分布図その3	85
80	S I 164 〃 その1	63	112	〃 遺物図その4	85
81	〃 遺構・遺物図その2	64	113	〃 遺物分布図その4	86
82	S I 165遺構図	65	114	〃 遺物図その5	86
83	〃 遺物図	66	115	〃 〃 その6	87
84	S I 166・9 B・SK02遺構図	67	116	S I 169遺構図・	
85	〃 遺物図	67		遺物分布図その1	88
86	S I 167遺構・遺物図	68	117	S I 169遺物分布図その2	89
87	S I 168遺構図	69	118	〃 〃 その3	90
88	〃 遺物図	69	119	〃 P 3・P 4 遺物分布図	91
89	S I 156遺構図	70	120	遺物図その1	91
90	〃 碧玉未製品分布図	71	121	〃 〃 その2	92

122	S I 169	遺物図その3	92
123	〃	〃 その4	93
124	S B31	遺構図	93
125	S B32	〃	94
126	S B33・34	遺構図	95
127	S B33	遺構図	95
128	S B34	〃	96
129	S B35	〃	97
130	S B36	〃	99
131	S B37	〃	101
132	〃	遺物図その1	101
133	〃	〃 その2	102
134	S B41	遺構図	103
135	〃	遺物図	104
136	S B42	遺構図	105
137	S B43	〃	105
138	6号墳	遺物図	107
139	〃	遺構図	107
140	7号墳	遺物図その1	108
141	〃	遺構図	109
142	〃	遺物図その2	109
143	〃	第1埋葬施設遺構図	109
144	〃	第2埋葬施設遺物図	111
145	〃	〃 遺構図	111
146	〃	第3埋葬施設 〃	112
147	〃	S K01遺構図	112
148	〃	〃 遺物図	113
149	〃	S K02 〃	113
150	〃	〃 遺構図	114
151	〃	S D04遺物図	115
152	〃	〃 遺構図	115
153	〃	馬墓1 〃	116
154	〃	馬墓3 〃	116
155	7号墳	馬墓2遺構図	116
156	8号墳	遺構図	117
157	〃	遺物図その1	118
158	〃	〃 その2	119
159	〃	第1埋葬施設遺構図	119
160	〃	〃 遺物拡大図	119
161	〃	〃 遺物図	119
162	〃	第2埋葬施設遺構図	122
163	10E・S K10	遺物図	122
164	8号墳	第3埋葬施設遺構図	123
165	10E・S K10	遺構図	124
166	8号墳	々丘下の溝状遺構図	124
167	10E・S K19	遺構図	125
168	〃	遺物図	125
169	9号墳	遺構図	126
170	24号墳	遺物図その1	127
171	〃	〃 その2	128
172	〃	遺構図	129
173	〃	遺物図その3	129
174	〃	第1埋葬施設遺構図	129
175	〃	〃 遺物図	131
176	〃	第2埋葬施設遺構図	132
177	〃	〃 遺物図	132
178	〃	第3埋葬施設 遺物図その1	133
179	〃	〃 その2	134
180	〃	第4埋葬施設 遺物図その1	134
181	〃	第5埋葬施設遺物図	134
182	〃	第3埋葬施設遺構図	135
183	〃	第4埋葬施設遺構図	136
184	〃	第5埋葬施設遺構図	136

185	24号墳第4埋葬施設 遺物図その2	137
186	〃 第6埋葬施設遺物図	137
187	〃 〃 遺構図	138
188	〃 周溝内遺物拡大図	138
189	〃 遺物図その1	138
190	〃 遺構図	139
191	〃 遺物図その2	139
192	81号墳遺構図	140
193	〃 遺物図	140
194	〃 第1埋葬施設遺構図	141
195	〃 第2埋葬施設遺構図	142
196	85号墳遺物図その1	142
197	81号墳第3埋葬施設遺構図	143
198	85号墳遺物図その2	143
199	〃 遺構図	144
200	〃 第1埋葬施設遺構図	145
201	〃 〃 遺物図	145
202	86号墳遺構図	146
203	〃 遺物図	147
204	〃 第1埋葬施設遺構図	147
205	〃 〃 遺物図	147
206	〃 第2埋葬施設遺構図	148
207	〃 第3埋葬施設 遺物図その1	148
208	〃 第2埋葬施設遺物図	149
209	〃 第3埋葬施設 遺物図その2	149
210	〃 第3埋葬施設遺構図	150
211	87号墳遺構図	151
212	〃 遺物図	151
213	〃 第1埋葬施設遺構図	152
214	88号墳遺物図	152

215	88号墳遺構図	153
216	〃 第1埋葬施設遺物図	153
217	〃 〃 遺構図	154
218	〃 第2埋葬施設遺物図	155
219	〃 〃 遺構図	155
220	89号墳遺構図	156
221	〃 遺物図	156
222	〃 第1埋葬施設遺構図	157
223	〃 〃 遺物図	157
224	〃 第2埋葬施設遺構図	157
225	〃 第3埋葬施設遺構図	158
226	〃 〃 遺物図	158
227	S X 79遺構図	159
228	S X 80 〃	160
229	S X 83遺物図	161
230	S X 82遺構図	163
231	S X 83 〃	164
232	S X 84 〃	165
233	〃 遺物図	165
234	S X 90 〃	165
235	〃 遺構図	166
236	中世墓・五輪塔石分布図	167
237	S F 73遺構図	168
238	S F 74遺物図その1	168
239	〃 遺構図	169
240	〃 遺物図その2	169
241	S F 75遺構図	170
242	S F 76遺構図・遺物図	170
243	S F 77遺構図	171
244	S F 78遺構図	171
245	S X 17 〃	172
246	S X 18 〃	173
247	S X 19 〃	174

248	S X '20遺構図	174	278	貝殻出土遺構・遺物図	195
249	S X '21 〃	175	279	10E S K07遺構図	196
250	S X '22 〃	175	280	11C S K11遺構・遺物図	197
251	S X '23 〃	175	281	10D S K05・20・21遺構図	198
252	S X '24 〃	176	282	土師器を含むピット群出土 遺物図	198
253	S X '25 〃	176	283	〃 遺構図	199
254	S X '26 〃	177	284	10A 土器群遺物図	201
255	S X '27 〃	177	285	〃 出土状況図	202
256	S X '28 〃	179	286	10G S A01~07遺構図	203
257	〃 木棺図	180	287	10B S D03・05・06遺物図	205
258	〃 遺物図その1	181	288	11B S K01須恵器群及び S K02遺構図, 遺物図その1	206
259	〃 〃 その2	182	289	11B S K01内須恵器出土状況 拡大図	206
260	〃 木棺推定復原図	182	290	〃 須恵器群出土状況 図拡大図	207
261	S X '29遺構図	184	291	11B S K01遺物図その2	209
262	S X '30 〃	184	292	〃 〃 その3	210
263	S X '31 〃	185	293	〃 〃 その4	211
264	S X '32 〃	185	294	〃 〃 その5	212
265	S X '33 〃	185	295	11B S D02遺物図	213
266	昭和58年度調査地区出土の 五輪塔石実測図	188	296	〃 遺構図	214
267	黒曜石出土遺構, 遺構・ 遺物図	189	297	10B S K03遺構図	215
268	10D S K03遺構図	190	298	〃 遺物図	215
269	9E S K05 〃	190	299	土塁下層遺物図その1	216
270	〃 遺物図	191	300	〃 その2	217
271	9C S K01遺構図・遺物図	191	301	〃 その3	218
272	10C S K02・03遺構・遺物図 その1	192	302	南側遺構群, 遺構図	219
273	〃 遺物図その2	193	303	11A粘土層及びその周辺の遺 物図	221
274	9E S K02遺物図	193	304	土塁状遺構検出状況図	223
275	〃 遺構図	194	305	〃 遺構図	225
276	10G S K20遺物図	194			
277	10G S K20遺構図	195			

306	土塁状遺構遺物図その1	227	337	〃	その2	262		
307	〃	〃	その2	228	338	土塁下層土師器	262	
308	LSD遺物図その1	231	339	石斧実測図その1	264			
309	〃	〃	その2	232	340	〃	その2	265
310	〃	〃	その3	233	341	〃	その3	266
311	〃	〃	その4	234	342	敲石実測図	266	
312	〃	〃	その5	235	343	石皿・砥石実測図	267	
313	〃	〃	その6	236	344	石鏃実測図	268	
314	〃	〃	その7	237	345	施溝軽石・その他の石製品 実測図	269	
315	〃	〃	その8	238	346	土錘実測図その1	272	
316	〃	〃	その9	239	347	〃	その2	273
317	〃	小型丸底壺・高坏群 遺構図・遺物図	240	348	紡錘車実測図その1	275		
318	〃	遺構図	241	349	〃	〃	その2	276
319	10FSK03遺構図・遺物図	243	350	銅鏃実測図	282			
320	縄文土器拓影	244	351	小型銅鏡実測図	283			
321	刻目突帯文土器拓影その1	245	352	その他の銅製品実測図	284			
322	〃	その2	247	353	鉄製釣針実測図	285		
323	〃	その3	249	354	長瀬高浜古墳群分布概念図 及び埋葬遺体頭位方向図	323		
324	〃	その4		355	埋葬遺体頭方位図	330		
	弥生土器拓影	250	356	埋葬施設内法図	331			
325	弥生土器実測図その1	251						
326	〃	拓影その1	252					
327	〃	〃	その2	253				
328	〃	〃	その3	254				
329	〃	〃	その4	255				
330	〃	実測図その2	256					
331	〃	拓影その5	257					
332	〃	実測図その3	258					
333	〃	〃	その4	258				
334	〃	拓影その6	258					
335	その他の遺物実測図	258						
336	遺構外遺物図その1	260						

## 表 目 次

表 1	S B41柱穴計測表……………	104
表 2	57年度調査地区竪穴住居跡表	106
表 3	〃 掘立柱建物跡表…	106
表 4	中世墓一覧表(その1) 土葬墓……………	188
表 5	〃 〃 (その2) 火葬墓……………	188
表 6	副葬品を出土した中世墓一覧 表……………	188
表 7	土錘一覧表……………	271
表 8	紡錘車一覧表……………	274
表 9	77号墳第1埋葬施設出土の 小玉計測表その1……………	277
表10	〃 〃 その2……………	278
表11	〃 〃 その3……………	279
表12	銅鏃一覧表……………	281
表13	鉄製釣針一覧表……………	284
表14	主要頭蓋計測値……………	305
表15	竪穴住居一覧表その1……………	316
表16	〃 〃 その2……………	318
表17	〃 〃 その3……………	318
表18	〃 〃 その4……………	319
表19	〃 〃 その5……………	320
表20	埋葬施設頭方位図……………	330
表21	古墳群編年表……………	330
表22	土器枕をもつ埋葬施設……………	331
表23	石枕をもつ埋葬施設……………	331
表24	長瀬高浜遺跡古墳群一覧表…	333



## 第1章 長瀬高浜遺跡の調査経過

### 第1節 発掘調査までの経過

- 昭和47年 天神川流域下水道整備総合計画策定。
- 48年 天神川流域下水道整備総合計画申請。
- 49年 都市計画地方審議会諮問。
- 49年 計画決定告示。
- 49年 事業認可。
- 49年5月 長瀬高浜遺跡（長瀬遺跡）の発見。
- 49年7月 天神川流域下水道関係部課長会議。
- 50年 用地買収。
- 52年6月 県土木下水道課と県教委文化課埋蔵文化財についての協議。
- 52年7月 県教委，下水道課長へ開発事業計画と文化財保護について通知。
- 52年8月 県知事埋蔵文化財発掘について通知（法第57条の3）。
- 52年8月 教育文化財団理事長，埋蔵文化財発掘調査届提出（法第57条）。
- 53年5月 教育文化財団理事長，埋蔵文化財発掘調査届提出（法第57条）。
- 53年8月 日本下水道事業団へ工事発注。

### 第2節 遺跡の発見

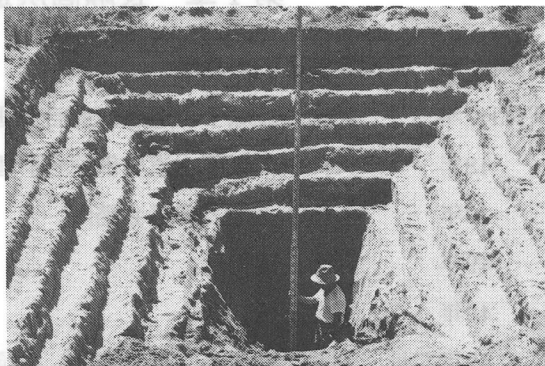
昭和49年5月7日，県教育委員会文化課は一般国道9号線改築工事（北条バイパス）建設計画に伴う，現地踏査を実施した。その結果，北条砂丘の東端部・鳥取県東伯郡羽合町長瀬字高浜・浜根荒神など，通称「高浜」一帯の砂丘畑地で，弥生土器，土師器等が散布しているのがわかった。また，北条バイパス建設予定地の南に接して天神川流域下水道処理場建設計画のあることを知り，その一帯を踏査したところ濃密に土器が散布しており，遺物散布地は南へ広がることが確認された。

### 第3節 試掘調査（昭和52年次）

遺跡発見以降，再三にわたり県教育委員会文化課と県土木下水道課の協議が始まった。その結果，昭和52年8月から遺跡の性格の追及とその範囲を把握し，工事との調整を図るため，遺跡散布地を試掘することにより砂丘遺跡の確認調査を実施することになった。

調査は，財団法人鳥取県教育文化財団（理事長知事）が行ない，経費は県土木部の委託費によった。調査対象地は，施設用地10haのうち第1期工事予定地で工事により埋蔵文化財に直接影響を及ぼすと考えられる約5haとした。調査方法は，グリッド方法により，5

m×5m, 5m×10m, 10m×10mとし計32か所約3,000m<sup>2</sup>の試掘を行った。その結果、この砂丘遺跡でも遺物包含層は砂丘活動の停滞期によって形成された黒砂層（黒褐色腐植砂層）と密接な関連があることをつきとめた。黒砂層は、浅いところは数mのところであり、少量の黒砂面でも必ず土器片を含んでいた。砂丘地であるため、試掘表面は100m<sup>2</sup>でも7mも掘り下げれば底面積は1m<sup>2</sup>程度となってしまった。試掘には、検土杖・ハンドオーガ・ボーリングも使用した。地下深く掘り下げた場合には重機（ユンボ）の併用も行った。



試掘（約3,000m<sup>2</sup>）及び一部拡幅調査（約1,500m<sup>2</sup>）の調査を行った。その結果、砂丘下に円墳1基、箱式石棺6基、中世火葬墓25基を検出した。また、出土遺物は、多量の弥生土器・土師器で、壺・甕・高坏が主であったが、石斧・石鎌・砥石・土錘・紡錘車などの生活用具も含まれ、遺跡との関連を暗示した。

（昭和52年度試掘調査費委託料 11,830,000円）

#### 第4節 昭和53年度調査

試掘調査結果に基づき関係部局と協議の結果、下水処理場建設計画、施設配置計画の変更は不可能という結論のため、調査員を増強して全面発掘調査を教育文化財団が実施することとなった。そして、調査は次の4点を主に行うこととした。

(1) 黒砂分布範囲を明確にし、上層の灰白色砂を除去すること

調査の一環として事業課に50,000m<sup>3</sup>の砂除去を依頼し、そのあと起伏する黒砂面を露出するため、灰白色砂の排除を始めた。その結果18,000m<sup>2</sup>の黒砂面をよく観察すると、わずかな起伏に気づきこれも古墳と考えるに至り、11基の追加となった。黒砂面は、今後増々拡大していくものと推定される。



(2) 1号墳とその周辺の発掘調査

砂丘に埋り、姿を見ることができなかつた1号墳が、径33m・高さ3mの円墳と

して確認された。まず、1号墳墳丘の全貌を出す上層部調査過程で中世火葬墓群48基、周溝部とその周辺調査で箱式石棺等14基、主体部の箱式石棺より「つづらさわまき」によく似た鉄刀を副葬した25歳～40歳頃の女性人骨が発見された。墳丘築成状況調査では竪穴住居状遺構の調査へと発展したため、調査地区の拡大も余儀なくされた。



### (3) 東部黒砂地区の発掘調査

東部黒砂面において、竪穴住居状遺構2棟、火葬墓4基、黒砂と灰白色砂の境界付近で合口土器棺墓1基、灰白色砂中で中世墓1基を検出した。しかし、年度内に黒砂下層まで調査を進めることができず課題を残した。

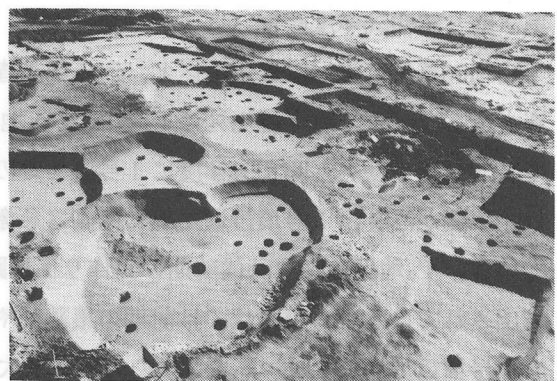
### (4) 中央管理棟建設工事中の発見に伴う発掘調査

昭和53年10月25日、中央管理棟建設工事掘削作業中、南の13A標高3m付近で黒砂が露出していることを発見、直ちに工事を中断し緊急調査に入った。五輪塔群の出土により黒砂が傾斜して歴史時代まで続き、それ以降10数mの砂が被覆した等の知見も得られた。

(昭和53年度発掘調査費委託料 41,000,000円)

## 第5節 昭和54年度調査

昭和54年度は工事の第1系列の南北約200m、東西50mの区画内1万m<sup>2</sup>の黒砂面について全面発掘調査が行われた。厚さ60～100cmの黒砂層の下に多数の住居跡と3・4・10号墳をはじめとする古墳・墳墓が確認された。この地区の南端区域では水田面と考えられるグライ土壌が検出された。時代的にみると弥生時代前期から中世末などの遺構をもつ複合遺跡である。



総計すると弥生時代前期の竪穴住居跡1棟、土壙3基、古墳時代の竪穴住居跡74棟、掘立柱建物跡10棟、井戸跡4基、古墳時代の墳墓14基、飛鳥時代の墳墓9基、中世墓33基である。

遺物としては竪穴住居跡内からは多量の土師器に加えて、釣針、鉄鎌などが出土してい

る。その他剣先形鉄製品、鉄鏃、素文鏡、石製模造鏡、玉製品（勾玉、管玉、切子玉、小玉など）、古銭、土馬、陶磁器等が出土している。

これらの遺構、遺物から古代の村落の一端をうかがい知ることができた。

(昭和54年度発掘調査委託料 61,270,000円)

## 第6節 昭和55年度調査

55年度の発掘調査は、54年度調査区の西側及び北側の一部約8,500m<sup>2</sup>について調査を行った。この地域には54年度調査区の北側に集中していた古墳時代の住居跡群が続いており、西側の端を確認するに至った。西側の高い部分は風雨蝕で削られながらも前方後方墳の $\frac{1}{3}$ を留めていた。また、この下には弥生時代前期の墳墓が集中して検出された。北側では住居



跡群に加えて、埴輪祭祀跡が井戸跡上面から検出された。全発掘調査で検出した主な遺構は、**竪穴住居跡35棟**、**掘立柱建物跡11棟**、**井戸跡1基**、**墳墓24基**、**弥生時代の墳墓49基**、**中世墓2基**、**埴輪祭祀跡**などである。

(昭和55年度発掘調査費委託料 89,700,000円)

## 第7節 昭和56年度調査

昭和56年度は1号墳周辺地区と、54年度調査地区の東側（g地区）の一部約6400m<sup>2</sup>の調査を行った。1号墳周辺地区はf<sub>1</sub>地区とf<sub>2</sub>地区の2ヶ所を調査した。f<sub>1</sub>地区は昭和52年度に1号墳上層を、昭和53年度に1号墳とその下層及び周辺の石棺を調査した。この地区は北東側が高く、1号墳付近を境に南側は急激に落ち込み、その南側は青色シルトが続いている。f<sub>1</sub>地区は弥生時代前期の玉作り工房跡を始め、弥生時代前期の遺構・遺物が多く検出されている。古墳時代では前期の集落址や中期から後期の墳墓が多くみられた。中でも1号墳は周溝総径33m高さ3mの当地区最大の円墳で、中央部にある大型の箱式石棺にはほとんど完全な女性の遺骨、「つづらさわまき」によく似た鉄刀など貴重な発見が相つぎ、周溝内外には15基もの付属する墓が作られていることがわかった。この地区は中世になっても墓地として盛んに利用されており、火葬墓が51基も検出された。また南側の青色シルトは水田として利用された可能性があることがわかった。f<sub>2</sub>地区は前述の青色シルトが続いており、漆器などが出土している。g地区は54年度調査地区の続きで、主に古墳時代前

期の集落跡と中期から後期の墳墓が主な遺構である。

56年度調査地区の主な遺構は竪穴住居跡35棟，掘立柱建物跡10棟，古墳・墳墓19基，井戸跡2基などである。

(昭和56年度発掘調査費委託料 76,300,000円)

### 第8節 昭和57年度調査

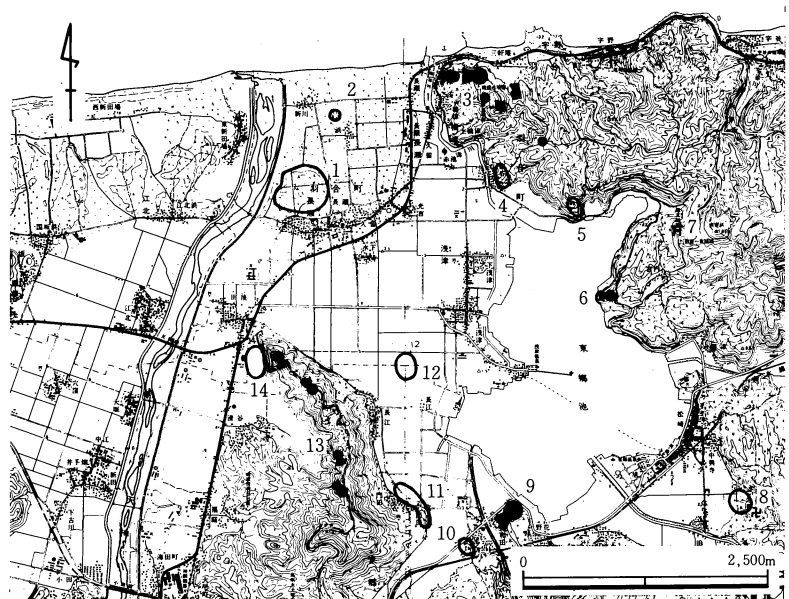
昭和57年度の発掘調査は昭和54年度調査地区の東側，56年度調査地区の南側（8地区の南部）の約4,450m<sup>2</sup>の調査を行った。調査地区の黒砂の地形は北から続く平坦な面が，D～Cラインにある北東—南西方向に伸びる小さな尾根まで続く。この尾根は西に高く，東に低くなり，調査区内でほとんど平坦になる。尾根の南側は狭い平坦な黒砂面があり，その南に54年度調査の南側でみられたような粘土面が急激に落ち込む。57年度調査区には弥生時代前期の玉作り工房跡が3棟新たに確認された。古墳時代の竪穴住居跡も北・西側に続いて検出された。また古墳では周溝内に馬墓を持つもの（7号墳），土器棺をもつものなどが検出された。奈良時代の遺構は今まで墓だけであったが，今年度の調査で帯金具，多数の墨書土器を伴う建物跡が検出された。奈良時代以降中世末までの遺構としては土塁状遺構，溝状遺構他，火葬墓，土葬墓などが検出された。

57年度調査区の主な遺構は竪穴住居跡29棟，掘立柱建物跡10棟，古墳・墳墓18基，方形周溝状遺構，土塁状遺構などである。

(昭和57年度発掘調査費委託料 68,800,000円)

#### 遺跡地名

1. 長瀬高浜遺跡
2. 和助北遺跡
3. 馬ノ山古墳群
4. 南谷遺跡
5. 乳母ヶ谷遺跡
6. 宮内狐塚古墳
7. 倭文神社  
(伯耆一の宮経塚遺跡)
8. 久見廃寺
9. 北山一号墳
10. 長和田・津浪遺跡
11. 門田遺跡
12. 隅ヶ坪遺跡
13. 大平山古墳群
14. 溝口遺跡



挿図1 長瀬高浜遺跡と周辺の遺跡





挿図2 長瀬高浜遺跡調査位置図



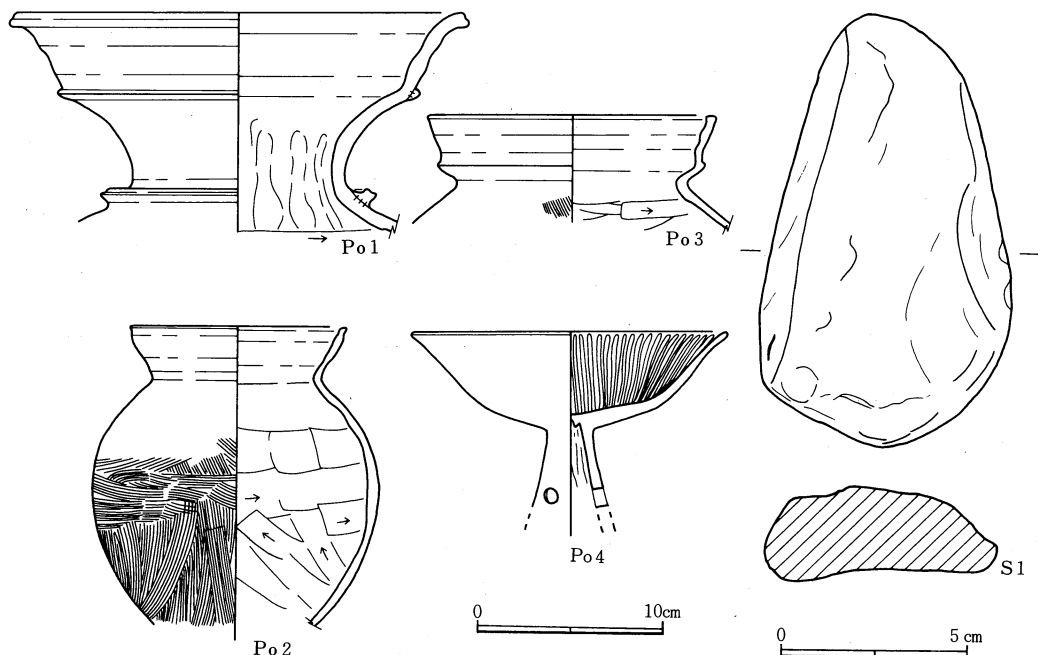
## 第II章 発掘調査の結果

### 第1節 竪穴住居跡 (S I)

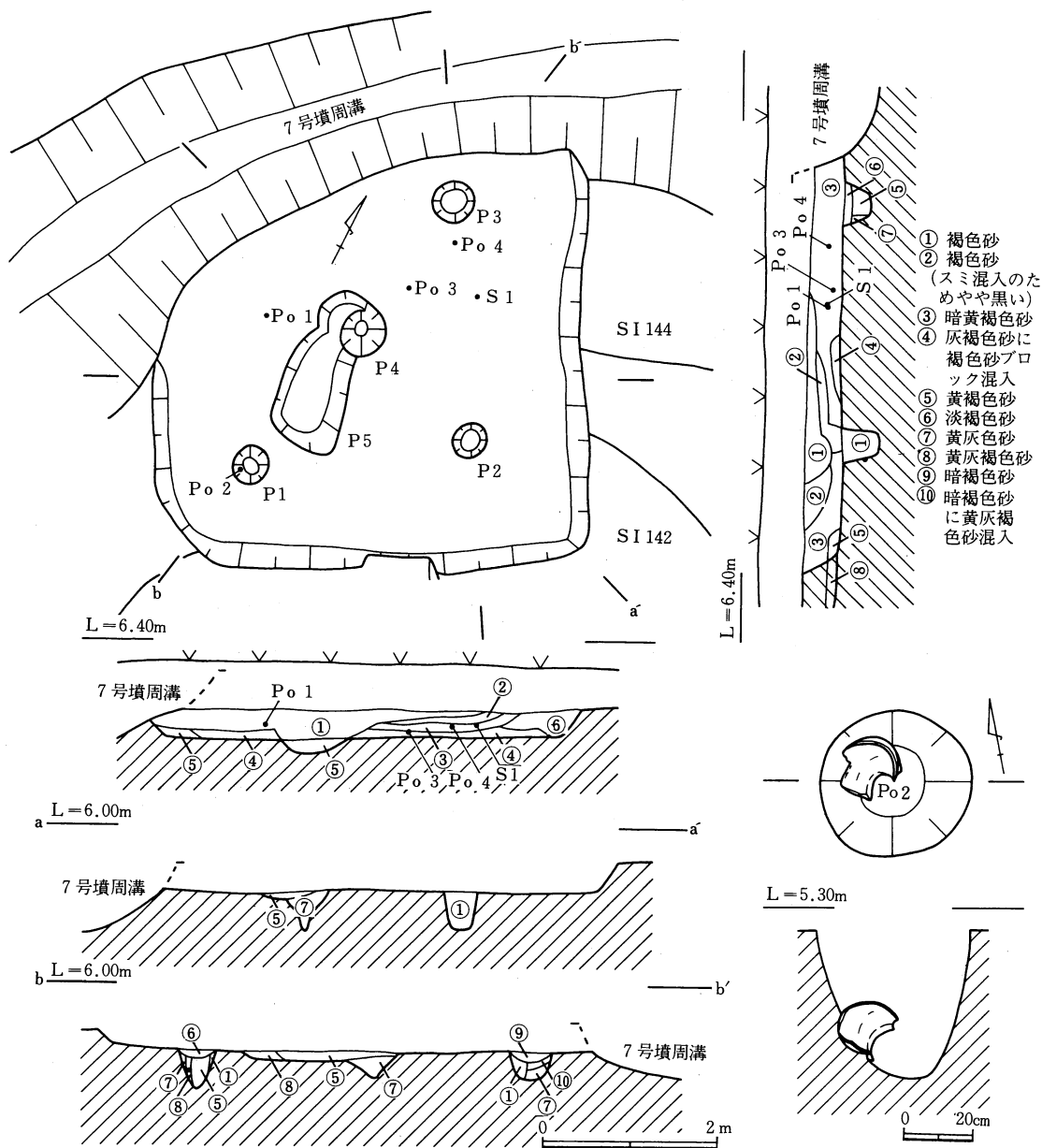
57年度調査地区では、29棟の竪穴住居跡を検出した。方形プランが23棟、五角形プラン1棟、円形プラン2棟、多角形プラン1棟、不明2棟である。また時期的に分ければ弥生時代前期のもの3棟、古墳時代のもの26棟である。

#### S I 141 (挿図3・4, 図版1)

10F地区の北西側にあり、一部10G地区にまたがる。北側は7号墳の周溝によって切られる。住居跡は近くに4棟あるが、その内3棟について切り合いが認められる。S I 141はそれらS I 142, 144, 145より新しい。平面形はコーナーの鋭い方形である。主軸はN-62°-Wである。床面の大きさは、東西4.52, 南北4.48 (現在長) mで、床面積は20.2m<sup>2</sup>以上である。壁高は南側で最大値35.2cm, 西側で最小値15.2cmを測る。側溝, 焼砂等は検出されなかった。ピットは床面で5個検出したが、この内柱穴と考えられるのはP 1~3である。北西側柱穴は7号墳周溝に壊された4本柱の住居跡であろう。柱穴のプランはP 1 (43×41-38), P 2 (43×38-44), P 3 (48×47-32) cmで、柱穴間距離はP 1より2.56, 2.68mである。P 4は場所的にみて特殊ピットの可能性がある。遺物はあまり出土していないがP 1内より「く」の字状口縁の甕 (P o 2) が倒立の状態で見出された。時期は出土遺物, あるいは周辺遺構との切り合い関係から長瀬II期の新と考えられる。



挿図3 S I 141 遺物図 (土器S = 1/4, 石器S = 1/2)



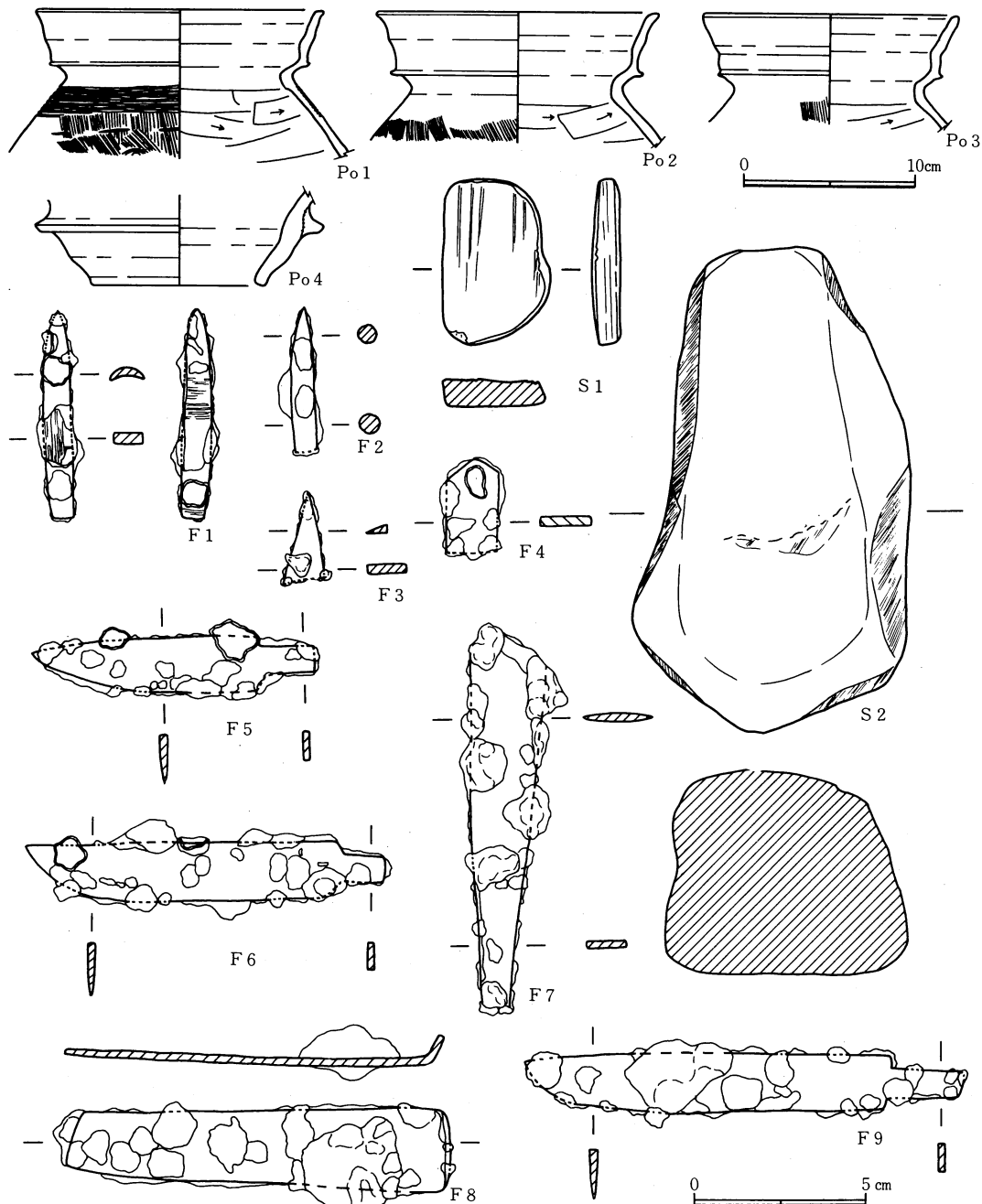
挿図4 SI 141 遺構図 (S = 1/80)

P 1 内 土器出土状況図 (S = 1/20)

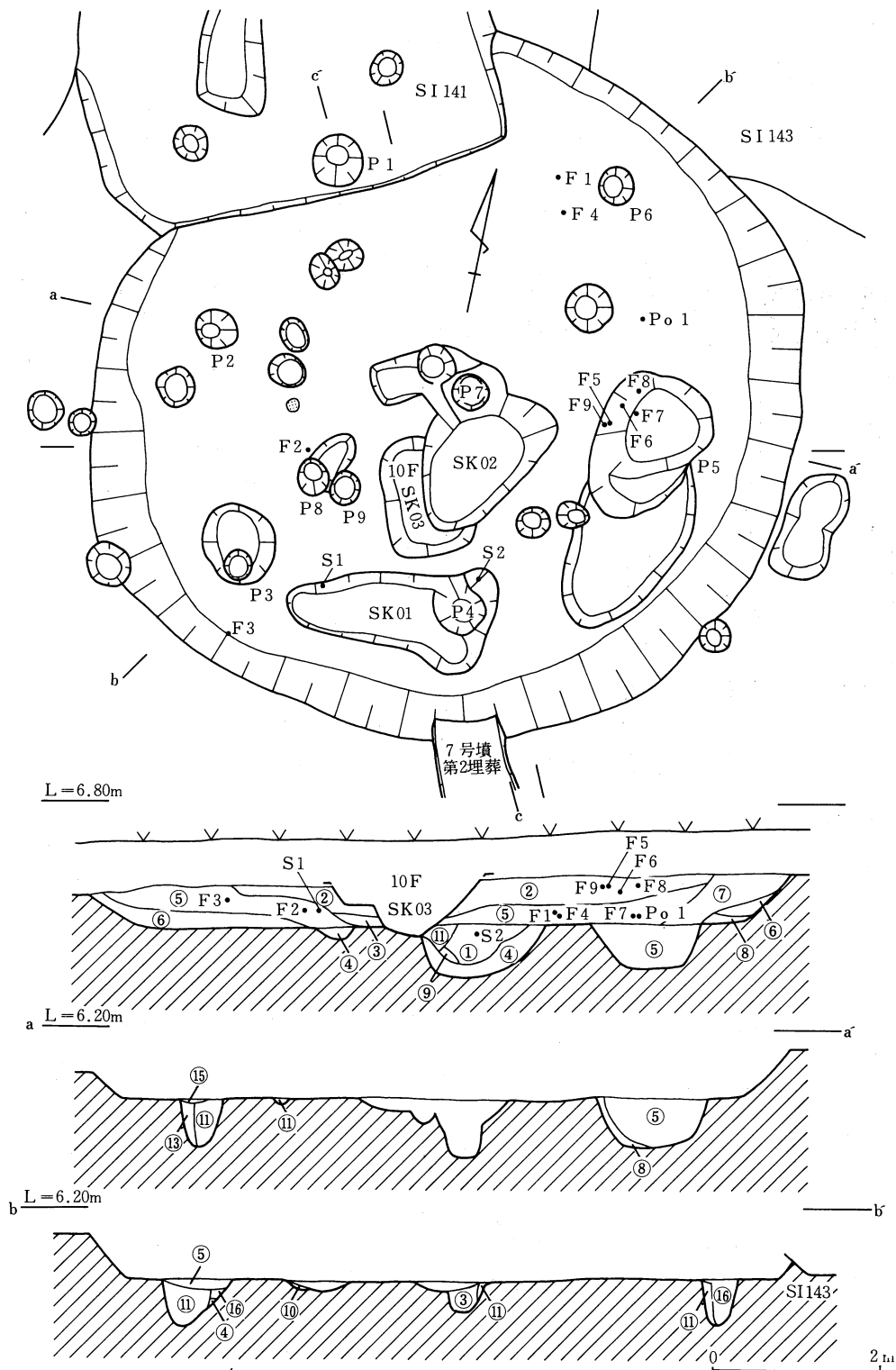
SI 142 (挿図5~7, 図版1・11)

10F地区の北西区に位置し、SI 141, 143と切り合っている。中央付近を7号墳第2埋葬施設が北西方向に切っている。新旧関係はSI 142よりSI 141, 143, 7号墳第2埋葬施設の方が新しい。平面形は円形に近く、床面の大きさは直径7.5mを測る。床面積は44.2m<sup>2</sup>になる。壁高は南側で最大値が60cm, 西側で最小値31cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で18個検出したが、柱穴と思われるものはP1~P6の6個である。プランはP

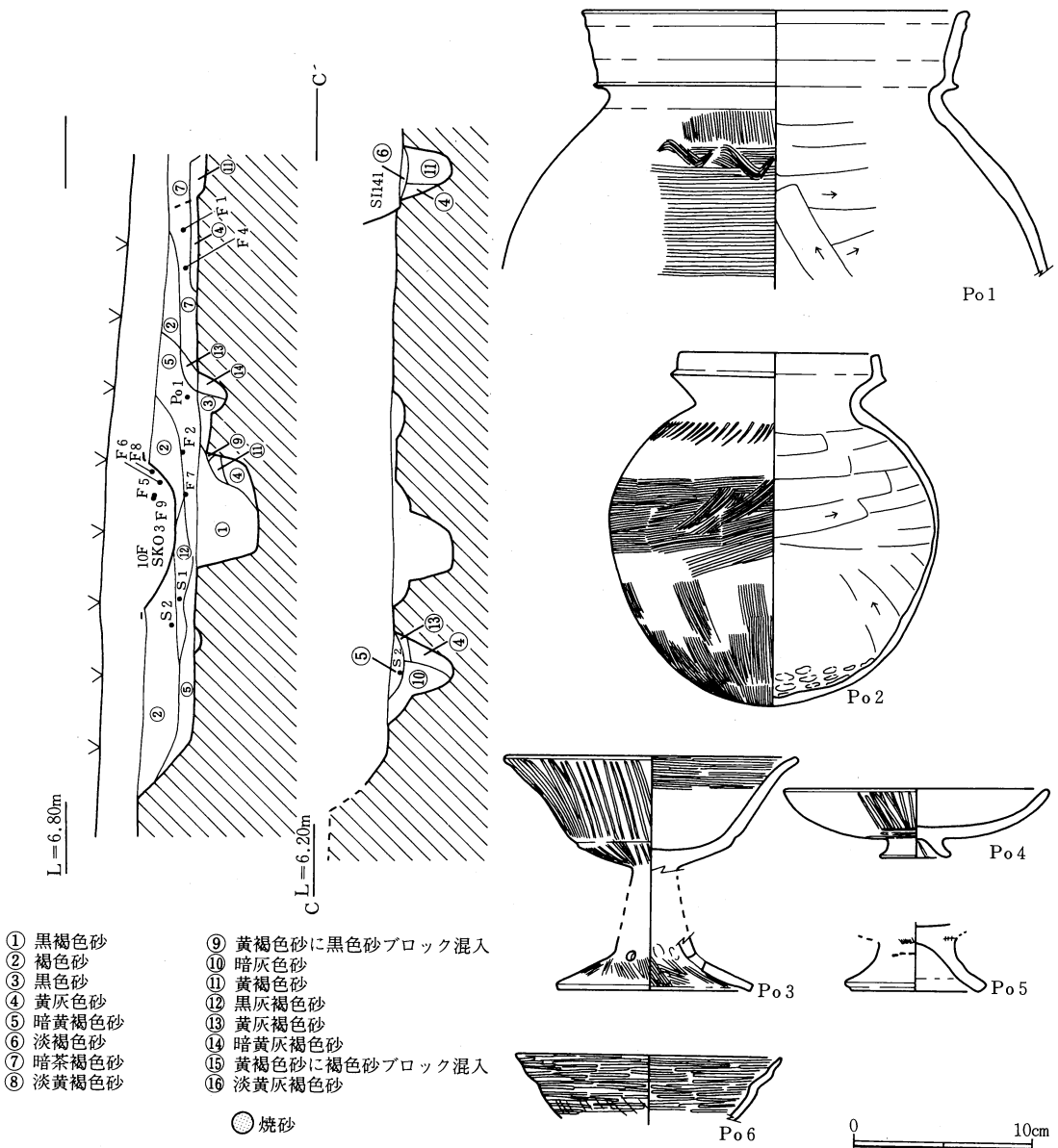
1から順に(60×60-56), (51×46-56), (37×34-56), (60×56-68), (180×132-68), (44×42-54) cmを測る。柱穴間距離はP 1~P 2から順に2.48, 2.88, 2.72, 3.28, 2.80, 3.20mを測る。P 7 (42×41-68) cmは特殊ピットと考えられる。P 4内から焼痕のある石(S 2) P 8, 9付近で焼砂を検出した。土器の出土は少なく、遺物は刀子、鉄鏃等の鉄器が中心である。時期は長瀬II期と思われる。



挿図5 S1 142遺物図 (土器S=1/4, 鉄器・石器S=1/2)



挿図6 SI142 遺構図その1 (S=1/80)

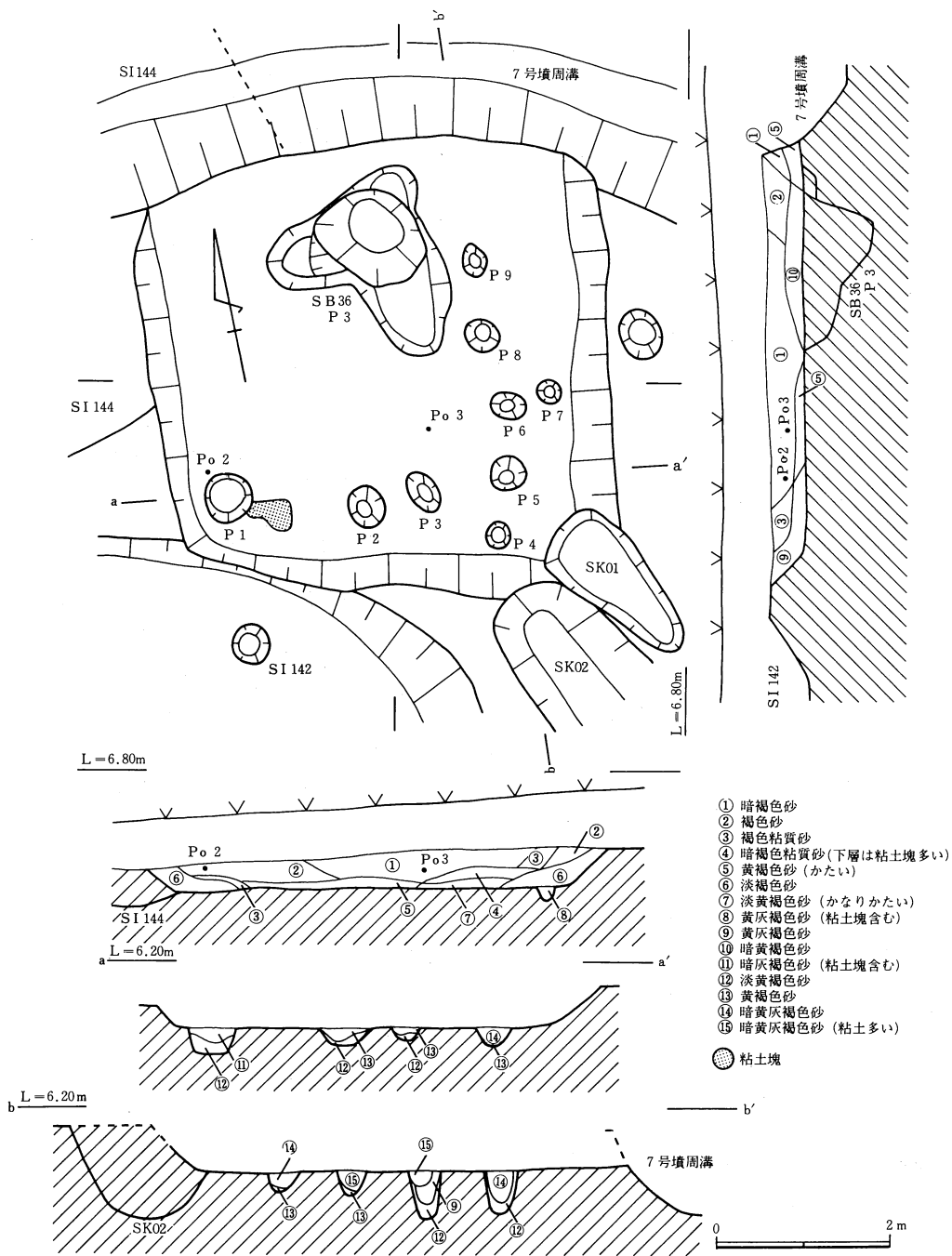


挿図7 S I 142 遺構図その2 (S=1/80)

挿図8 S I 143 遺物図 (S=1/4)

S I 143 (挿図8, 9, 図版1・11)

10F, 10G地区にまたがり、北側は7号墳周溝によって壊されている。周辺には住居跡が4棟あるが、S I 143はその東側に位置する。切り合いは南西にあるS I 142、北西側のS I 144にみられるが、そのいずれもより新しいと思われる。またS I 143の床面、壁際にS B36の柱穴と思われるピットがあるが、遺物から判断してS I 143の方が古いと思われる。S I 143の主軸はN-80°-Wである。プランは方形で、床面は東西4.48m、南北4.64(残存長)mを測る。床面積は20.8m<sup>2</sup>以上である。壁高は東側で最大値48cm、西側で最小値38cm



挿図9 S I 143 遺構図 (S = 1/80)

を測る。ピットは床面で9個検出したが、柱穴は不明である。S I 143では南側、東側で粘土塊が出土している。またP 1・4・6・7・8からも粘土粒が出土している。ここで興味を引くのがS I 143の南東コーナーに位置するSK 01である。この土坑からは多量の粘土粒に混り、多くの土製品が出土しているが、これとS I 143の間に何らかの関係があったの



ではなかろうか。S I 143からはあまり遺物が出土していない。時期は長瀬II期であろう。

#### S I 144・145 (挿図10~15, 図版1・11)

10G及び10F地区にまたがり、7号墳の北に位置する。周辺には多くの竪穴住居跡があり、切り合い関係も、S I 141・143の間に認められる。また中央を7号墳の周溝が走っている。新旧関係はS I 144・145が古い。

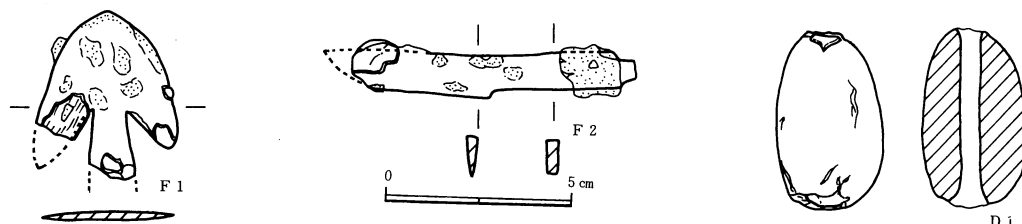
S I 144の平面形は、五角形と思われる。床面の大きさは北西—南東軸6.72m、南西—北東軸6.80mで床面積は45.7m<sup>2</sup>である。壁高は北側で最大値56cm、西側で最小値40cmを測る。ピットは床面で16個検出したが、柱穴と思われるものはP 1~P 8の8個で、その内S I 144の柱穴はP 1~P 5の5個である。P 5~P 8(位置的にはP 6よりS I 141のP 3の方が適する)はS I 145の柱穴と思われる。プランはP 1より(44×40-34), (48×48-49), (48×43-60), (54×48-68), (52×48-68), (48×47-60), (50×48-64), (72×44-68) cmを測る。柱穴間距離はP 1~P 2から3.0, 3.4, 3.1, 2.3, 2.5mである。

S I 145はS I 144の床面内に完全に入る。おそらく、南側ではS I 144と肩を共有すると思われる。その状況から推定して、S I 145を拡張してS I 144がつくられたであろう。

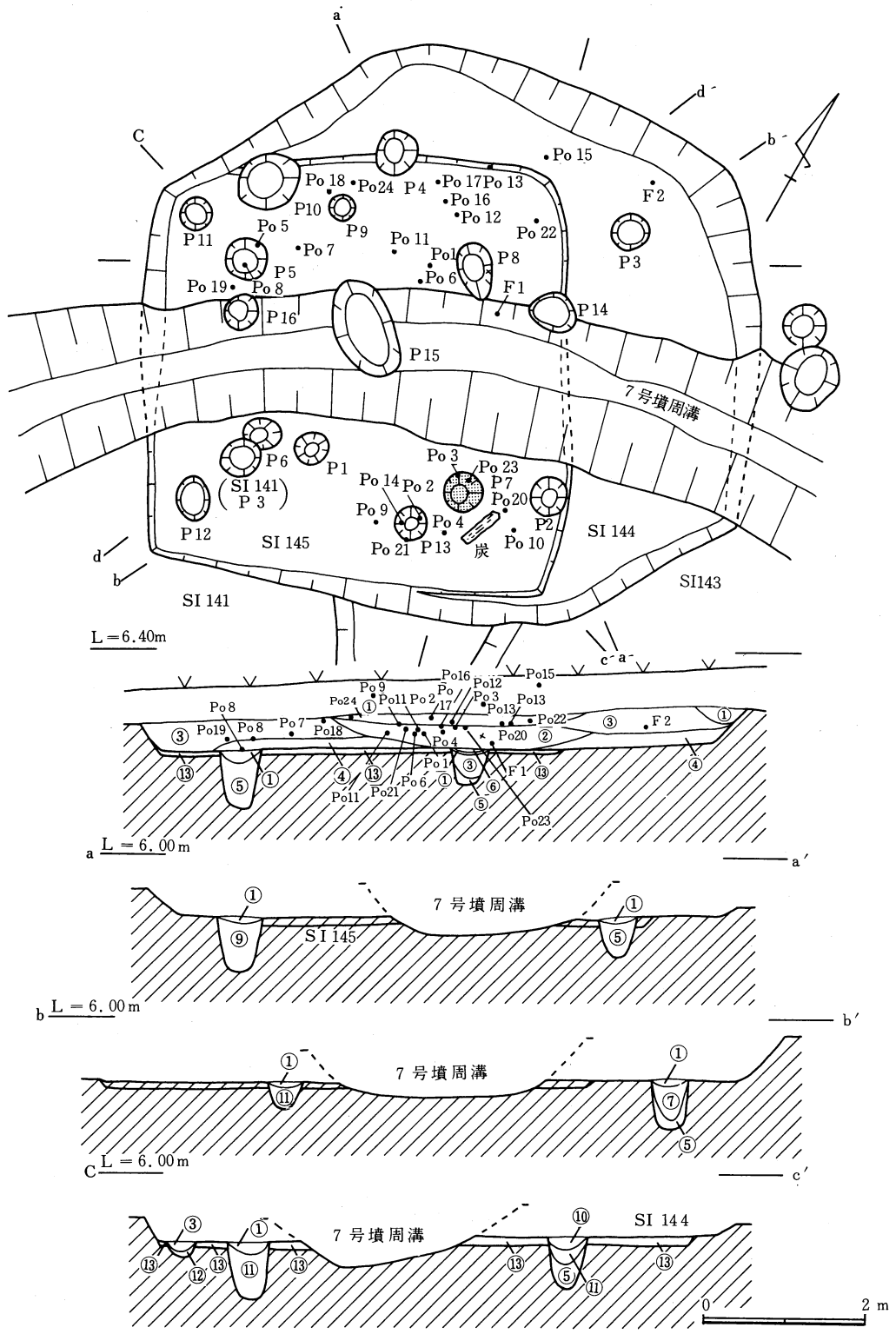
S I 145の平面形は正方形に近い方形で、床面の大きさは長辺5.2m、短辺4.8mを測り、主軸はN-25°-Wである。床面積は25m<sup>2</sup>で壁高は北側で最大値8cm、東側で最小値5cmを測る。柱穴は前述の通りで柱穴間距離はP 5より2.1, 2.7, 2.8, 2.8mを測る。中央にあるP 15(125×70-30)cmは特殊ピットと考えられる。P 7周辺で焼砂、その南東20cmのあたりで長さ57cm、径12cmの炭を検出した。P 7に立てられた柱材が焼けて倒れたものではなかろうか?その他のピットの用途は不明である。出土遺物は多数の土師器と土錘、鉄器などである。S I 144の時期は出土遺物から長瀬II期、S I 145については、それより古いと言えよう。

#### S I 146 (挿図16・17, 図版2・12)

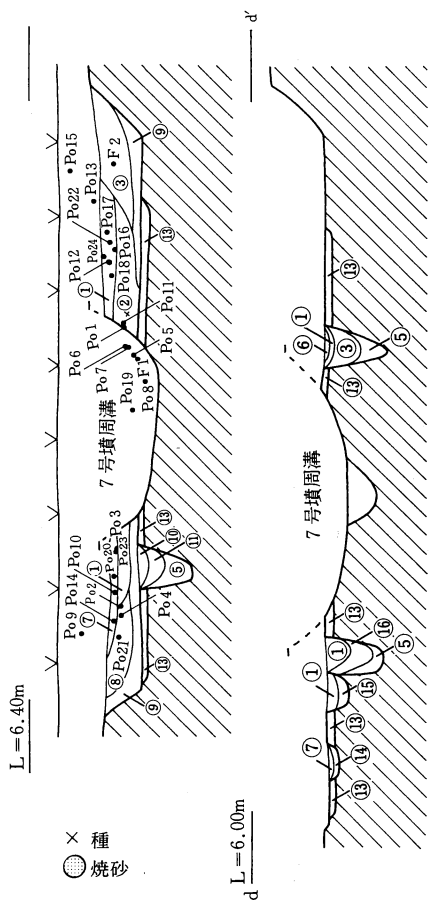
S I 146は11F地区の中央やや北にあり、S I 55の東にある。S I 147と南側で切り合っており、東側はL S Dに切られている。標高6m前後の平坦な場所に立地し、近くの住居跡とは多少軸を異にする。S I 146のプランは方形と推定され、床面で南北5.2mを測る。床面積は残っている部分で約36m<sup>2</sup>あり、主軸はN-7°-Wである。ピットは床面に11個検出し



挿図10 S I 144・145 遺物図その1 (鉄器・土錘S=1/2)



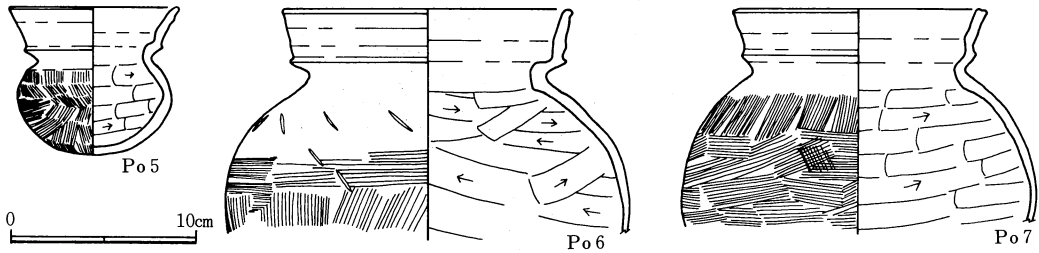
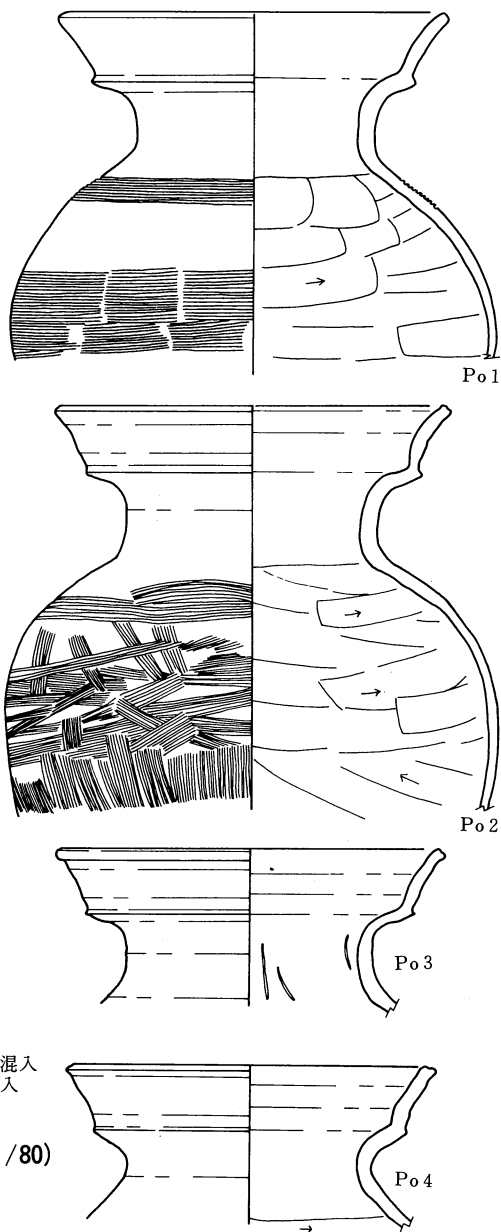
挿図11 S I 144・145 遺構図その1 (S = 1/80)



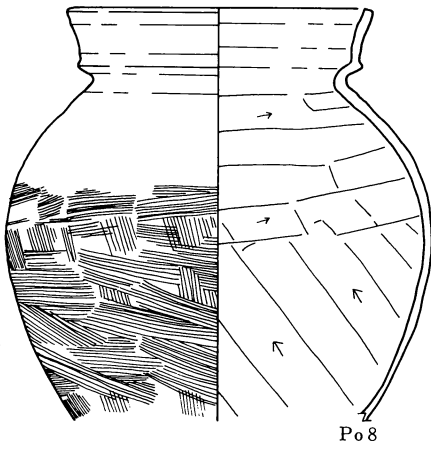
× 種  
● 焼砂

- ① 暗褐色砂
- ② 黒褐色砂
- ③ 褐色砂
- ④ 黄灰褐色砂
- ⑤ 灰褐色砂
- ⑥ 暗褐色砂に黒褐色砂混入
- ⑦ 暗黄褐色砂
- ⑧ 淡黒褐色砂
- ⑨ 淡褐色砂
- ⑩ 暗褐色砂に朱色混る
- ⑪ 淡黄褐色砂
- ⑫ 黄褐色砂
- ⑬ 暗褐色砂に茶色混入
- ⑭ 灰白色砂
- ⑮ 暗褐色砂に黄灰褐色砂混入
- ⑯ 暗褐色砂に灰褐色砂混入

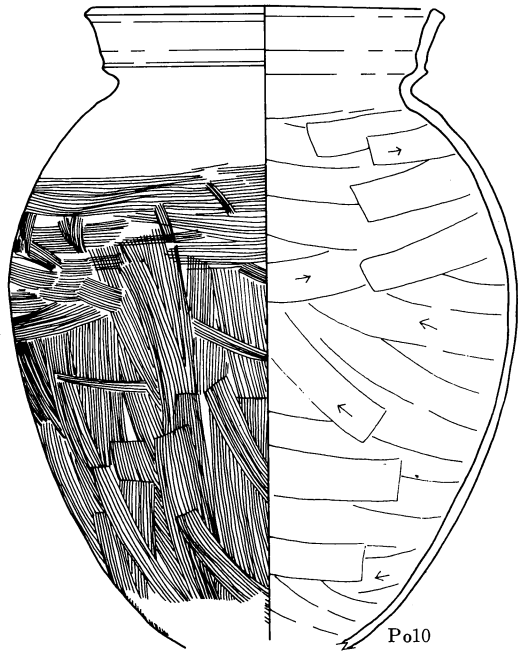
挿図12 S1144・145 遺構図その2 (S=1/80)



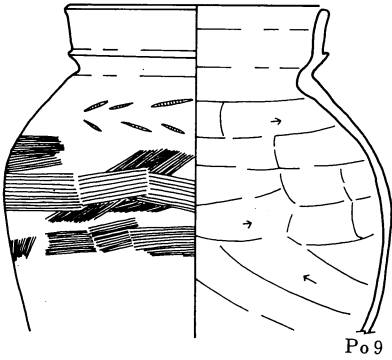
挿図13 S1144・145 遺物図その2 (S=1/4)



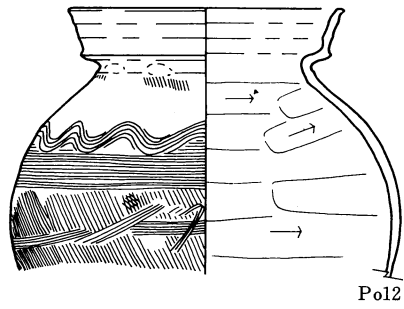
Po8



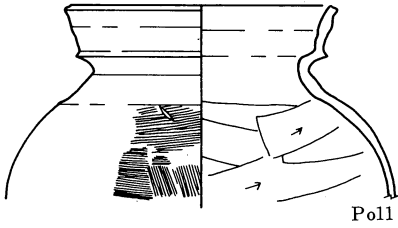
Po10



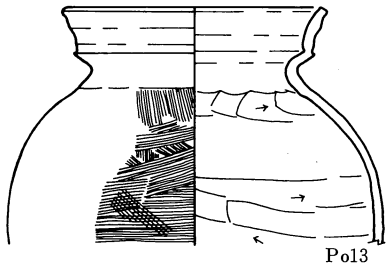
Po9



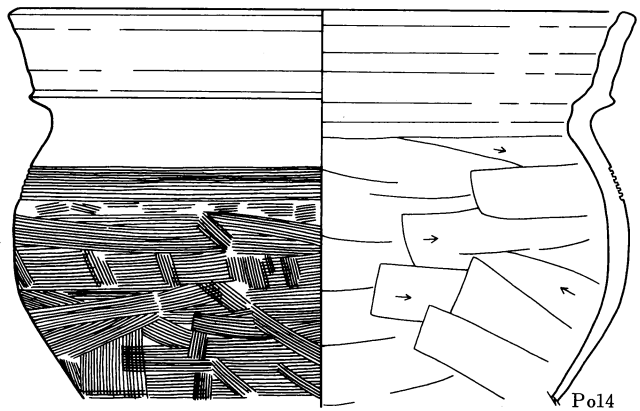
Po12



Po11



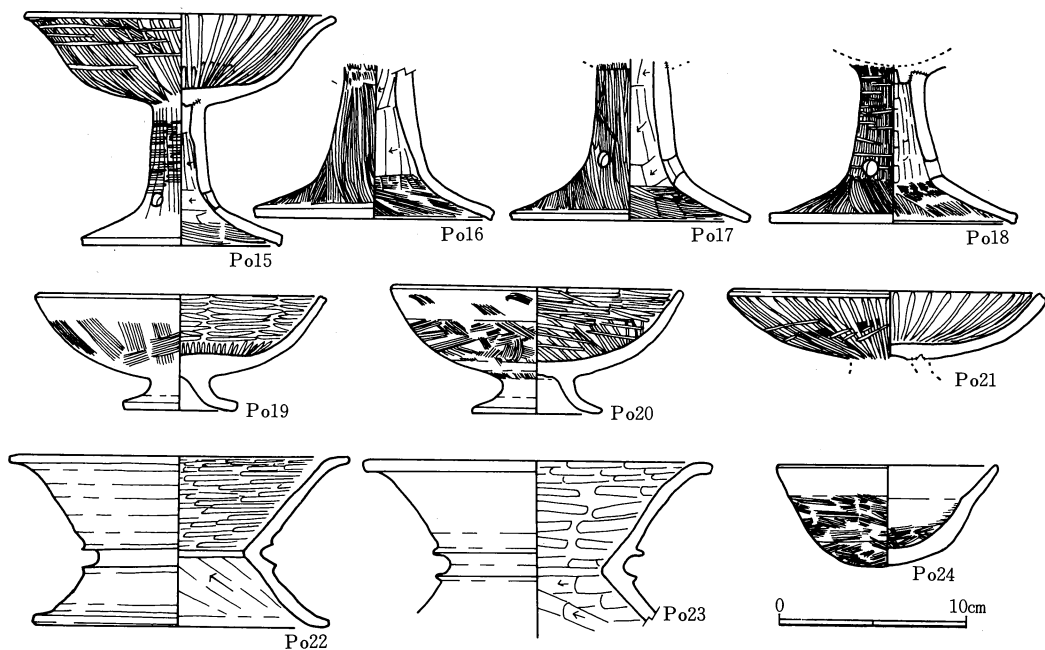
Po13



Po14

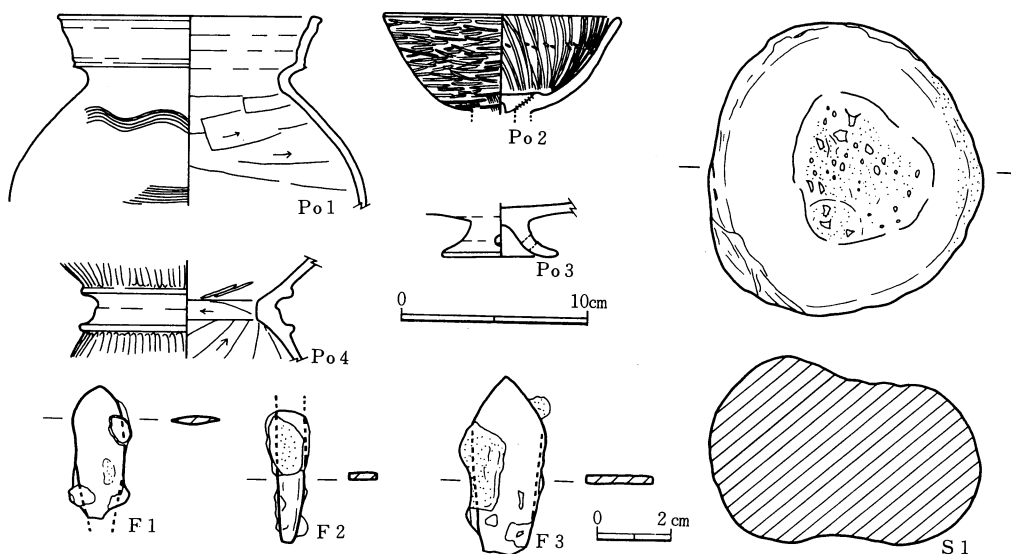
0 10cm

挿図14 S1144・145 遺物図その3 (S=1/4)

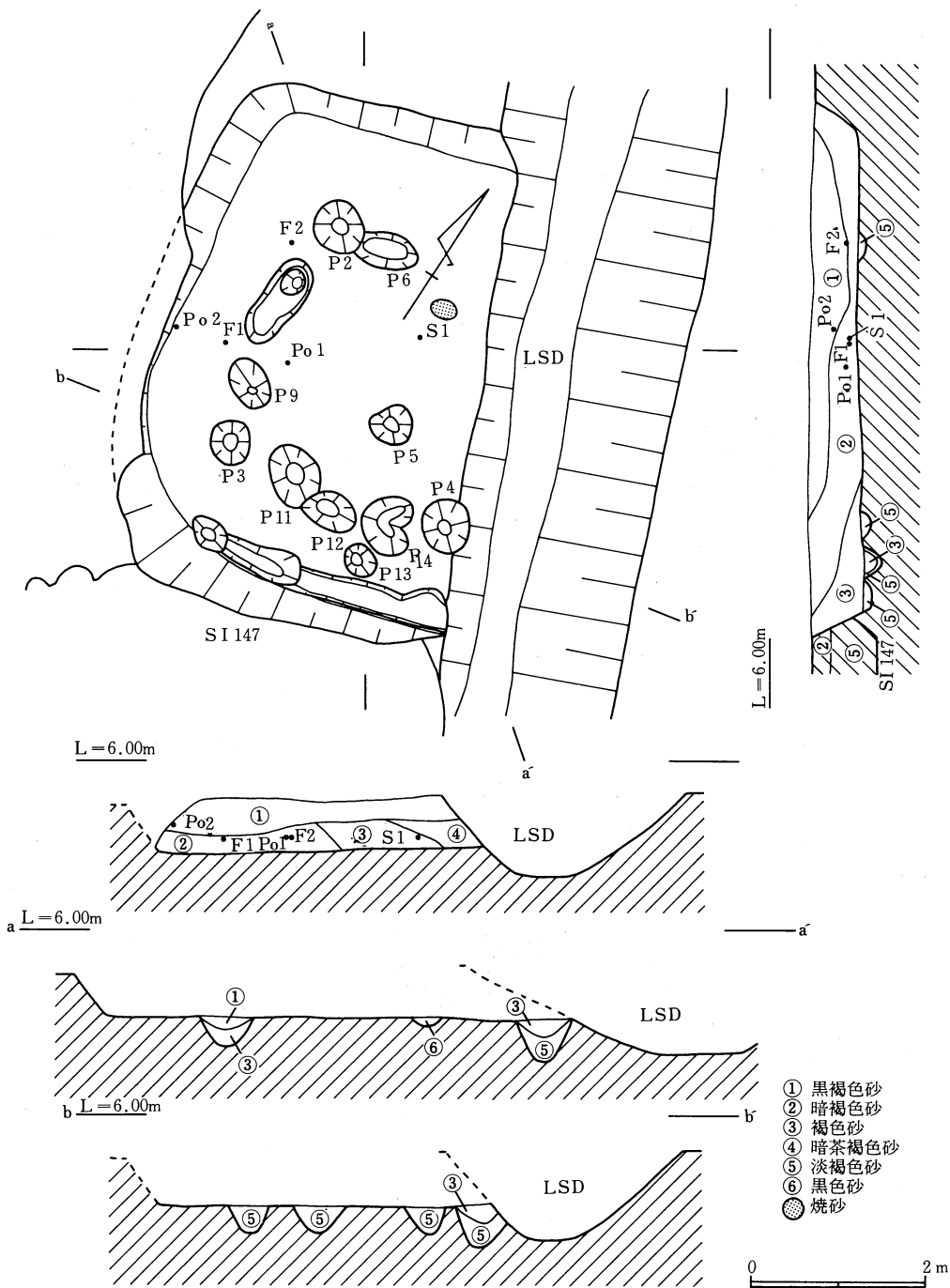


挿図15 S I 144・145 遺物図その4 (S = 1 / 4)

たが、柱穴はP 2～P 4の3ヶ所であろう。P 1はLSDに切られて検出できなかった。柱穴のプランはP 2 (60×52-35), P 3 (52×44-30), P 4 (60×56-32)cmでP 5 (48×44-18)cmは特殊ピットである。柱穴間距離はP 2より2.6, 2.76mを測る。またP 5の北には焼砂が認められる。火を使用した跡であろう。南側の壁下に側溝を検出した。側溝は全周しておらず、床面でも低い南側部分だけにみられた。壁高は西側で最大値50cm, 南側



挿図16 S I 146 遺物図 (土器S = 1 / 4) ・鉄器・石器S = 1 / 2)



挿図17 S I 146 遺構図 (S = 1/80)

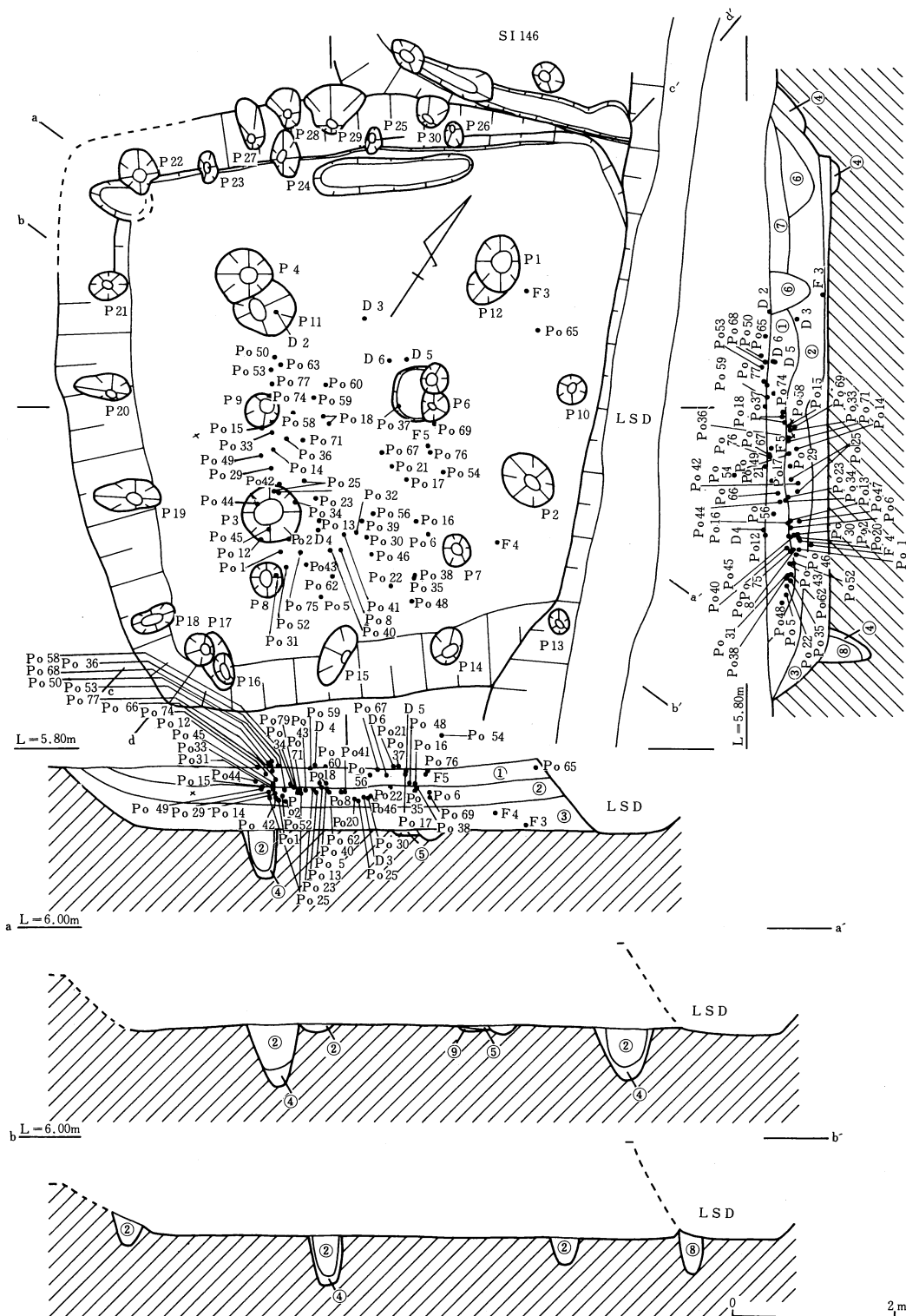
で最小値47cmを測る。遺物は土器片が埋砂内に散乱していた。S I 147を切っている事と遺物から長瀬II期の住居跡と考えられる。

S I 147 (挿図18~27, 図版2・12~14)

11F地区のほぼ中央にあり、S B31の北、S B02の東に位置し、北をS I 146に、東をL S Dに切られている。平面形は方形で、主軸はN-41°-Wである。床面は長軸6.0m、短軸5.8mを測り、床面積は約35m<sup>2</sup>と推定する。床面には10個のピットがあり、柱穴はP 1～P 4、P 6～P 9の2組が考えられる。各柱穴のプランはP 1 (68×56-79)、P 2 (72×56-67)、P 3 (72×74-91)、P 4 (68×70-76)、P 6 (40×36-20)、P 7 (40×36-32)、P 8 (44×40-52)、P 9 (43×41-60) cmを測り、P 5 (68×65-6) cmは特殊ピットと思われる。柱穴間距離はP 1から順に2.72、3.24、2.96、3.12m、P 6から順に1.76、2.40、2.12、2.04mを測る。残っている南・北と西壁には補助柱の柱穴と思われるものが検出された。南側の壁でP13～P16、西側の壁でP18～21、北側の壁でP22～26とP27～30の柱穴で、これらのほとんどは垂直に掘られ、桁を支える補助柱と思われる。床面は北側が若干低く、その為か北側に側溝が一部みられ、壁も下部では垂直におちる。壁高は南西と南東で最大値74cm、北西側で最小値58cmを測る。床面で検出された2組の柱穴のうちP 1～P 4は規模も大きく、S I 147の床面に対応した場所にあることからこれらがS I 147の柱穴と考えられる。またP 5はS I 147の床面のほぼ中央にあり、しかもP 1～P 4のほぼ中央にある事からP 1～P 4に伴う特殊ピットと考えられる。P 6～P 9はS I 147の床面内の南側に位置し、柱穴も小さく、柱穴間距離も短い。P 6～P 9はP 1～P 4を構造柱とする建物(S I 147-I)とは別の建物跡の構造柱と考えられ、P 6がP 5(特殊ピット)を切っている事からP 6～P 9を構造柱とする建物(S I 147-II)はS I 147-Iの建物が廃棄された後作られたものとする。S I 147出土の土器のほとんどはP 6～P 9内に有り、完形が多く、層位的にも第3層とやや上層に位置している。これらの事からS I 147は2時期の建物跡である事がわかる。最初に作られたのはS I 147-IでP 1～P 4を構造柱とし、広い床面、壁面、特殊ピットP 5、壁の補助柱の柱穴を伴う竪穴住居跡で、特殊ピットは焼砂を含み、火を用いていたと考えられる。S I 147-Iに直接伴うと思われる遺物は不明である。S I 147-IIはP 6～P 9を構造柱とし特殊ピットはなく、壁面も検出されなかった。(P 10が伴う可能性がある。) 遺物は大半が図化できた。S I 147-Iが埋った段階で作られ、多くの遺物が廃棄されたものであろう。時期は遺物などからS I 147-Iは長瀬I～II期、S I 147-IIは長瀬II期頃のものとする。

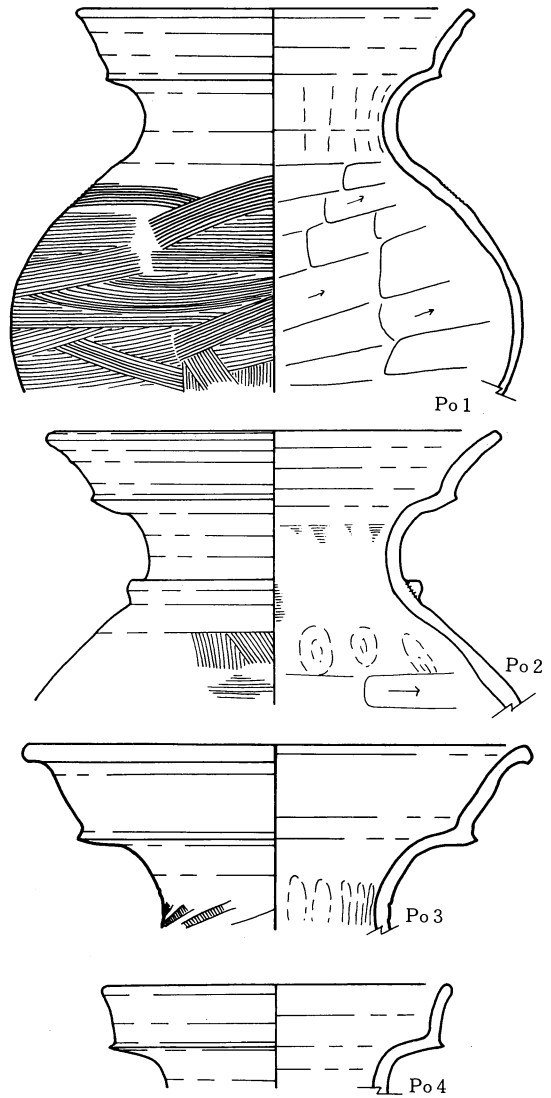
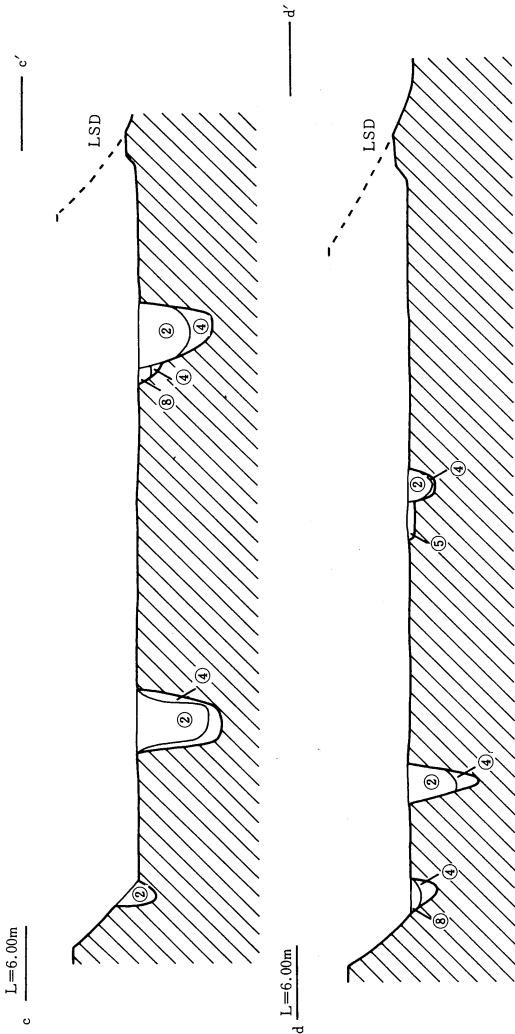
#### S I 148 (挿図28～30、図版2・14・15)

10E、11E地区にまたがり、S X84の北側に位置する。切り合う遺構はなく、単独に検出された。周辺には北西側に竪穴住居跡、掘立柱建物跡群があるが、南側のそれとの間には空白地域が存在する。おそらく一つの集落のまとまりの境界がこのあたりにあったのではなかろうか。S I 148は主軸をN-5°-Wにとる方形プランの竪穴住居跡である。床面は長軸4.76m、短軸4.72mを測る。床面積は22.5m<sup>2</sup>である。壁高は南側で最大値50cm、北側



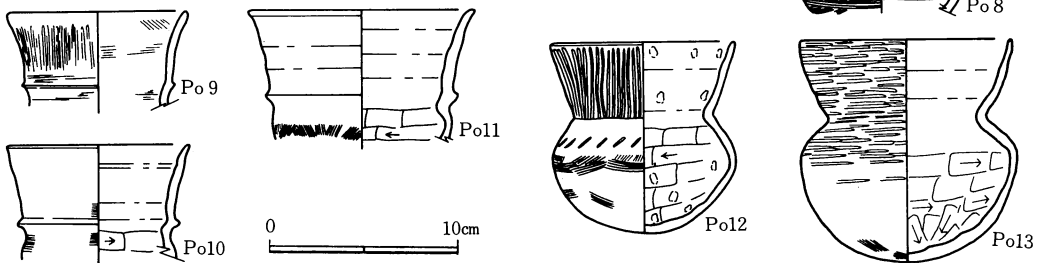
挿図18 SI 147 遺構図その1 (S = 1/80)



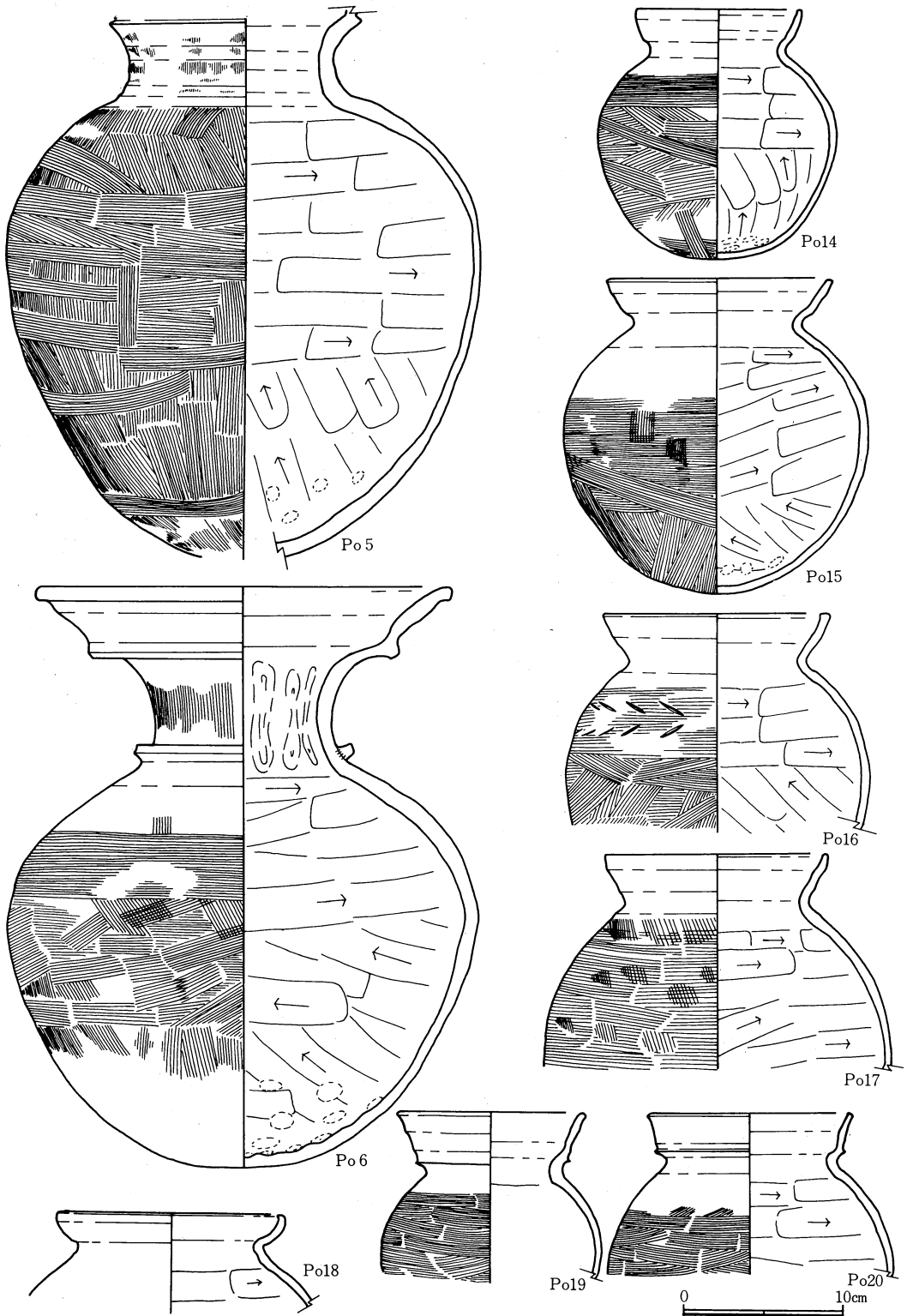


- ① 黒褐色砂
- ② 暗褐色砂
- ③ 黄褐色砂
- ④ 淡褐色砂
- ⑤ 焼砂かベンガラを含む × 種
- ⑥ 黒茶褐色砂
- ⑦ 黒褐色砂
- ⑧ 褐色砂
- ⑨ 灰褐色砂

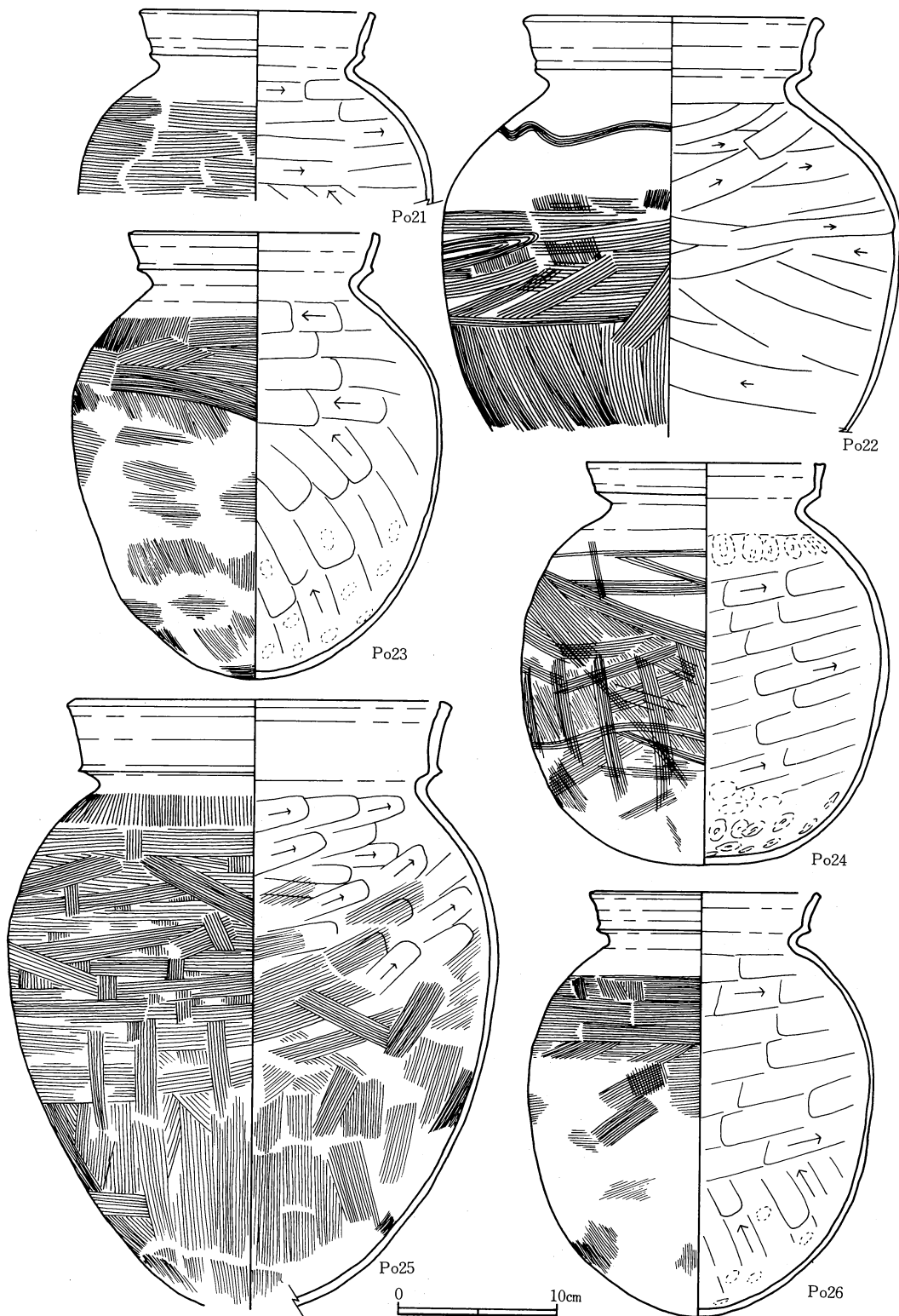
挿図19 SI 147遺構図その2 (S=1/80)



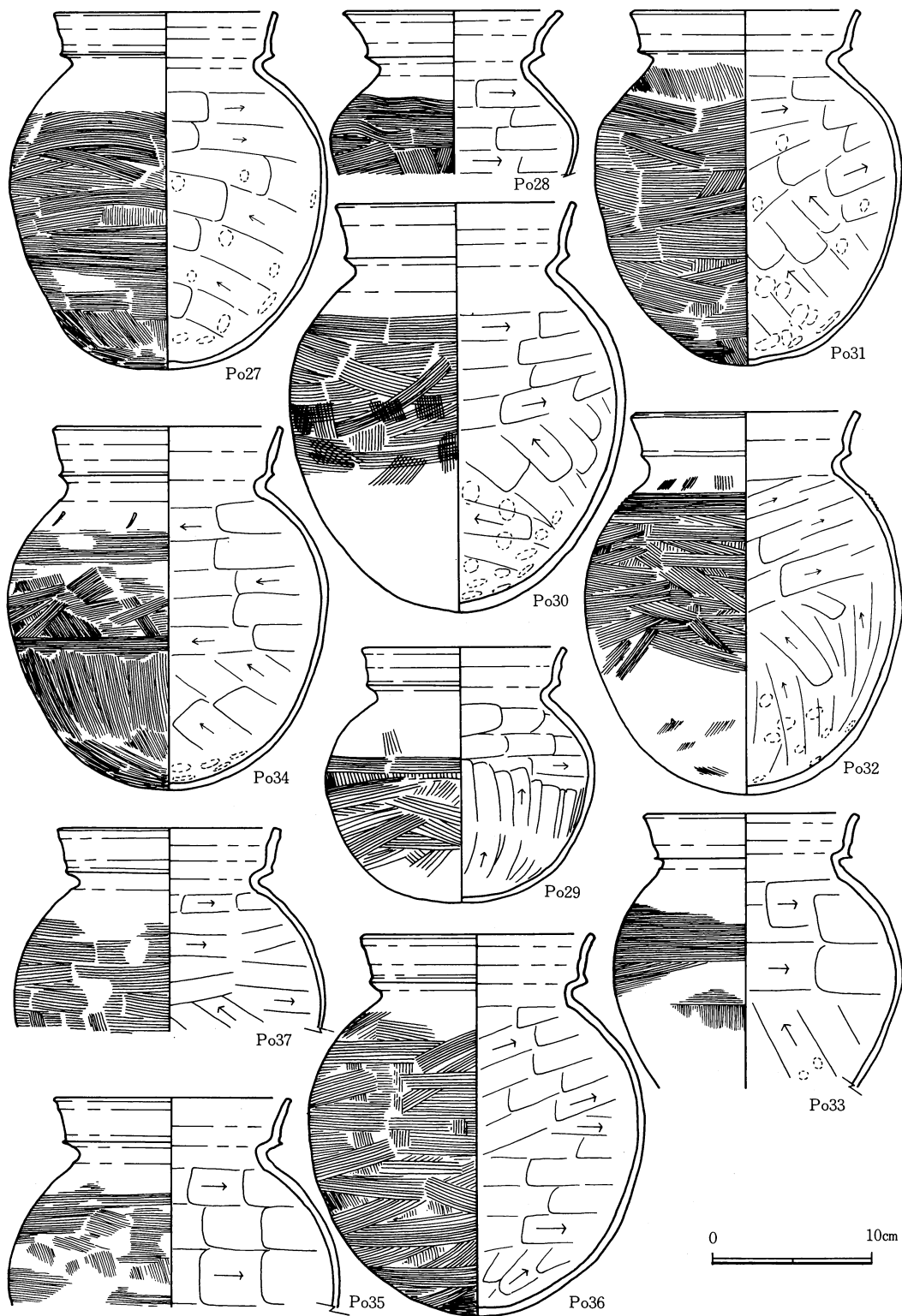
挿図20 SI 147遺物図その1 (S=1/4)



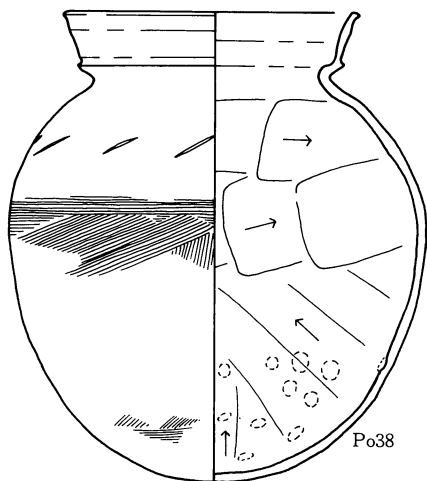
挿図21 SI 147遺物図その2 (S=1/4)



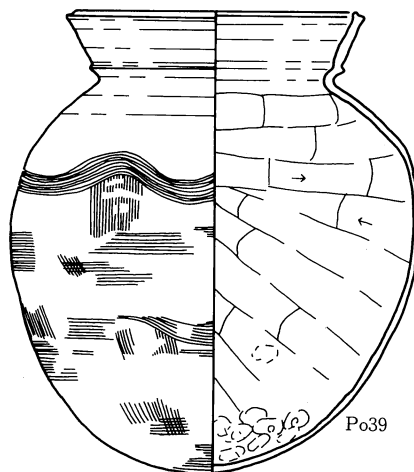
挿図22 SI 147遺物図その3 (S=1/4)



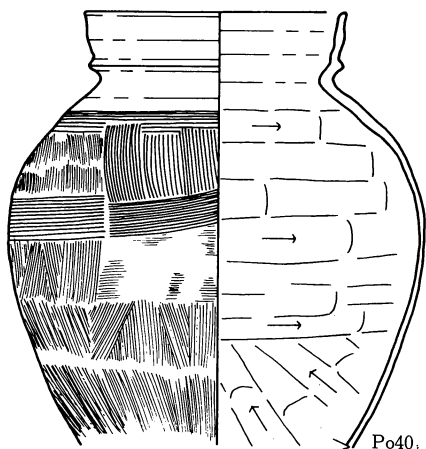
挿図23 SI 147遺物図その4 (S=1/4)



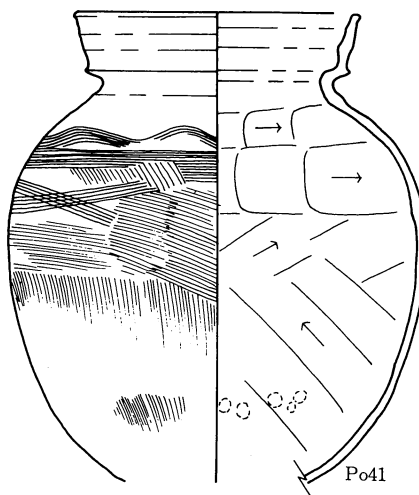
Po38



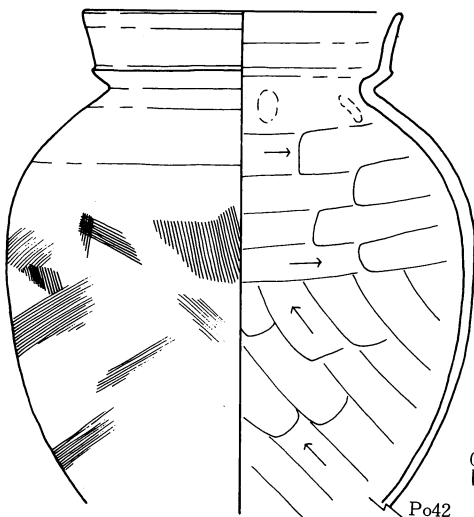
Po39



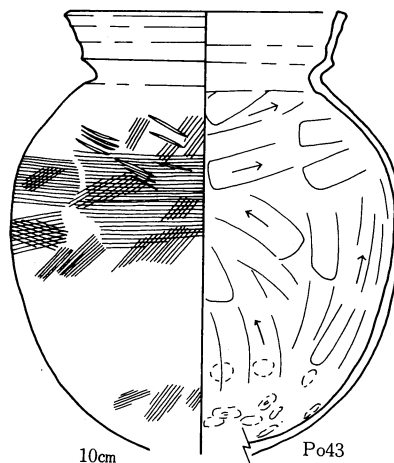
Po40.



Po41



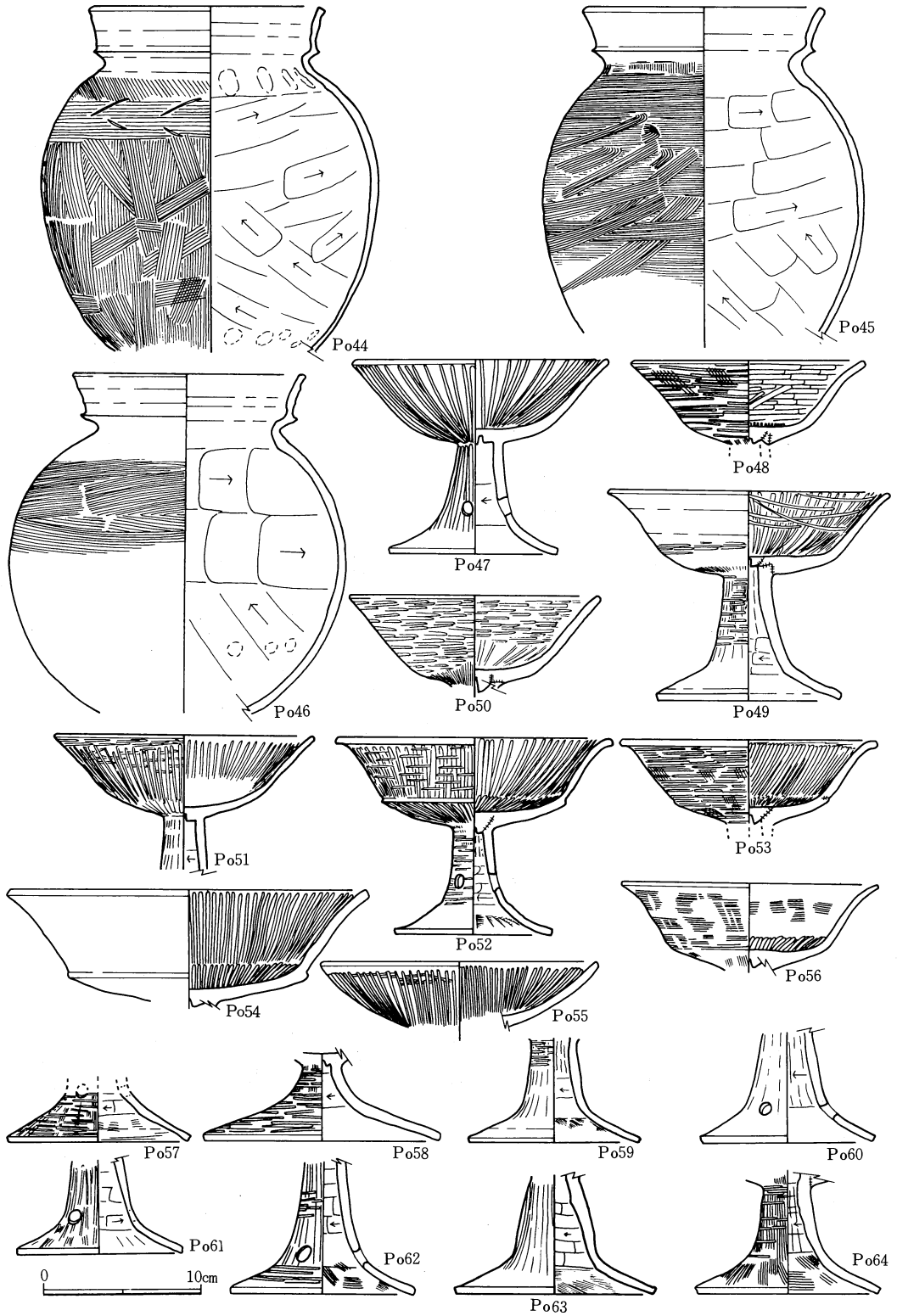
Po42



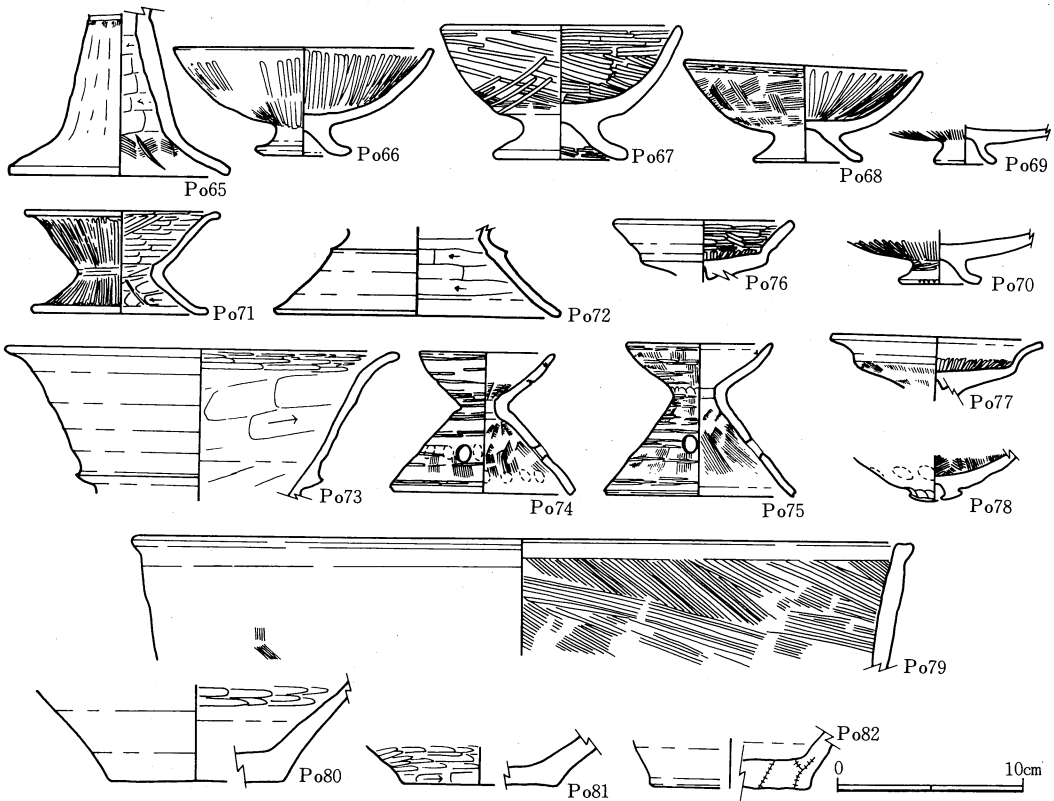
Po43

0 10cm

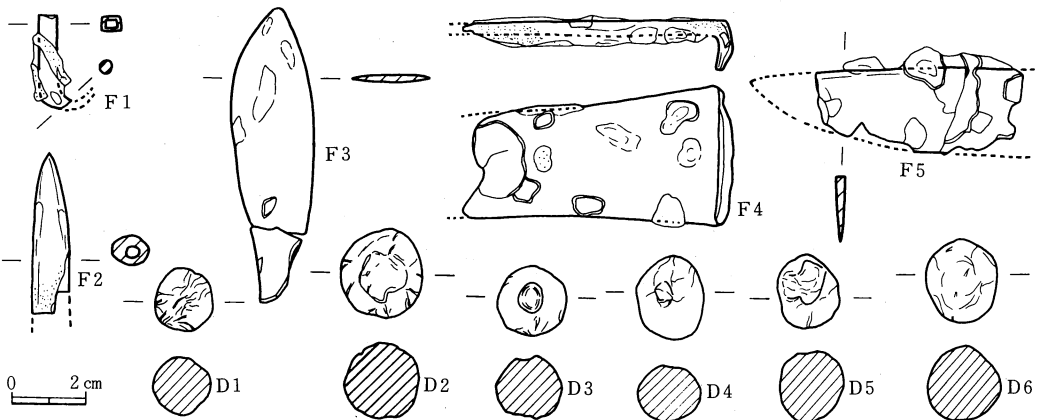
挿図24 SI 147遺物図その5 (S=1/4)



挿図25 S1147 遺物図その6 (S=1/4)



挿図26 S I 147 遺物図その7 (S = 1/4)



挿図27 S I 147 遺物図その8 (鉄器・土製品 S = 1/2)

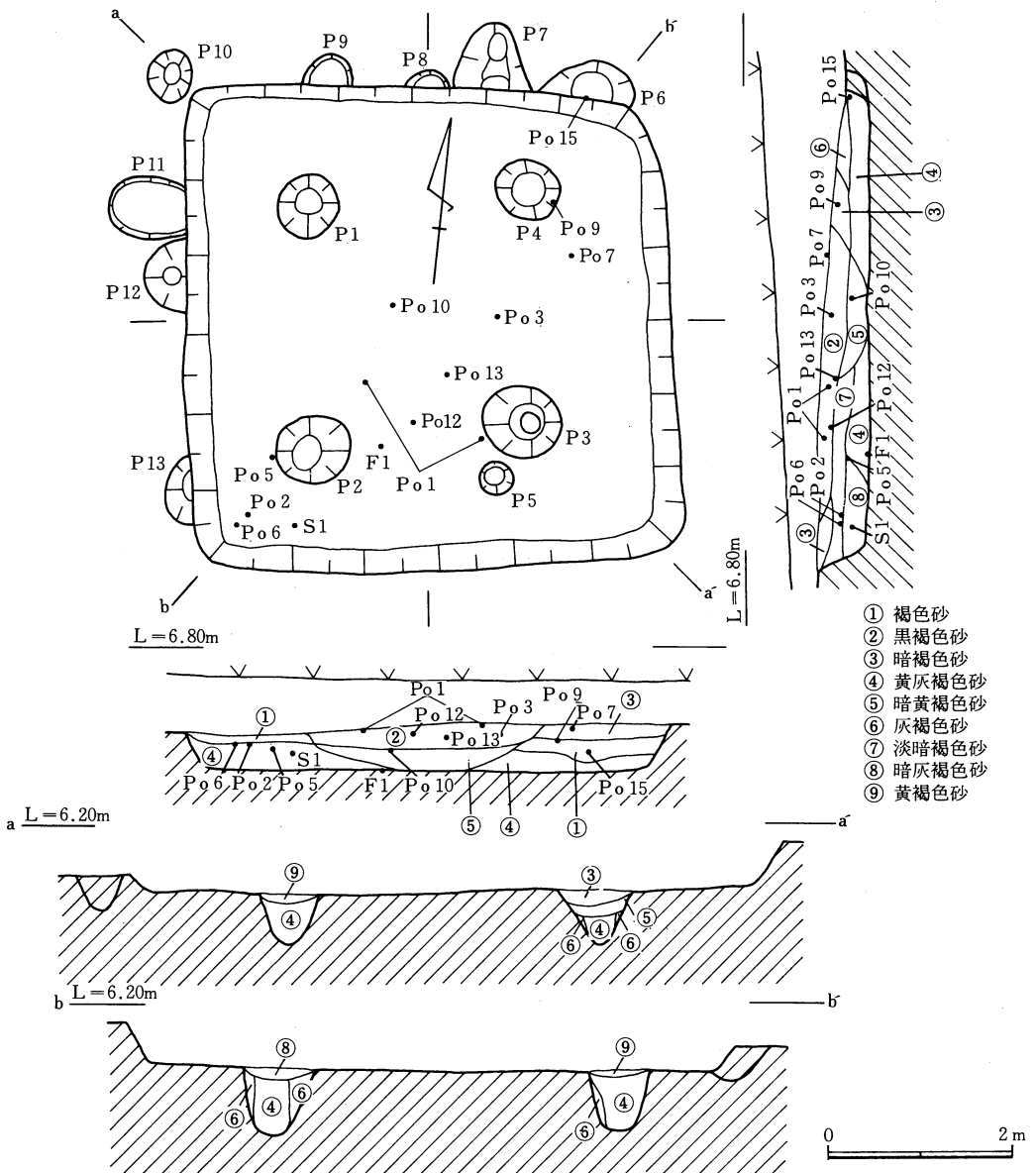
で最小値18cmを測る。床面からピットを5個検出したが、柱穴と思われるピットはP 1 (70×64-66), P 2 (79×70-73), P 3 (86×80-59), P 4 (70×64-61) cmである。柱穴間距離はP 1より順に2.74, 2.45, 2.53, 2.38mである。住居跡の北側, 西側の肩にもピットが8個ある。深さ, 大きさ, 間隔とも様々であるが, 周辺にピットがないのここには集中していること, しかも住居跡の肩をめぐるという事から, それらはS I 148

に伴うピットと考えるとよからう。時期は遺物より長瀬 I 期と考えられる。

S I 149 (挿図31~34, 図版 2・15)

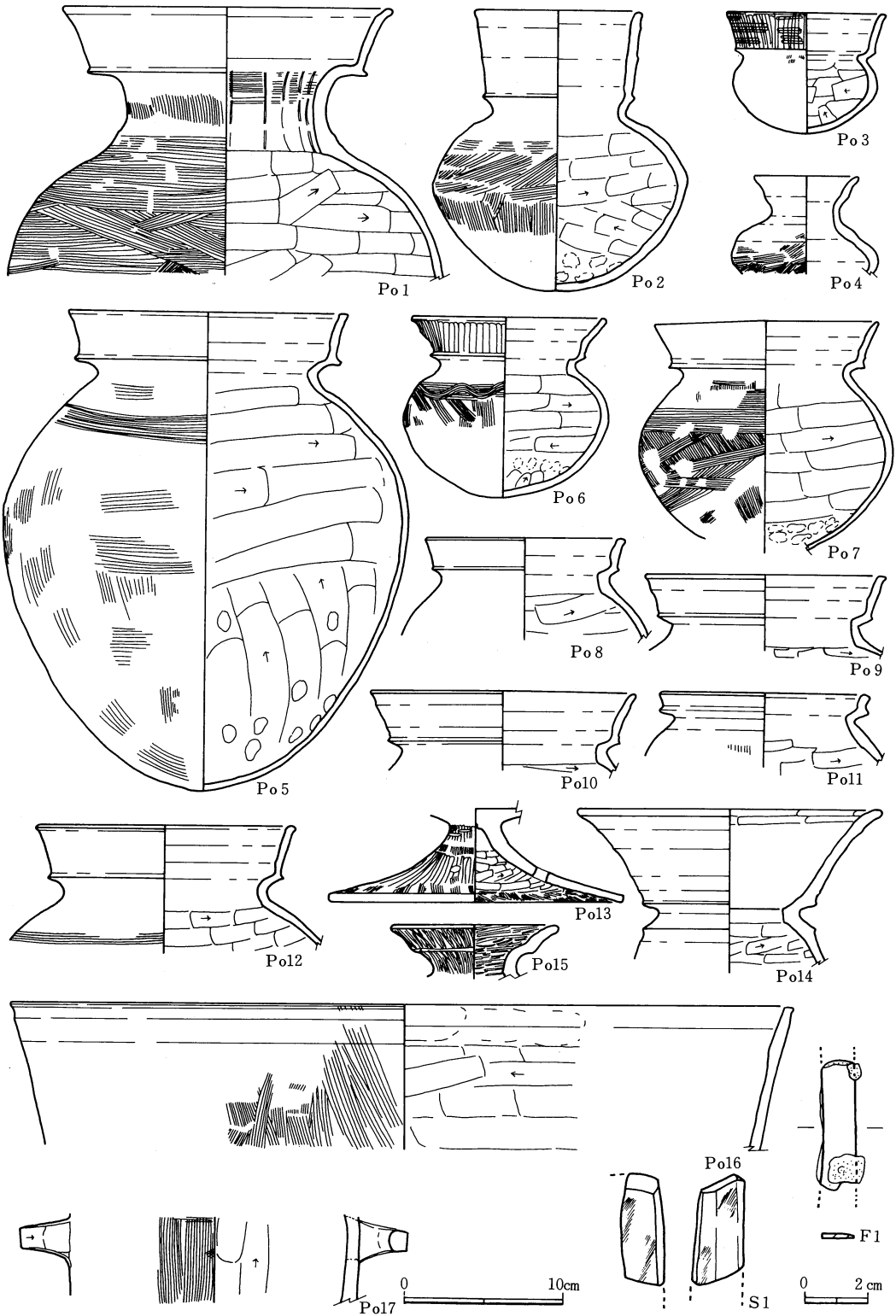
9 D地区の北西にあり S I 157の北, 86号墳の北東に位置する。87号墳と切り合い, 87号墳の方が古い可能性がある。東側は調査区域外のため未調査であるが, 平面形は方形であろう。

床面の大きさは, 南北で4.76mを測る。東西長・床面積は不明である。主軸はN-10°-Wである。壁高は18~30cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で5個検出したが柱

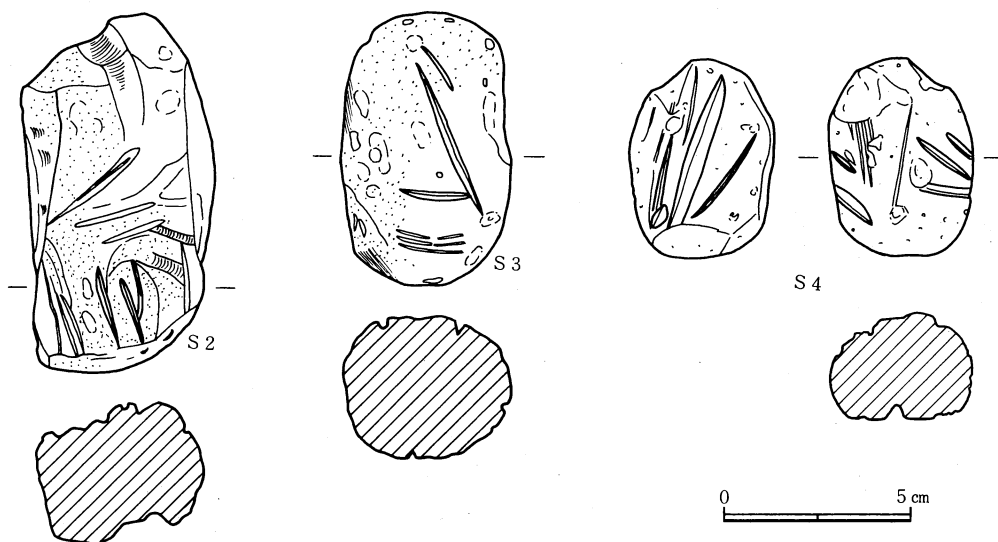


挿図28 S I 148 遺構図 (S = 1/80)





挿図29 S I 148 遺物図その1 (土器S = 1/4・鉄器・石器S = 1/2)

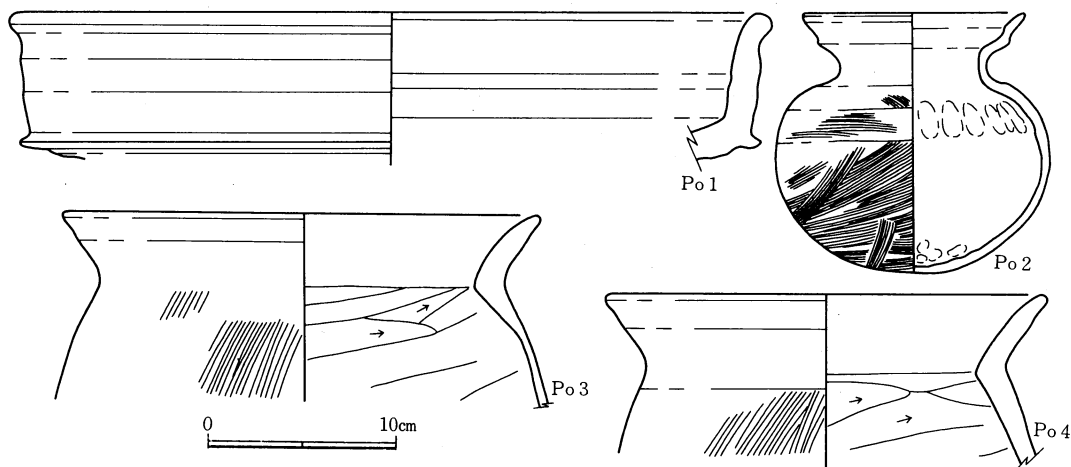


挿図30 S I 148遺物図その2 (軽石S=1/2)

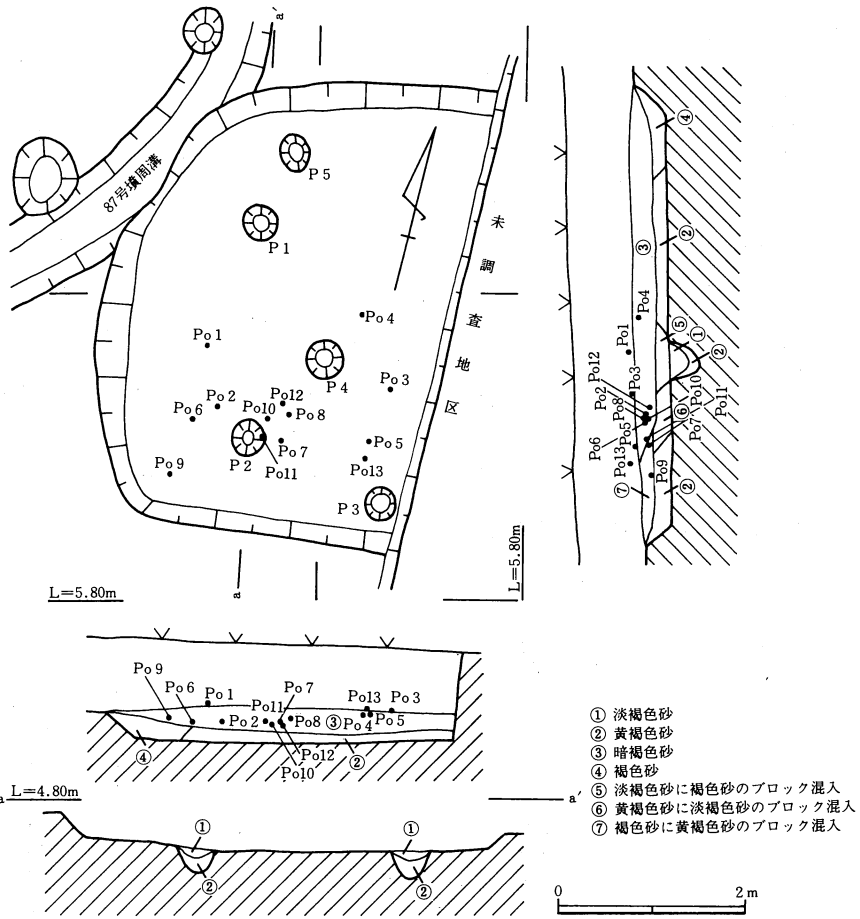
穴はP 1とP 2である。柱穴がコーナーにあることから4本柱と考えられ、他の柱穴は未調査地区にあると思われる。プランはP 1が(40×38-27), P 2が(42×38-29) cmで柱穴間距離はP 1-P 2で2.20mを測る。遺物は甕, 高坏, コシキ形土器が出土している。高坏はP 2付近で集中して検出された。時期は古墳時代後期前半代と推定される。

S I 150 (挿図35・36, 図版3・15)

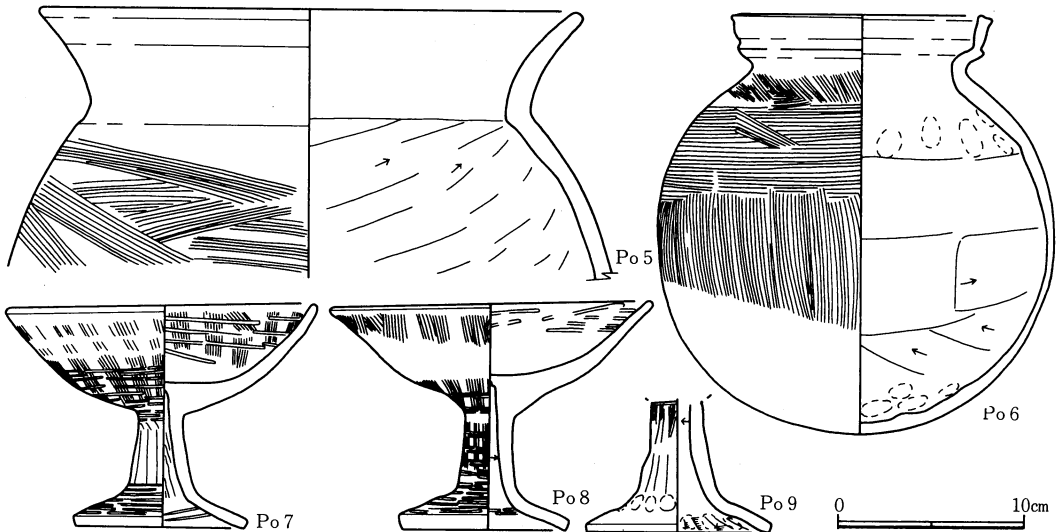
9D南西区, 10D南東区にまたがりS I 149の南, S I 152の北東に位置する。86号墳周溝・S I 157と切り合っている。新旧関係は, 86号墳周溝・S I 157が新しい。平面形は長方形を呈する。床面の大きさは, 長軸5.92m, 短軸3.16mを測り, 床面積は18.7m<sup>2</sup>を測る。主軸はN-47°-Eにとる。壁高は北側で最大値17.5cm, 南側で最小値3.6cmを測る。側溝



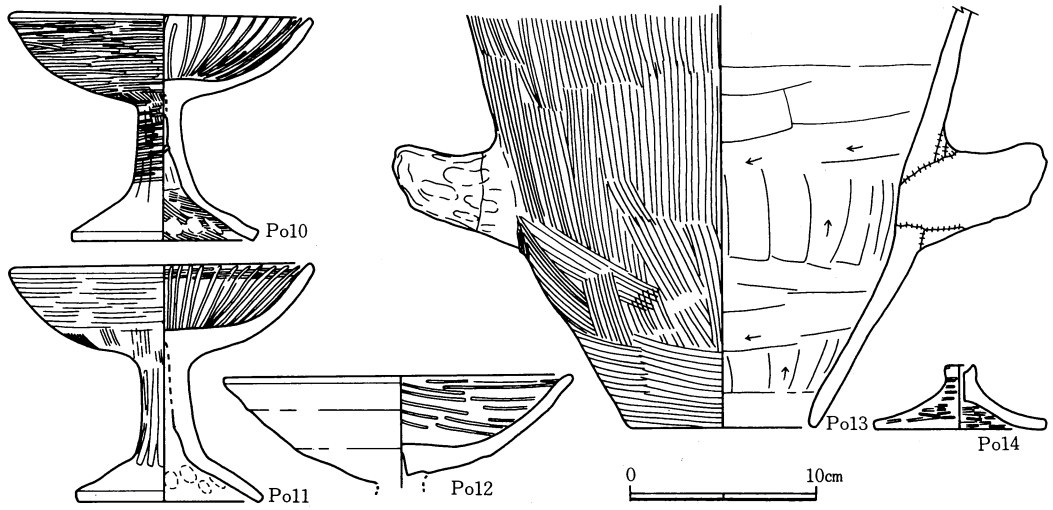
挿図31 S I 149遺物図その1 (S=1/4)



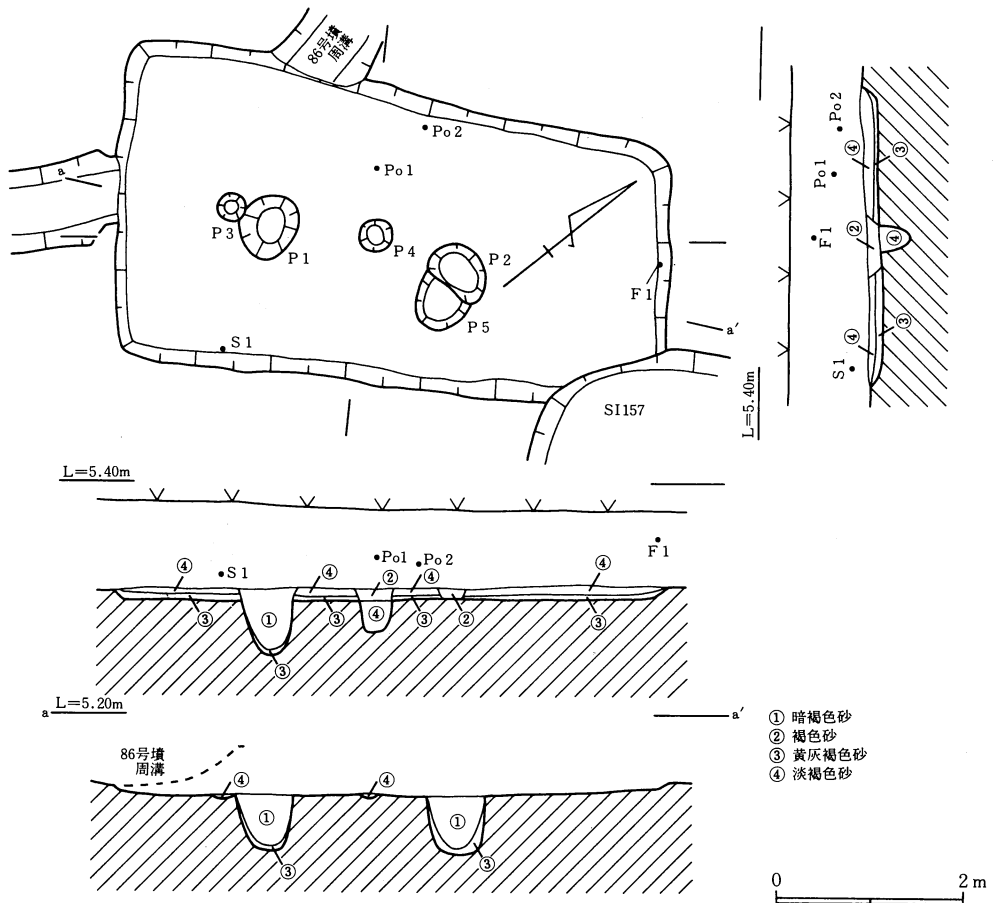
挿図32 SI 149遺構図 (S=1/80)



挿図33 SI 149遺物図その2 (S=1/4)



挿図34 SI 149遺物図その3 (S=1/4)

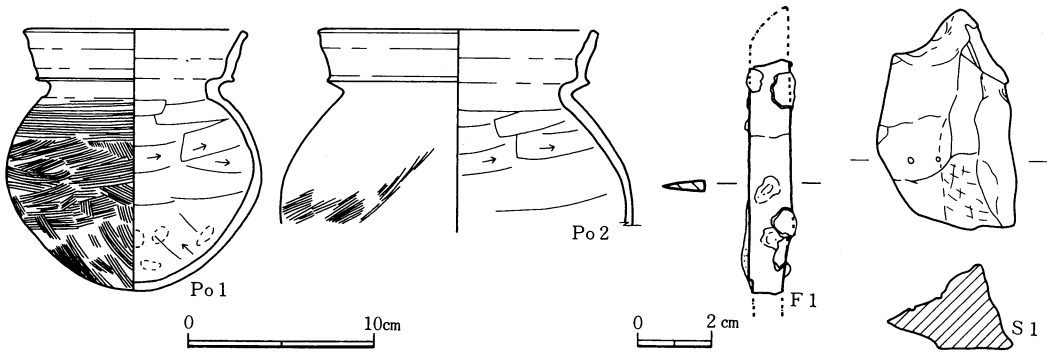


挿図35 SI 150遺構図 (S=1/80)

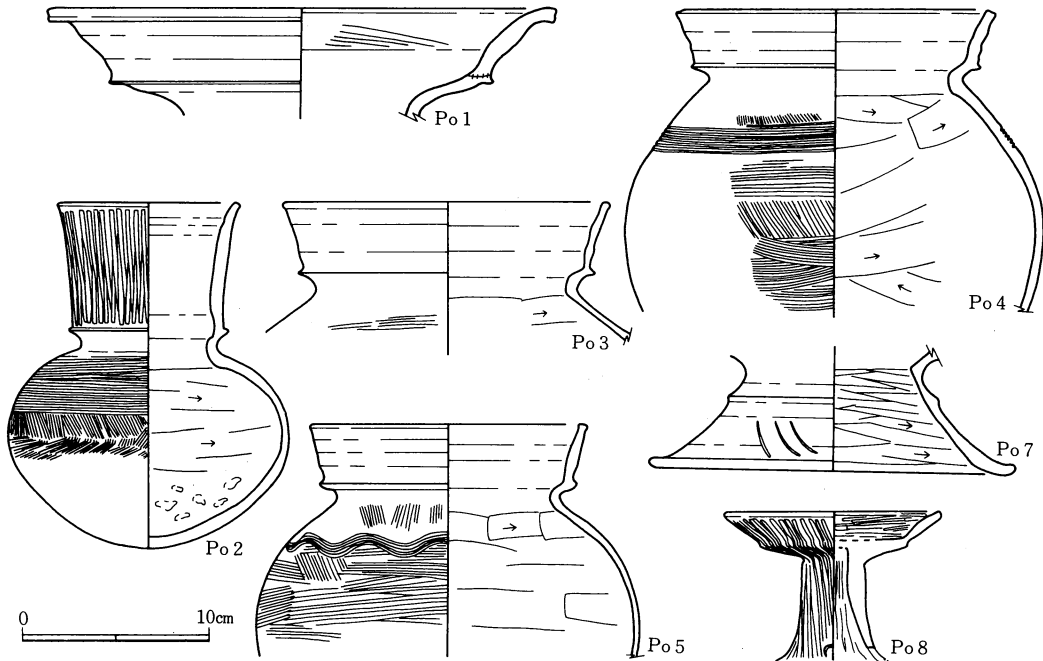
はみられない。ピットは床面で5個検出したが柱穴はP 1とP 2の2本柱である。プランはP 1が(72×60-60) cm, P 2が(68×48-61) cmで、柱穴間距離は2.04mを測る。P 4(36×36-38) cmは特殊ピットと考えられる。他のピットの用途は不明である。遺物は甕, 鉄器等が出土している。時期は遺物より長瀬II期であろうか？

S I 151 (挿図37~39, 図版3)

9 C地区にあり, S I 159の北に位置する。東側½は調査区域外で西側のみ調査できた。平面形は隅丸方形で主軸はN-45°-Wと思われる。床面の大きさは不明であるが、壁高は西側で64cmである。壁際の床面には側溝がある。幅は24~40cm, 深さ5cmである。ピットは床面より4個検出され、柱穴はP 1(42×42-60) cmと考えられる。隅にあることに



挿図36 S I 150遺物図 (土器S=1/4, 鉄器・碧玉S=1/2)

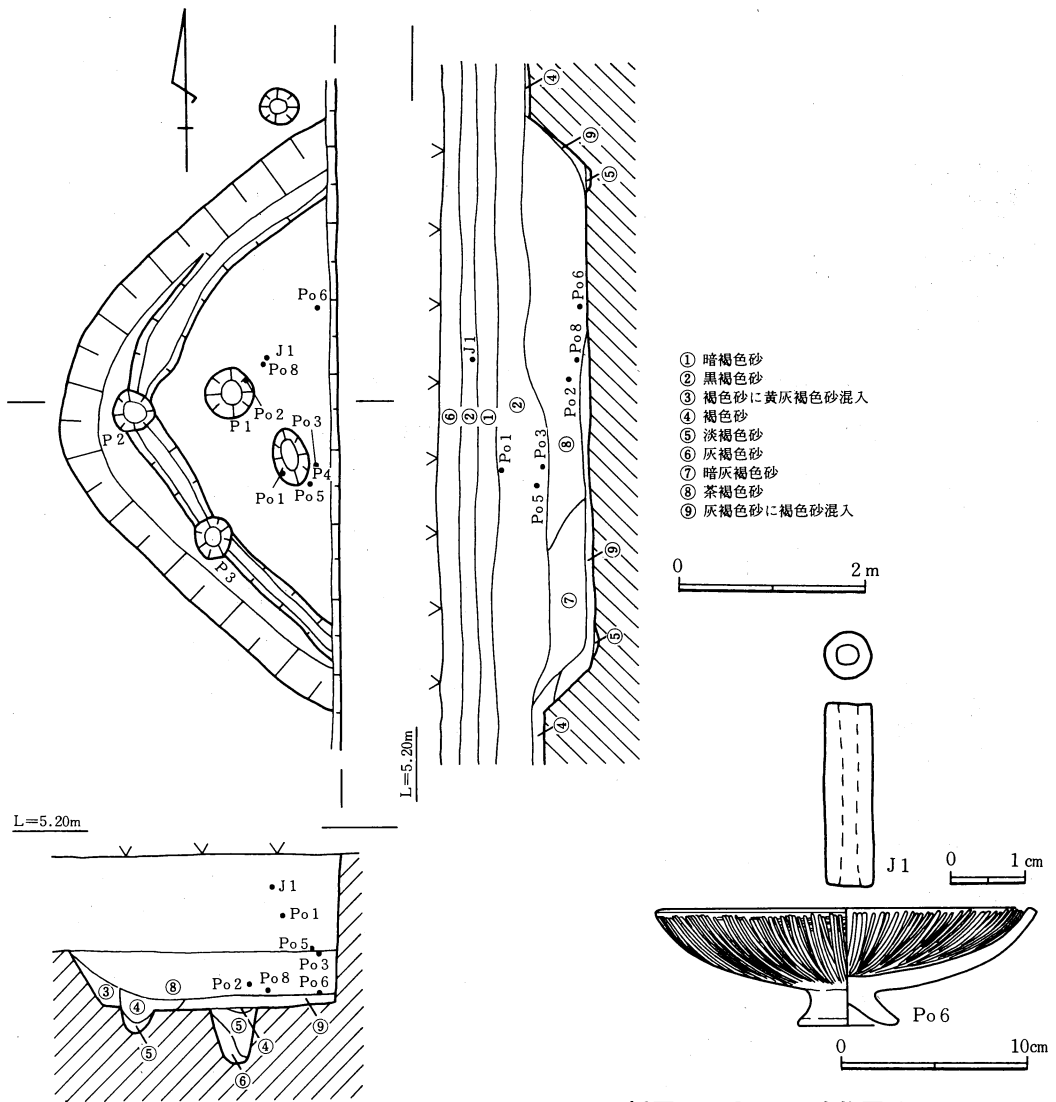


挿図37 S I 151遺物図その1 (S=1/4)

より4本柱の住居跡と推定される。P2, P3は側溝の中より検出されており、この住居に関連するものと考えられるが用途不明である。遺物は土師器が出土しており、これらにより時期は長瀬II期の古い段階と考えられる。

S I 152 (挿図40~43, 3・15)

10C, 10D地区にまたがり、SX86の周溝に切られている。新旧関係はSX86の方が新しい。平面形は隅丸方形である。床面の大きさは長軸4.4m, 短軸3.6mで、床面積は15.8m<sup>2</sup>である。主軸はN-50°-Eである。壁高は北西側で最大値64cm, 南東側で最小値40cmを測る。床面より構造柱の柱穴と思われるピット4個と「コ」の字形の溝状の遺構を検出し



- ① 暗褐色砂
- ② 黒褐色砂
- ③ 褐色砂に黄灰褐色砂混入
- ④ 褐色砂
- ⑤ 淡褐色砂
- ⑥ 灰褐色砂
- ⑦ 暗灰褐色砂
- ⑧ 茶褐色砂
- ⑨ 灰褐色砂に褐色砂混入

0 2m

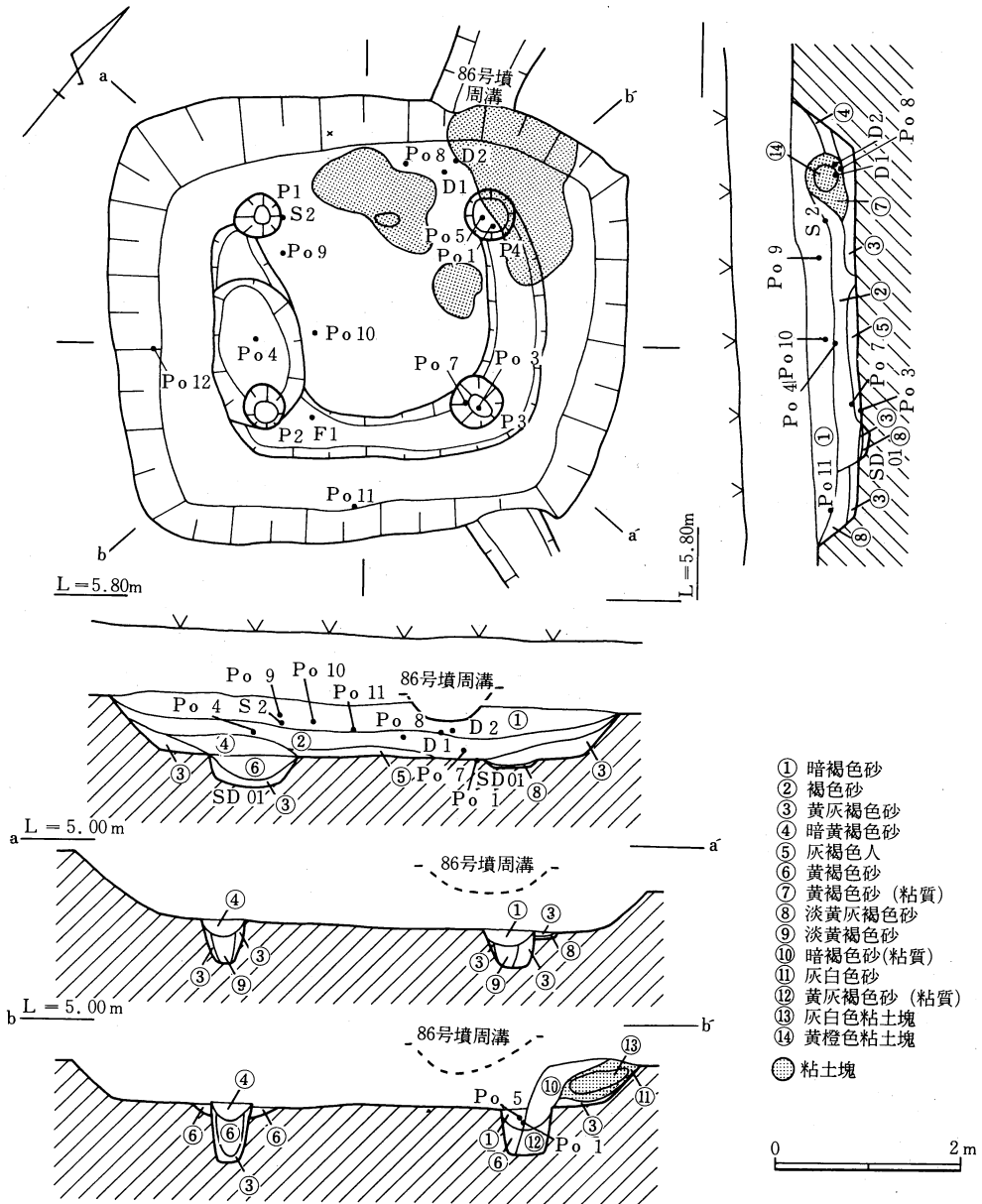
J1 0 1cm

Po6 0 10cm

挿図38 S I 151遺構図 (S=1/80)

挿図39 S I 151遺物図その2  
(土器S=1/4, 玉S=1/1)

たが、この溝は側溝とは考えられず用途は不明である。ピットのプランはP 1 (52×46-47), P 2 (47×44-64), P 3 (56×56-40), P 4 (54×53-48) cmで柱穴間距離はP 1 ~2より2.1, 2.3, 2.0, 2.5mである。住居跡の北側(P 4の周辺)より粘土塊を検出した。この粘土はかなり上方よりP 4内に流れこんだ様子である。このP 4内から土師器の甕を検出した。さらにその下から壺の胴部が逆さの状態出土した。その他出土物は小型土器2点(Po11, 12), 土錘2点, 軽石2点, 土師器, 種子などである。時期は遺物から長瀬II期と思われる。

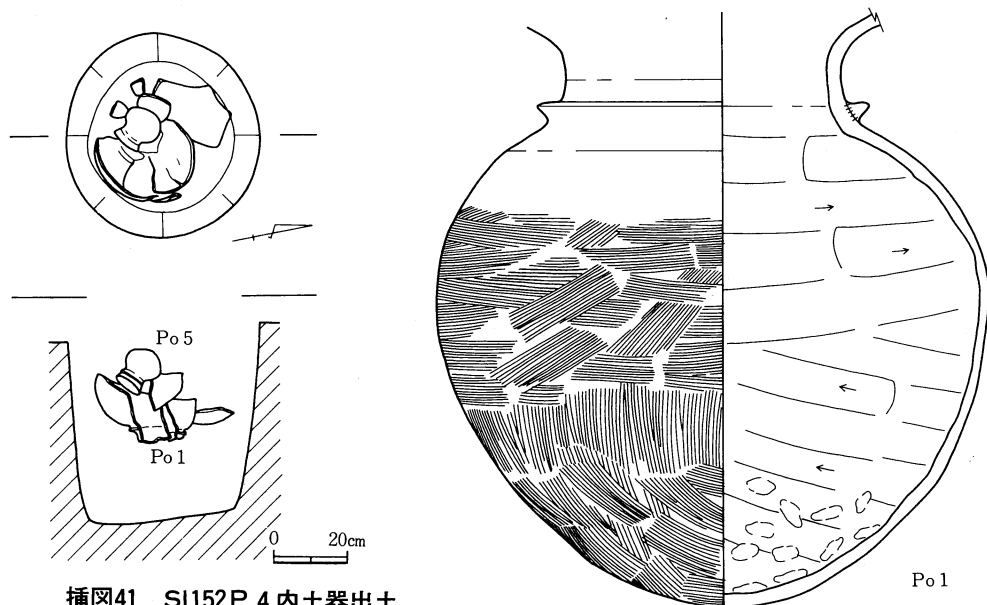


挿図40 S I 152 遺構図 (S = 1/80)

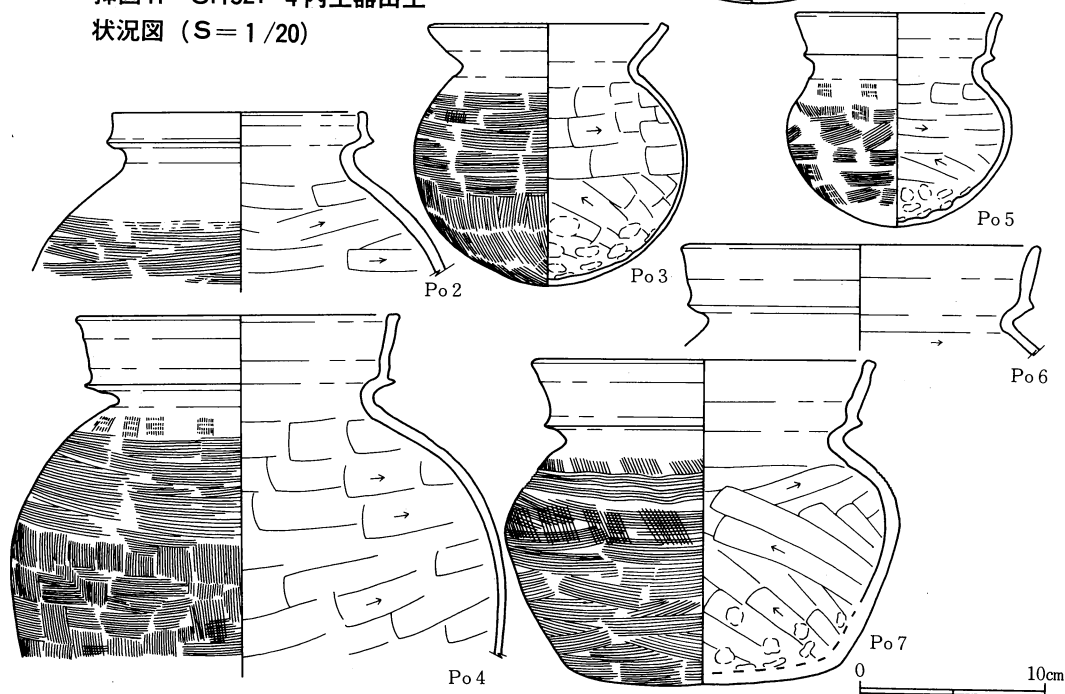
S I 153, 10C・SK01 (挿図44~49, 図版4.16)

10C地区の西隅に位置し、丁度24号墳の墳裾部に当たる。S I 153は北西側を24号墳の周溝に切られ南東側はS I 154を切っている。北東側は層的にはSK01を掘り込んで作られているが、SK01の床面の状況、位置関係、遺物からS I 153に伴う施設と思われる。

S I 153は主軸をN-54°-Eにとる方形プランの竪穴住居跡である。床面は長軸4.56m,

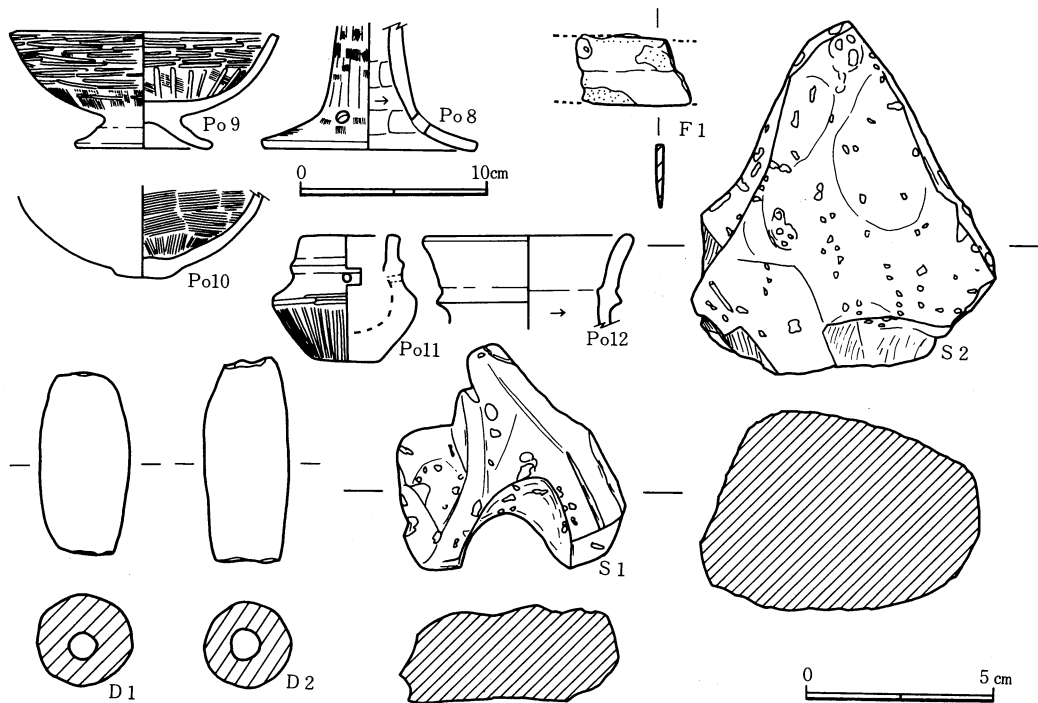


挿図41 SI152P 4内土器出土  
状況図 (S=1/20)



挿図42 SI 152遺物図その1 (S=1/4)

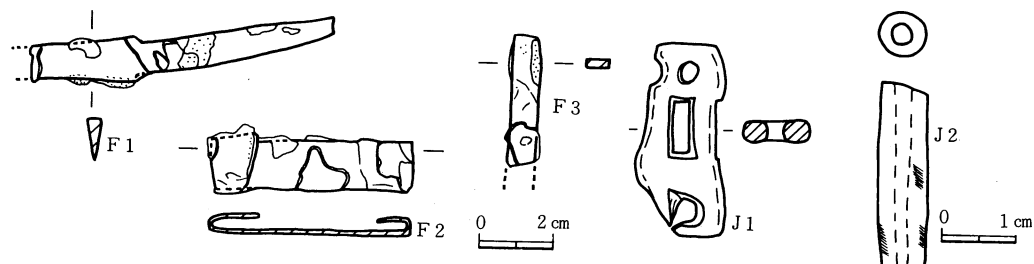




挿図43 S I 152遺物図その2 (土器S=1/4, 小型土器・鉄器・  
土錘・軽石S=1/2)

短軸3.92mを測り、床面積は17.9m<sup>2</sup>である。壁高は北側コーナーで最大値56cm, 北西側で最小値13cmを測る。床面よりS K01側に側溝(長さ3.6m, 幅0.44m, 深さ7~12cm) 1条とピットを6個検出した。その内柱穴はP 1 (42×43-56), P 2 (51×47-66), P 3 (49×47-66), P 4 (60×80-50) cmである。柱穴間距離はP 1より順に2.18, 2.10, 2.18, 1.84mを測る。P 5 (80×72-11) cmは埋砂, 場所的に特殊ピットの可能性がある。S K01は床面で長軸3.16cm, 短軸1.43cmを測り、床面積は4.52m<sup>2</sup>となる。床面にピットはないが壁際にはピットが2個ある。いずれもS K01より新しいものである。

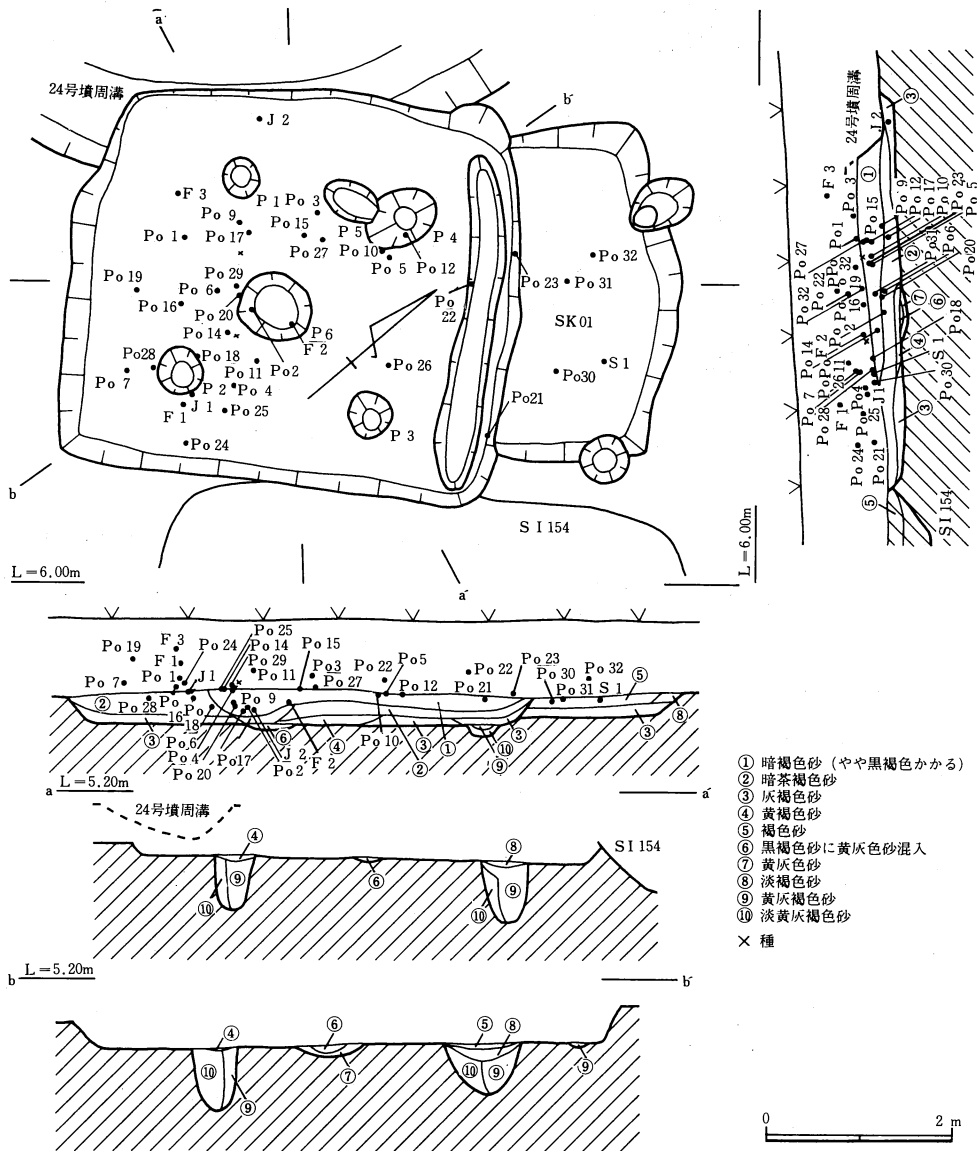
遺物は土師器が大部分であるが、種子、管玉(J 2), 異形の玉製品(J 1)も出土している。時期は長瀬III期であろう。



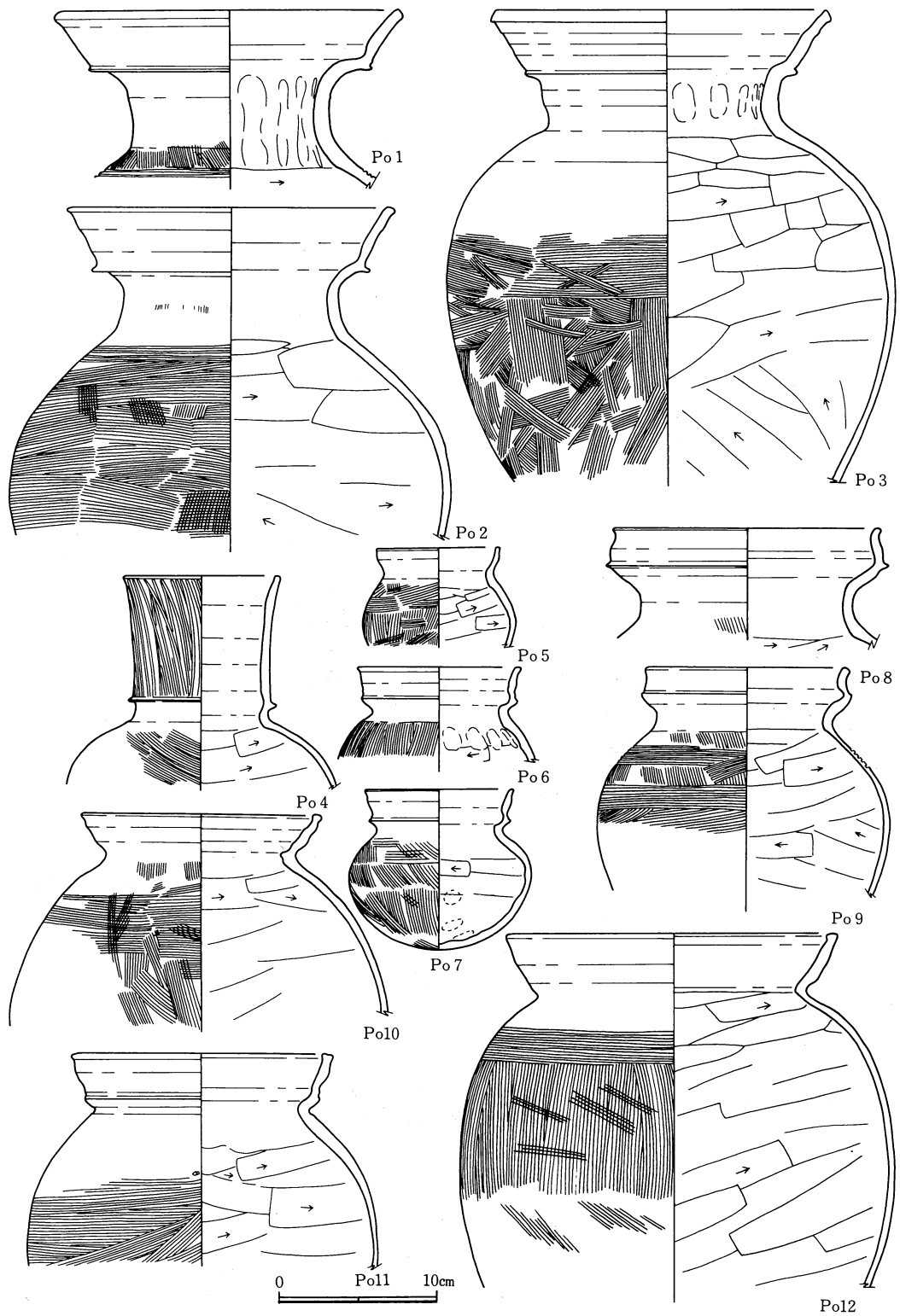
挿図44 S I 153遺物図その1 (鉄器S=1/2, 玉S=1/1)

S I 154, 10C・P30 (挿図50~57, 図版4・16・17)

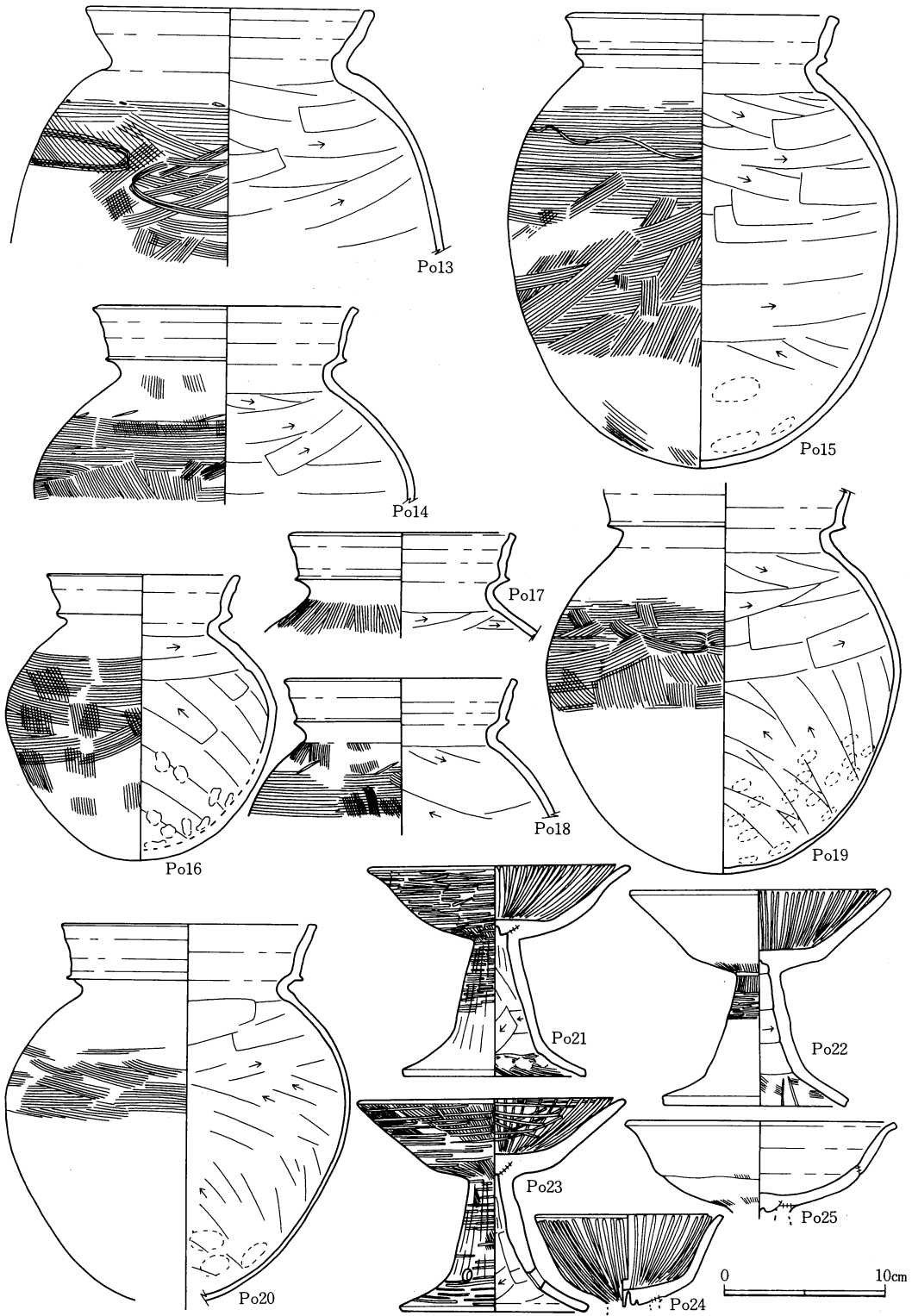
10C地区の中央やや西側に位置し、その北西側は、僅かではあるがS I 153と切り合う。周辺には北にS I 152, 東にS B 43, 西にS B 41, 南にS I 156, S B 37があるが、S B 37との間にも切り合いが認められる。その切り合い関係は古い順にS I 153, 154, S B 37である。平面形は長方形で、主軸をN-47°-Eにとる。コーナーは丸味を帯びる。床面の大



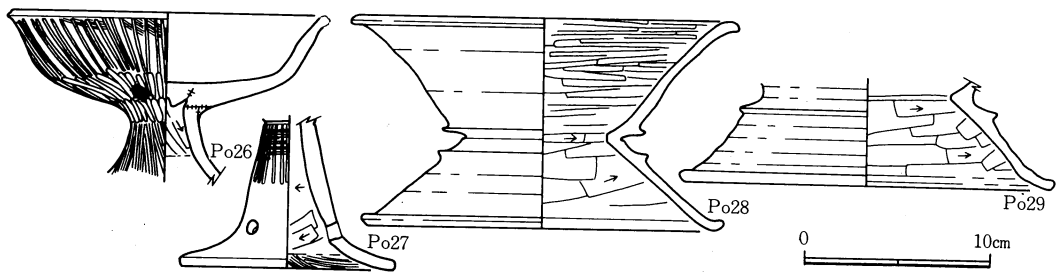
挿図45 S I 153 遺構図 (S = 1/80)



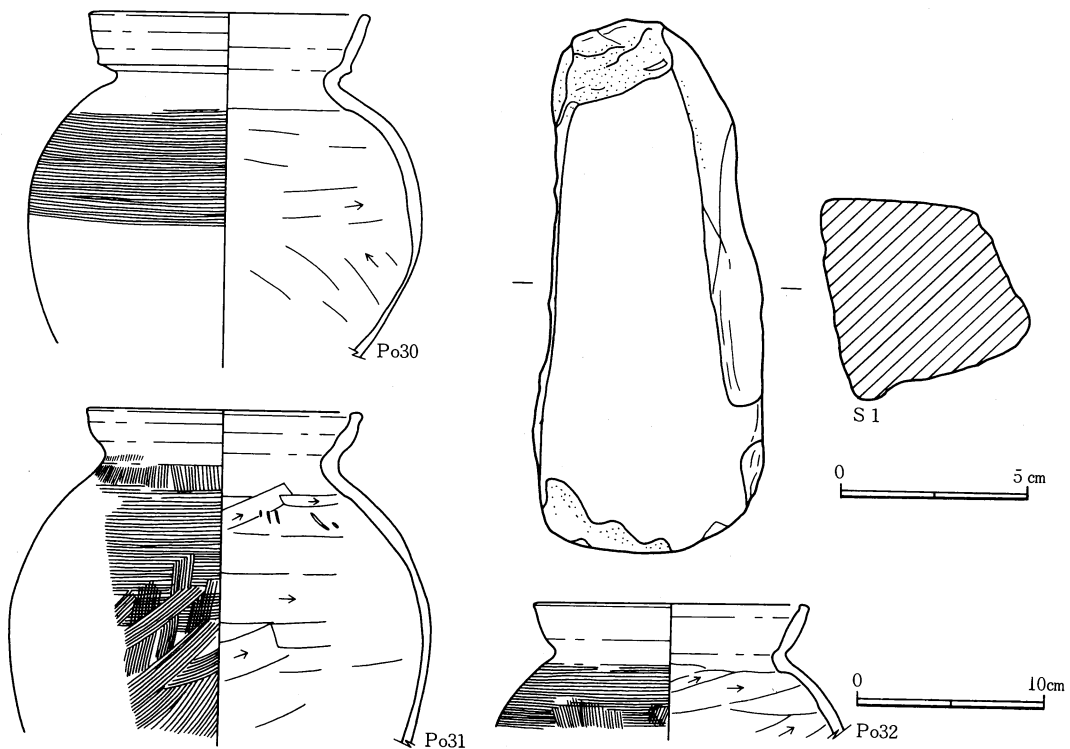
挿図46 SI 153遺物図その2 (S=1/4)



挿図47 S I 153遺物図その3 (S=1/4)

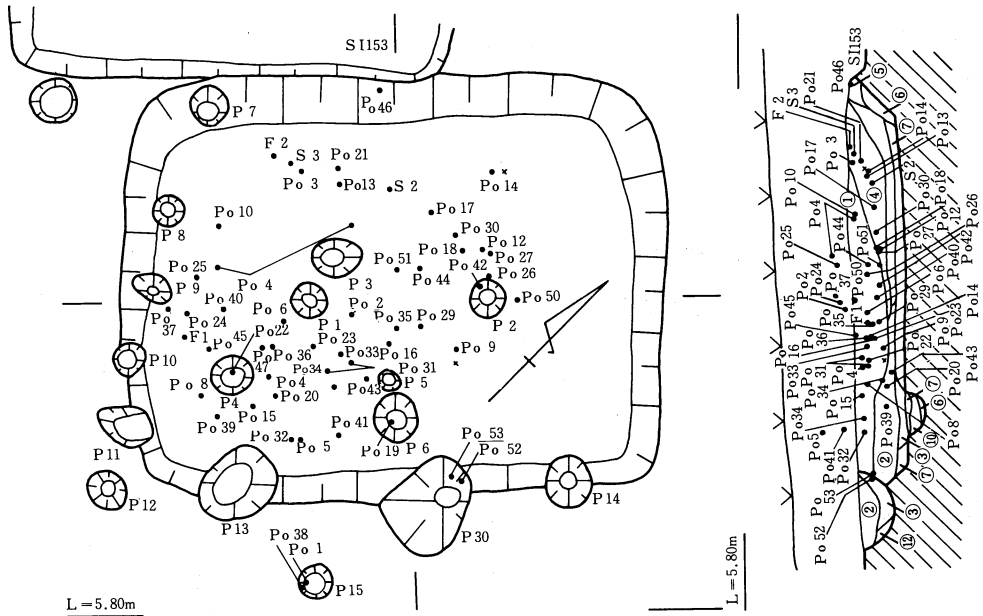


挿図48 S I 153遺物図その4 (S=1/4)



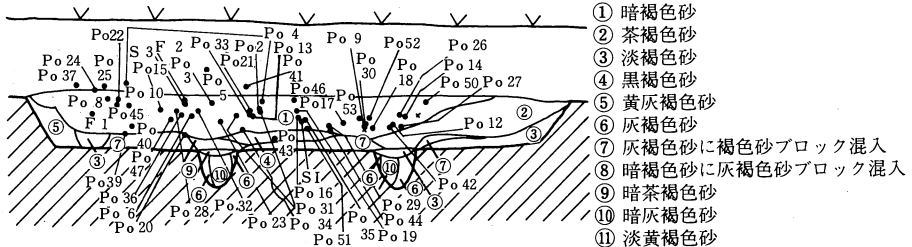
挿図49 10C・SK01遺物図 (土器S=1/4, 砥石S=1/2)

きさは長軸5.00m, 短軸3.68mを測る。床面積は18.4m<sup>2</sup>になる。壁高は西側で最大値56cm, 東側で最小値41cmを測る。床面よりピットを6個検出したが, 構造柱跡と思われるものはP 1 (39×37-34), P 2 (39×40-38) cmである。柱穴間距離は1.93mを測る。他の4個のピットの用途は不明である。ところでS I 154の西壁, および肩部にピットが6個, 南壁際に3個のピットがある。その内南側のP 13・14・30についてはS I 154埋没後掘られた可能性が強い。特にP 30 (109×89-57) cm内から半壊された小型丸底壺 (P 52) を両側に伴った状態で高坏 (P 53) が検出された。場所的, 時期的にS I 154とは無関係とは思われず, P 30はS I 154埋没後, それに対し何らかの祭祀的行為を行なった跡と推定される。西側のP 7~12については軸方向がややずれるがS I 154の補助柱的役割を果たすピットと思わ



L=5.80m

L=5.80m



- ① 暗褐色砂
- ② 茶褐色砂
- ③ 淡褐色砂
- ④ 黒褐色砂
- ⑤ 黄灰褐色砂
- ⑥ 灰褐色砂
- ⑦ 灰褐色砂に褐色砂ブロック混入
- ⑧ 暗褐色砂に灰褐色砂ブロック混入
- ⑨ 暗茶褐色砂
- ⑩ 暗灰褐色砂
- ⑪ 淡黄褐色砂
- ⑫ 暗黄褐色砂
- × 種

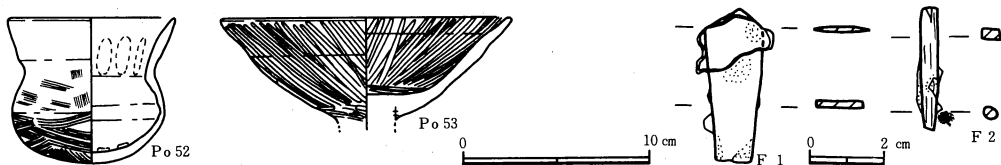
挿図50 S I 154 遺構図 (S = 1/80)

0 2m

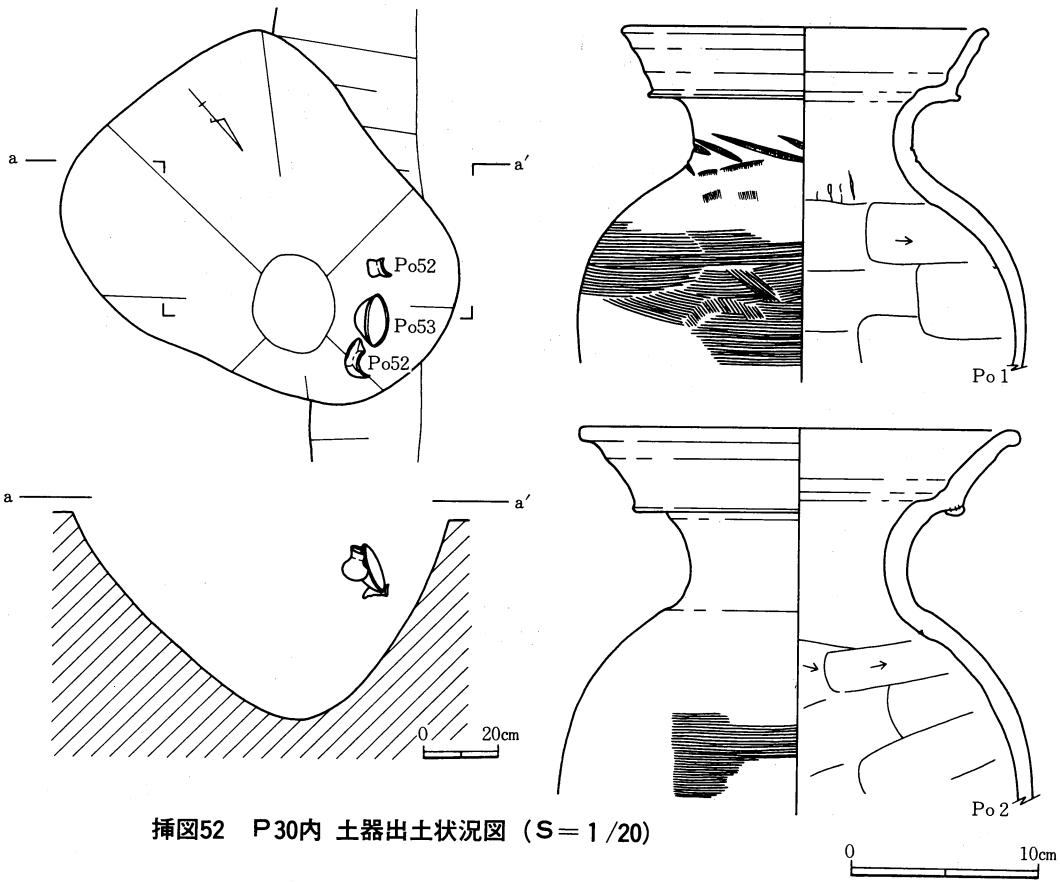
れる。また、P 15 (36×40-31) cmからは壺 (P<sub>0</sub>1) 高坏 (P<sub>0</sub>38) が出土している。これも S I 154 に関するピットと思われる。S I 154 からは壺、高坏がめだって出土している。壺 (P<sub>0</sub>3) はかなり大きなものである。時期は長瀬II期である。

S I 155 (挿図58~62, 図版4・17・18)

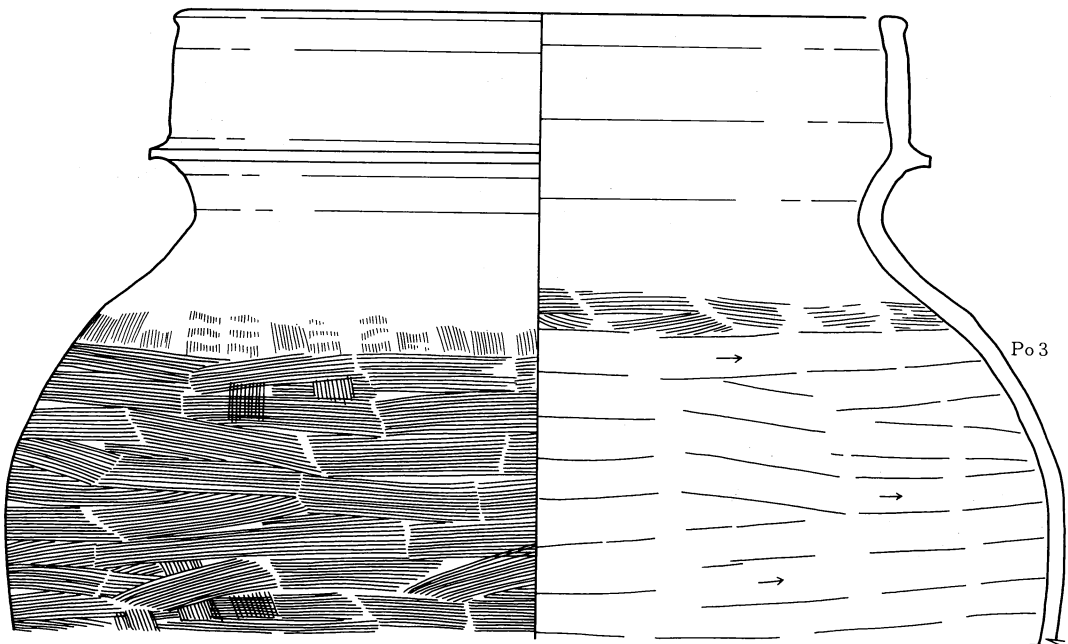
10B, 10C地区にまたがり S I 156と切り合っている。新旧関係は、S I 155の方が S I 156より新しい。平面形は正方形である。床面の大きさは5.3m四方で、床面積は28.1m<sup>2</sup>である。壁高は北西側で最大値41cm、北東側で最小値20cmを測る。主軸はN-30°-Wである。床面からピットは11個検出したが柱穴と思われるものはP 1~P 4の4個で、プラン



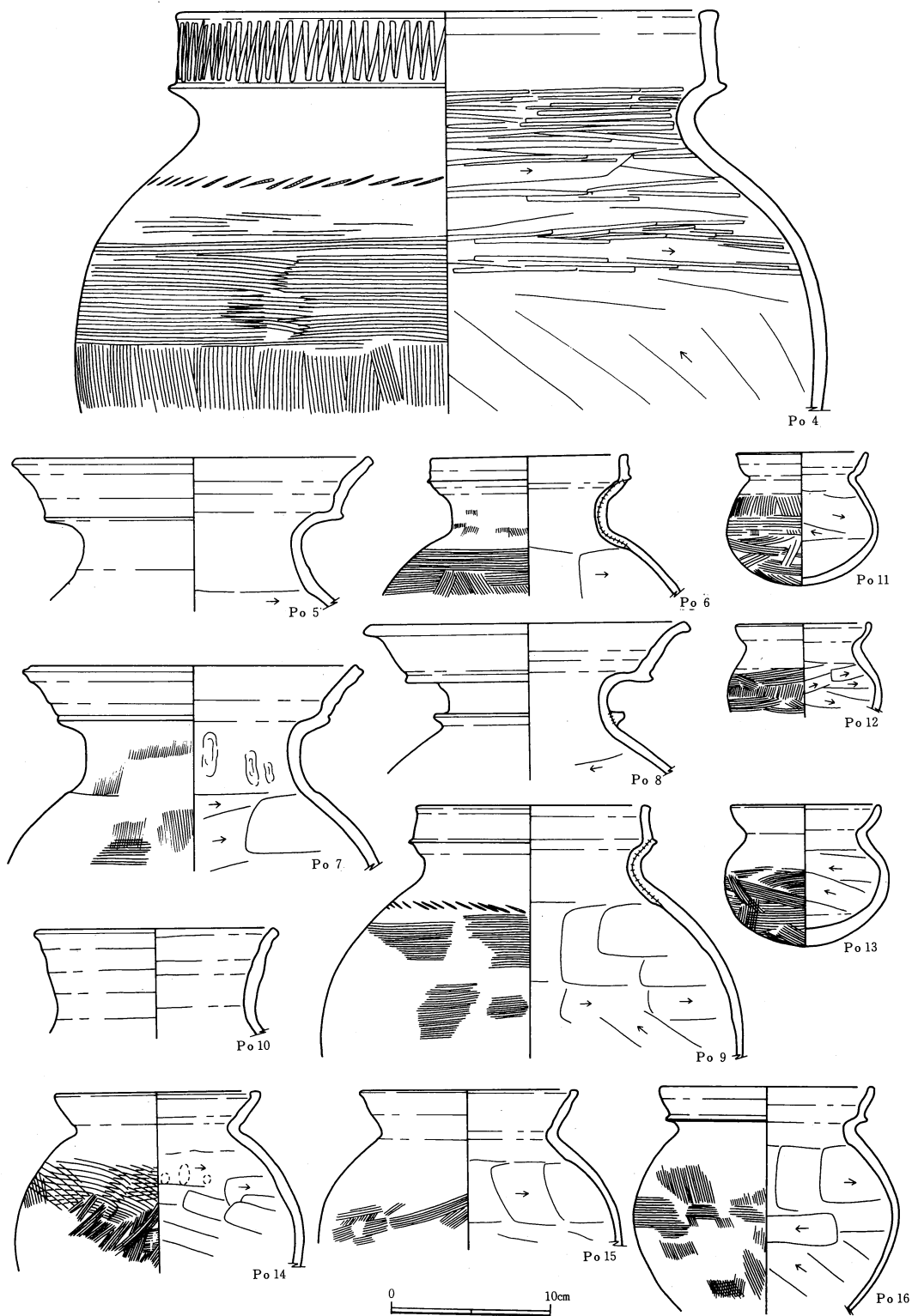
挿図51 S I 154 鉄器・P30土器図 (土器S = 1/4・鉄器S = 1/2)



挿図52 P 30内 土器出土状況図 (S = 1/20)

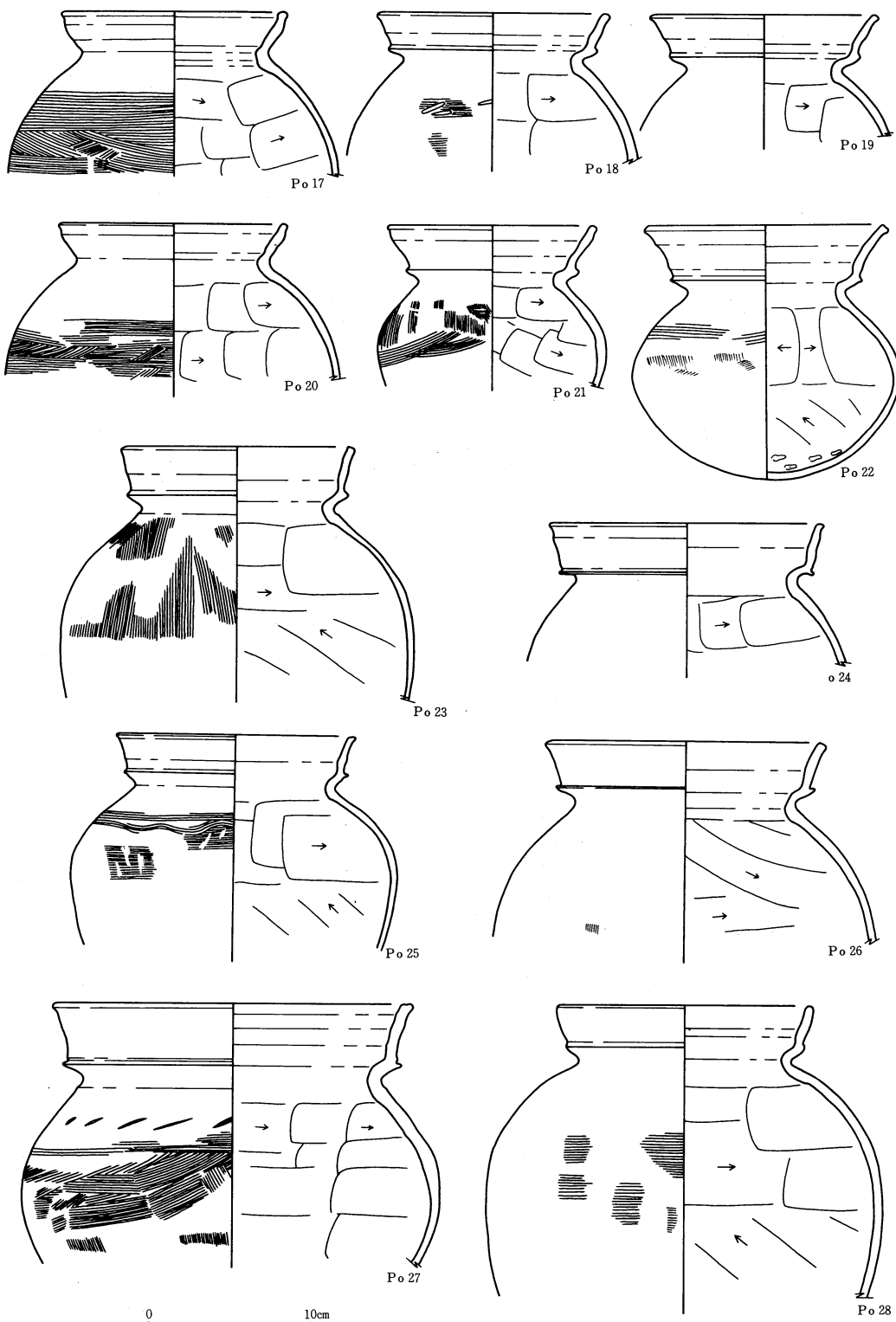


挿図53 SI 154遺物図その1 (S = 1/4)

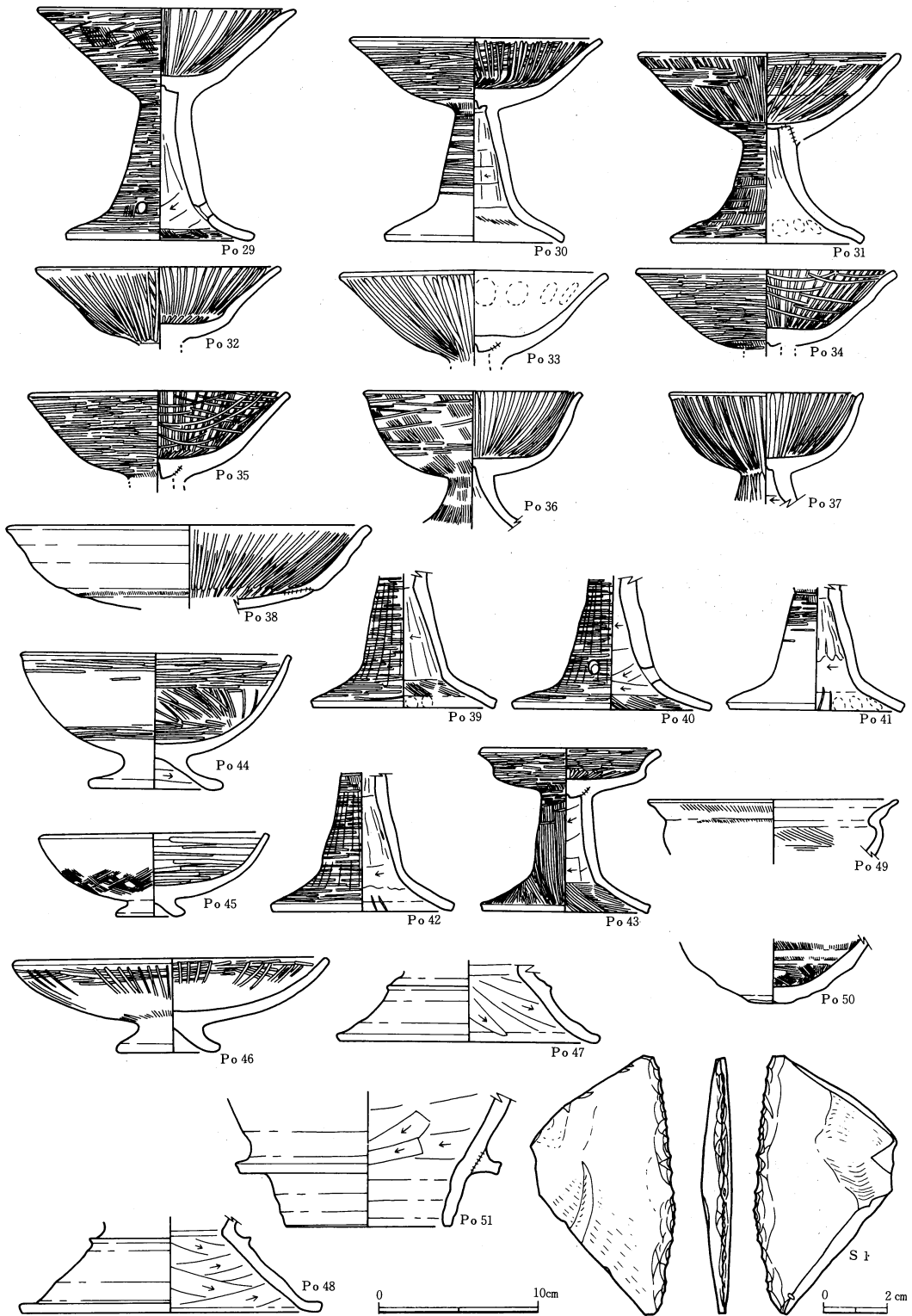


挿図54 S1154 遺物図その2 (S=1/4)

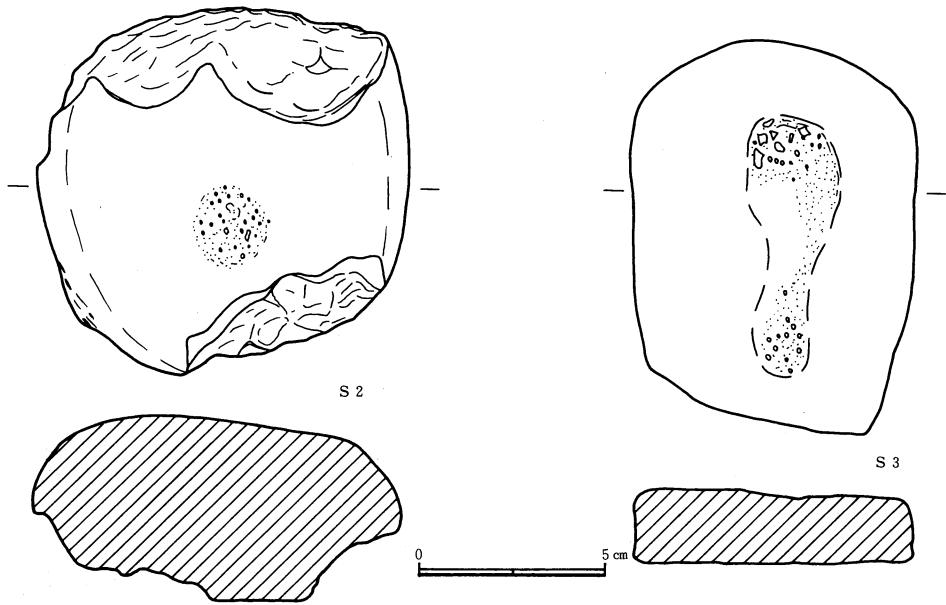




挿図55 S1154 遺物図その3 (S=1/4)

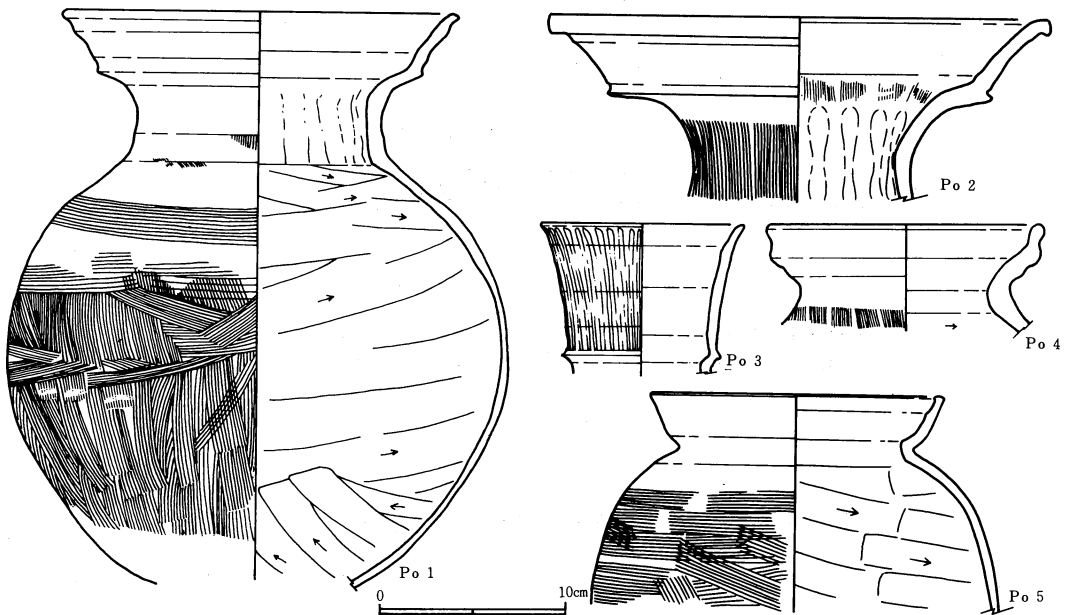


挿図56 S I 154 遺物図その4 (土器S = 1/4 · 石器S = 1/2)



挿図57 S1154 遺物図その5 (石器S=1/2)

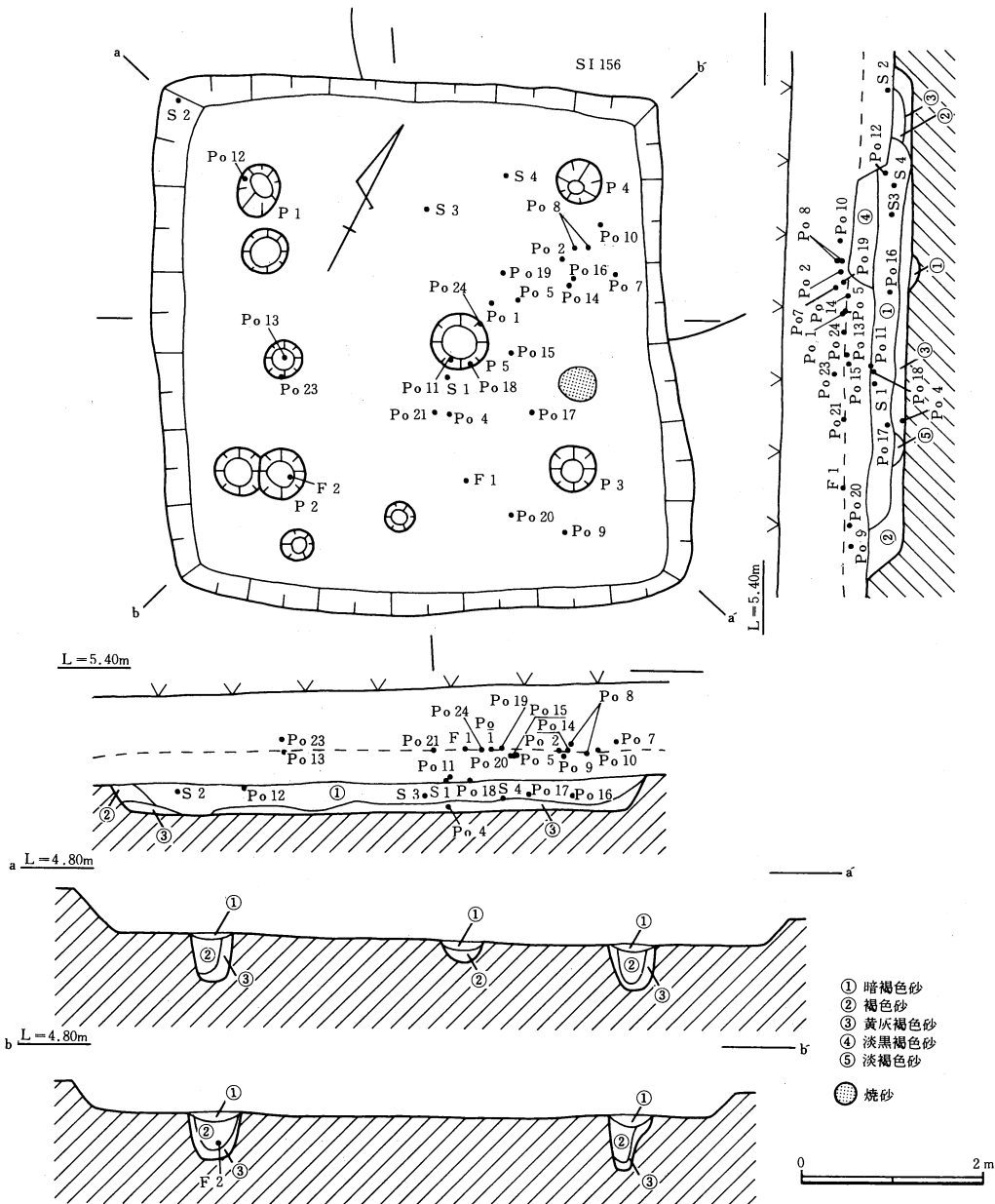
はP1 (57×49-52), P2 (56×50-52), P3 (53×52-52), P4 (49×48-60) cmである。柱穴間距離はP1-P2より3.2, 3.2, 3.2, 3.4mである。中央にあるP5 (62×61-22) cmは特殊ピットと考えられる。出土遺物は比較的多いが、床面より高いものが大半を占める。P2から釣針(F2)が出土していることは特筆されよう、時期は低いレベルの遺物より長瀬II期と思われる。



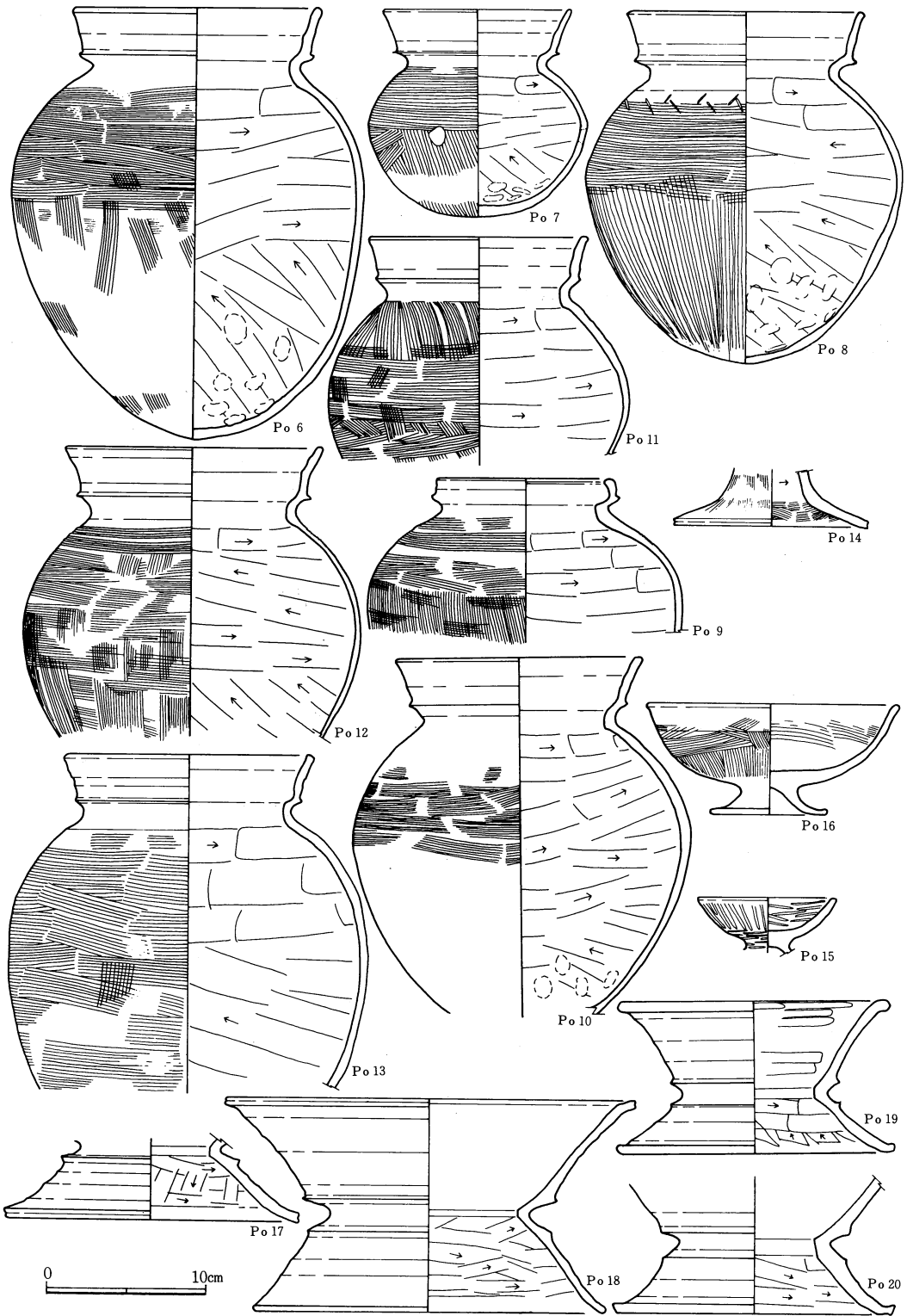
挿図58 S1155 遺物図その1 (S=1/4)

S I 157 (挿図63, 図版4)

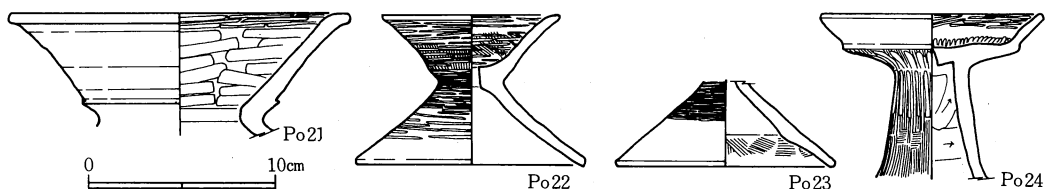
10D地区南西区にあり, S I 149の南, 86号墳の東に位置する。S I 150と切り合うが, 新旧関係はS I 150の方が古い。東側は調査区域外のため未調査であり, コーナーの部分のみを検出した。調査部分がわずかであるが, 壁面の傾斜角度, 肩の高さ, 床面の安定性, ピットの深さ等から竪穴住居跡と考えた。平面形は方形を呈するものと思われる。床面から柱穴と思われるP 1 (56×?-32) cmを検出した。遺物はほとんど出土していない。



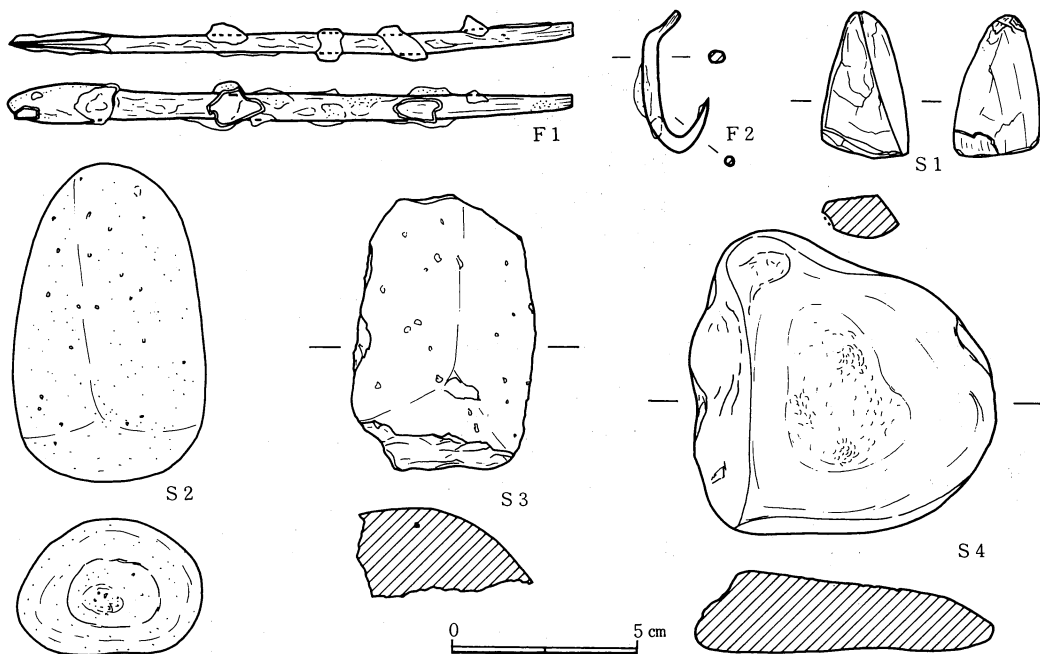
挿図59 S I 155遺構図 (S = 1/80)



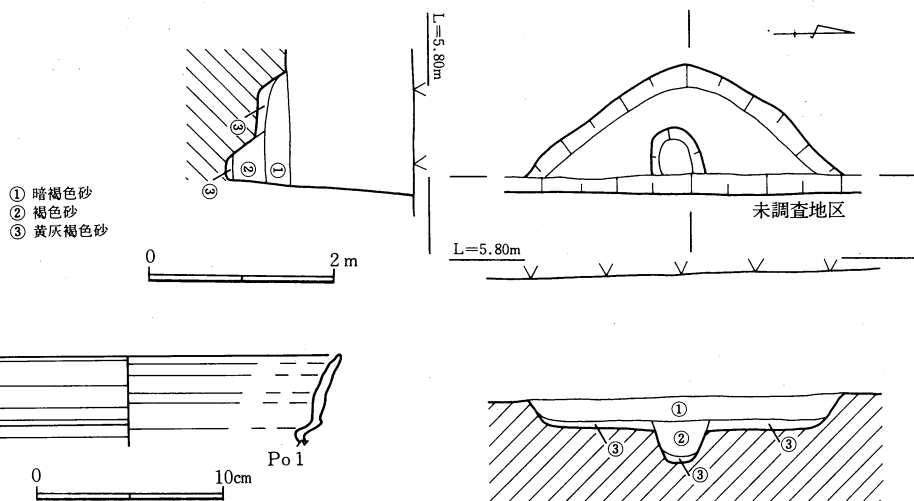
挿図60 S I 155 遺物図その2 (S = 1/4)



挿図61 S I 155遺物図その3 (S=1/4)



挿図62 S I 155遺物図その4 (鉄器・石S=1/2)



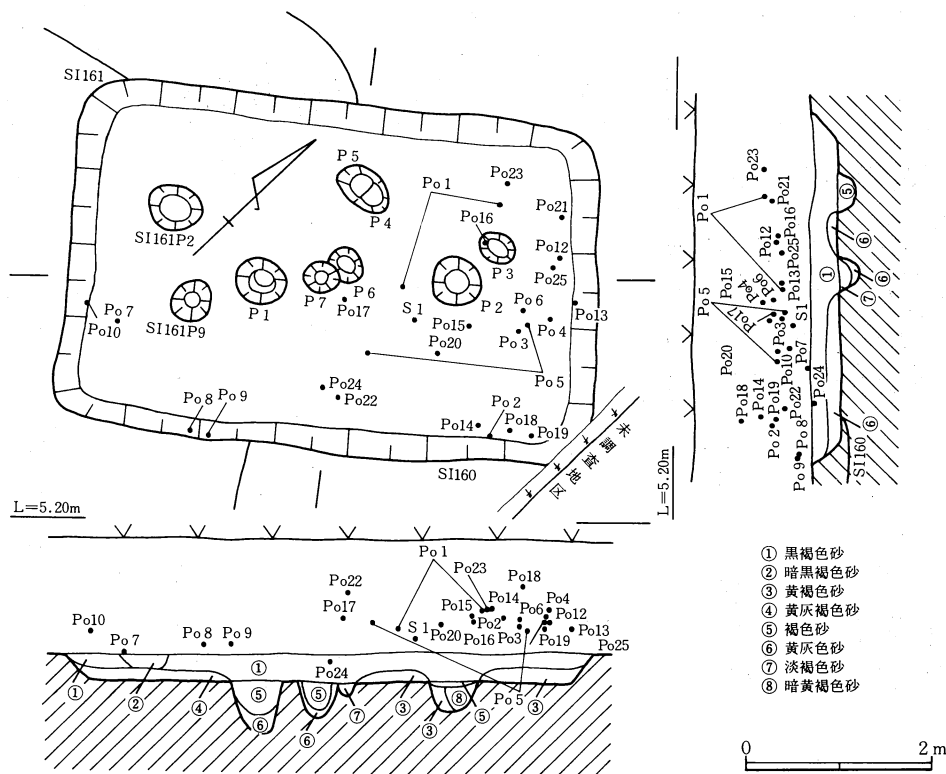
挿図63 S I 157遺構・遺物図 (遺構S=1/80, 土器S=1/4)

S I 159 (挿図64~66, 図版5・18)

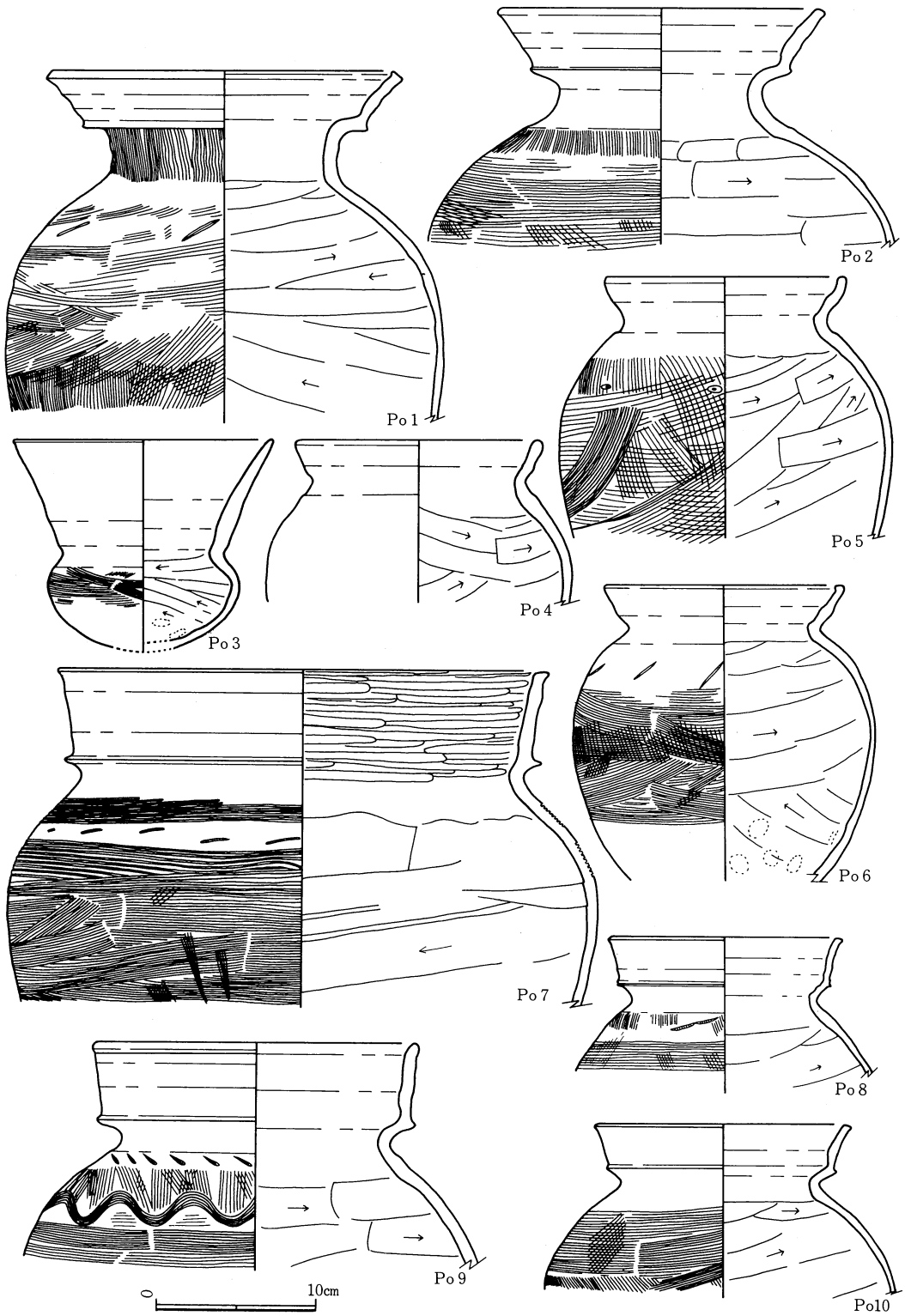
9 C南西区にあり, S I 151の南西, S I 156の東に位置する。9 C南西区の住居跡群の中で最も新しい。平面形は長方形を呈する。床面の大きさは長軸5.1m, 短軸3.24mを測り, 主軸をN-46°-Eにとる。床面積は約16.5m<sup>2</sup>である。壁高は西側で最大値31.2cm, 北側で最小値18.5mを測る。側溝はみられない。ピットは床面で9個検出したが柱穴はP 1とP 2である。プランはP 1が(58×48-34) cm, P 2が(56×52-34) cmで, 柱穴間距離は3.1mを測る。他のピットの用途は不明である。遺物は床面から約70cm上方よりかなりの土器が出土している。S I 159の埋没中あるいは埋没後の遺物であろう。時期は遺物より長瀬II期と思われる。

S I 160 (挿図67, 図版5・18)

9 C南西区にあり S I 151の南, S I 156の東に位置し, S I 159, 161と切り合う。S I 159が新しく, S I 161が古い。東側は調査区域外のため未調査であるが平面形は方形を呈すると思われる。床面の規模は不明である。主軸はN-31°-Wにとる。ピットは床面で4個検出したが柱穴と思われるものはP 1とP 2である。プランはP 1が(56×52-28) cm, P 2が(44×?-44) cmで柱穴間距離は2.00mを測る。柱穴の配置から4本柱と思われる。他のピットの用途は不明である。遺物は, 紡錘車2個体, 線刻のある軽石1点, 石斧1点

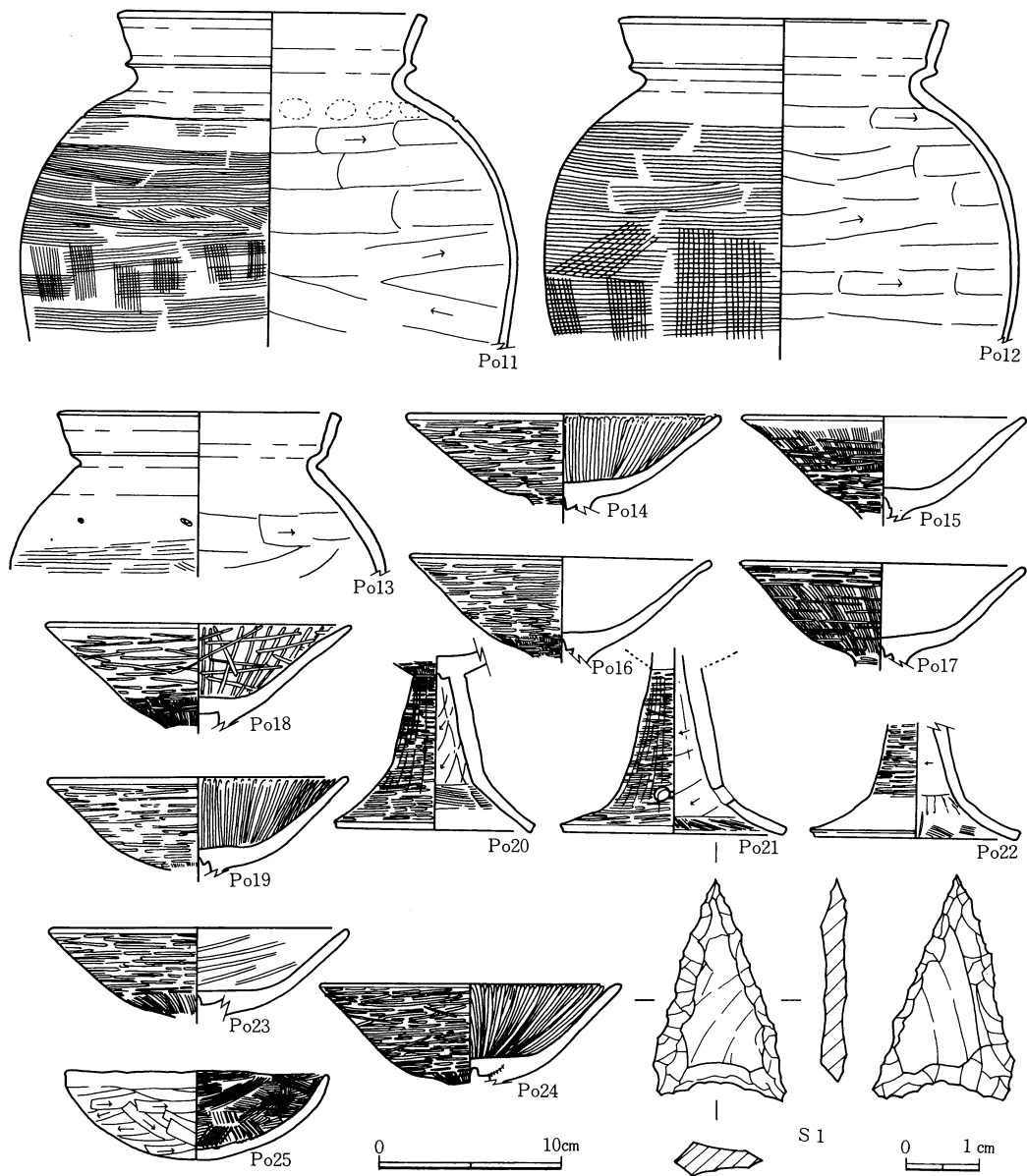


挿図64 S I 159遺構図 (S=1/80)



挿図65 SI 159遺物図その1 (S=1/4)



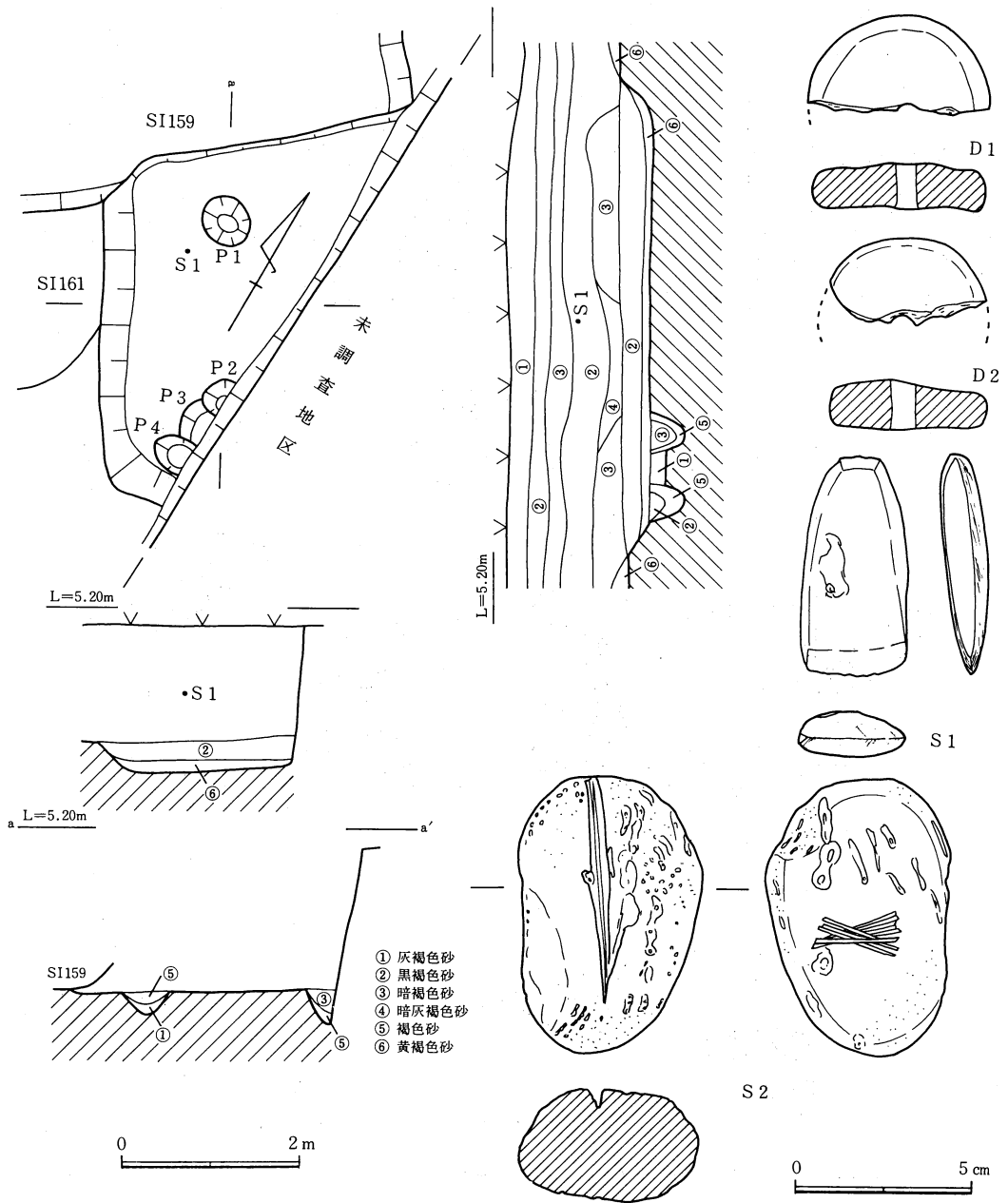


挿図66 S I 159遺物図その2 (土器S=1/4, 石鏃S=1/1)

が出土している。土器は土師器片が出土しているが図化できなかった。

S I 161, 10C, S K 11, S K 12 (挿図68~71, 図版5・18)

10C地区南東区, 9C地区南西区にまたがり, S I 155の東に位置し, S I 159, 160, 162, S K 11, S K 12と切り合っている。新旧関係は, S I 159, 160が新しく, S I 162と10C・S K 11, S K 12が古い。平面形は方形を呈すると思われる。床面の大きさは, 長軸5.32m, 短軸4.80mを測る。床面積は25.5㎡になろう。側溝はみられない。ピットは床面で28個を検出し, また, S I 159内からS I 161と関係するピットを1個検出した。構造柱の柱穴は,



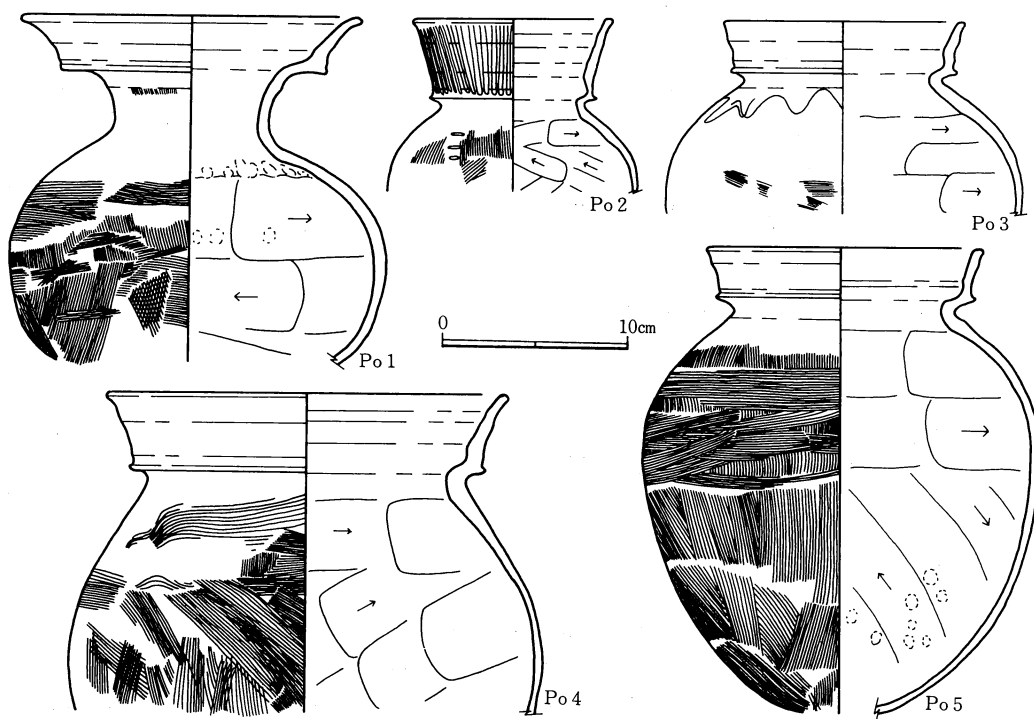
挿図67 SI 160遺構・遺物図 (遺構 S = 1/80, 土製品・石 S = 1/2)

やや歪になるが P 1 ~ P 4 とされる。プランは P 1 から順に (44×40-48), (56×48-24), (63×60-56), (56×56-42) cm で、柱穴間距離は P 1 - P 2 から 2.56, 3.04, 2.26, 2.28m を測る。P 5 は特殊ピットの可能性もある。他のピットの用途は不明である。遺物は、かなり多く出土しているがほとんど上面である。土器類の他に鉄器 (F 1, 2) と紡錘車 (D 1) が出土している。時期は遺物より長瀬 II 期の古い段階と考えられる。S K 11,

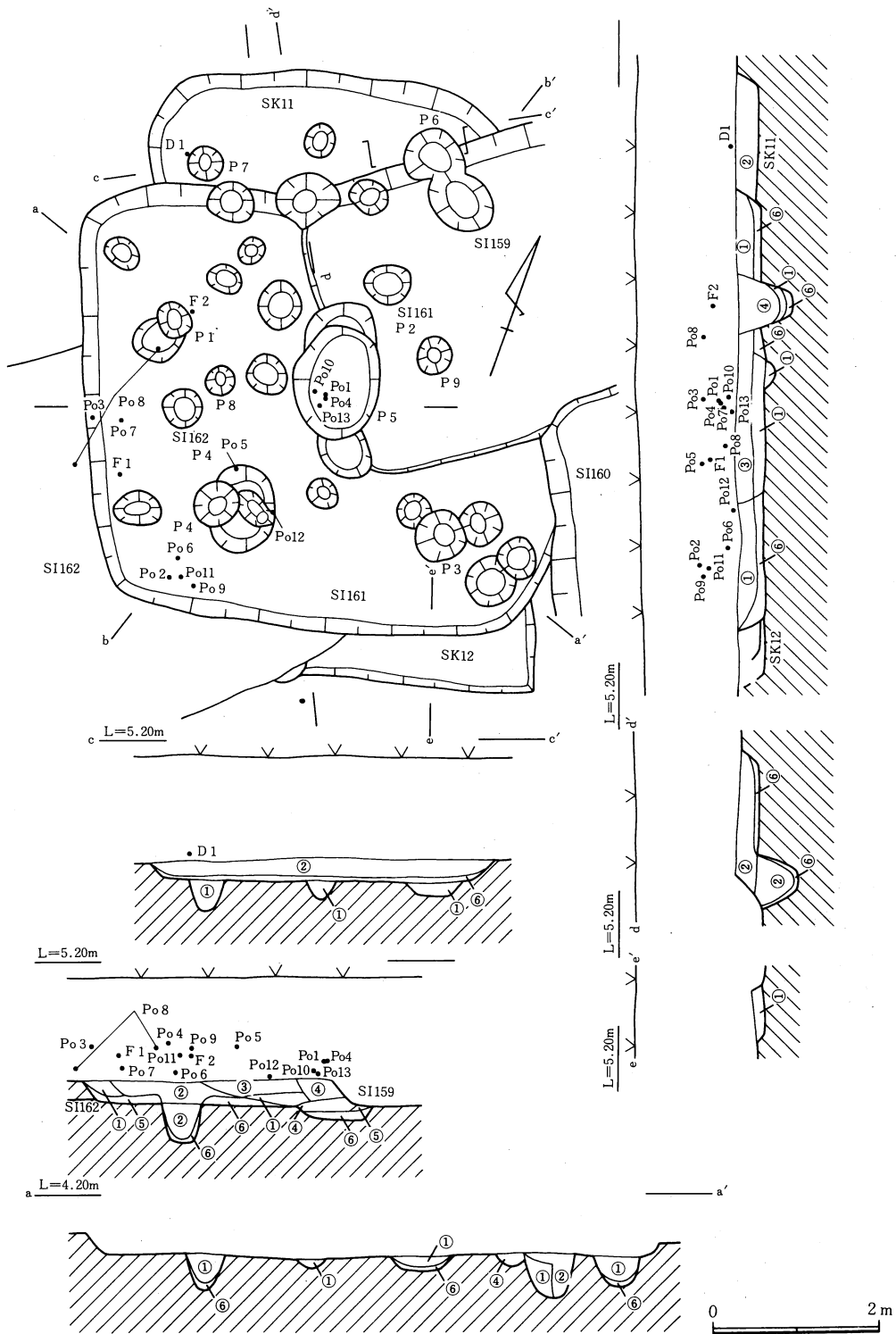
12は、コーナーが直角気味になっていることから方形を呈するものと思われる。SK11については、コーナーにP 6 (70×60-18) cm, P 7 (42×42-40) cmを検出した。平面的に見ればP 8 (36×34-13) cm, P 9 (46×42-16) cmが対応し、4本柱の住居跡と思われるが、P 6, P 8, P 9は浅く柱穴と考え難い。そのため住居跡の可能性もあるが土坑とした。SK12は、SI 161, 162によって切られ、コーナーの部分だけ検出した。SK12に関係すると思われるピットは検出できなかった。用途は不明である。SK11は、SI 159, 161より古く長瀬II期以前、SK12は161, 162より古く長瀬II期以前のものだろう。

S I 162 (挿図72~74, 図版5・18・19)

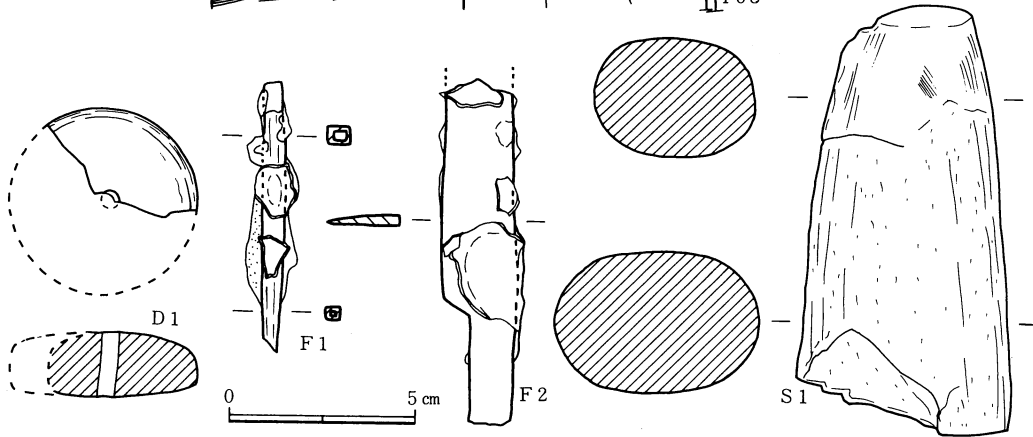
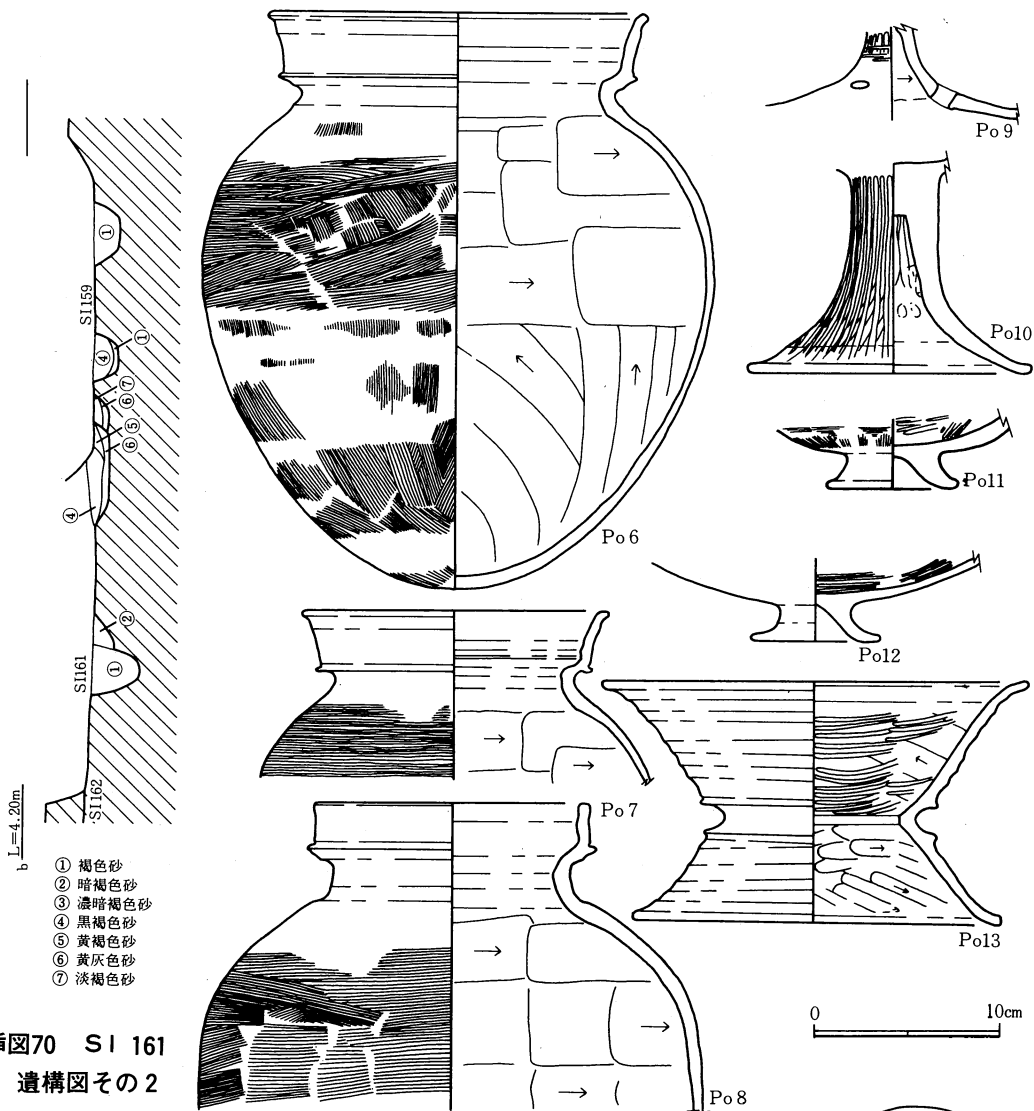
10C南東区, 10B北東区にまたがり, SI 155の東に位置する。SI 161と切り合っている。新旧関係はSI 161が新しい。平面形は方形を呈するものと思われる。床面の大きさは北西-南東で4.52mを測るが南西-北東はSI 161に切られているため不明である。主軸はN-38°-Wをとる。残存する壁高は西側で最大値28.0cm, 南東側で最小値8.9cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で4個検出し、また、SI 161内からSI 162に伴うと考えられるピットを3個検出した。構造柱の柱穴と考えられるものは、P 1~P 4の4個である。プランはP 1から順に(48×46-49), (44×40-51), (60×50, 51), (46×34-46) cmで柱穴間距離はP 1~P 2から2.26, 2.16, 2.20, 2.30mを測る。P 5は場所的にみて



挿図68 SI 161遺物図その1 (S=1/4)



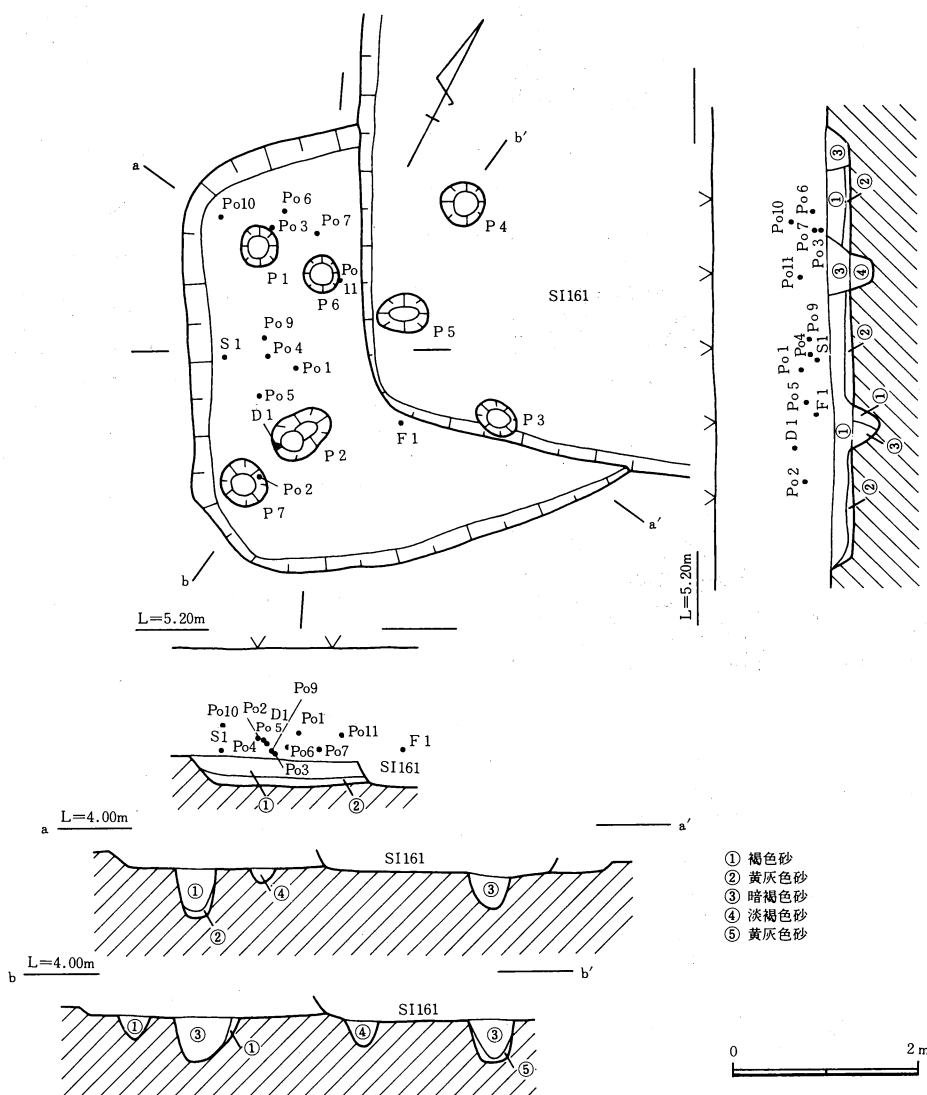
挿図69 S1161遺構図その1 (S=1/80)



特殊ピットであろう。他のピットの用途は不明である。遺物は、上面から多くの土器が出土した。S I 161の壺(Po 8)の破片半分が当住居からも出土している。土器類の他に土玉(D 1)が出土している。時期は遺物より長瀬II期と考える。

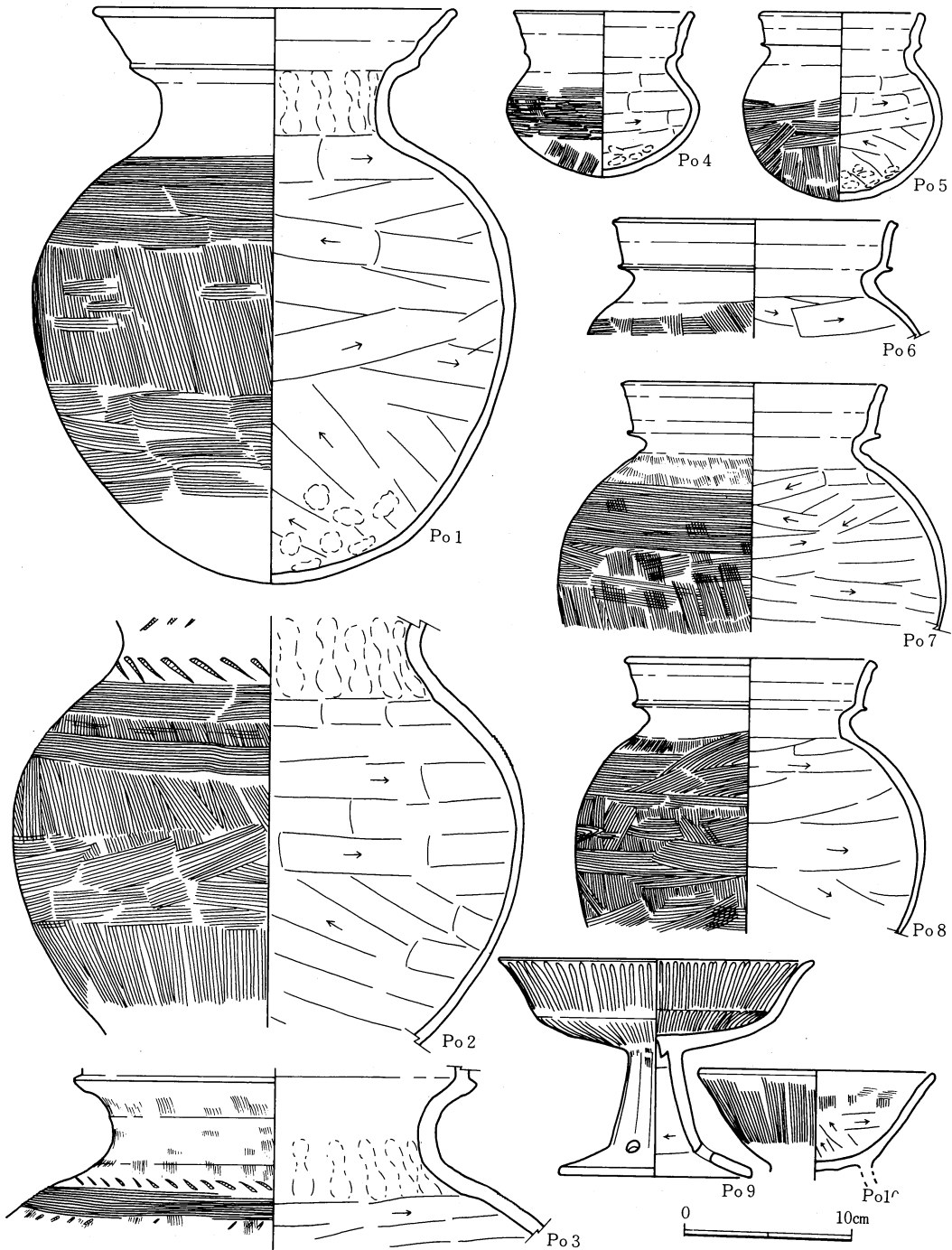
S I 163 (挿図75~79, 図版6・19)

9 B地区と10 B地区にまたがり、89号墳の北にある。多くの住居が切り合う中で、最も南側で検出された。S I 165, 166と切り合っており、新旧関係はS I 163が新しい。平面形は、やや歪な長方形である。床面の大きさは長軸4.28m, 短軸3.56mで、床面積は15.2m<sup>2</sup>である。主軸はN-49°-Eである。壁高は南西側で最大値36cm, 北東側で最小値28cmである。ピットは床面より4個検出されたが、柱穴はP 1 (56×52-36) cmとP 2 (48×48-

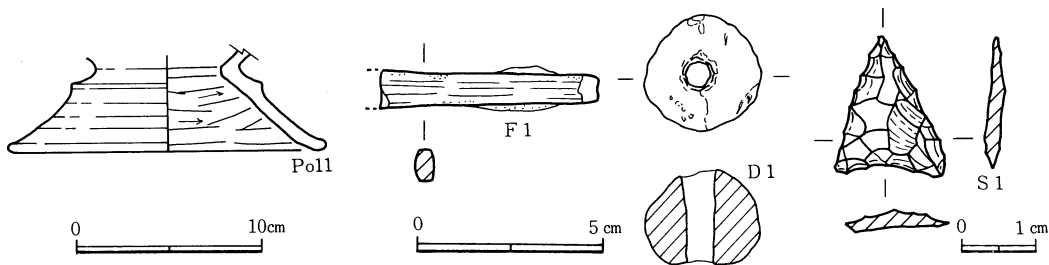


挿図72 S I 162遺構図 (S = 1/80)

32) cmの2本柱と考えられる。柱穴間距離は1.92mである。床面には特殊ピットと考えられるものは検出されず、他のピットの用途は不明である。遺物には土師器に混って管玉未製品2個、鉄製品、砥石、小型石斧、磨石、コシキ形土器2個体がある。その他、<sup>フイゴ</sup> 鞆の羽



挿図73 SI 162遺物図その1 (S=1/4)

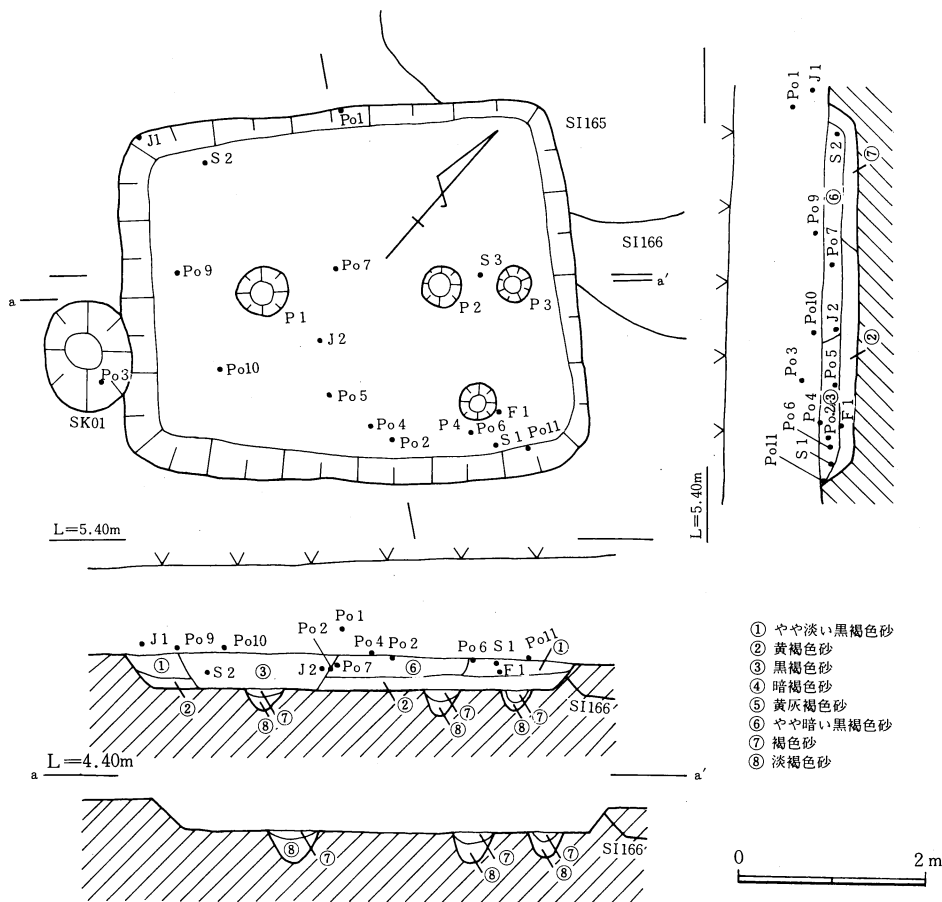


挿図74 SI 162遺物図その2 (土器S=1/4, 鉄・土製品S=1/2,  
石鏃S=1/1)

口が床面近くより出土している。長瀬高浜遺跡では2個目の出土である。羽口は漏斗状に開いており、細く、炉で火を受ける側はガラス状になっている。住居跡内で炉に関連するものは羽口のみでその他の出土はない。時期は遺物により長瀬Ⅲ期と考える。

SI 164 (挿図80・81, 図版6・19)

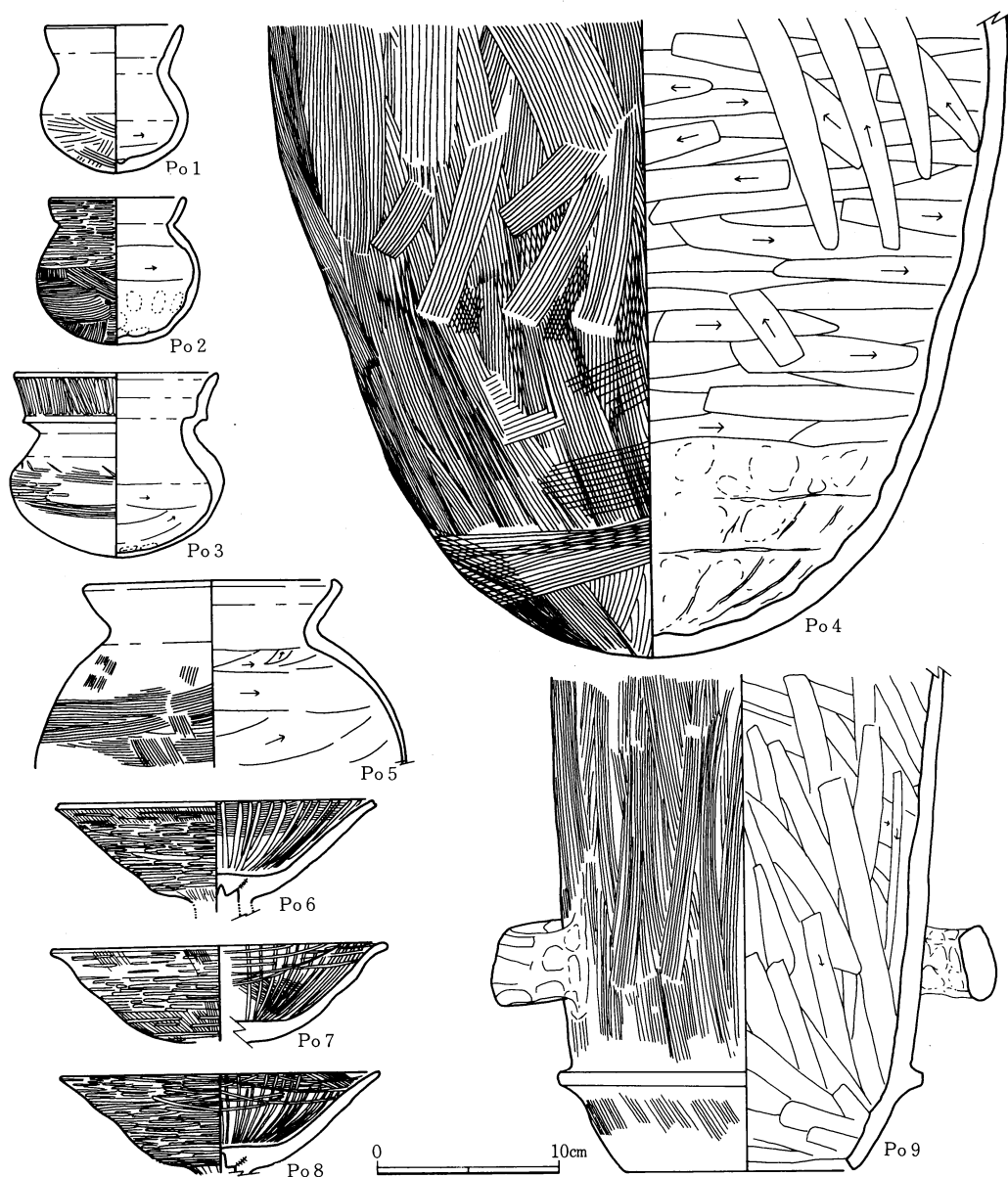
10Bの北東区にありSI 165の西, SI 155の南東に位置する。平面形は方形を呈し、南



挿図75 SI 163遺構図 (S=1/80)

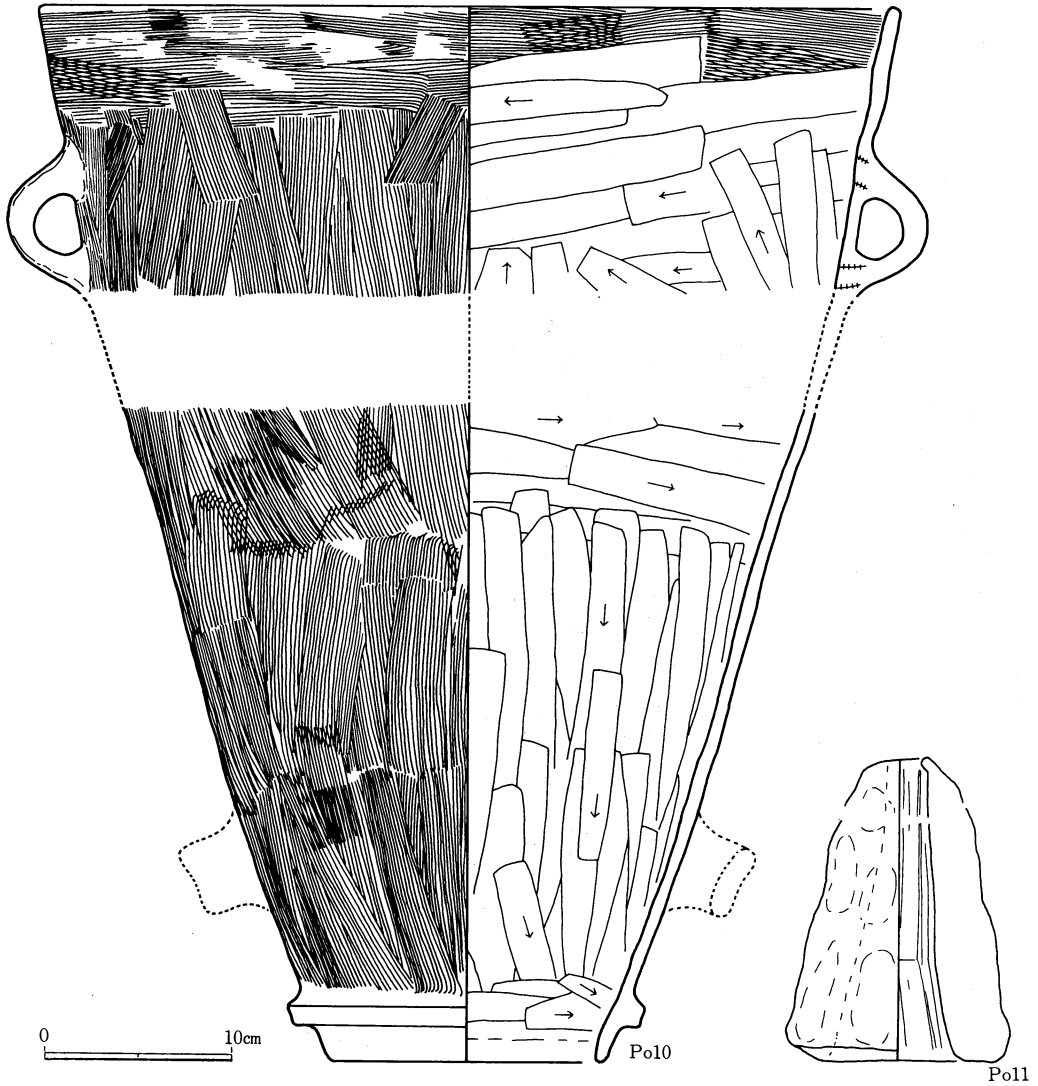


側コーナーがやや歪である。床面の大きさは長軸3.40m, 短軸2.80mを測り, 主軸はN-40°-Wである。床面積は9.52m<sup>2</sup>になる。壁高は西側で最大値39cm, 北東側で12cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で8個検出したが構造柱の柱穴と考えられるものはP1~P4の4個である。プランはP1から順に(48×44-40), (44×40-40), (48×44-36), (52×52-37) cmで, 柱穴間距離はP1-P2から1.86, 1.52, 1.96, 1.44mを測る。他のピットの用途は不明である。西側コーナー付近で口縁部を下にした甕(Po3)が出土している。甕の底部は壊れ, その壊れた部分を塞ぐような状態で甕(Po2)が同じように口

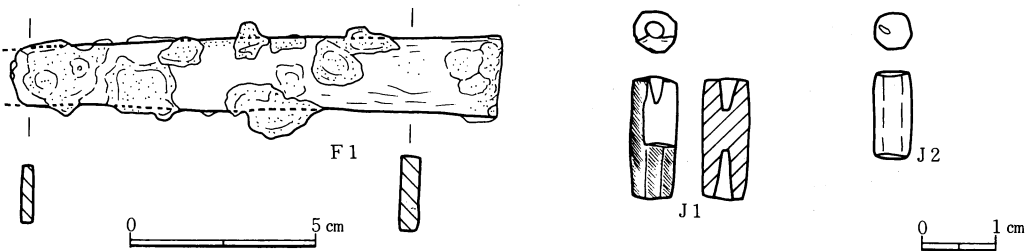


挿図76 SI 163遺物図その1 (S=1/4)

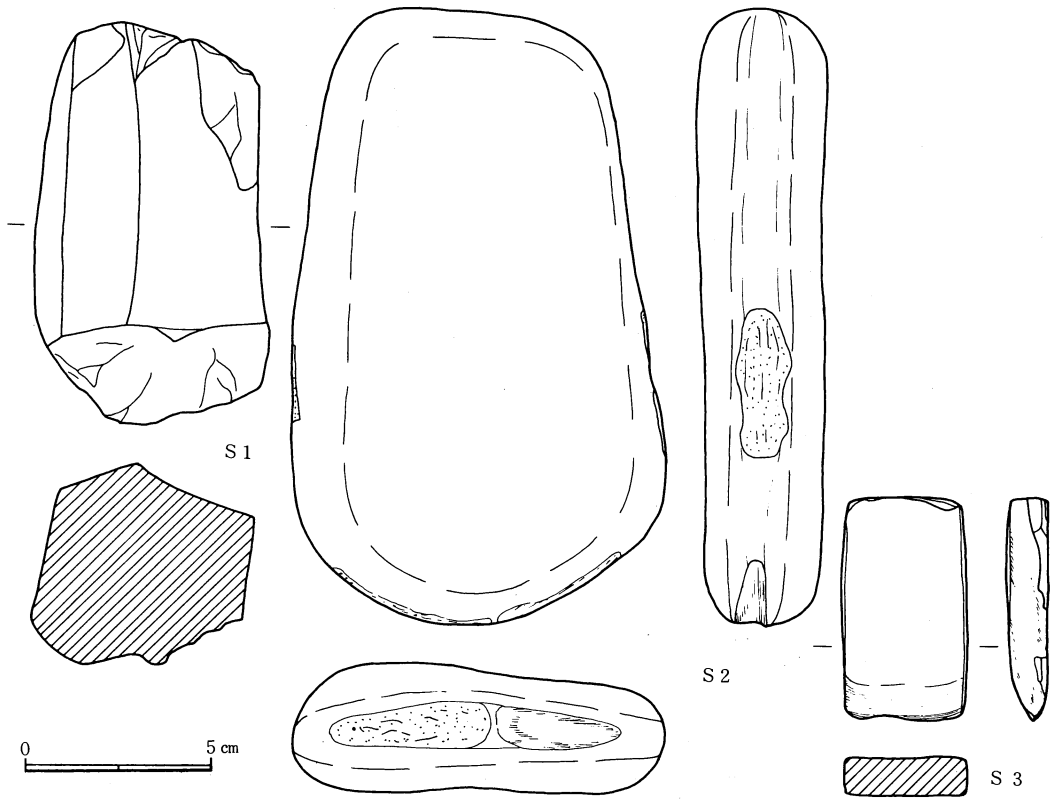
縁部を下にして検出された。時期は遺物より長瀬 I 期と考えられる。



挿図77 SI 163遺物図その2 (S=1/4)



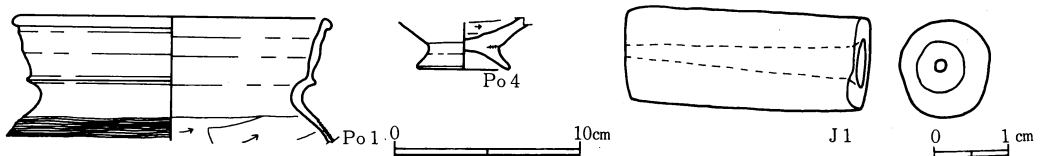
挿図78 SI 163遺物図その3 (鉄器S=1/2, 玉S=1/1)



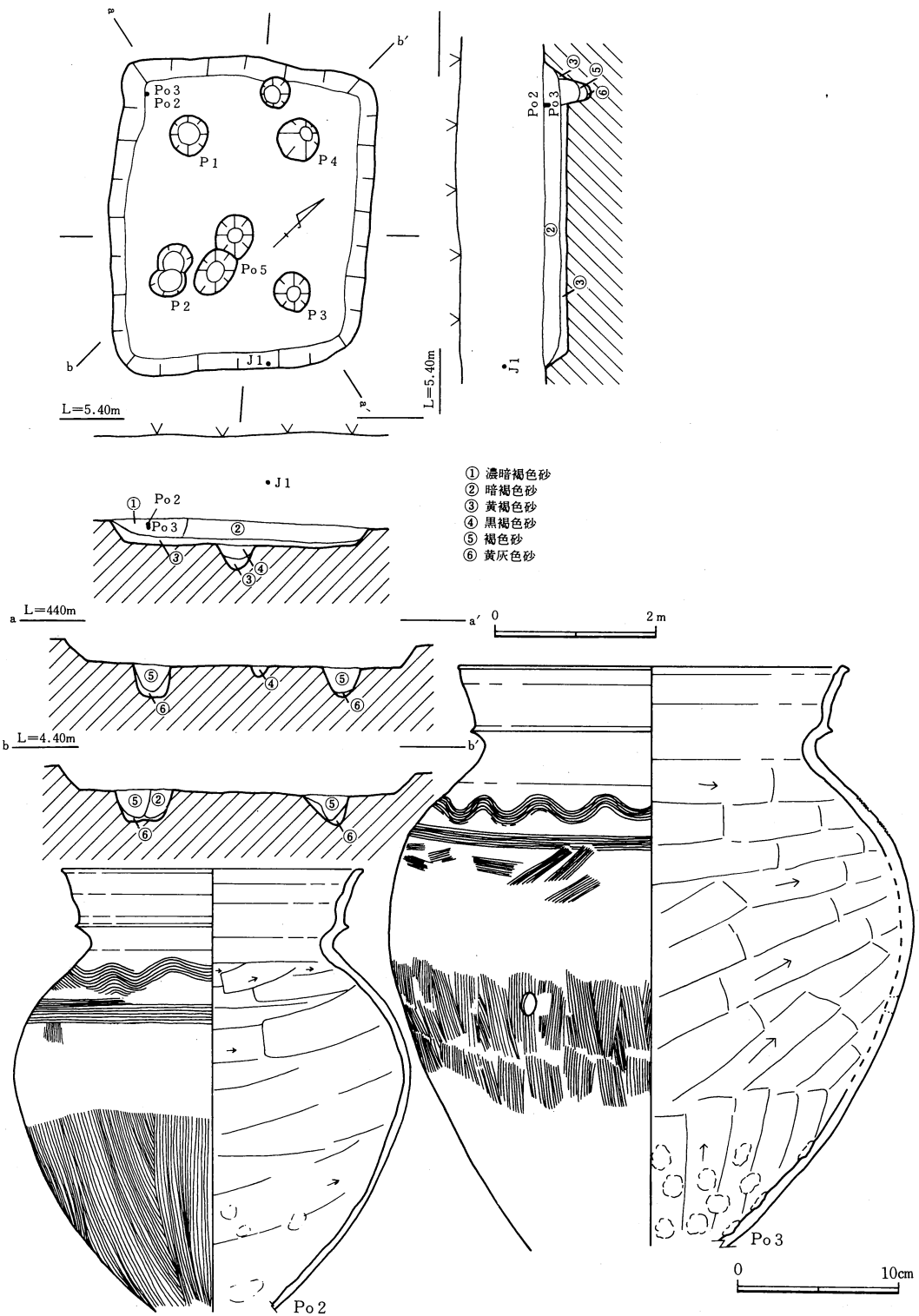
挿図79 S I 163遺物図その4 (石S=1/2)

S I 165 (挿図82・83, 図版6・19)

9 B地区と10 B地区にまたがり, S I 163とS I 166と切り合っている。竪穴住居跡の輪郭がなかなか出ず, 相当に掘り下げられた後の検出となった。新旧関係はS I 163より古くS I 166より新しい。平面形は歪な長方形である。床面の大きさは長軸5.00m, 短軸3.52m, 床面積17.6m<sup>2</sup>である。主軸はN-5°-Wである。ピットは床面より9個検出されたが, 柱穴はP 1 (48×44-60) cmとP 2 (56×56-52) cmの2本柱と考えられる。柱穴間距離は2.08mである。床面中央のP 3 (72×48-40) cmは特殊ピットと考えられる。他の多くのピットは用途不明であるが, この住居より古いS I 166を切って, 低い位置に作られており, S I 166に関連するピットとも考えられる。遺物はガラス小玉, 鉄製品, 土師器, 擦り面のある大きな石が出土している。時期は遺物により長瀬I~II期と考えられる。



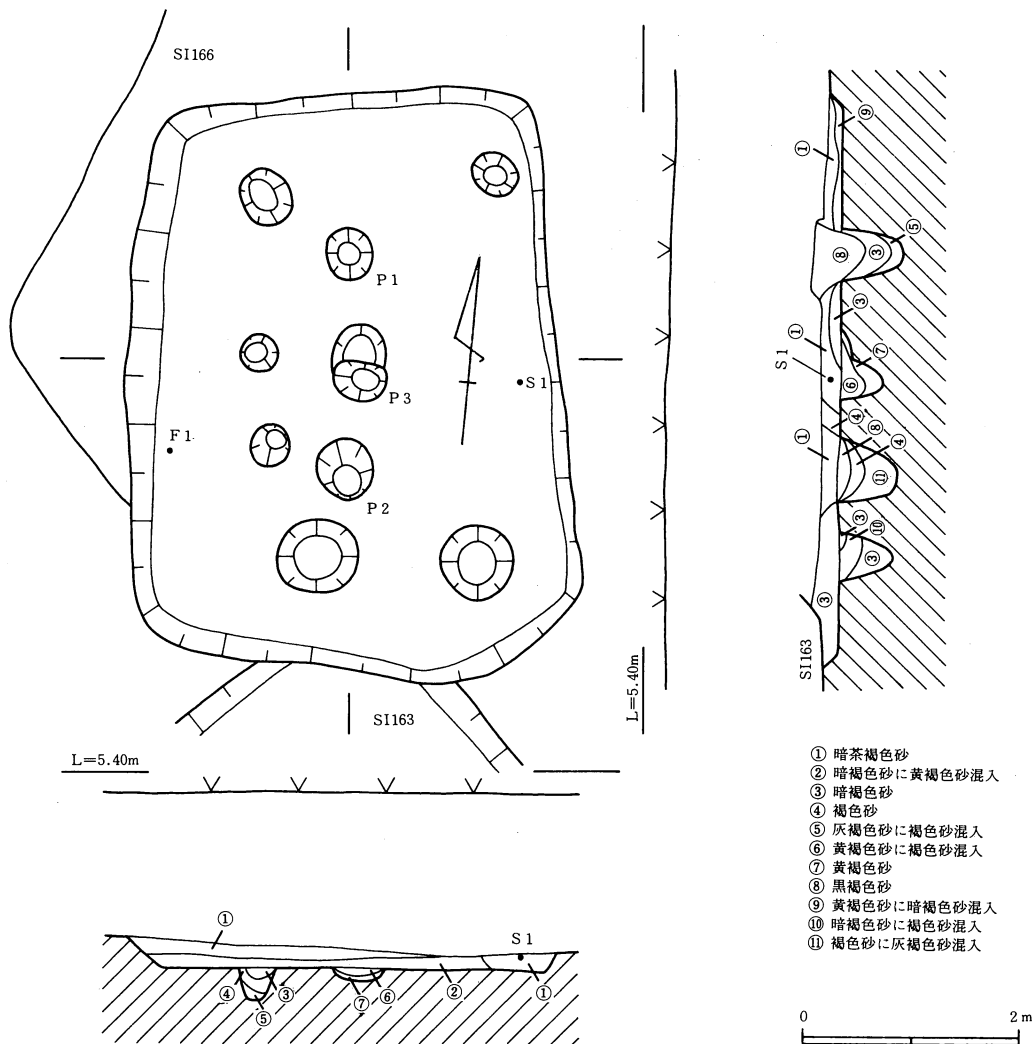
挿図80 S I 164遺物図その1 (土器S=1/4, 玉S=1/1)



挿図81 S1 164遺構・遺物図その2 (遺構S=1/80, 土器S=1/4)

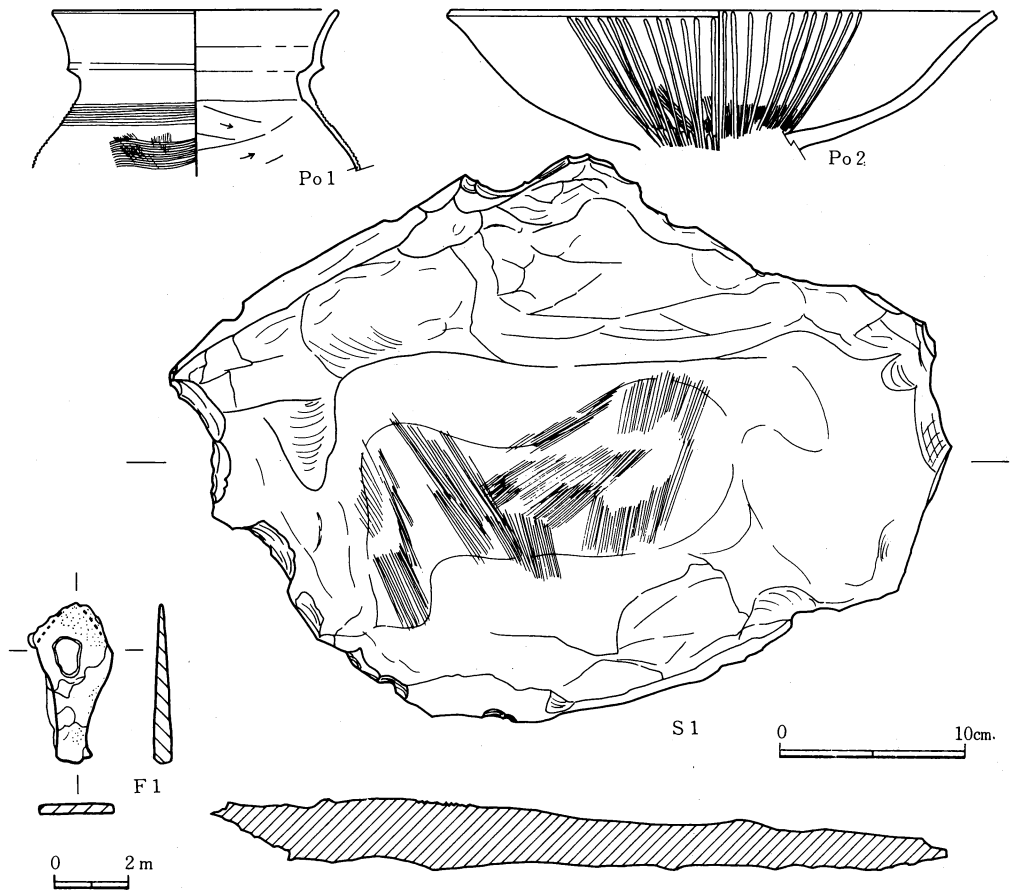
S I 166・9 B S K 02 (挿図84・85, 図版6・19)

9 B地区と10 B地区にまたがり, S I 164の東にある。S I 162・163・165・167と切り合っている。新旧関係は切り合う住居の中では最も古い。多くの切り合う住居が調査された後の検出である。明確にこの住居の肩として検出されたものは西側のみである。南側のS I 163・167に切られている東の壁は, 西側の壁に対応するものと考えられるのでやや大きいが竪穴住居跡とした。平面形は西側検出面より多角形と考えられる。ピットはこの住居と考えられる範囲内から多数検出されているが, 明確にこの住居跡に付属するものはP 1 (56×52-66) cmのみで, これを柱穴と考える。S I 165の床面はS I 166の床面より低く, S I 165内のピットもS I 166に関連する可能性もある。他の多数のピットとS I 166との関連, 用途は不明である。この様に多数のピットが検出されているが, 多くの住居に切られ



- ① 暗茶褐色砂
- ② 暗褐色砂に黄褐色砂混入
- ③ 暗褐色砂
- ④ 褐色砂
- ⑤ 灰褐色砂に褐色砂混入
- ⑥ 黄褐色砂に褐色砂混入
- ⑦ 黄褐色砂
- ⑧ 黒褐色砂
- ⑨ 黄褐色砂に暗褐色砂混入
- ⑩ 暗褐色砂に褐色砂混入
- ⑪ 褐色砂に灰褐色砂混入

挿図82 S I 165遺構図 (S=1/80)



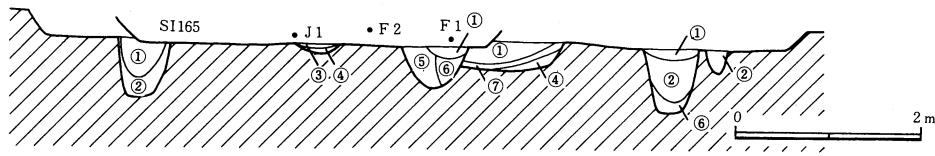
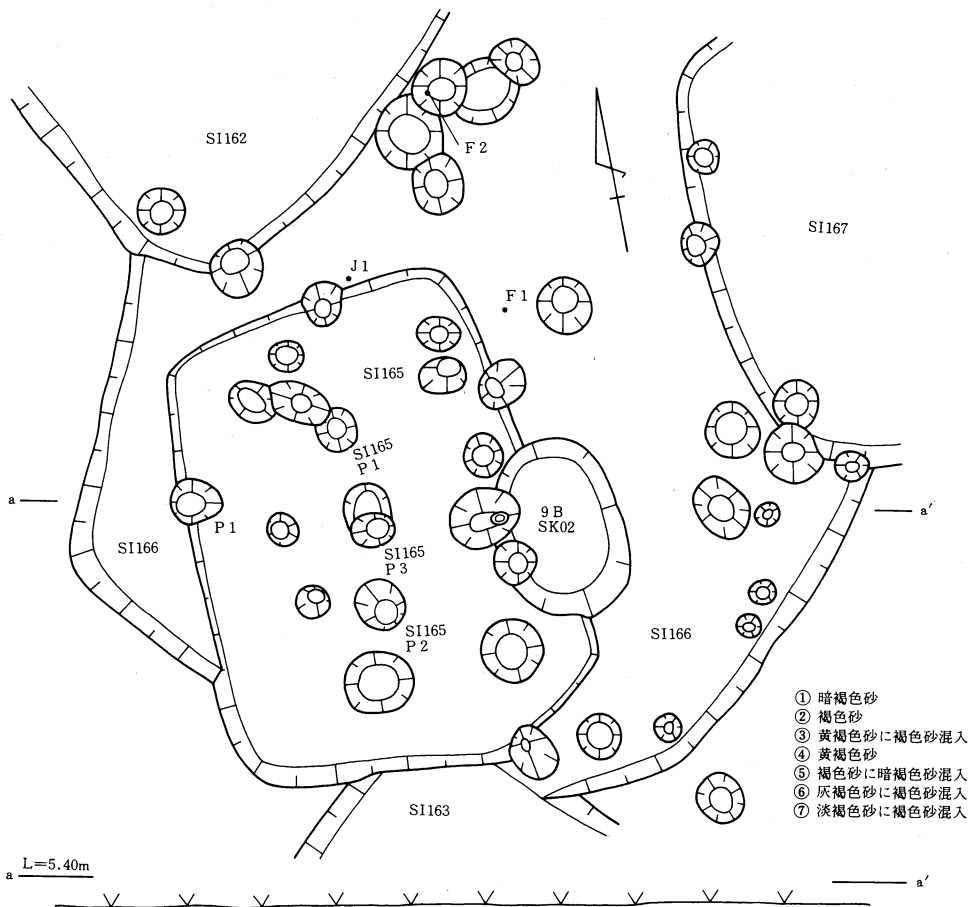
挿図83 S I 165遺物図 (土器・石S=1/4, 鉄器S=1/2)

ており不明の部分が多い。遺物は鉄製品2点のみで、時期は他の住居跡との切り合いにより長瀬I期と推定される。

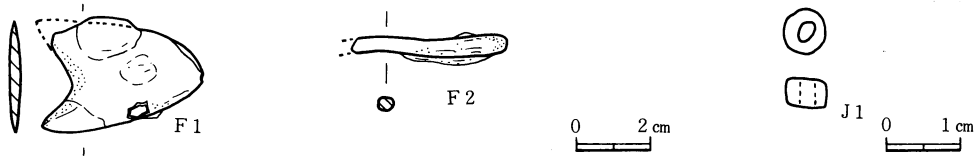
9 B S K02は、S I 166の床面と考えられる位置で検出され、S I 165に切られている。大きさは長軸1.96m, 短軸1.36m, 深さ0.32mであり、遺物はなく用途は不明である。時期は切り合うS I 166と同時期か、それよりやや古いものと考えられる。

#### S I 167 (挿図86, 図版7)

10Bの北西区にありS I 160の南, S I 165の東に位置する。東側は調査区域外のため未調査であるが、平面形は方形を呈すると思われる。床面の大きさは、南北方向で4.04mを測る。主軸はN-9°-Wである。側溝はみられない。ピットは床面で4個検出したが、構造柱の柱穴はP1とP2である。P1とP2がコーナーにあることから4本柱と考えられる。プランはP1が(40×40-40)cm, P2が(44×-40)cmで柱穴間距離は2.64mを測る。他のピットの用途は不明である。この住居跡の埋砂は、黒褐色砂でその中にはスミが多く混じっており焼失した住居跡の可能性はある。時期は不明である。



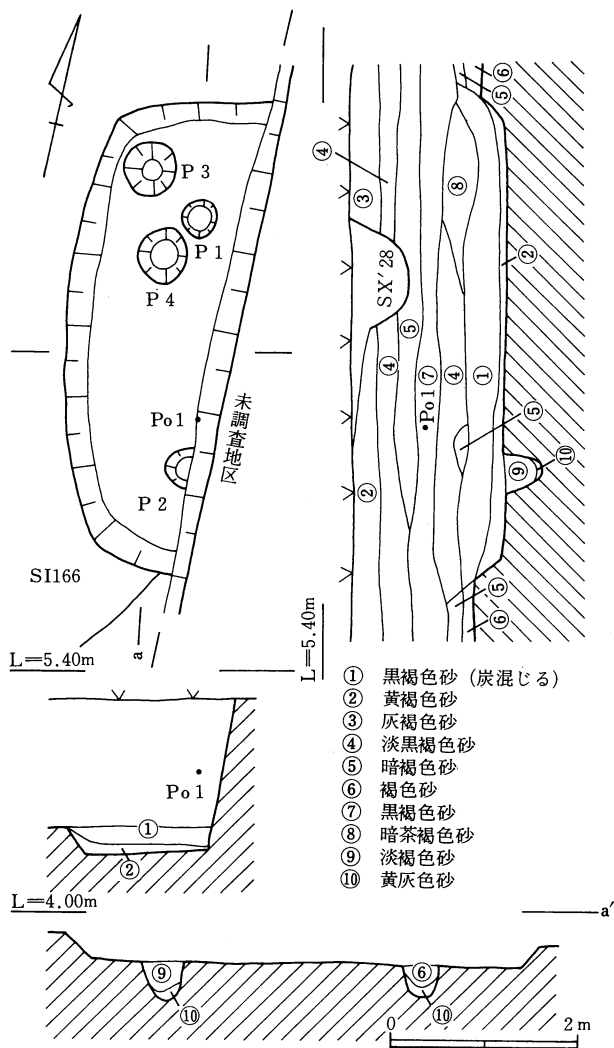
挿図84 SI 166, 9B・SK02遺構図 (S=1/80)



挿図85 SI 166遺物図 (鉄器S=1/2, 玉S=1/1)

SI 168 (挿図87・88, 図版7)

10B地区の北西隅に位置し、北側は10C地区に入り込む。西側、南側には竪穴住居跡は



挿図86 S I 167遺構・遺物図

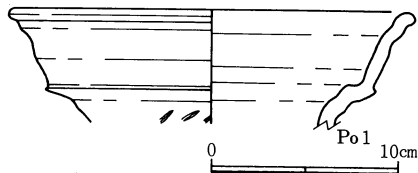
(遺構S=1/80・土器S=1/4)

## 第2節 玉作工房跡 (S I)

29棟の竪穴住居跡の中に今回3棟の玉作工房跡と思われる遺構が含まれている。円形プラン1棟、不明2棟である。時期はいずれも弥生時代前期である。

### S I 156 (挿図89~104, 図版7・20・21)

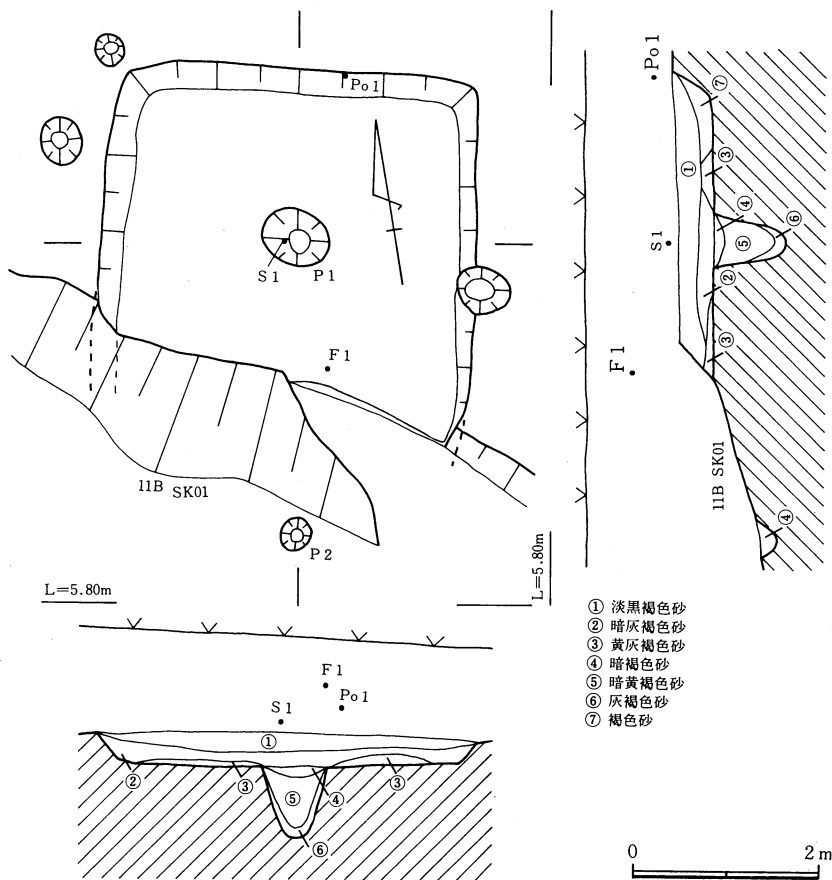
10C地区の南側に位置し、SB37のSK03、S I 155と切り合う。新旧関係はS I 156が最も古い。平面形は円形であるが、所々にコーナーが認められる。このことと柱穴配置を考えると、六角形・6本柱の竪穴住居跡の可能性がある。



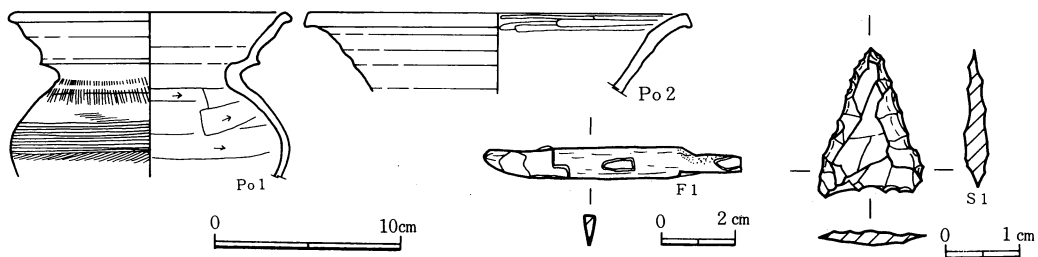
なく東側にはS I 155, 北側にはS B 37・41といった新しい時期の遺構がある。また南側にも、11B・SK01があり、S I 168はこれによって南側を壊されている。

平面形はコーナーの鋭い長方形で、主軸をN-9°-Eにとる。床面の大きさは長軸6.16(推定)m, 短軸3.60mを測り、床面積は22.8m<sup>2</sup>位であろう。壁高は北側で最大値39cmを測る。床面にピットは1つしか検出できなかったが、11B・SK01の下方より検出したP2も位置的、深さ的にS I 168のP1に対応する。従って柱穴はP1(72×59-77), P2(36×32-24)cmと考えられよう。柱穴間距離は3.12mである。時期は長瀬II期と推定する。



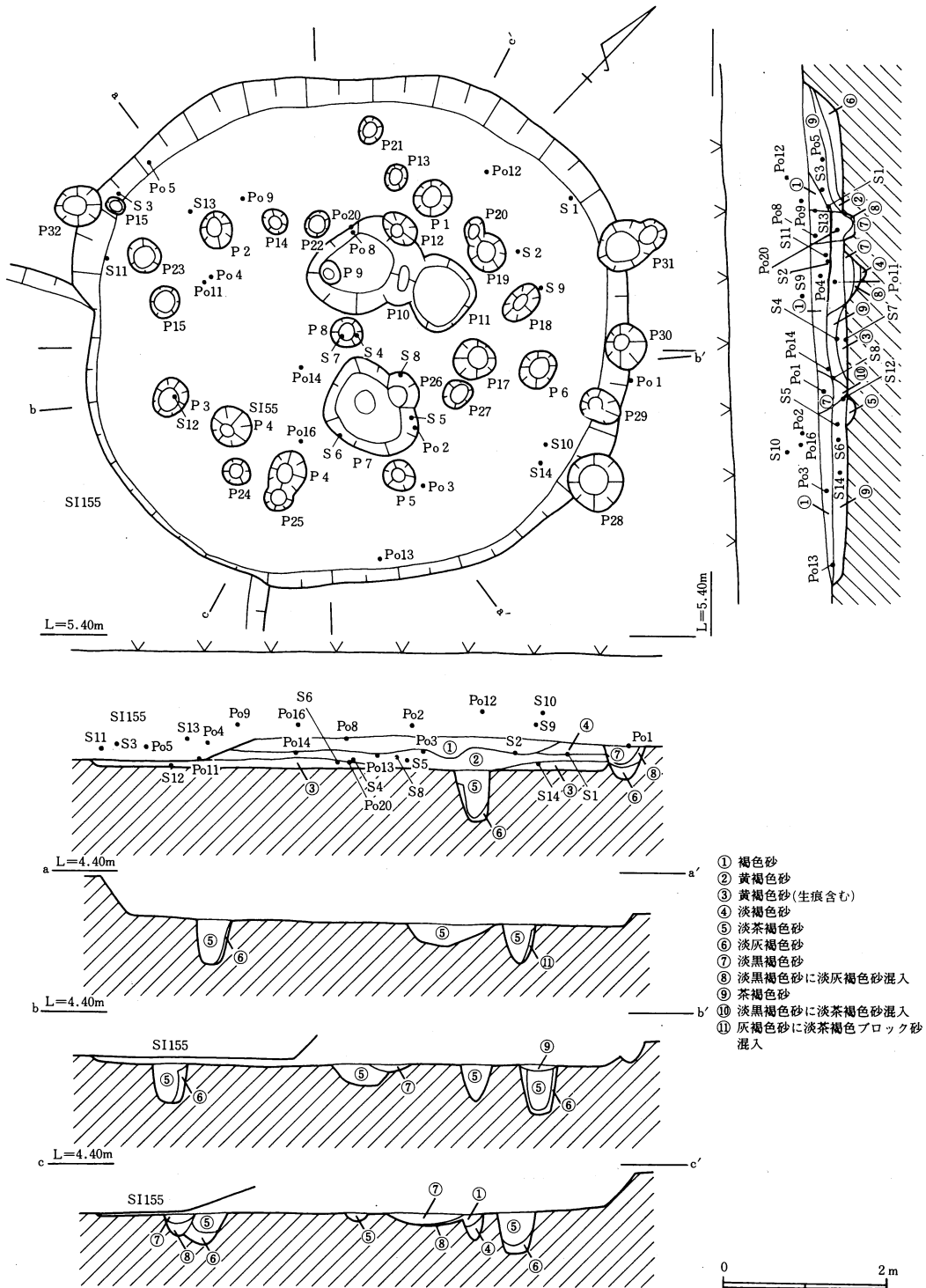


挿図87 SI 168遺構図 (S=1/80)

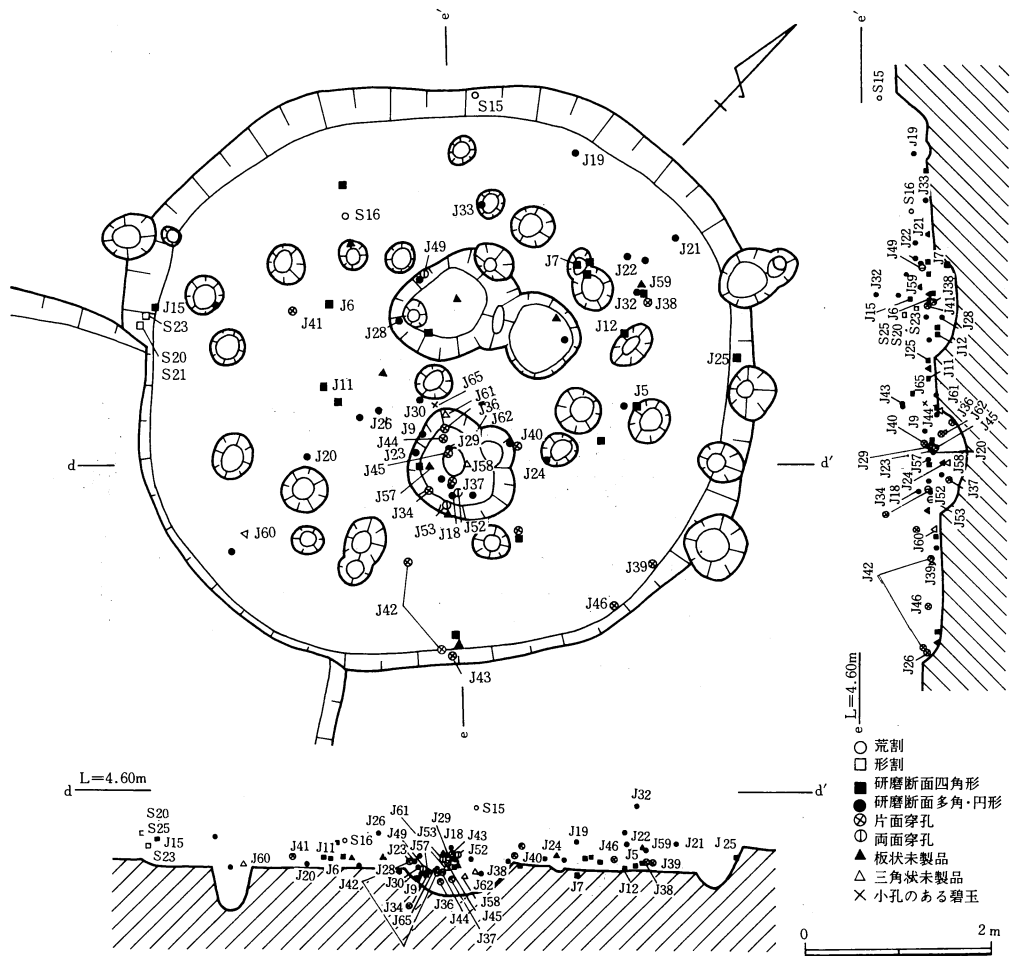


挿図88 SI 168遺物図 (土器S=1/4, 鉄器S=1/2, 石鏃S=1/1)

SI 156とその周辺および住居跡内より碧玉・瑪瑙等のチップにまじり多数の管玉等の未製品が出土していることより玉作工房跡と考えられる。大きさは床面で東西6.10m, 南北6.20mを測り, 床面積は28.7m<sup>2</sup>になる。壁高は北西側で最大値47cm, 南側で最小値18cmを測る。特に古墳時代の竪穴住居跡SI 155に切られている南側は5cmしか壁高がなく, かなり



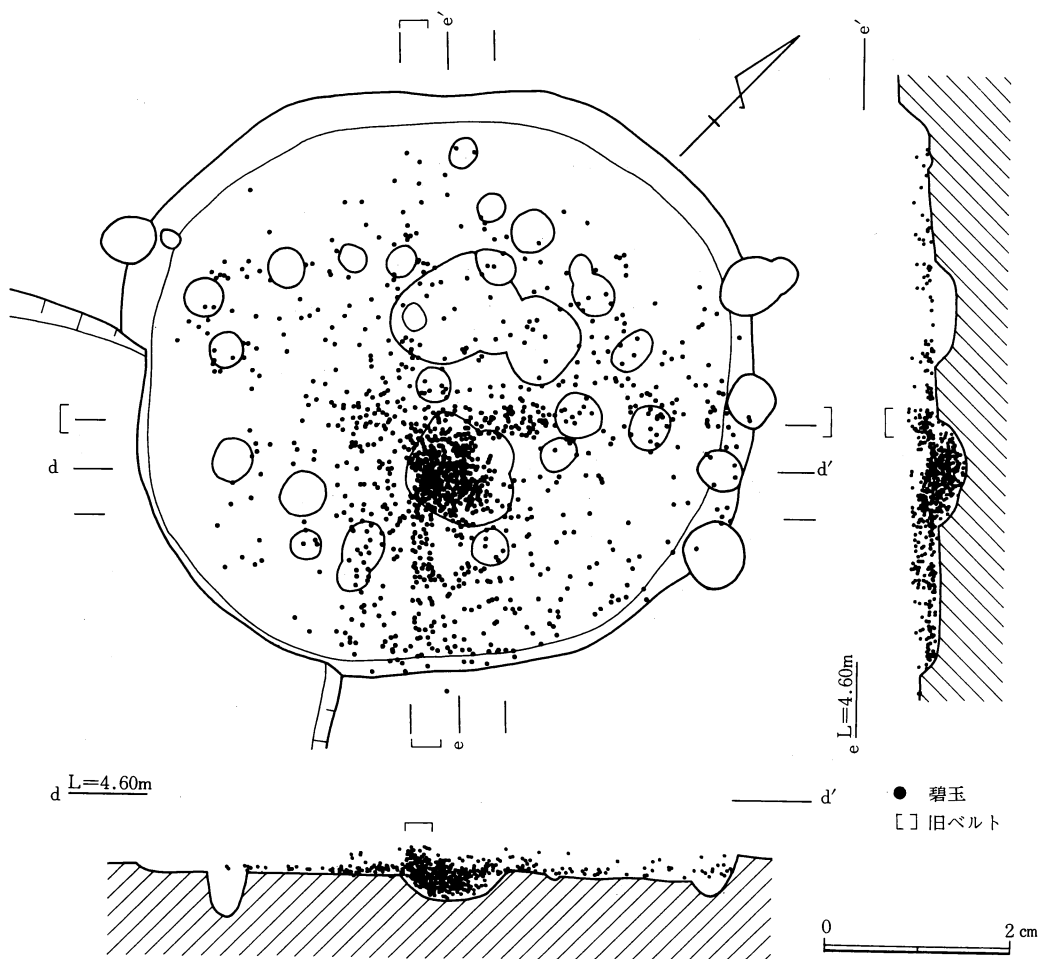
挿図89 SI 156遺構図 (S=1/80)



挿図90 S I 156碧玉未製品分布図 (S = 1/80)

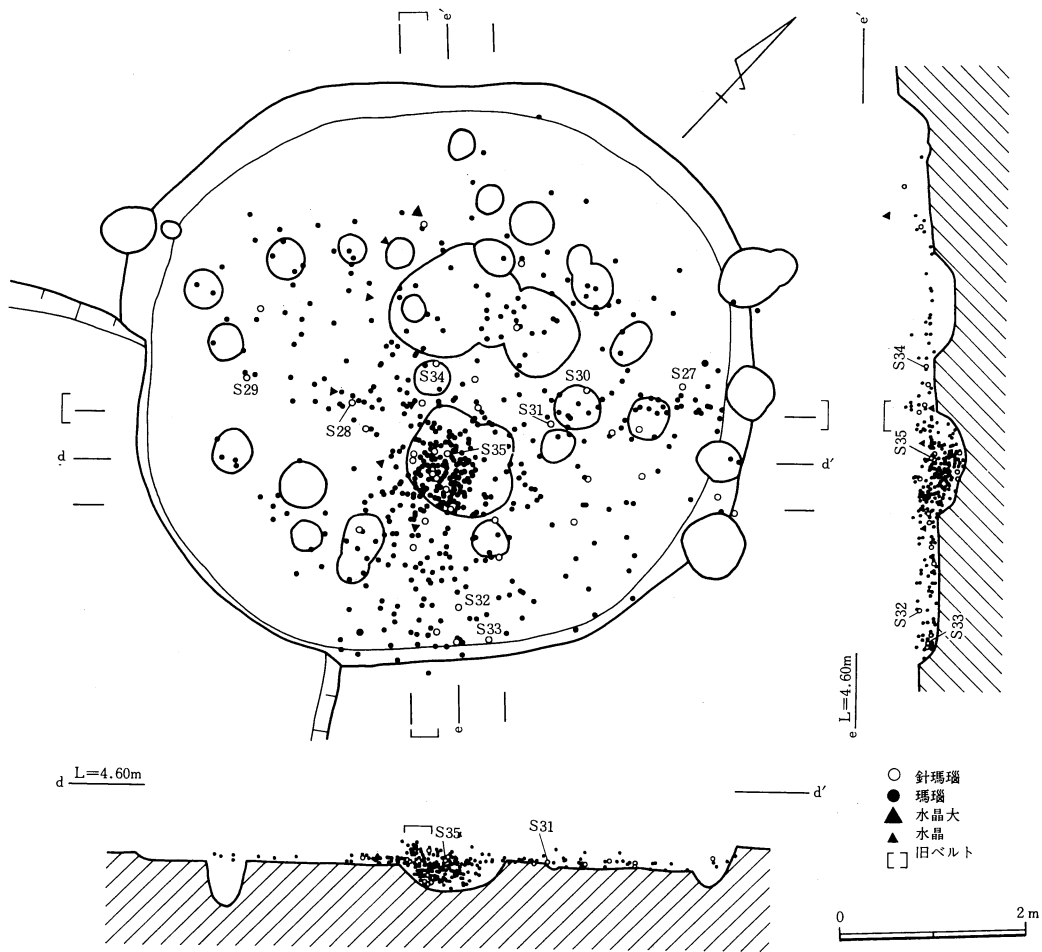
攪乱されている。床面に27個（内1個はS I 155の柱穴）、壁際及び肩に計6個のピットを検出した。肩に位置するP 28~32はいずれも淡黒褐色砂で埋まり、土師器を伴出することよりS I 156とは別の遺構と考えられる。これと同理由により床面にあるP 20~27もS I 156に伴わないピットであろう。この13個のピットを除外し、S I 156の柱穴を考えると、P 1~6が最もそれに適する。プランはP 1 (45×47-52), P 2 (41×41-55), P 3 (42×48-47), P 4 (43×47-38), P 5 (40×38-47), P 6 (42×48-60) cmである。柱穴間距離はP 1より順に2.70, 2.18, 2.16, 1.70, 1.40, 2.16mを測る。P 7を除き他のピットについては用途不明である。ただP 9~11については埋砂が赤っぽく、また炭や骨片(?) 砂利が多く出土しており、火を使用した跡の可能性もあろう。P 8 (36×38-17) cmは住居跡の中央に位置することが注目される。P 4, 5, 7, 18からは炭の出土が目立つ。

遺物には弥生土器、石器の他多数の管玉未製品、数千におよぶ碧玉・瑪瑙・水晶・サヌカイト・黒曜石のチップがある。これらのチップについては、大きいものについてはかな

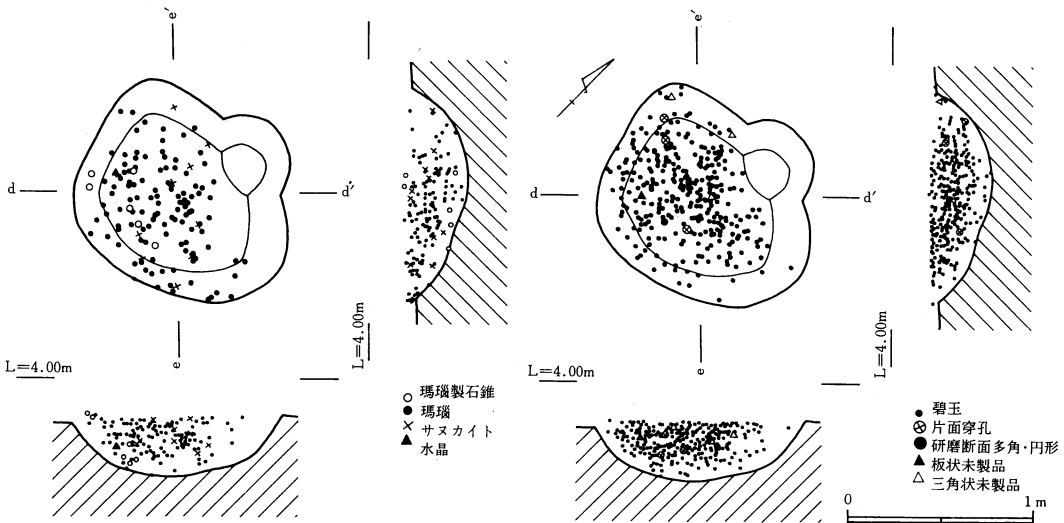


挿図91 S1 156碧玉分布図 (S=1/80)

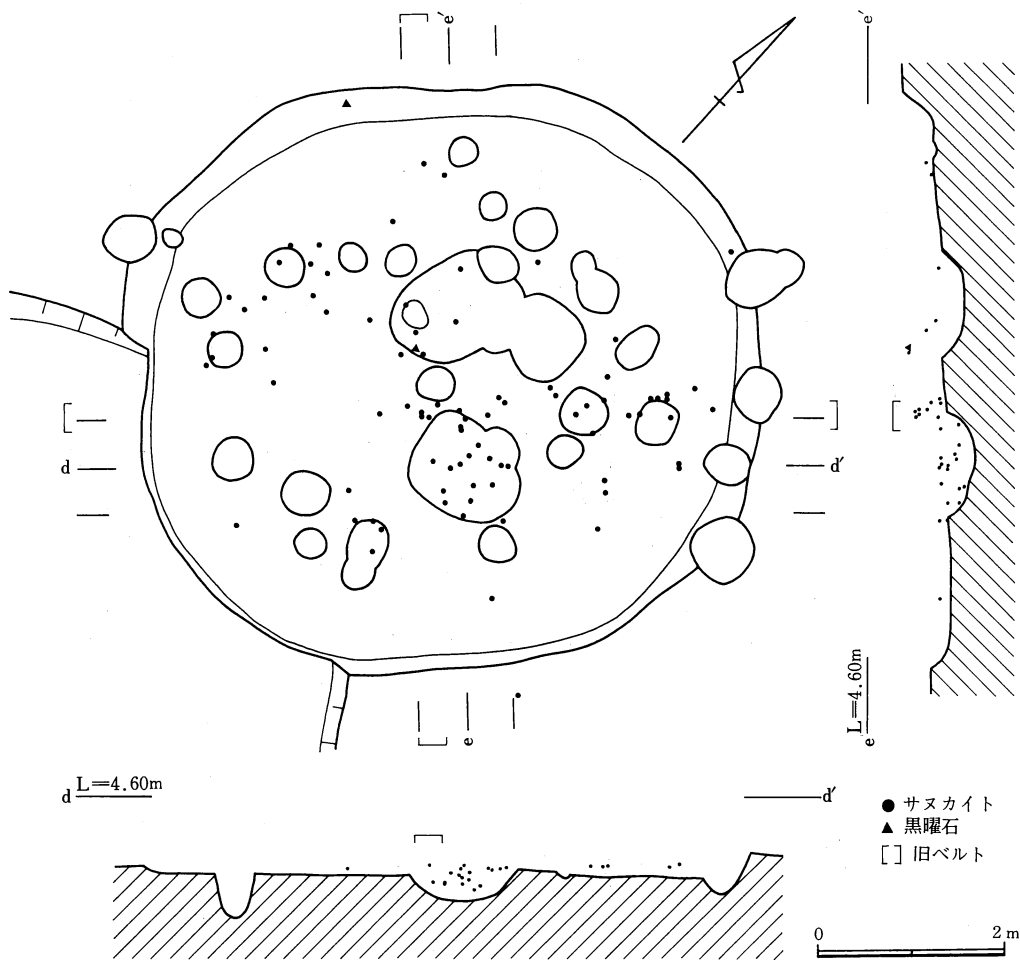
り上層から出土が認められていたが、竪穴住居跡としての輪郭を検出するまでかなりの掘り下げを要した。挿図90～94はそれらのチップの水平・垂直分布状況を示したものである。垂直分布図については主軸から両側計1m幅のものを落した。残念なことに中央に残した「+」字状ベルトにあるチップ以外は、ある程度掘り下げた後、その位置・レベルを記録したため、分布はベルトに集中する傾向がみられる。このことを考慮して各チップの分布図を観察すれば次のような事に気がつく。サヌカイト・黒曜石のチップの出土は少なく、分布も集中傾向が認められない。これに対し碧玉、瑪瑙チップの分布は極めてよく似ている。即ち北側、西側に空白がめだち、南東側に集中する。さらに詳しく言えばP7を中心とした半径1.2m内の出土が著しい。そのピット内や上面より穿孔途中、あるいは穿孔前段階である研磨、断面円・多角形の管玉未製品が多く出土している。これらのことからP7を工作用ピットと考えた。プランは南北96cm、東西121cm、深さ25cmで、北側はP26によって破壊されている。ピット内のチップは西側に集中し、又そちらに比較的広いピット



挿図92 SI 156瑪瑙・水晶分布図 (S = 1/80)



挿図93 SI 156 P7 遺物分布図 (S = 1/40)

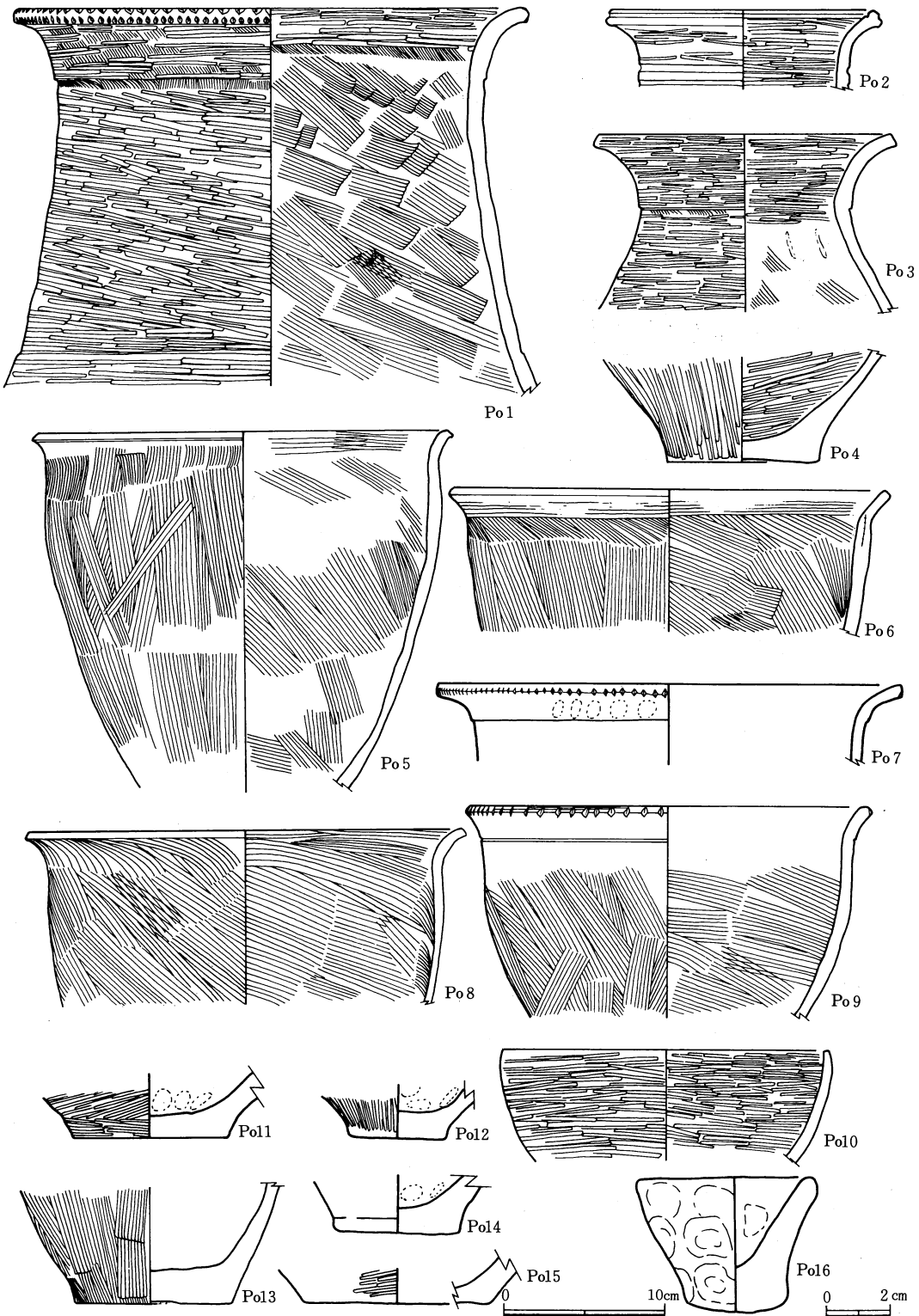


挿図94 S I 156 サヌカイト・黒曜石分布図 (S=1/80)

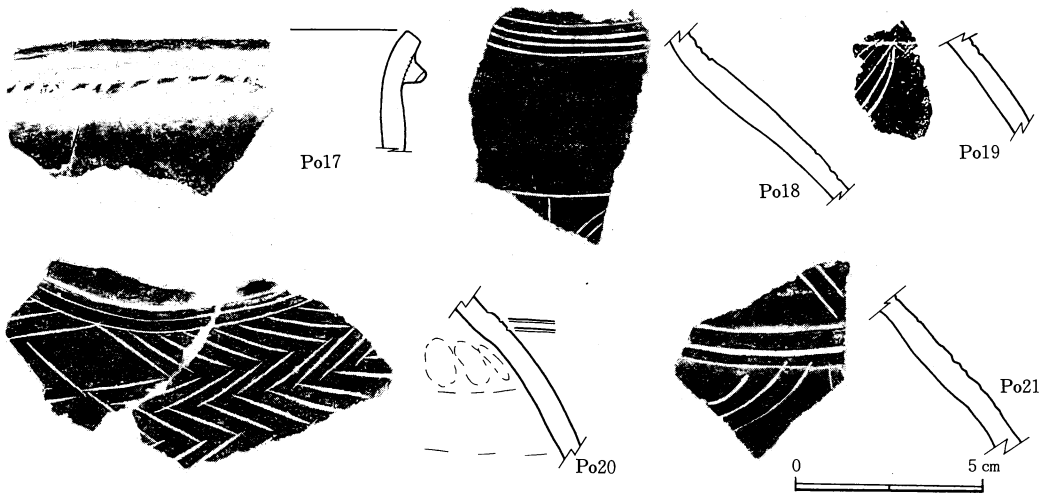
のない床面が存在する。このP 7, 9, 2, 3, 4で囲われた場所は作業するには十分な空間をもつように思われる。

以前当遺跡で検出された弥生時代前期の玉作工房跡S I 113と、その管玉製作工程についてはすでに報告済である<sup>#1</sup>。今回S I 156を初めとして計3棟もの弥生時代前期の玉作工房跡の調査が報告されることになり、資料もかなりふえたが、それぞれに特色があり、非常に興味深い。他のものについては以下に続く各々の報告文にかえるが、S I 156について言うなら、壁にくいこむ形で検出した砥石3点(内数条の凹みを持つ緻密な仕上用砥石1点、砂岩性の荒研ぎ用砥石2点)等沢山の石器と、明らかに管玉以外の何かを作ろうとした三角状未製品がある。この未製品はP 7内以外にはみられなかった。これら三角状未製品は周辺で出土した碧玉製磨製石鏃に非常によく似ている。

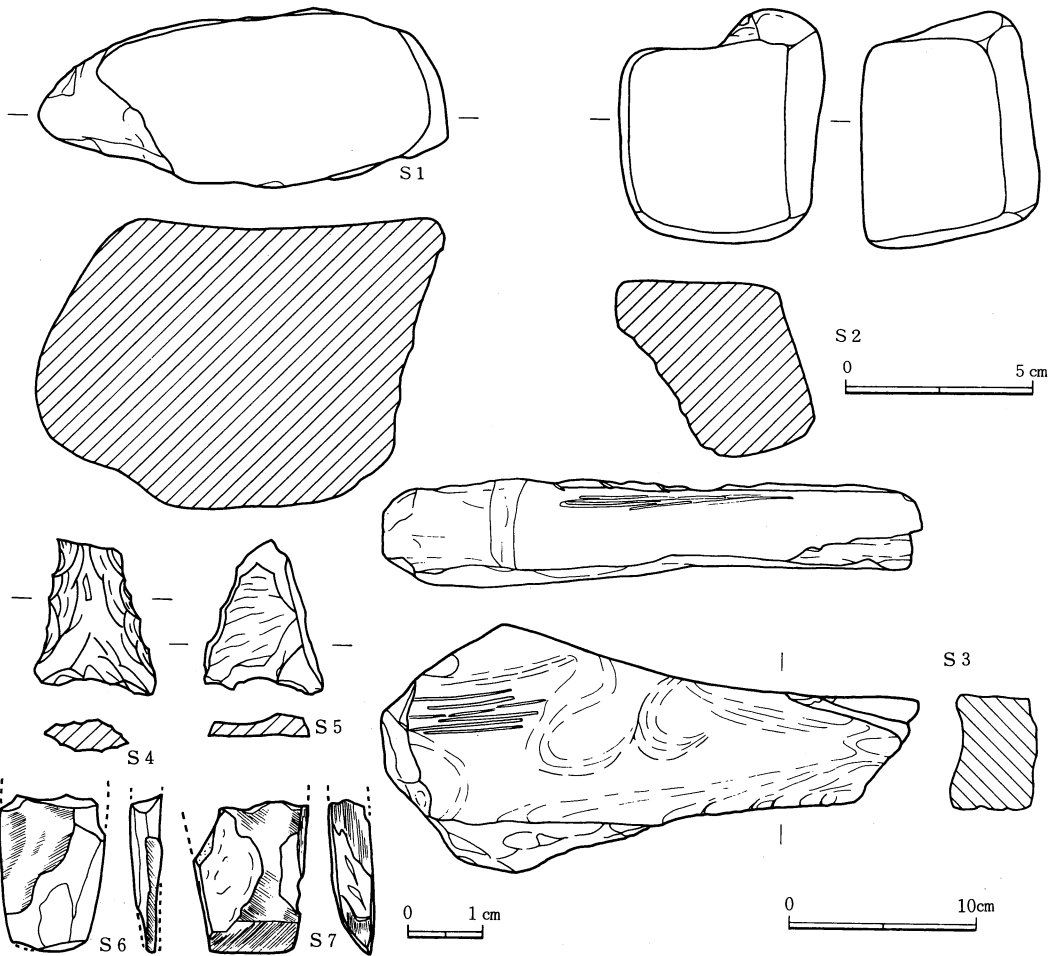
最後にS I 156出土の管玉未製品について検討してみる。材質はやはり軟質の碧玉であり、原石→荒割→形割→研磨→穿孔という基本をはずれることなく製品化されているよう



挿図95 S | 156遺物図その1 (土器1/4・手づくねS=1/2)

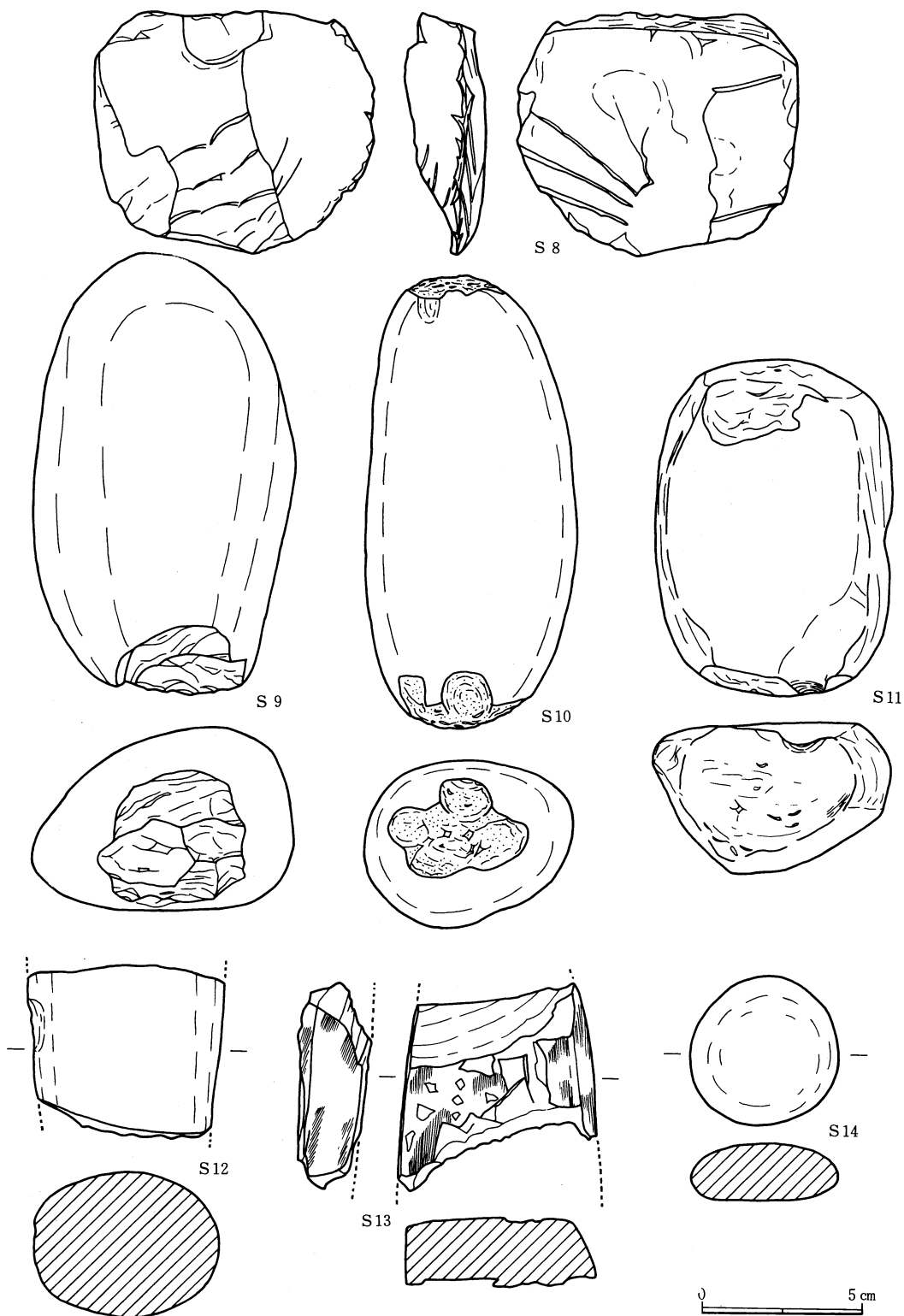


挿図96. S1156遺物図その2 (S=1/2)

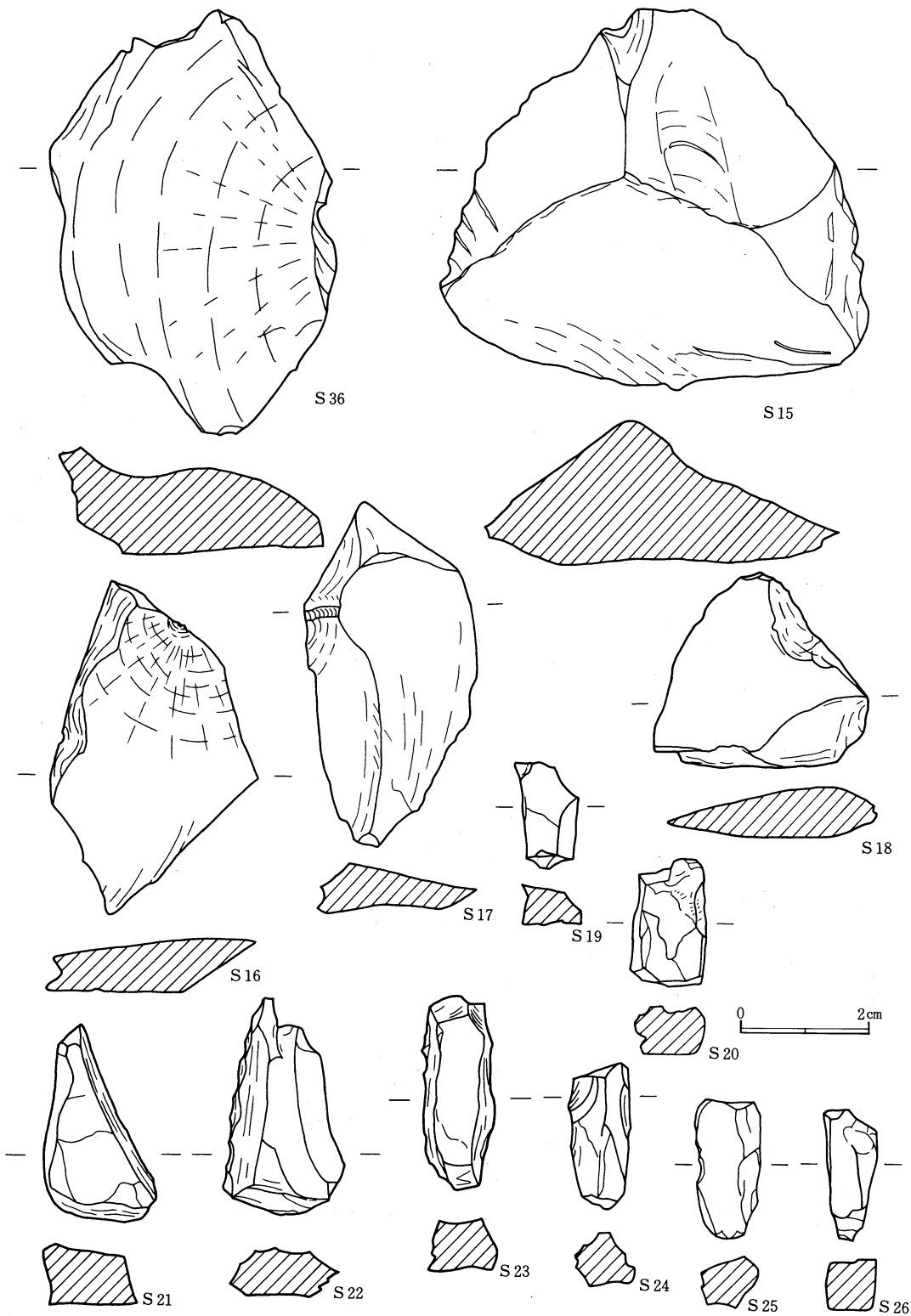


挿図97 S1156遺物図その3 (砥石S=1/4・1/2、石鎌・石斧S=1/1)

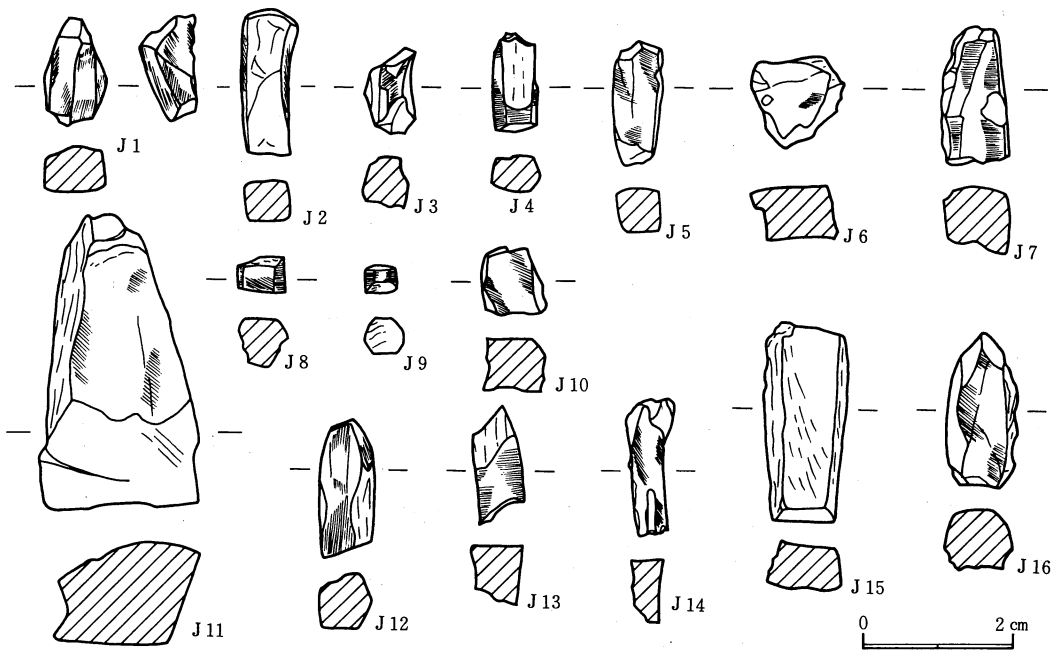




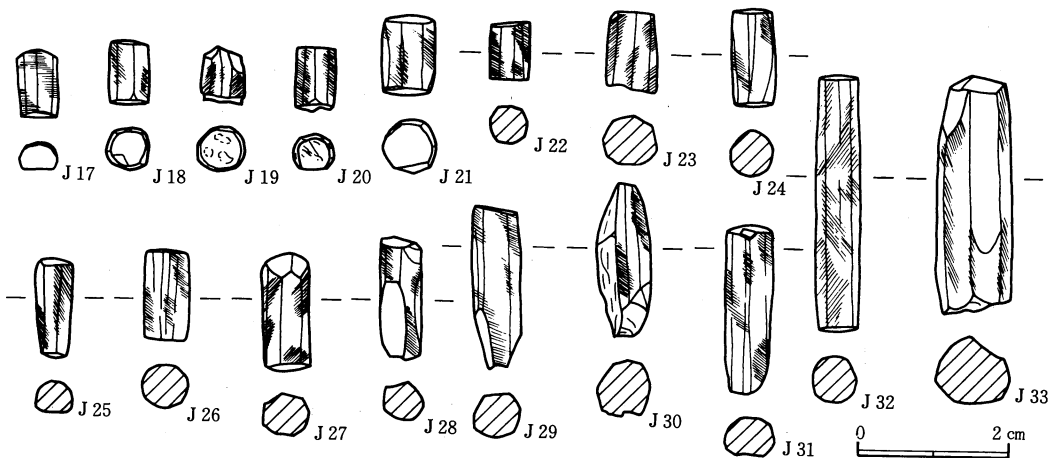
挿図98 S1156遺物図その4 (石器S=1/2)



挿図99 S I 156遺物図その5 (荒割・形割 S=1/1)

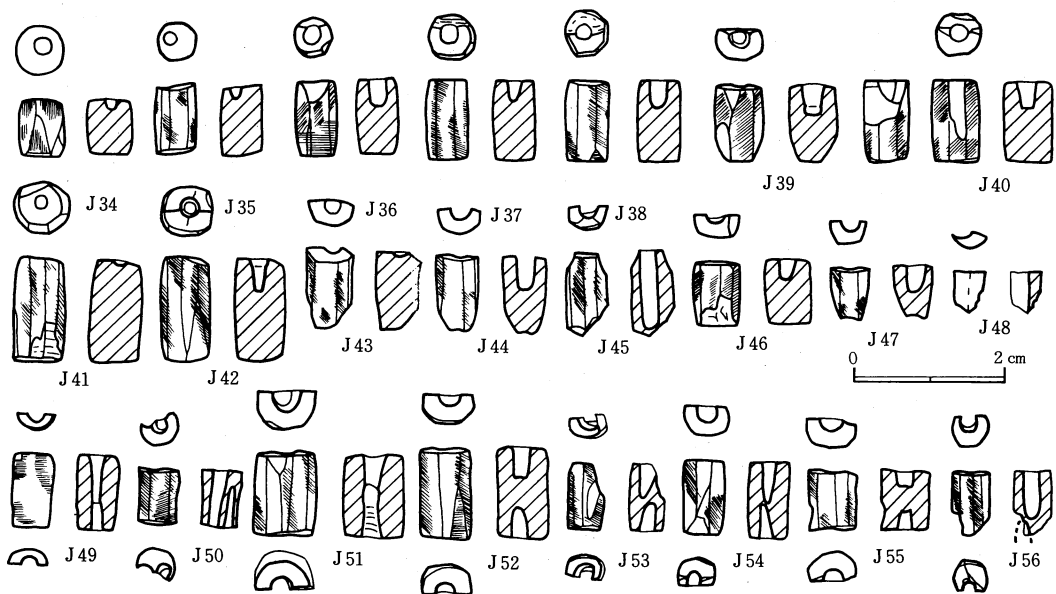


挿図100 S I 156遺物図その6 (研磨1 S=1/1)

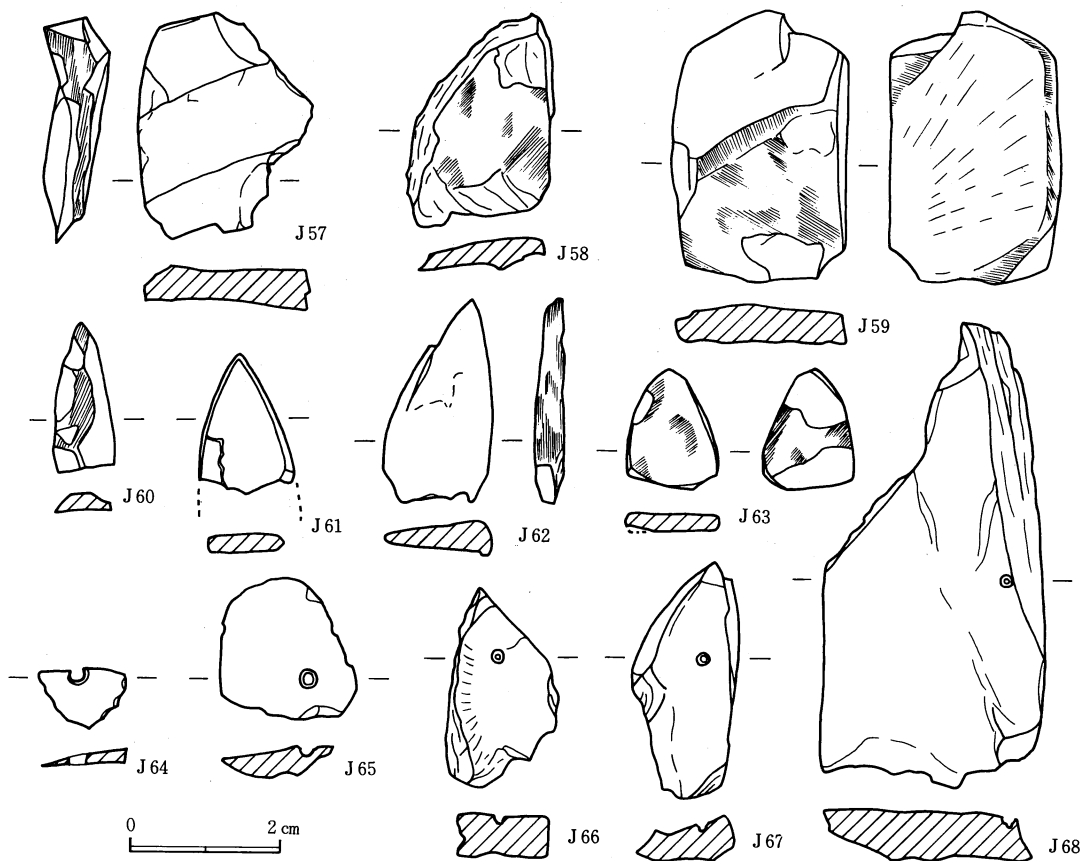


挿図101 S I 156遺物図その7 (研磨2 S=1/1)

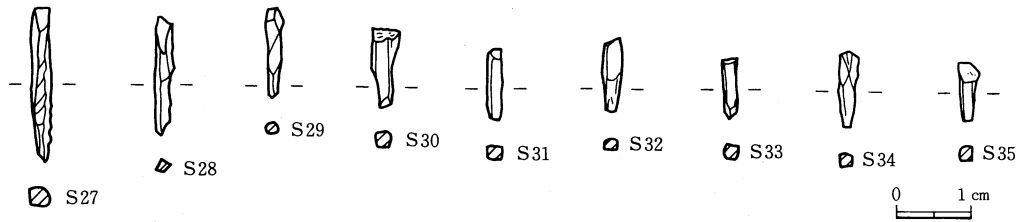
である。ただS I 156には原石と言える大きな塊はなく、荒割されたものをもち込んで製品化していったようだ。形割されたものは押圧剝離を経ず、直ちに研磨されている。研磨方向はおおよそ斜めであり、その擦痕から荒砥石が使用されたことが分かる。このように断面を多角形・円形にされたものは、上下端部をカットによってそろえられる。J 9はその時のカットされた不用部分であろう。S I 156にはこの過程で捨てられたもののがかなりある。長いもの (J 31・32) については輪切り状擦り切りが施されると思われるが、その認められるものはJ 18~21と数少ない。このようにして長さ8~13mm、幅5~6mmにさ



挿図102 S | 156遺物図その8 (穿孔 S=1/1)



挿図103 S | 156遺物図その9 (S=1/1)



挿図104 S I 156遺物図その10 (錐状瑠 S = 1/1)

れた多角柱・円柱は上下部端部を研磨された後初めて穿孔が開始されている。片面穿孔で失敗するものが多いようだ。鉄器が全く出土していないからこの穿孔にはおそらく瑠製の石錐が用いられたであろうが、それらしい使用痕は瑠については判定しがたい。未製品の方に $\cup$ ・ $\omega$ 状あるいは $\square$ 状あるいは $\nabla$ 状の穿孔とリング痕が断面より観察される程度である。このように孔断面が一様でないことは瑠錐使用を推定させよう。孔径は2~3mmであり、両面から穿孔がなされる。そのためJ 50, 56のように孔が大きく食い違うものもできている。製品は全くないが、おそらく長さ8~10mm, 幅5mm, 孔径2mmを理想としたものと推定する。

S I 156からは弥生土器以外の土製品は出土していない。紡錘車とか、有孔円板も出土していない。時期は出土遺物から弥生時代前期の中葉から後葉であろう。

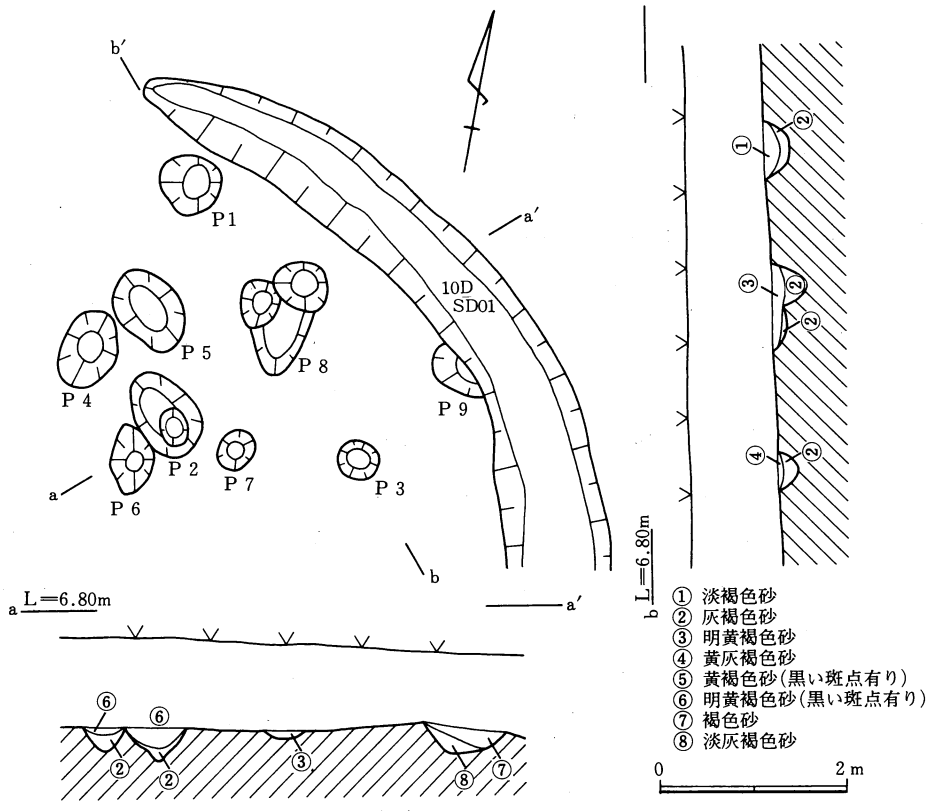
注1 長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V P113~126

S I 158 (挿図105~115, 図版8・21)

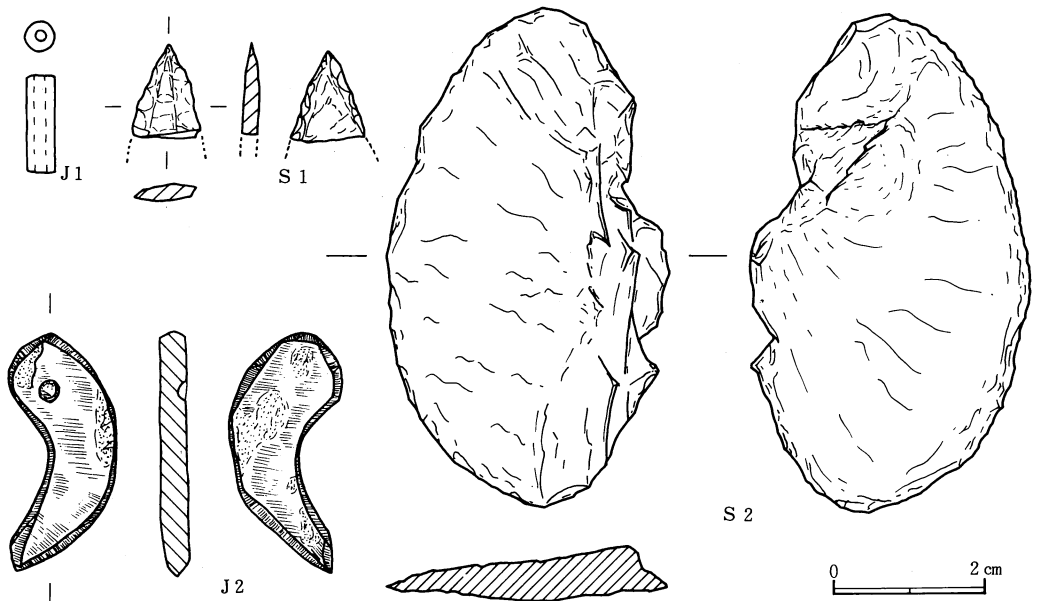
8号墳丘丘下北側に位置し、東側、北側は10D・SD01によって切られている。この地域より碧玉、瑠等のチップや管玉未製品が多数出土していることからS I 158は玉作工房跡であろうと考えた。調査は海拔580cm地点から12回にわたってごくわずかづつ(1~2cm)掘りさげて行ない、ピット内チップについては網こしにより集めた。

S I 158は8号墳周溝、あるいは風によって攪乱されたためか、掘り方は検出できなかったが、かろうじて床面と思われる場所からピットを10個検出した。この内P 4 (88×56-20)は、周辺及びピット内より多くの碧玉、瑠のチップや未製品が出土していることより、工作用ピットと推定される。S I 158の柱穴はチップの分布状況等を考慮して、P 1 (64×62-28), P 2 (96×64-36), P 3 (45×41-22) cmと、北側の10D・SD01に壊されたピットの4つであろう。柱穴間距離はP 1より2.64, 2.0mである。

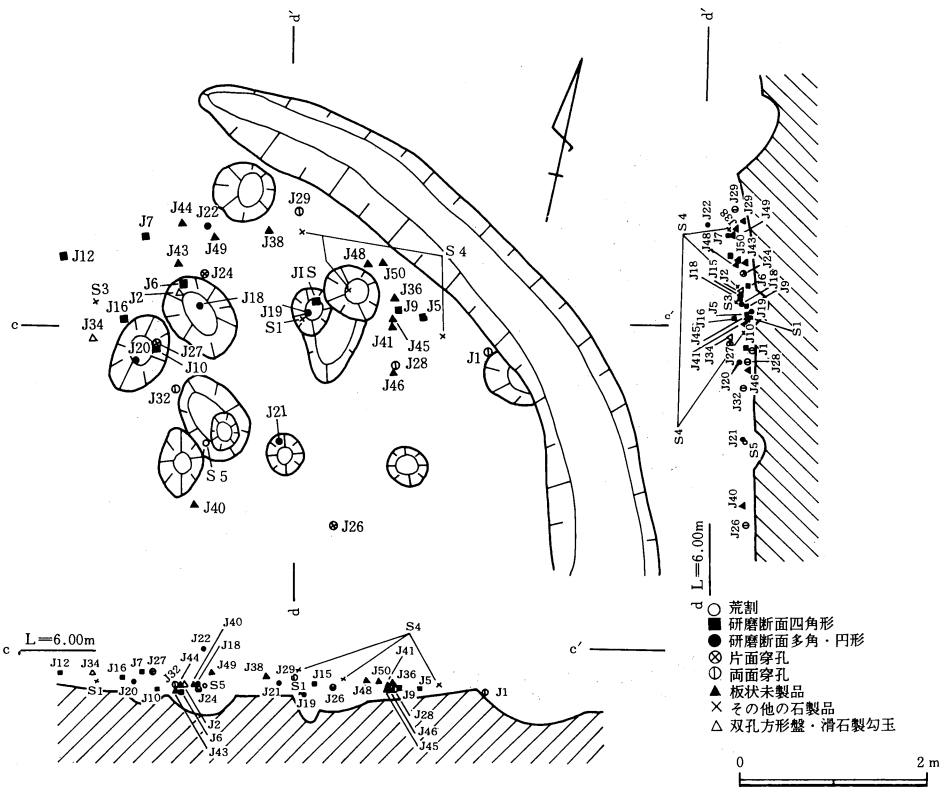
出土遺物には軟質碧玉、瑠、サヌカイトのチップ、管玉未製品、石器等がある。変わったものでは碧玉製の方形板(J 32)がある。これには全面に研磨が施され、しかもその中心線上に未貫通の小孔が2個認められる。孔はないがこれに似たものにJ 38がある。勾玉(J 2)も出土している。扁平で穿孔も不完全であり研磨も荒いことから製品でないようだ。J 1は製品であるが材質が滑石であり、出土地も10D SD01際であることよりS I



挿図105 S1158遺構図 (S=1/80)



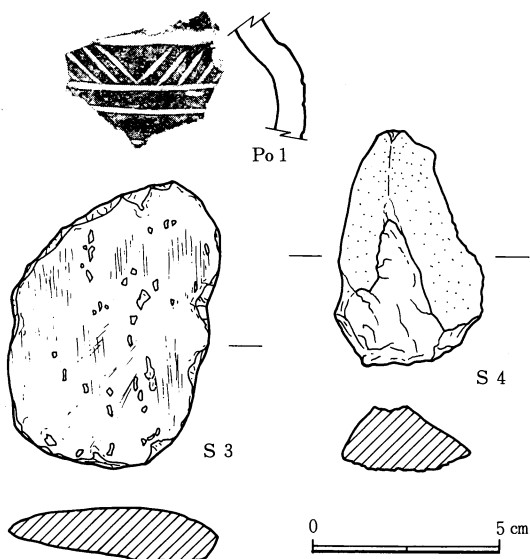
挿図106 S1158遺物図その1 (S=1/1)



挿図107 S I 158遺物分布図その1 (S=1/80)

158のもでないと判断した。8号墳関係の遺物であろう。

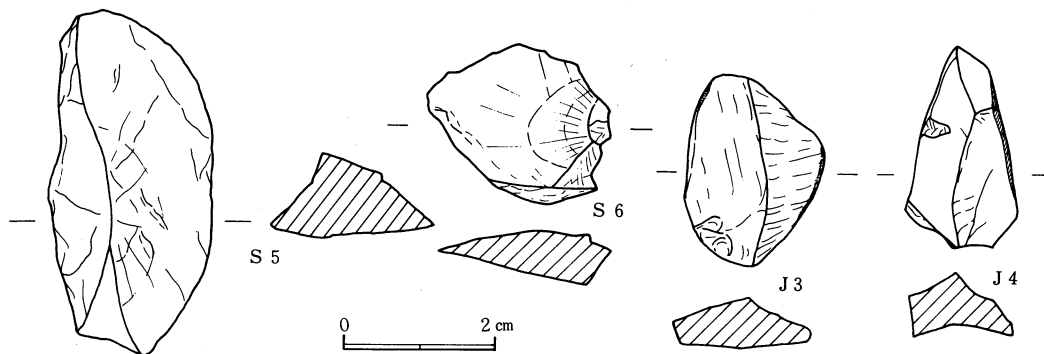
S I 158出土のチップについて考えてみた。まず気付くことは碧玉原石のような大きな石材がなく、荒割、形割段階のものも出土が少ないことである。断面四角形で研磨されているものは13点程出土しているが、表裏2面のみ研磨のものが大半であり、全面研磨されたものはJ10の1点だけである。研磨断面多角・円形のもの4点ある。その内J22には輪切り状擦り切り痕が認められる。片面穿孔のものが4点、両面穿孔のものが5点出土している。その内同一個体として確認できたものはJ26, 27, J32, 33である。同じくP4内出土のJ30, 31も同一個体である。その他に明らか



挿図108 S I 158遺物図その2 (S=1/2)



挿図109 S1158遺物分布図その2 (S=1/80)

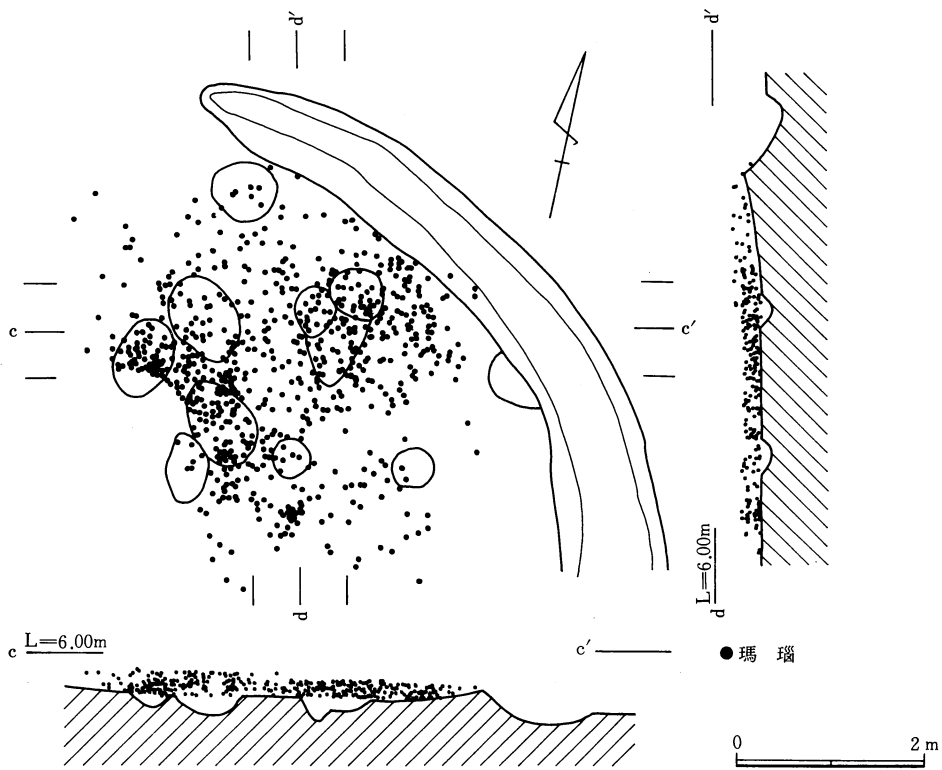


挿図110 S1158遺物図その3 (荒割・形割S=1/1)

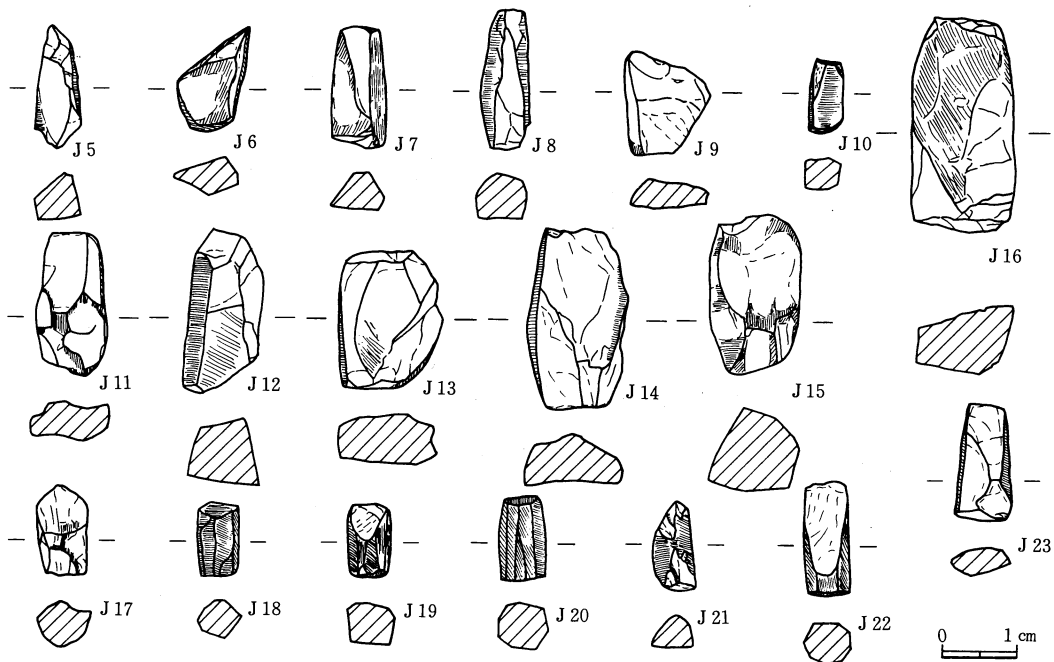
に管玉製作を意図していないと思われる碧玉破片も多く出土している。

工作用ピット内から出土するチップは群を抜いて多い。未製品も5点出土しているが内3点は両面穿孔のものである。土器も出土しているが、破片ばかりで図化できなかった。瑪瑙については錐状のものが10数点出土している。使用痕は判定しかねるが、鉄器の出土が全く認められず他に穿孔工具が見当たらないことから、石錐として管玉穿孔に用いられた可能性は大きい。

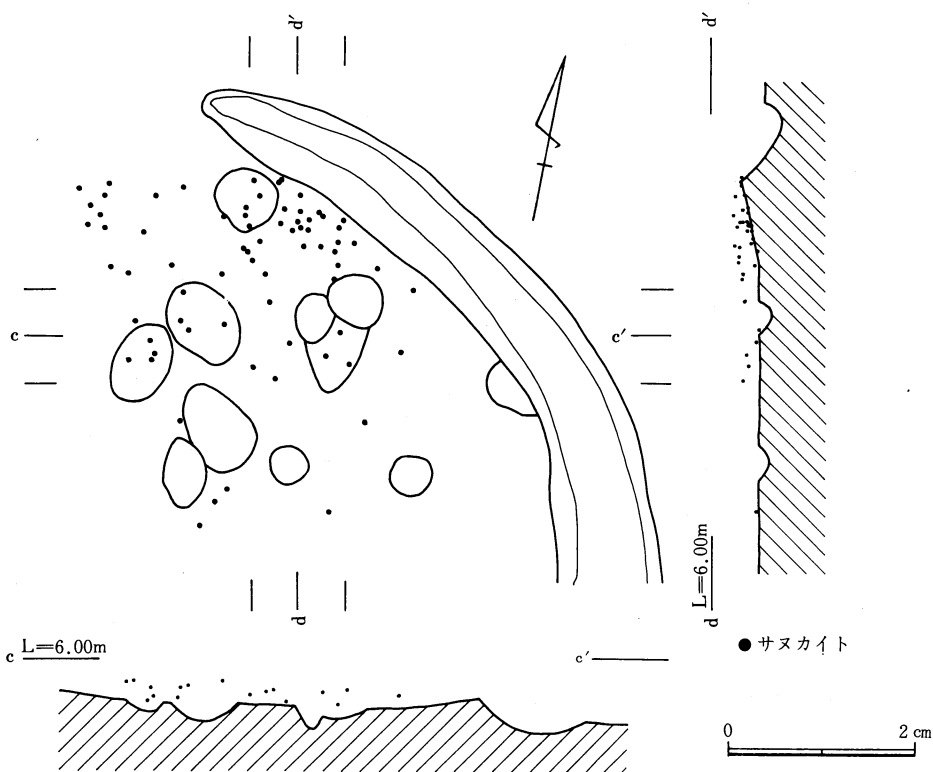




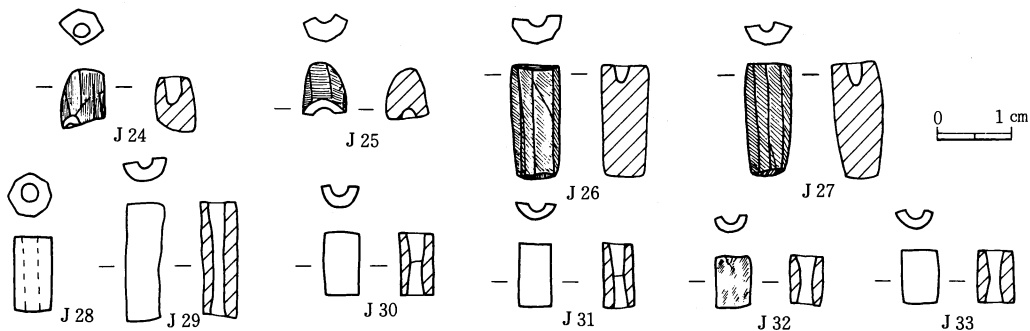
挿図111 S I 158遺物分布図その3 (S=1/80)



挿図112 S I 158遺物図その4 (研磨 S=1/1)



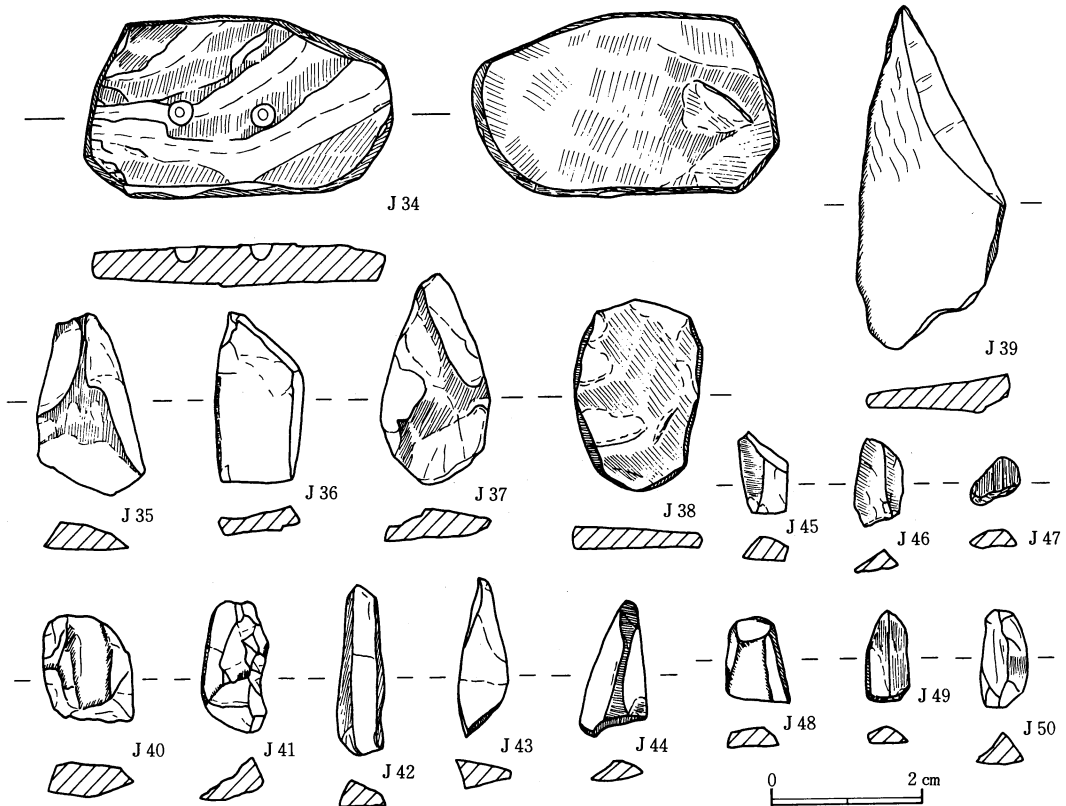
挿図113 S I 158遺物分布その4 (S=1/80)



挿図114 S I 158遺物図その5 (穿孔S=1/1)

S I 158は他の玉作工房跡S I 113, 156, 169と比べ碧玉チップに比し瑪瑙チップが多い。しかもその中には錐状のものがかなり見られる。それに反し石器や土器は少ない。しかしS I 158は他の玉作工房跡と全く関係を持たぬとは言えず、何らかの関係があったものと推定する。従って時期を判定するのにたる有力な資料はないにしても、他の工房跡と大差ない時期に使われたと考えてよからう。

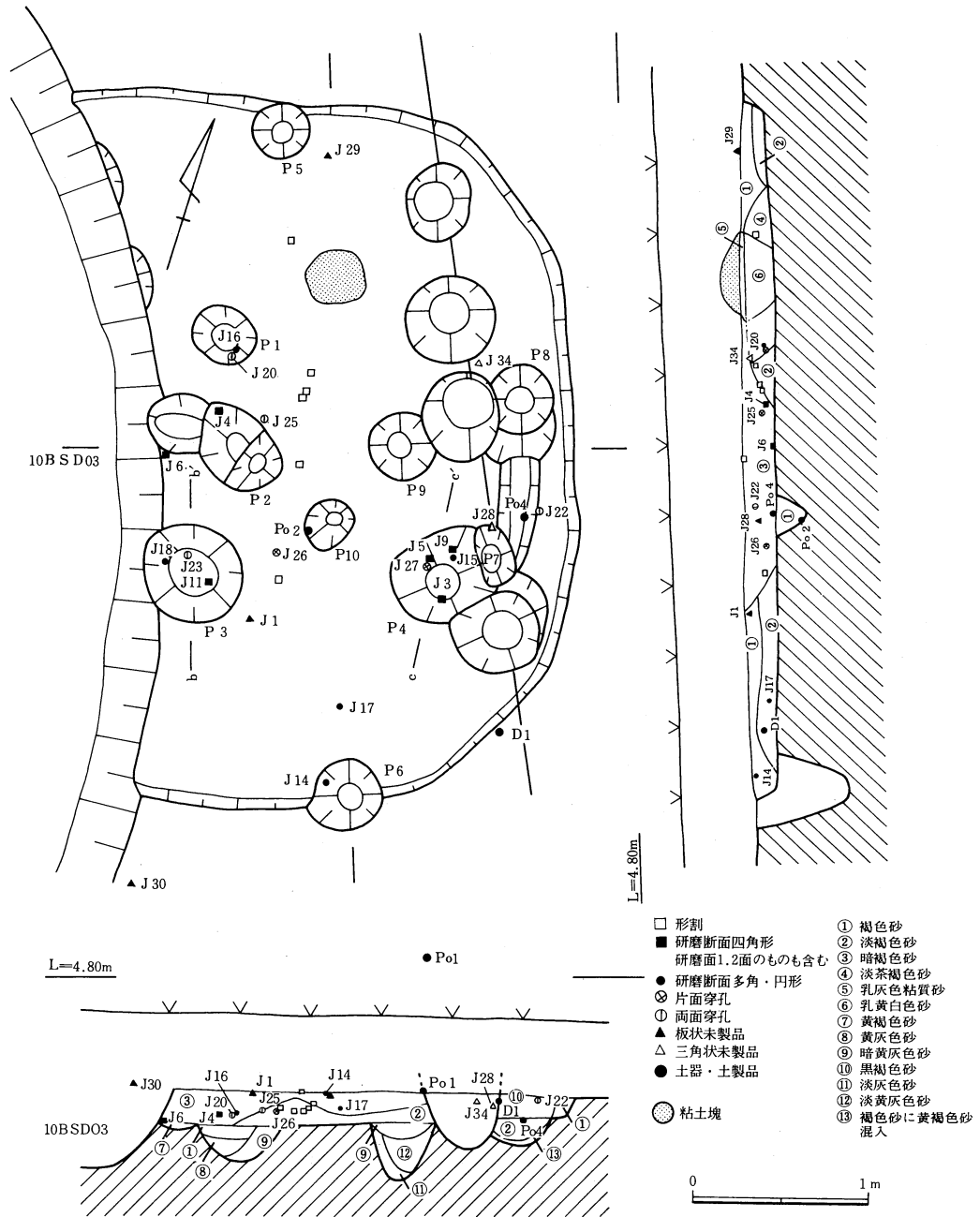
S I 169 (挿図116~123, 図版8・21・22)



挿図115 S I 158遺物図その6 (S=1/1)

10B地区にあり、北からつづくピット群の南端部下層に位置し、東側床面はそれによって破壊されている。西側大半は10B S D03によって壊されていた。残存部から推定される平面形は径4.0mの不整円形を呈し、竪穴住居跡としては小規模である。主軸・床面積については不明である。確認できた壁高は10~20cm程である。床面に数多くのピットを検出したが、対照的位置を想定させるような構造柱の柱穴は認められなかった。ただし、壁近くにあるP 5・6についてはそれぞれ(32×33-35), (40×38-64) cmのプランを持ち、調査の過程では疑問視していたが住居跡の規模を南側へやや拡張して考えるならば、この2ピットをP 8とともに構造柱とすることも可能となる。北西部、10B S D03沿いに検出した2ピットは層的観察によりS I 169に伴うものではないと考える。床面東壁沿い一部に幅22cm、深さ10cmの浅い溝状の施設がみられた。

住居跡上面及び埋砂内より多量の玉作関係遺物が出土したことから玉作工房跡と判断した。掘り下げの早い段階で、碧玉・瑪瑙の剥片・屑等は中央部南寄り・東南部隅辺に限定され、後にその直下でピットを検出した(P 1~4)。特にP 3については、図示できなかったが瑪瑙製石錐<sup>#2</sup>が他に比して非常に多く出土し、剥片・屑等の密集度からも工作用特殊ピットと考えられる。P 4内からは集中的にサヌカイト剥片を検出した。サヌカイト剥片



挿図116 S1169遺構図・遺物分布図その1 (S=1/40)

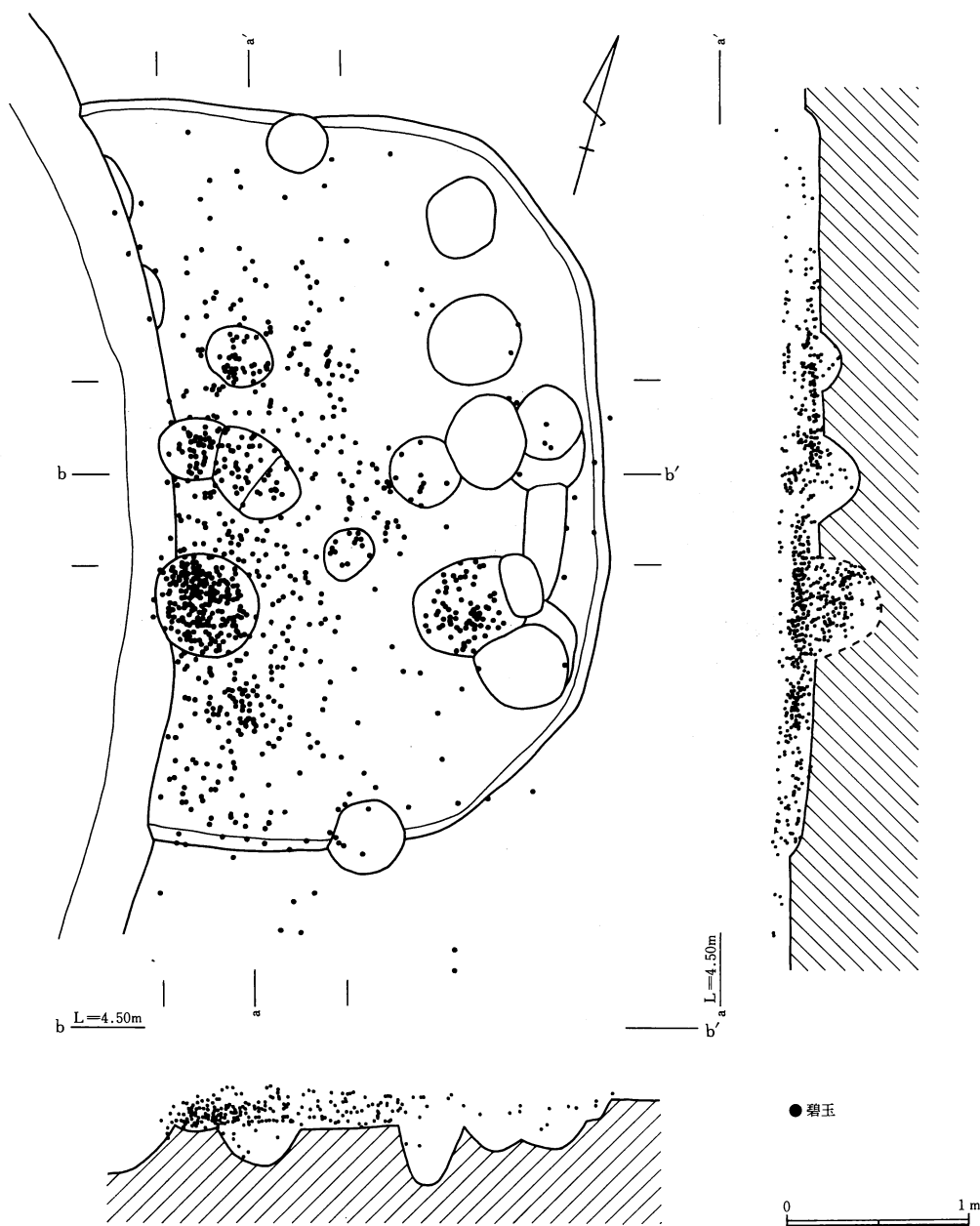
の中に楔として使用したとみられるものがある (S3・5)。

玉材は軟質の碧玉で、製品は出土していないが研磨未製品から推定すれば径3~5mmの管玉を製作している。原石→荒割→形割→調整工程を明示するもの、また研磨寸前とみられる四角柱状の形割未製品はなく、形割未製品は悉く製品化された、あるいは調整段階を省略して、ある程度の形がとれたら直ちに研磨工程へと移されたものと思われる。この



挿図117 S1169遺物分布図その2 (S=1/40)

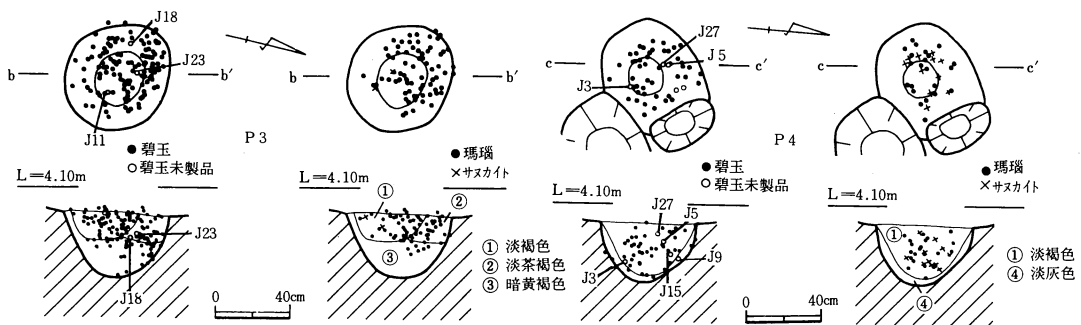
工程における側面押圧剝離技法は全く認められなかった。擦切技法の痕跡をとどめる細片が1点認められたが、これは研磨終了段階に、意図する製品の2倍の長さをもつ未製品を中程で二分割する際に生じるとみられる円弧の施溝をもつものであった。研磨は側面から上下面の順に行なわれており、擦痕の違いから荒擦の段階が想定された。穿孔はすべて上下面を研磨した後に施されている。穿孔されるものの断面形は様々であり、およそ径が5



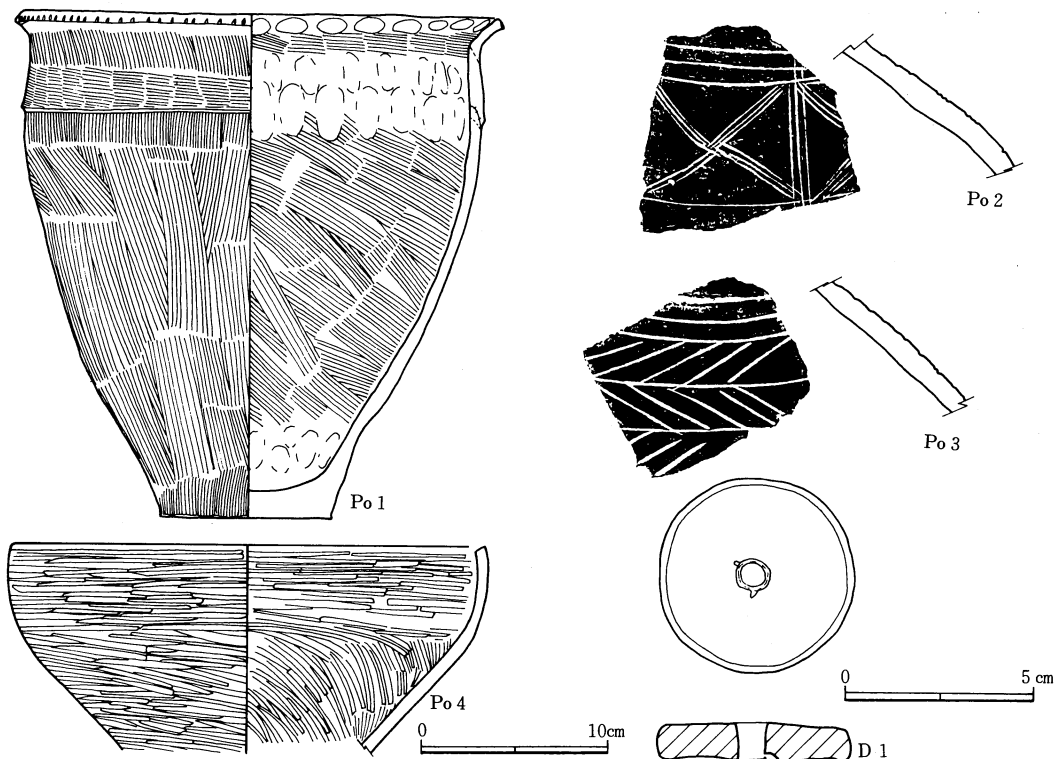
挿図118 S1169遺物分布図その3 (S=1/40)

～6mmになってから実施されているといえる。孔径は1～2mm余で、両面から穿孔されており、孔の径・深さからみても瑪瑙製石錐が穿孔工具として用いられている。孔が貫通後さらに丁寧に研磨される仕上げの段階を経て製品に至るわけである。これら未製品の出土状況には、各工程による分布上のまとまりは認められなかった。

碧玉のうち、管玉製作過程に直接結びつかないものに、1.5cm大の扁平三角形状で表裏面及び側縁が研磨されているもの (J28, 32～34), 穿孔を施した剝片 (J31) 等がある。遺



挿図119 S I 169 P 3・P 4遺物分布図 (S=1/40)



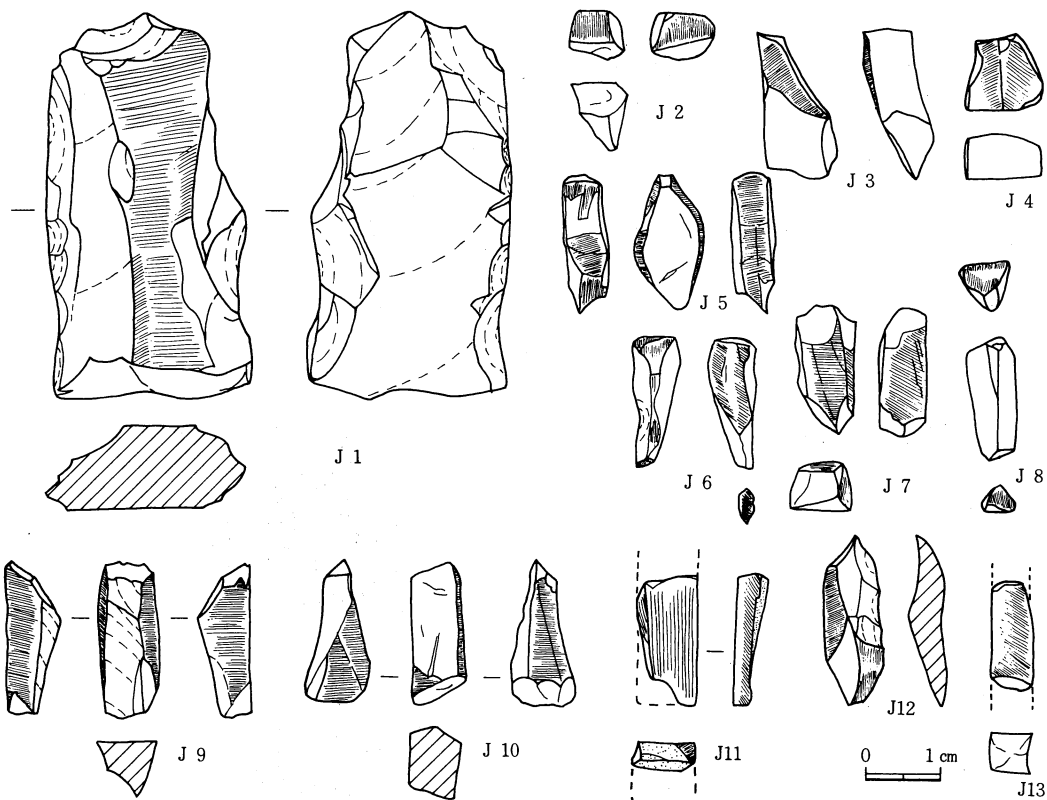
挿図120 S I 169遺物図その1 (土器S=1/4、拓本・紡垂車S=1/2)

構検出面上層周辺においては弥生土器数点・紡垂車 (D 1) が、埋砂内より石鏃 (S 2) が出土している。具体的時期を示すものとして、溝状遺構に貼り付いた状態で出土したP。4がある。時期は弥生時代前期の中頃と考える。

### 第3節 掘立柱建物跡 (SB)

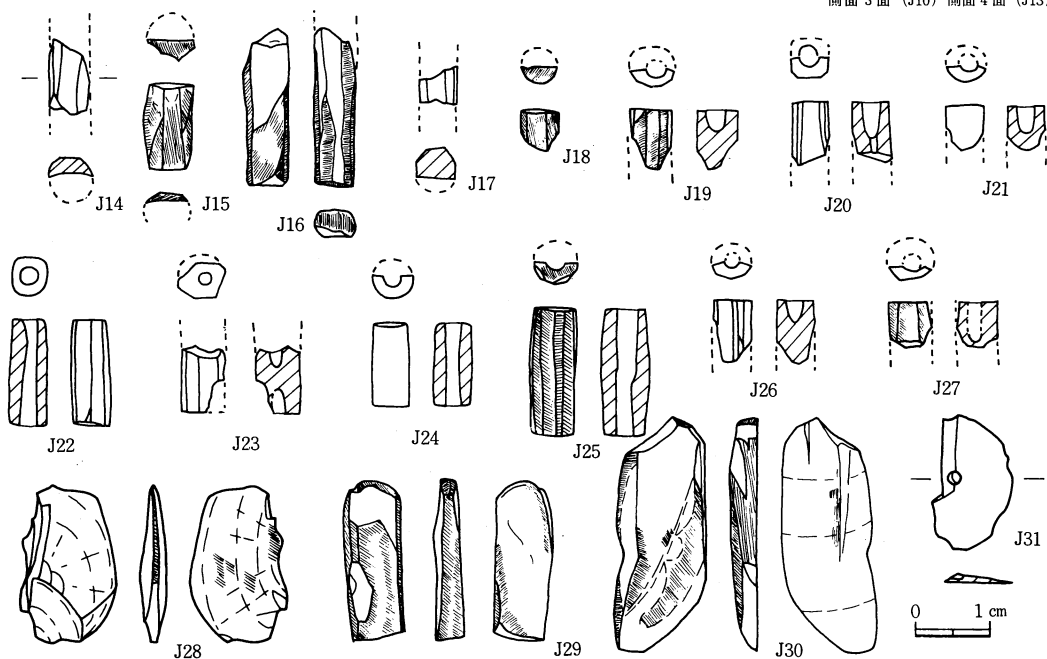
57年度調査地区では、10棟の掘立柱建物跡を検出した。1×1間1棟、1×2間5棟、1×3間2棟、不明2棟である。その内3棟は古墳時代以降の掘立柱建物跡である。

SB 31 (挿図 124, 図版 8)



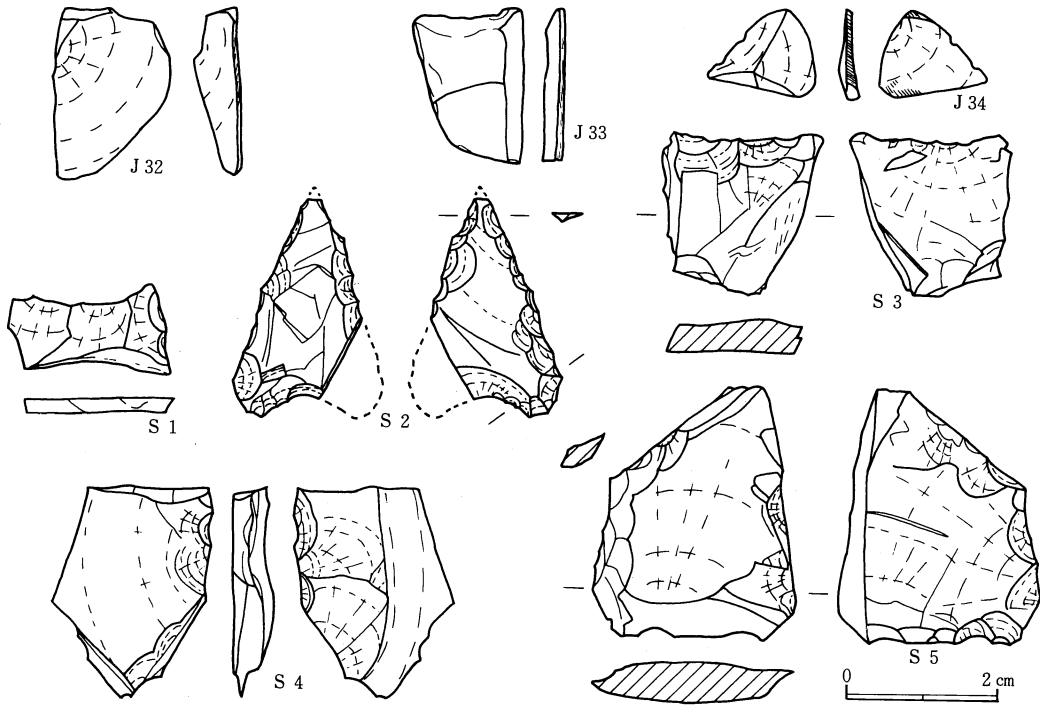
研磨面 1面のみ (J1・3・4・12)  
 側面2面 (J2・5・6・7・9)  
 上下面2面 (J8)  
 側面2面と上下面1面 (J11)  
 側面3面 (J10) 側面4面 (J13)

挿図121 S I 169遺物図その2 (荒割・研磨S=1/1)



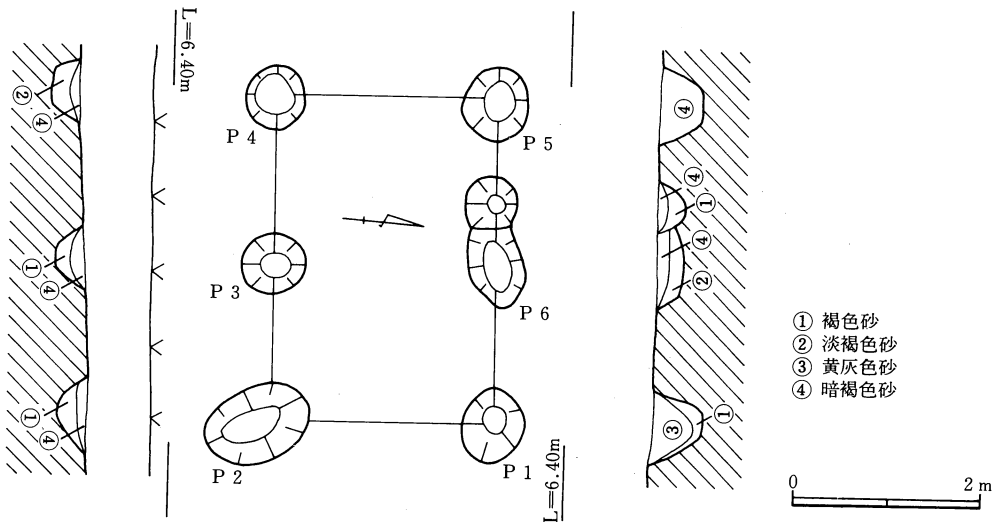
挿図122 S I 169遺物図その3 (研磨・穿孔S=1/1)





挿図123 S I 169遺物図その4 (碧玉・サヌカイト S=1/1)

11 E地区と11 F地区にまたがり、S I 147の南、S B 32の北に位置する桁行2間、梁間1間の建物跡である。桁行長3.48 m、妻通長2.40 mで、主軸をN-85°-Eにとる。各柱穴の規模はP 1 (80×68-55), P 2 (112×80-32), P 3 (68×64-30), P 4 (68×66-30), P 5 (80×68-48), P 6 (80×60-31) cmで柱穴間距離はP 1より順に2.60, 1.68, 1.80, 2.36, 1.80, 1.60 mを測る。各柱穴底の絶対高はP 1より順に4.90, 5.16, 5.10, 5.



挿図124 S B31遺構図 (S=1/80)

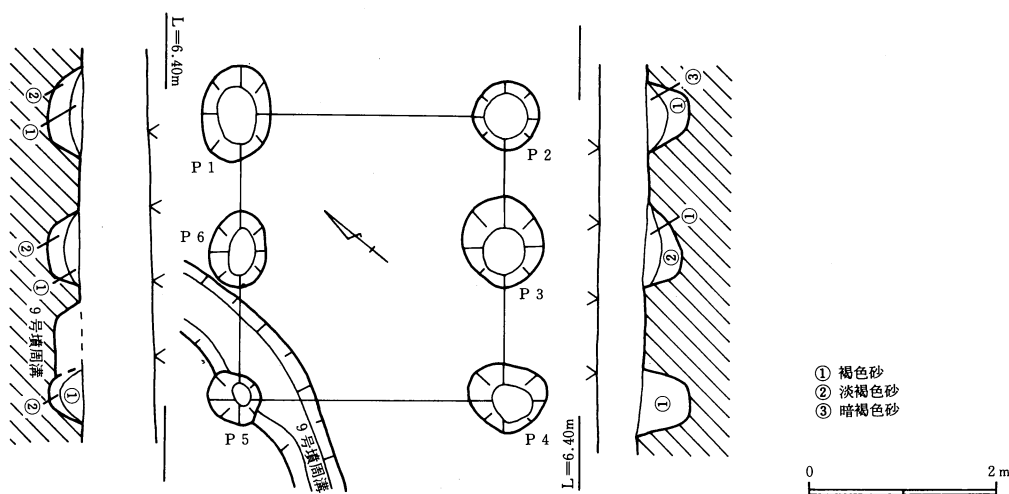
09, 4.97, 5.15 mで差は 26 cmである。床面積は 8.35 m<sup>2</sup>である。桁行長と妻通長の比が 1 : 0.7と桁行が長く、やや細長い建物となっている。柱穴内から土師器片が出土しているが、図化できなかった。時期は遺物、立地などから古墳時代前期のものとする。

**SB 32 (挿図 125, 図版 8)**

11 E地区の北東にあり、SB 31の南、SI 72の北東に位置する桁行2間、梁間1間の建物である。桁行長 3.04 m、妻通長 2.80 mで主軸はN-50°-Eをとる。各柱穴の規模はP 1 (100×72-29), P 2 (72×70-40), P 3 (96×84-36), P 4 (80×72-51), P 5 (68×56-38), P 6 (80×64-32) cmで、柱穴間距離はP 1より順に 2.80, 1.44, 1.60, 2.88, 1.48, 1.48 mを測る。各柱穴底の絶対高はP 1より順に 5.17, 5.25, 5.34, 5.22, 5.15, 5.16 mで差は 19 cmである。桁行長と妻通長の比が 1 : 0.92と比較的正方形に近い建物で、すぐ北のSB 31とは対照的である。柱穴内から土師器片が出土しているが図化できなかった。時期は出土遺物などから古墳時代前期から中期と思われる。

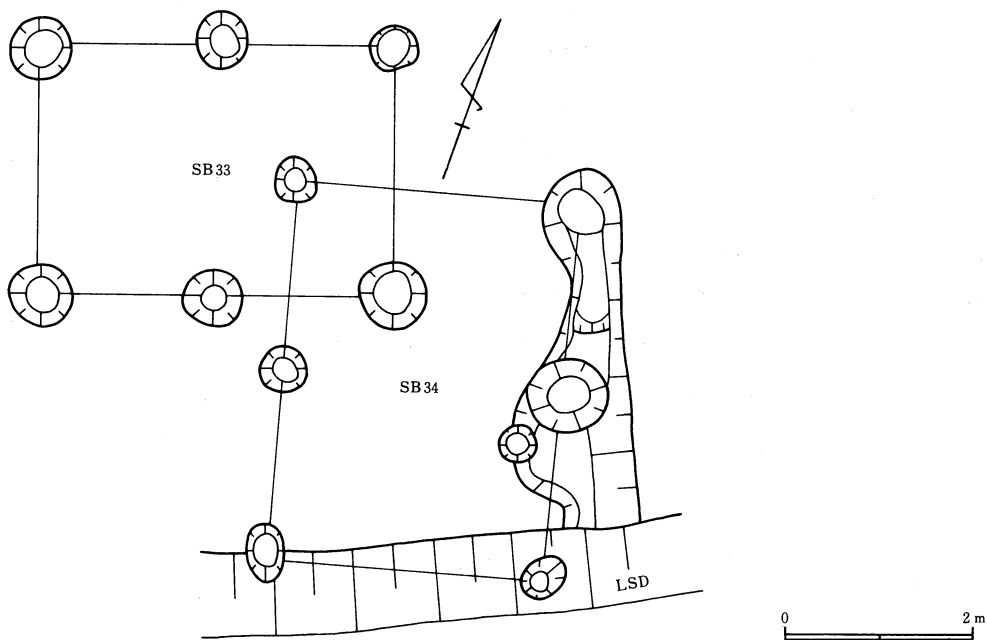
**SB 33 (挿図 126・127, 図版 9)**

10 E, 10 F地区にまたがり、多数のピットの中より検出された。SB 34と切り合う桁行2間、梁間1間の建物跡である。桁行長 3.76 m、妻通長 2.64 mで主軸方向はN-70°-Eである。各柱穴の規模はP 1 (72×72-44), P 2 (64×60-56), P 3 (68×68-68), P 4 (64×68-52), P 5 (52×60-48), P 6 (52×48-48) cmで柱穴間距離はP 1-P

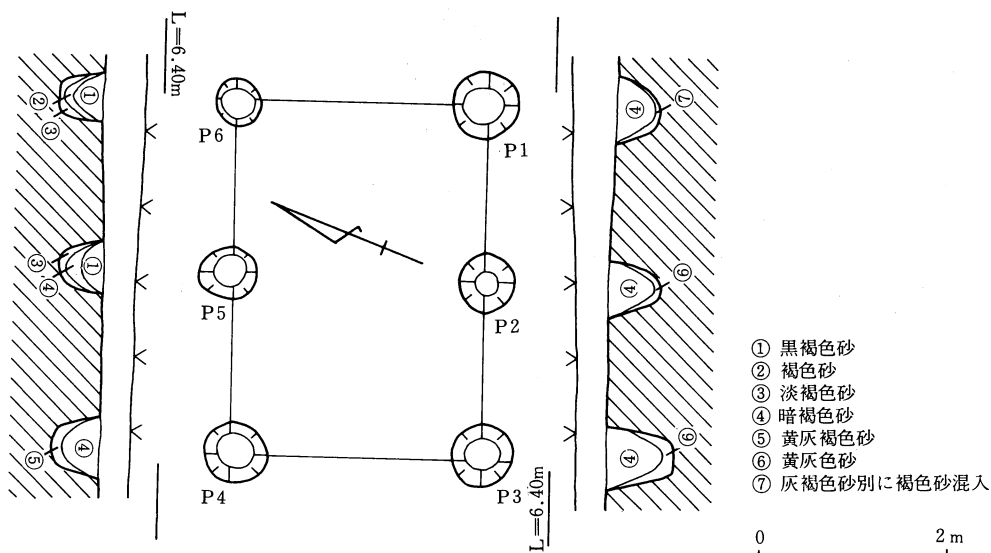


挿図125 SB32遺構図 (S=1/80)

2より 1.88, 1.88, 2.64, 1.88, 1.84, 2.64 mである。各柱穴底の絶対高はP 1より順に 5.28, 5.24, 5.08, 5.24, 5.28, 5.26 mで差は 20 cmである。妻側の柱穴間距離は同じ長さであり、桁側の柱穴間距離もほぼ同じ長さを持ち、整然とした掘立柱建物跡である。P 2・P 4内から土師器片が出土しているが、図化できなかった。時期は周辺の住居跡、掘



挿図126 SB33・34遺構図 (S=1/80)



挿図127 SB33遺構図 (S=1/80)

立柱建物跡などから古墳時代前期のものと考えられる。

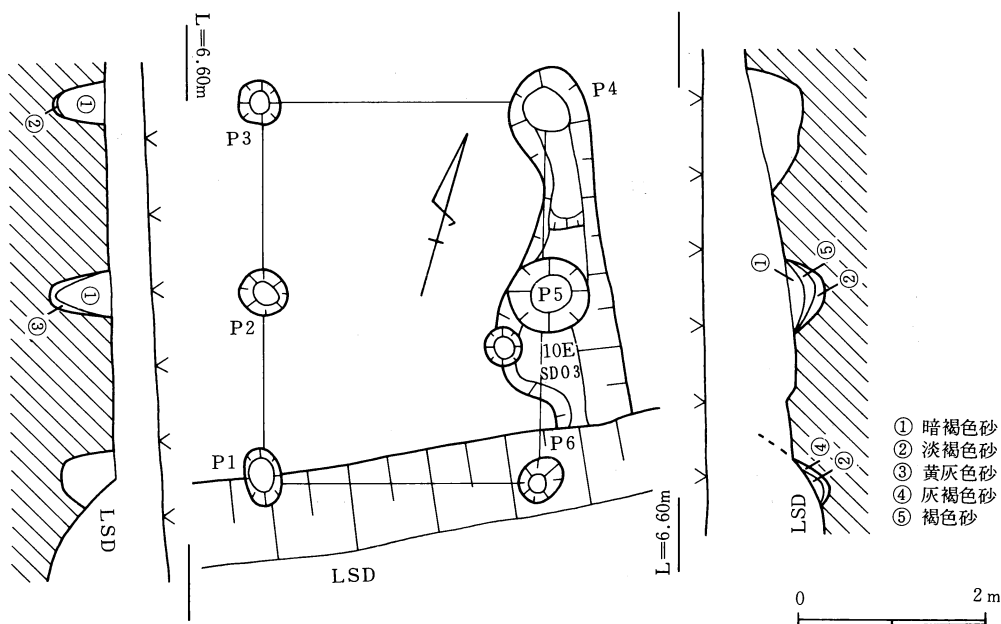
SB34 (挿図126・128, 図版9)

10 E地区の北側にあり, SB33と切り合う桁行2間, 梁間1間の建物跡である。桁行長4.04 m, 妻通長2.92 mで主軸方向はN-15°-Wである。柱穴のうちP1・P6はLSDに, P4・P5は10 ESD 03に切られており, それぞれ柱穴の下位のみ検出され, その大き

さは不明である。柱穴の規模はP 2 (48×52-64), P 3 (48×48-56) cmで柱穴間距離はP 1-P 2より2.00, 2.04, 2.96, 2.04, 2.04, 2.88 mである。各柱穴底の絶対高はP 1より順に5.26, 5.14, 5.18, 5.28, 5.06, 5.00 mで差は28 cmである。P 2より土師器片が少量出土しているが図化できない。時期は周辺の住居跡, 掘立柱建物跡などから古墳時代前期と考えられる。

**S B 35 (挿図 129, 図版 9)**

10 G地区北東, 南東区にまたがり7号墳の北東に位置する。10 GSK 20・LSDと切り合っている。LSD・10 GSK 20の方が古い。平行に2本の溝が掘られているが, 主軸はN-71°-Eにとる。北側の溝の大きさは, 長さ7.24 m, 幅1.48 m, 深さ1.00 mで, 南側の溝は長さ8.52 m, 幅1.46 m, 深さ1.18 mを測る。いずれも「U」字状に掘り込まれて



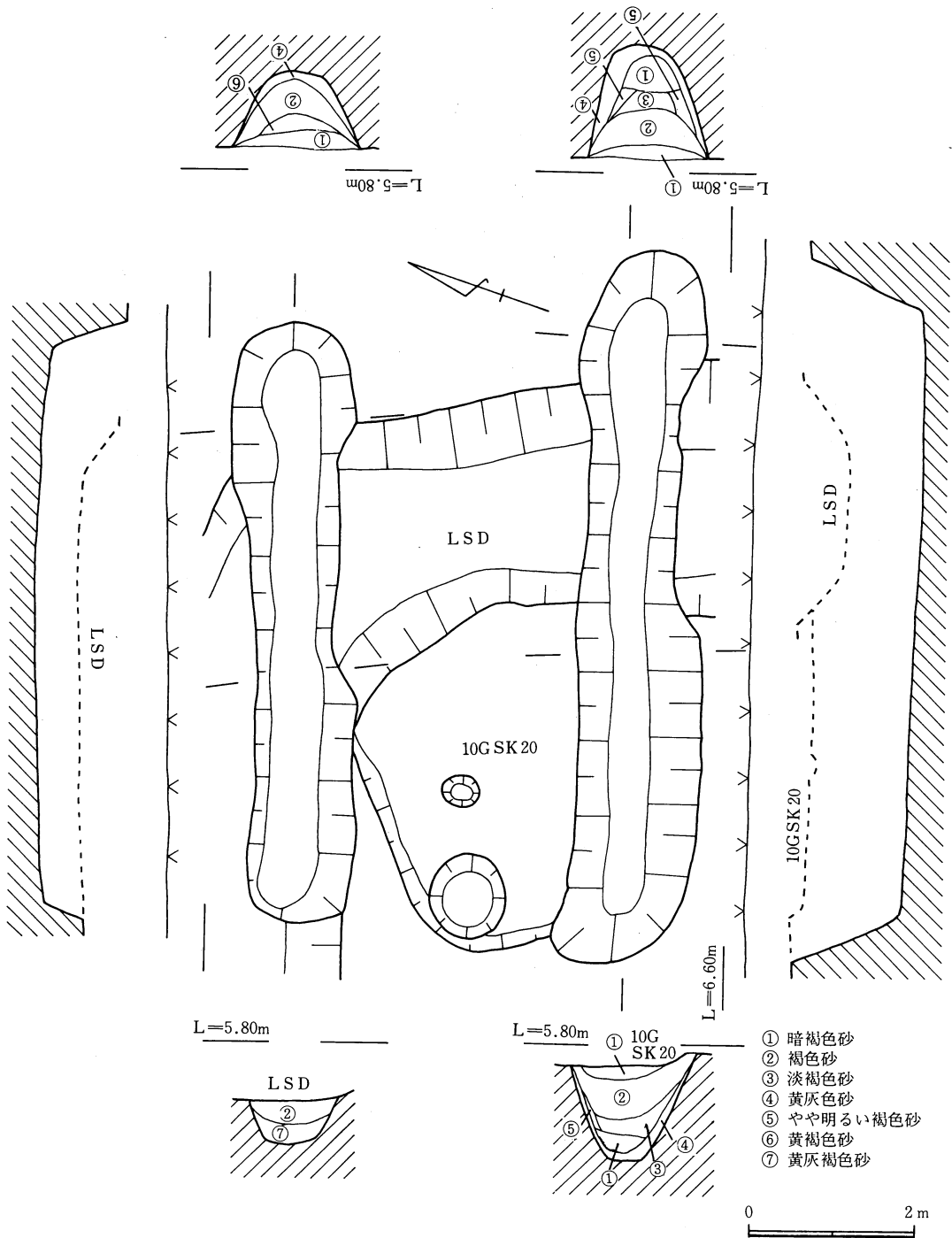
**挿図128 SB34遺構図 (S=1/80)**

いる。溝と溝との間隔は4.04 mを測る。溝の中からピットは検出できなかった。この2つの溝は, 形態, 規模ともほぼ類似し, また, 平行であることを考えればそれぞれ単独の遺構ではなく対になるものと考えられる。このことから掘立柱建物跡と推定した。溝の中からピットは検出できなかったが, 溝そのものが深く, ピットを掘らなくても柱を立てることができたのだろう。時期は, 古墳時代中期と考えられる。

**S B 36 (挿図 130, 図版 9)**

7号墳墳丘下層の10 G・10 F地区にまたがって検出した。主軸はN-75°-Eとなる。構造柱跡と考えるピットは多くの他の遺構と切り合うが, 新旧関係は判然としない。7号

墳より古いと言うにとどめる。関係すると思われるピットは全部で12個あるが、その内P1～8を構造柱跡と考えて、桁行3間、梁間1間の掘立柱建物跡であろう。規模は桁行長



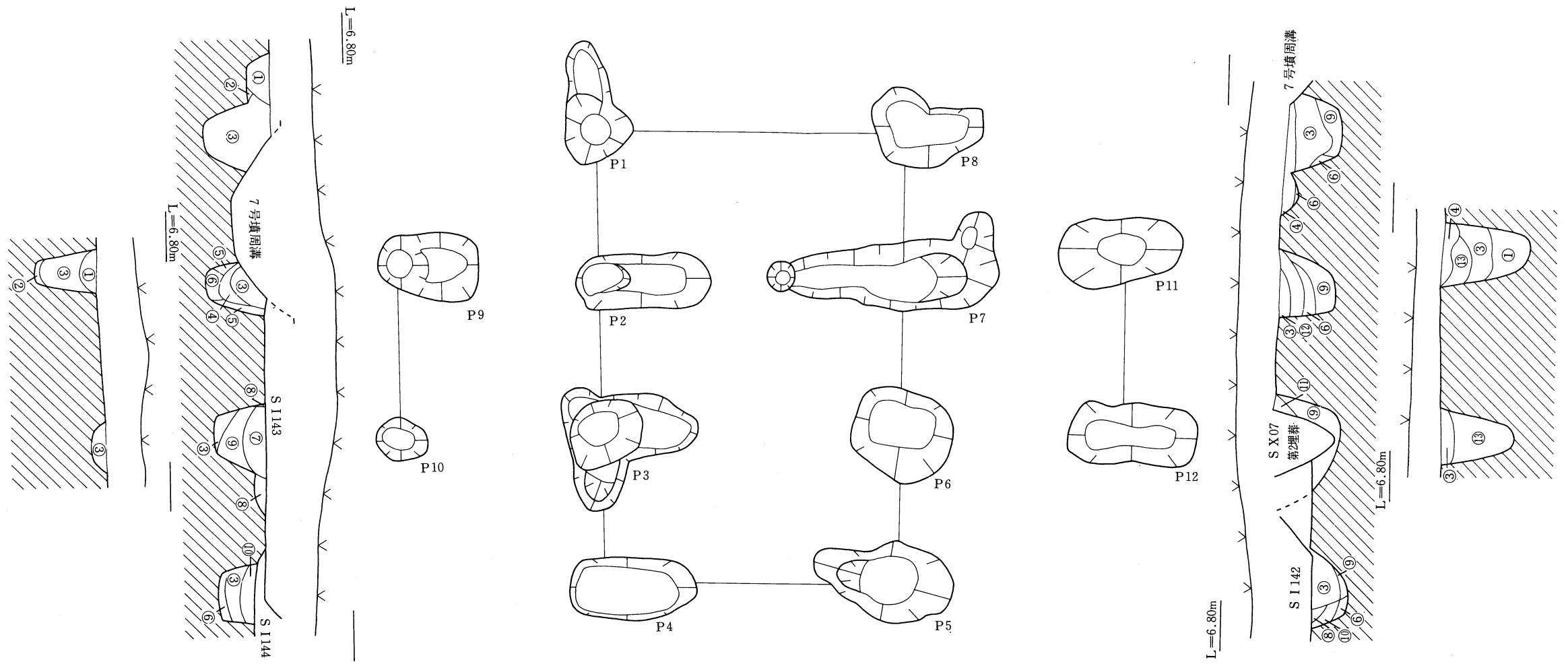
挿図129 SB35遺構図 (S=1/80)

7.32 m, 妻通長 5.00 (東側) m, 4.68 (西側) m であり, 建物は東妻側が大きくなっていたと推定される。各々の柱穴プランは, P 1 (1.08×1.90-1.10), P 2 (2.14×0.86-1.33), P 3 (2.06×1.80-0.83), P 4 (2.02×1.00-0.79), P 5 (2.24×1.28-0.84), P 6 (1.60×1.44-1.06), P 7 (3.90×1.12-1.01), P 8 (1.72×1.24-0.95) m であり, その多くは南北に長い楕円形を呈す。各柱穴底の絶対高は P 1 より順に 4.55, 4.54, 4.65, 4.69, 4.70, 4.91, 5.05, 4.97 m とかなり低い。柱穴間距離は P 1 より 2.36, 2.40, 2.56, 4.68, 2.50, 2.30, 2.52, 5.00 m を測る。ところで P 2-7, P 3-6 の延長線上にも各々 1 対のピットがあるが, 位置や形状より S B 36 に付属する遺構と思われる。各々の規模は P 9 (1.62×1.06-1.24), P 10 (0.84×0.70-1.09), P 11 (1.96×1.34-1.32), P 12 (2.02×0.94-1.25) m を測る。各ピット底の絶対高は P 9 より 4.58, 4.71, 4.62, 4.77 m と P 1~8 とほぼ同じである。P 9 には (0.80×0.80-0.52) m の柱痕が認められた。これらの 4 つのピットにもかなりしっかりした柱が立てられていた可能性が強い。出土遺物は弥生土器が主で, 土師器の小片がそれに混る程度である。時期は遺構の切り合い関係より古墳時代前期から中期と思われる。

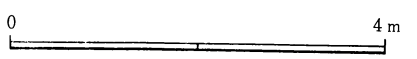
#### S B 37 (挿図 131~133, 図版 9・22)

10 C 地区の南西側に位置する。C ラインより南には 7 世紀以降の遺物, 遺構が目立つようになるが, S B 37 もその一つである。地形は西からゆるやかに下がり, 東側は低くなるが, 黒砂はそれに反して厚くなる。S B 37 周辺の黒砂は比較的薄い。その黒砂層(黒褐色, 暗褐色砂層)を 48 cm 程掘り下げたところで, 方形プラン内に円形を呈する黒ずみをもつ粘質砂の土坑を 4 個検出した。それらを切る遺構はなく, 下位に位置する S B 41, S I 154・156 より新しい遺構である。各土坑内にある黒ずみは層的には周辺より若干暗く, あるいは濃くみえるもので, この部分に柱が建てられたと思われる。主軸は N-19°-W である。各柱穴は方形の掘り方を持つ。掘り方プランは P 1 より順に (176×153-33), (105×95-55), (197×167-41), (163×135-39) cm。各柱穴プランは P 1 (53×58-27), P 2 (50×52-36), P 3 (74×73-23), P 4 (59×63-22) cm を測る。柱穴間距離は P 1 より, 4.96, 3.48, 4.68, 3.80 m を測る。また P 3 内には北と南に 1 個ずつの小ピットがある。いずれも P 3 の床面に垂直に, 24~32 cm 掘り込まれている。場所的に柱を固定する控柱があったのかも知れない。他の 3 柱穴はこのような施設はなく, 遺物からみても P 3 は特殊な役割を果たしていたと推定される。P 3 より完形の土師器甕 (P<sub>0</sub>6) が出土している点等も, 単なる柱の掘り方では理解できないことである。

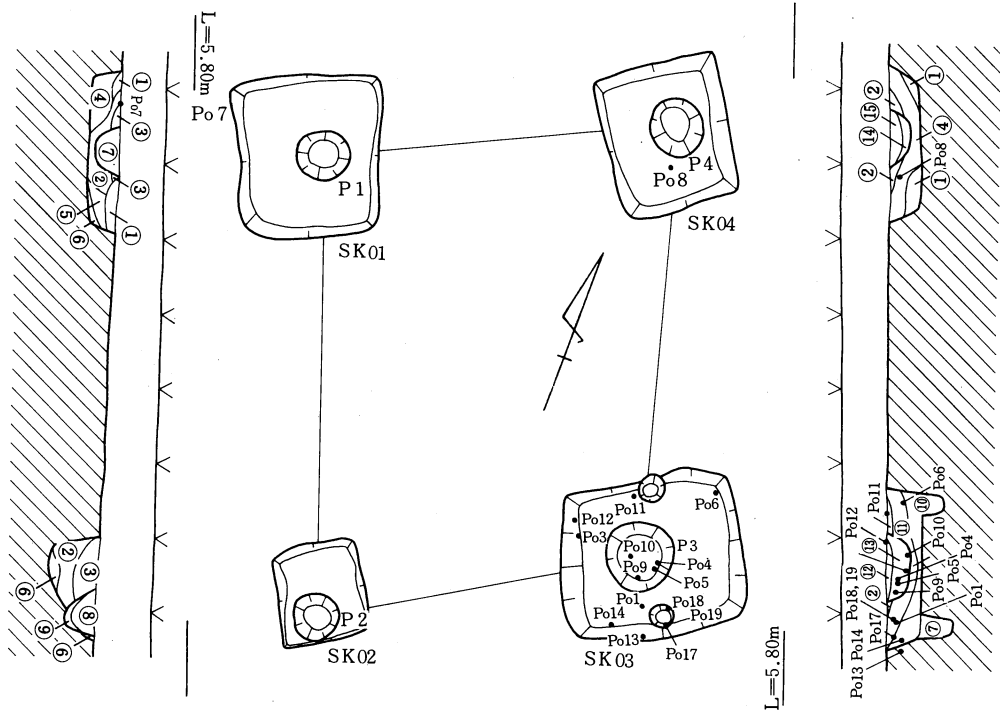
P 3 内出土遺物中に墨書土器が 3 点ある。「大」と墨書するもの 2 点 (P<sub>0</sub>12, 13), 「魚」と記すもの 1 点 (P<sub>0</sub>14) である。周辺からも墨書された土器が 7 点出土している。文字は「大」「十」「家舌」? 「山」「否」と多岐に渡るが, 「大」が最も多い。当遺跡では以前 17 G



- |                |         |
|----------------|---------|
| ① 暗褐色砂         | ⑧ 淡灰褐色砂 |
| ② 黄灰色砂         | ⑨ 暗黄褐色砂 |
| ③ 褐色砂          | ⑩ 黄褐色砂  |
| ④ 濃褐色砂         | ⑪ 淡褐色砂  |
| ⑤ 淡灰褐色砂 (白っぽい) | ⑫ 淡黑褐色砂 |
| ⑥ 灰褐色砂         | ⑬ 暗灰褐色砂 |
| ⑦ 黄灰褐色砂        |         |



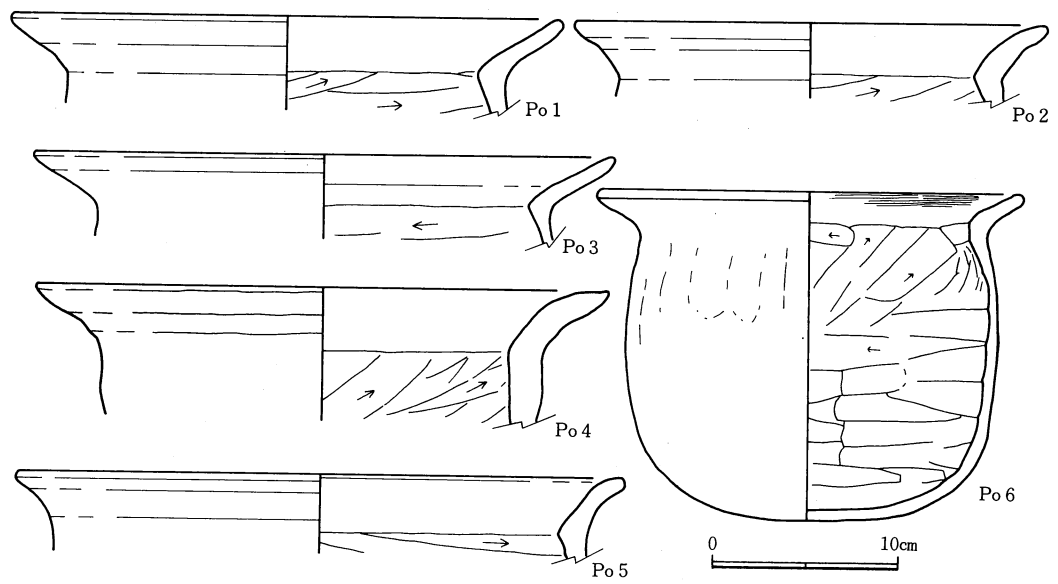
挿図130 SB36遺構図 (S=1/80)



- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| ① 褐色砂(やや粘質)      | ⑨ 黄褐色砂            |
| ② 黄褐色砂(粘質)       | ⑩ 褐色砂(やや粘質赤色斑点混入) |
| ③ 褐色砂に黄色粘土混入     | ⑪ 暗黄灰色粘土層に赤色粘土塊混入 |
| ④ 暗黄色粘質砂層(粘土に近い) | ⑫ 暗褐色粘質砂          |
| ⑤ 暗茶褐色砂          | ⑬ 暗黄褐色粘質砂に粘土塊混入   |
| ⑥ 淡黄茶褐色砂         | ⑭ 濃黄褐色砂(やや粘質)     |
| ⑦ 濃黄褐色砂          | ⑮ 〃 (強い粘質)        |
| ⑧ 暗黄褐色やや粘質       |                   |

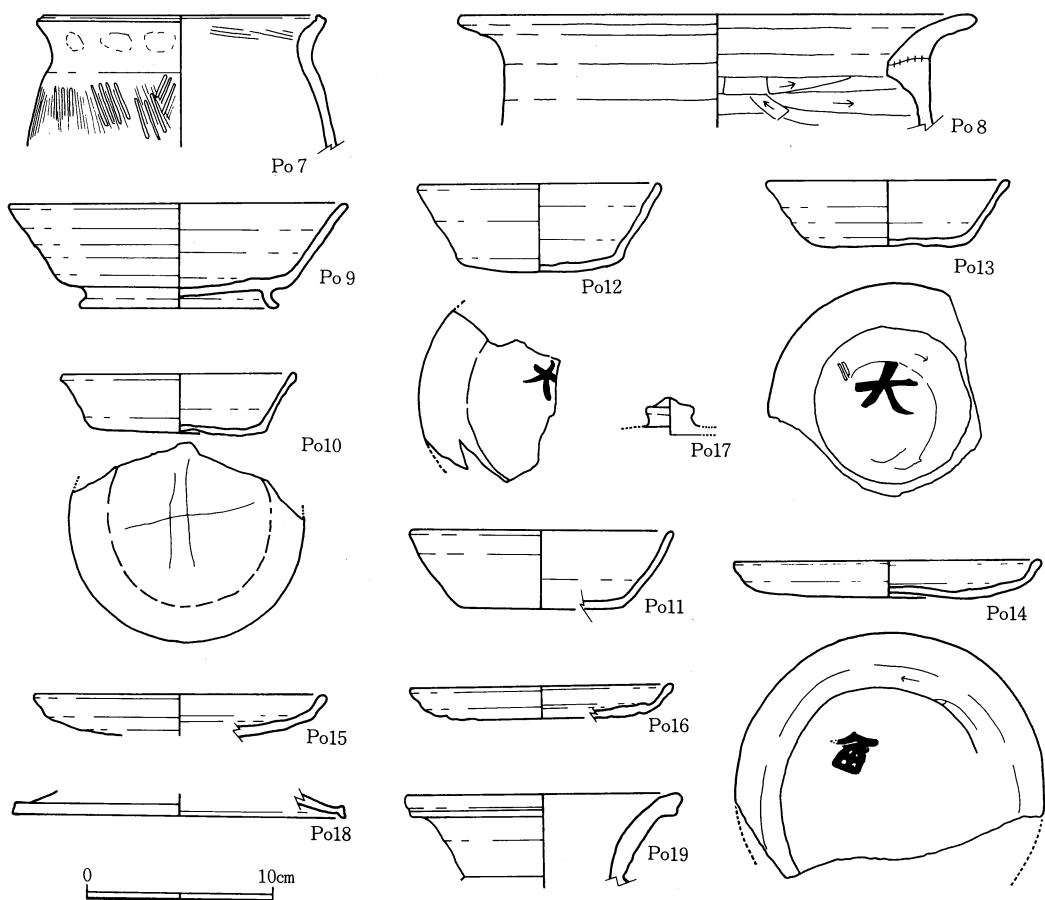


挿図131 SB37遺構図 (S=1/80)



挿図132 SB37遺物図その1 (S=1/4)



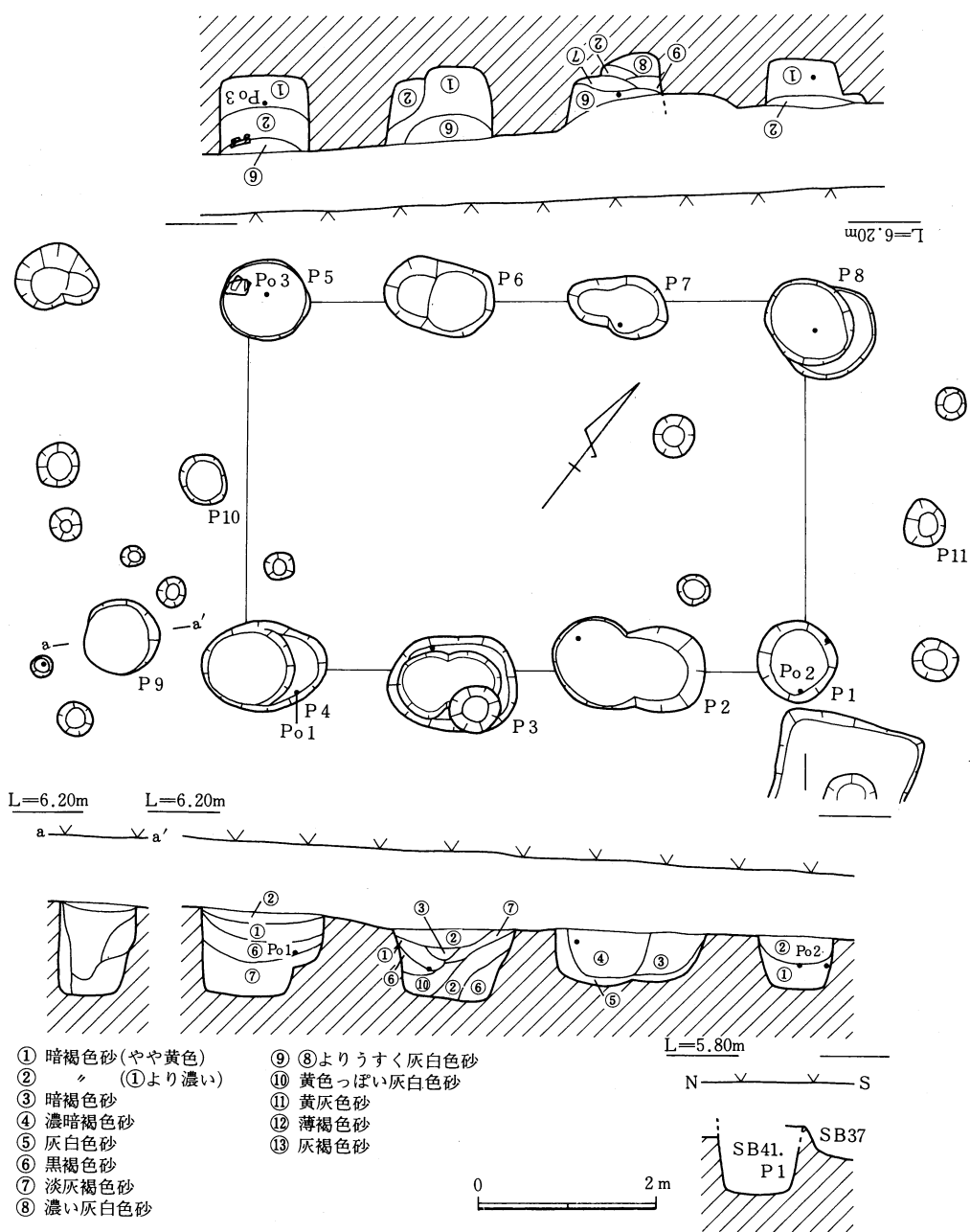


挿図133 SB37遺物図その2 (S=1/4)

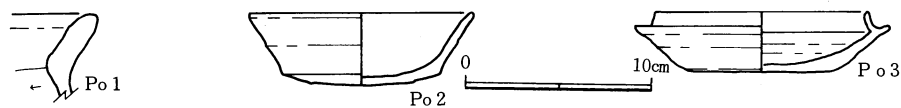
地区よりこのような土師器（高台付碗）が1点出土しているが<sup>※3</sup>、黒砂層の遺物であった。今回かなりまとまって墨書土器、その他土師器が出土していることは、南側の粘土層上面の鉄器群、帯金具等の出土と相まって、SB37の時期にこのあたりが何か特別な意味をもつ地域として活用されていたことを推定させよう。時期は8世紀後半以降（奈良時代）と考えられる。

SB41 (挿図134・135, 図版10)

11C南東区, 24号墳填丘南裾部で検出した。出土遺物からみて24号墳より新しい遺構であろう。各々のピットは表1で示したが70~100cm程度のほぼ正円形で80~100cmの深さをもつ大きなものである。単純なものはP1とP5の両対角線のピットで、その反対側のもは上部にやや広がりをもつ。それに対して中央の4つは2重にピットをもつ。柱痕らしいものは確認できなかった。P3の上面には浅いピットがみられる。P2・3・6・7は2重の円のそれぞれが2-7, 3-6について対応する位置にあるので柱のたてかえをしているものと考えられる。柱穴は断面から2・3・6・7については7を除いて東側



挿図134 SB41遺構図 (S=1/80)



挿図135 SB41遺物図 (S=1/4)

のものが新しいと考える。その場合南側のP 1～4までの柱穴間距離は古いものでP 1～2から順に1.5, 2, 2.5 mとなり、新しいもので全て2 mと均一になる。北側のP 5～8については、古いものでP 5より順に1.5, 2, 2.5 mであり、新しいもので2, 1.5, 2.5 mとなる。柱穴底のレベルは南側で海拔420 cm前後、北側で海拔430～440 cm前後である。柱の大きさは不明である。柱穴内から須恵器甕・蓋坏の破片や土師器片(P<sub>0</sub>1)が出土した。図で示したよりかなり低いレベルで出土した破片もある。須恵器は24号墳のものが混入したと考えられる。P 1から出土した土師器坏(P<sub>0</sub>2)は壁面に密着しており、この土器より新しい時期にSB 41が作られた事はまちがいないだろう。同じP 1内からは馬の歯が壁面から出土している。周辺のピットからも土師器や須恵器が出土しており、ほぼ同時期のピットと考えられる。P 9は南側の桁とほぼならぶ位置にあり、断面にも柱痕らしいものが観察できるのでこのSB 41に伴うものかもしれない。P 10, P 11も同様に考える。おそらく直接伴わないものでもほぼ時期を同じくするものだろう。土師器を含むピットはこのSB 41の北東側で検出されている。(P 198～200 参照)

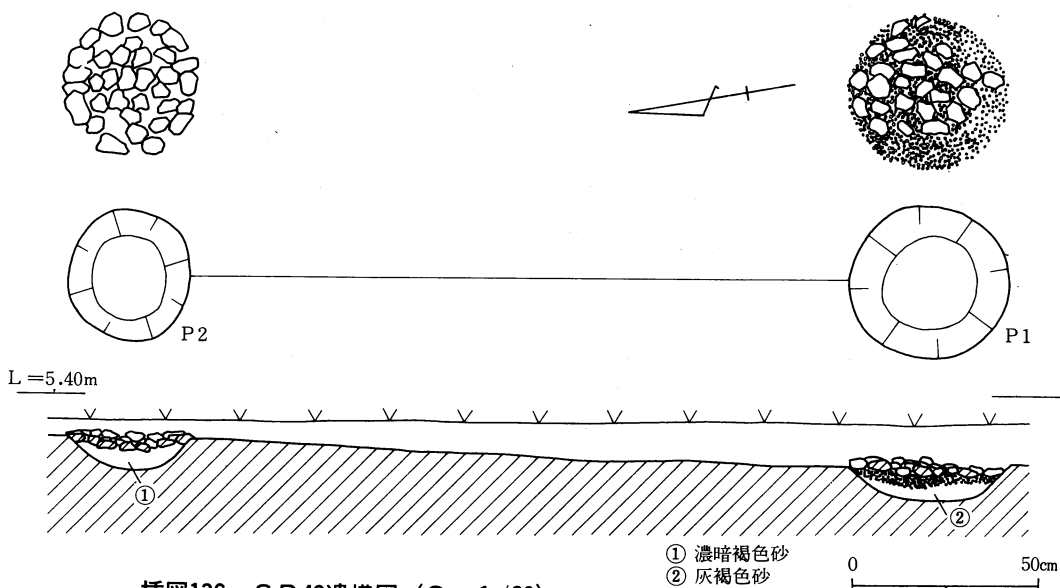
SB 41 P<sub>0</sub>2とSB 37の出土遺物とはあまり時期差はないが、切り合い関係からSB 41はSB 37より古い。

	東西×南北-深さ		東西×南北-深さ
P 1	88×90-60	P 5	98×86-86
2	110×100-60 (170×96-58)	6	70×81-80 (120×76-70)
3	70×72-76 (130×108-80)	7	100×40-60 (110×72-80)
4	102×96-94	8	100×96-58

表1 SB 41 柱穴計測表 (単位cm)

### SB 42 (挿図 136, 図版 10)

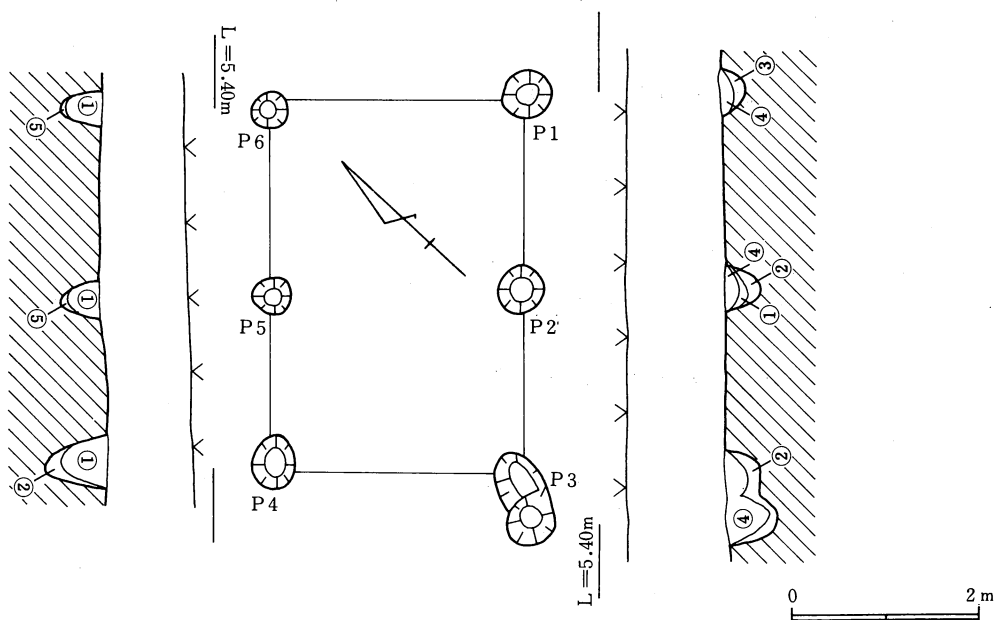
10 B地区の南東黒砂中に7～8 cm大の角石や砂利を敷きつめたピットを2個検出した。この辺りの黒砂は薄く、色も茶褐色に近いものである。P 1 (35×33-9)cmでは角石はピット内に2, 3段にして、さらにそのわまわりに輪をかくように一段敷かれていた。P 2 (43×41-9)cmは角石は少なく、分布もかたよっている。角石間に砂利が灰褐色砂と共に混じっていた。ピット間距離は2.2 mでほぼ北に向かってならんでいる。周辺にこれに類するピットは他に見られなかった。こうしたタイプのピットは長瀬高浜遺跡では前例がなく用途は不明確であるが、他遺跡の例から掘立柱の柱穴跡の可能性が強い。ピットはおそらくもっと上面より掘り込まれ、柱を支えるために角石、砂利が敷かれたものと考えられる。時期は不明であるが古墳時代以後と思われる。



挿図136 SB42遺構図 (S=1/20)

SB 43 (挿図 137, 図版 10)

10 C地区北東に位置し、東にS I 151, 北西にS I 152, 西にS I 154がある。主軸はN-49°-Eで桁行2間, 梁間1間の建物である。桁行長3.92m, 妻通長2.72mで床面積10.7m<sup>2</sup>を測る。柱穴は6個で, 柱穴間距離はP1から2.00, 1.92, 2.68, 1.88, 2.04, 2.72mである。各柱穴プランはP1より(52×52-24), (48×48-36), (56×52-36), (56×



挿図137 SB43遺構図 (S=1/80)

48-64), (40×40-44), (40×40-44)cmである。柱穴底の絶対高はP 1より 3.84, 3.68, 3.68, 3.60, 3.76, 3.76 mで差は 24 cmである。P 4 から土師器が少量出土しているが、図化できなかった。時期は周辺の遺構から考えて古墳時代前期と考えられる。

	平面プラン	主 軸	面積 (m <sup>2</sup> )	主柱数	備 考
S I 141	長方形(推定)	N-62°-W	20.2 以上	4 (推定)	2 棟が存在する。  側溝 土錘・小型土器 東側にSKを持つ  釣針出土 弥生前期玉作工房  弥生前期玉作工房  鞆の羽口, コシキ  弥生前期玉作工房
142	円形	—	44.2	6	
143	方形?	N-80°-W	20.8 以上	不明	
144	五角形	—	45.7	5	
145	方形	N-25°-W	25	4	
146	方形	N-7°-W	36 以上	4 (推定)	
147	正方形	N-41°-W	35(推定)	4	
148	正方形	N-5°-W	22.5	4	
149	方形	N-10°-W	不明	4 (推定)	
150	長方形	N-47°-E	18.7	2	
151	隅丸方形	N-45°-W	不明	4 (推定)	
152	隅丸方形	N-50°-E	15.8	4	
153	長方形	N-54°-E	17.9	4	
154	長方形	N-47°-E	18.4	2	
155	正方形	N-30°-W	28.1	4	
156	円形	—	28.7	6	
157	方形?	不明	不明	不明	
158	不明	不明	不明	4 (推定)	
159	長方形	N-46°-E	16.5	2	
160	方形(推定)	N-31°-W	不明	4 (推定)	
161	方形	N-42°-W	25.5(推定)	4 (推定)	
162	方形	N-38°-W	不明	4	
163	長方形	N-49°-E	15.2	2	
164	長方形	N-40°-W	10.4	4	
165	長方形	N-5°-W	17.6	2	
166	多角形(推定)	不明	不明	不明	
167	方形	N-9°-W	不明	4 (推定)	
168	長方形	N-9°-E	22.8(推察)	2 (推定)	
169	不明	—	不明	不明	

表 2 57 年度調査地区竪穴住居表

	柱間規模	主 軸		柱間規模	主 軸
S B 31	1 × 2 間	N-85°-E	S B 36	1 × 3 間	—
32	1 × 2 //	N-50°-E	37	1 × 1 //	N-19°-W
33	1 × 2 //	N-70°-E	41	1 × 3 //	N-53°-E
34	1 × 2 //	N-15°-W	42	不 明	不 明
35	不 明	N-71°-E	43	1 × 2 間	N-49°-E

表 3 57 年度調査地区掘立柱建物跡表

注 1. 長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 V P 113~126

注 2. 瑪瑙を縦方向の細長い剝離によって錐状に調整したもののうち、その側面に磨耗状態(物によっては光沢を放つ)のあるもの、形状としては棒状ながら丸味をもつものを石錐とした。完品はなく長さ 1 cm 未満・径約 1~1.5mm のものが多い。

注 3. 「長瀬高浜遺跡報告書 IV」 P 185 参照

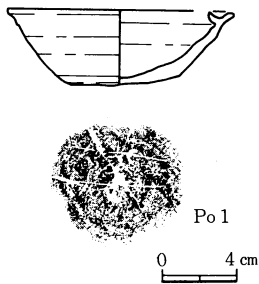
注 4. P. 2 は底面に 1 度ヘラ削りを施す伯耆国庁第 2 段階に該当するものである。

#### 第4節 墳墓

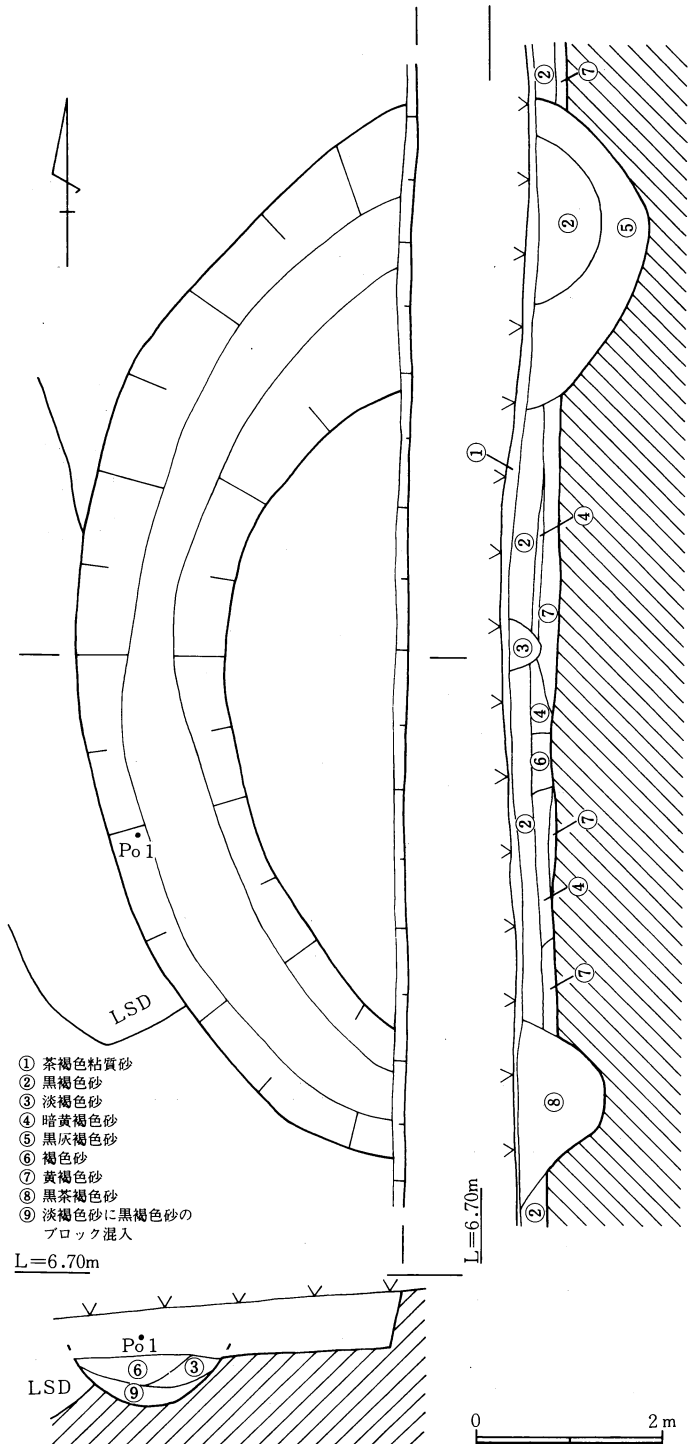
57年度調査地区で検出された古墳時代の墳墓は、古墳11基、箱式石棺墓2基、木棺墓1基、土壙墓3基、須恵器甕を蓋に用いたもの1基である。そのうち9・24号墳の西側は54年度に調査した。9号墳の埋葬施設は、報告書Ⅲで報告済であり今回除外する。24号墳は54年度分を含め報告する。

6号墳(挿図138・139, 図版23・40)

9G南西区にあり7号墳の北東, 81号墳の北に位置しLSDを切っている。東側は調査区域外のため未調査であり, 周溝の一部を検出したのみである。径13m(推定)。周溝はU字状に掘り込まれ, 幅164~228cm, 深さ48~84cmを測る。埋葬施設は検出しておらず, 未調査地区にあると思われる。周溝上面よりP<sub>o</sub>1を検出した。P<sub>o</sub>1は7世紀前



挿図138 6号墳遺物図  
(S=1/4)

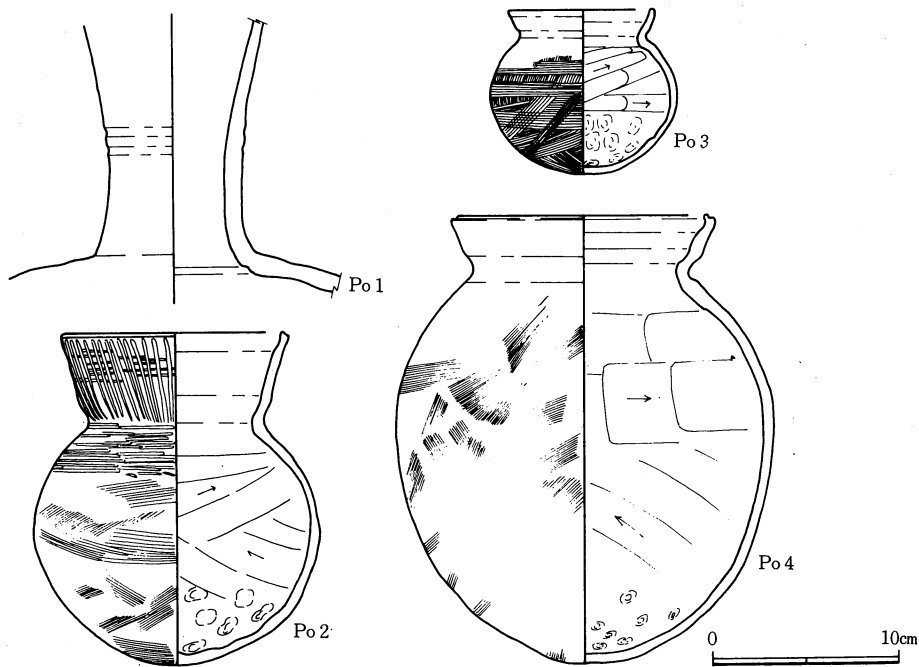


挿図139 6号墳遺構図 (S=1/80)

半頃の須恵器であり、その頃に6号墳は造られたかと考える。

7号墳（挿図140～155，図版23～25・40）

7号墳は6号墳と北東で隣接し9号墳の約20m北東にあり，南東は81号墳と隣接する位置にある。10F地区のほとんどを占めLSDの中にちょうどおさまるような立地である。墳形は円形で直径17m，周溝から周溝までの径23.2m，周溝は幅約3m，深さ1.4mのU字形で，場所によって幅も深さも大きく差がある。西側を中心に重機により削平されていたため，盛砂の有無は不明である。埋葬施設は北西の周溝の肩に第1埋葬施設箱式石棺が，西側で第2埋葬施設が，南東側の周溝内に第3埋葬施設がそれぞれ検出された。また，周溝内の南・南東・東側の各場所からそれぞれ馬墓が検出された。

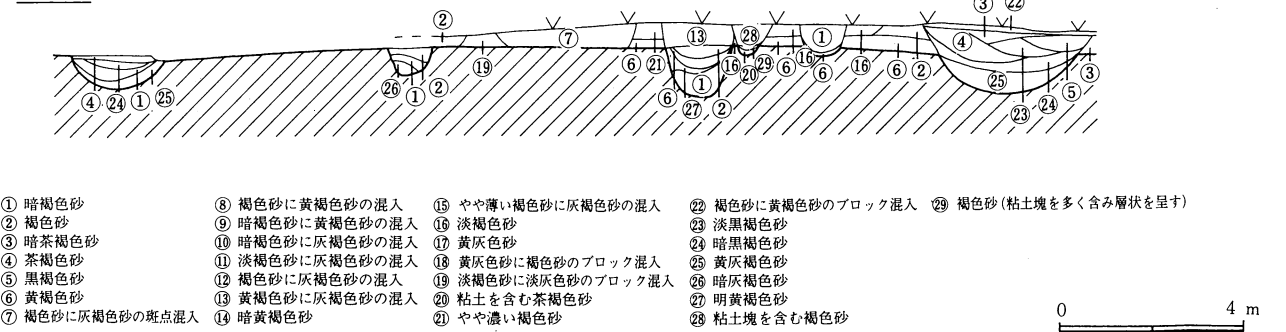
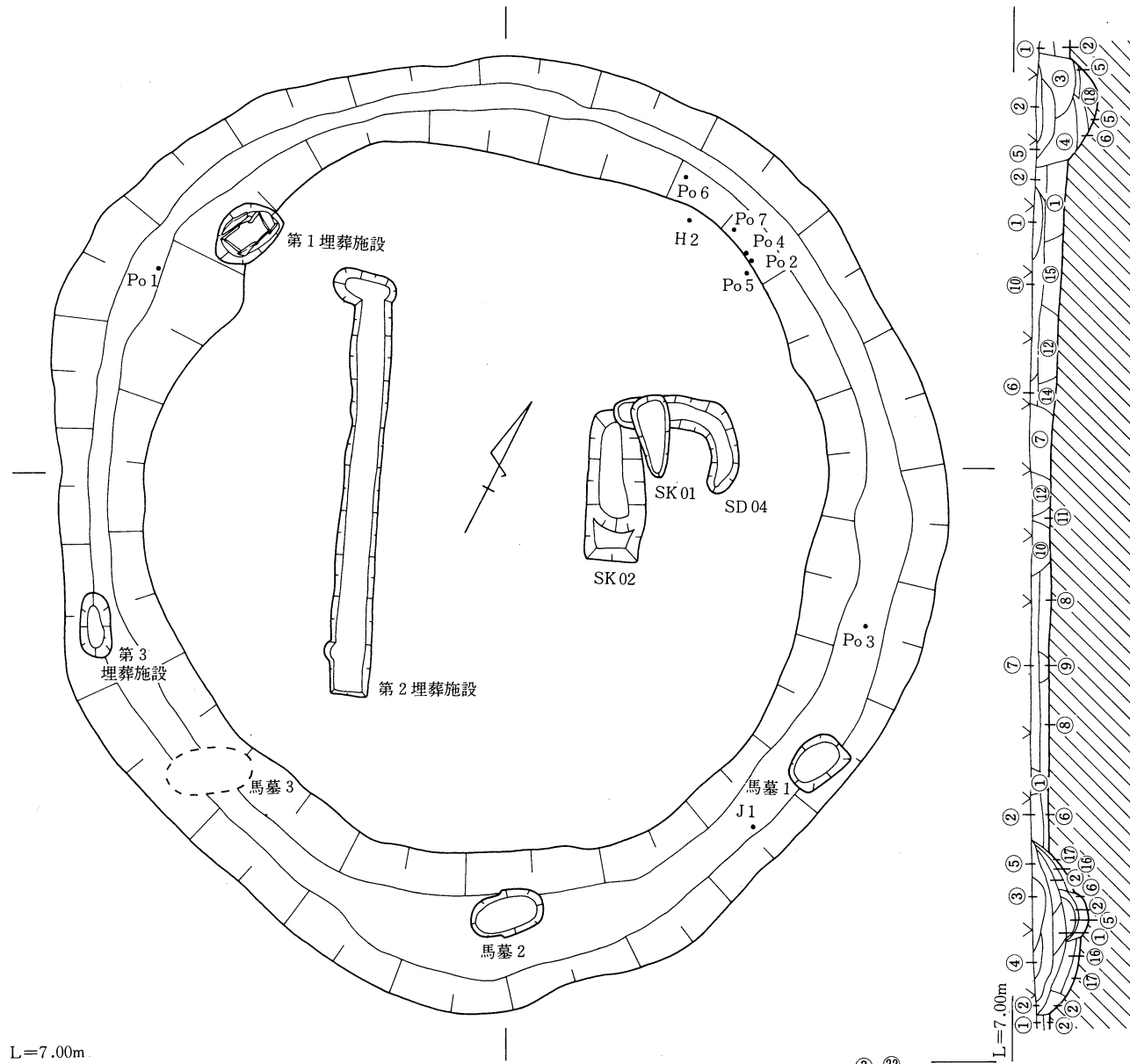


挿図140 7号墳遺物図その1 (S=1/4)

(1)第1埋葬施設（挿図143，図版23・24）

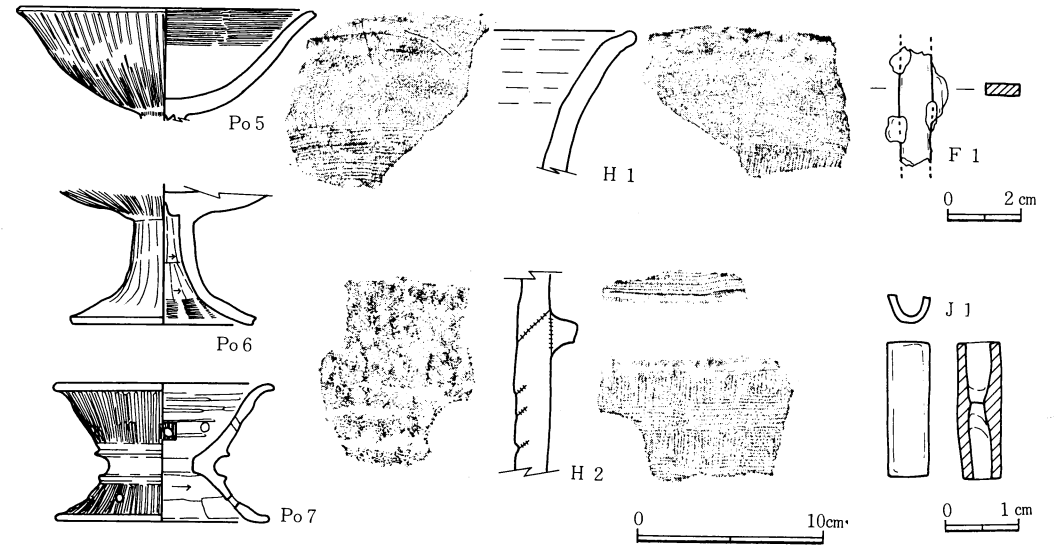
古墳の北西側，周溝上に位置する小型の箱式石棺で，主軸をN-27°-Eにとる。蓋石は2枚を基本とし，その間を塞ぐように小さな板石が配されている。棺は長軸88cm，短軸62cm，深さ22cmの墓壇内に数十枚の大小の板石を用いて，内法長軸46cm，短軸25cm，床面までの深さ10cmの箱形に組まれたものである。側壁は3枚づつ，小口は1枚づつの板石が用いられているが，西側の側壁の外側にはさらにより大きな板石が立てられている。

棺内では中央部やや東側にかたまった状態で人骨を検出した。また，東側壁際に歯が2本遺存していた。人骨，歯では性別は特定できなかったが，年齢は壮年前半と推定される。



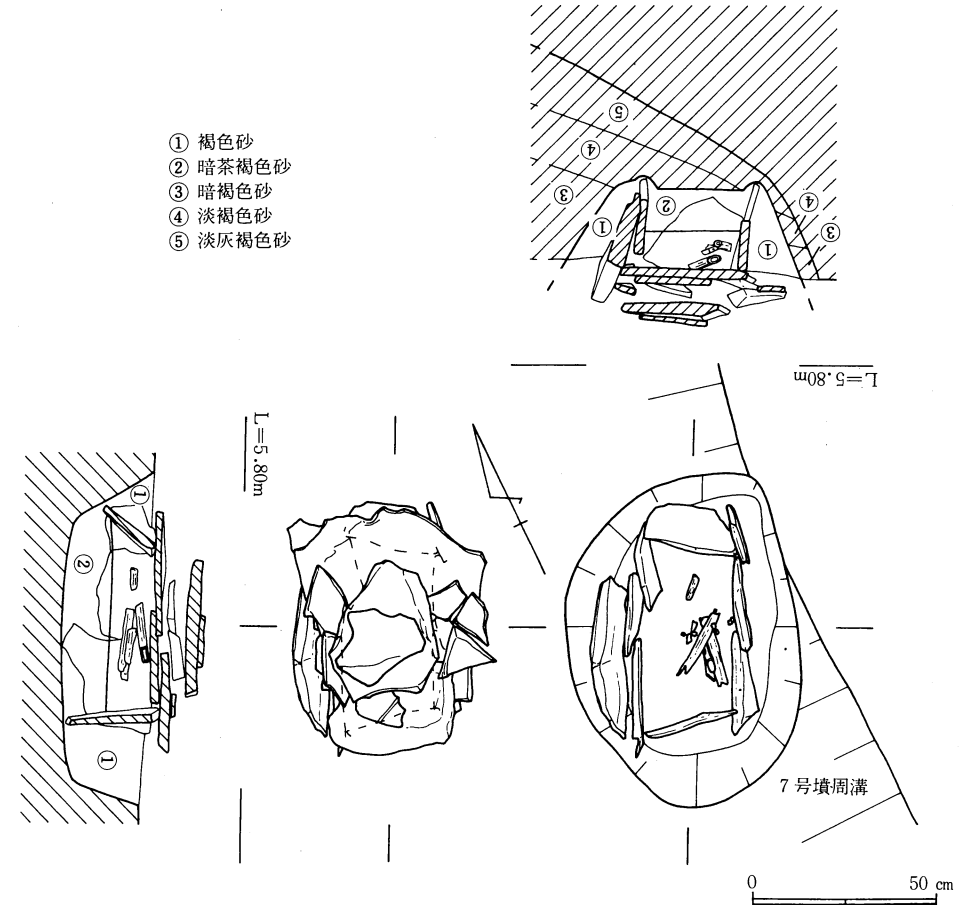
- |                 |                |                    |                      |
|-----------------|----------------|--------------------|----------------------|
| ① 暗褐色砂          | ⑥ 褐色砂に黄褐色砂の混入  | ⑬ やや薄い褐色砂に灰褐色砂の混入  | ⑳ 褐色砂(粘土塊を多く含む層状を呈す) |
| ② 褐色砂           | ⑦ 暗褐色砂に黄褐色砂の混入 | ⑭ 淡褐色砂             | ㉑ 褐色砂(粘土塊を多く含む層状を呈す) |
| ③ 暗茶褐色砂         | ⑧ 暗褐色砂に灰褐色砂の混入 | ⑮ 黄灰色砂             | ㉒ 淡黒褐色砂              |
| ④ 茶褐色砂          | ⑨ 暗褐色砂に灰褐色砂の混入 | ⑯ 黄灰色砂             | ㉓ 暗黒褐色砂              |
| ⑤ 黒褐色砂          | ⑩ 淡褐色砂に灰褐色砂の混入 | ⑰ 黄灰色砂に褐色砂のブロック混入  | ㉔ 黄灰褐色砂              |
| ⑥ 黄褐色砂          | ⑪ 褐色砂に灰褐色砂の混入  | ⑱ 淡褐色砂に淡灰色砂のブロック混入 | ㉕ 暗灰褐色砂              |
| ⑦ 褐色砂に灰褐色砂の斑点混入 | ⑫ 黄褐色砂に灰褐色砂の混入 | ㉒ 粘土を含む茶褐色砂        | ㉖ 明黄褐色砂              |
|                 | ⑬ 暗黄褐色砂        | ㉓ やや濃い褐色砂          | ㉗ 粘土塊を含む褐色砂          |

挿図141 7号墳遺構図 (S=1/160)



挿図142 7号墳遺物図その2 (土器・埴輪 S=1/4, 鉄製品 S=1/2, 玉未製品 S=1/1)

- ① 褐色砂
- ② 暗茶褐色砂
- ③ 暗褐色砂
- ④ 淡褐色砂
- ⑤ 淡灰褐色砂



挿図143 7号墳第1埋葬施設遺構図 (S=1/20)



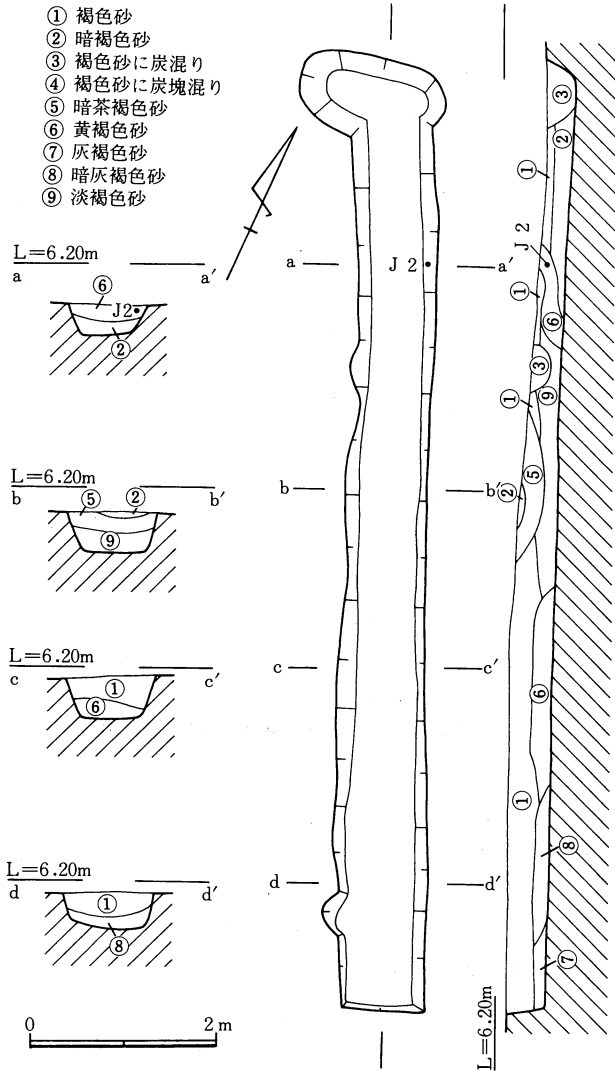
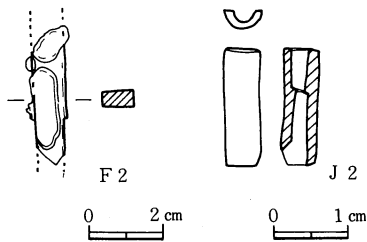
これらの遺骨の出土状況は、遺体が直接石棺内に埋葬されたものでないことを物語り、再葬の可能性がかなり強い。副葬品等は

ない。ベンガラも塗られていない。造られた時期は周溝がかなり埋没した後である。

(2)第2埋葬施設

(挿図 144・145, 図版 24)

古墳の西側に細長い土壇(長さ 10.6 m, 幅 0.95 m, 深さ 0.5 m)を抽出した。主軸はN-23°-Wをとり、SK 02 などと同じ方位を示す。この土壇内には鉄の小片と管玉が1個出土している。また骨・歯などは検出されなかった。やや細長いきらいはあるものの墳丘内にあり、古墳の中心埋葬施設と考えたい。



挿図144 7号墳第2埋葬施設遺物図

(鉄器S=1/2・玉S=1/1) 挿図145 7号墳第2埋葬施設遺構図 (S=1/80)

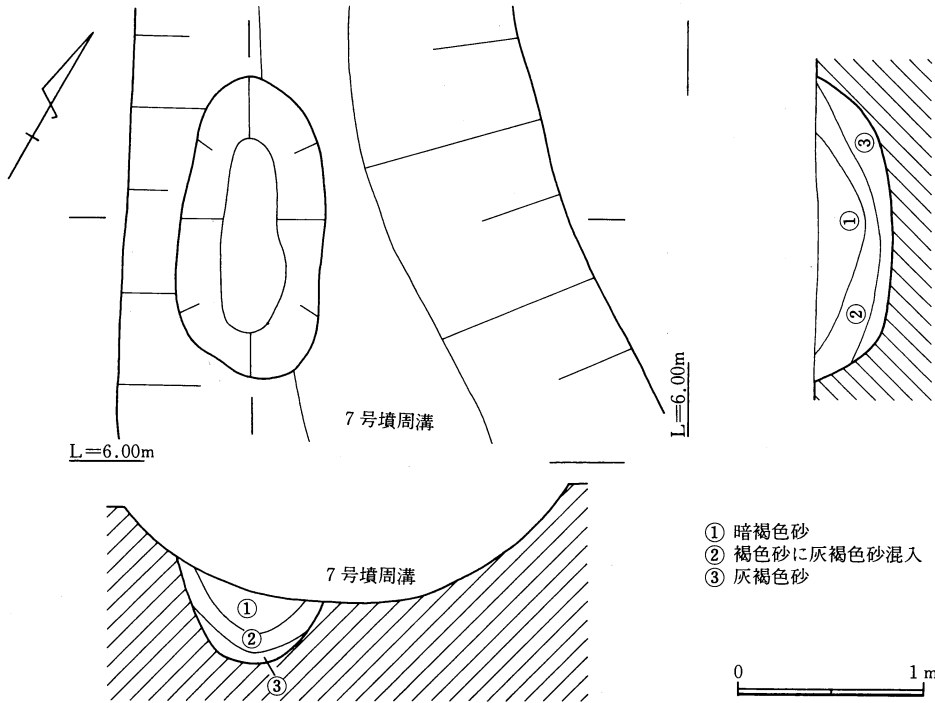
(3)第3埋葬施設 (挿図 146, 図版 24)

周溝内の西側にあり、周溝底面から検出された。主軸はN-32°-Wで、長辺 160 cm, 短辺 77 cm, 深さ 38 cmの土壇墓と考えられる。人骨、副葬品等の遺物は検出されず、埋葬施設でない可能性もある。

(4)SK 01・SK 02・SD 04 (挿図 147~152, 図版 24・40)

7号墳の墳丘東側に3つの遺構が切り合って検出された。SK 02はSD 04・SK 01に切られ、SD 04はSK 01に切られている。SK 01は幅 92 cm, 長さ 196 m, 深さ 25 cmの土壇で主軸はN-35°-Wにとり、床は平坦である。土壇内から20数個の土製品が出土し

た。土製勾玉、動物を模したと考えられるものなどがあるが、その他は意味不明のものが

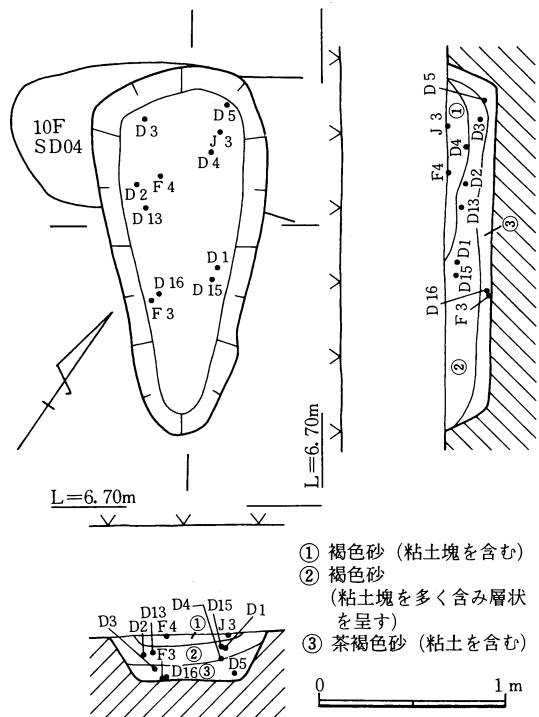


挿図146 7号墳第3埋葬施設遺構図 (S=1/40)

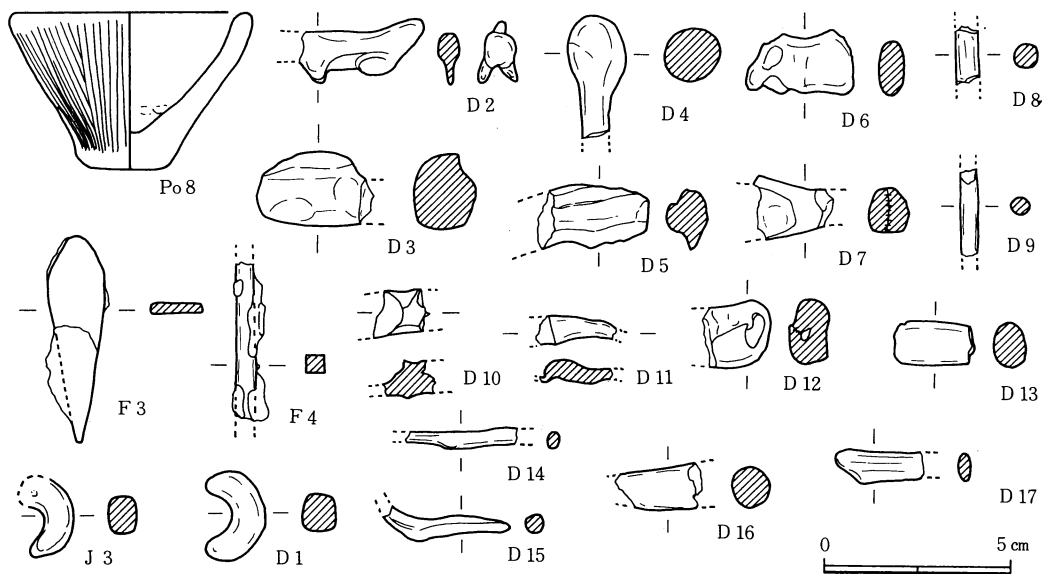
ほとんどである。また鉄鏃 (F3) も出土した。土壌の上面から小型の鉢 (P08) が検出された。

SD04は逆「L」字形に曲る溝で東隅で甕片 (P09) を検出している。SK01とSK02の間に作られた溝である。

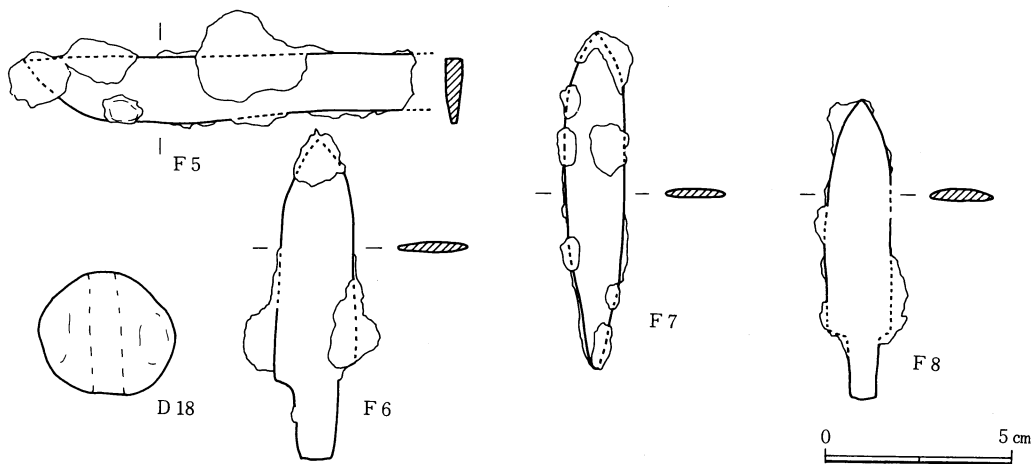
SK02は幅150cm、長さ367cm、深さ120cmの方形の一部二段掘りの土壌で、平面形は方形を呈し、主軸はN-26°-Wである。土壌内から刀子 (F5) 鉄鏃 (F6~8) などが出土した。SK01・SK02・SD04は、SD04から古い遺物が出ているものの3つの遺構の在り方、SK01・02の出土遺物などから7号墳に伴うものと考えられる。SD04のP09は直接遺構に伴うものではなく搬入されたものとする。



挿図147 7号墳 SK01遺構図 (S=1/40)



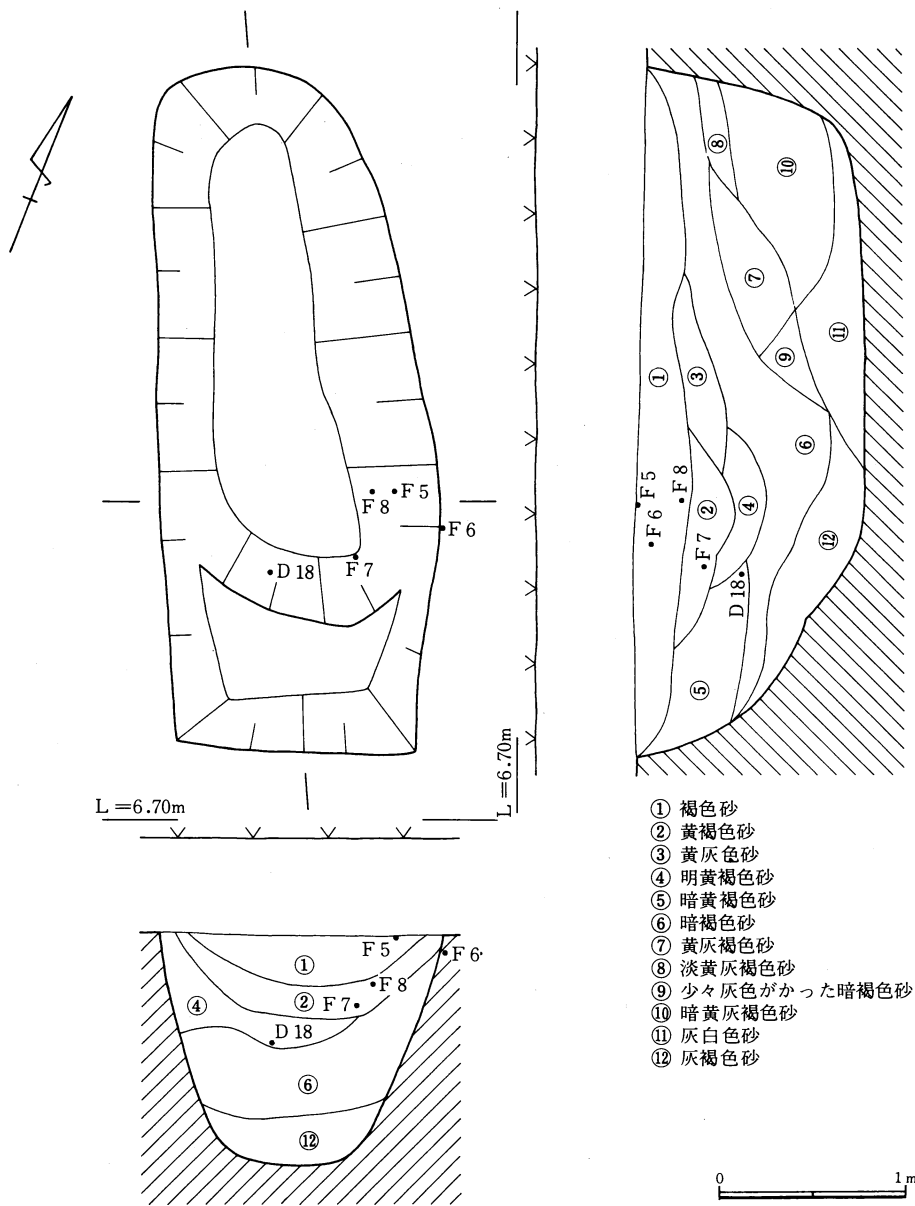
挿図148 7号墳 SK01 遺物図 (S=1/2)



挿図149 7号墳 SK02 遺物図 (S=1/2)

(5)馬墓 1 (挿図 153, 図版 25)

7号墳東側の周溝内から馬墓を検出した。この遺構は挿図 153 にみられるように周溝内の黄灰褐色砂層から掘り込まれており、平面形は隅丸方形を呈す。長辺 143 cm, 短辺 110.5 cm, 深さ 40 cm を測り、主軸は N-24°-E である。土壌の中に頭部を北西に置き、左側面を下にした状態で足を折り曲げて入っていた。頭部は鼻先を北東に向け、やや低い位置から出土したがそれに続く背骨、肋骨などは検出できなかった。年齢約 2.5 才の雄馬と推定される。両足は土壌の中央から東側の壁にかけて置かれており、狭い穴の床に入りきれな

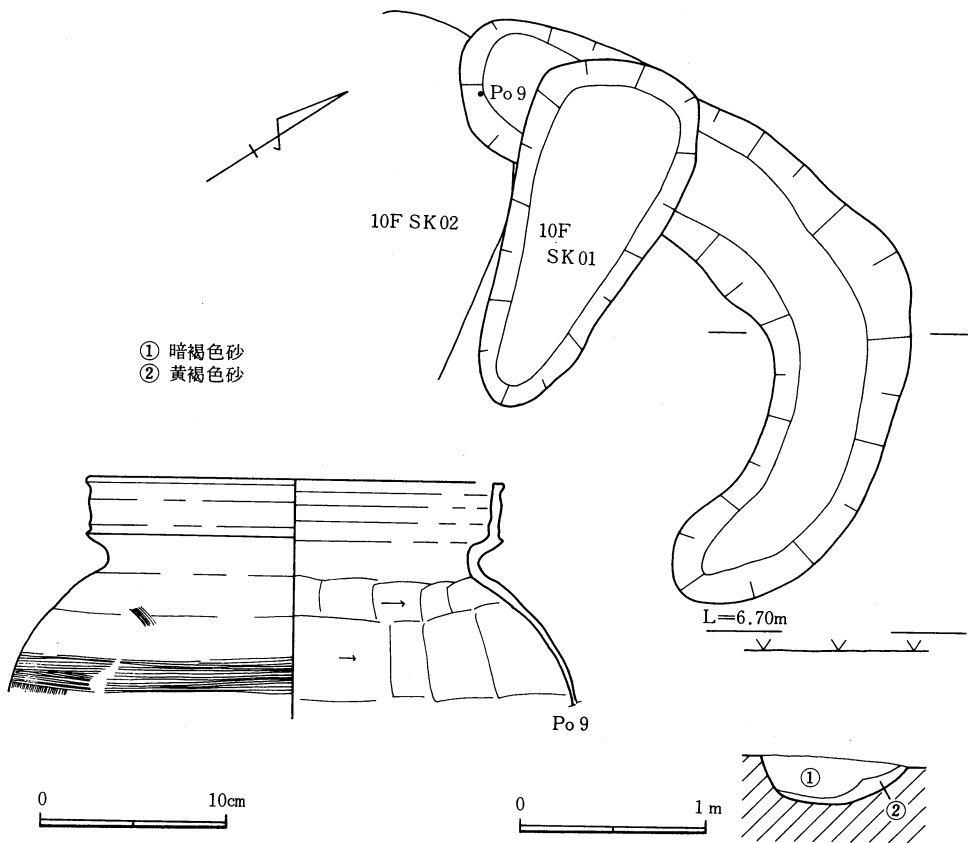


挿図150 7号墳 SK02 遺構図 (S=1/40)

かった状況が想定できる。馬の骨以外には遺物はみられなかった。

(6)馬墓2 (挿図155, 図版25)

7号墳南側周溝内にあり馬墓1の南西に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸186cm、短軸115cm、深さ55cmを測り、主軸はN-51°-Eである。土壌内からは北東側で馬の歯、南西側で骨片を1点検出しているが、どの部分にあたるかは不明である。年齢は3~4才と推定されるが性別は不明である。副葬品は出土していない。馬墓2は、7号墳を掘ったときのものでなく周溝が埋って行く過程で作られたものと考えられる。



挿図151 7号墳 SD04 遺物図(S=1/4)

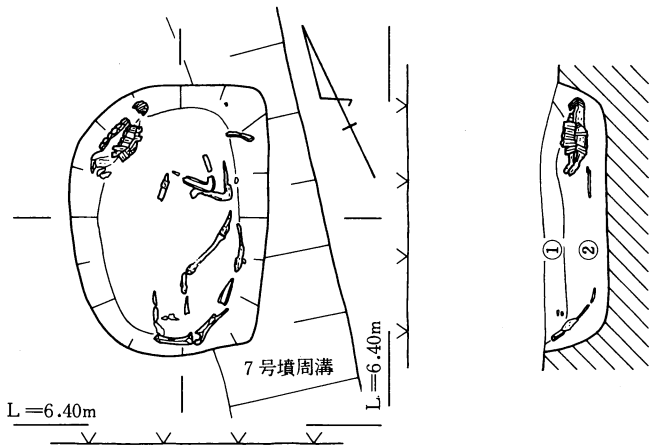
挿図152 7号墳 SD04 遺構図(S=1/40)

(7)馬墓3 (挿図154)

南側の周溝内の上層で馬の歯を数点検出した。歯はほぼ同レベルで散乱して出土した。周囲に土壌などではなく、骨なども検出できなかった。出土状況から周溝が $\frac{2}{3}$ 以上埋った段階で馬墓1・2のような墓が作られ、後に一部が破壊されたものであろう。周溝の埋砂が黒く、土壌などの確認は困難であった。層位的に第1埋葬施設とほぼ同時期であろうか。

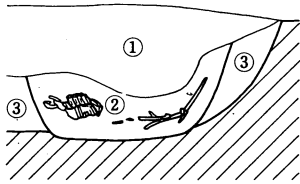
小結

7号墳の築造時期は各埋葬施設に遺物がなく、周溝内で検出された土器(Po1~7, H1・2)も破壊されているため、混入の可能性があり資料的価値にとぼしい。須恵器壺(Po1)は周溝内上層から口縁部分のみ、Po2・4は北側の周溝内から検出したが、下層の住居跡のものが掘り返されて入ったものと考えられる。また7号墳の周溝は東側でLSDの溝と切り合うが、切り合い関係は明確に確認できなかった。以上のことから7号墳の時期は遺物などから決めたいが、周囲の遺構の在り方からすれば古墳時代中期~後期にかけてのものと考えられる。



L=6.40m

L=6.40m



- ① 黑褐色砂
- ② 褐色砂
- ③ 黄灰褐色砂

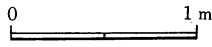


插图153 7号墳 馬墓1 遺構図 (S=1/40)

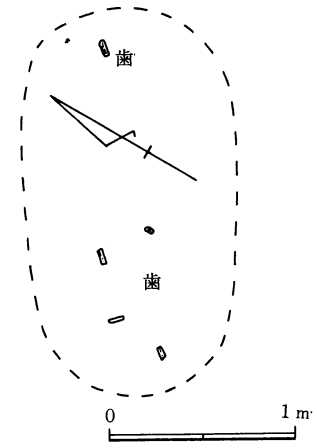
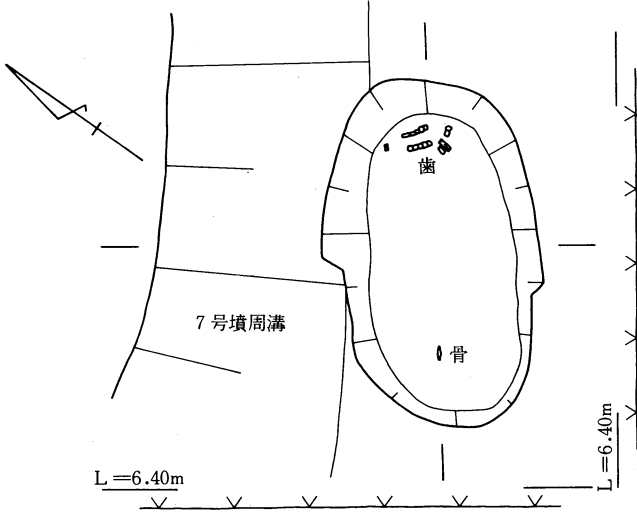
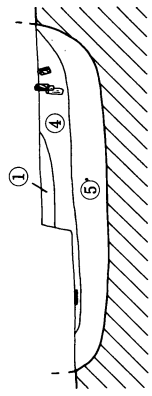


插图154 7号墳 馬墓3 遺構図 (S=1/40)



L=6.40m

L=6.40m



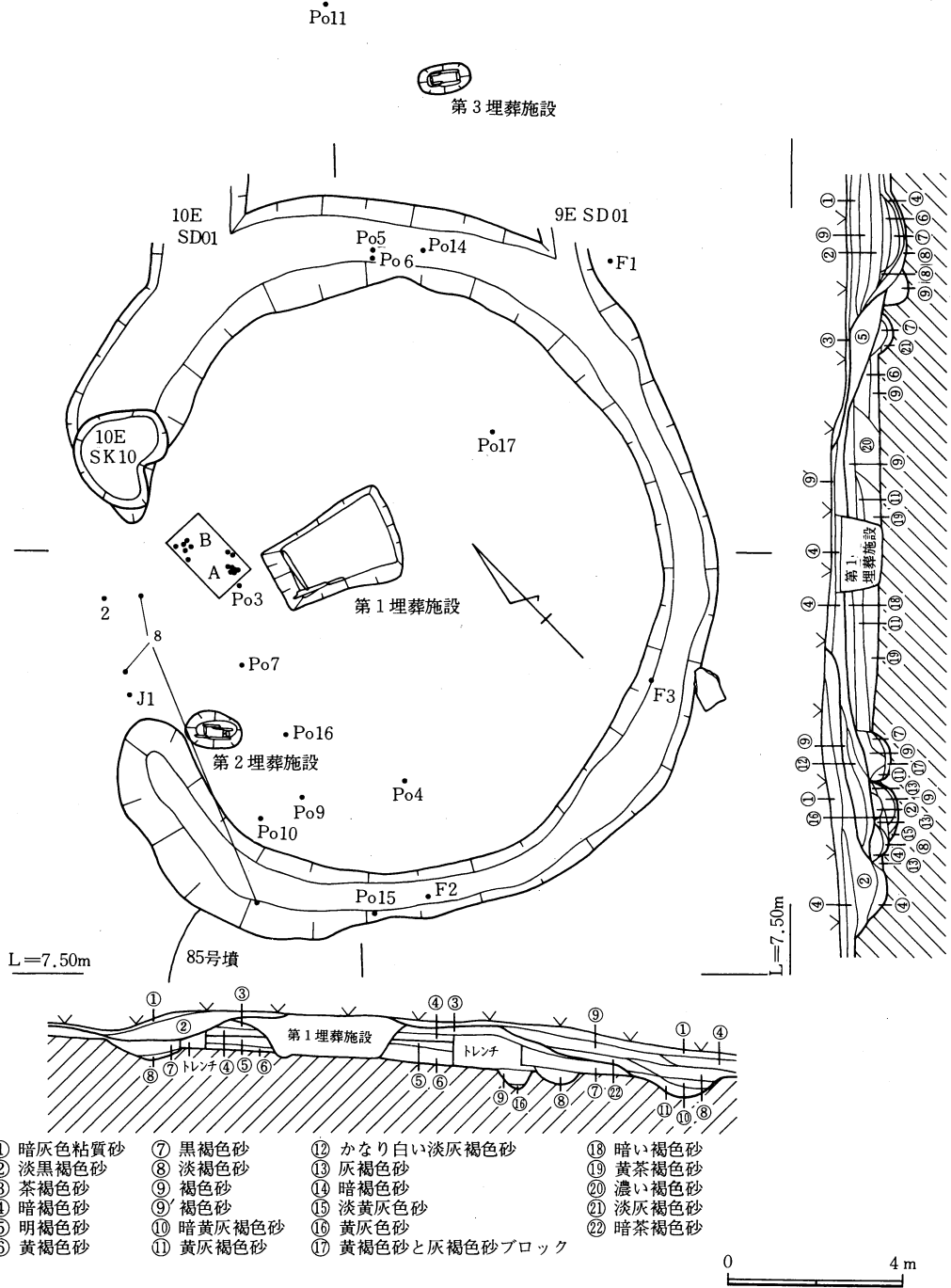
- ① 黑褐色砂
- ② 褐色砂
- ③ 暗褐色砂
- ④ 淡褐色砂
- ⑤ 黄褐色砂
- ⑥ 黄褐色砂



插图155 7号墳 馬墓2 遺構図 (S=1/40)

8号墳 (挿図 156~168, 図版 25~28・40・41)

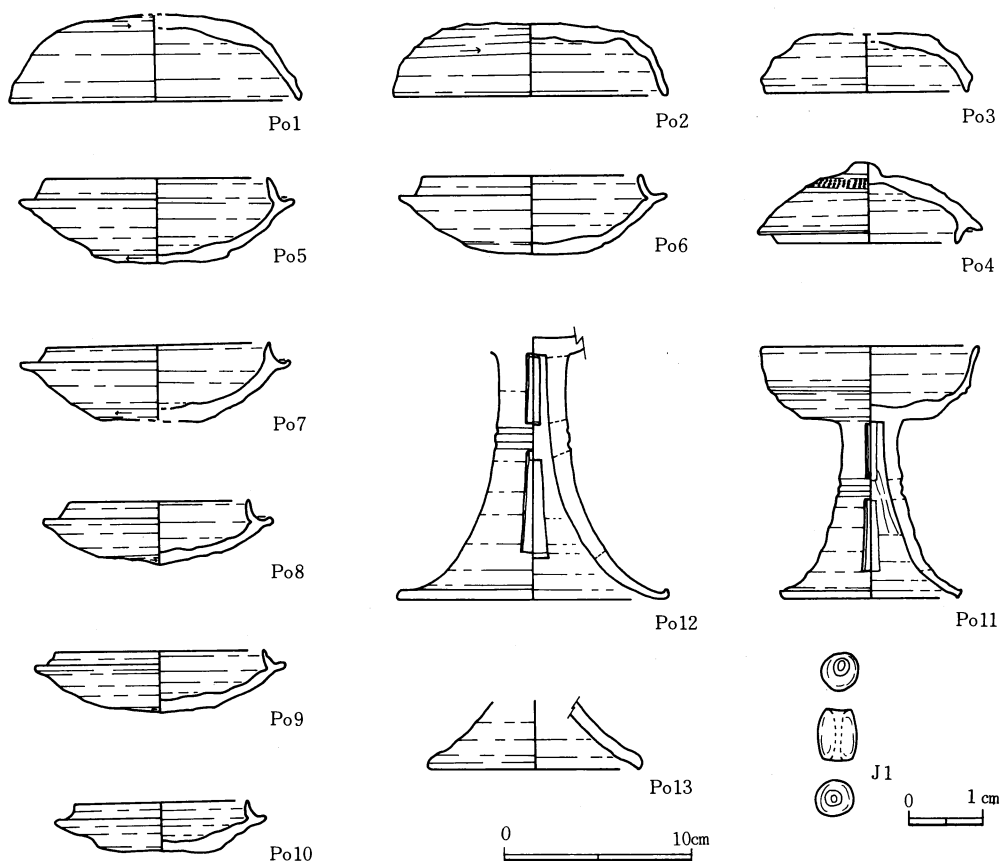
10E・10D地区にある。周溝から周溝までの径約16.8m, 周溝底から墳頂までの高さ1.4m, 周溝幅1.04~2.56mの円墳である。周溝は北西側がとぎれ, 陸橋の感を呈する。周辺には24・85・87号墳等の古墳があるが, 時期的・形態的に24号墳に似ている。



挿図156 8号墳 遺構図 (S=1/160)

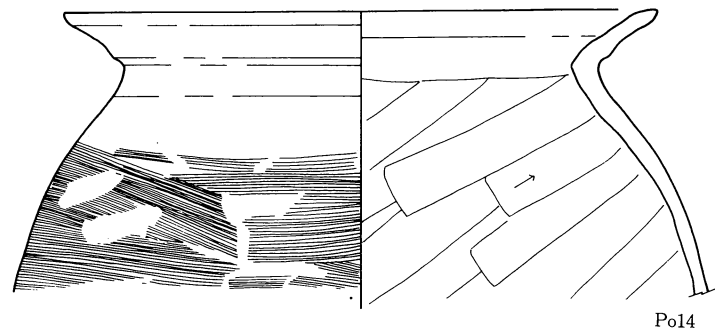
墳丘断面から推定される古墳築造前の旧表土は、挿図 156の⑨・⑩の暗褐色系統の黒砂で、その上に 50 cm以上盛砂することによって墳丘を造ったものと考えられる。墳頂部は風に飛ばされて、表面には壊された蓋石が散在していた。旧表土面より 72 cm程下にある地山面はゆるやかに東側へ下がっている。このように地山が平坦なのにちょうど 8号墳下の旧表土面だけが盛り上がっているということは不自然であり、そこには人為的な盛砂がなされた可能性が強い。つまり緩やかに傾斜する地山の上に何らかの目的で盛砂がなされ（この時期は墳丘下層の S D 01 等溝状遺構の時期であろう。）その高まりを利用して別の時期に 8号墳が築造されたと考えられる。このことは 8号墳周溝と S D 01 が切り合うこと、8号墳より古い 87号墳の周溝が S D 01 より新しいことから推定できよう。

埋葬施設は墳丘内で 2基、周溝外で 1基検出した。第 1埋葬施設は墳丘中央で、第 2埋葬施設は墳丘西寄り周溝際で検出した。第 3埋葬施設は北東、周溝の外側 3 mの地点で検出した。レベル的には第 2埋葬施設は第 1埋葬施設より約 30 cm低く、また第 3埋葬施設は第 1埋葬施設より約 60 cm低い。

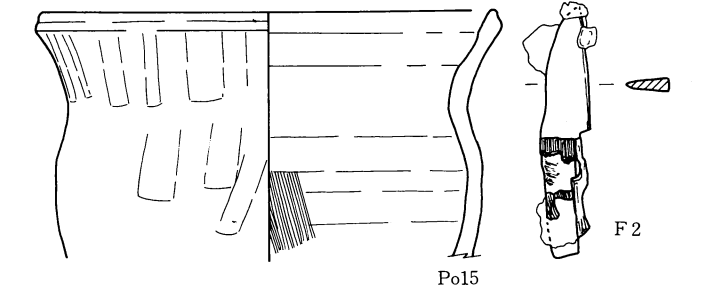


挿図 157 8号墳 遺物図その 1 (土器 S=1/4, 素玉 S=1/1)

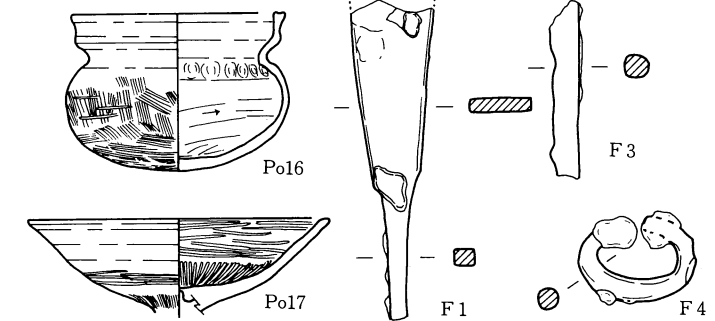




Po14



Po15



Po16



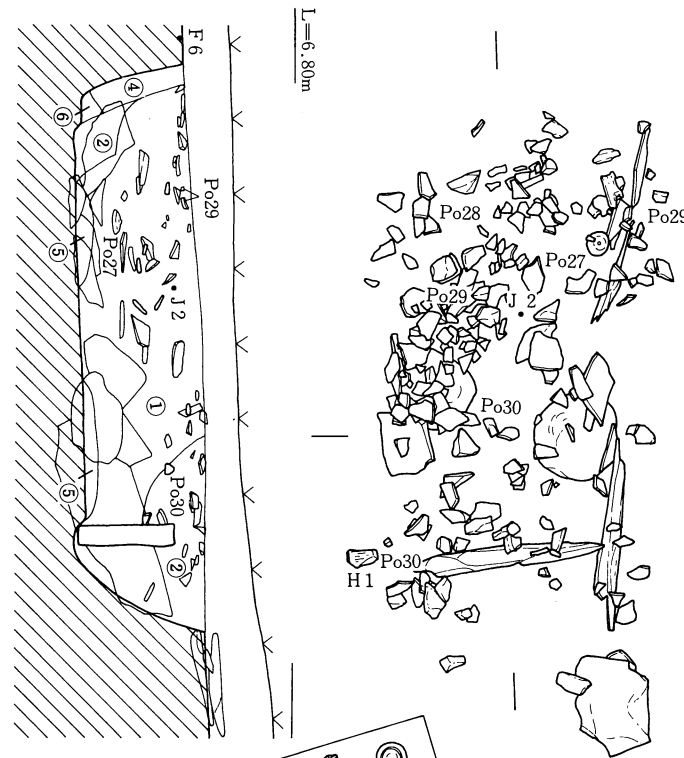
Po17

0 10cm

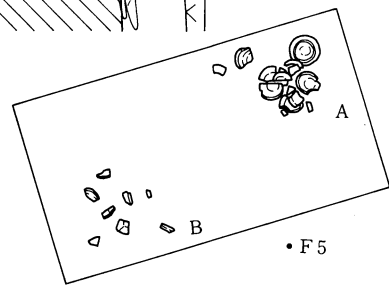
0 2cm

挿図158 8号墳遺物図その2 (土器S=1/4・鉄製品S=1/2)

- ① 明茶褐色砂
- ② 褐色砂
- ③ 黒褐色砂
- ④ 黒茶褐色砂
- ⑤ 黄色砂
- ⑥ 黄褐色砂

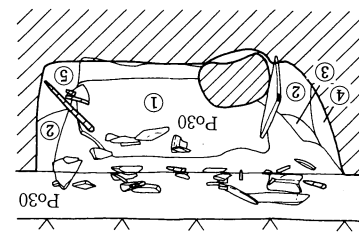


L=6.80m

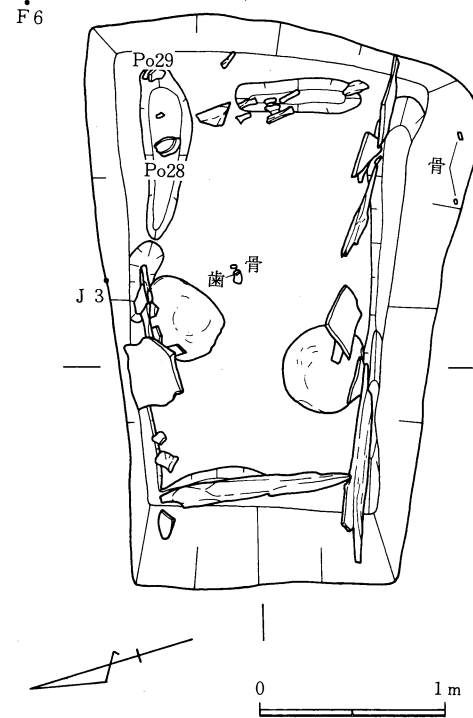


• F5

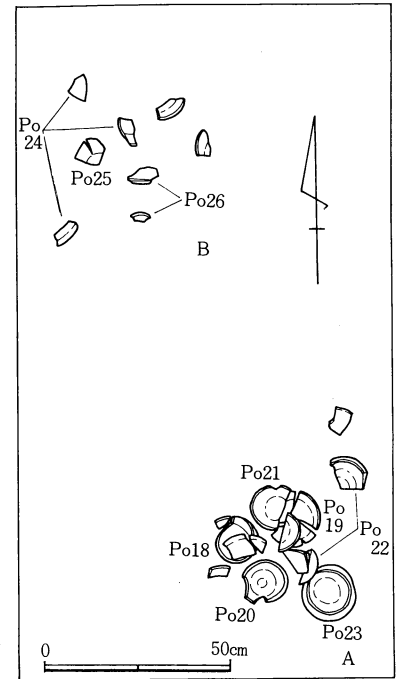
挿図159 8号墳第1埋葬施設遺構図 (S=1/40)



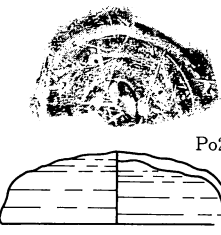
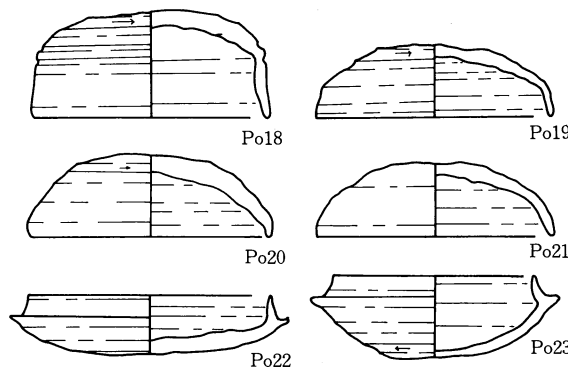
L=6.80m



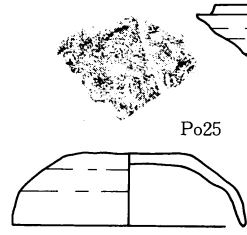
0 1m



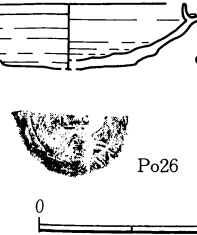
挿図160 8号墳第1埋葬施設遺物拡大図 (S=1/20)



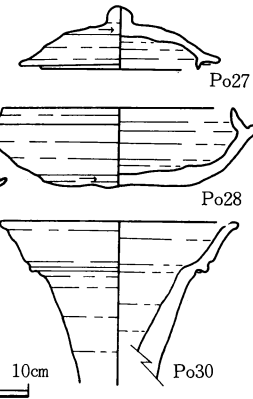
Po24



Po25



Po26

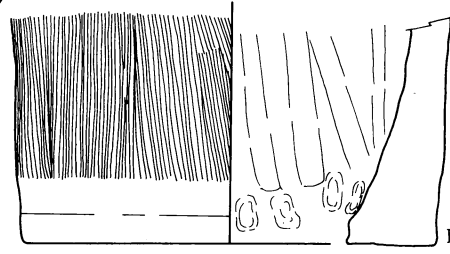


Po27

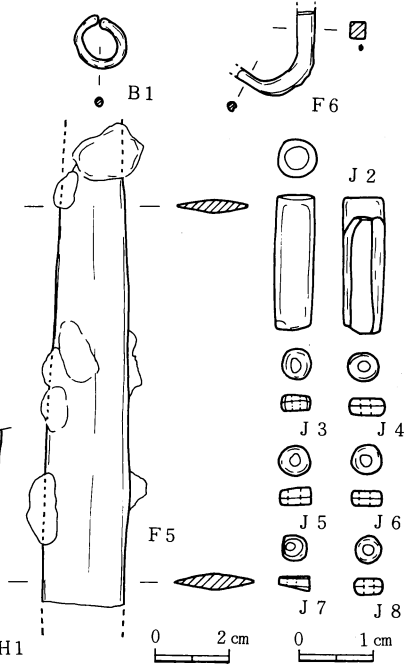
Po28

Po29

0 10cm



H1



B1

F6

J2

J3

J4

J5

J6

J7

J8

0 2cm

0 1cm

挿図161 8号墳第1埋葬施設遺物図 (土器・埴輪S=1/4, 金銅製品・鉄製品S=1/2, 玉製品S=1/1)

(1)第1埋葬施設 (挿図 159~161, 図版 25・26・41)

墳丘の中央部やや北西寄りにある箱式石棺で、主軸をN-106°-Eにとる。蓋石は後世の破壊を受け、掘り方内及び墳頂部周辺に散在している。墓壙は長軸 303 cm, 短軸 142 cm (西側), 209 cm (東側), 深さ 65 cmを測り、いびつな方形を呈する。棺は蓋石同様破損が著しく、遺存状態の良好なのは西側小口のみであった。蓋・棺ともに丹彩は認められない。石棺の規模は内法推定値で長軸 200 cm, 短軸 97 cm, 深さ 60 cmである。東側小口が 14 cm程広く、このことから頭位は東であると判断した。

棺内中央から歯と骨片、墓壙の南東隅より骨片を少量検出した。また棺の中央付近、側壁際に直径 40~47 cmの河原石を 2 個検出した。この丸い石は両側壁に密着していて、第1埋葬施設の作られた時期に他の板石と共に組み込まれたことを推測させる。このような石については当遺跡では先例がなく、性格については不明である。棺内あるいは墓壙内より、小板石片に混って須恵器を数点 (P<sub>0</sub>27~30), 管玉 1 個 (J 2), 小玉 6 個 (ガラス製 2 個, 滑石製 4 個), 金環 1 個 (B 1) を検出した。P<sub>0</sub>29 は墳頂部付近の破片と接合し、他にもかなり上層のものと接合する個体がある。このことから第1埋葬施設の供献用に墓壙近くに置かれていた須恵器が、後世の破壊 (24 号墳等と同様盗掘を受けた可能性が強い) を受けた後に、墓壙内に落ちこんだものと考えられる。

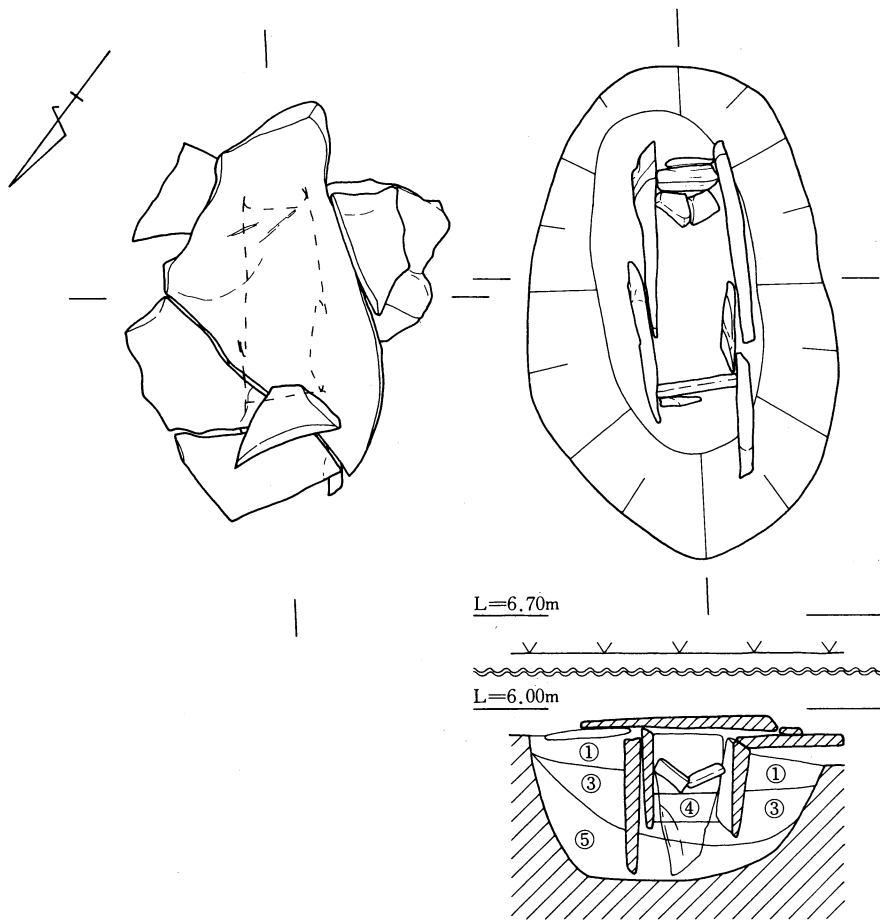
埋葬施設の北西側より須恵器群を検出した。いずれも完形に近い蓋坏で、実測したもので 9 個体になる。この須恵器群はさらに A・B の 2 グループに分かれている。第1埋葬施設に近く、あまり攪乱されていない A グループと、それよりレベルが高く、破損散乱している B グループである。時期的にみれば A グループの方が若干古く、供献が 1 回でないことを物語る。

(2)第2埋葬施設 (挿図 156・162, 図版 26)

10 D の北西区、墳丘の西側に位置する。南側で (10 D・S D 01) を切っている。主軸を N-140°-E ととる。長軸 132 cm, 短軸 81 cm の小判状の墓壙内に内法長軸 5 cm, 短軸 20 cm, 底面までの深さ 18 cm の小型箱式石棺を設けている。墓壙の深さは 40 cm である。石棺は蓋石 5 枚, 小口は各 2 枚, 側壁は北東側で 2 枚, 南西側で 3 枚の板石よりなる。棺内の南東には、赤色顔料が塗られた V 字状の石枕が側壁にもたれかかるように設けられ、その周辺の砂は赤く染まっていた。棺内の砂に白い粒子状のものが混っており、骨の痕跡と考えられる。石棺の規模からおそらく幼児が葬られたものと考えられる。石棺の北西 2 m の所に棗玉 1 点 (J 1) を検出した。他に遺物は検出されなかった。

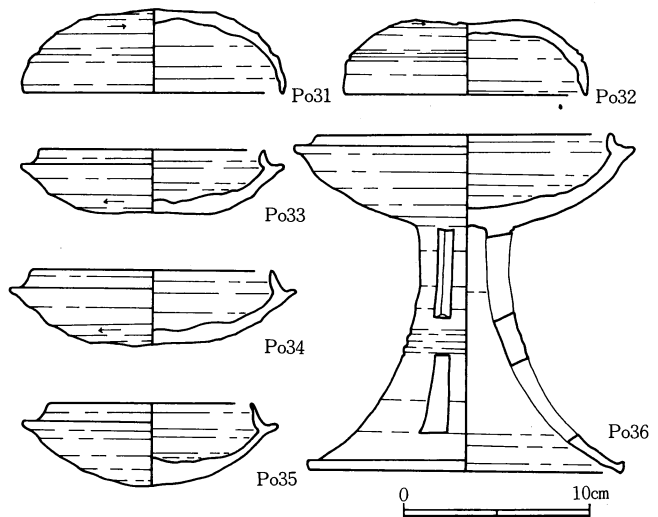
(3)第3埋葬施設 (挿図 156・164, 図版 27)

10 E 南東区にあり、8 号墳周溝の外側北東 3 m に位置する。主軸は N-53°-W の小型箱式石棺である。掘り方は長辺 114 cm, 短辺 70 cm, 深さ 30 cm, 棺内法長辺 61 cm, 短辺 18 cm,



挿図162 8号墳 第2埋葬施設遺構図 (S=1/20)

床面までの深さ 20 cmである。石棺検出時蓋石は 4 枚のみで、南東側 $\frac{2}{3}$ は蓋石がなかった。側壁は 2 枚ずつ、小口は北西 2 枚、南東 1 枚で作られている。棺内より人骨、副葬品などは検出されなかった。この第 3 埋葬施設の軸は 8 号墳の周溝に平行しており、8 号墳に伴う埋葬施設と考えられる。



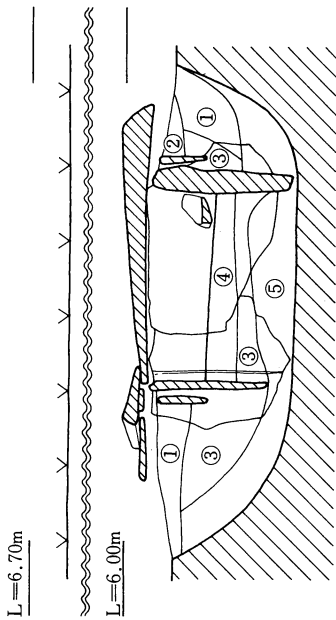
挿図163 10E・SK10 遺物図 (S=1/4)

(4)10 E・SK 10 (挿図 156・163・165, 図版 27・41)

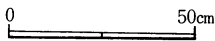
墳丘の北西側, 丁度周溝のとぎれる部分で検出した。土壌は南側が墳丘にかかり, 高い所と低い所があるため平面はハート状になった。プランは長軸 228 cm, 短軸 152 cm, 深さ 22 cm を測る。土壌内の上層より須恵器群 (P.31~36) を検出した。いずれも完形に近くその出土状況, 位置から 8 号墳に供献された土器と考えられる。SK 10 については, 周溝のまだ検出されていない時点で調査したこともあって, 切り合いについて判断しかねる。須恵器群だけが, 周溝の完全に埋れる前に供献されたものかも知れない。

(5)墳丘面の溝状遺構 (挿図 166, 図版 28)

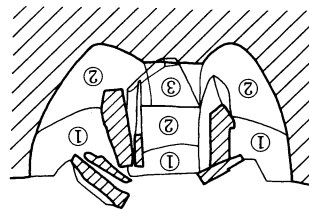
墳丘をかなり掘り下げて地山近くなって検出した。溝状遺構は全部で 4 本であるが, SD 02 と 04 は SD 01 のように 1 本の溝であった可能性が強い。これらの溝状遺構はいずれも



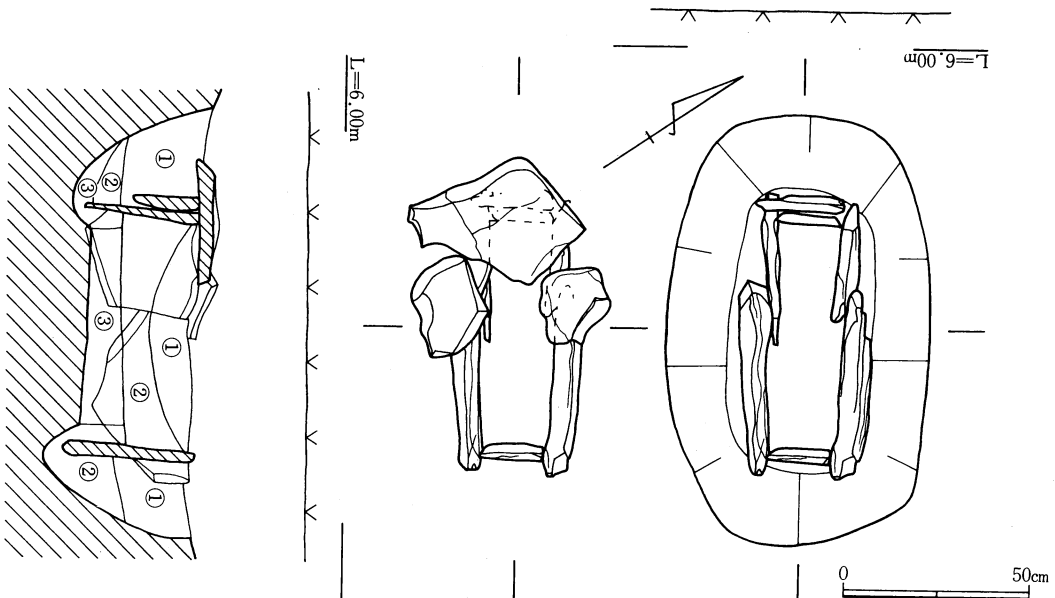
- ① 淡暗褐色砂
- ② 濃暗褐色砂
- ③ 黄褐色砂
- ④ 淡赤褐色砂
- ⑤ 黄灰褐色砂



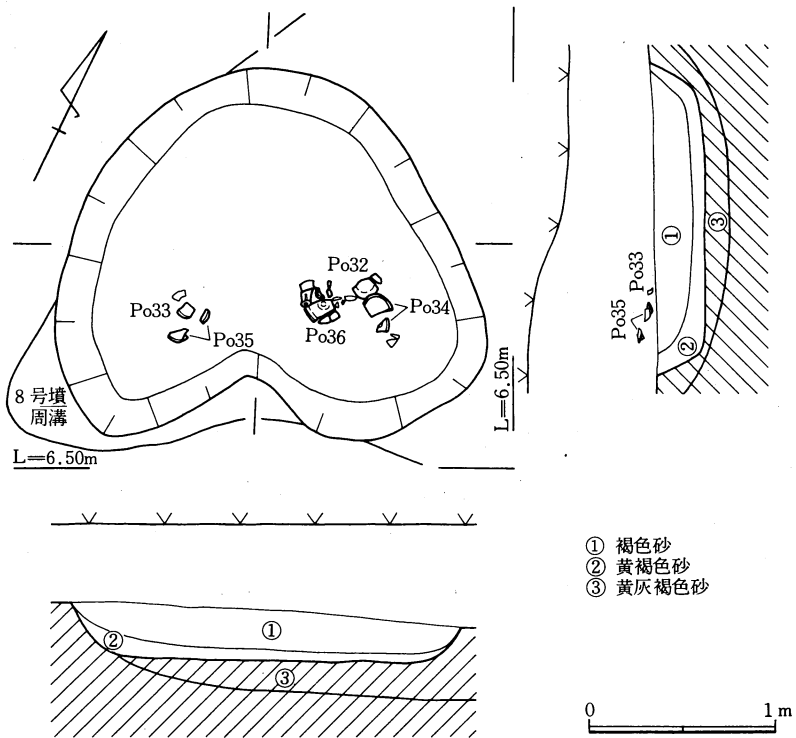
- ① 暗褐色砂
- ② 褐色砂
- ③ 淡褐色砂
- ④ 黄褐色砂



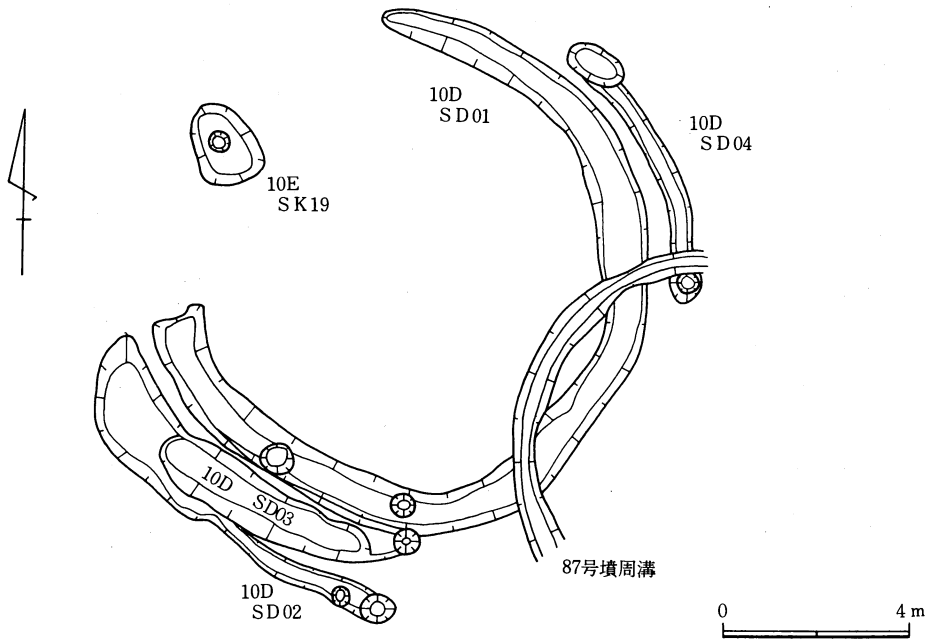
挿図162-2



挿図164 8号墳第3埋葬施設遺構図 (S=1/20)



挿図165 10E・SK10 遺構図 (S=1/40)



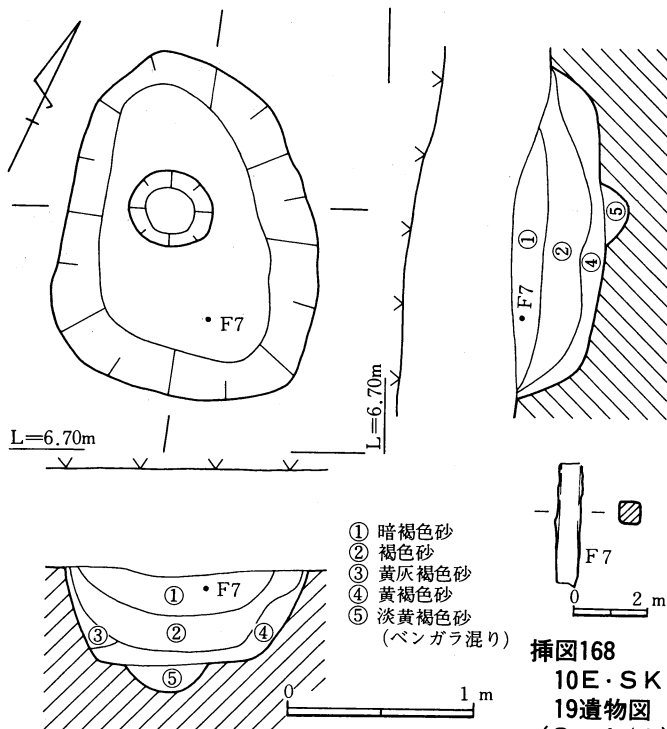
挿図166 8号墳 墳丘下の溝状遺構図 (S=1/160)

8号墳周溝に沿う形をとる。S D 01は直径10.6m、幅0.8~1.12mで古墳の周溝状に走る。他の溝状遺構は弓状を呈し、深さも比較的浅い。これらの溝状遺構は一見8号墳に伴う施設の様であるが、検出面の高さや切り合い関係から8号墳とは別のものと思われる。遺物にしても溝状遺構群内より出土するものに須恵器は皆無で土師器片を少量含むが弥生土器がほとんどである。この溝状遺構の性格については分からない所が多いが、その内にある何か他の遺構に関係するものと思われる。

(6)10E・S K 19

(挿図166~168, 図版28)

墳丘北西側下層より検出した。この辺りはちょうど周溝がとぎれ陸橋部の感を呈する。S K 19の規模は長軸186cm、短軸132cm、深さ50cmで、床面は北西へ向けてゆるやかに傾く。床面に長軸46cm、短軸40cm、深さ16cmのピットがあるが、その埋砂にベンガラが混っていたことにより8号墳に関係する土壌と考えたが、墳丘下層の周溝状の溝に関係するものかもしれない。出土遺物は土器小片の他、棒状鉄製品(F7)がある。



挿図167 10E・S K 19遺構図 (S=1/40)

挿図168  
10E・S K  
19遺物図  
(S=1/2)

小結

8号墳は丁度尾根状に続く高まりの一角に位置し、平坦な低部から検出される古墳とは遺物や状態がかなり異なる。それはおそらく时期的な差の顕現であり、85・87号墳と8号墳が切り合うのもこのようにかなりの時期差を考えてのことと理解できよう。8号墳の場合墳丘や第1埋葬施設はかなりの破壊を受けているが、断面には盛砂が観察できるし、遺物も多い。その内供献時の位置を保つものはS K 10と第1埋葬施設の須恵器のAグループであり、この両者の時期が同じことからそれらは第1埋葬施設への供献と考えられる。それらから8号墳築造時期は6世紀後半と推定される。

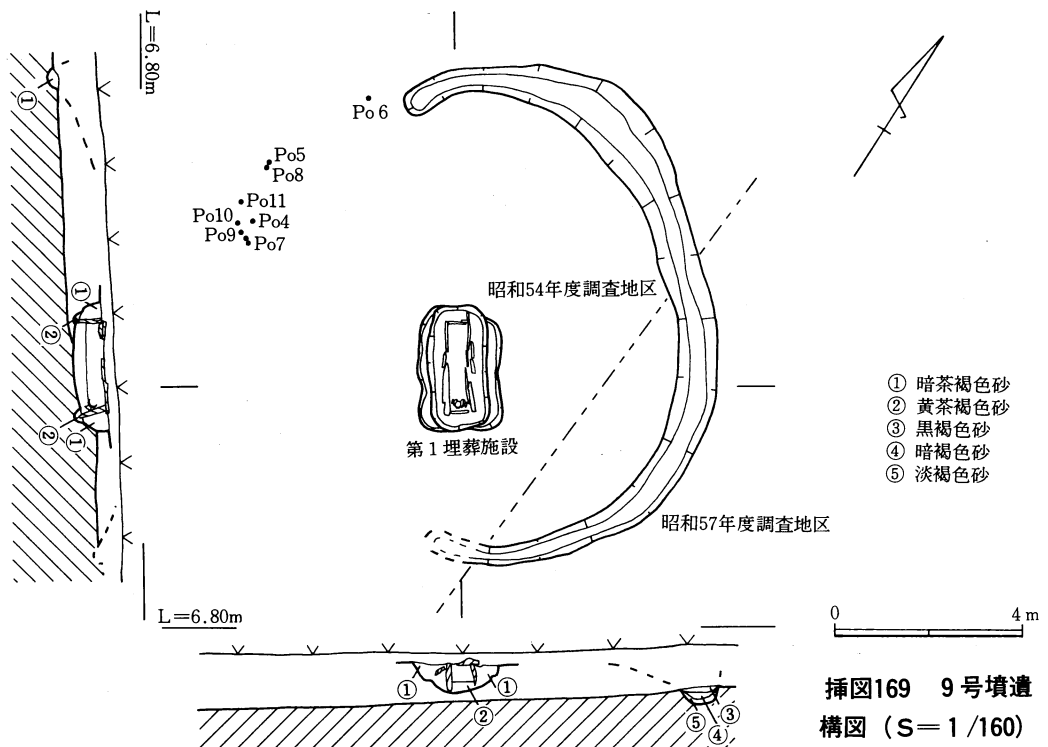
8号墳の埋葬施設と考えたもので頭位の明瞭なものは第2埋葬施設のみである。他のものは小口の広さから東側を頭位とした。第1埋葬施設以外8号墳に直接伴う遺物はなく、第2・第3埋葬施設の時期は分からない。軸方向・形態から考えれば第2・第3埋葬施設

は類似するが、黒砂上面からの深さは第2埋葬施設の場合 67cmと第3埋葬施設の場合の数倍ある。また軸方向も第3埋葬施設は周溝に沿うが、第2埋葬施設は第1埋葬施設や、周溝とは方向が異なる。こういう事実をふまえると第2埋葬施設を8号墳に一概に結びつけられないようにも思われる。

墳丘下層の溝状遺構については性格は不明である。ただ第2埋葬施設がSD 01のちょうど途切れる部分に当たり、これを人為的なものとするなら、8号墳築造前に別の主体部を持つ円墳が同じ場所にあった可能性もある。(この場合第2埋葬施設はもう一つの古墳にとまなうものになる。)こう考えると8号墳はその高まりをうまく利用して別の時期にさらに盛砂され築造された事になる。第1埋葬施設の形がゆがんでいる事はあるいは先行する古墳の主体部と切り合っているためであり、この切り合いが調査時見い出せず同一のものと考え調査した結果かも知れない。この推定の最大の難点は、わずか100年余の間に2回も古墳が壊されるという所にある。もともと87号墳の時期自体今一つはつきりせず、2基の古墳破壊にはもう少し長い時期差があったとも考えられる。もちろん古墳破壊はそれを行なう人々の意識の内面にも関わるから、単なる時期差では解決できない。このように古墳を破壊し、その上に別の古墳を作るという事の解釈は今後の課題として残ろう。

### 9号墳 (挿図169)

11 E 地区。既に昭和54年度調査において、中心主体(第1埋葬施設)及び周溝の西半分



挿図169 9号墳遺構図 (S=1/160)

を調査している。(報告書Ⅲ, P 186~8)今年度は東側の周溝を確認したが、埋葬施設は新たに検出できなかった。古墳の規模は周溝から周溝までの径 10.6 m, 周溝の幅 56~120 cm, 深さ 40 cm。全体に地形は東から西にかけて傾斜しているの、高い部分の東半分だけに周溝をほりこんだものと推定する。蓋石から周溝底面までの比高は 120 cmである。

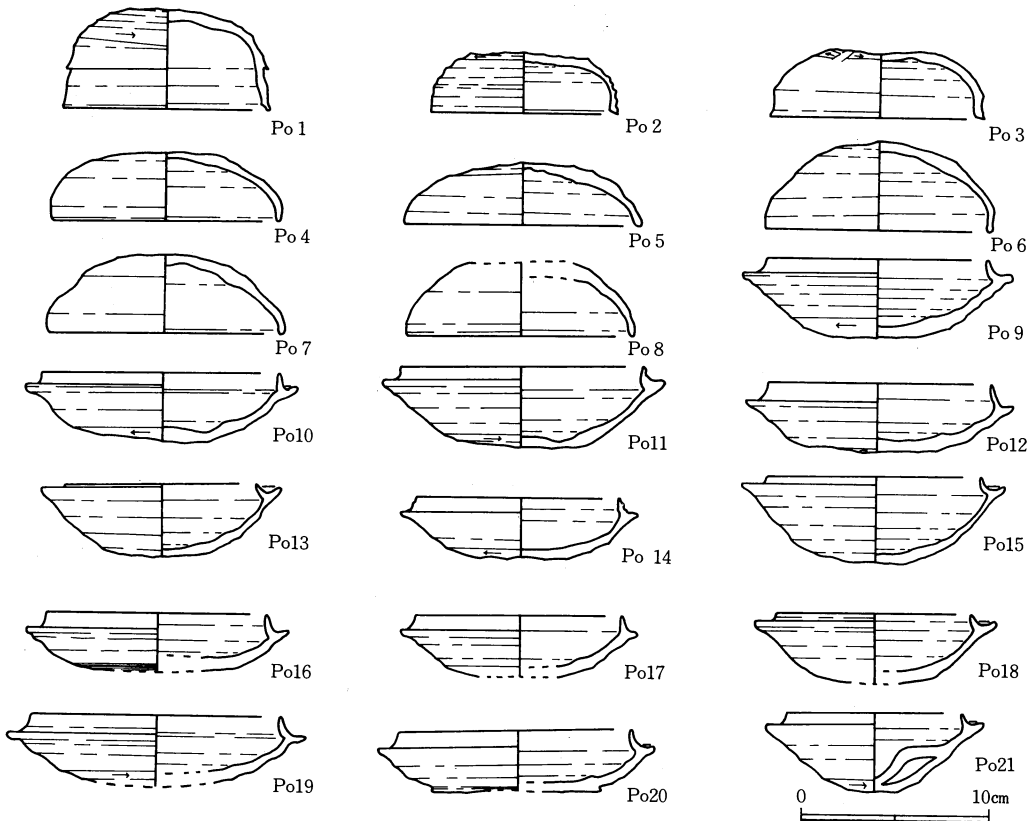
第 1 埋葬施設出土の遺物から、9 号墳の築造は古墳時代中期後半と考えられる。

**24 号墳 (挿図 170~191, 図版 28~30・41~43)**

11 C・D 地区。墳丘のほぼ西半分を昭和 54 年度に、東半分を今年度調査した。周溝から周溝までの径 18.6 m, 直径 14 m, 周溝 2.6 m, 深さ 1 m の円墳である。周溝底面から墳頂までの比高差は 2 m, 周溝を含む最大径は 22 m を測るが北西部が一部広がっているためである。周溝は北西部を中心としてかなり深く規模も大きい、南東側では検出できなかった。従って南東側には周溝はなく、いわゆる陸橋状になっていたものとする。この場合、地山面は北北西から南東にかけて傾斜しているの、高い方に周溝を掘り込んでいることになる。

埋葬施設は墳丘内に 4 基、周溝内に 1 基、周溝外に 6 基の計 11 基検出した。

第 3 埋葬施設を中心にして墳裾部をめぐるように大きな板石や丸石がめぐっていたが、



挿図 170 24号墳遺物図その 1 (S=1/4)



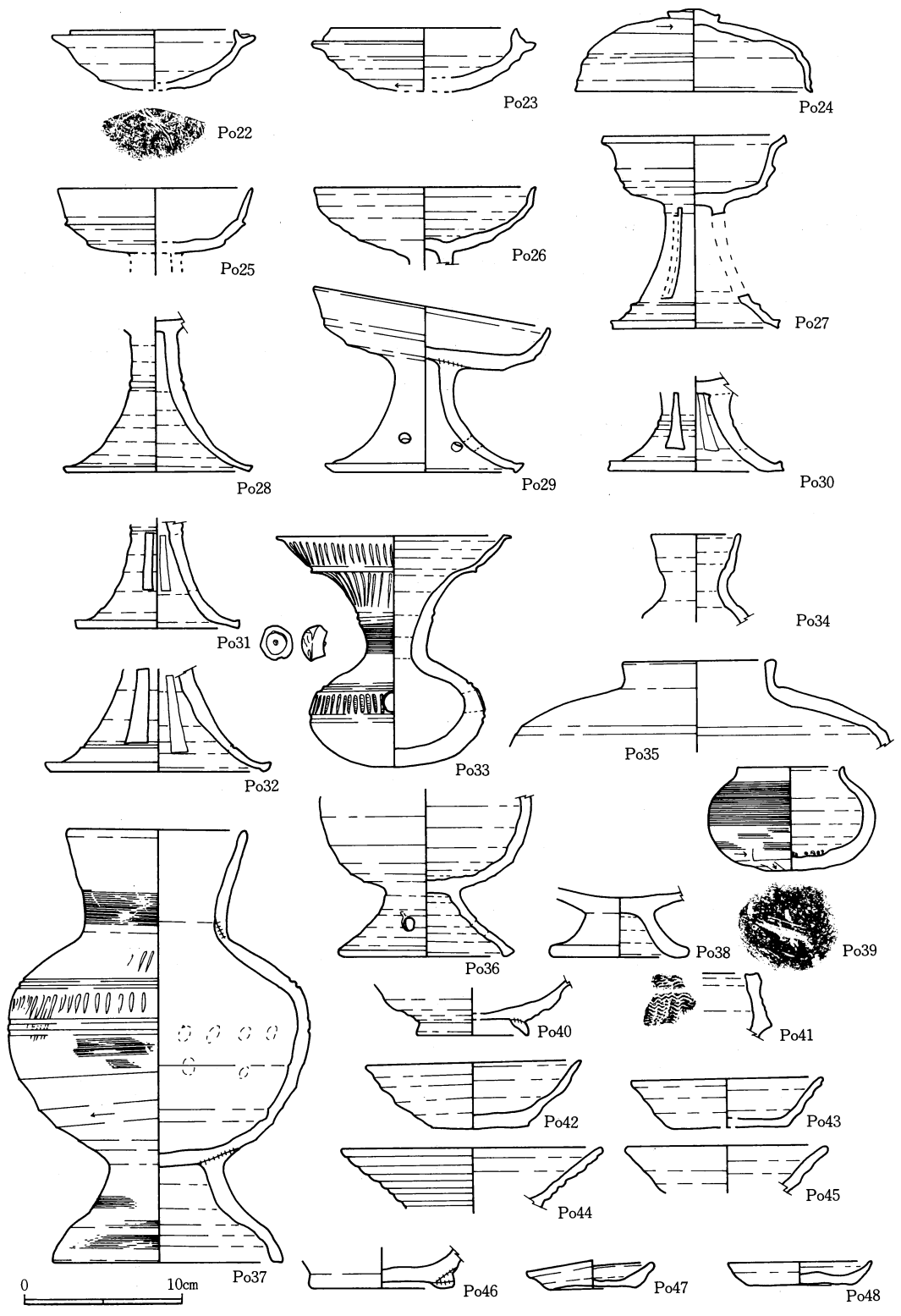


插图171 24号墳遺物図その2 (S=1/4)

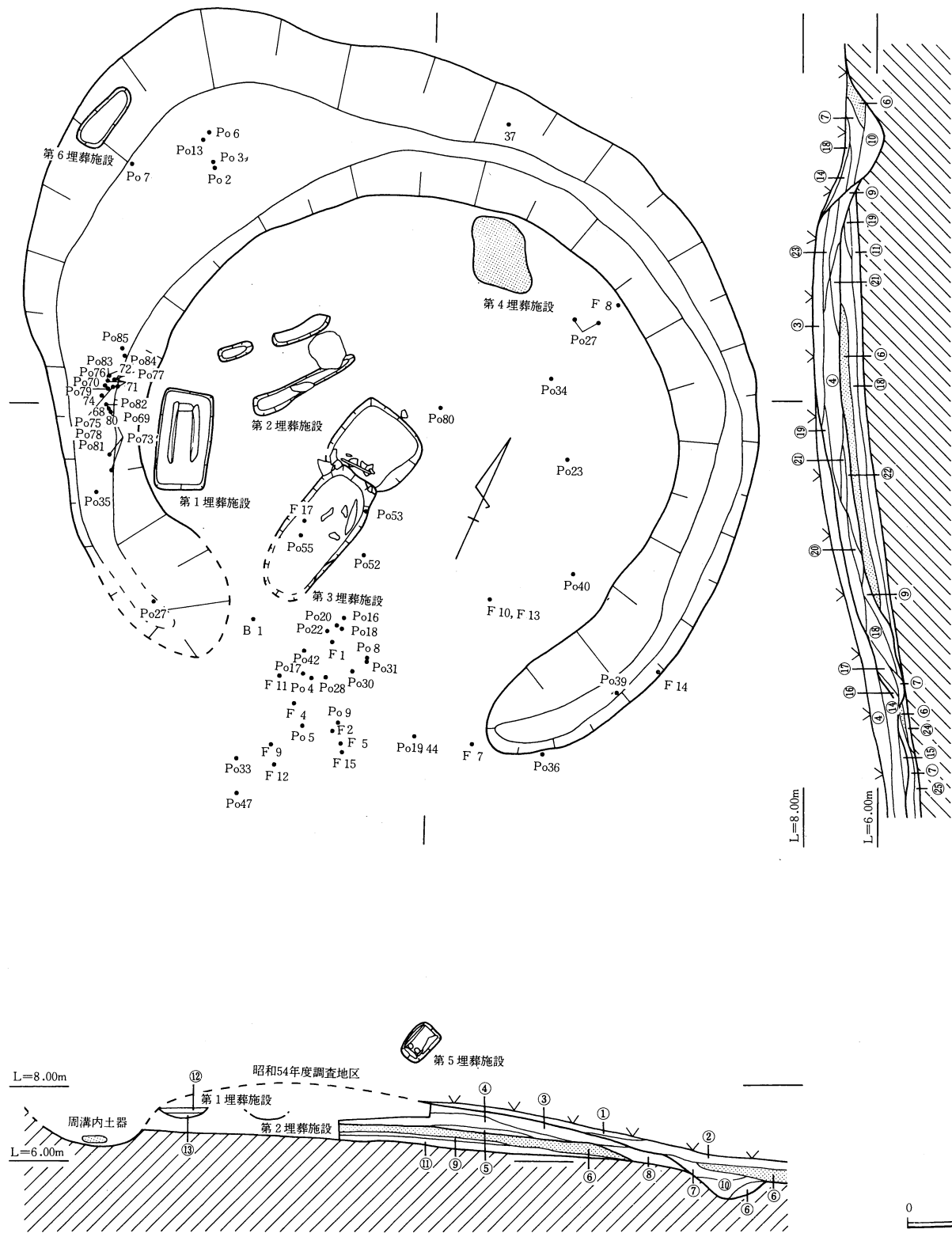


插图172 24号墳遺構図 (S=1/160)

- ① 固い粘質褐色砂
- ② 暗茶褐色砂
- ③ 明茶褐色砂
- ④ 茶褐色砂
- ⑤ 黄褐色砂
- ⑥ 黒褐色砂
- ⑦ 褐色砂
- ⑧ やや淡い褐色砂
- ⑨ 暗褐色砂
- ⑩ 淡褐色砂
- ⑪ 黄灰褐色砂
- ⑫ 暗黄褐色砂
- ⑬ 黒灰褐色砂
- ⑭ 濃茶褐色砂
- ⑮ 粘質の茶褐色砂
- ⑯ 斑状の黒褐色砂
- ⑰ 明褐色砂
- ⑱ 濃暗褐色砂
- ⑲ 淡暗褐色砂
- ⑳ 濃淡暗褐色砂
- ㉑ 黄茶褐色砂
- ㉒ 明淡褐色砂
- ㉓ やや斑状の黒褐色砂
- ㉔ 黄灰色砂
- ㉕ 淡灰褐色砂

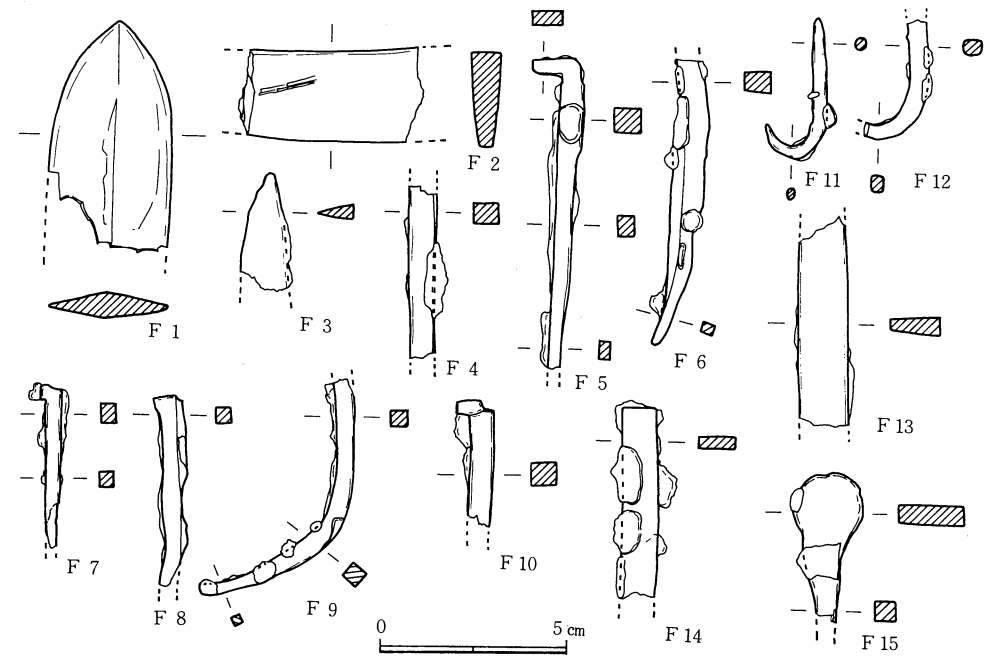


插图173 24号墳遺物図その3 (S=1/2)

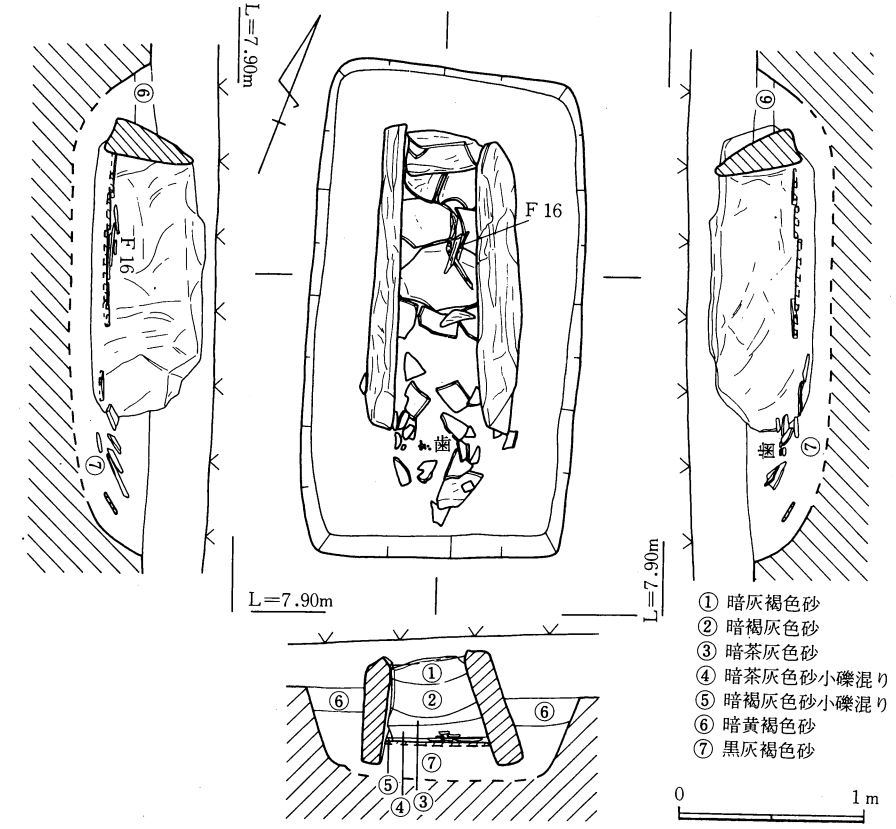


插图174 24号墳第1埋葬施設遺構図 (S=1/40)

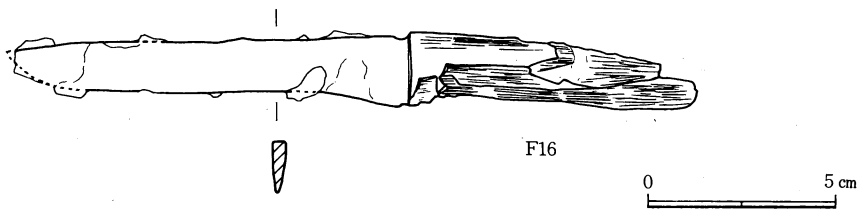
- ① 暗灰褐色砂
- ② 暗褐灰色砂
- ③ 暗茶灰色砂
- ④ 暗茶灰色砂小礫混り
- ⑤ 暗褐灰色砂小礫混り
- ⑥ 暗黄褐色砂
- ⑦ 黒灰褐色砂

その性格は不明。この石群の東寄りでは須恵器、土師質土器が散在しており、西の周溝内（挿図 188・190）では須恵器が集中して出土した。

(1)第1埋葬施設（挿図 174・175，図版 29・43）

墳丘の南西裾部で検出した。南側の小口にあたる部分が欠けるが、板石 4 枚で構成された箱式石棺であろう。側壁に用いた板石は長さ 150 cm，高さ 50 cm，厚み 15. 20 cm である。棺床には板石が敷かれていた。敷石は北側が比較的丁寧に敷かれているのに対し，中央より南側ではまばらで，南小口付近の敷石が散乱したものと推定される。南小口も北と同様に板石が用いられており，これが人為的に引き抜かれたものか，もしくは自然に欠けた際に棺床の敷石が散乱したものと推定する。人為的に引き抜かれた可能性が強い。棺内からは東際に骨数疋と刀子（F 16）があり，また南小口の板石が散乱している中から歯片が数点出土した。南側の歯片の位置は側壁の南端よりも 5 cm 外にあり，この歯片の位置は本来のものでなく攪乱の際棺外に移動したものと判断する。南小口の板石を北小口と同様の状況に推定復元すると，棺の内法は長さ 120 cm，幅 40 cm，側壁最高部から棺床の敷石までの深さ 50 cm を測る。南東部を頭としたもので軸方向は  $N-161^{\circ}-E$  をとる。

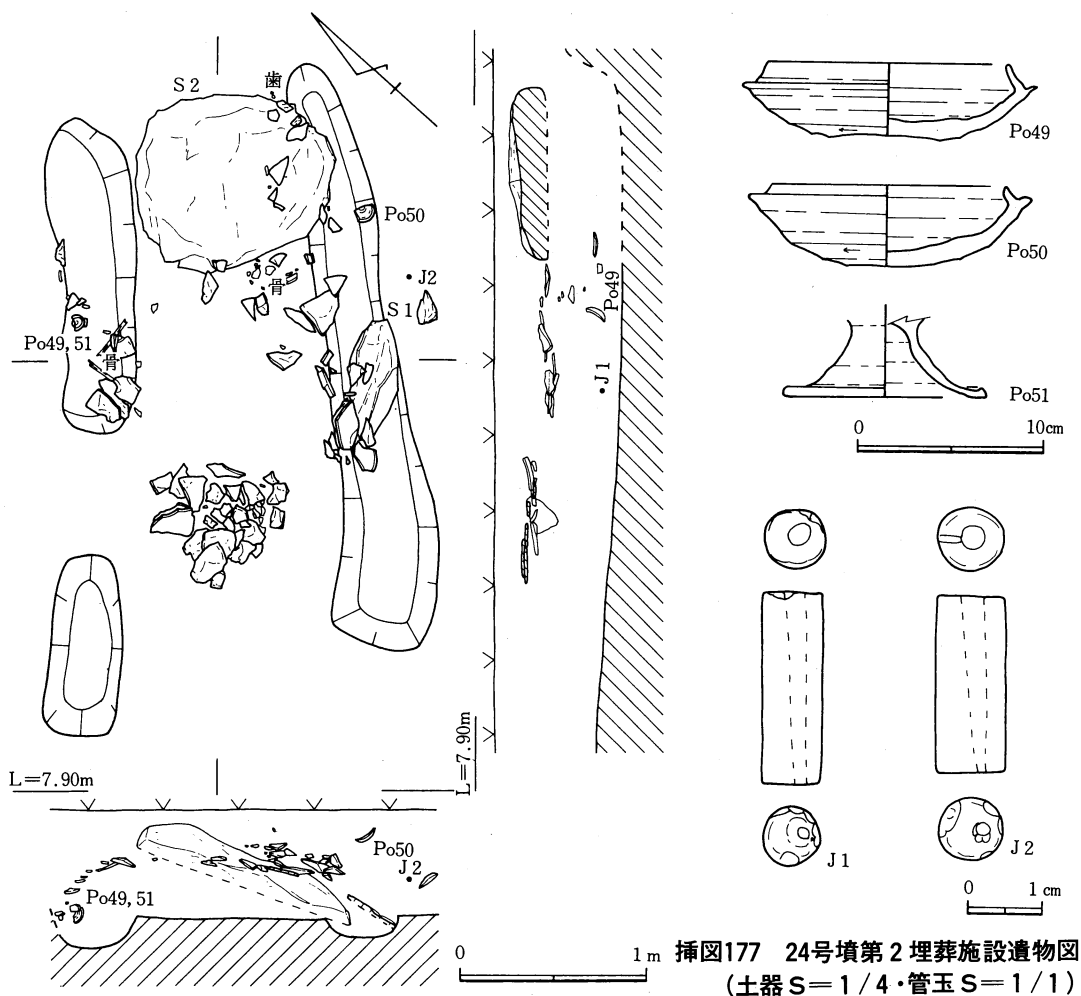
この石棺は周溝際にあたり墳丘築造後，墳丘に沿って設けられたものと考えられる。



挿図175 24号墳第1埋葬施設遺物図（S=1/2）

(2)第2埋葬施設（挿図 176・177，図版 42・43）

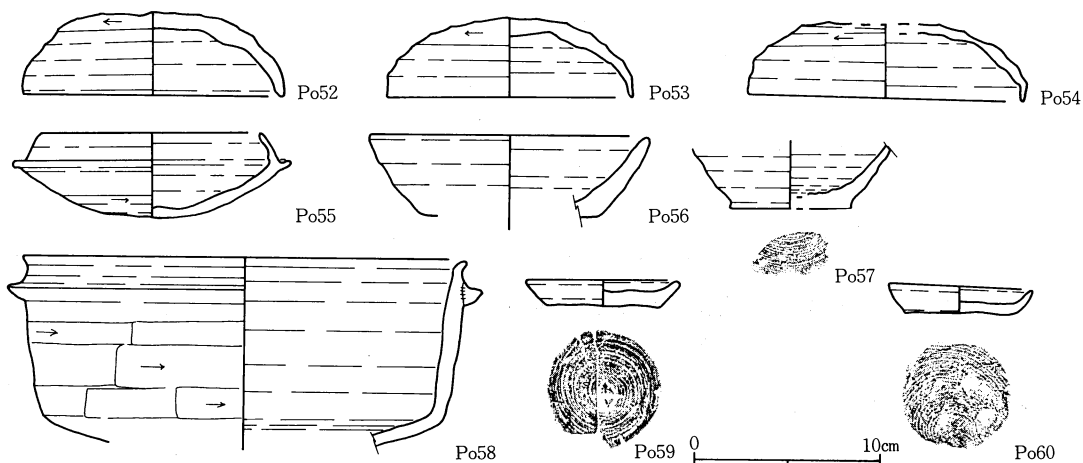
24号墳の墳丘中央部やや西よりで検出した。24号墳の主体の1つと考えられる。板石の破片が散乱している中に側壁と考えられるやや立っている石（S 1）が検出されたほか，北東側に 90 cm 四方で厚さ 15 cm 以上の大きな板石（S 2）があった。最終的にはこの板石（S 2）の両側に溝状の掘方が検出されたので，この埋葬施設は木棺墓であり，裏込めに板石を配したものであったと推定する。北西の掘方上面から須恵器蓋坏（P<sub>o</sub>49），管玉（J 1）と骨片，東からも蓋坏（P<sub>o</sub>50），管玉（J 2），板石（S 2）の南で骨片，東際に歯片を検出した。後世にかなり攪乱をうけたものと考えられる。両掘方の最短幅 200 cm，溝の長さ 230 cm で，正確な規模は不明であるが，長辺 200 cm，短辺 100 cm 程度の木棺を推定する。大きな板石（S 2）の性格はわからない。軸方向は  $N-40^{\circ}-E$  をとる。出土遺物から第2埋葬施設の時期は 6 世紀後半と考える。



挿図176 24号墳第2埋葬施設遺構図 (S=1/40)

(3)第3埋葬施設 (挿図 178・179・182, 図版 29・42・43)

墳丘東南側で検出した。周辺には板石の破片が非常に多数散乱しており、すぐ南の石群とあわせて葺石かとも考えた。板石片の散乱の中から金環 (B 1) が出土している。黒砂地表面わずか下で巨大な板石を2枚検出した。北の板石 (S 1) は長辺 170 cm, 短辺 110 cm, 厚さ 25 cm, 南の板石 (S 2) はさらに大きく最大辺 180 cm, 短辺 150 cm, 厚さ 20 cm のやや方形に近い巨大なものであった。これらの検出面で須恵器 (P<sub>52</sub>~54), 鉄釘 (F 17・18) を検出した。この時点でトレンチにより断面を確認したところ北側で板石を敷いてその上に板石をたてたもの、南側で黒褐色のおちこみ (⑥層) がみられた。黒褐色砂のおちこみは東西断面で見る限りでは周辺に続いており、墳丘築造以前の旧地表面であると考えられる。その上の褐色砂の部分では、やや粘質ぎみの面がみられた。2枚の板石をとりあげてさらに掘り下げたところ、北の板石 (S 1) のすぐ下で再び板石 (S 3) を検出した。こ



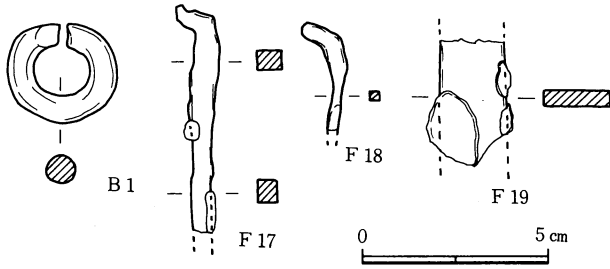
挿図178 24号墳第3埋葬施設遺物図その1 (S=1/4)

れの大きさは長辺 140 cm, 短辺 90 cm, 厚み 6 cm であり, やはり大きなものである。この板石上に乗った状態で完形の中世の灯明皿 (P060) を検出した。さらにこの板石 (S3) を取り除いた後, 板石破片の下から中世の羽釜 (P058) を検出した。羽釜の位置は地山面より 12 cm 上であるが, この埋葬施設の床面と考えた面からは 10 cm 上にあたる。さらに南側隅でも完形の灯明皿 (P059) を検出した。羽釜 (P058) は 24 号墳墳丘上で同一個体の破片を多数検出している。

この段階で板石 (S3) の東に立っている状態の板石 (S4) を検出した。既に検出している北側の立っている板石 (S5) と考えあわせると, S4 と S5 は直交する位置にあたり, 断面的にも旧地表面と考える旧黒褐色砂層の上面がくぼんでいることから, 図のような掘り方を持ち, S4・S5 を側にたてかけた埋葬施設と考えた。東側の黒褐色砂の上面の黄褐色砂では, 一部でかなり粘土質の砂を検出した。S5 は下に数枚の小さい板石を敷き, その上にたてられたもので長さ 100 cm, 幅 25 cm, 厚さ 2 cm の板石である。このような状況で小口板としてたてられたものは, 他の石棺にはみられない。

いずれにしても S1~3 の大きな板石は原位置を保っていると考えするには, S3 と地山面とのレベル差が 22 cm と低すぎるから, 本来はより高い位置 (S4 の最高点付近) にならべられていたものとする。その場合高さは 60 cm ぐらいとなろう。一応箱式石棺, もしくは木棺を石槨状に囲ったものと考えておく。軸方向は N-0°-E となろうか。

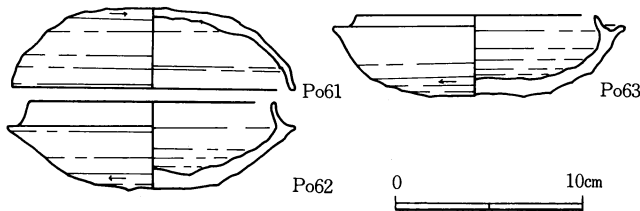
しかし問題は出土遺物であって, 最も下層から羽釜・灯明皿が出ていることである。S1~3 のような大きな板石の下にこれらの物が, 後世の攪乱によっても混入することがあるだろうか。その可能性があればこの第3埋葬施設は 24 号墳築造時のものと考えうるが, 可能性がなければ, これらの遺物の時期に作られた, と考えねばならなくなるだろう。遺物から, 中世に作られた可能性が強いと考えたい。



挿図179 24号墳第3埋葬施設遺物図その2  
(S=1/2)

(4)第4埋葬施設 (挿図180・183・185, 図版29・42)

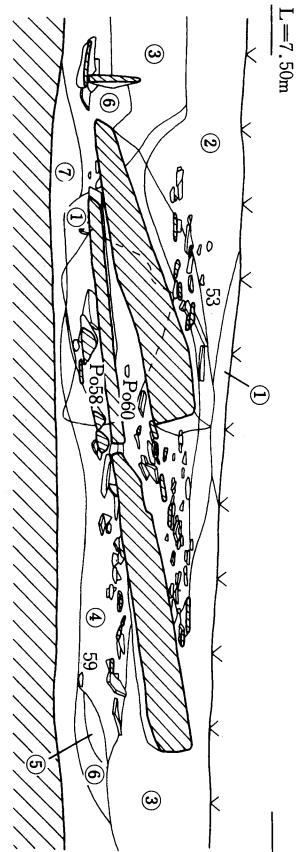
墳丘北側端部で検出した。大形の壺(Po64)を利用した土器棺墓と考えた。墳丘面をわずかに掘り下げた段階で口縁部を北に、底部を南にした状況で出土した。遺存状況はかなりよく、復元した結果肩部以上は全体が、胴部以下も約半分が残っており、出土状況としても完形に近い状態のものが押しつぶされた状態であった。すぐに南側には完形の須恵器蓋坏の蓋(Po61)と身(Po62)が近接して出土しており、Po63も破片で散在していた。土器棺墓と考える場合、特に施設も確認できなかったので積極的に断定する要素に欠けるが、墳丘上面に位置して下層のものではない事、須恵器2点が供献と考えられる状況で出土している事、壺自体の残りもよい事から24号墳に伴う埋葬施設と判断した。土器棺の器高は90cm(推定)、口縁内径38.9cm、軸方向はN-12°-W。須恵器(Po61~63)からこの埋葬施設は6世紀後半のものとする。



挿図180 24号墳第4埋葬施設遺物図その1 (S=1/4)

(5)第5埋葬施設 (挿図181・184, 図版30.42)

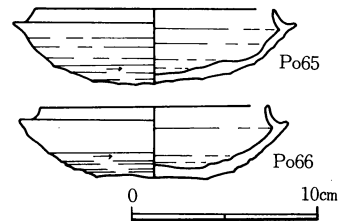
周溝から南へ7.5mとかなり離れた位置にあるが、主軸が第3埋葬施設と近似することから、24号墳に伴う埋葬施設と考えた。主軸はN-208°-Eであり長軸104cm、短軸72cm、



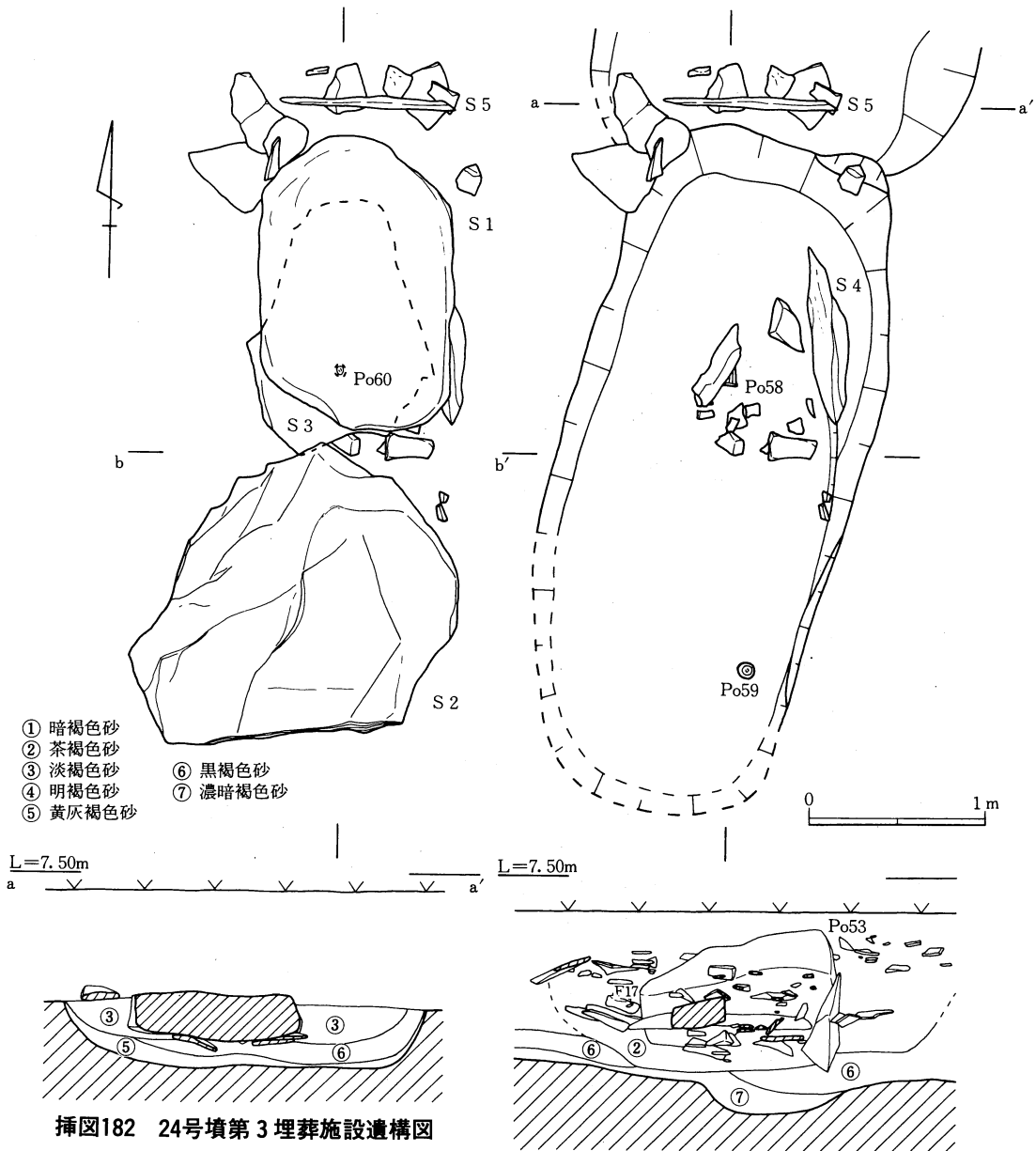
- ① 暗褐色砂
- ② 茶褐色砂
- ③ 淡褐色砂
- ④ 明褐色砂
- ⑤ 黄灰褐色砂
- ⑥ 黒褐色砂
- ⑦ 濃暗褐色砂



挿図182-2



挿図181 24号墳第5埋葬施設遺物図 (S=1/4)



挿図182 24号墳第3埋葬施設遺構図  
(S=1/40)

深さ 35 cm の墓壇内に長軸不明，短軸 37 cm (西側)・45 cm (北側)，床面までの深さ 23 cm の内法をもつ箱式石棺である。蓋石は全く残っておらず，北側小口も抜き取られている。側壁は西側が 1 枚，東側が 2 枚で，いずれも東に傾く南小口には 1 枚の厚い石が使われている。それらの板石にはベンガラは認められない。棺内には人骨，副葬品の検出はなかったが，南小口際に枕に転用されたと推定される須恵器蓋坏 (P.65・66) が検出された。蓋坏はいずれも身であり，セットではない。時期は蓋坏身から判断して古墳時代後期末までであろう。

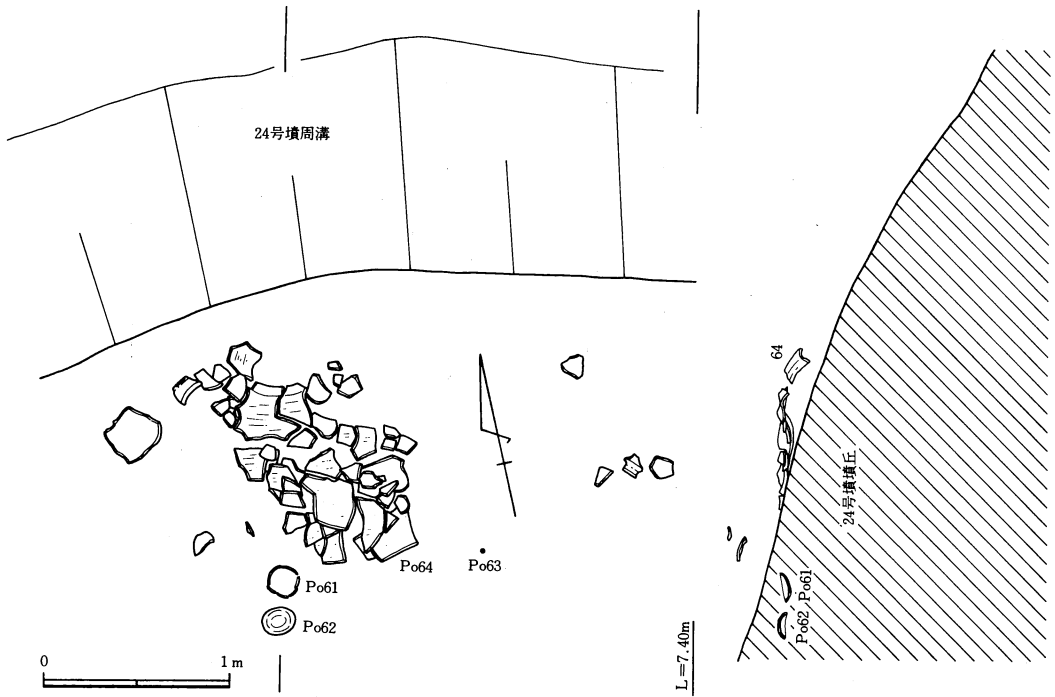


插图183 24号墳第4埋葬施設遺構図 (S=1/40)

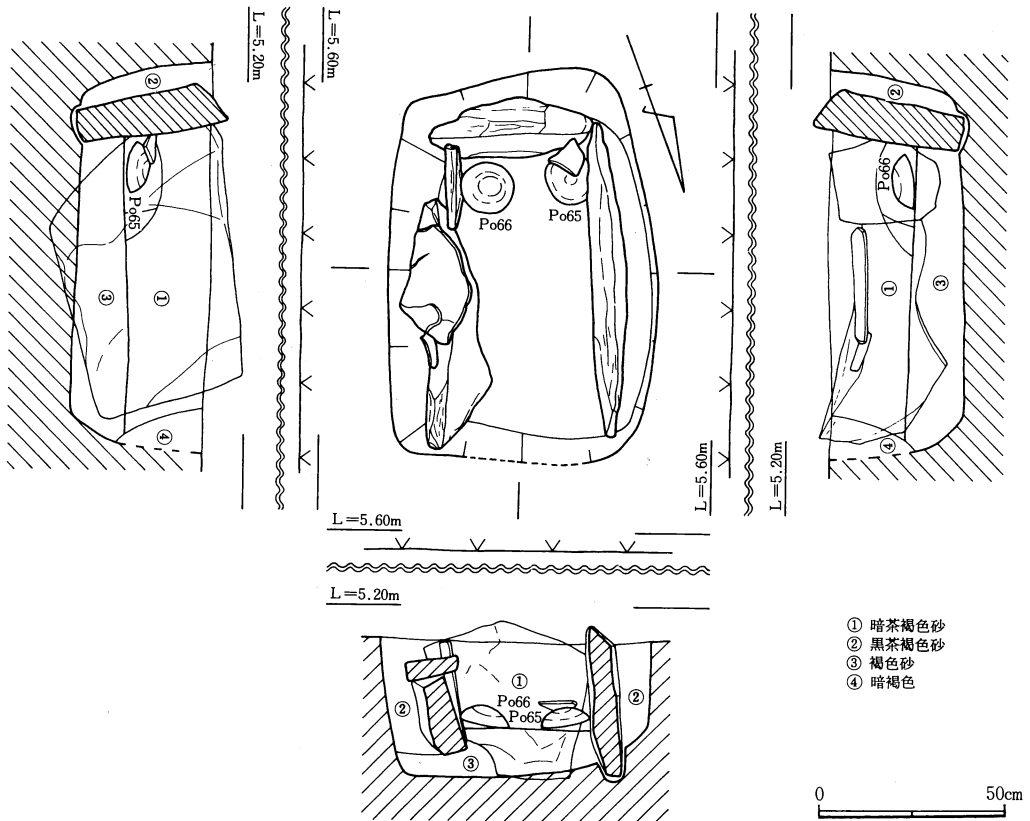
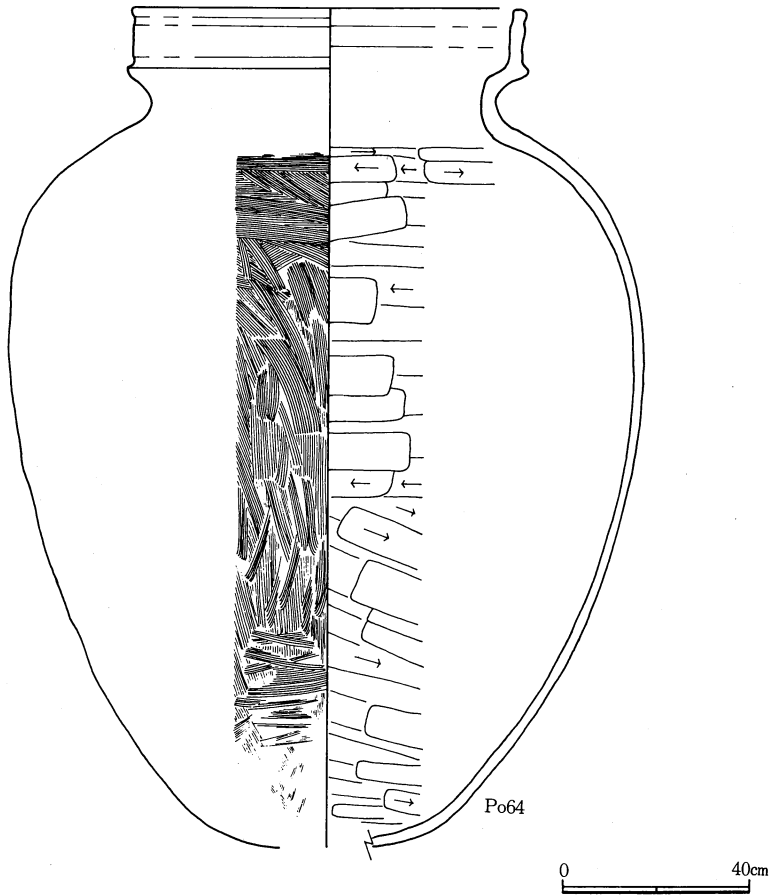


插图184 24号墳第5埋葬施設遺構図 (S=1/20)

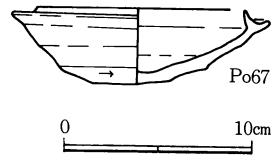




挿図185 24号墳第4埋葬施設遺物図その2 (S=1/16)

(6)第6埋葬施設 (挿図 186・187, 図版 30・42)

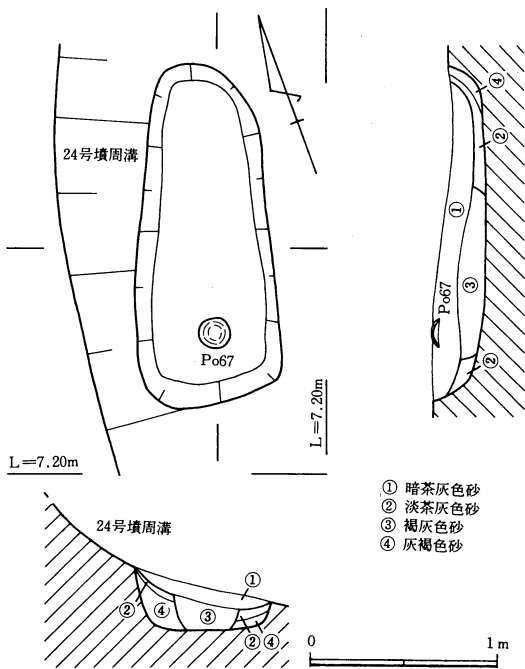
周溝北西部の外肩近くで検出した。長辺 180 cm, 短辺 74 cm, 深さ 27 cm の土壇である。西側の埋砂上面から須恵器蓋坏身 (P.67) を検出した。断面を観察すると, 土壇の中央に長さ 160 cm, 幅 57 cm, 深さ 15 cm のおちこみがある。このおちこみを木棺部とする木棺墓の可能性があろう。P.1 を供献土器と考えた。24 号墳に伴う埋葬施設で 6 世紀後半代のものであろう。



挿図186 24号墳第6埋葬施設遺物図 (S=1/4)

(7)その他 (挿図 188~191, 図版 42・43)

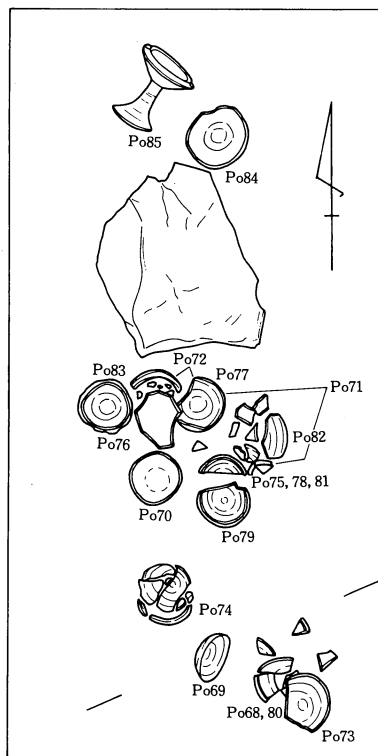
24 号墳の南側からは周溝内から墳裾にかけてかなりの数の板石が列状になって検出された (挿図 190)。この石群の内からは多数の須恵器・鉄製品が出土している。西側のものは周溝底面近くであるし, 第3埋葬施設南側のものについては周溝が検出できなかったところである。石もかなり大きな板石が多く, 蓋石とは考えにくい状況である。



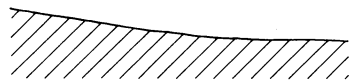
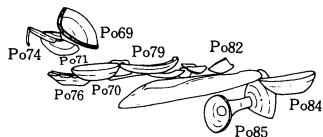
挿図187 24号墳第6埋葬施設遺構図  
(S=1/40)

西の周溝内では須恵器蓋坏(P<sub>068</sub>~81), 有蓋高坏(P<sub>082</sub>~85)が出土した。下に埋葬施設があった可能性もあるが確認できなかった。墳丘内の埋葬施設に供献された土器とも考える。

墳丘上からも多数の須恵器片の他土師質土器も出土した。



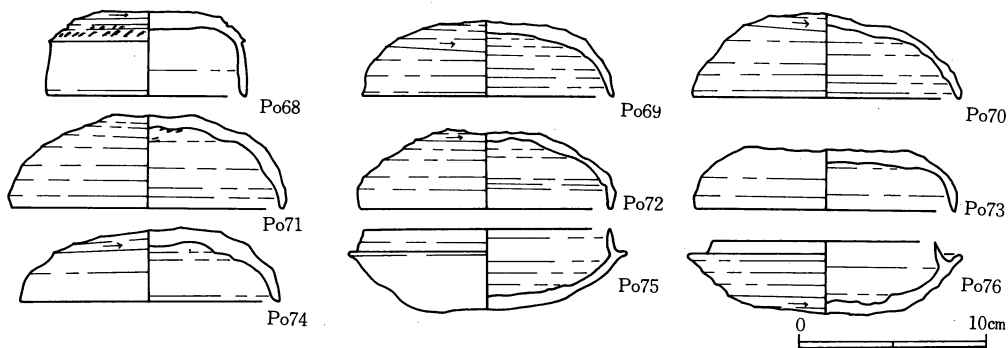
L=6.90m



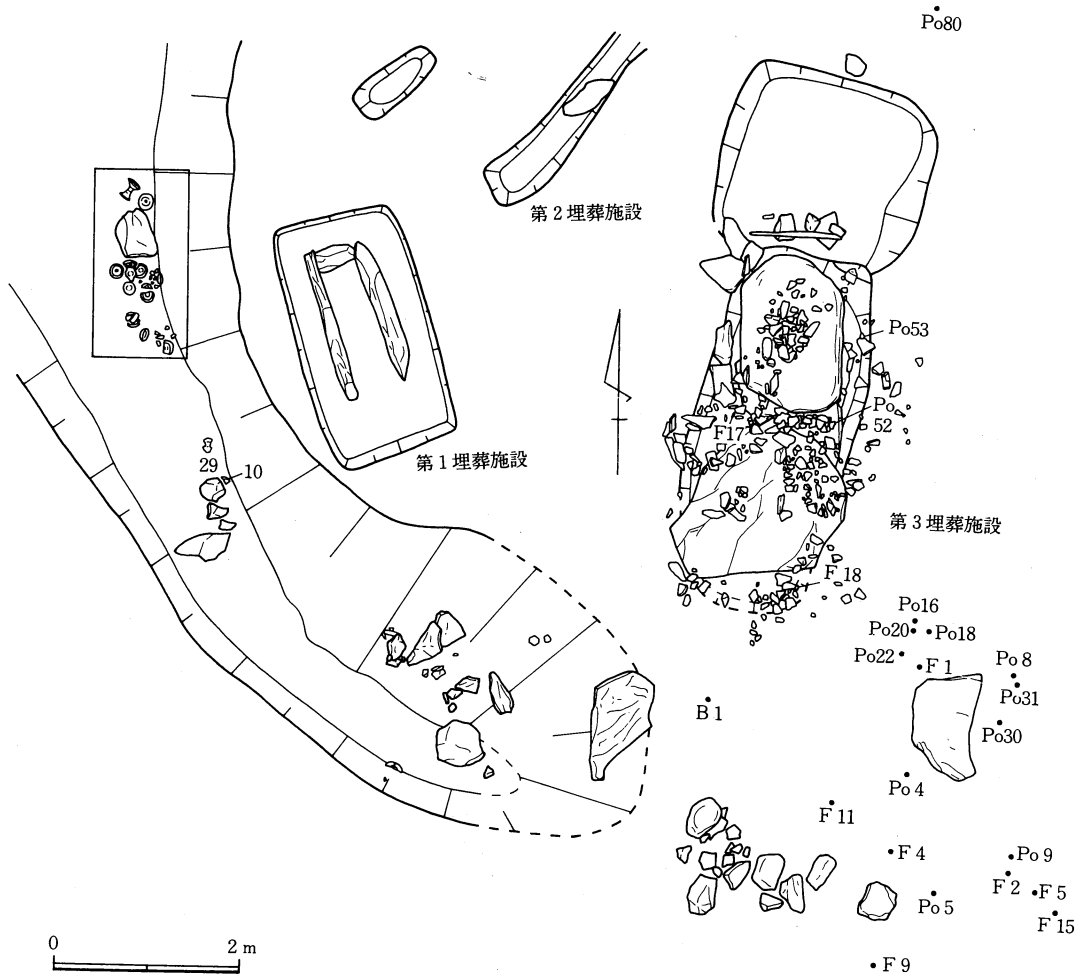
0 50cm

挿図188

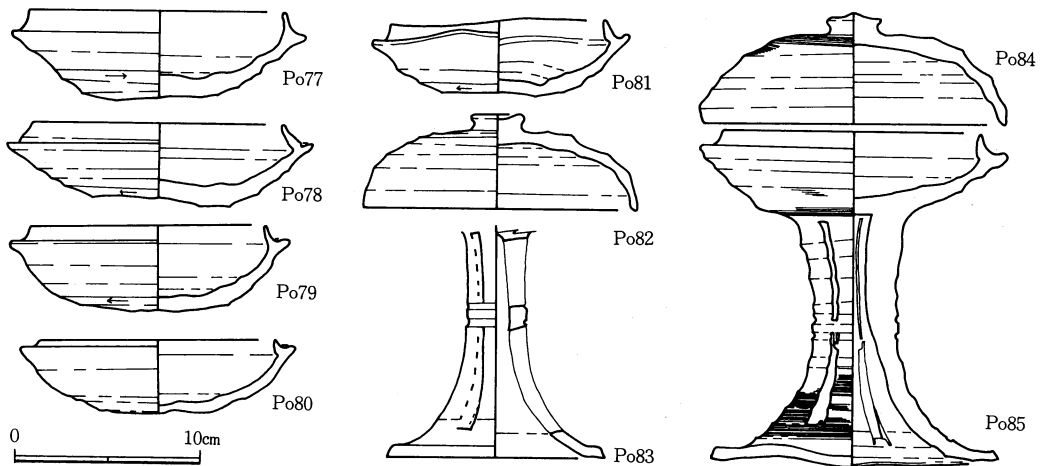
24号墳周溝内遺物拡大図 (S=1/20)



挿図189 24号墳遺物図その1 (S=1/4)



挿図190 24号墳遺構図 (S=1/80)



挿図191 24号墳遺物図その2 (S=1/4)

## 小結

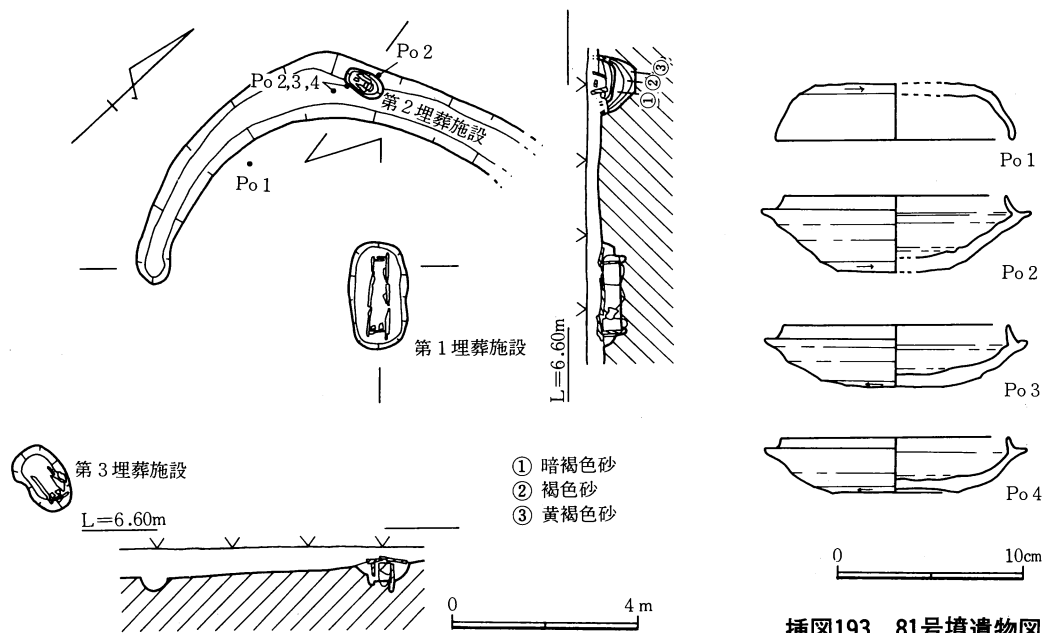
24号墳は以上の出土遺物から6世紀後半に築造されたものと考えられる。南東側には土塁状遺構やS B 41があり、墳丘面も一部攪乱をうけているものと思われる。北西周溝の堆積層の上にはいくつかの中世の火葬墓、墳丘中央にはS X 32が作られており、同様の時期に第3埋葬施設も、少なくとも攪乱をうけたことにまちがいない。

25号墳・8号墳とならんで24号墳も6世紀後半のものと考えられ、一連の古墳群として作られたと考える。これらの古墳はいずれもこの遺跡内では高い墳丘をもつ古墳である。

この墳丘の高まりは、黒砂上面に白砂が堆積を始めた時にも残っており、火葬墓などは意図的にその高まりを利用して作られたものと推定する。

### 81号墳 (挿図 192~195・197, 図版 30・31)

9 F南西区・9 E北西区にまたがり7号墳の南東、8号墳の北東に位置する。東側は調程区域外のため未調査であるが、墳形は円形で、直径約8m周溝から周溝までの径約10m (推定)になろう。南側では周溝を検出することができなかった。溝は幅約80cm, 深さ約27cm程でU字状をしている。埋葬施設は墳丘内に1基, 周溝上に1基, 南側に1基の計3基をもつ。周溝上面にある第2埋葬施設周辺から供献土器と思われる須恵器の蓋坏蓋(Po.1), 盖坏身(Po.2~4)計4個を検出した。



挿図192 81号墳遺構図 (S=1/160)

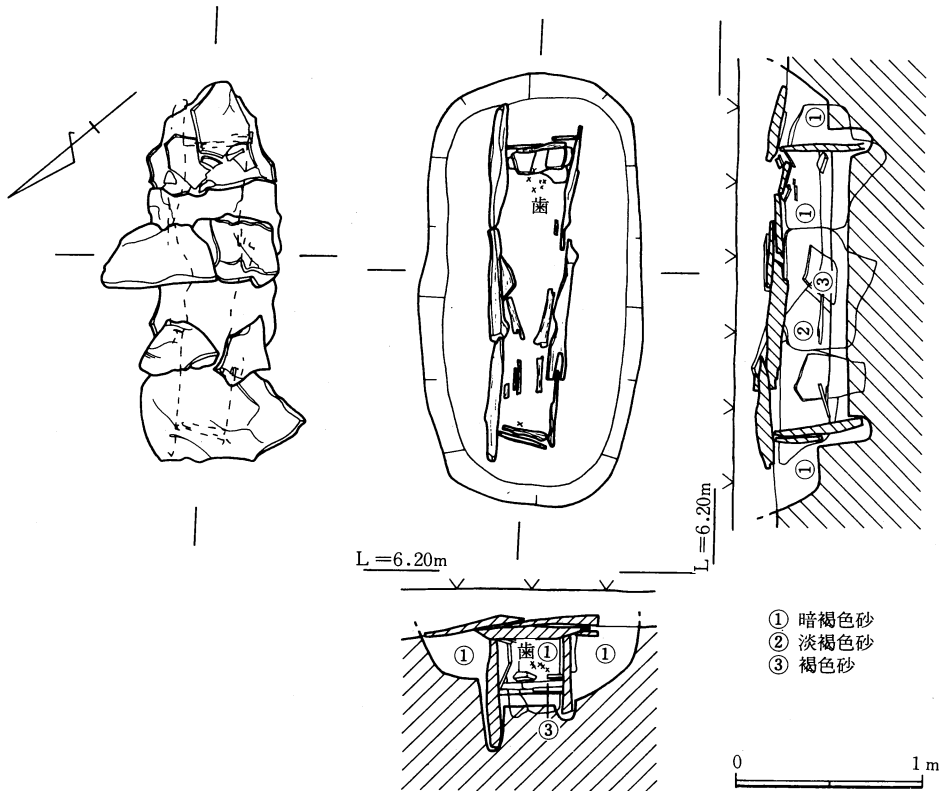
挿図193 81号墳遺物図

(S=1/4)

### (1)第1埋葬施設 (挿図 194, 図版 30・31)

墳丘中央部にある箱式石棺である。長軸 230 cm, 短軸 118 cm, 深さ 46 cmの墓壇内に内法

長軸 148 cm, 短軸 34 cm, 床面までの深さ 24 cm を測る石棺が造られていた。主軸は N-136°-E である。蓋石は板石 10 枚を重ね合わせ、北側側壁で 5 枚、南側側壁で 4 枚、東側小口で 3 枚、西側小口で 2 枚の板石を使っていた。棺内東側には 4 枚の板石を組み合わせた石枕を検出した。また内部には粘土塊が多量にみられることから隙間に粘土の目ばりがしてあったと思われる。全面に赤色顔料が塗られていた。棺内からは、大腿骨、下腿骨、歯などを検出したが副葬品は検出できなかった。人骨、歯により年齢は壮年前半、身長は 149 cm 前後と推定され、男性の可能性が強い。



挿図194 81号墳第1埋葬施設遺構図 (S=1/40)

(2)第2埋葬施設 (挿図 195, 図版 31)

北西の周溝上より検出した小型の箱式石棺である。主軸はN-75°-Eで墓壙は長軸 85 cm, 短軸 47 cm である。石棺は西側小口と上蓋を欠き、相当に荒らされた状態である。棺内の大きさは推定内法長軸 35 cm, 短軸 15 cm, 床面までの深さ 15 cm である。残存部は側壁南北各 1 枚と小口東側 1 枚が傾いた状態で、その他小さい石片のみである。墓壙、棺内とも人骨等の遺物は検出されなかった。この石棺は 81 号墳の周溝上にあることから、81 号墳に関連する埋葬施設と考えられる。81 号墳の周溝が埋りつつある時期に造られたものとみなした。

### (3)第3埋葬施設

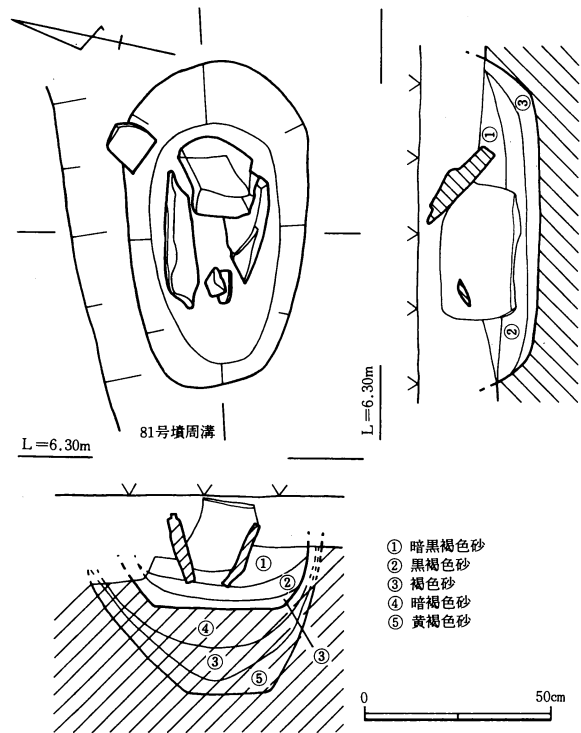
(挿図197, 図版31)

第1埋葬施設の南側にある小型箱式石棺で9 E・S D 01によって切られていた。検出時にはすでに壊され、蓋石、西側小口、側壁の一部がなかった。長軸147 cm, 短軸91 cm, 深さ51 cmの墓壇内に、内法で長軸71 cm (推定), 短軸31 cm, 深さ30 cmを測る石棺である。主軸はN-39°-Eである。棺内には、東側にV字状の石枕が配されていた。人骨、副葬品は検出できなかった。この石棺は81号墳墳丘から少し離れているが、81号墳の周溝に沿うと思われる、81号墳に伴う埋葬施設と考えた。

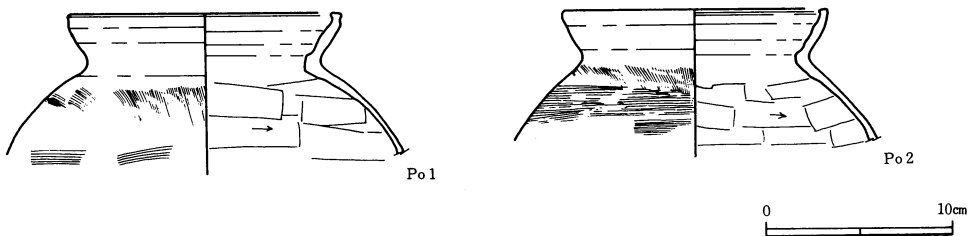
81号墳の築造時期は、第2埋葬施設の周辺から検出した須恵器が6世紀後半頃のものと考えられることから、それよりもやや古い時期と考えた。

### 85号墳 (挿図196・198~201, 図版32・43)

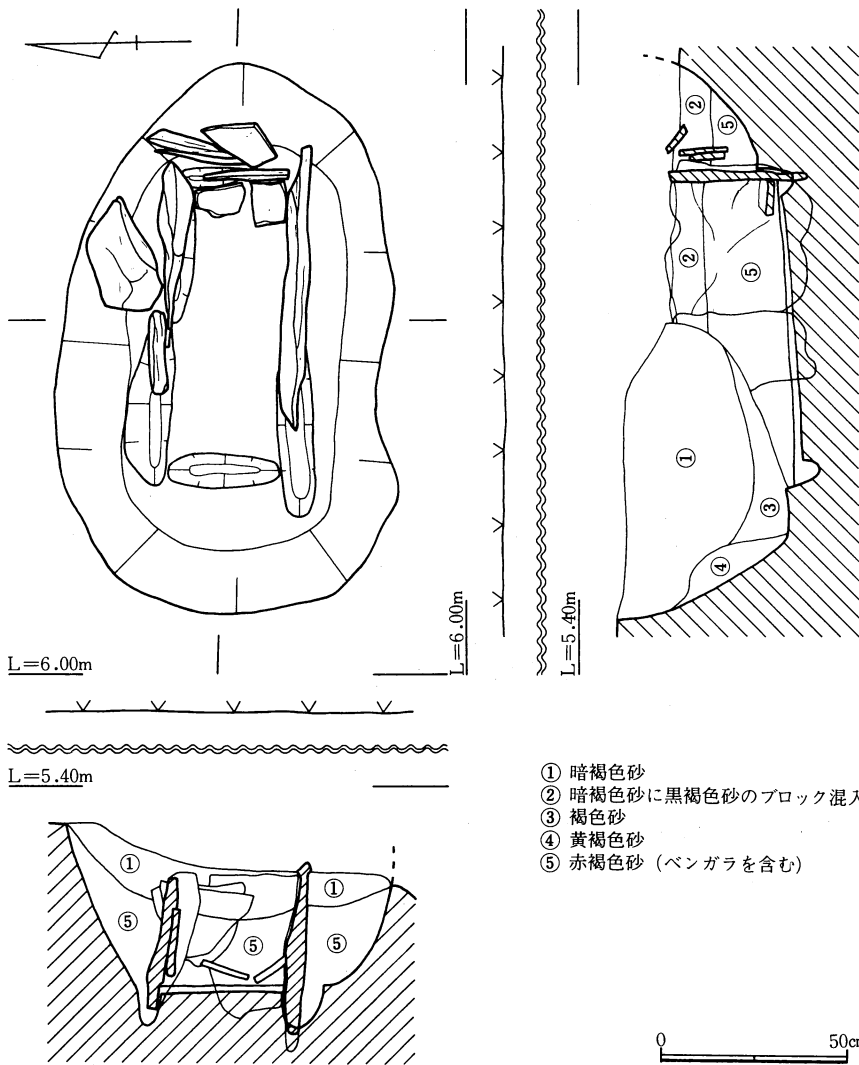
10 D地区, 8号墳の西に位置し8号墳と切り合い関係にある。地形は西北から東南にかけて傾斜しており黒砂層も同様に傾斜している。内部主体は箱式石棺で8号墳調査中に周溝に沿う方向で検出した。このことから当初は8号墳に伴う埋葬施設かと考えたが、最終的には地山の高い西北部に周溝を検出した。このため8号墳とは別の古墳であると判断した。南には周溝が検出されなかったことから、おそらく地形の高い北西部のみ周溝を掘りこんだものとする。周溝から周溝までの総直径6.8 m, 直径5.4 mの小規模な円墳になる。



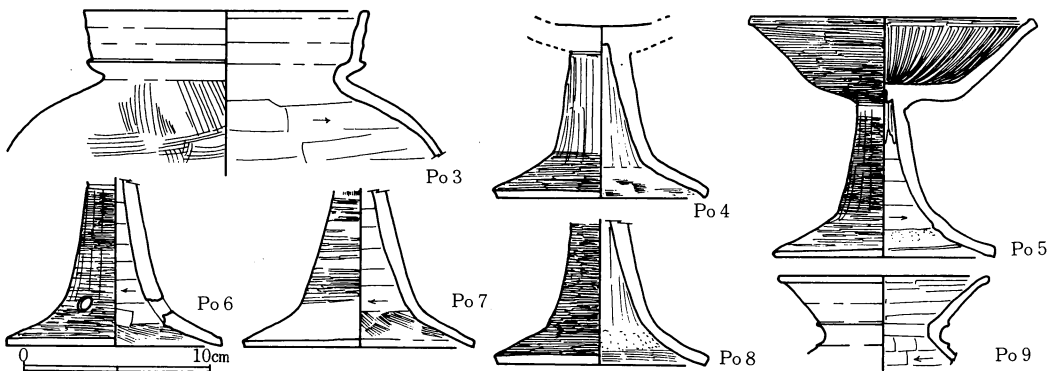
挿図195 81号墳第2埋葬施設遺構図 (S=1/20)



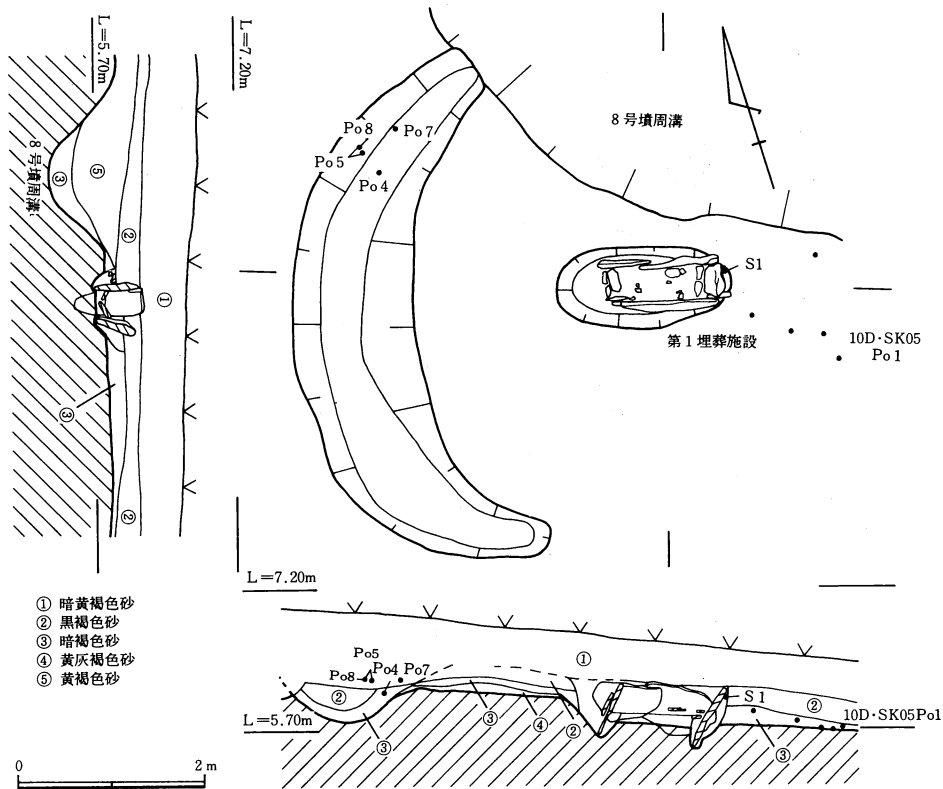
挿図196 85号墳遺物図その1 (S=1/4)



挿図197 81号墳第3埋葬施設遺構図 (S=1/20)



挿図198 85号墳遺物図その2 (S=1/4)



挿図199 85号墳遺構図 (S=1/80)

(1)第1埋葬施設 (挿図 200・201, 図版 32)

箱式石棺で、掘り方は長辺 185 cm, 短辺 90 cm の規模をもつ。蓋石は検出当時既に全く遺存していなかった。東の 8 号墳周溝内や石棺のすぐ南で多量の板石片が検出されており、この石棺の蓋石かも知れない。棺の内法は長辺 103 cm, 短辺 40 cm, 深さ 40 cm を測る。南側に V 字状石枕をもつ。軸方向は N-108°-E をとる。西側に 1 枚, 東側に 2 枚の板石をたてて側壁を構成し、西側については小口部に 1 枚ずつ加えて補っている。小口は 60~70 cm のきわめて長い板石を深く掘りこんでたてており、北の足側にはさらに外側に板石をたてかけている。遺骨・遺物は全く検出されなかった。小口板は両側とも南に傾斜しているが、特に棺内部が攪乱をうけた状態ではない。

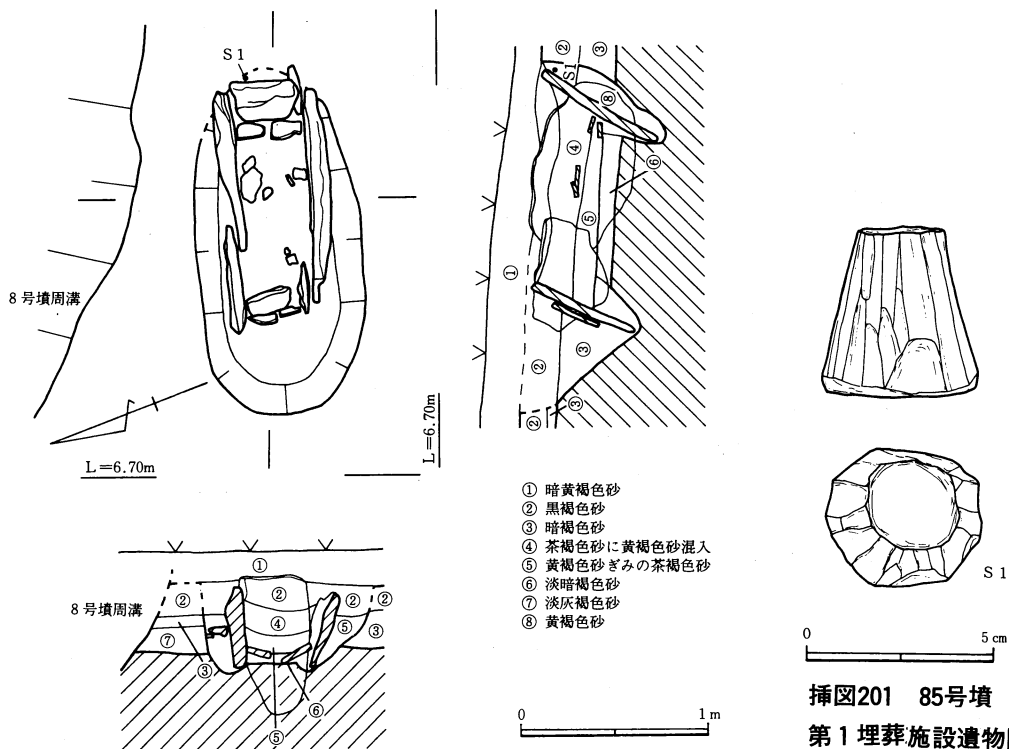
南側の板石の中からは多量の須恵器片 (挿図 199 中の点) を検出した。検出レベルが低いからこの 85 号墳に伴うものでなく、すぐ南にある 10 D S K 05 の上層に埋没したものと考えた。(須恵器は 10 D S K 05 の P.1・2 として示した。挿図 281) むしろ 8 号墳に伴う須恵器と考えたい。

85 号墳の周溝内には土師器 P.1~9 が埋没していた。これらの遺物により、85 号墳は古墳時代中期後半の築造と考えたい。切り合い関係からは明確には 8 号墳の方が新しいとは



言えないが、第1埋葬施設が8号墳の周溝に接している事、蓋石と思われる板石が周溝内に散乱している事から、85号墳は8号墳によって破壊されたものと判断する。

なお第1埋葬施設の掘り方内から石製品S Iが出土した。砂岩状の石を面とりの的に研磨したもので12面をなす。両端は平らである。出土状況から古墳時代中期後半以前の遺物と考える。

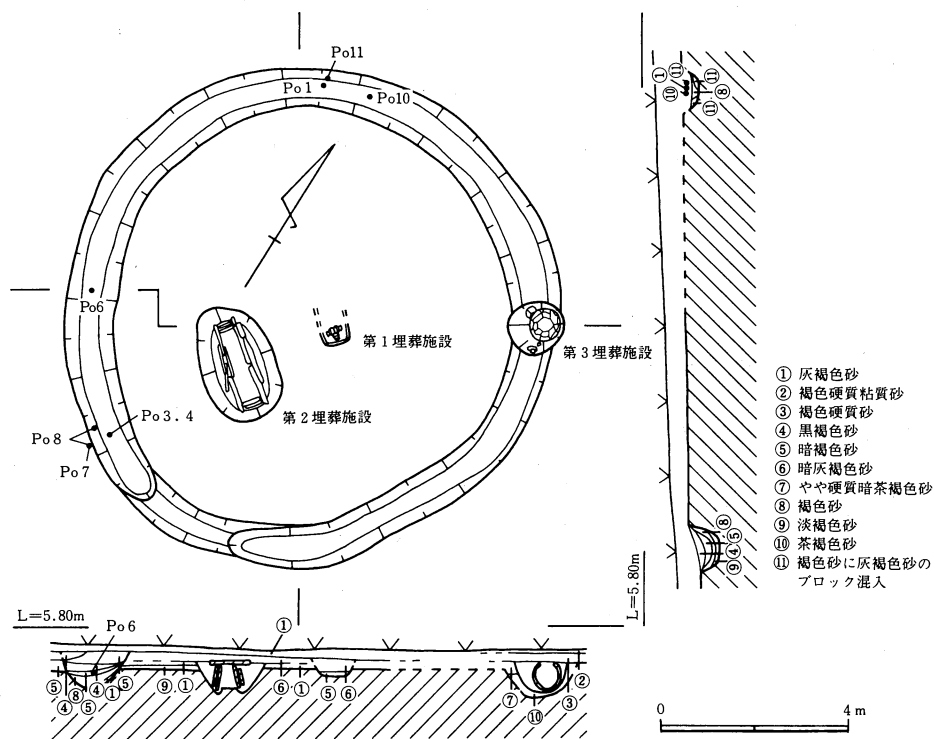


挿図200 85号墳第1埋葬施設遺構図 (S=1/40)

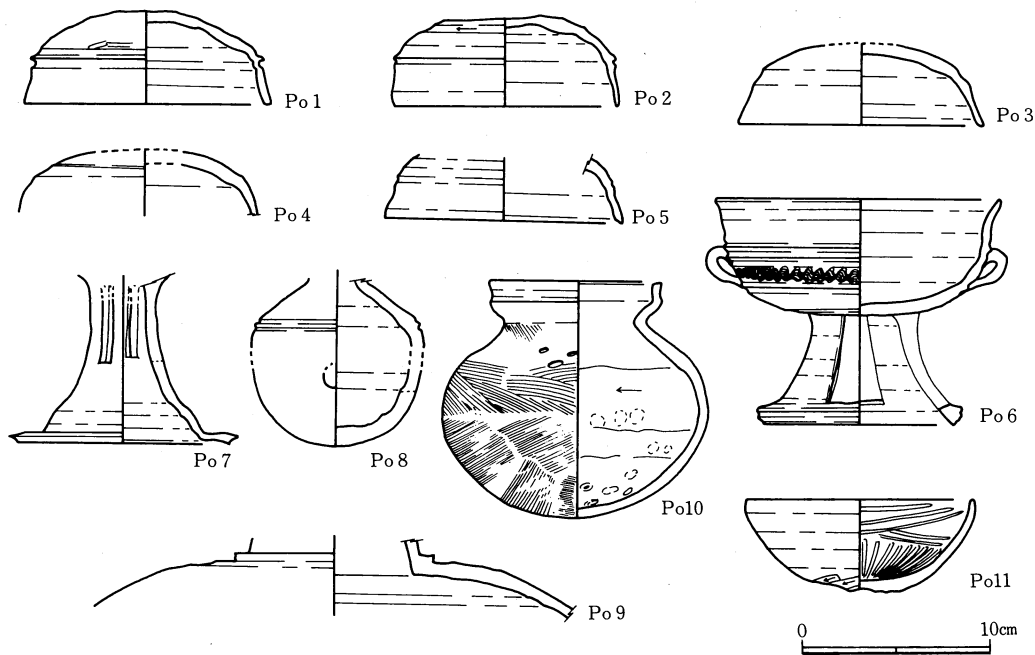
挿図201 85号墳  
第1埋葬施設遺物図  
(S=1/2)

86号墳 (挿図 202~210, 図版 32~34・43・44)

10 C・10 D地区にまたがり、8号墳、87号墳の南にある。周溝から周溝までの径10.4 m、直径8.8 m、周溝幅約90 cmの円墳である。周溝は最初南側に切れ目をもつ周溝が検出され、その後切れ目部分の下層より別の古い周溝が検出された。同じ場所に2度にわたって周溝が作られた2重周溝と考えられる。周溝内より4個の供献土器が検出された。周溝内西側より須恵器高環 (P。6) が少し傾いた状態で、北側より須恵器坏蓋 (P。1) と土師器碗 (P。11) がそれぞれ口縁を上にして、これの東寄りから赤色顔料の入った甕 (P。10) が出土した。これら供献土器は周溝底より25~30 cm上で検出され、切れ目のある上層の新しい周溝をもつ埋葬施設に伴う供献土器と考えられる。これより古い下層の周溝は一巡しており、2つの周溝は重なっているものと考えられる。墳丘の盛砂は不明である。埋葬施設は墳丘内に2基周溝内に1基検出された。



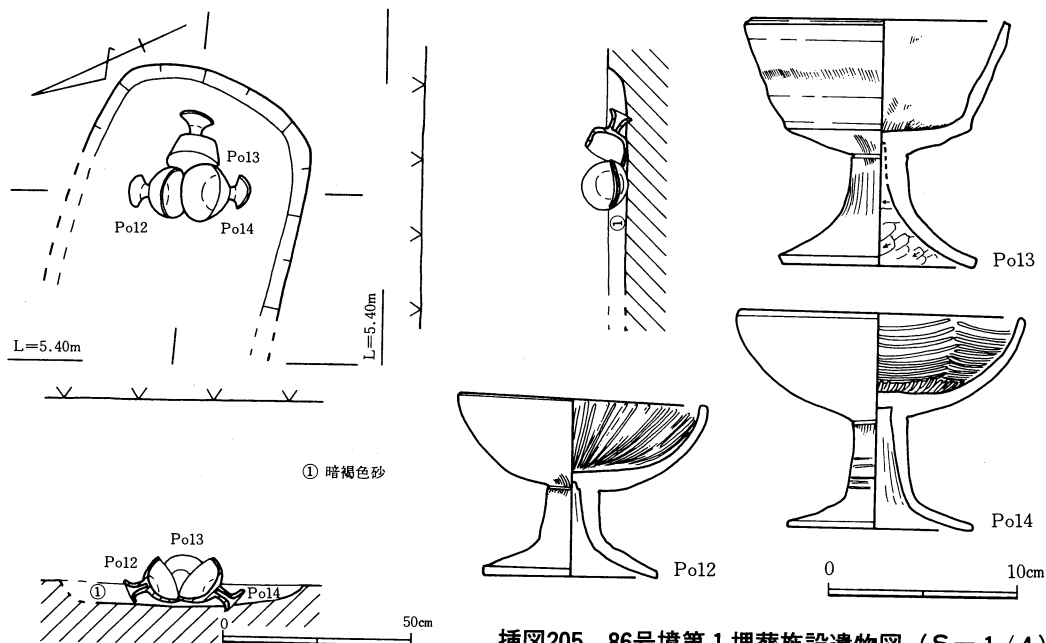
挿図202 86号墳遺構図 (S = 1/160)



挿図203 86号墳遺物図 (S = 1/4)

(1)第1埋葬施設 (挿図 204・205, 図版 33・43)

墳丘中央部にあり土壌墓と考えられる。北西側 $\frac{2}{3}$ は検出前に掘り下げられ、南東側のみ検出した。主軸はN-122°-Eで、大きさは長軸が不明だが、短軸 60 cm、深さ 15 (推定) cm である。検出した土壌南東側に、枕として利用された高坏3個 (Po12~14) が置かれ、第2埋葬施設と同じく南東側を頭部とした埋葬施設と考えられる。その他人骨等遺物の検出はなかった。時期は土器枕の高坏より古墳時代中期後半と考えられる。



挿図205 86号墳第1埋葬施設遺物図 (S=1/4)

挿図204 86号墳第1埋葬施設遺構図

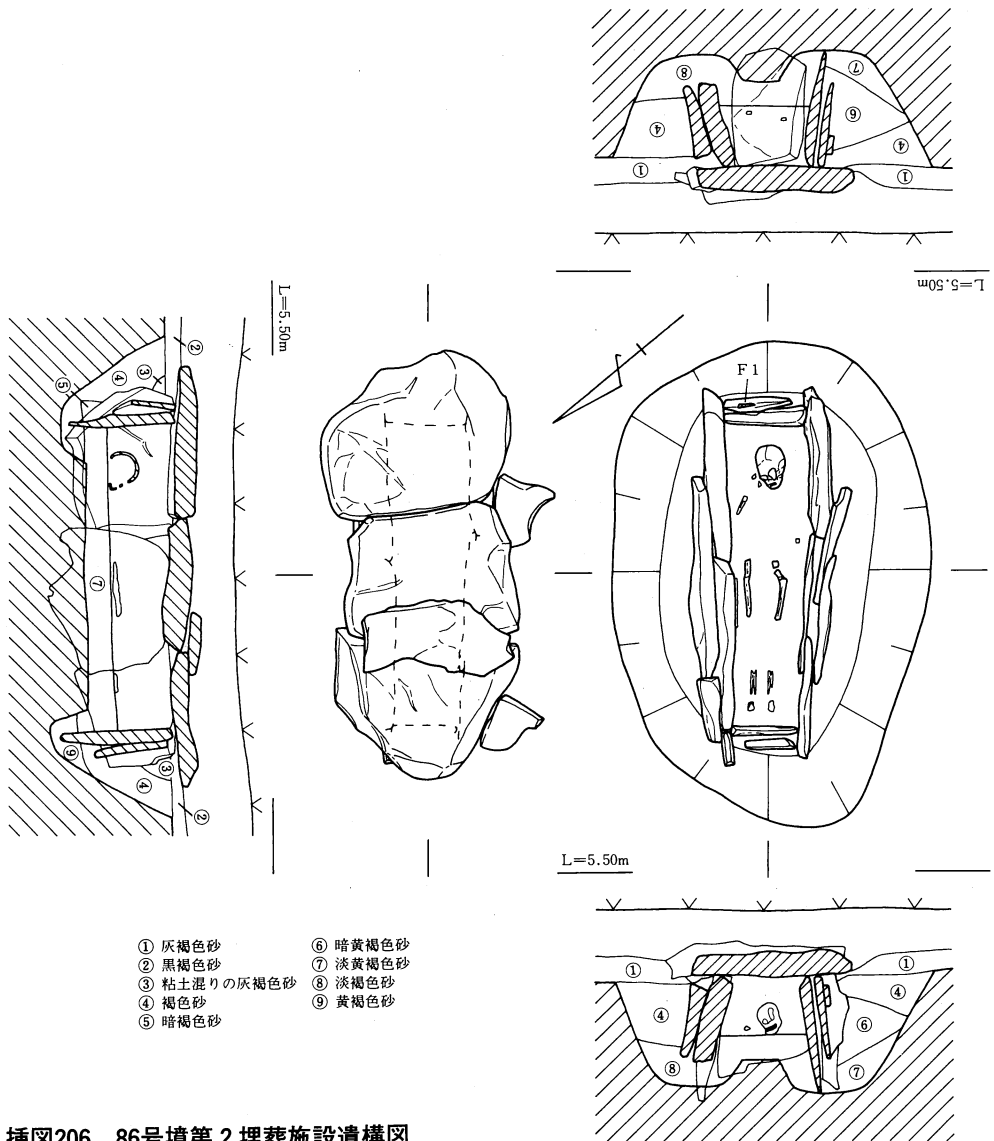
(S=1/20)

(2)第2埋葬施設 (挿図 206・208, 図版 33・44)

墳丘南西側で検出された箱式石棺である。主軸はN-129°-Eである。掘り方は長軸 255 cm、短軸 168 cm、深さ 64 cm、棺の内法は長軸 160 cm、短軸 40 cm、床面までの深さ 31 cm である。蓋石は厚みのある大きな板石 3 枚と小さい板石 3 枚で、側壁は南西側 5 枚、北東側 3 枚、小口はそれぞれ 2 枚の板石が使用してあった。棺内より南東側に頭部を置いた人骨が検出された。人骨の足部の残りはよくなかったが、頭蓋骨の残り具合はよく、壮年<sup>#1</sup>後半から熟年前半の男性と推定される。頭蓋骨の鼻の部分には水銀朱<sup>#1</sup>が付着していたが、他の部分には付着は認められず、棺内には水銀朱は塗られていなかった。棺内より副葬品等の遺物は検出されなかったが、棺外の東南小口の上に刀子 (F 1) が検出された。第2埋葬施設の副葬品と考えられる。

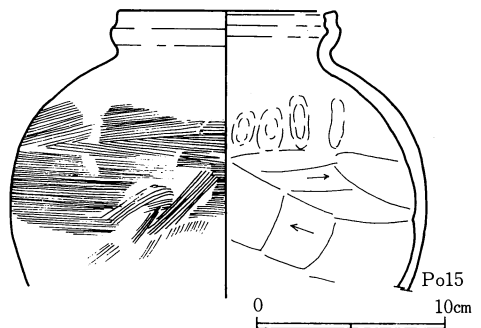
(3)第3埋葬施設 (挿図 207・209・210, 図版 34・44)

完形の壺形土器 1 個体を用いた土器棺である。86号墳の北東周溝内にあり周溝が埋もれ

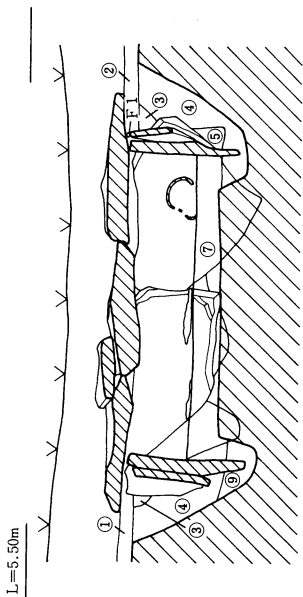


挿図206 86号墳第2埋葬施設遺構図  
(S=1/40)

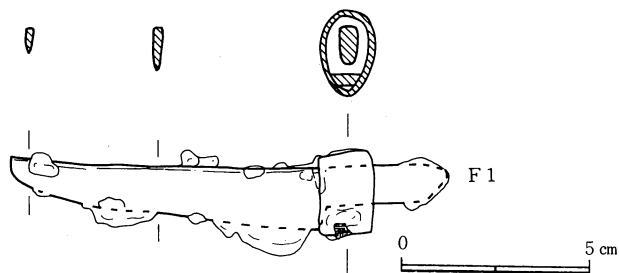
た後を新たに掘り込み，その円形掘方内に壺 (P.16) を安置したと思われる。掘り方は，長軸 127 cm，短軸 112 cm，深さ 55 cm である。棺として使われた壺 (P.16) は口径 38.9 cm，器高 78 cm を測り底部に穿孔が施されている。壺は肩部より上方が風雨を激しく受け破損が著しい。おそらく壺安置後この辺りまで砂が飛ばされ，しばらくの間野



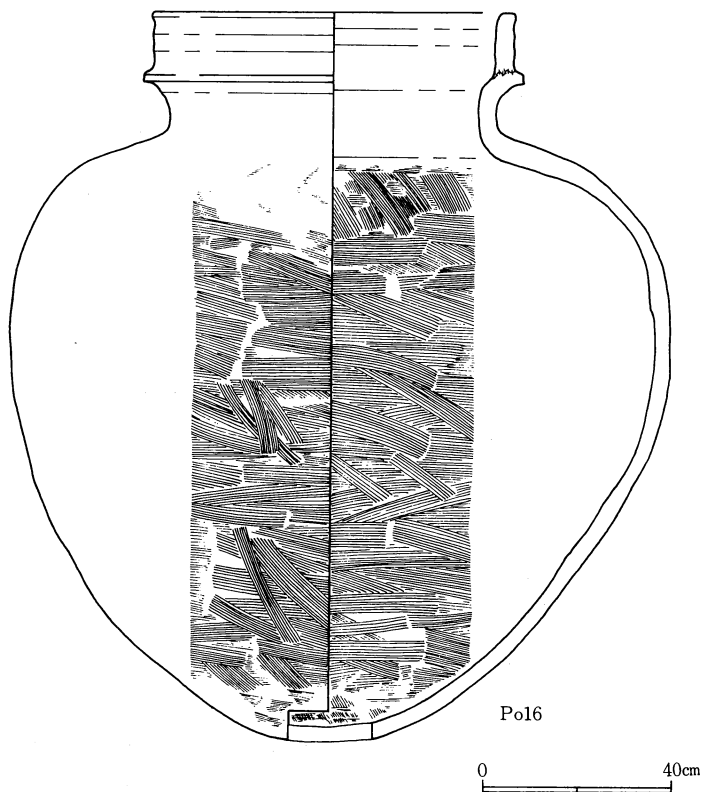
挿図207 86号墳第3埋葬施設遺物図その1  
(S=1/4)



挿図206-2



挿図208 86号墳第2埋葬施設遺物図 (S=1/2)

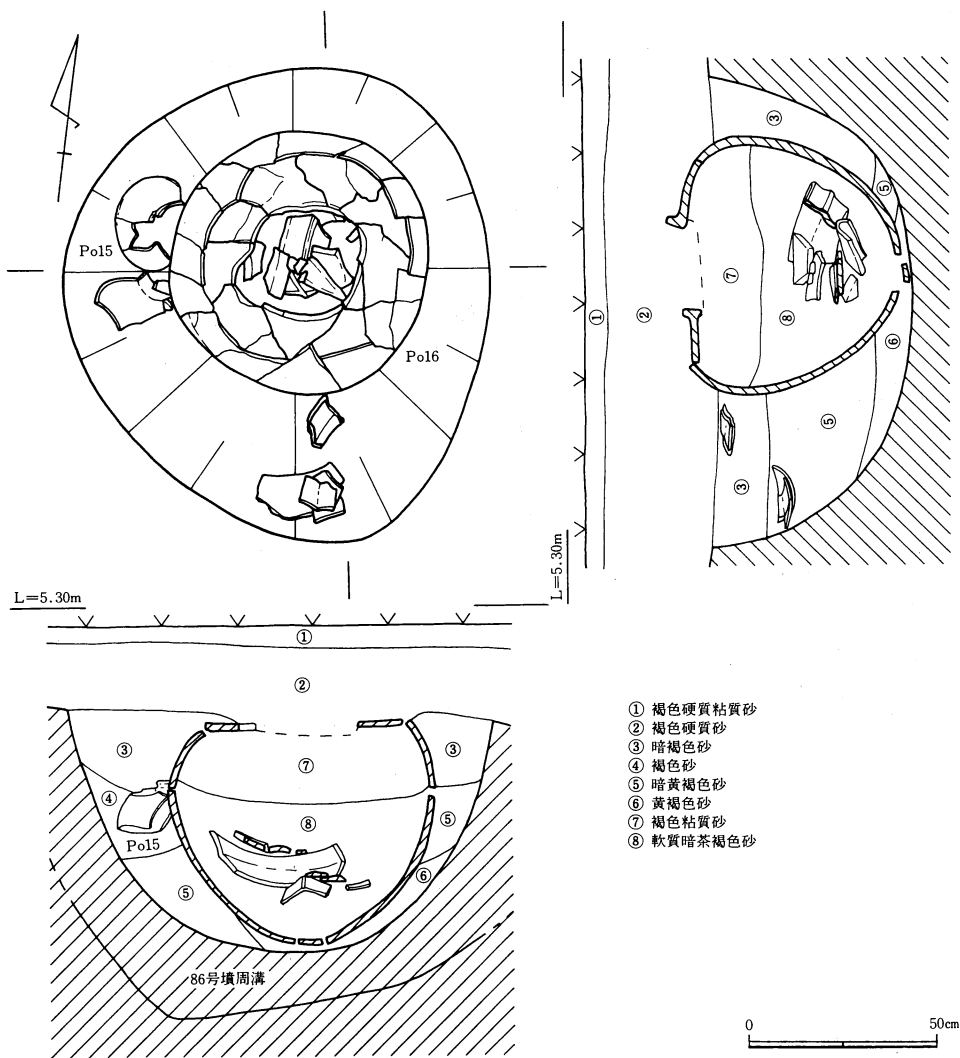


挿図209 86号墳第3埋葬施設遺物図その2 (S=1/16)

ざらし状態だったのだろう。口縁部もその頃破損され、棺内あるいは掘り方内に落ち込んだと推定される。棺内から人骨・副葬品は検出されなかった。掘方内、西側に供献土器と思われる甕 (P.15) が検出された。これもその状況から上方に置かれていたのが落ち込んだものだろう。時期は壺 (P.16), 甕 (P.15) より古墳時代中期後半であろう。

小結

第1埋葬施設は、墳丘部中央にあるので最初に造られた埋葬施設と考えられ、下層で一巡している周溝は第1埋葬施設に伴うものと考えられる。第3埋葬施設は周溝が完全に埋

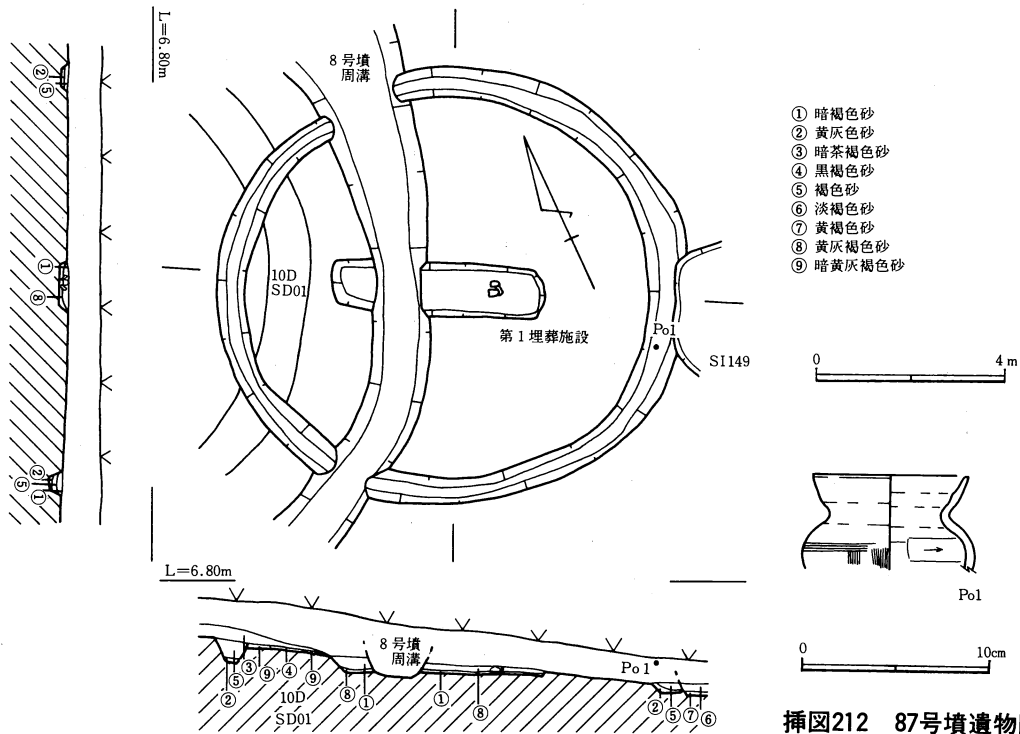


挿図210 86号墳第3埋葬施設遺構図 (S=1/20)

った後に周溝内に埋葬されたものと考えられ、供献土器と切れ目のある周溝は第2埋葬施設に伴うものと推測される。これらのことにより86号墳は第1埋葬施設→第2埋葬施設→第3埋葬施設の順に造られたと考えられるが、第3埋葬施設は周溝内にあり、周溝は2度造られているので第2埋葬施設と同時期に造られた可能性もある。埋葬はそれぞれ違う方法でなされた。第1埋葬施設の土器枕は古墳時代中期後半と推定されるが、2番目に造られた第2埋葬施設の供献土器が古墳時代中期後半の中頃と推定されることにより、86号墳の築造時期は古墳時代中期後半の始めの頃と考えられる。

87号墳 (挿図 211～213, 図版 34・35)

9 D北西区, 10 D北東区にまたがり86号墳の北に位置する。黒砂は8号墳墳丘から東へなだらかに下る斜面に堆積している。87号墳は8号墳に切られ, S I 149, 10 D・S D 01



挿図211 87号墳遺構図 (S = 1/160)

挿図212 87号墳遺物図 (S = 1/4)

を切っている。墳形は円形で径 8.56 m, 周溝から周溝までの径 10 m を測る。周溝は幅 48~88 m, 深さ 18~48 cm を測る U 字状の溝である。87 号墳を検出したのがかなり掘り下げた後で盛砂の存在は不明である。墳丘中央部で埋葬施設を検出した。供献土器と思われる遺物は出土していない。

(1) 第 1 埋葬施設 (挿図 213, 図版)

墳丘中央部にあり, 長軸 448 cm, 短軸 102 cm で, 主軸を N-118°-E にとる土壌墓である。平面形は長方形を呈し比較的細長い。中央よりやや西側で 8 号墳周溝に切られていた。土壌墓内東側に板石を 3 枚組み合わせさせた石枕を検出したが, 人骨及び副葬品と考えられるものは検出できなかった。8 号墳と S I 149 との切り合いと周溝内遺物より築造時期は古墳時代中期後半から後期前半代と考える。

88 号墳 (挿図 214~219, 図版 35・36・44)

10 B 北東区にある 89 号墳の北, S I 156 の南東に位置する。88 号墳は周溝を検出することができなかったが, 第 1 埋葬施設の北西に土器棺と考えられるような大型の壺が出土しており, 88 号墳に伴うものと考えられる。その付近に周溝があった可能性も考えられる。第 1 埋葬施設の北西約 3 m の位置に須恵器蓋坏蓋 (P。1), 蓋坏身 (P。2, 3), 刀子 1 点 (F 1) が出土している。その付近にはこれら須恵器の時期にみあう遺構がなく, 88 号墳の供献遺物と考えられる。

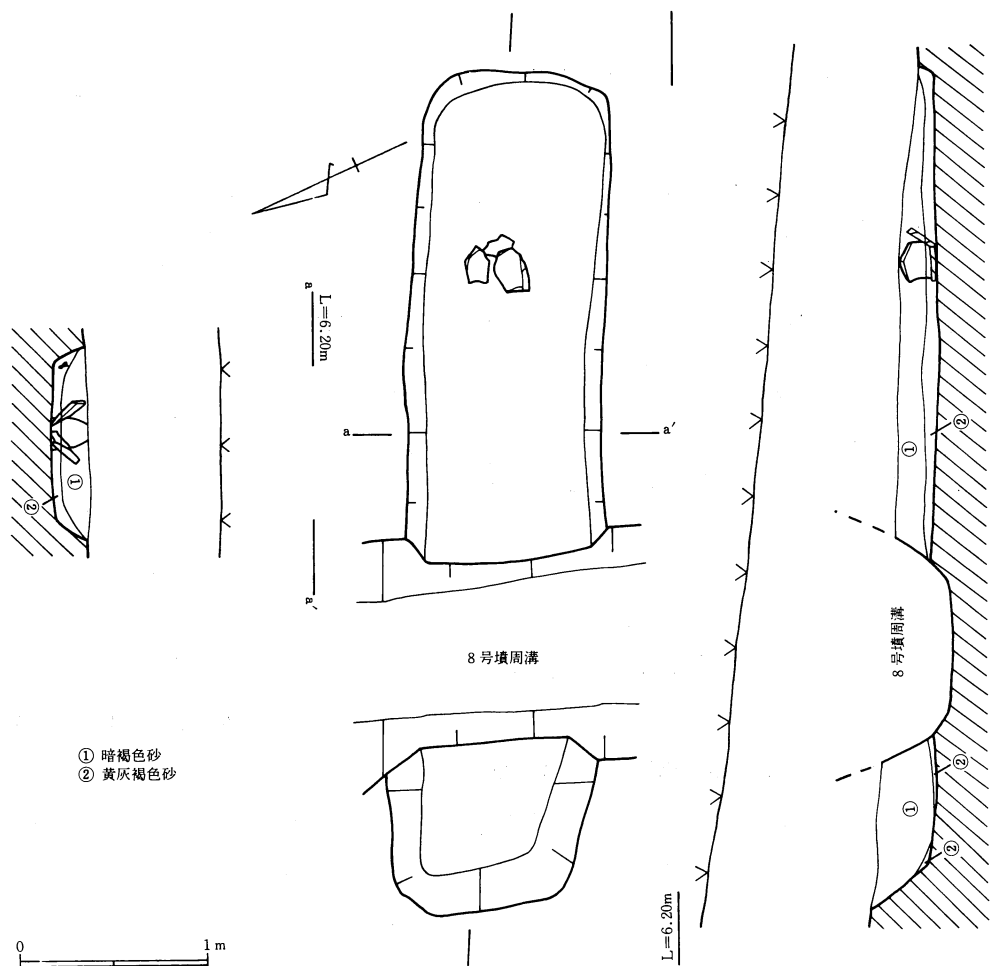


插图213 87号墳第1埋葬施設遺構図 (S=1/40)

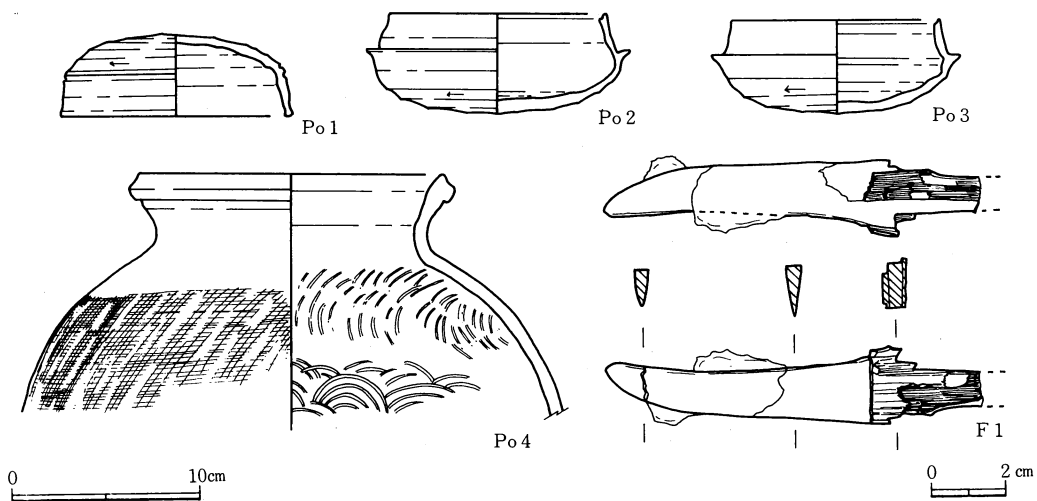
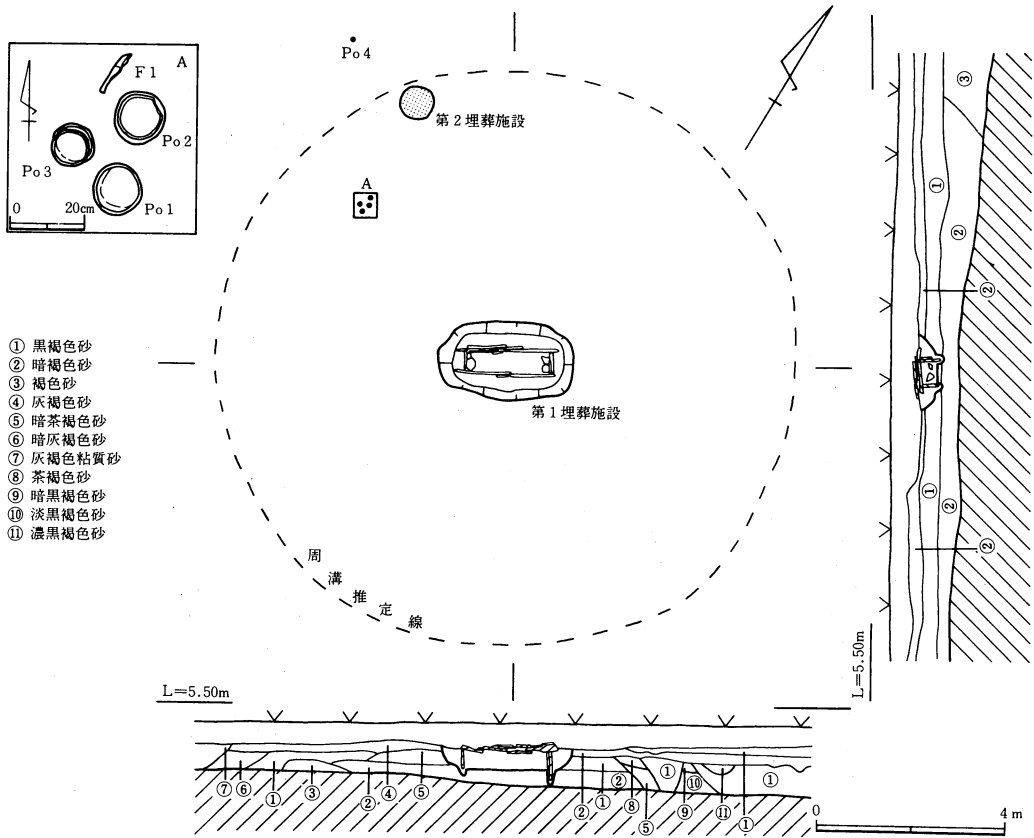


插图214 88号墳遺物図 (土器S=1/4, 刀子S=1/2)

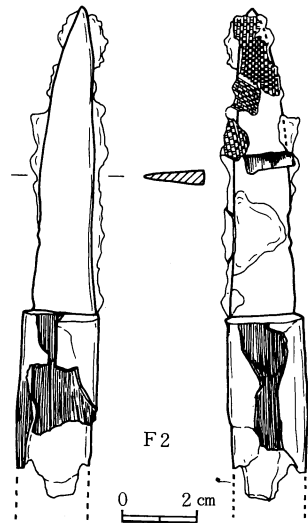




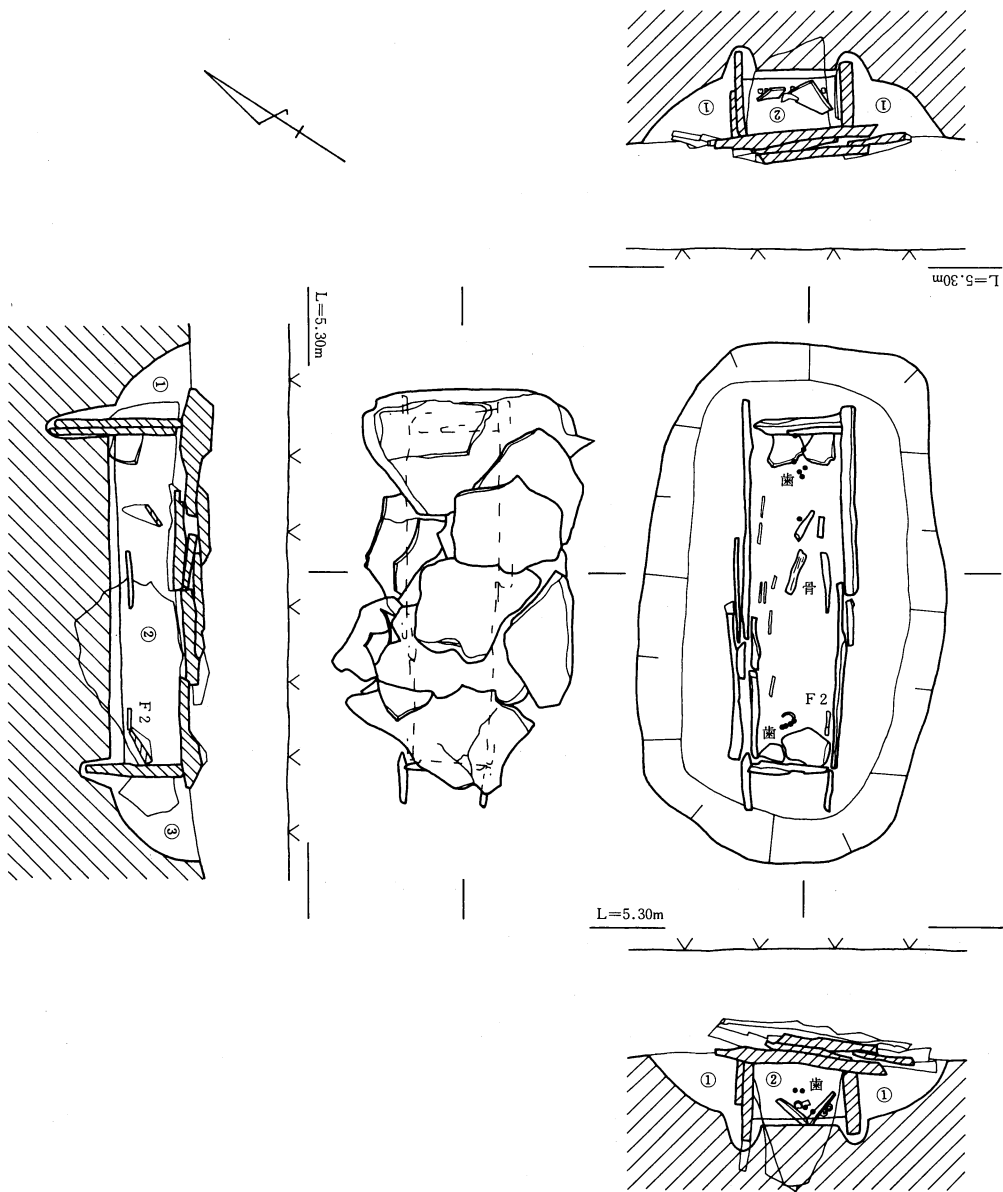
挿図215 88号墳遺構図 (全体図S = 1/160・拡大図S = 1/20)

(1)第1埋葬施設 (挿図216・217, 図版35・44)

第1埋葬施設は箱式石棺で長軸274cm, 短軸160cm, 深さ48cmの墓壇内に内法長軸177cm, 短軸46cm, 床面までの深さ約32cmを測る石棺が作られていた。主軸はN-85°-Eをとる。蓋石は11枚の板石を重ね合せている。棺の北側側壁は6枚, 南側側壁5枚, 東・西両小口は2枚ずつの板石が使われていた。棺内からかなりの粘土塊が出ており目張りしていたと考えられる。棺内4面には赤色顔料は塗られていなかった。棺内からは, 小口両側にV字状の石枕がありその枕の周辺からそれぞれ骨片と歯が出土していることから, 2体埋葬されていたと考える。副葬品は西側小口の南側壁際に刀子1点(F2)が出土した。この刀子の刃部には布が付着しており布が巻いてあったと思われる。また柄部には木質の残存がみられる。



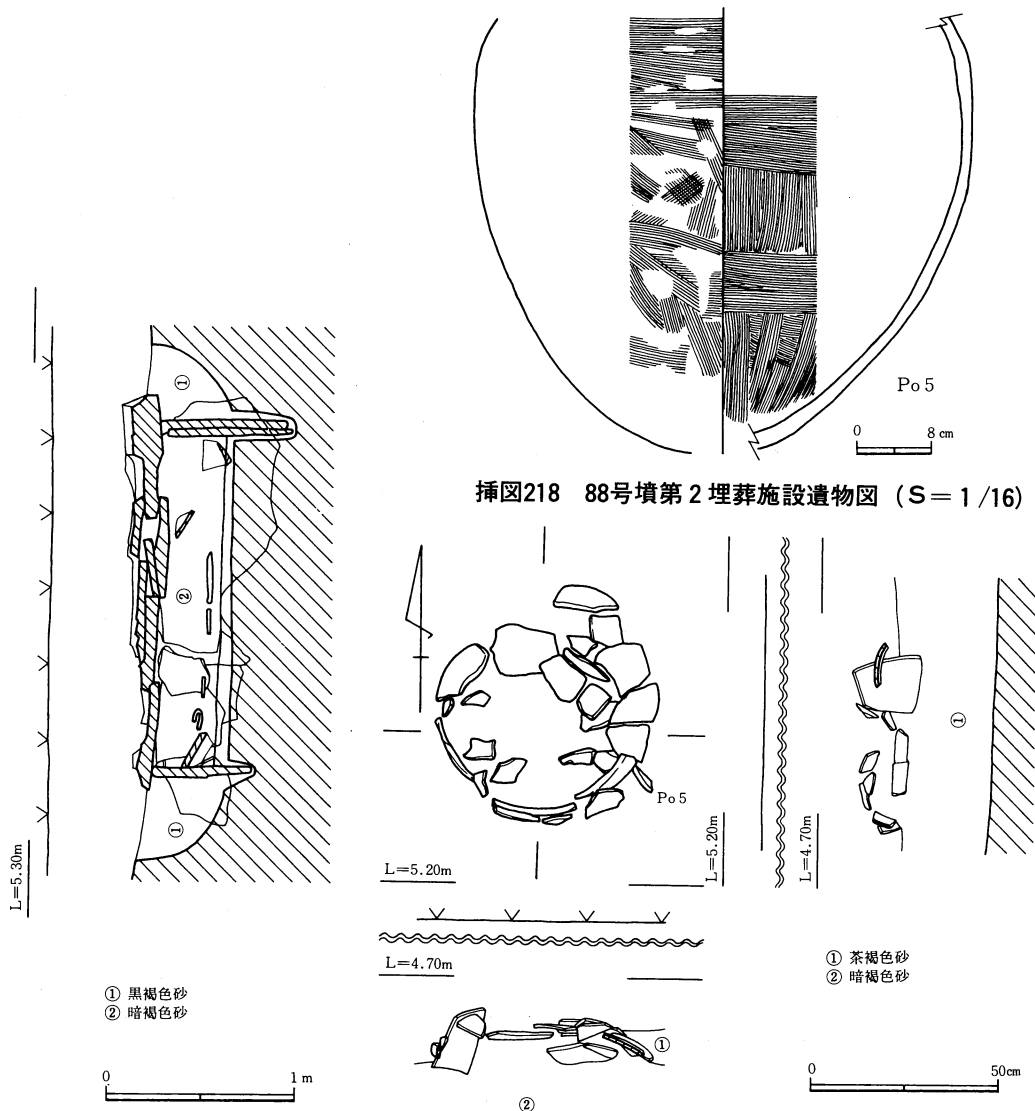
挿図216 88号墳第1埋葬施設遺物図 (S = 1/2)



挿図217 88号墳第1埋葬施設遺構図 (S = 1/40)

(2)第2埋葬施設 (挿図 218・219, 図版 35)

10 B北東区, 第1埋葬施設の北西で胴径 53 cmの大型の壺が直立した状態で出土した。口縁部はなかったが, 胴部はほぼその輪郭を残しており, 胴部下位及び底部はその形をとどめず散乱して出土した。この大型の壺の掘り方は認められなかった。この土器の内外より骨, 遺物等は検出されず周辺にも見つからなかった。しかし, この壺の北西 5.5 m地点に88号墳第1埋葬施設があること, 検出時にこの土器に関連すると思われる遺構が認められないことなどにより, 88号墳に伴う埋葬施設の可能性がある。



挿図218 88号墳第2埋葬施設遺物図 (S=1/16)

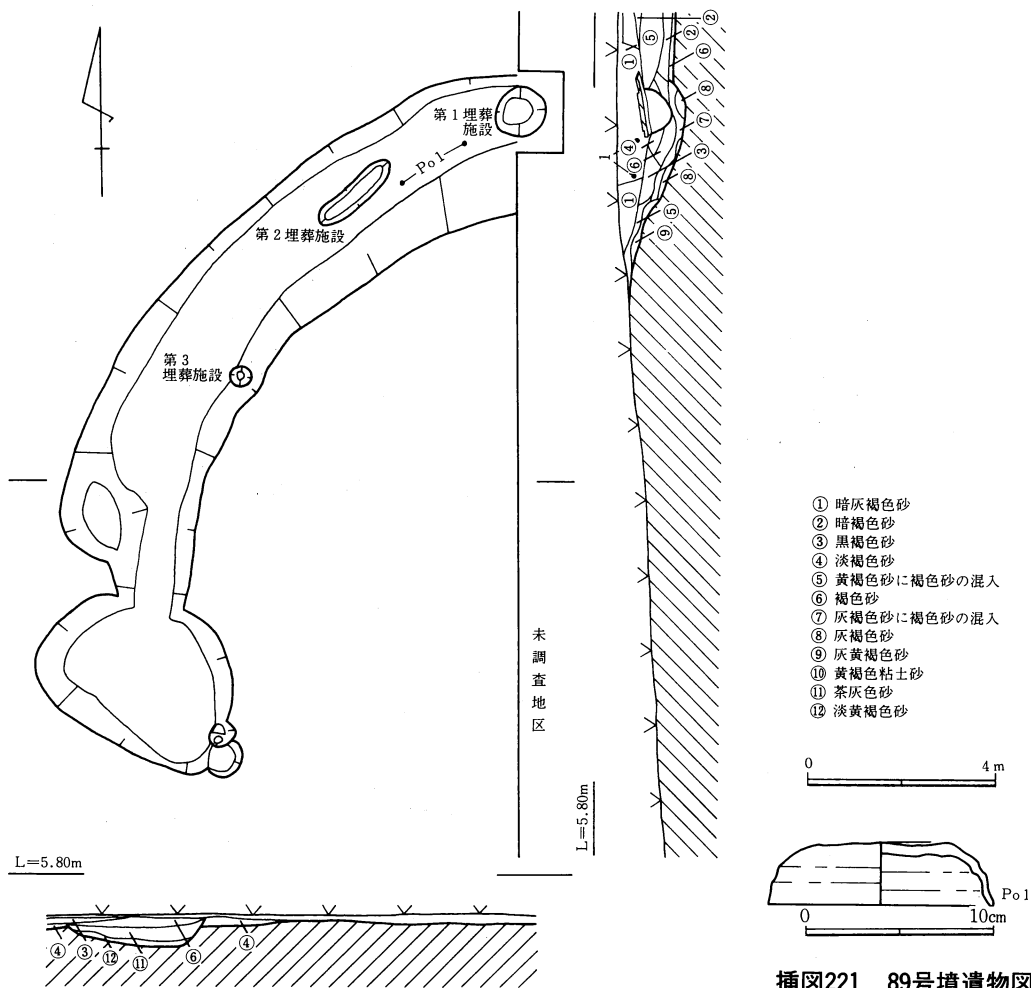
挿図217-2

挿図219 88号墳第2埋葬施設遺構図 (S=1/20)

88号墳の築造時期は出土遺物より古墳時代後期初頭と考える。

89号墳 (挿図 220~226, 図版 36・37・44)

9A・9B・10A・10B地区にまたがる古墳である。東側は調査区域外であり、西側のみ調査された。墳形は円形と推定され、周溝は北・西側で検出されたが南側では検出されず、築造時から無かったものと考えられる。周溝から周溝までの径約18mと推定され、幅290cm、深さ88cmの溝である。周溝の南側端部に10A・SK02が検出されているが、その用途、89号墳との関連は不明である。墳丘は北側の地山層が急激に高くなり黒砂層が切れており、この高い地山層を墳丘として利用し、地山層の落ち込んだ地点に周溝を掘って



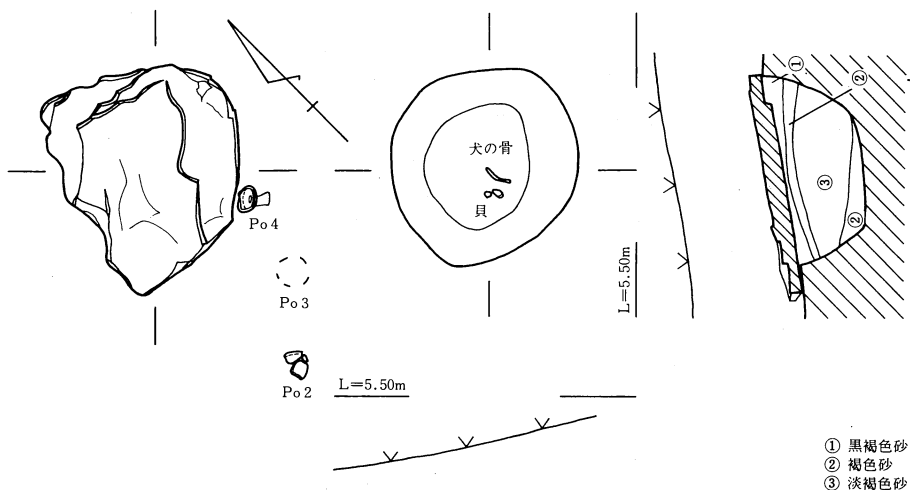
挿図220 89号墳遺構図 (S=1/160)

挿図221 89号墳遺物図 (S=1/4)

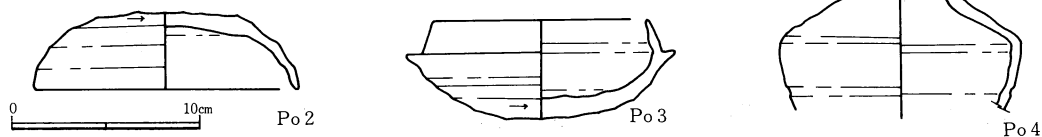
いる。西・南側の地山層の落ち込みは大きくなく、ゆるやかな傾斜となっている。墳丘上は地山層が露出していたが、黒砂層の堆積はあったものと考えられ、攪乱、風等のためなくなったものとする。埋葬施設は墳丘上には検出されなかったが、周溝内より3基検出した。

(1)第1埋葬施設 (挿図 222・223, 図版 36・44)

周溝の北側、上面より検出された石蓋土壌墓である。蓋石は長辺 119 cm, 短辺 80 cm, 厚さ 10 cmの板石 1 枚のみであり、蓋石の裏面には赤色顔料が付着していた。蓋石の下の土壌の大きさは長辺 104 cm, 短辺 96 cm, 深さ 44 cmでほぼ円形であった。土壌は周溝の上面を掘り込んでおり、周溝が完全に埋まった後のものと考えられる。土壌内より人骨の検出はなかったが、土壌内の上面では蓋石に貼りつく様に犬の肋骨と鼠のものと思われる骨<sup>#1</sup>, 貝殻(ヤマトシジミ, チョウセンハマグリ, カキ<sup>#1</sup>)が検出された。埋葬時に混って埋ったものと考え



挿図222 89号墳第1埋葬施設遺構図 (S=1/40)

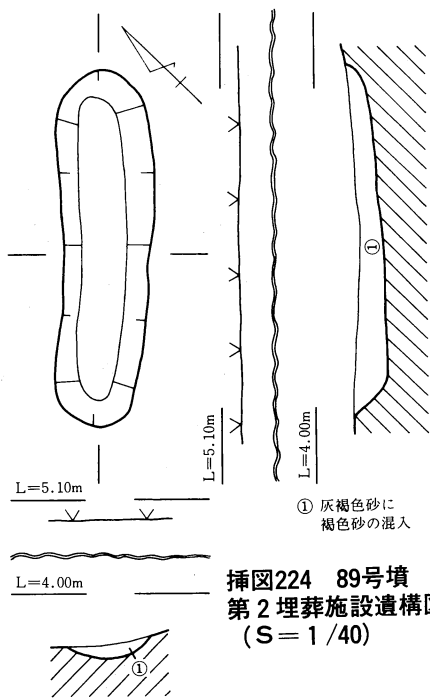


挿図223 89号墳第1埋葬施設遺物図 (S=1/4)

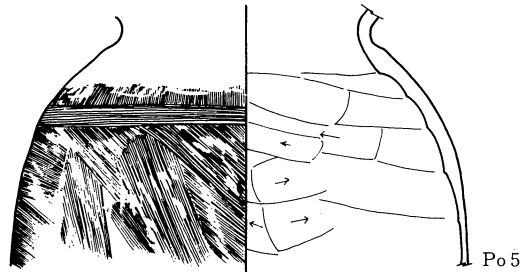
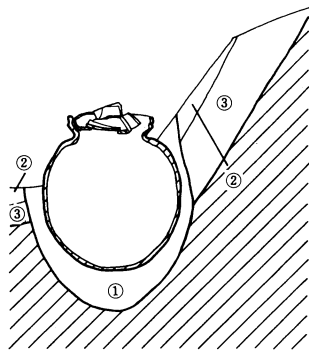
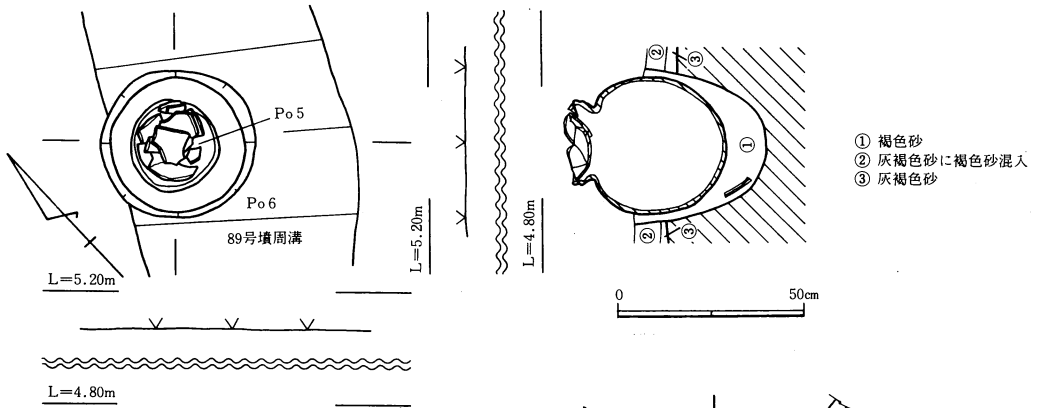
えられる。土壌の外，南側より供献土器と考えられる須恵器 (P.2・3・4) 3点，検出している。時期は供献土器により古墳時代後期前半頃と考えられる。

(2) 第2埋葬施設 (挿図224)

周溝を掘り下げた後，周溝の北西側底面より楕円形の土壌墓が検出された。主軸はN-47°-Eで，検出された大きさは長辺188cm，短辺46cm，深さ12cmである。検出された土壌は浅かったが，もとはもう少し深い土壌であったと考えられ，周溝がある程度埋った後掘り込まれた土壌と推定される。土壌内には遺物は検出されず，埋葬施設でない可能性もある。時期は古墳築造時よりやや新しいものとする。



挿図224 89号墳第2埋葬施設遺構図 (S=1/40)

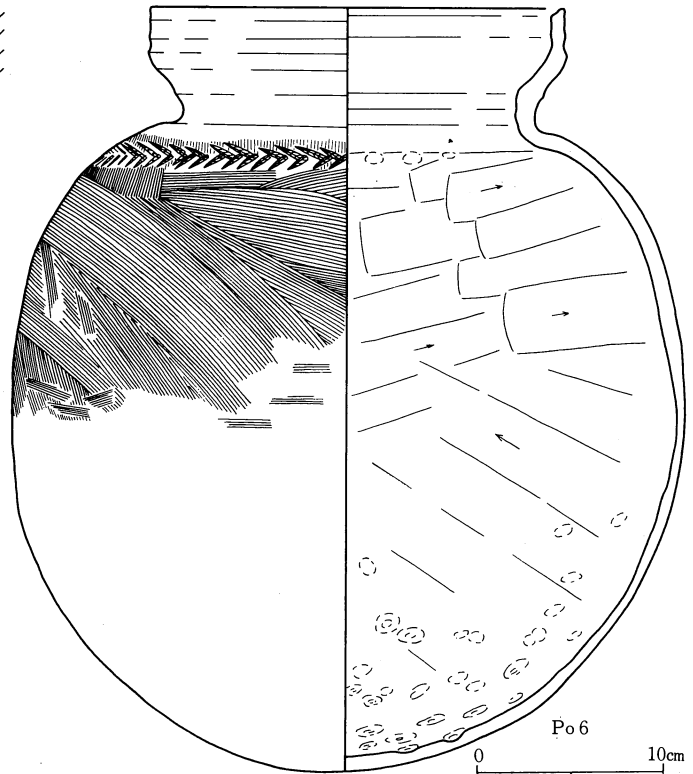


挿図225 89号墳第3埋葬施設  
遺構図 (S=1/20)

(3)第3埋葬施設

(挿図 225・226, 図版 37・44)

周溝の西側, 底面より検出された甕の土器棺墓である。甕は墳丘側に正立し, 口縁部を他の甕 (P.5) の胴部で塞がれていた。掘り方は長軸 45 cm, 短軸 41 cm, 深さ 35 cm でほぼ円形である。棺に使用された甕 (P.6) は口径 22 cm, 胴部最大径 35.8 cm, 器高 40.5 cm で複合口縁をもつ。稜はほとんど退化しており, 肩部は



挿図226 89号墳第3埋葬施設遺物図 (S=1/4)

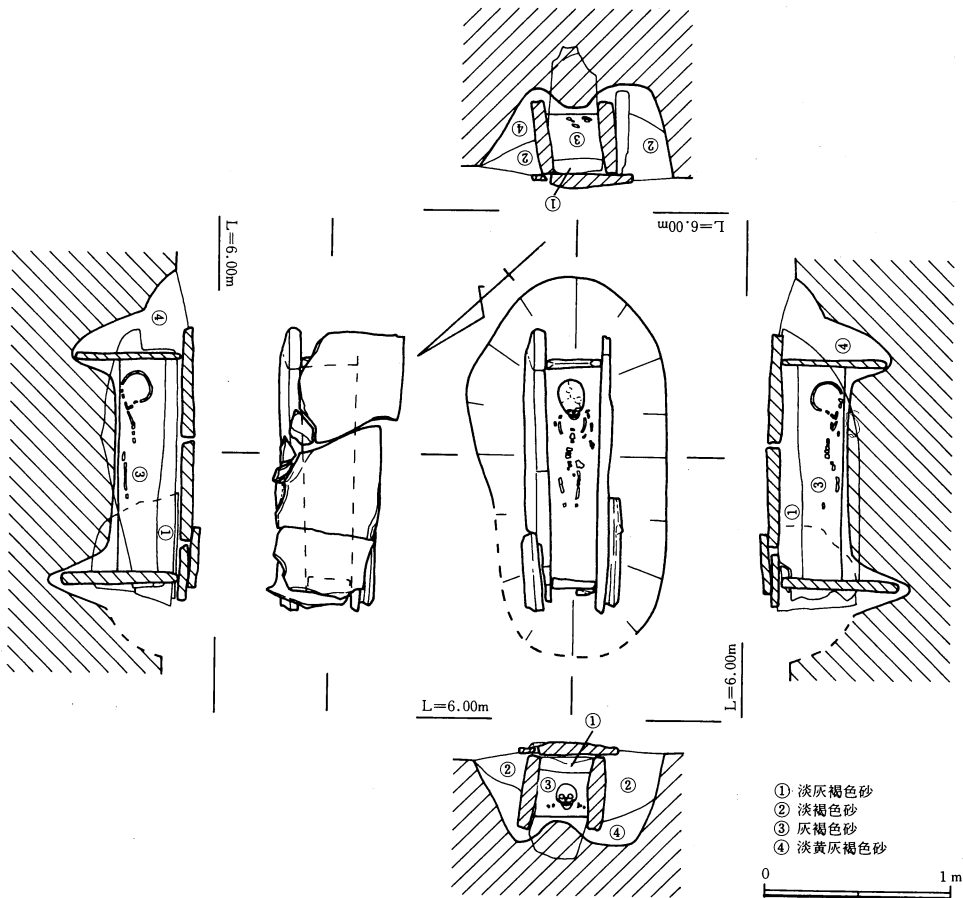
よく張って羽状文が巡っている。甕の底部が一部欠けていたが、その部分は掘り方の中より検出された。埋葬時に穿孔したものとする。棺内より人骨、副葬品等の遺物は検出されなかった。時期は棺として利用された甕により古墳時代中期後半と考えられる。

小結

89号墳の墳丘上面には埋葬施設を検出できなかったが、未調査地区に作られている可能性も考えられる。また第2・第3埋葬施設は周溝の底面より検出されていることから、古墳築造時か周溝が埋りかけた頃に作られたと考えられる。以上のことより89号墳が築造された時期は、第3埋葬施設（古墳時代中期後半）が作られた以前と推定する。

S X 79 (挿図 227, 図版 37)

11 G地区の中央にあり、3号墳の南東、7号墳の北西に位置する箱式石棺である。長軸200 cm(推定)、短軸105 cm、深さ50 cmの楕円形の墓壇内に小口各1枚、両側壁2枚ずつの板石を組み合わせて石棺が作られている。側板は両側とも大型の板石1枚と小型の板石を用い、小型の板石は両側とも足側の方に使用されている。蓋石は大型の板石1枚（2枚に



挿図227 S X 79遺構図 (S = 1/40)

割れていた)で棺のほとんどを覆い、小型の板石2枚で足側を塞いでいた。棺は内法で長辺112cm、短辺26cm、深さ33cmを測り、主軸はN-131°-Eである。棺内には仰臥伸展の人骨が1体検出された。保存状態が良く、一部肋骨も確認できた。枕などの施設はないが、棺内は床面まで赤色顔料が塗ってあり、石と石の間には粘土による目張りがわずかに残っていた。棺の内外、周囲に副葬品あるいは供献土器などはみられなかった。

棺に用いられた石材は他の単独の石棺に比べて厚く、小型の石棺の割に良い石材を用いている事がこの石棺の特徴である。被葬者は6~7才の女性である。<sup>註2</sup>SX79の時期は、この地区に集中して墓が作られた古墳時代中期~後期のものであろう。

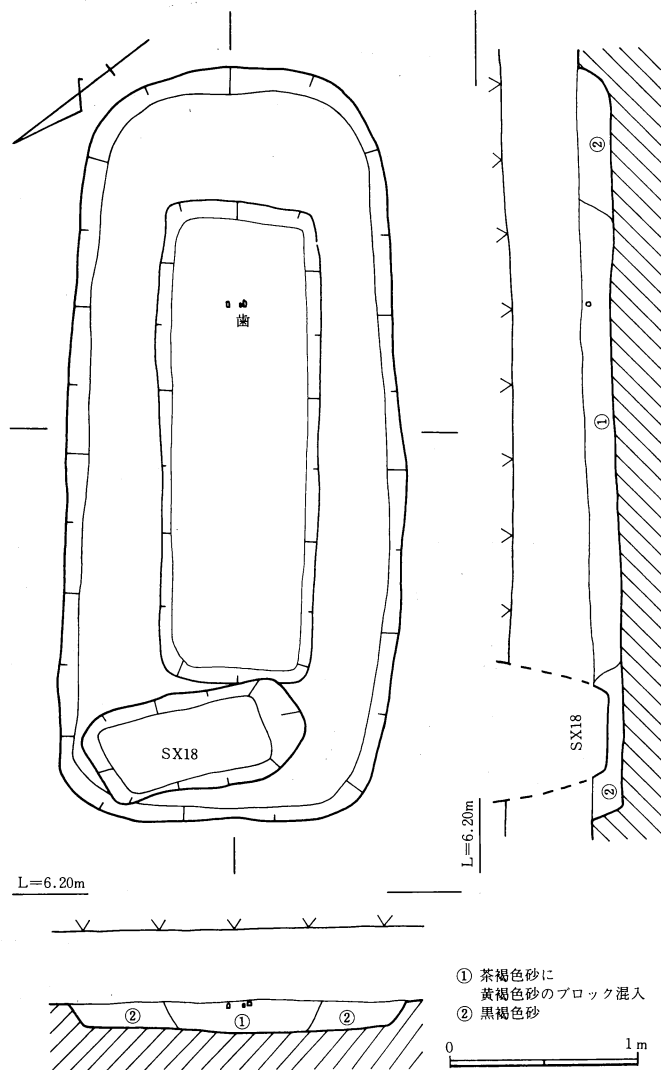
### SX80 (挿図228, 図版37・38)

10G北東、北西区にまたがり77号墳の南東に位置し、SX18に切られている。主軸はN-128°-Eをとる木棺墓である。墓壇は、長方形で長軸402cm、短軸178cmを測る。その中に長軸256cm、短軸85cmの木棺部をもつ。墓壇床面は掘り込まれていないが、棺部は長方形を呈し、その中の東側より歯を数点検出していることから木棺墓と考える。副葬品はみられない。77号墳に近く、同墳第1埋葬施設と同軸方向にあることから77号墳と関係する埋葬施設とも考えられる。

時期は遺物が出土していないが、77号墳と同時期の古墳時代中期から後期頃と考えられる。

### SX82 (挿図230, 図版38)

10G・11G地区にまたがり、LSDの北にある。主軸をN-77°-Eをとる細長い楕円形土壇墓である。東側をピットに切



挿図228 SX80遺構図 (S=1/40)



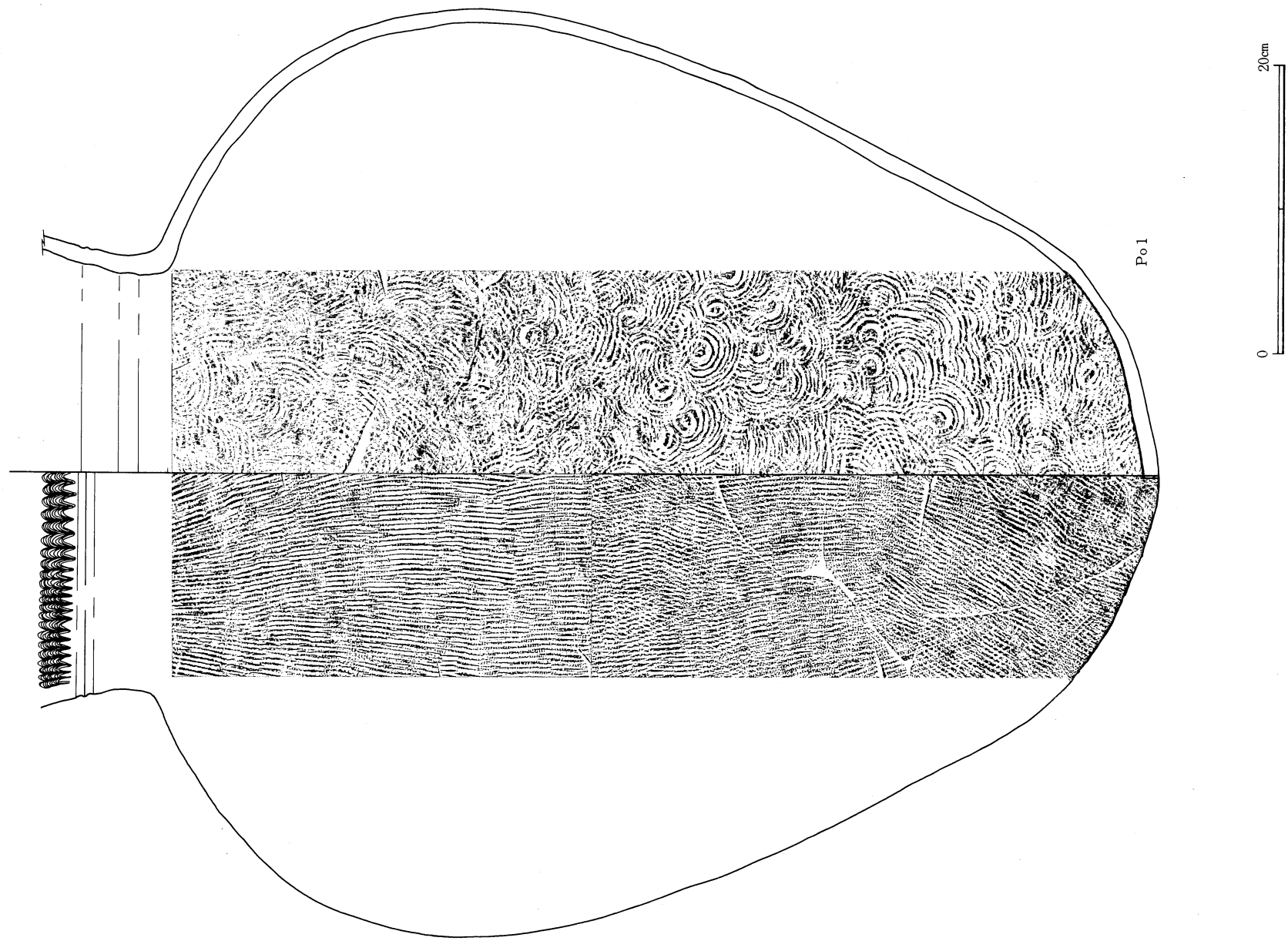


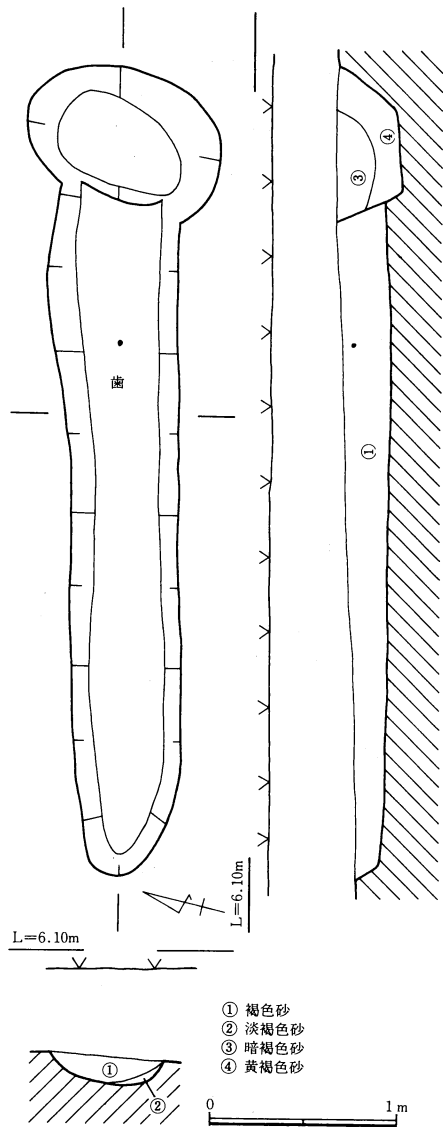
插图229 SX83遺物図 (S=1/4)

られているが、大きさは長軸 400 cm (推定) 短辺 60 cm, 深さ 26 cm である。墓墳内の東側に歯片を検出しただけで、その他副葬品等遺物は検出されなかった。時期は不明である。

S X 83 (挿図 229・231, 図版 38・39)

10 E 地区の北東に位置し, L S D を掘り下げ中, その上面より検出した。周辺には東に 81 号墳があるが, これとは時期的に大きな開きがある。また L S D との間にも隔りが認められ, 結局 S X 83 は単独の遺構と考えられる。

S X 83 は半壊された須恵器甕を蓋として転用したもので, 棺そのものに土器が用いられたのではない。甕はその中心線を軸とするなら, 主軸を  $N-64^{\circ}-E$  にとり, 頸部は北東側, 底部は南西側に置かれていた。甕には口縁部がなく, 残存長 77 cm, 最大幅 64 cm, 厚さ 1 cm を測る。甕は左肩部北側が大きく壊れていたが, この部分から主軸に沿うようにして板石を 1 枚検出した。おそらく蓋のすきまを塞ぐため立てられたものと思われる。墓のほぼ中央から少量の人骨と歯が検出され, 歯により 6 ヶ月未満の乳児<sup>#1</sup>と推定される。他に遺物はない。S X 83 は L S D (古墳時代中期前半) より新しいと推定されること, 出土している須恵器甕より 5 世紀後半以降のものと考えられる。

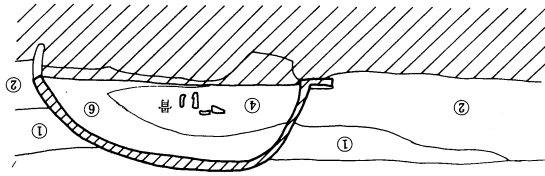


挿図230 S X 82遺構図 (S = 1/40)

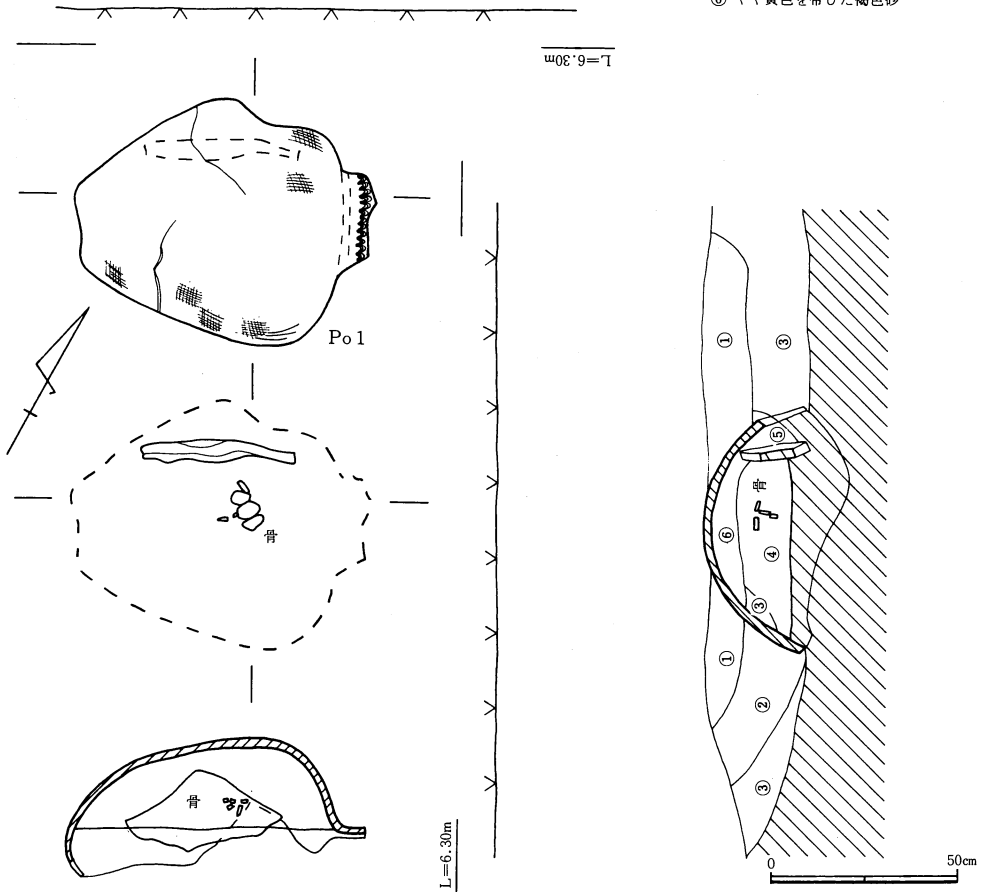
S X 84 (挿図 232・233, 図版 39)

10 E 地区, 南東に 8 号墳がある。全体に地形は高く 8 号墳にむかって傾斜している。周溝は検出できなかった。蓋石の検出レベルは地山面より約 10 cm 高いだけで, 蓋石から黒砂地表面までの高さは約 20 cm である。本来の掘り方は検出面よりやや高かったものと考え方が確認できなかった。蓋石直上から土師器 (P。3), 須恵器長頸壺肩部破片 (P。1) が出土した。

側壁両側に各々 3 枚の石をたて, 内外にさらに数枚の板石をたて加えている。小口も東 1 枚, 南 2 枚で造られ, 北側は側壁との空間を小さな板石で丁寧に埋めている。石棺の内

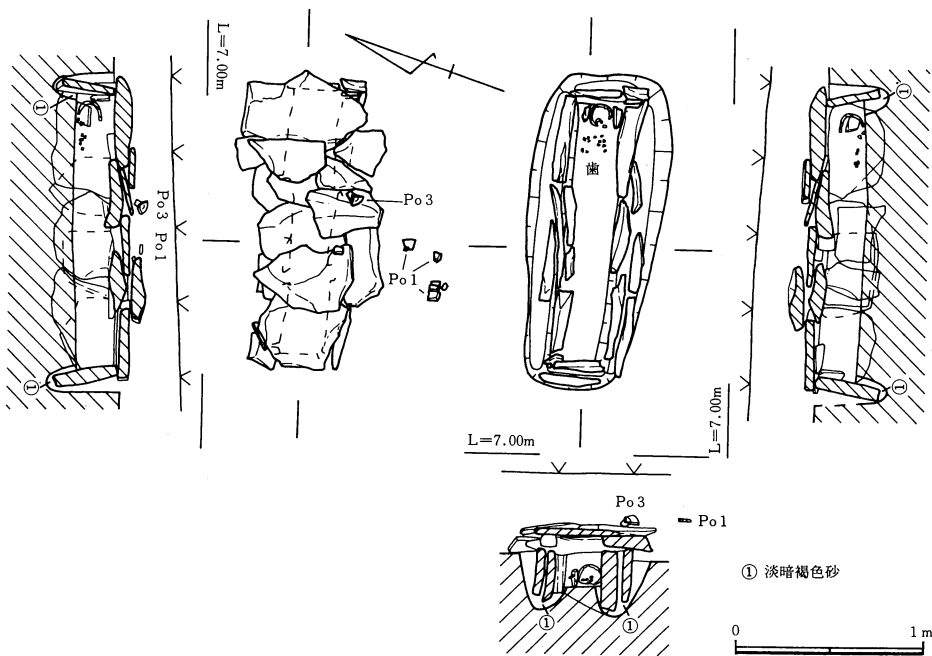


- ① 暗褐色砂
- ② 褐色砂
- ③ 黄褐色砂
- ④ 黄灰褐色砂
- ⑤ 暗褐色砂に近い褐色砂
- ⑥ やや黄色を帯びた褐色砂

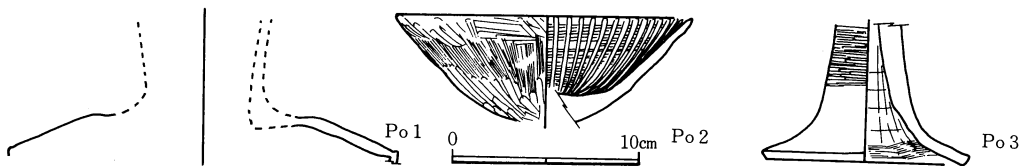


挿図231 S X83遺構図 (S=1/20)

法は長さ 145 cm, 頭部最大幅 25 cm, 中央部最小幅 20 cm, 蓋石から床面までの深さは頭部で 20 cm, 中央部で 15 cm である。東小口でV字状石枕と頭蓋骨・歯片多数を検出した。頭蓋骨は遺存状況がよく底部が石枕と接していた。歯片は棺床より 4 cm 浮いて出土している。かなり散乱している。その他の遺骨は中央部で認められたが、他には確認できなかった。遺物も全く確認できなかった。頭を東にしていたものである。遺骨・歯により年齢は青年後期～壮年前半と推定されるが、性別は不明である。軸方向はN-75°-E。棺内に赤色顔



挿図232 S X 84遺構図 (S = 1/40)

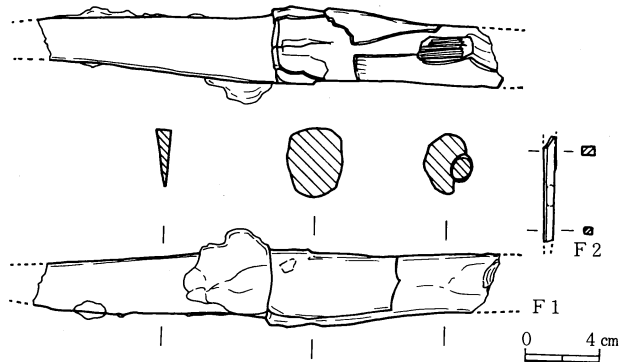


挿図233 S X 84遺物図 (S = 1/4)

料は塗られていなかった。時期不明である。

S X 90 (挿図 234・235, 図版 44)

S X 90 は 10 E 地区の北西にあり、9号墳と81号墳の間に位置する土壙墓である。遺構は長軸 246 cm, 短軸 120 cm, 深さ 38 cm を測る楕円形に近い方形の土壙で、主軸は N-145°-E をとる。土壙内の南側中央に刀子 (F 1) を検出した。枕は検出できなかったが、土壙の南側が北側に比べてやや広い事などから南側に頭を

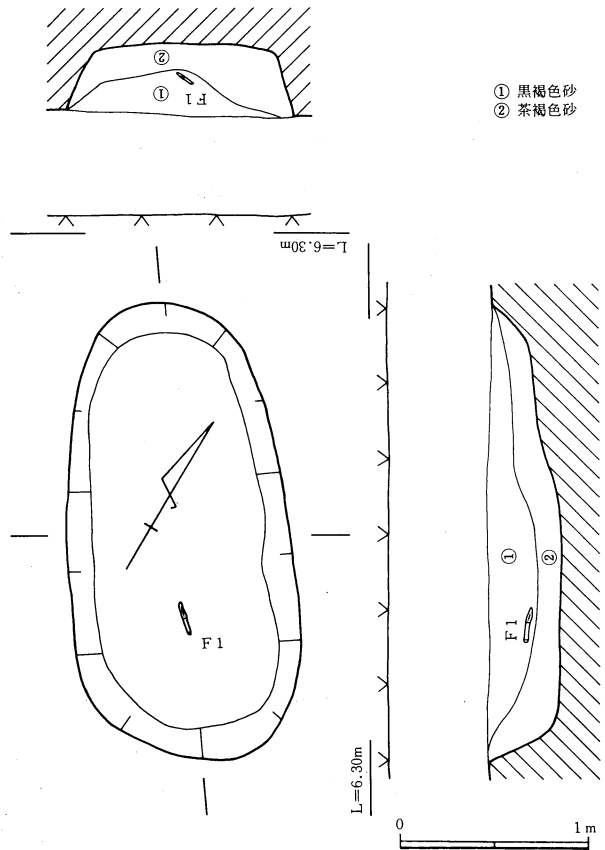


挿図234 S X 90遺物図 (S = 1/4)

置いたものと思われる。刀子・鉄針の他に副葬品、供獻土器などはみられなかった。刀子の形態から、古墳時代中～後期のものと推定される。

まとめ

57年度に調査した墳墓についてこれまで記述してきた。8号墳、24号墳は盛砂をして墳丘を作っており、墳丘の高さ及び大きさも長瀬高浜遺跡では比較的大きな古墳である。地山の高い地形を利用して築造している。時期は古墳時代後期後半のもので、2号墳、25号墳も同時期で墳丘が比較的高い。これらの古墳は、地形を利用したり盛砂して高くして大きく見せようとしている。調査地区で7号墳より南で検出された古墳の埋葬施設及び石棺墓は蓋石や側壁などが壊され周辺に石材が散乱して



挿図235 SX90遺構図 (S=1/40)

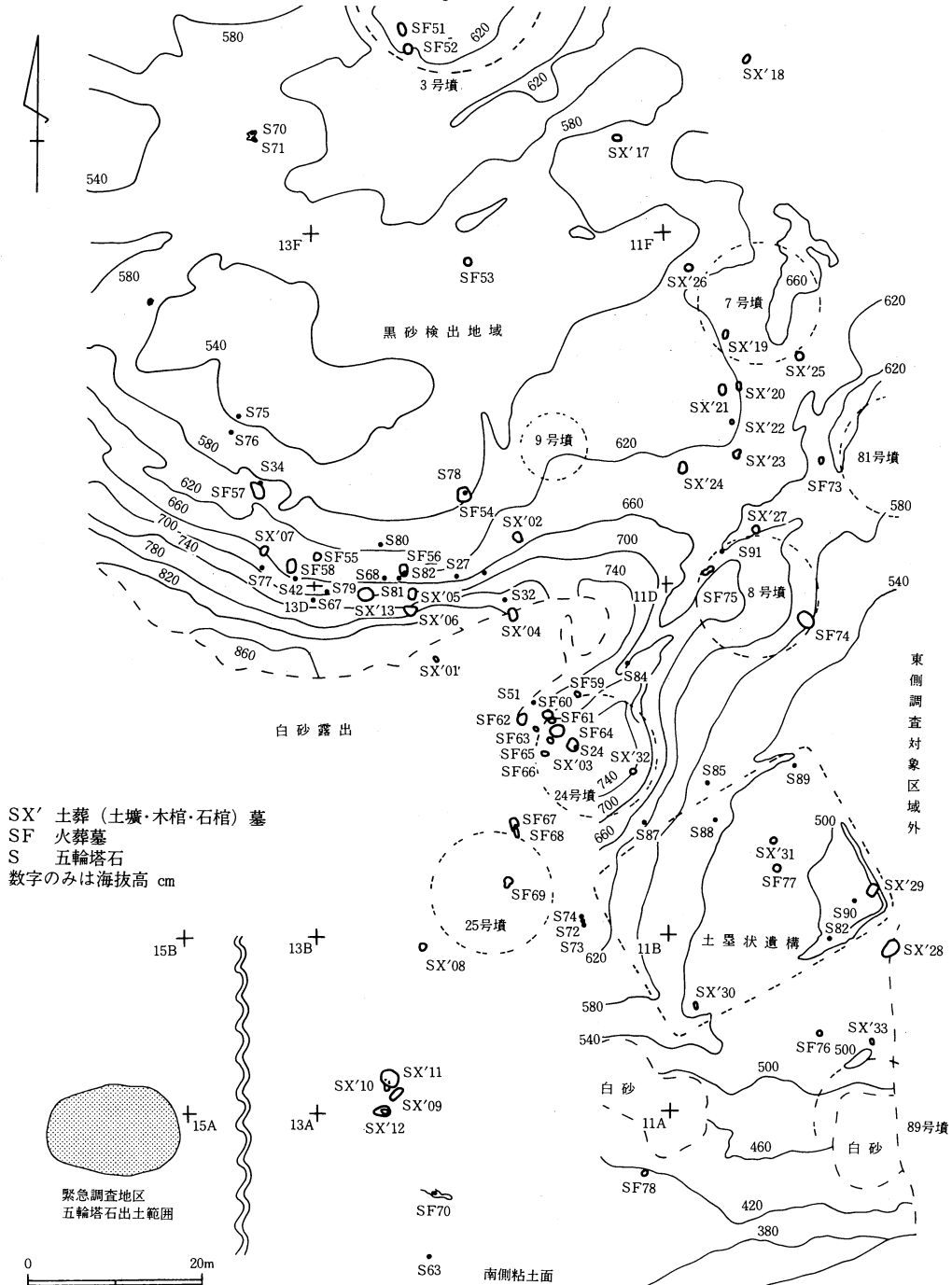
いるものが多かった。これは後世壊されたものと思われる。24号墳の南にはSB41(8世紀後半頃)が造られており24号墳墳丘及び第3埋葬施設内から灯明皿が検出された事、周辺から火葬墓、土葬墓を検出していること、上面には土墨状遺構もある事から攪乱の時期は奈良時代から中世に至る間と考えられる。

さらに7号墳周墳から3基の馬墓を検出したことは特筆すべきことだろう。周溝内に墓壙を掘り馬を埋葬している。また、馬の年齢が若く、特別な目的のために殺されて埋葬された可能性もあり当時の馬が社会にどのような役割を持っていたかを知る上で貴重な資料と言えよう。<sup>註1</sup>

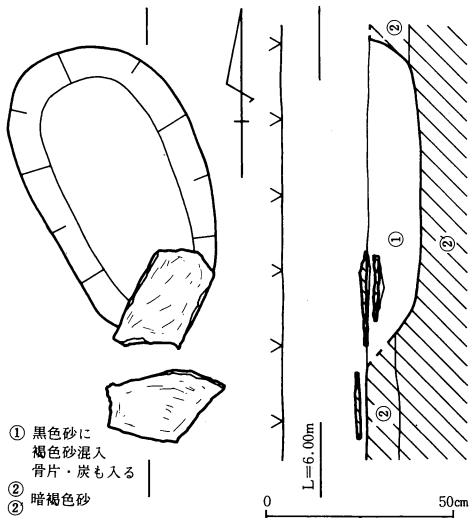
注1 「長瀬高浜遺跡より出土した人骨と動物遺体について」 本編pp.285～312

第5節 中世墓 (SX'・SF)

今年度の調査区では17基の土葬墓(SX'17~33)と6基の火葬墓(SF73~78)を確認、調査した。火葬墓についてはSF74・76で遺物(土師質土器他)が出土し、これらの中世墓の時期を考えるのに良い資料となった。



挿図236 中世墓・五輪塔石分布図(東側地区のみ)(S=1/800)



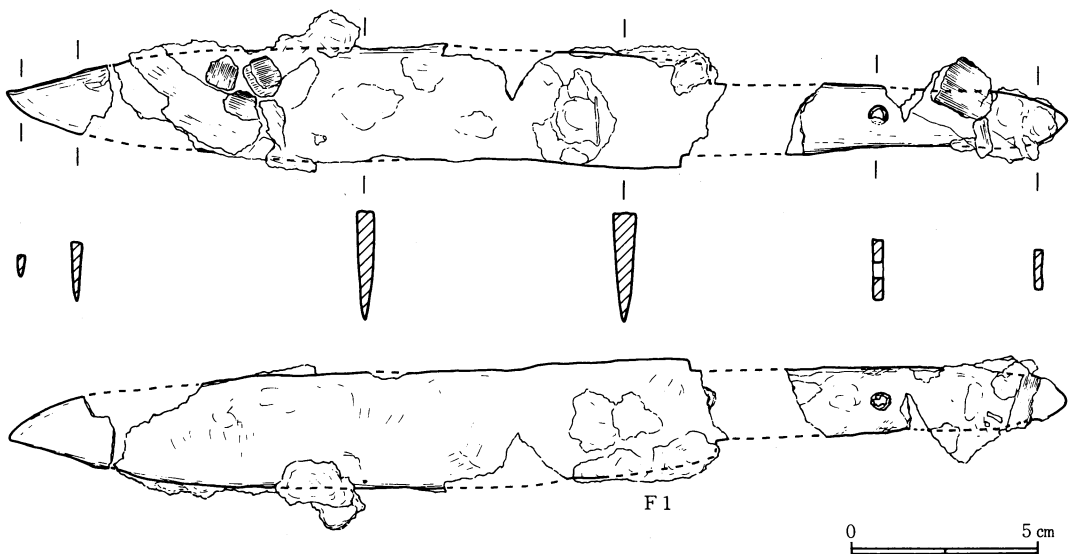
挿図237 SF73遺構図 (S=1/20)

S F 73 (挿図237, 図版45)

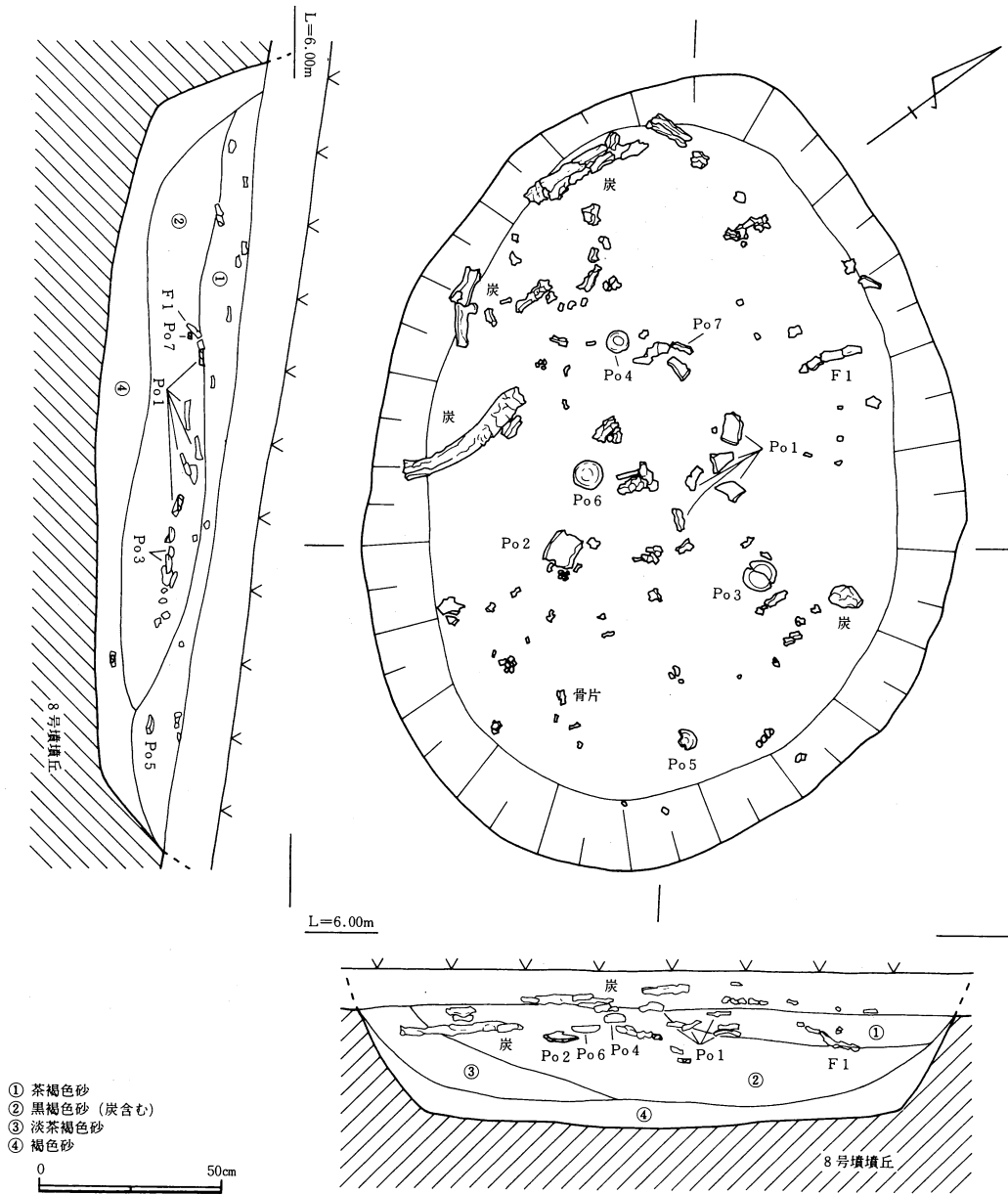
S F 73は10E地区の中央東側にあり、大型方形周溝状遺構 (LSD) の南、10E S D 02の上層に位置する。遺構は長軸80cm・短軸45cm・深さ14cmの楕円形の土壌で、軸方向はN-154°-Eである。土壌内には炭化物片に混じり骨片が検出された。土壌の上面南側には板石が2枚重なって検出され、さらに土壌外でも1枚検出した。これらの板石は炭化物などで黒くなっていた。埋砂・周溝の砂は焼けていないが、炭・骨が混入していることから、火葬跡か火葬墓と考える。他に遺物はなく、層位から中世のものとする。

S F 74 (挿図238~240, 図版45・60)

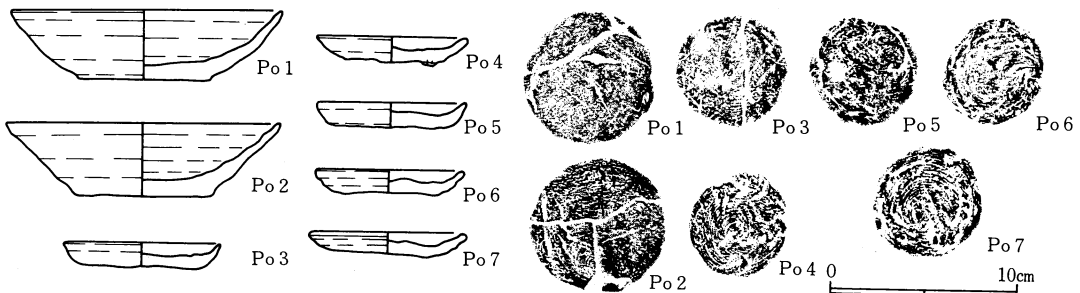
10D地区北東区、8号墳墳丘上にあり西から東にかけて緩やかな墳丘傾斜面に作られている。平面形は楕円形を呈し、大きさは長軸220cm・短軸161cm・深さ22~30cmを測り比較的大きな火葬墓である。Bタイプに属する。主軸はN-48°-Wである。埋砂は黒褐色砂で多量の炭片を含んでいる。土壌内には多量の骨片・炭片が散在しているが、南側から西側にかけてかなり大きな炭の塊が土壌壁面に沿って残っている。遺物は、底部にいずれも糸切痕をもつ坏2点 (P<sub>0</sub>1・2) や灯明皿5点 (P<sub>0</sub>3~7) や、短刀1 (F1) が出土している。時期は出土遺物より中世初め (鎌倉~南北朝時代ごろ) と思われる。



挿図238 SF74遺物図その1 (S=1/2)

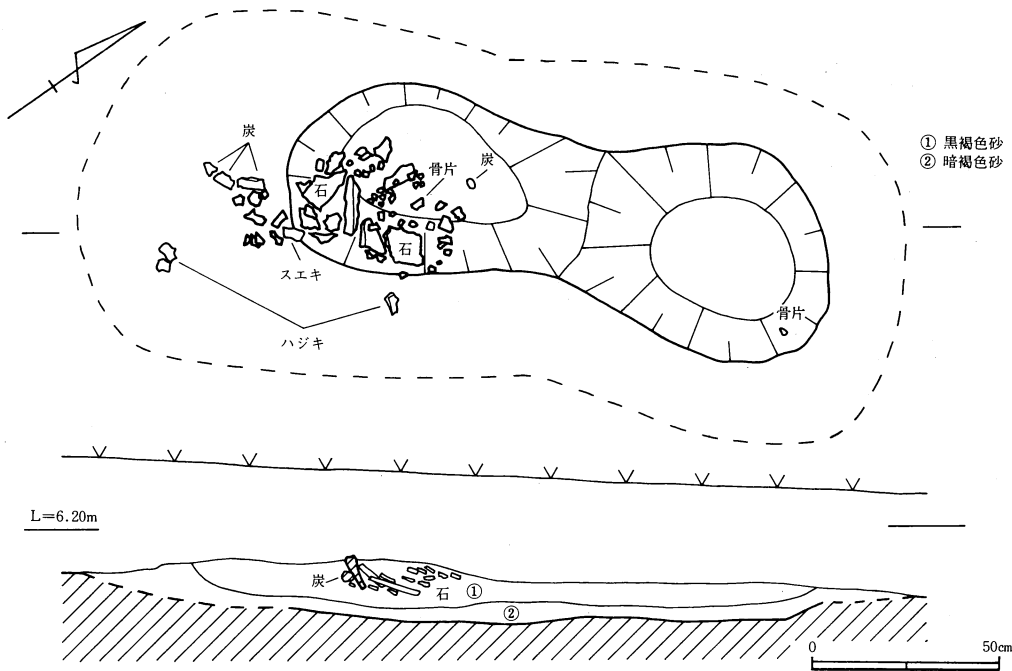


挿図239 SF74遺構図 (S=1/20)



挿図240 SF74遺物図その2 (S=1/4)

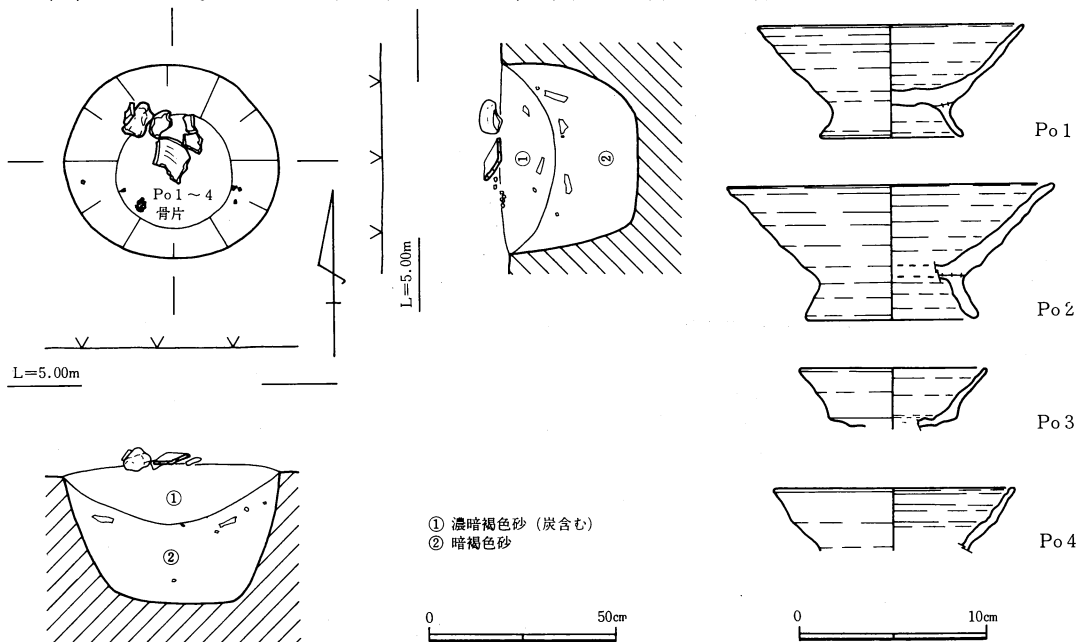




挿図241 SF75遺構図 (S=1/20)

S F 75 (挿図241, 図版45)

10E地区, 8号墳墳丘裾部で検出した。黒砂層を掘り下げた時点で白色化した細骨片と炭片が2m程の範囲に散在しているのを確認した。中央部分にかなり細かい石片と炭・骨が集中していた。ここは人骨を焼いた跡で、中世の火葬墓か火葬跡と考える。最終的には

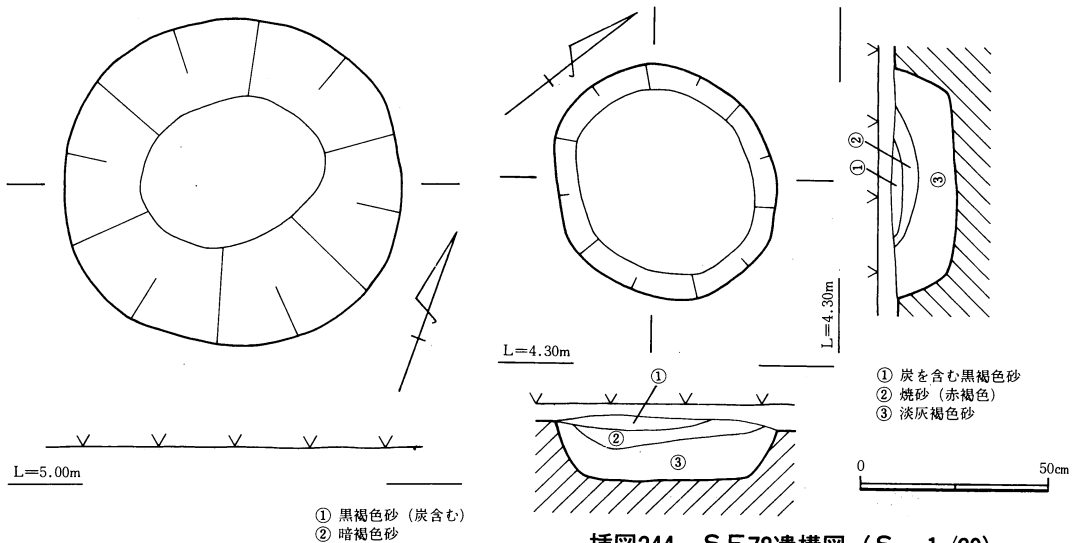


挿図242 SF76遺構図 (S=1/20)・遺物図 (S=1/4)

長軸147cm・短軸最大57cmの双円形のごく浅い土壙となったが、本来はもっと広く、約200×90cm程の規模で土壙を掘っていたものと推定する。中世のものであろう。

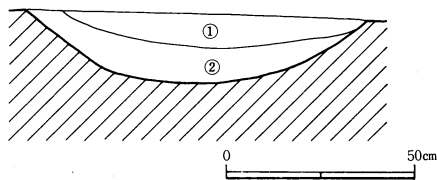
S F 76 (挿図242, 図版46・60)

10B地区南東, S X '28・33の西にある。ほぼ円形の小型の火葬墓で長軸60cm・短軸50cm・深さ30cmを測る。埋砂は濃暗褐色砂で特に炭片・骨片が目立った。上面の遺物は、土師器の坏(P。1~4)等である。その他土壙内埋砂の①, ②層でも同様の土器小片が検出された。Bタイプに属する火葬墓である。時期は中世初頭のものと思われる。



挿図244 S F 78遺構図 (S = 1/20)

S F 77 (挿図243)

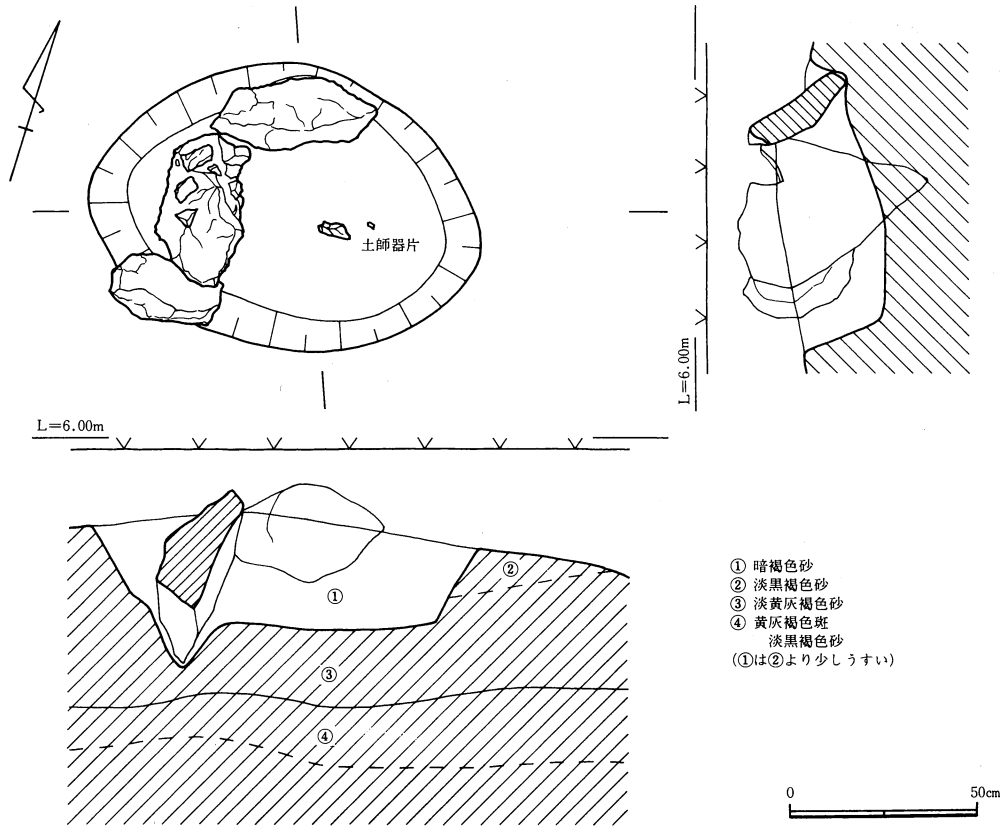


挿図243 S F 77遺構図 (S = 1/20)

10C地区南東区, S X '31の南に位置する。土壙状遺構の下層にあたる。長軸90cm・短軸87cm・深さ20cmで円形の火葬墓である。主軸はN-70°-Eである。土壙の壁は約35°の緩やかな傾斜をもち外方へ広がる浅い掘り方である。土壙内上面には炭片混りの黒褐色砂が堆積していたが、骨片は検出できなかった。時期は他の火葬墓と同じく中世のものであろう。

S F 78 (挿図244)

11A地区。この地点のすぐ南には青灰色の粘土層がかなり厚く堆積しているが、この地点を含む北側には粘土の堆積はみられず、地山の灰白色砂が露出し、一部には褐色の砂が堆積していた。この周辺には宋銭を出土したピット(挿図302中の11A P 52・55, 挿図303, C 1・2)が2つある。土壙は長軸62cm, 短軸58cmの円形で深さ17cm, 軸方向はN-87°-E。上面で赤く焼けた砂と炭・細骨片を含んだ砂を検出した。火葬墓であろう。遺物は確認できなかった。中世のものであろう。



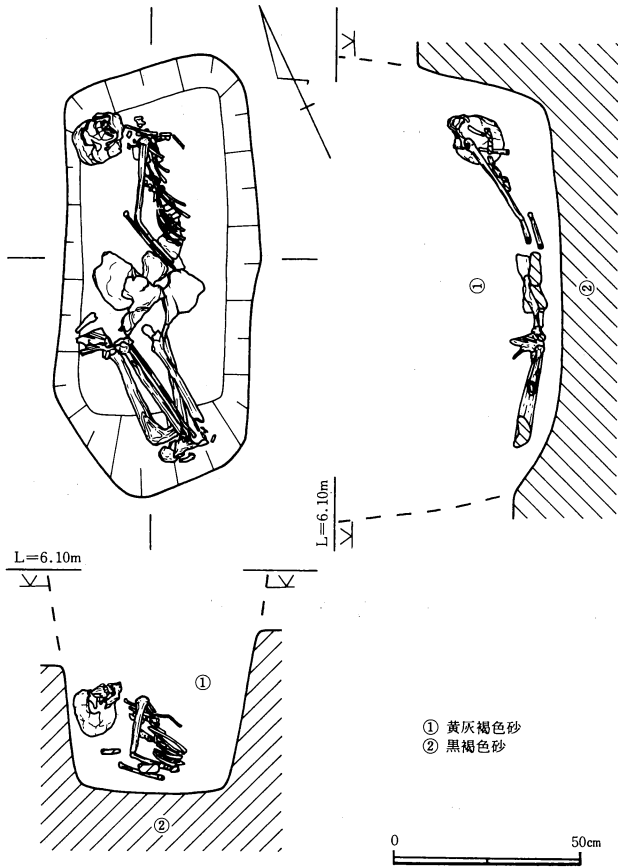
挿図245 SX'17遺構図 (S = 1/20)

S X'17 (挿図245, 図版46)

11G地区。S X 79の北西、大型方形周溝状遺構 (L S D) の北にあたる。この付近を南北に走る溝S D01を切っている。周辺は浸食により地表面が荒れており、地山もかなり削られていた。その中で板石が露出した状況で検出された。この状況から、西を小口とし南北を側壁とする、本来は板石3枚をコの字状に並べた石棺と考えられる。内法は幅40cm、長軸50cm程度だろう。軸方向はN-72°-Eである。棺内からは土壌底面から土師器片1点を検出ただけで遺物は確認できなかった。詳しい時期は不明だが、これに切られている溝S D01が古墳時代後期以降の新しい時代のものだろう事から、それよりも新しい時期に作られたものと判断する。当遺跡には中世の石棺墓と考えられる遺構が2墓あるので (S X' 11・13) これも同様に中世墓の1つと考える。

S X'18 (挿図246, 図版46)

10G地区北東区にある。土壌墓S X 80の直上にありこれを切っている。黒砂検出面で既に白砂のおちこみを確認していた。土壌の大きさは長軸115cm、短軸53cm、検出面から底面までの深さ50cmを測り、平面形は長方形を呈する。主軸はN-25°-Eである。埋砂は黄灰褐砂 (白砂) であった。墓壙内には成人体のほぼ全身が遺存しており、左体側を下にした



挿図246 SX'18遺構図 (S=1/20)

の中世墓の埋砂はいずれも灰白色砂で、黒砂地表面そのものも削られた可能性は考えられるが、その上層に堆積した灰白色砂層から掘り込まれているために埋砂が灰白色砂になっているものと判断する。これらはほとんど人骨1体分がほぼ完全に遺存しており、いずれも頭を北にし右体側を下にした手足を折り曲げた横臥屈葬の状況で検出された。遺物は全くなく、時期を推定する材料にはならないが、黒砂層とその上層に堆積した灰白色砂との関係を理解し白砂堆積の時期を推定する資料の1つとなろう。またこの中世墓群の周囲にあるSX'25~27は埋砂が黒砂であり、その土壌もやや円形ぎみである点で差があるが、时期的な差かどうかは判断できない。

SX'19 (挿図247, 図版46)

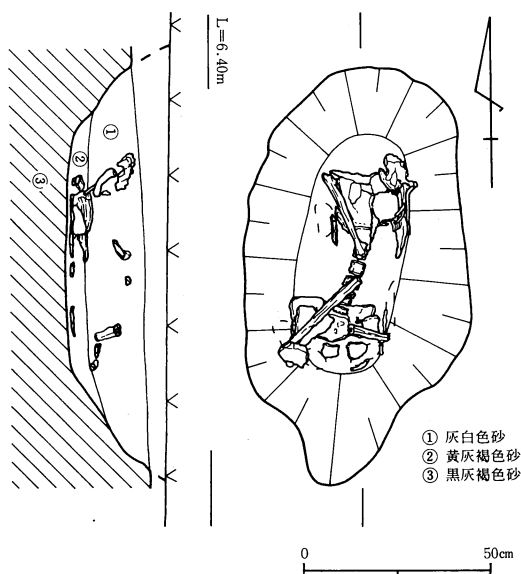
10F地区のほぼ中央、7号墳の上層に位置する。遺構は長軸170cm・短軸60cm・深さ20cmの歪な楕円形を呈する。軸方向はN-0°-Eを振る。埋砂は灰白色砂で黒砂層の上層(灰白色砂)から黒砂層に掘り込まれたものと考え。土壌内には頭を北にした横臥屈葬の状態で1体の人骨がほぼ完全に遺存していた。出土遺物はなく、層位などから中世の新しい時期のものと考え。

横臥屈葬の状態で埋葬されたものであろう。頭が西に曲がり顔が上に向き、背骨はやや反り両足は曲がっている。遺物は全く検出されなかった。墓壙内に白砂(黄灰褐色砂)が埋まっている事、床面も黒砂層内でとどまっている事から、黒砂層の上層に既に白砂が堆積していた時期に白砂層から掘りこまれ、その白砂を墓壙内に埋めたものと推定する。中世の新しい時期と考える。

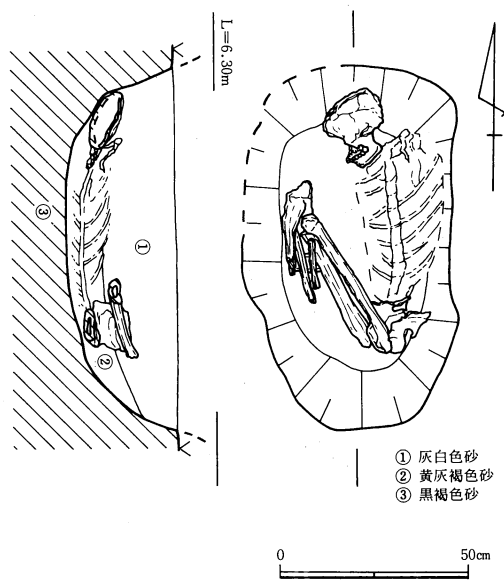
SX'19~26

(挿図247~253, 図版46~48)

10E・F地区で南北20m, 東西6mの範囲に8基の中世墓を検出した。この付近は南西側の中世墓の集中地域からひきつづく、やや平坦ぎみに小高い尾根状の地形である。このうちSX'19・20・21・23・25の5基



挿図247 SX'19遺構図 (S = 1/20)



挿図248 SX'20遺構図 (S = 1/20)

S X '20 (挿図248, 図版47)

10F地区南西区。7号墳上のS X '19の南, S X '21の東に位置する。遺構は長軸95cm, 短軸55cm, 深さ28cmの楕円形を呈する。軸方向N-0°-Eである。埋砂は灰白色砂を主体としており, 黒砂層の上の層(灰白色砂層)から黒砂層に掘り込まれたものと考え。土壌内では頭を北にした横臥屈葬の状態の人骨1体を検出した。腕の部分はなく, 頭蓋骨などはおしつぶされた状態で出土した。肋骨部分はわずかに痕跡を確認した。他に遺物はなく, 層位などから中世の新しい時期のものと考え。

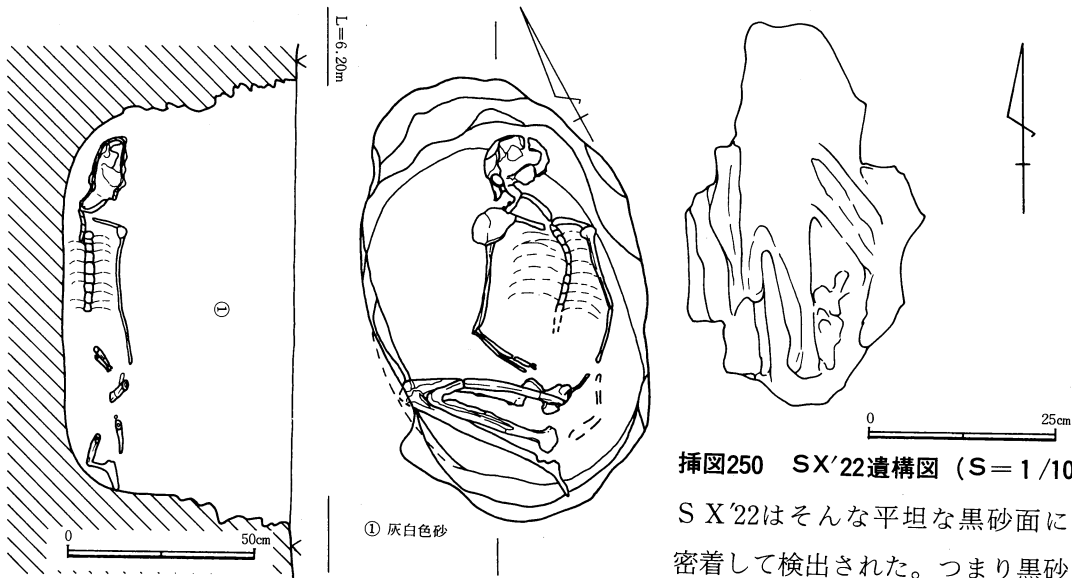
S X '21 (挿図249, 図版47)

10F地区の南隅に位置し, S X '20の西隣りに当たる。墓壙は長軸137cm, 短軸73cmの小判形で, 深さは62cmを測り地山に達する深いものである。軸方向はN-0°-E。壁面には10~20cmの横に長い窪みが明瞭に残り, それが幾重にも重なっていた。おそらく墓壙を掘るのに, 先端のそんなに尖っていない小さなスコップ状の道具を用い, 少なくとも壁面については真上からではなく, かなり横方向から掘り下げていったと思われる。墓壙が一部袋状であることもそれを物語っている。

墓壙内には, 頭を北にし右体側を下にした, 比較的遺存状態の良い人骨が残っていた。頭蓋骨は左側が陥没気味であり, 肋骨は薄く残っていた。大腿骨は残りが良く, 左・右とも折り曲げられ, 重ねられていた。指の骨も残っていて, その状況から遺体は腹部で手を合わせていた可能性が高い。副葬品等はない。時期は中世の新しい時期と思われる。

S X '22 (挿図250, 図版47)

10E地区の中央北隅に位置する。黒砂面は少し起伏があるもののおおよそ平坦であり,

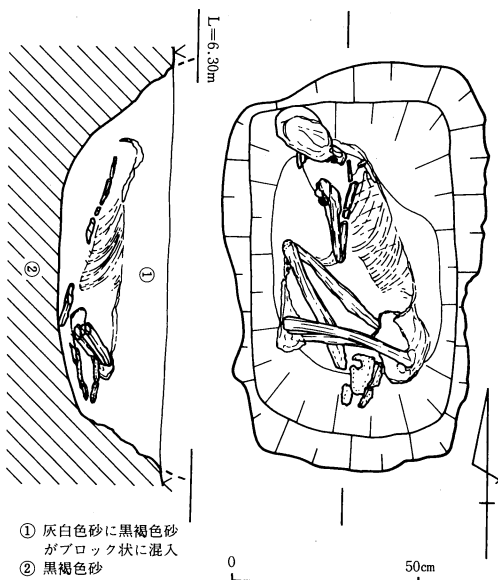


挿図249 SX'21遺構図 (S=1/20)

挿図250 SX'22遺構図 (S=1/10)

SX'22はそんな平坦な黒砂面に密着して検出された。つまり黒砂面は全く掘り込まれておらず、SX'22の下方にも薄く白砂が検出できた。当遺跡には白砂層から掘り込まれ、黒砂層に達していない屈葬墓が確実なもので2基あるが、SX'22もその類と考えた<sup>注1</sup>。遺構・遺物は白砂層排除とその後の風触を受け残存状態は極めて悪く、全体を把握することができなかった。人骨かどうか不明で、やや大型の獣骨類の可能性もある。埋葬跡かどうかも判らない。骨は堆積砂の重みのためか板状を呈し、骨と判別できたのは南側のみである。時期は層位から中世のものと推定する。

SX'22はそんな平坦な黒砂面に密着して検出された。つまり黒砂面は全く掘り込まれておらず、SX'22の下方にも薄く白砂が検出できた。当遺跡には白砂層から掘り込まれ、黒砂層に達して

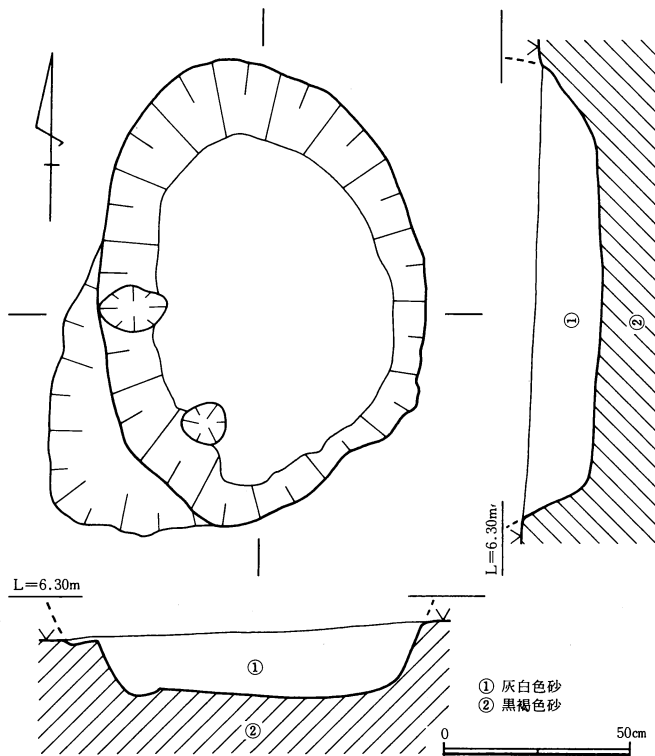


挿図251 SX'23遺構図 (S=1/20)

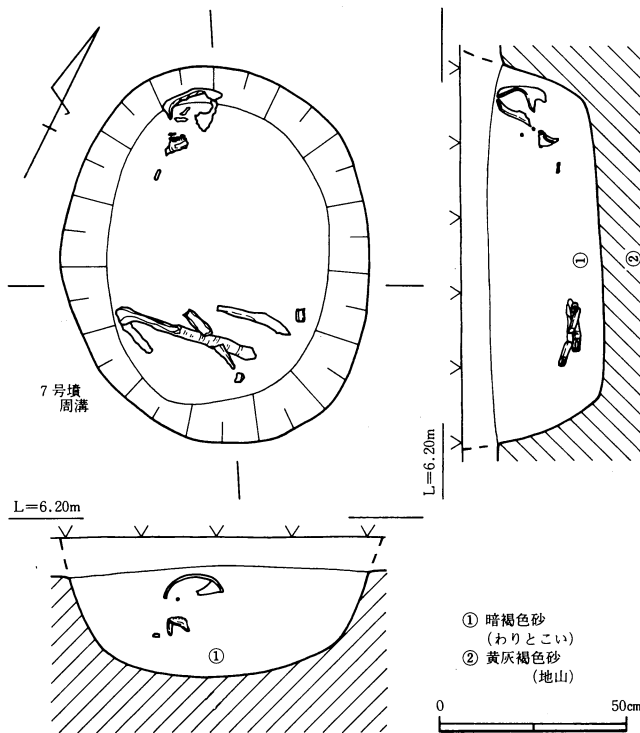
注1 SX'03・13 (報告書III P 241, 254参照)

SX'23 (挿図251, 図版47・48)

10E地区の北西にある。SX'20・21の南、LSDの上面に位置する。遺構は上縁で長軸110cm・短軸70cm、底面で長辺90cm・短辺55cm・深さ30cmの隅丸長方形の土壇で、主軸はN-0°-E。黒砂層の上層の灰白色砂層から掘り込まれていたと考えられる。埋砂は灰白色砂を主体としていた。墓壇内では頭部を北にした横臥屈葬の状態の人骨1体を検出した。両手両足を折り曲げ胸に抱き、左足はやや下に、右足はやや上側に曲がった状態で出土した。ほとんどの骨は押しつぶされたような状態で検出された。人骨の他に遺物は検出されなかった。遺構の状態、層位等から中世の新しい時期の墓と考える。



挿図252 SX'24遺構図 (S=1/20)



挿図253 SX'25遺構図 (S=1/20)

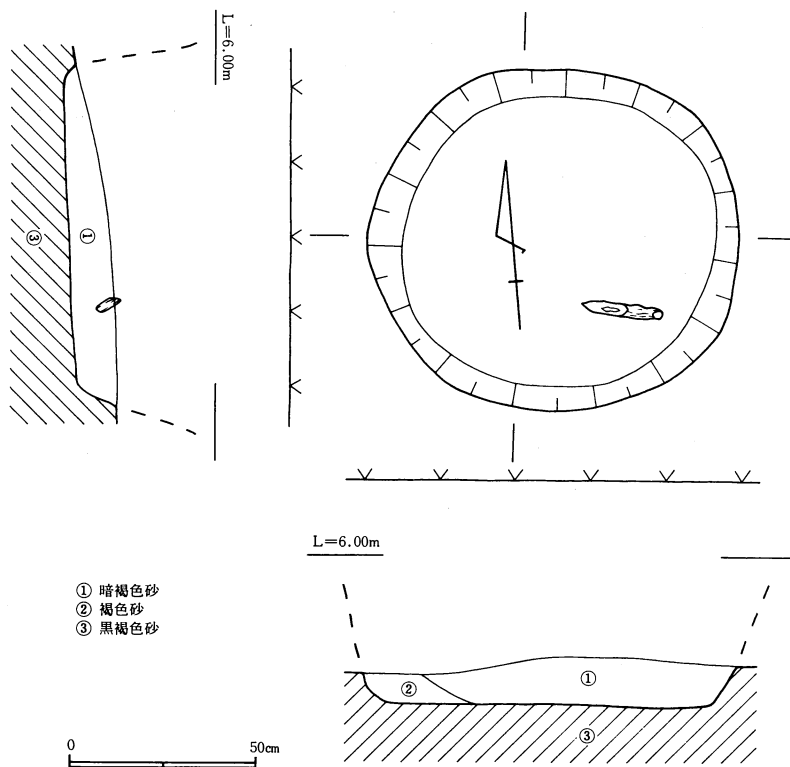
S X '24 (挿図252, 図版48)  
 10 E 地区。黒砂層の最も上層で検出した。長径120cm・短径88cmの小判状の土壙である。深さは17cm。軸方向はN-0°-E。埋砂は灰白色砂であった。中からは遺骨・遺物は全く確認できなかった。周辺には同様の形状をした土壙が7基集中していて、その全てから人骨が確認されている。S X '24についても遺構の状態がこれらのものと類似しているから、同様に中世墓の1つと考えて良いと判断する。

S X '25 (挿図253, 図版48)  
 10 F 地区。7号墳墳丘上で検出した。7号墳の南東部、南側は周溝上面に位置する。北側の頭蓋骨の周辺は既に地山(黄灰褐色砂)に達している。土壙は長軸100cm・短軸80cmのやや円形の小判形で、検出面からの深さは30cm。軸方向はN-30°-W。土壙内から頭蓋骨とほぼ全体が判る両足の骨を検出した。この状況から頭が北で顔面は西向き、両足を屈めた形で埋葬された土壙墓と判断した。遺物は全くなかった。周辺の他の中世墓の多くは土壙内の埋砂が灰白色砂であるのに対し、この例は黒褐色砂に近いものであった点で異なる。黒砂地表面以上のレベルから掘りこまれたと仮定した場合、現存する黒砂地表面から測っても40cm程

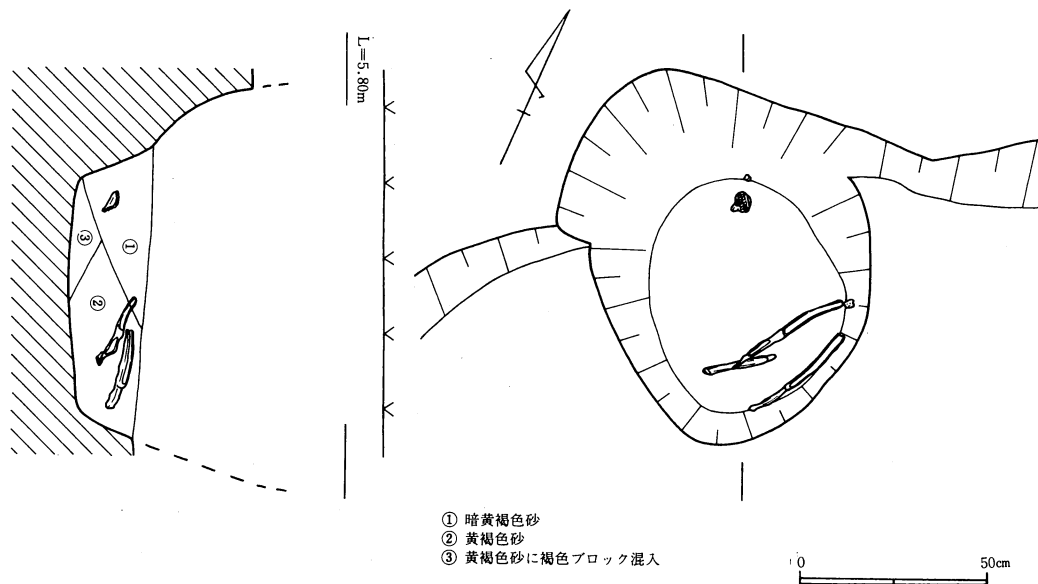
度の深さになる事から、特に上層に灰白色砂の存在を考えることはこの例についてはできない。黒砂層の比較的上層から掘りこまれた土壌墓であろう。中世墓の1つと考える。

S X '26 (挿図254, 図版48)

10F地区の北西。S X '25の北西16mに位置し7号墳周溝の直上にある。掘り方は円形に近い楕円形で、長軸約1m・短軸90cm・深さ15cmである。軸方向は南北方向か。埋砂は暗褐色・褐色砂で、掘り方の掘り込まれたレベルは黒砂層の上層かと思われる。長さ約20cmの大腿骨らしい骨片が東西に向けて遺存していた。その他の遺物は検出できなかった。中世のものと思われる。



挿図254 SX'26遺構図 (S = 1/20)



挿図255 SX'27遺構図 (S = 1/20)



### S X '27 (挿図255)

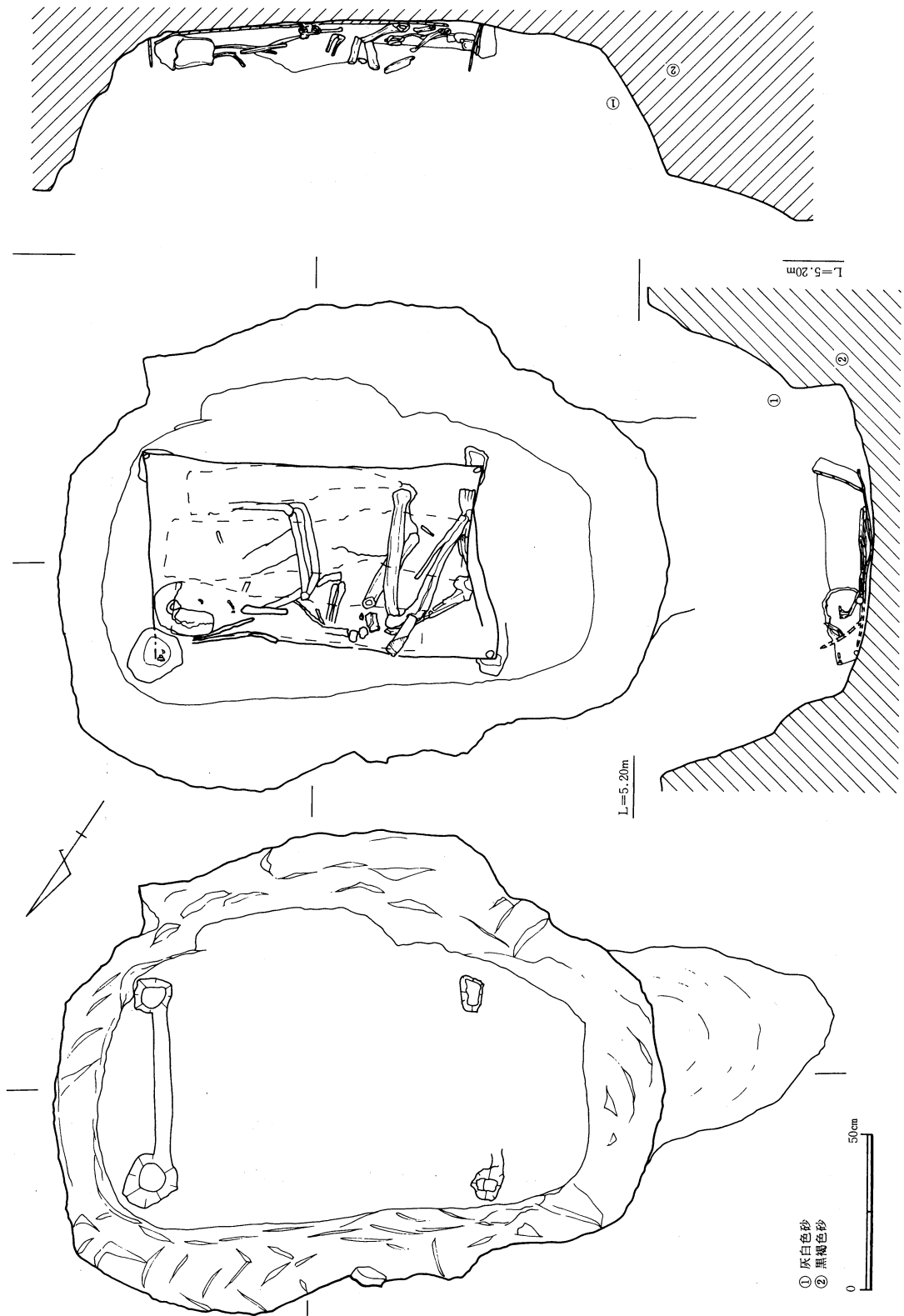
10E地区の南側中央部に位置する。10ライン北側から続く屈葬墓群の1つである。北側から平坦に続いて来た黒砂面は、このあたりでやや窪み、そして南側8号墳へと盛り上がる。S X '27は丁度10E・S D 02のため窪んでいる黒砂面を、まだ白砂が厚く堆積していない時点で32cm掘り込んでつくられたものと推定される。掘り方は長軸95cm・短軸75cm・残存する深さ45cm(北側)、15cm(南側)を測る。平面形は小判形であろう。墓壙は灰白色砂の地山まで掘り込まれ、その低い所で人骨を検出した。人骨は遺存状態の良い歯を伴う顎と大腿骨であり、その検出状況から、頭を北にした横臥屈葬と推定する。副葬品はない。西側の少し高い所から五輪塔石(S 91)が出土しているが、これと関係あるかどうか不明である。時期は中世であろう。

### S X '28 (挿図256~260, 図版49・50・60)

9B地区。土壘状遺構の一部を切って作られている。黒砂上面の白砂を除去した時点で土壘状遺構と同時に検出した。埋砂は灰白色砂で、黒砂上層に白砂が堆積した時期に作られたものとする。やや隅丸の方形に近い土壘内に木棺を設置した木棺墓である。

墓壙の掘り方は長辺最大195cm・短辺最大150cmを測るが、南長辺側に拡張部分的な掘り込み、西短辺側にやや浅い窪みが伴っており全体に不整形である。基本的には長辺約150cm・短辺100cmの土壘である。深さに検出面から最大70cmある。土壘壁面は底面から25cmより上が約70°の角度で斜めに掘り込まれているのに対し、25cmより下はほぼ垂直に(若干袋状に)掘られている。また壁面全体に掘った際の工具(スコップ状のもの?)の痕跡が明瞭に残っているが、それを観察すると底面から25cm以上は斜め横方向に、下部は上から下方向に掘り込まれたようである。下部は木棺を設置する事を意識して整形されていると思われる。下部の規模は長辺160cm・短辺100cmである。墓壙底面は黒褐色砂(黒砂層)内で終り下層(地山)には及んでいない。黒砂表面は非常に固く、墓壙底面も比較的固かった。埋砂は灰白色砂だが底面の木棺側板際に黒褐色砂が斑状に混入していた。木棺埋置後の埋め戻しの際に、混った砂を入れたものだろう。底面は木棺部以外微かに高いので、木棺を置いた部分は意図的に窪めて掘られたものとする。

埋砂の白砂を除去すると、検出面から約40cm下で大腿骨にあたる人骨を検出した。その面からわずかに掘り下げて白砂中に方形にめぐる黒い筋を確認した。木棺の側板・小口板(以下単に側板)が乾燥して微かに1~2mmの厚さで残ったものである。さらに掘り下げて木棺側板と、その内に頭を北にし右体側を下にし両足を<sup>かが</sup>屈めた遺骨1体分をほぼ完全な状態で検出した。横臥屈葬の状態<sup>そ</sup>で土葬されたもので、成人だろう。木棺側板は薄くではあるがほぼ全体に遺存していた。内側にかなり反っており頭蓋骨のある北西側では側板をはっきりとは確認できなかった。側板は最初<sup>そ</sup>に人骨を検出した時点では見られなかった。



挿図256 SX'28遺構図その1 (S=1/20)

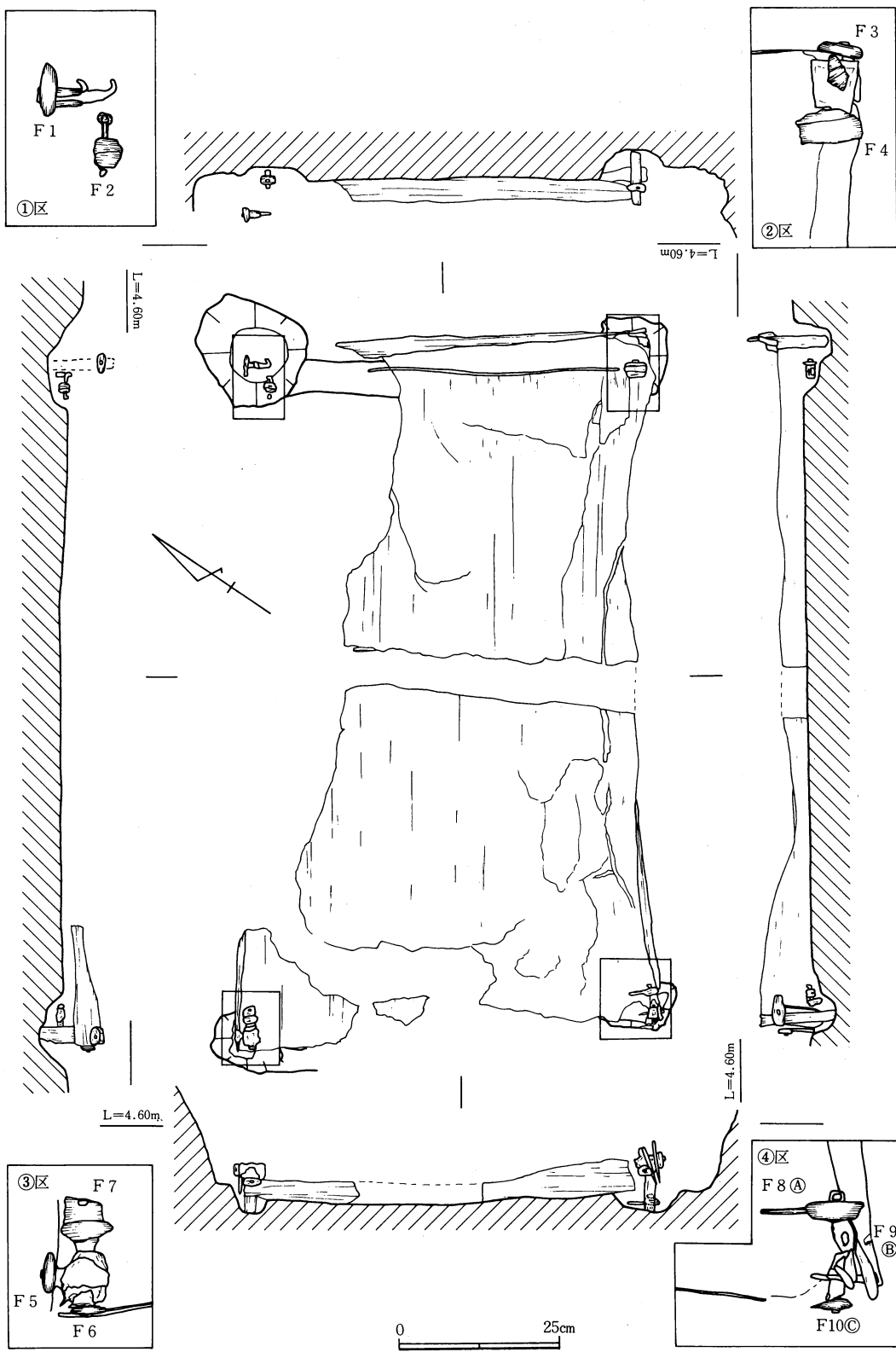
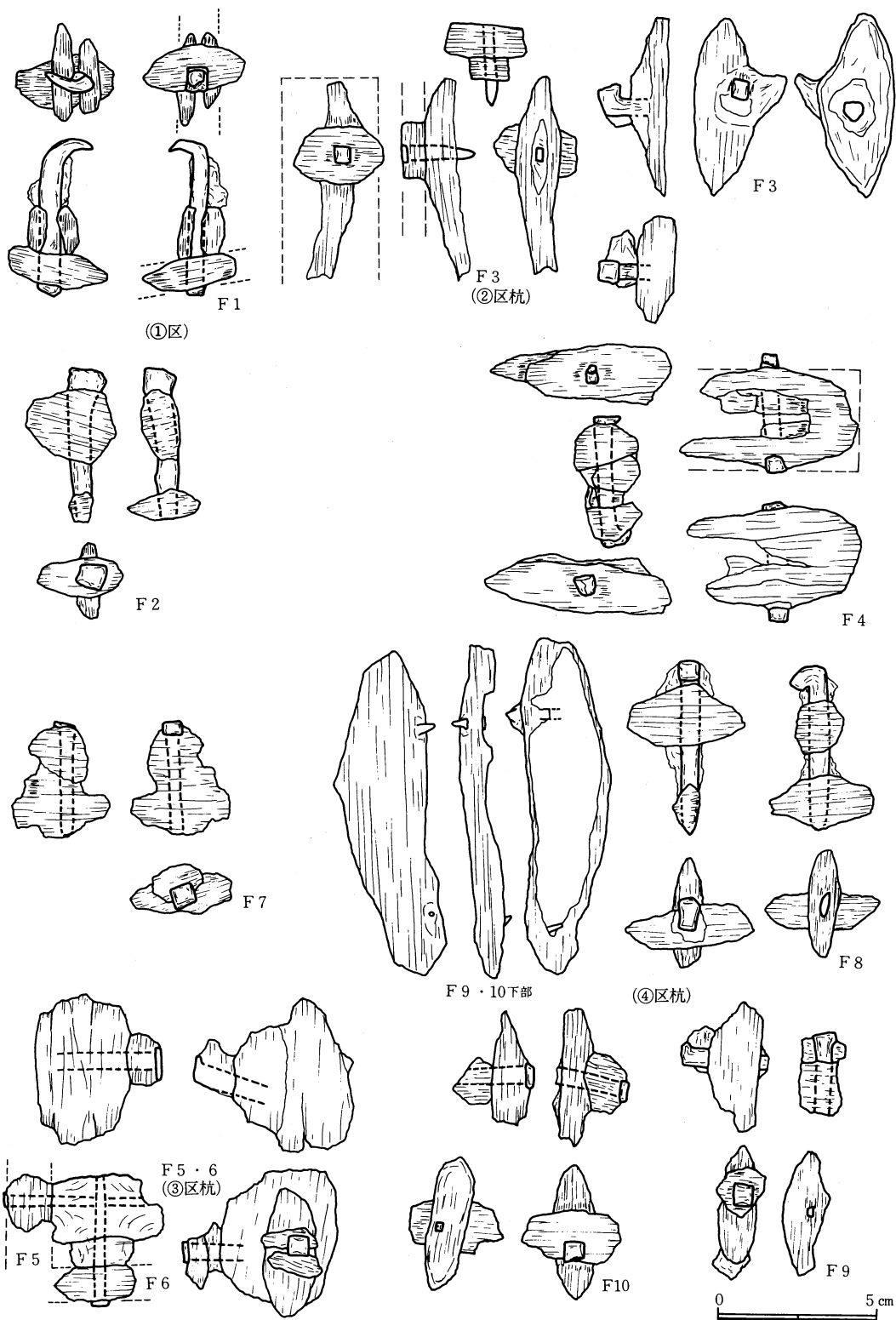
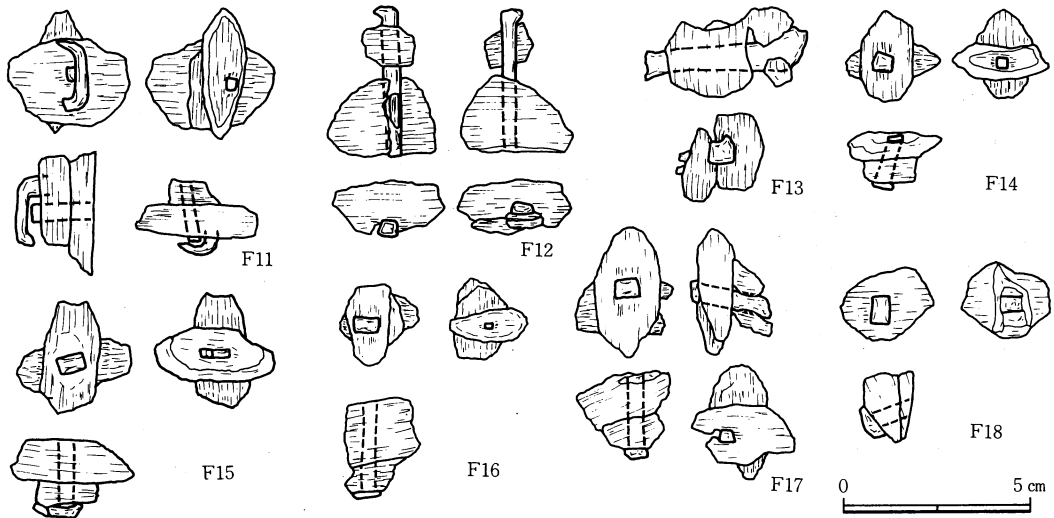


插图257 SX'28木棺图 (S=1/10)·扩大部 (S=1/4)

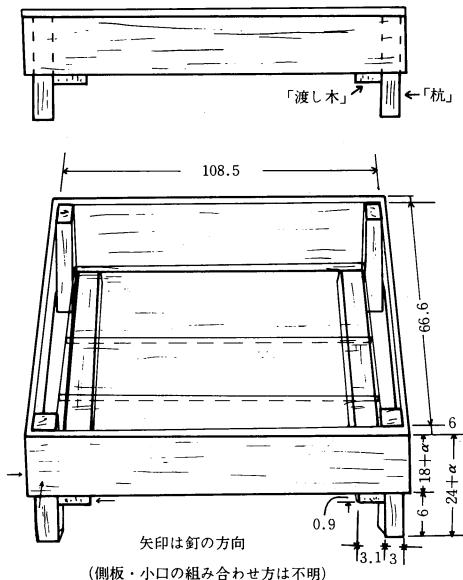


挿図258 SX'28遺物図その1 (S=1/2)



挿図259 SX'28遺物図その2 (S=1/2)

人骨の上には側板と同様の薄板片状の木質が全体にかぶさっていた。蓋が側板の腐敗により落下したものだだろう。この木質皮は大きく3つの筋にわかれるのが観察され、その割合もほぼ均等であった。(挿図256中の点線で示した部分)。従って木棺の蓋は全体を大きく覆う1枚板でなく、3枚の板で構成されたものと考え。骨の下からも木質皮が検出されたので床板もあったと考える。人骨の中央部(頭部と腕との間付近)では木質皮と木質皮にはさまれて、ごく薄い溶骨らしいものを約1.5cmの幅で連なって検出した。背骨かと考える。木質皮が骨に密着していたので骨の細かい部分、特に手首の状況は確認できなかった。人骨は非常に柔かく、木棺の破損を恐れたため十分には取りあげは行なえなかった。



挿図260 木棺推定復原図 単位cm

調査の結果判明した遺構の状況は次のとおりである。最終的に木棺の四隅の部分で約10cm四方・深さ5cm前後の小さな穴を検出した。一番しっかりしていた穴は南東部(挿図257中の②区,以下単に①~④区)のもので(11×10-6cm)を測る。①区を除く三隅で、この穴の中にたてられた角柱状の木と、それに打ちつけられた釘・錆化した木質部を確認した。この隅の角柱状の木に打ち込まれた釘は各々3点づつであるが、例えば④区のA・B・Cのように各々直交する方向から打ち込まれている。従ってこの角柱状の木は木棺の構造に伴うものと考え。これを仮りに「杭」と呼ぶ。杭の

釘錆がついた側板部から考えると、不明確だが、杭の大きさは3cm四方、側板の厚みは0.6cmと推定する（尺貫法で各々1寸・2分にほぼ一致する）。この杭に対し例えば④区の⑧・⑨は側板を打ちつけた釘と考えるが、④は側板に沿って内側から打ち込まれている。その釘⑨に付属して、棺の小口に平行して①区から②区へ、③区から④区へと走る木質部が、特に頭部側にあたる②区で長く検出された。②区ではこの木質部は深さ1.5～2cm・幅5cmの浅い溝の中に入っており、その溝内からはほぼ全体に及んで薄い木質皮が検出された。この状況は棺の足側にあたる③・④区でも同様で、溝もわずかに認められた。この部分の木質部は幅3.1cm（10寸）・厚み0.9cm（3寸）であり、この大きさの平材が小口に平行して打ちつけられていたと考える。これを仮に「渡し木」と呼ぶ。

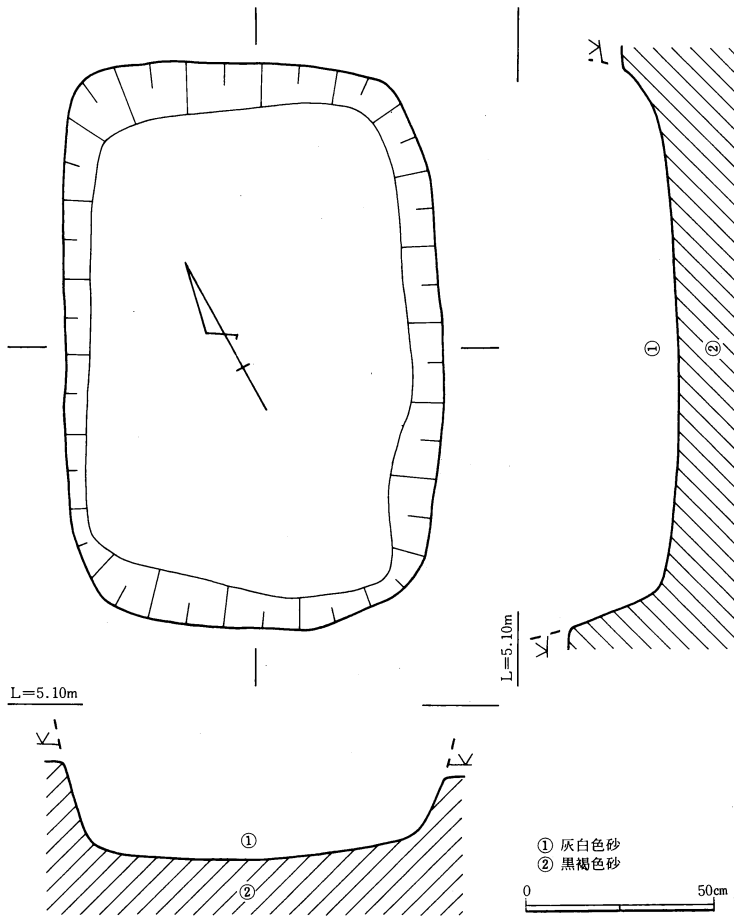
これらの出土状況から考えたこの木棺の構造は挿図260のようになろう。四隅に「杭」をもち、それに側板・小口板を打ちつけ、さらに底に「渡し木」を打ちつけたものとする。釘はこれら以外には7個（F11～18）が人骨検出以前の段階で検出されているが、底面付近では全く検出されていない。従って底板は棺に打ちつけられていなかったと考える。

側板の残存最大高は15cmでほぼ骨と同じレベルまで残る。実際もこれよりわずかに高かった程度（最大でも20cm程度）の高さであったと思われる。「杭」の現存最大高は24cmで、そのうち側板部は18cm、地中に埋められた部分は6cmである。側板は「渡し木」と接してそれより高いと思われる。側板の釘は側板最下部より4cm上のところから密接して1本づつ交互に打ち込まれている。上層から出土した釘については、この少し上で杭に打ち込まれていたものか、あるいは蓋を側板に打ち込んでいたものか判断できない。

棺の規模は長辺108.5cm（約3尺6寸）・短辺66.6cm（約2尺2寸）を測る。軸方向はN—55°—E、深さは6寸として20cm弱と考えたい。底板は蓋板と同様に1枚板ではなく何枚かの板を並べたものと思う。その内に遺体を埋納し、蓋をしたと推定する。この木棺を埋置するにあたって、四隅に杭を埋め込むための小穴を掘り、また「渡し木」の部分もわずかに窪めて、底板や側板の底が土壌面に密着するようにして埋置したと考える。従ってこの杭穴は木棺すえつけのためのものであり、現代用いられているような箱形の木棺を単に墓壇底に置いたのではなく、すえつけのための設備を設けている事になる。棺の固定のためだろう。

この状況から逆に考えると、もし木棺や杭が遺存しない場合、この4つの杭穴の性格は極めて判断しがたく、この木棺例は構造的にも貴重な資料であるとする。

副葬品は全く検出されず時期はよくわからないが、墓壇内底面・黒褐色砂内から須恵器片・土師質土器片が数点出土しており、また中世の比較的新しい時期と考えられる土壘状遺構を切っている事から、中世末の遺構と考える。

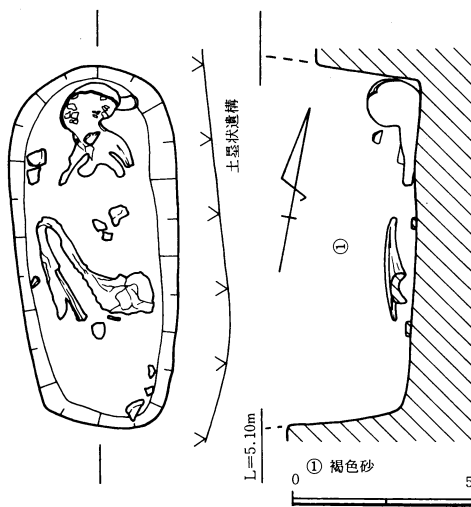


挿図261 SX'29遺構図 (S=1/20)

S X '29

(挿図261, 図版50)

9C地区南西区にあり、SX'28の北側に位置する。黒砂層を検出するため白砂を取り除いたあと土壌のみ検出された。掘り方は長方形で、長軸150cm・短軸100cm・深さ25cmである。土壌の主軸はN-29°-Eである。土壌は長方形でSX'28とほぼ同じ形状をなすことから木棺墓の可能性もある。土壌内には黒砂層上面の白砂が入っていたものと思われるが、上面の白砂と共に取り除かれた。骨、副葬品があったかどうか不明であるが、他の土壌墓と同じく中世の墓と考えられる。



挿図262 SX'30遺構図 (S=1/20)

土壘状遺構内にあるが、土壘状遺構よりも層的に上から掘り込まれていると考えられ新しいものとする。

S X '30 (挿図262, 図版51)

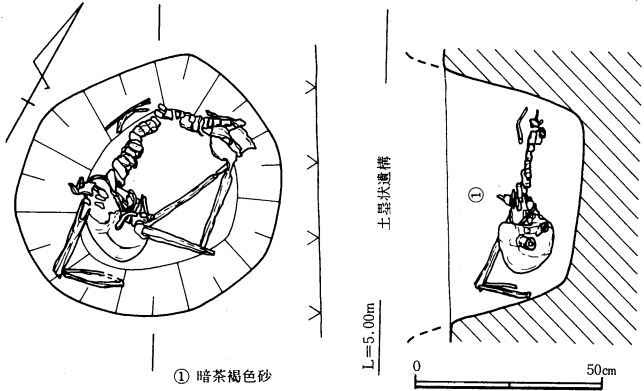
10B地区北西、土壘状遺構南隅に位置する。掘り方は縦に長い隅丸方形を呈し、長軸95cm・短軸45cm・深さ30cmである。主軸はN-12°-Wである。埋砂と遺骸は埋葬時の形をほぼ残すと思われるが、骨の遺存状態は悪くチョコレート状をなしもろかった。人骨は頭を北にし両足を折りまげ、顔は西方を向いていた。顔面は上からおしつぶされたような状態であった。頭、肩、

腰部、足の骨それに歯を検出した。また壘内より数点の土師質土器片を検出した。土壘状

遺構の一部を切っており、土塁状遺構より新しい中世末のものとする。

S X'31 (挿図263)

10C地区北東区の南西隅にある。S I 156の北、土塁状遺構内に位置する。土塁状遺構上面で検出できず、約30cm掘り下げたとき検出した。墓壇はほぼ円形を呈し、径約70cm・深さ35cmを測る。黒褐色砂層を掘り込んで作られ、埋砂は暗茶褐色砂である。墓壇内から検出した人骨は比較

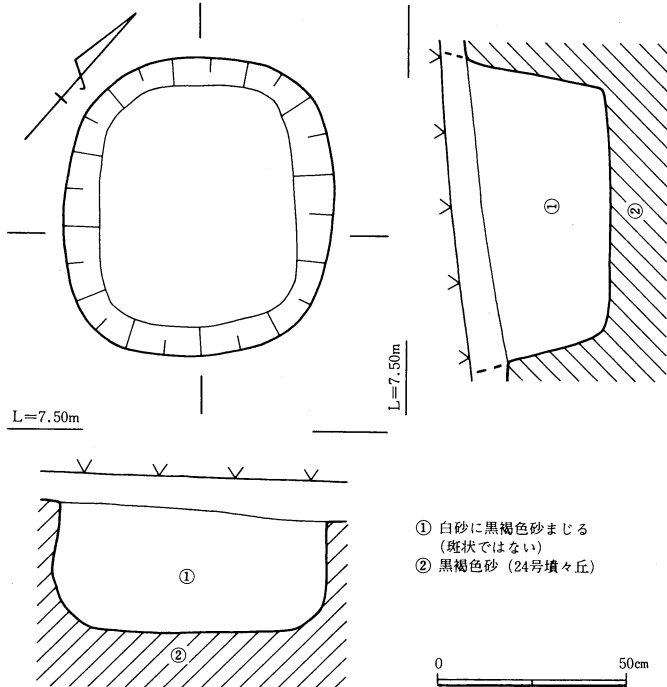


挿図263 S X'31遺構図 (S=1/20)

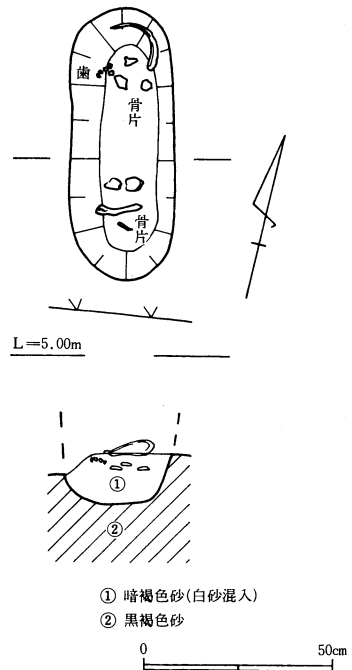
的残りが良く、身体左側面を下にして、背を丸め頭蓋骨に膝が接した状態であり他の屈葬例と異なる。副葬品は出土していない。中世のものと思われるが、土塁状遺構よりは古い時期と考える。

S X'32 (挿図264, 図版51)

11C地区。24号墳の墳頂部付近で検出した。24号墳は約1.5mの高さをもつ円墳である。黒砂地表面ではなく、若干掘り下げた時点で埋砂が白砂の土壌を検出した。土壇の形状は南北80cm, 東西70cmの方形に近く、深さは35cm, 軸方向はN-40°-W。掘り方は下の方に袋状気味にまっすぐ掘り込まれていた。土壇内からは少量の土師質土器片が検出されただけ



挿図264 S X'32遺構図 (S=1/20)



挿図265 S X'33遺構図 (S=1/20)



で遺骨・遺物は確認できなかった。しかし古墳の墳丘上に位置する事、埋砂が白砂である事から、他の屈葬した人骨を伴う土壙墓と同様の時期（中世）に黒砂の最も上の面から掘り込まれた土壙であると判断する。中世墓と考えてよいだろう。

#### S X'33 (挿図265)

9 B地区南西に位置し、S X89の周溝上にあり、S X89石蓋土壙墓のすぐ西にある。掘り方は細長い楕円形で長軸71cm・短軸28cmで、軸方向はN-13°-Wである。掘り方内の埋砂は暗褐色の砂に白砂が混入しており、黒砂上面から掘り込まれた土壙墓と考えられる。土壙墓内の人骨は北で頭を、北西で歯を、南で折り曲げた脚と思われる骨を検出した。骨、歯は小さく1.5~2才の子供と考えられる。頭を北、顔を西に向け、身体の右側を下にした横臥屈葬の状態で埋葬されたものと推定する。副葬品は何も確認できなかったが、時期は他の屈葬墓から中世のものとする。

#### 小結 (長瀬高浜遺跡における中世墓)

昭和54年から57年にかけての長瀬高浜遺跡の発掘調査によって多数の中世墓を検出した。内訳は土葬墓(SX')33基、火葬墓(SF)77基で、土葬墓には土壙墓27基、木棺墓もしくは木棺と推定される土壙墓2基、土器棺墓1基、石棺墓3基がある<sup>註1</sup>。土壙墓内からは頭を北とし顔を西に向けた屈葬遺体が、多くの場合かなり良い遺存状況で検出された<sup>註2</sup>。火葬墓も形態的に多様である。その形態から5つに分類したが<sup>註3</sup>、実際には火葬跡と火葬骨埋納地(火葬墓)とが同一であるものや異なるものがあったり、石組みを設けて火葬を行ったり、単に土壙を設けただけで火葬を行うなどの多様な葬送行為があったものと思われる。土壙墓や火葬墓の中にはむしろをかぶせたり、むしろにくるんだ後に火葬したと考えられる例もあった(SX'03, SF70)。57年度に検出された木棺墓SX'28は形態的にも貴重な資料である。これらの確認されたもの以外にも、骨片が包含層掘り下げ中に単独で出土したり、白骨細片がみられたりする場合もよくあり、実際に長瀬高浜遺跡に作られていた中世墓の絶対数はかなり多数にのぼると思われる。

また五輪塔石も今回12個(挿図266, S82~94)が黒砂地表面で出土した。風・空輪や水輪が多く、原位置を留めているものは少ないと思われる。中世墓の分布は、挿図236でみるように、今年度だけでなく全体的にも五輪塔石の分布とおおよそ一致するが、両者は特に関係を認められるものではなかった。ただ火葬墓・土葬墓・五輪塔石の分布には、少しずれがある点を注意すべきだろう。

これらの中世墓についてその形態その他については表4・5で、遺物については表6で示した。遺物を伴う例は稀で、中世墓全体について把握する事は遺物の点からは困難である。出土した遺物は唐・宋銭や土師質土器、ガラス小玉、和鏡、刀子、白磁坏類で、鎌倉前後のものと考えうる。しかしながら五輪塔石は、比較的新しい時期で室町~安土桃山時代ご

ろのものと思われ、その間に若干ひらきがある。またこれらの中世墓は黒砂内で検出されているが、その黒砂の上面に現在の白砂が堆積した時期は近世（江戸初頭か？）以降と考えられる<sup>#4</sup>。従って中世後期の状況を知る事は、単に中世墓の時期判定のためのみでなく、黒砂上の新砂丘形成の時期を判定する手がかりとなるであろう。そのことは今後に残された重要な課題といえよう。

層位的にみると、中世墓の埋砂は黒褐色砂もしくはそれに近い黒っぽい砂であるものと、黒砂上層もしくは黒砂下層の地山にあたる層でみられる灰白色砂（白砂）に分かれる。今年度の調査で確認されたS X'18~23・28は、黒褐色砂層内に掘られて地山まで達していないのに、埋砂は白砂である。土壌を掘る際に出た砂は黒砂だけであるはずだから、埋砂が白砂である事は、当時どこかで露出していた地山の白砂で埋め戻したか、もしくは既に白砂が上層に堆積していて、その白砂面から土壌をほりこみ、埋め戻しには白砂を用いたかの2つの場合が考えられる。57年度調査で検出された土壘状遺構と中世墓の関係をみると、中世墓は土壘面より下層で検出されたものと上面で検出されたものに分かれる。

これらの中世墓の分布をみると、火葬墓の分布は1号墳墳裾にその大半（52基）が集中しており、東側に集中する五輪塔石とは分布範囲が異なる。しかし東側にも火葬墓が若干みられ、調査結果から五輪塔の時期と一致するかもしくは新しい火葬墓も存在したことが考えられる<sup>#5</sup>。土器棺墓S X'12は、埋砂が白砂であり比較的新しいと考えられるのに対し、土葬墓は遺物を伴うものについてみると特に中世後期以降に時代を下げうとも思われな<sup>い</sup>。遺物としては火葬墓のそれも大差がないと考えられる。以上の点で1号墳周辺の火葬墓は中世の古い時期（鎌倉~南北朝）とし、それと同様の時期に幾つかの遺物をもつ土葬墓が作られた事、これは黒砂層内に作られている事、これに対しより新しい時期には土葬墓が多くつくられ、おそらく既に白砂が堆積しはじめた時期に長方形に近い墓<sup>うが</sup>を穿って作られているものとする。白砂の形成しはじめた時期は、発掘によって出土した遺物には17世紀以降に下りうるものがないから、中世末と考えられる。現在の状況からは埋葬形態の変遷をとらえる事はできなかったが、その時期には既に現在南150mの地点にある長瀬の集落は存在していたと思われるので、その墓所であった可能性が高いだろう。

注1 これらの中世墓は既に以下の報告書で示した。

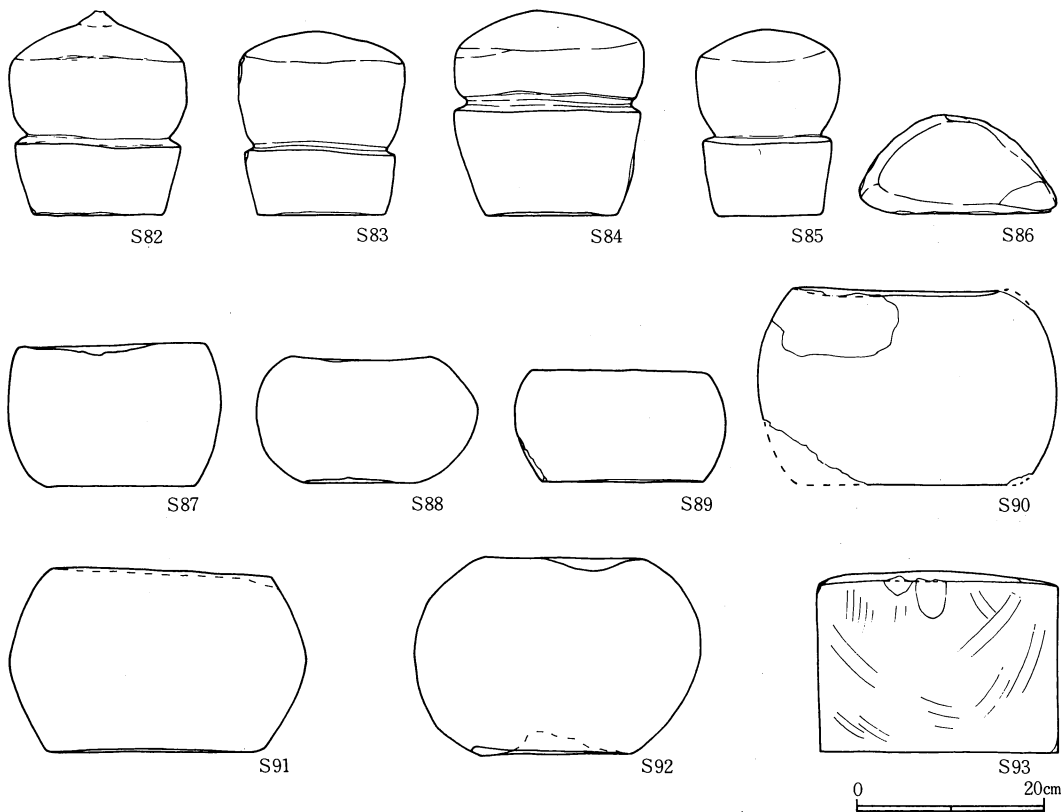
報告書II	pp. 39~54他			五輪塔石S I
III	pp. 223~54	S F51~70	S X'01~13	〃 ~81
IV	pp. 137~8	—	S X'14, 15	—
V	pp. 11~41他	S F01~49, 71~2	S X'16	—
VI	pp. 167~187	S F73~78	S X'17~33	〃 S82~91

注2 遺骨の鑑定は今年度調査分については、S X'18を除いて、全て鳥取大学医学部解剖学第2教室井上貴央先生の報告をうけた。詳細はP285f参照。

注3 報告書V P40f参照

注4 白砂内から近世初の陶磁器、寛永通宝が出土する事による。報告書IV（埴輪篇）P1f参照。

注5 火葬墓内から焼けた五輪塔石が出土した例（S A58）がある。これは白砂内でみつかったので新しい時期に属するものだろう。このすぐ近くには白砂中に作られた小石棺（S X'13）がある。



挿図266 昭和58年度調査区出土の五輪塔石実測図 (S=1/8)

SX	遺存骨他	11	S	23	G	壮後~熟, 男
01	G	12	P	24	〃	熟後
2	〃	13	S	25	〃	〃
3	〃	14	G	26	〃	〃
4	〃	15	〃	27	〃	〃
5	〃	16	〃	28	W	〃
6	〃	17	S	29	?	〃
7	〃	18	G	30	G	〃
8	〃	19	〃	31	〃	〃
9	〃	20	〃	32	〃	〃
10	W?	21	〃	33	〃	〃
		22	?			

内法30×20cm  
 壮~熟前  
 130~40cm  
 壮後~熟, 女  
 1.5~2才

表4 中世墓一覧表(その1) 土葬墓

SF 05	古銭 1 (開元通宝)	開元通宝, 初鑄 621
37	〃 2 ( 〃 1, 景德元宝 1)	景德元宝, 〃 1004
64	灯明皿 1	元豊 〃, 〃 1078
74	〃 5, 坏 2	聖宋 〃, 〃 1101
78	坏 4	
SX'02	刀子 1	
09	ガラス小玉65, 滑石小玉 1	
10	和鏡 1, 刀子 1, 鉄釘 6, 古銭 3	(開元通宝 1)
11	白磁坏 1, 鉄片 1	(元豊 〃 1)
12	土器棺	(聖宋元宝 1)
14	ガラス小玉 4, 鉄片 1	
15	鎌 1, 〃 2	

表6 副葬品を出土した中世墓一覧表

番号	形	(A~Eの分類は報Vに依った。)					
01	C	21	B	41	B	61	A
2	B	22	〃	42	C	62	B
3	〃	23	C	43	D	63	A
4	〃	24	B	44	〃	64	〃
5	C	25	C	45	C	65	〃
6	D	26	〃	46	A	66	〃
7	C	27	B	47	〃	67	〃
8	D	28	〃	48	C	68	〃
9	C	29	A	49	〃	69	D
10	B	30	C	50	—	70	A
11	C	31	A	51	C	71	〃
12	〃	32	C	52	〃	72	C
13	〃	33	〃	53	A	73	〃
14	〃	34	〃	54	C	74	B
15	〃	35	D	55	〃	75	〃
16	〃	36	〃	56	〃	76	〃
17	〃	37	〃	57	〃	77	A
18	〃	38	B	58	〃	78	〃
19	〃	39	D	59	A		
20	〃	40	B	60	〃		

表5 (その2) 火葬墓

(A~Dは報Vの分類による)

(土葬墓の形態分類)

G 土塚墓 S 石棺墓  
 W 木棺墓 P 土器棺墓

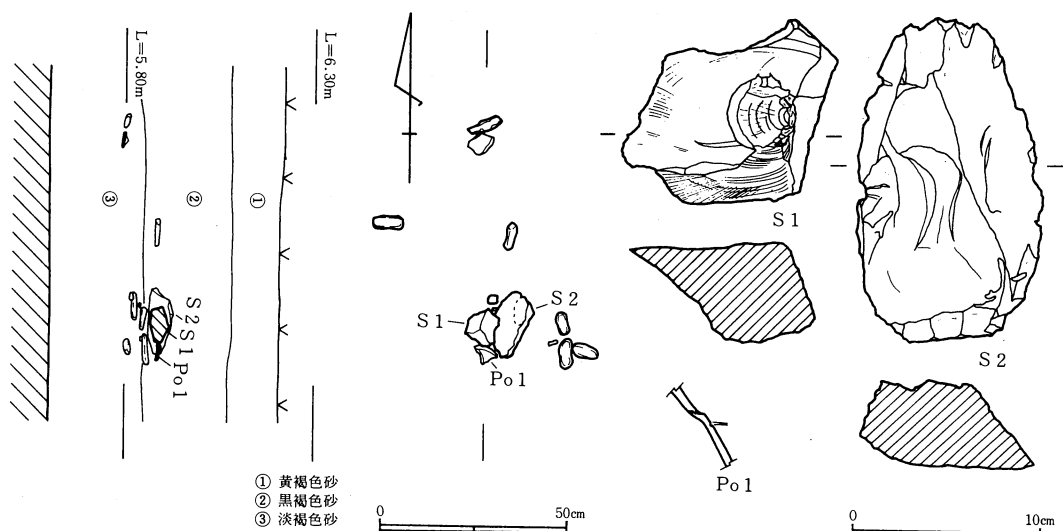
## 第6節 土壌その他の遺構

今年度調査地区では弥生～奈良・平安時代に至る土坑などを検出した。弥生時代の遺構は土壌墓と考えられる幾つかの土坑の他は、やや大きな竪穴住居状のものが2基検出された。また黒曜石の原石が2点出土した遺構もあった。古墳時代以降の遺物を含む遺構も南側で検出された。

### 10E 黒曜石出土遺構 (挿図267, 図版52・60)

10E地区の中央にあり、9ESK05(弥生時代)の西12m, S I 158(弥生時代・玉作工房跡)の北8mに位置する。遺構はやや高い所に黒曜石(S1・2)が、その周囲のやや低いレベルで両端が丸く細長い丸石(S3～8)が散乱した状態で検出された。土坑などの形跡はなかったが、黒曜石を中心として集中しているように観察できることから遺構と考えた。Po1・2はこの内から出た弥生土器でこれらの群に伴うものとする。S1・2は打撃痕跡は認められるが、S3～9は打撃痕跡は認められず、使用されたかどうかわからない。

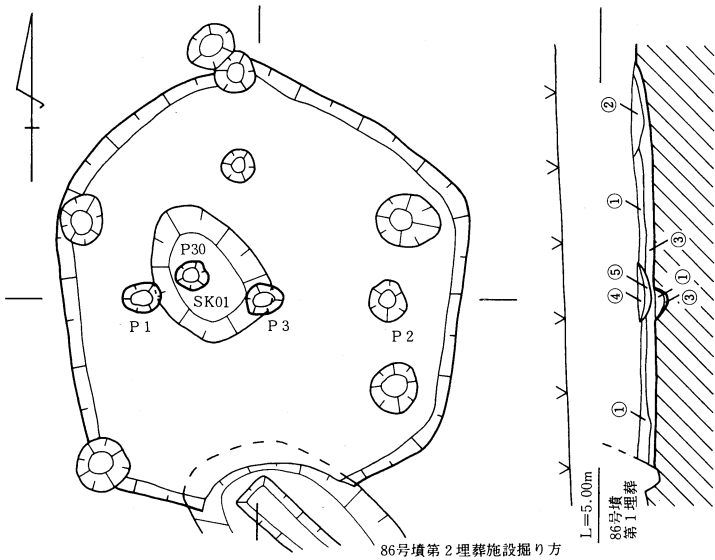
この南西10mの地点でも同様の黒曜石が1点出土している。黒曜石の製品は石鏃類が多数黒砂層内で検出されている。Po1・2などから弥生時代前期の遺構と考える。



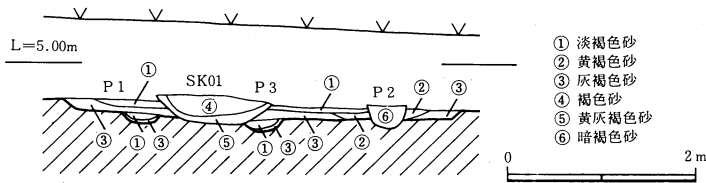
挿図267 黒曜石出土遺構 左・遺構図(S=1/20), 右・遺物図(S=1/4)

### 10D S K 03 (挿図268)

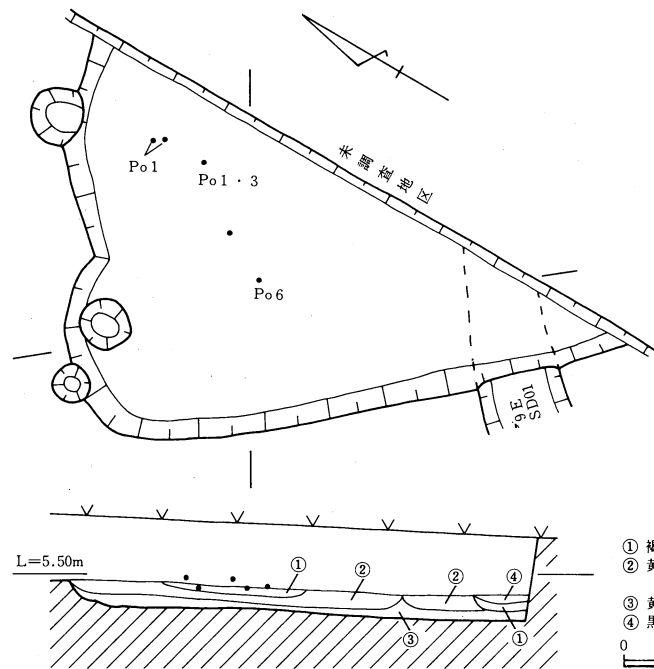
10D地区の南東。86号墳の下層より検出され、第2埋葬施設の掘り方によって切られている。平面形は六角形をなし、南北4.8m(推定)・東西4.2m・深さ0.16mである。床面は平坦をなしピットは床面中央より3個検出(P1～3)された。これら床面から検出されたピットは浅く、住居跡の柱穴とは考えられず、他のピット、土坑はこの遺構上面で検出されており新しいものである。遺構内では遺物は検出されず、時期・性格は不明であるが、平面形や床面を考えるとこの遺構は住居跡の可能性が大きいと思われる。



86号墳第2埋葬施設掘り方



挿図268 10D SK03遺構図 (S=1/80)



挿図269 9E SK05遺構図 (S=1/80)

9E SK05

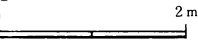
(挿図269・270, 図版52)

9E地区の北西, 81号墳の南にある。主軸は北西-南東と思われるが, 東側は未調査区域であり, 南側を9E・SD01に切られ, 全体の平面形, 大きさは不明である。調査部分はややいびつな平面形であり, 主軸方向で5.6m以上, 深さ0.24mの遺構と考えられる。床面はやや南側に傾斜しており比高差は14cmである。

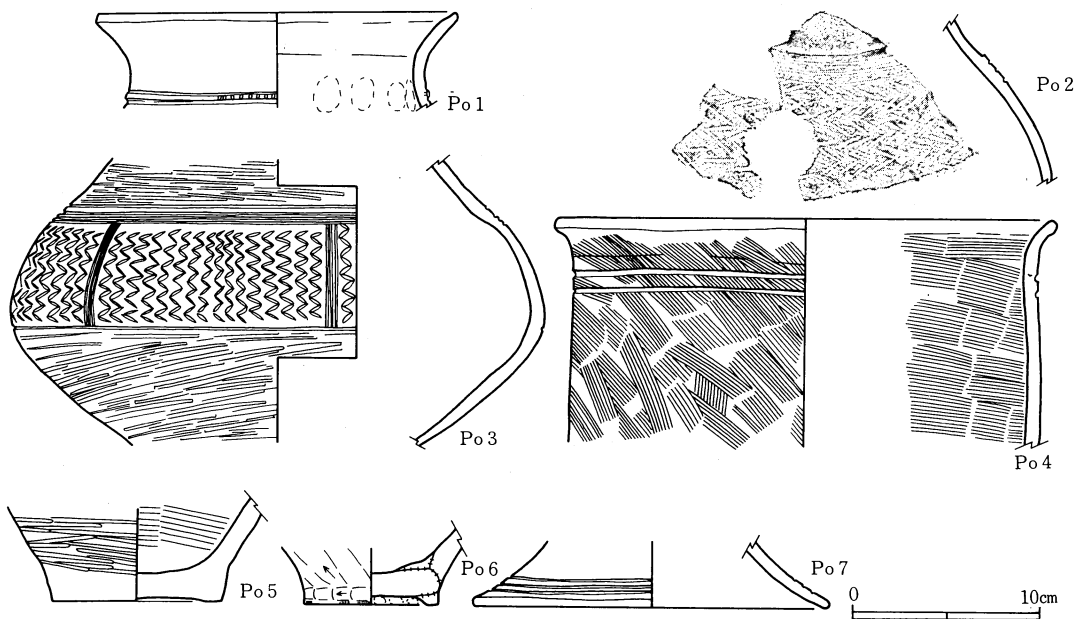
ピットは北側で3個検出されているが, 柱穴とは考えられず住居跡の可能性は薄く, 遺構の用途は不明である。遺物は

数点弥生土器が検出されているが, 検出面は床面より20cm以上上位であり, この遺構に伴うものでないとも考えられる。弥生土器の時期は弥生前期と考えられ, この土坑も同じ頃のものと考えられる。遺構上層でも弥生土器が多数出土しており, 弥生土器のみを包

- ① 褐色砂
- ② 黄褐色砂に褐色混入
- ③ 黄褐色砂
- ④ 黒褐色砂



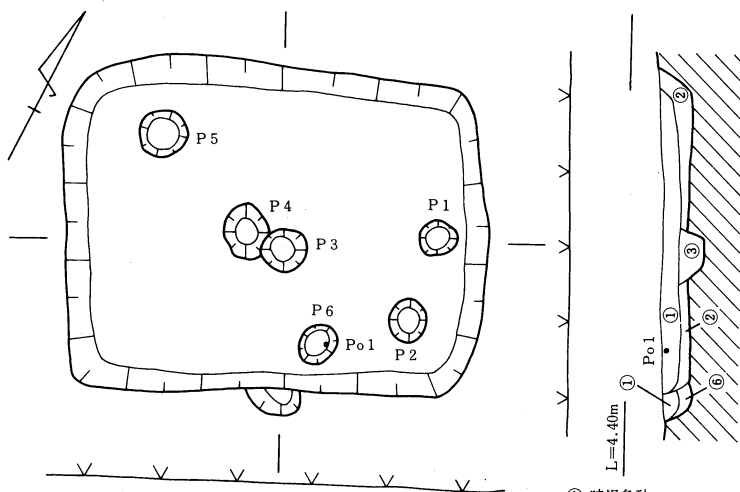
含する層がある可能性も考えられる。



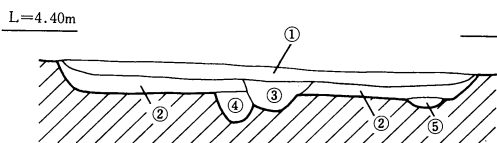
挿図270 9ESK05遺物図 (S=1/4)

9CSK01 (挿図271, 図版52・60)

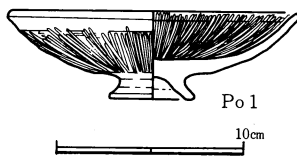
9C地区北西区にありS I 150の南, S B 43の東に位置する。平面形は長方形を呈する。長軸450cm・短軸356cm・深さ28cm・主軸方向N-64°-Eを測る。床面にはピットを6個検出した。ピットの大きさはP 1から順に(40×36-11), (46×40-13), (44×36-20), (52×48-17), (60×48-33), (52×48-11) cmである。平面形は竪穴住居状になるが、柱穴と



考えられるピットは見あらず、遺構周辺にも関係すると思われるピットはない。遺物は土師器が少量出土しているが、低脚坏(Po 1)しか図化できなかった。時期は長瀬II期と考える。



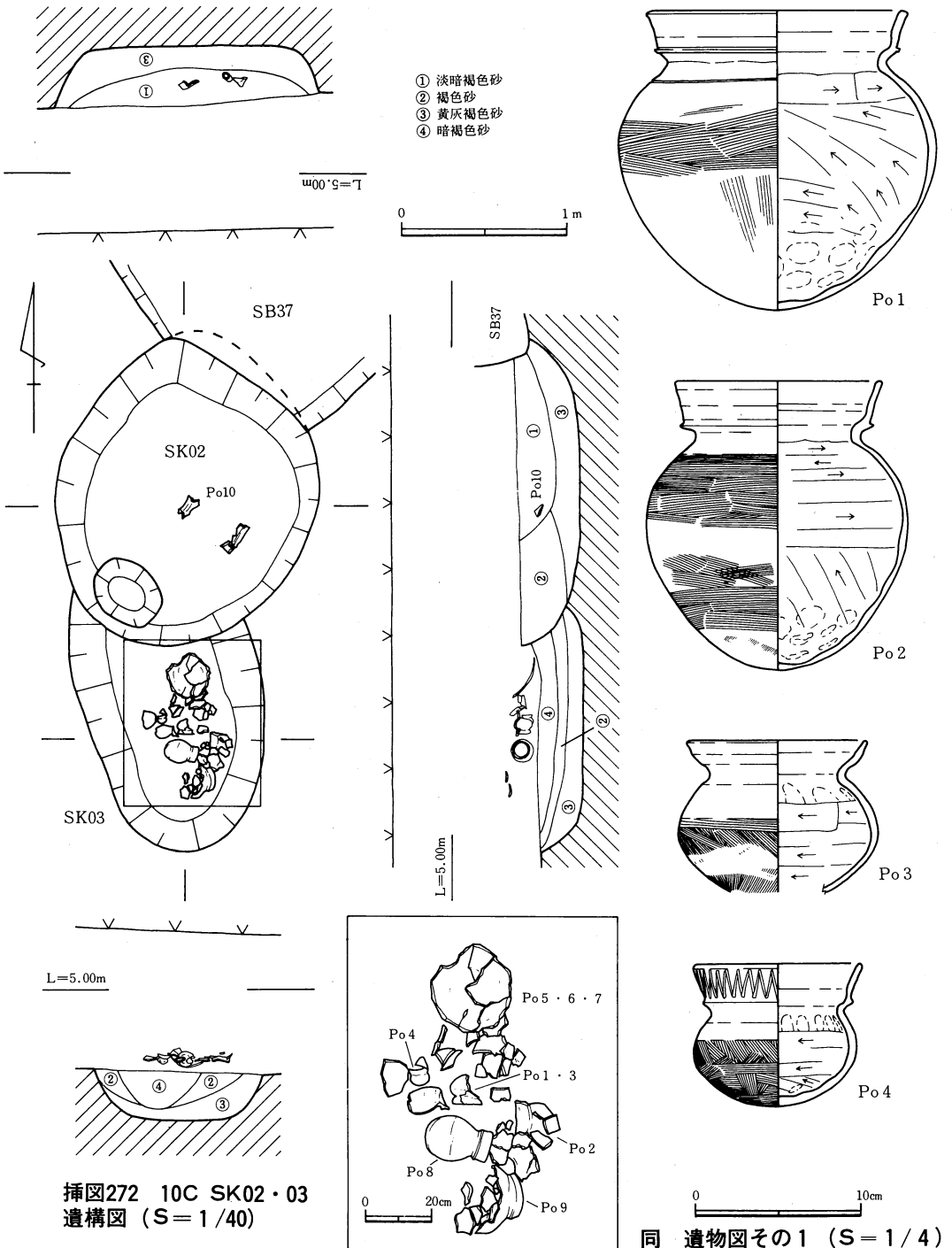
- ① 暗褐色砂
- ② 黄灰褐色砂に淡褐色ブロック混入
- ③ 淡褐色砂
- ④ 暗黄褐色砂
- ⑤ 褐色砂
- ⑥ 黄灰色砂



挿図271 9CSK01遺構図 (S=1/80)・遺物図 (S=1/4)

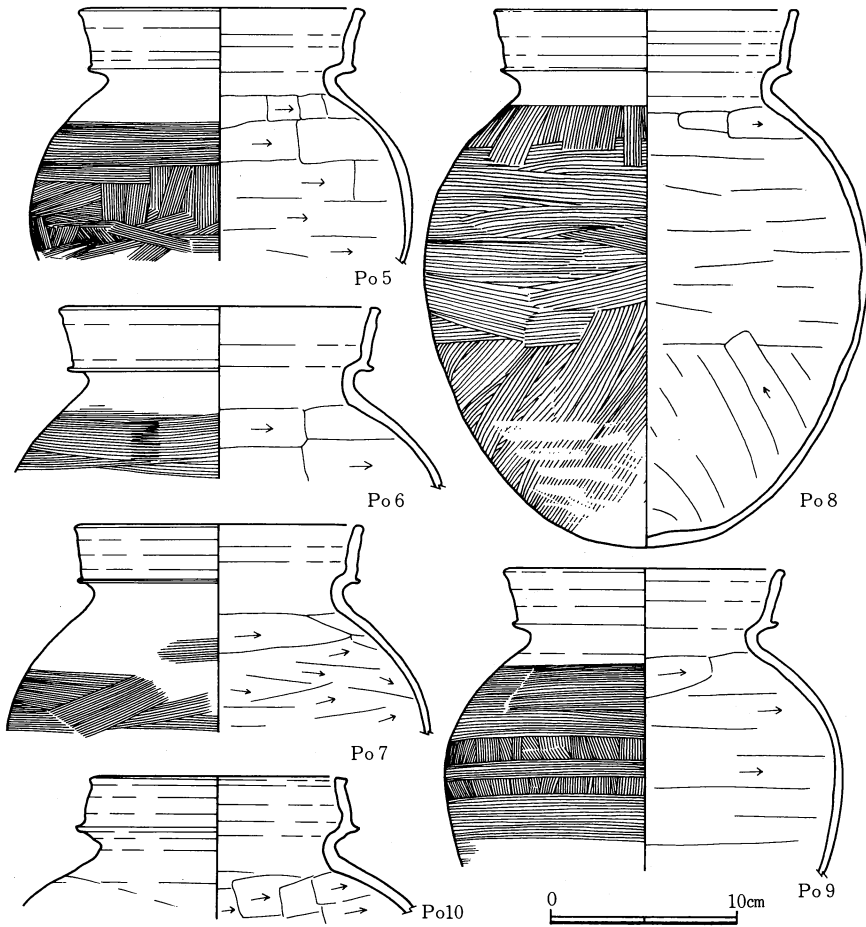
10C S K 02, 03 (挿図272・273, 図版52・60・61)

10C地区の南西区, S I 156の北西に位置する。S K 02はS B 37の柱穴に切られ, S K 03はS K 02に切られている。S K 02は長軸1.86m・短軸1.54m・深さ0.36m・主軸方向をN-20°-Eにふる小判状の土坑である。遺物は甕 (P<sub>o</sub>10), 高坏を検出した。



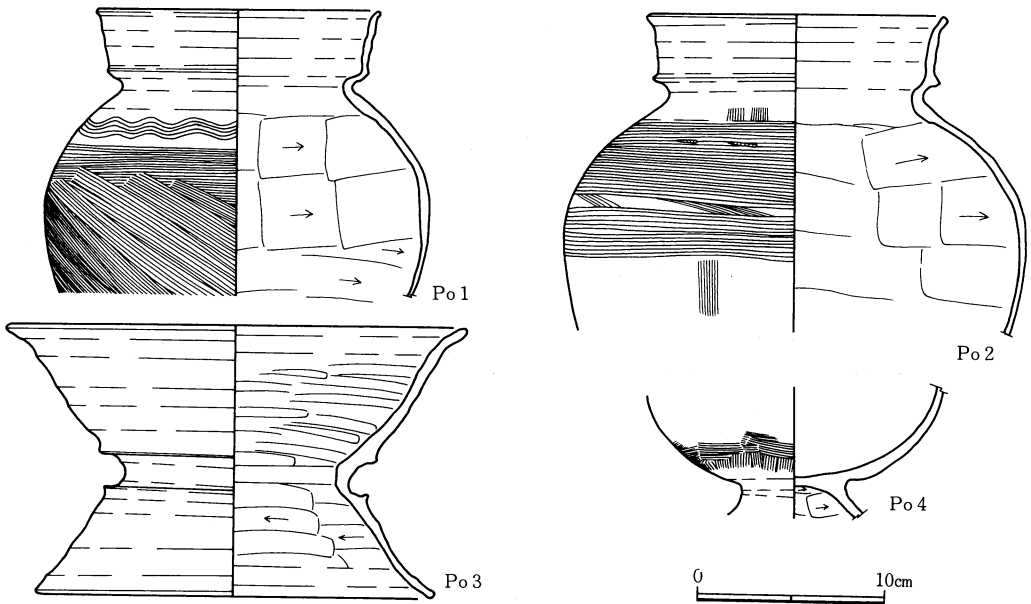
挿図272 10C SK02・03  
遺構図 (S=1/40)

同 遺物図その1 (S=1/4)



SK03は長軸  
1.9 (推定) m・  
短軸1.1m・深さ  
0.28m・主軸方  
向を N-12°-  
Wにとる小判状  
の土坑で上面よ  
り甕と小型丸底  
壺 (Po.1~9)  
を検出した。S  
K02・03の関係  
、さらにSB37と  
の関係は不明で  
あるが出土遺物  
より時期はSK  
03が長瀬II期、  
SK02はSK03  
より新しい時期  
と考える。

挿図273 10C SK02・03遺物図その2 (S=1/4)

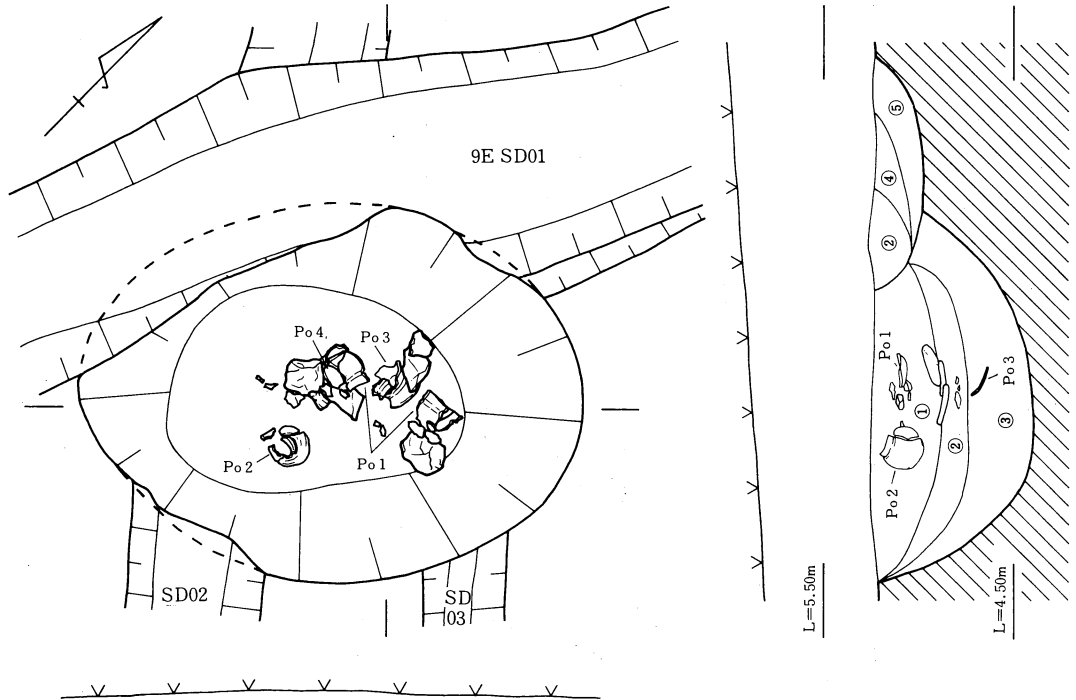


挿図274 9E SK02遺物図 (S=1/4)

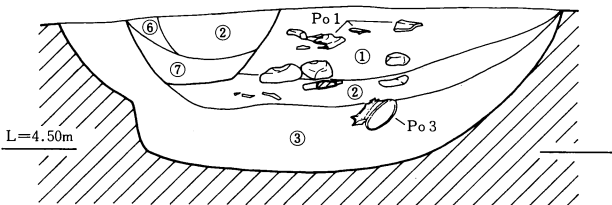


9 E S K 02 (挿図274・275, 図版53・61)

9 E地区南西区にあり81号墳の南, 8号墳の北東に位置する。9 E・S D01, S D02に切られ, 9 E・S D03, S K04を切っている。平面形は本来楕円形を呈すると思われる。長軸264cm・短軸200cm・深さ86cmを測る。主軸はN-45°-Wである。床面は比較的平坦な面をなす。土坑内からは, 甕・器台(Po1~4)などの土師器の他に20cm前後の板石が出土した。この遺構の性格は不明である。時期は出土遺物より長瀬II期の古い段階と考える。



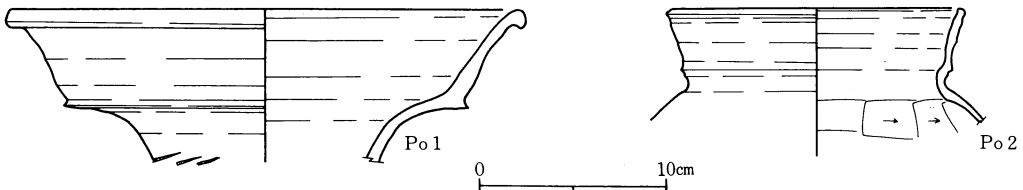
L=5.50m



- ① 黒褐色砂
- ② 暗褐色砂
- ③ 黄褐色砂
- ④ 褐色砂
- ⑤ 淡褐色砂
- ⑥ 暗褐色砂に褐色の混入
- ⑦ 黄褐色砂に褐色の混入



挿図275 9 E SK02遺構図 (S=1/40)



挿図276 10G SK20遺物図 (S=1/4)

10GSK20 (挿図276・277, 図版53)

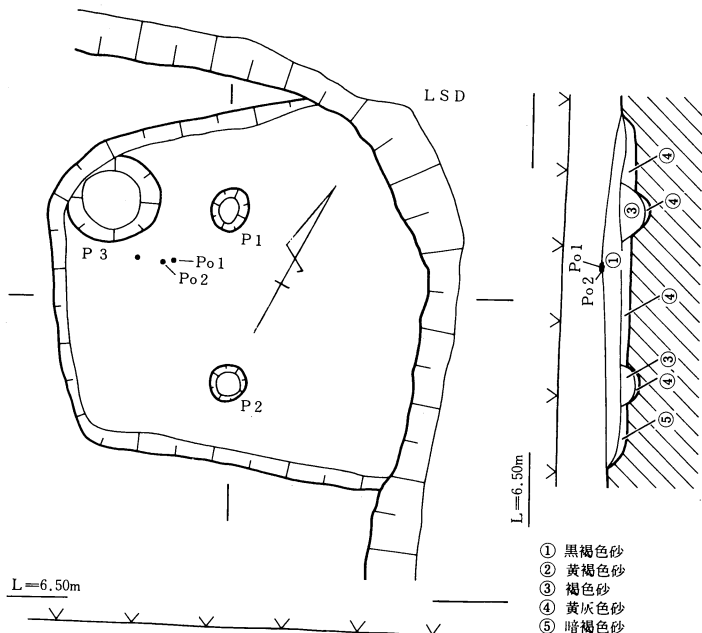
10G地区南東区にあり7号墳の北東, SA01の南に位置する。LSD, SB35に切られている。平面形はややいびつになるが方形を呈するものと思われる。主軸方向は北東—南西方向で332cm, 深さ24cmを測り, 床面積は12.1㎡以上となろう。床面は平坦である。ピットは床面で3個検出し, プランはP1から順に(48×40-32), (40×40-20), (100×96-56)cmを測る。竪穴住居跡とも考えられるが, P1とP2が浅いため柱穴と考えがたく土

坑とした。遺物は土師器(P<sub>0</sub>1~2)が出土しており長瀬II期と考える。

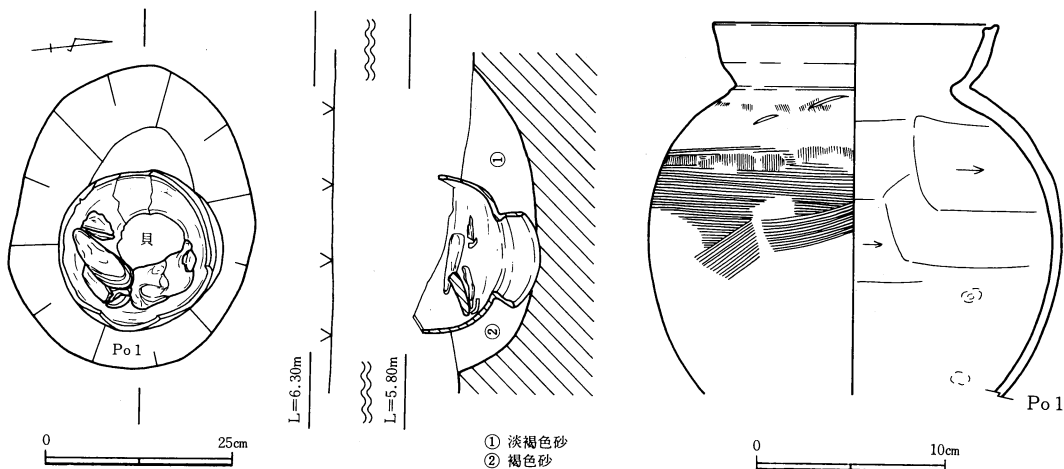
10E貝殻出土遺構

(挿図278, 図版53・61)

10E地区の北東に位置し, SD34の区域内にある。口縁を下にした甕(P<sub>0</sub>1)の中より貝殻を検出した。貝殻はイガイが1枚ほぼ完全に, 残りがよくない数枚重なったタガイが出土した。貝殻の重なり具合から貝ではなく, 貝殻を入れたものと推測する。貝殻を利用する目的をもって甕の中に納めていたものと考え



挿図277 10GSK20遺構図 (S=1/80)



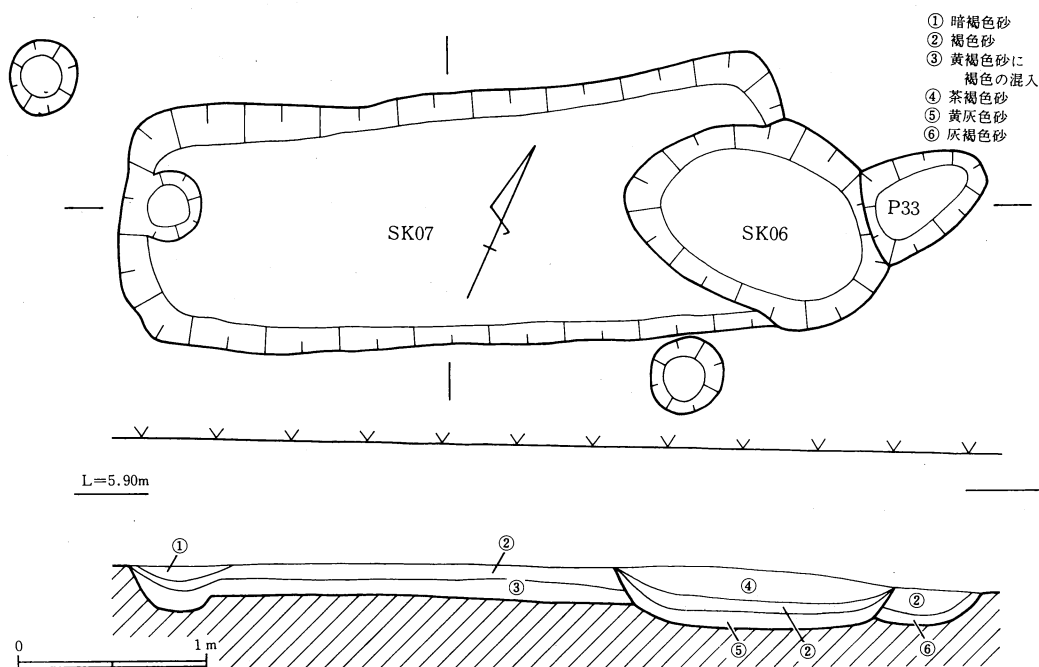
挿図278 10E貝殻出土遺構図 (S=1/10), 遺物図 (S=1/4)

る。甕の底部は欠けていたが、この甕により時期は長瀬II期と考える。

貝についてはP299 f 参照

#### 10E SK07 (挿図279, 図版54)

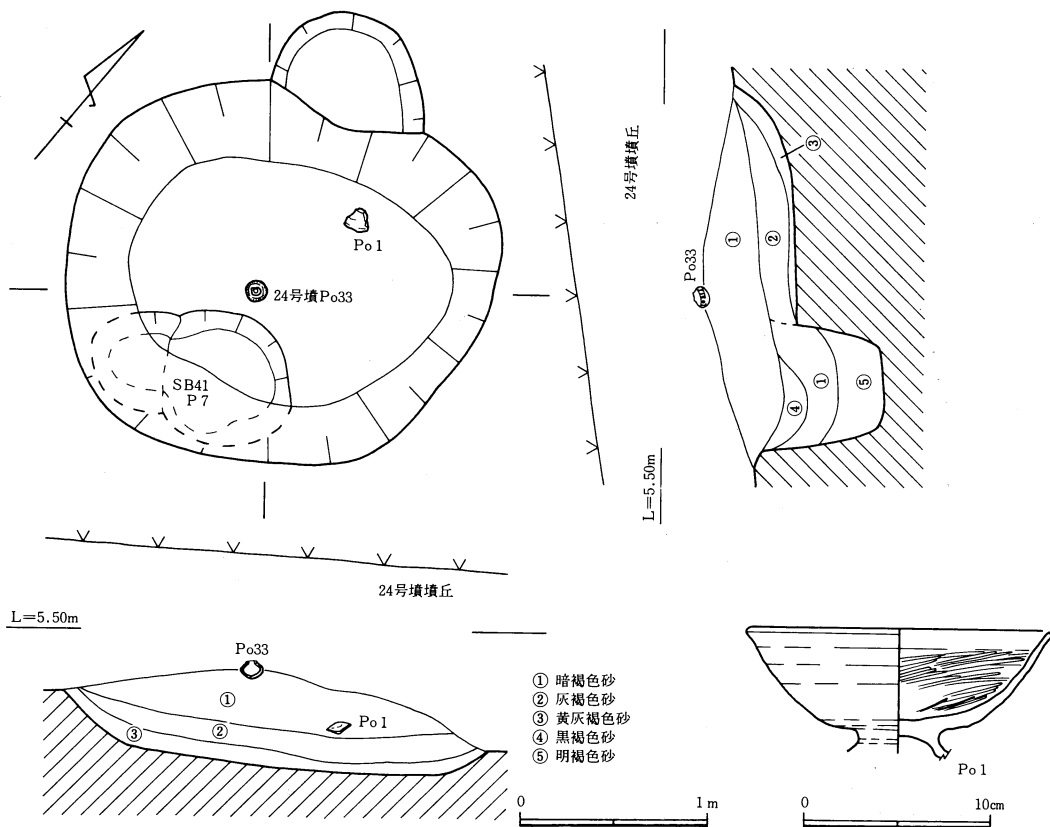
10E地区の東側中央部に位置し、8号墳の北にある。東側をSK06に切られているが、平面形は長方形で主軸はN-66°-Eである。大きさは長軸3.6m・短軸1.35m・深さ0.18mで、床面の西側がピット状になっているが他は平坦である。この土坑は検出時埋葬施設かとも考えたが、それを積極的に認めるような遺物はなかった。埋葬施設の可能性がある土坑と考えたい。時期は土坑内から土師器片が出土していることから古墳時代中期ごろと考える。



挿図279 10E SK07遺構図 (S=1/40)

#### 11C SK11 (挿図280, 図版54・61)

11C北東地区、24号墳墳裾部で検出した。須恵器線(挿図171, 24号墳P<sub>0</sub>33)の下から長軸240cm, 短軸200cm, 検出面からの深さ30cmのやや楕円形の土坑を検出した。土坑の南部分には掘立柱建物の柱穴(SB41のP7)がある。平面的には確認できなかったが、断面的には①の暗褐色砂がP7内に落ち込んでおり、SK11よりも新しいと考える。従って須恵器線(24号墳P<sub>0</sub>33)はP7が作られた後、混入したものと考える。P<sub>0</sub>33は、その頸部以上が24号墳墳丘上で検出されており、本来24号墳に伴うものだろう。従って11C SK11→SB41P7→P<sub>0</sub>33の混入という成立順序になろう。11C SK11の時期は、下層から出た低脚坏P<sub>0</sub>1の時期(長瀬II期)と考える。

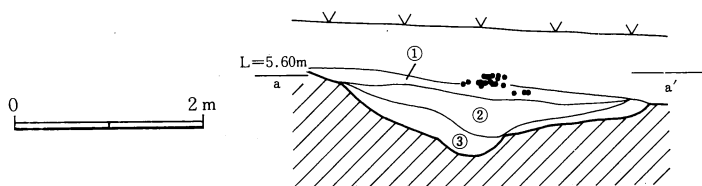
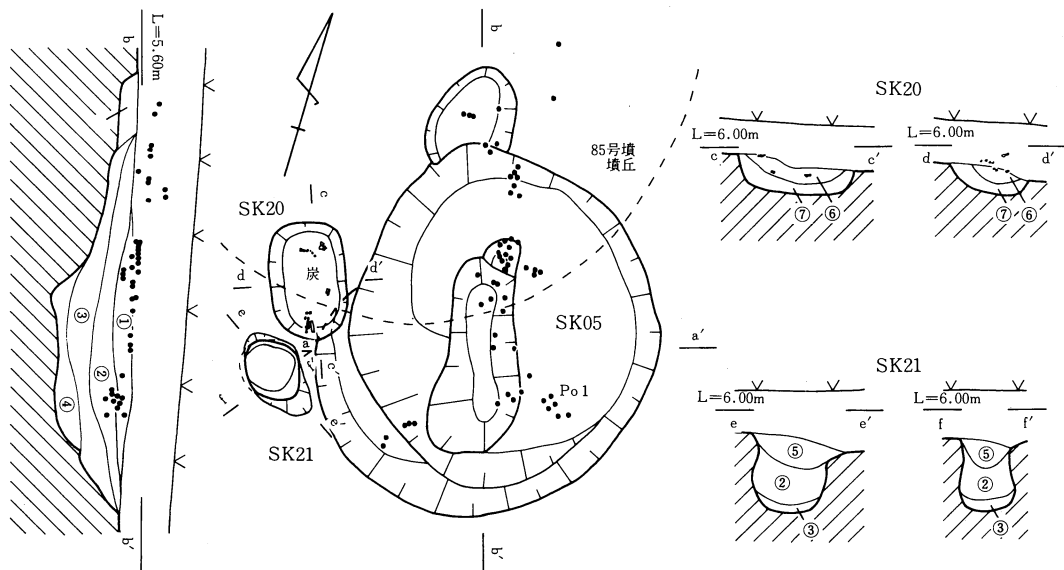


挿図280 11C SK11遺構図 (S=1/40), 遺物図 (S=1/4)

10D S K 05・20・21 (挿図281, 図版54・55)

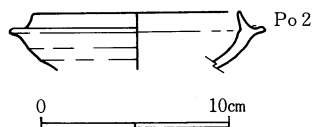
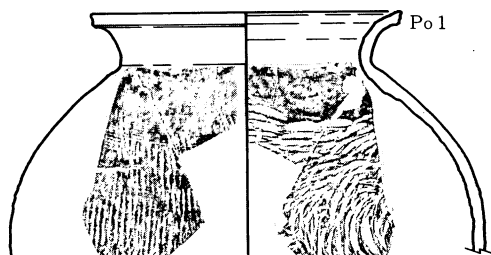
10D地区, 8号墳, 85号墳の南で検出した。すぐ北西には85号墳の中心主体である第1埋葬施設(箱式石棺)がある。85号墳付近は地山が西から南東に向けて傾斜しており, これらの土坑の上層は85号墳の墳丘の範囲内に入るが周溝はこの場所では認められなかった。S K 05は南北400cm, 東西350cmの楕円形で, 検出面からの最大の深さは80cm, 中央底部には長辺204cm, 短辺74cm, 深さ20cmの規模の長方形の土坑がある。軸方向はN-165°-E。S K 05内からは少量の土師器, 弥生土器片が出ただけだが, 上層では甕(Po1), 須恵器坏(Po2)が広い範囲で出土した。85号墳の遺物の可能性もあるが, 検出レベルが石棺のレベルよりかなり低く地山面上である事から, 85号墳には伴はないと考えた。S K 20は長軸124cm, 短軸80cm, 深さ34cm, 軸方向N-161°-Eの長方形の土坑で, 中から多量の炭が検出された。切り合い関係からはS K 05よりは新しいと考える。S K 21は長軸70cm, 短軸60cm, 深さ80cmの袋状にふくらむ土坑である。上面には南北にやや浅い窪みがある。壁面の袋状のふくらみは図281では破線で示した。層位は単純で, 内に黒褐色砂が堆積しており, 壁面は地山(灰白色砂)である事から, 袋状に掘られているのはまちがいないと考える。内から須恵器片が出ている。土坑の状況が南で検出したS B 47の柱穴とよく似てい

る事も注意したい。これらの遺構の時期は明確ではないが、SK05・20は古墳時代後期の、21は古墳時代後期以降のものとする。

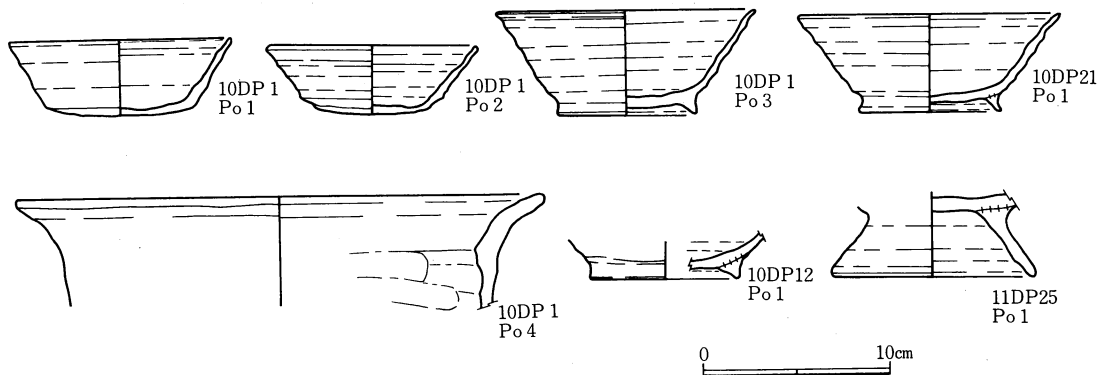


●はPo1・2の散布状況を示す。

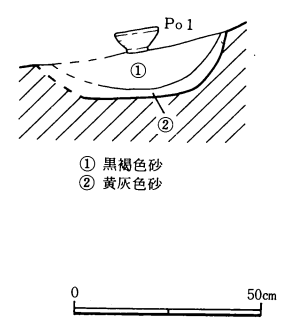
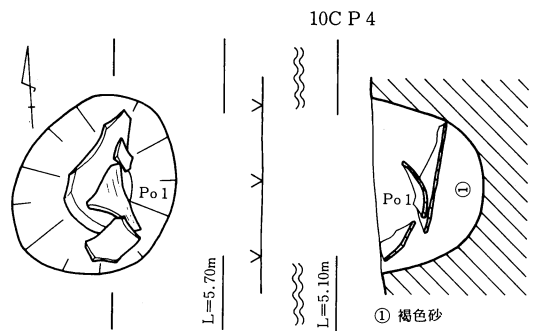
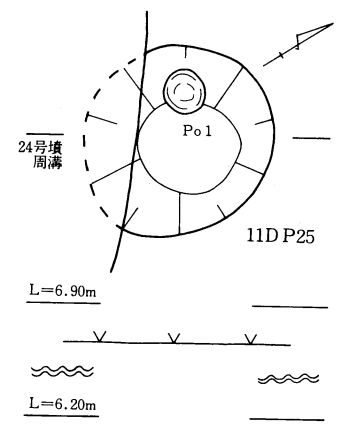
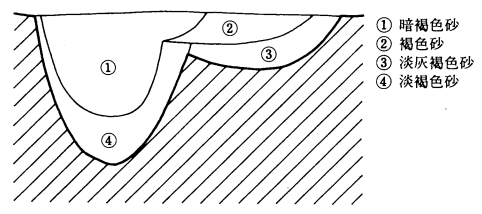
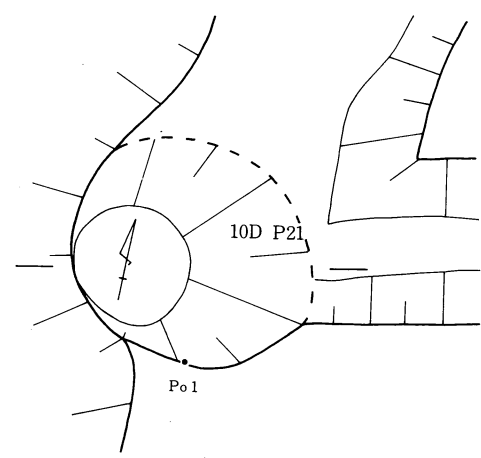
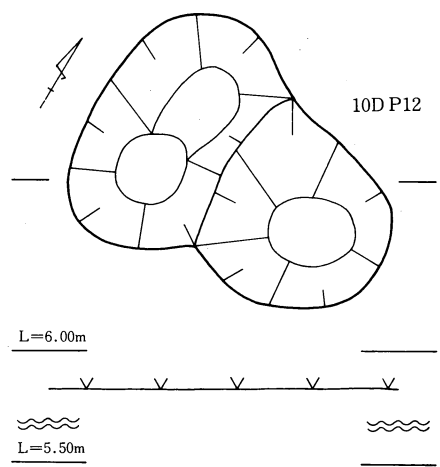
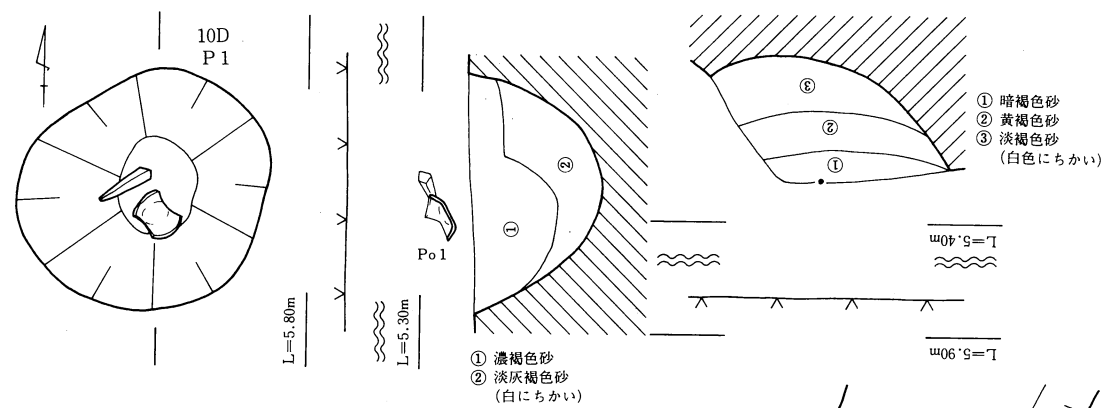
- ① 暗褐色砂
- ② 黒褐色砂
- ③ 灰褐色砂
- ④ 淡暗褐色砂
- ⑤ 濃暗褐色砂
- ⑥ 炭を含む黒褐色砂
- ⑦ 淡黒褐色砂のまじる  
淡灰褐色砂



挿図281 10D SK05・20・21遺構図 (S=1/80)・遺物図 (S=1/4)



挿図282 土師器を含むピット群出土遺物図 (S=1/4)



挿図283 土師器を含むピット群遺構図 (S=1/20)

### 奈良時代以降の土師器を含むピット群 (挿図282・283, 図版61・64)

11D～10D地区から11C～10C地区周辺で、土師器を含んだピットを幾つか検出した。挿図283で示したピット以外にも須恵器片・土師器片を含んだピットは幾つか見られた。周辺には8世紀後半～9世紀代の掘立柱建物跡と考えられるS B37・41があり、またその上層には中世後期のものと考えられる土塁状遺構がある。(付図1, 全体遺構図参照)またS B37検出面で多数の土師器が出土している。(本編P98他参照)これらのピットは地山面まで掘りさげた段階で検出したが、本来は黒砂層の比較的高い面から掘りこまれたものと考ええる。(このあたりの黒砂層は50～60cmの深さがある。)規模は約50～60cmの円形のピットが多く性格は不明である。東側(10B・C地区付近)ではこれら新しい時期のピットが直線的に並び柵状に設けられていた可能性もある。

10DのP1では杯(P<sub>0</sub>1)と板石が重なって出土し、その下から甕(P<sub>0</sub>4)や杯・高台付の杯各1点(P<sub>0</sub>2, 3)が出土した。10DのP21・P12からは高台付杯が、11DのP25からは高い杯の高台部(P<sub>0</sub>1)が出土した。また10C・P4からは、図化できなかったが甕内に炭化した穀物(粃か?, 図版64写真2参照)が約200粒検出された。若干時間差がみられるが、10D・P1のP<sub>0</sub>3, P21のP<sub>0</sub>1はヨコナデの稜がかなり明瞭で多条化していること、10D・P1のP<sub>0</sub>1・2が小型化していることから、伯耆国庁編年第3段階<sup>#1</sup>(10世紀前半)に比定しうるものと考ええる。

従ってS B37・41よりは若干新しい時代の遺構と考える事ができる。

注1 伯耆国庁跡発掘調査概報(第5・6次)昭和53年度 倉吉市教育委員会

### 10A土器群(挿図284・285, 図版55・61)

調査地区のもっとも南側にあたる10A地区で、多量の完形土器が4m<sup>2</sup>の範囲に集中して出土した。このような状態での土器の集中は他にもみられるが、この一群は器形的に特異なセット関係がみられるので特に報告した。この周辺のAライン以南は第7節(P205以下)でも述べるように北側の黒褐色砂の堆積が薄く、あるいはほとんど見られず、やや淡い茶色がかった砂が堆積していた。同じAラインの西よりでみられる粘質砂もしくは粘土の広がり、この土器群の見つかった地点では見られず、茶褐色の砂をほぼ地山まで掘り下げた時点でこれらの土器群を検出した。遺構としては確認できなかったが、中心部と思われる部分(P<sub>0</sub>2・19の周囲)がわずかに窪んでいた。コンテナ3箱分の土器が集中しており、また逆にこの周辺ではこれ以外ほとんど土器片が出土していなかったため、一括資料として把握してよい資料であると判断した。

土器の内容は①通常の外傾する複合口縁をもつ甕(P<sub>0</sub>1～5)、これには器高28cm程度の普通の大きさのものと器高15cm程度のやや小型なものがある。②複合口縁部が内傾する甕

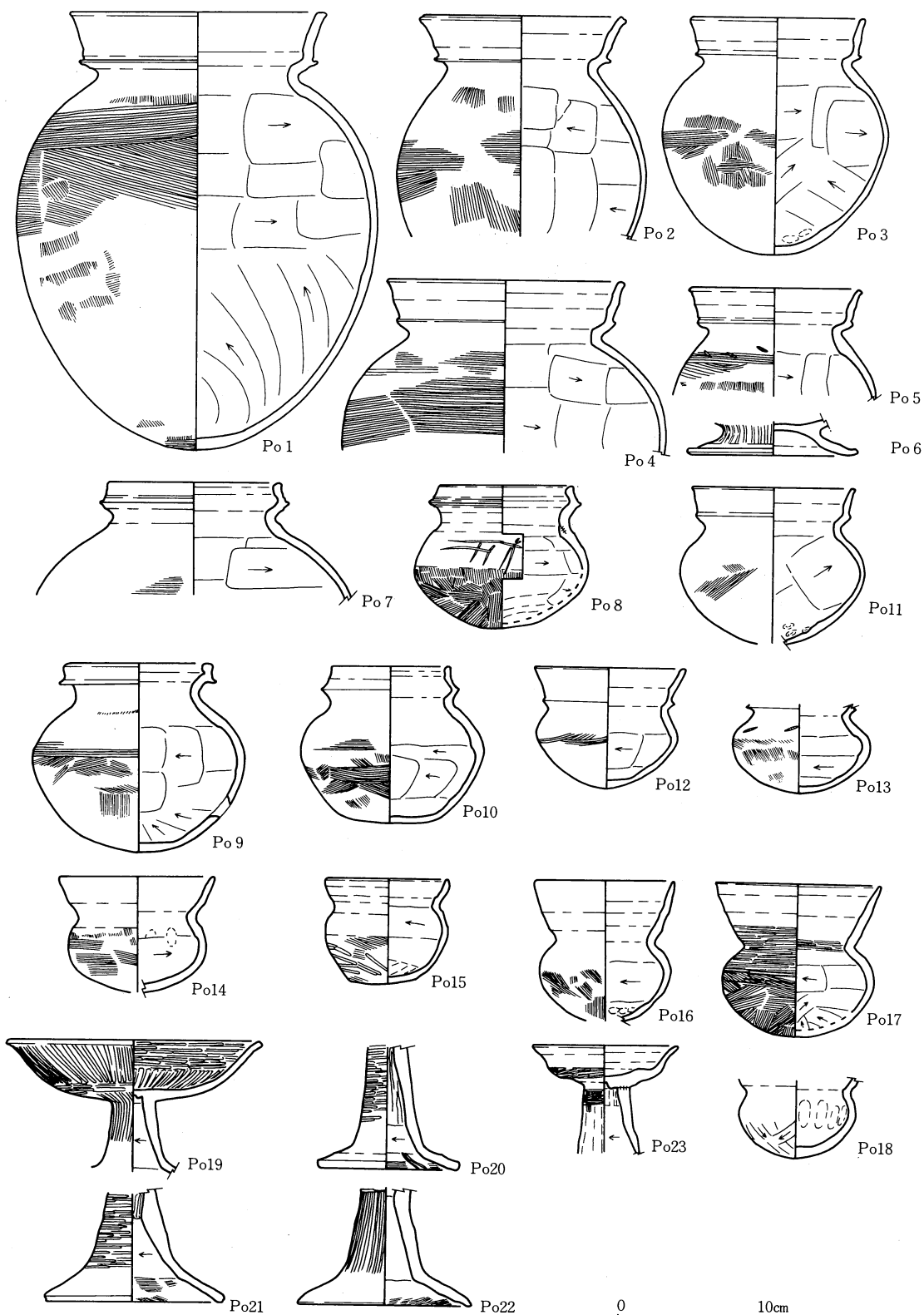
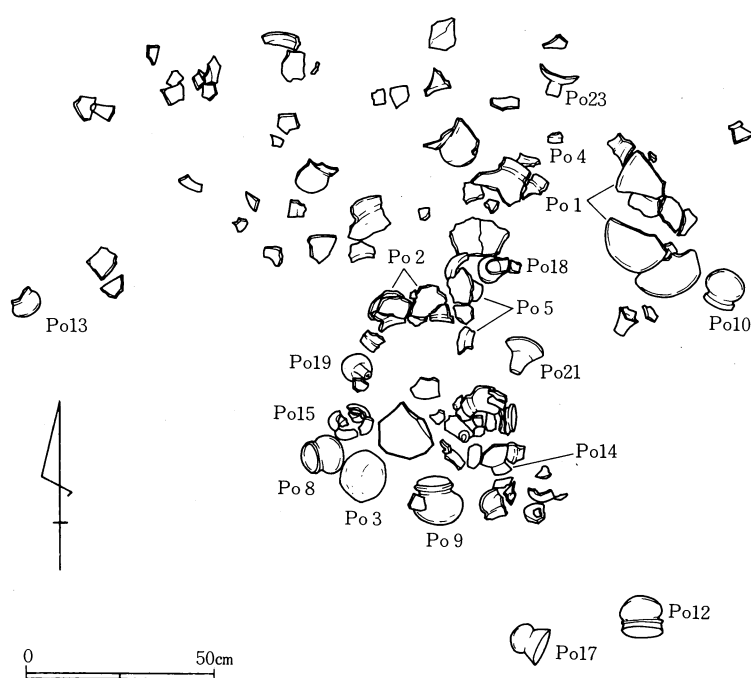


插图284 10A土器群遺物図 (S=1/4)





挿図285 10A土器群出土状況図 (S=1/20)

(Po7~10), これにも大小ある。Po8にはヘラ状工具で動物様の文様が描かれている。③複合口縁をなす小型丸底壺 (Po11~13), これは小型の甕とも考える。④通常の小型丸底壺 (Po14~18)がある。これらの③・④のうちにはPo10のように平底のもの, Po15のように小型であるため手づくね土器の感をなすものもある。また⑤高坏 (Po19~22)がある。

Po22のように脚裾端部が内湾して尖るものがある。⑥は高环形器台Po23である。

②の口縁の内傾するタイプの甕は, 散在的に出土するが, このように数点まとまって認められた例は当遺跡では他に見うけられないようである。またPo6は上部内面にはヘラ削りがみられるので, 台付甕の高台部になると思われる。(完形の台付甕がS I 82で出土している。報告書IV, P20, 挿図21P.14(2))

これらの土器には煤が全く付着していない点他, 使用した痕跡が認められない。何らかの目的で意図的に埋納した可能性もある。周辺のピットや遺物は比較的新しく古墳時代後期以降と思われるが, この土器群は長瀬II期に比定しうるので古墳時代前期終末ごろと思われる。

#### 10G S A 01~07 (挿図286, 図版55)

10G・11G地区の北側にピットが数列にわたって並んで検出された。ピットの形状は円形・隅丸方形・方形・楕円形などさまざまで, ピットの深さも一定ではなく, 底に段をもつものも多数検出された。

S A 01は北に位置し, 77号墳周溝にP3・4が, 10H S D 02にP4・5がそれぞれ切られる。S A 01はP1~P5からなり, それぞれのピット間距離はP1から2.4m, 3.5m, 2.8m, 2.1mを測る。S A 02は77号墳の周溝の南にあり, P6~P11からなる。ピット間距離は1.8m, 2.0m, 2.0m, 1.8m, 3.1mを測る。S A 03はS A 02の南にあり, P12~P16からなる。P14・15・17は底に段をもち, P12・P13に比べて大きい。ピット間距離は



P12から1.8m, 2.2m, 1.5m, 2.2mを測る。S A04はS A02のP10・11の南にありP17・18からなる。ピット間距離は2.7mを測る。軸はS A01・2・3と異なりN-55°-Eである。S A05はS A04の南にあり、P19~P22からなる。ピット間距離はP19から2.9m, 1.9m, 1.0mを測る。軸はS A04とほぼ同じN-56°-Eである。S A06は77号墳の南東にあり、S A05の東に位置する。P23~P27の5個のピットからなり、P24以外は他のピットと切り合う。ピット間距離はP23から1.9m, 2.2m, 2.1m, 2.3mである。S A07はS A06の南にあり、一部をLSDに切られる。P28~P34からなり、ピット間距離はP28から2.3m, 1.7m, 2.2m, 2.0m, 2.1m, 2.1mを測る。

S A01・2・3・6・7はほぼ同じ軸(N-70°-E)をもち、特にS A02・03とS A06・07は対をなすと思われる。またほぼ同じ軸をもつS A04・05も同様であろう。列間距離はS A01・02間で4.4m, S A02・03間で1.8m, S A04・05間で2.6m, S A06・07間で1.8mを測る。S A02・03とS A06・07はそれぞれ対をなす何らかの柵列と考えられよう。その場合S A05はS A07と切り合うため同時期には存在せず、切り合い関係からS A04・05の対がS A06・07の対より新しい事がわかる。またS A01と対になる列は見いだせず、単物の柵列であろう。これらの柵列は報告書V掲載のS A01~03などと結びつけ、集落の中心部(?)を囲う柵列と推定できる。柵列の時期はLSDに切られている事、ピット内の少量の土器片などから古墳時代前期から中期のものであろう。

### 小結

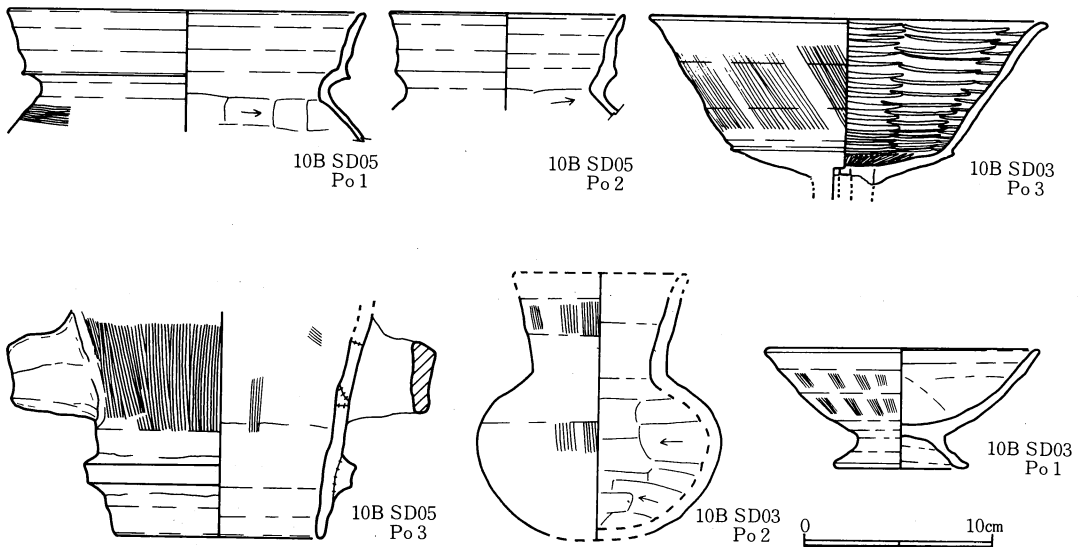
今年度の調査で、弥生時代の玉作工房跡3基と、古墳時代の住居跡、墳墓の他、古墳時代以降の遺構としては墳墓を除くとはじめて建物跡と土塁状の遺構が確認された。これらの遺構のうち、特に重要なもの3つを除いた主だったものを今節で報告した。これ以外にも弥生時代の土坑(土壌墓の可能性が強いと思われる)もいくつか散在的に検出されているし、特にEラインの10地区付近では黒砂層が非常に厚く150cm以上に及んでいたが、そこで弥生の単純包含層と思われる地域が一部でみられた。9ESK05付近であり、10DSK03も同様の状況で検出され弥生時代の遺構と考えたい。西の12E地区は弥生土器の多く出土した地区で、玉作工房以外の唯一の弥生時代の竪穴住居跡SI71もそこで検出されている。また貝殻の入っていた甕が検出された遺構(貝殻出土遺構)は、報告書Vで紹介した「石囲い遺構」とよく似ており、時おり単独に検出される土器についても十分な注意が払われねばならない事を示す教訓といえよう。その意味で、今回遺物鑑定により多様の動物遺骨が認められたにもかかわらず遺構との関連を把握できない事は残念であった。

これら以外の大きな遺構については節をあらためて紹介する。

## 第7節 南側の遺構群

### 1. 10B S D03・05・06 (挿図287, 図版56)

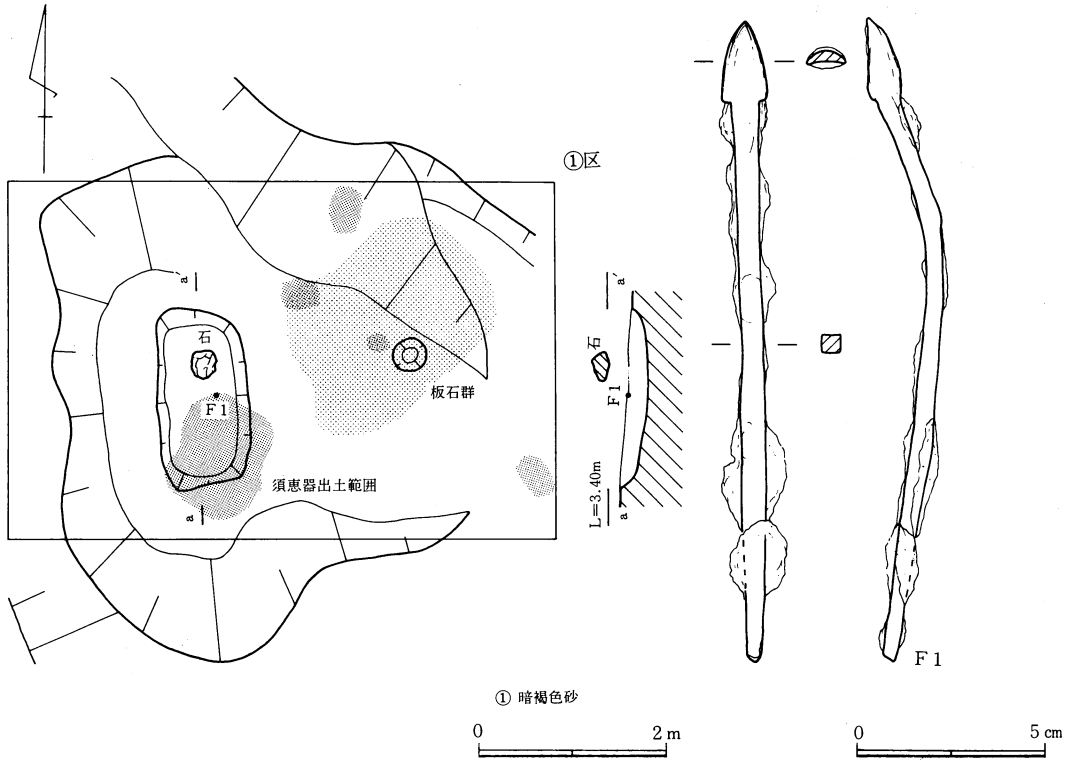
11B—10B地区から10A地区にかけて円弧状をなす溝を検出した。切り合い関係は明瞭で、S B06→05→03の順に新しい。これらの溝の描く円の中心部は白砂の地山が露出しており遺構は確認できなかった。もっとも古いS D06の埋砂は下層が黒褐色砂で上層が灰白色砂である。それより新しいS D05からはP<sub>0</sub>1～3が出土しているので古墳時代前期～中期の遺構であろう。その時期の遺構には白砂が埋まった例はないので、既にその当時地山が露出し、それが自然もしくは人為的に埋まった(埋められた)ものと思われる。S D03は上面に粘土が厚く広がっていたが、溝自体は古墳時代中期に作られたものとする。同心円状にめぐっている理由は不明だが、時期差はそれほどなく11B S K01に先行すると考える。



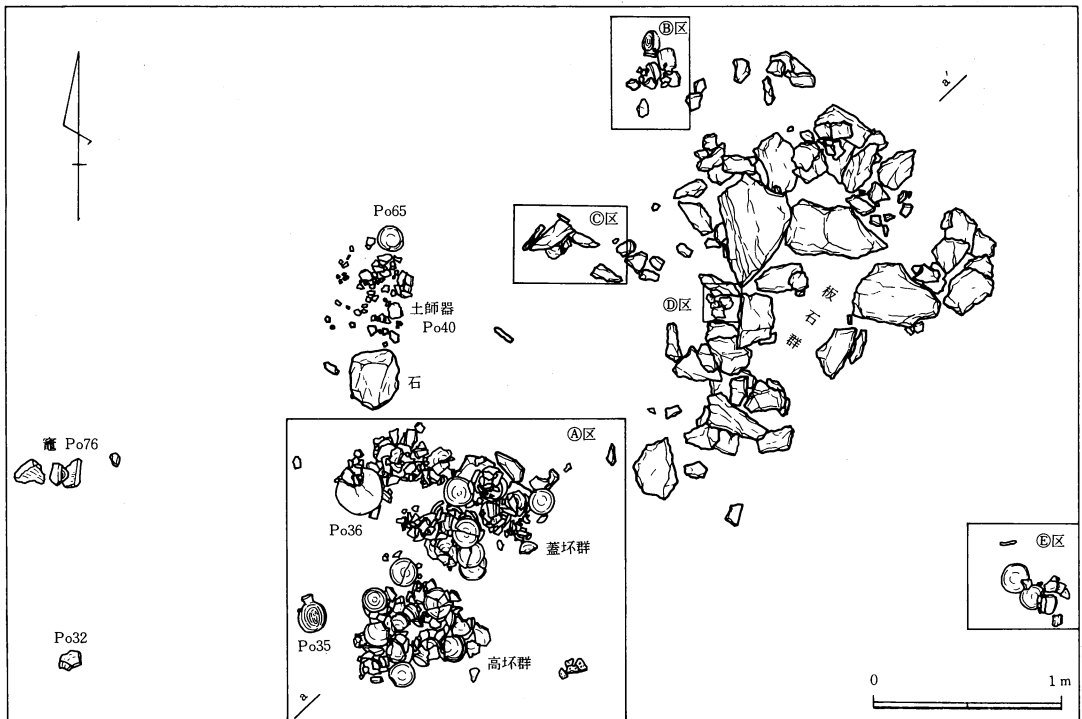
挿図287 10B S D03・05・06遺物図 (S=1/4)

### 2. 11B S K01 (挿図288～294, 図版55・61～64)

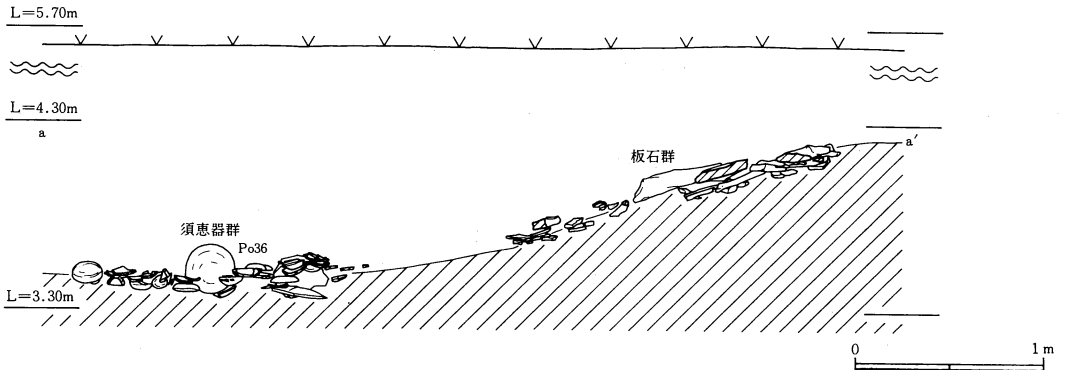
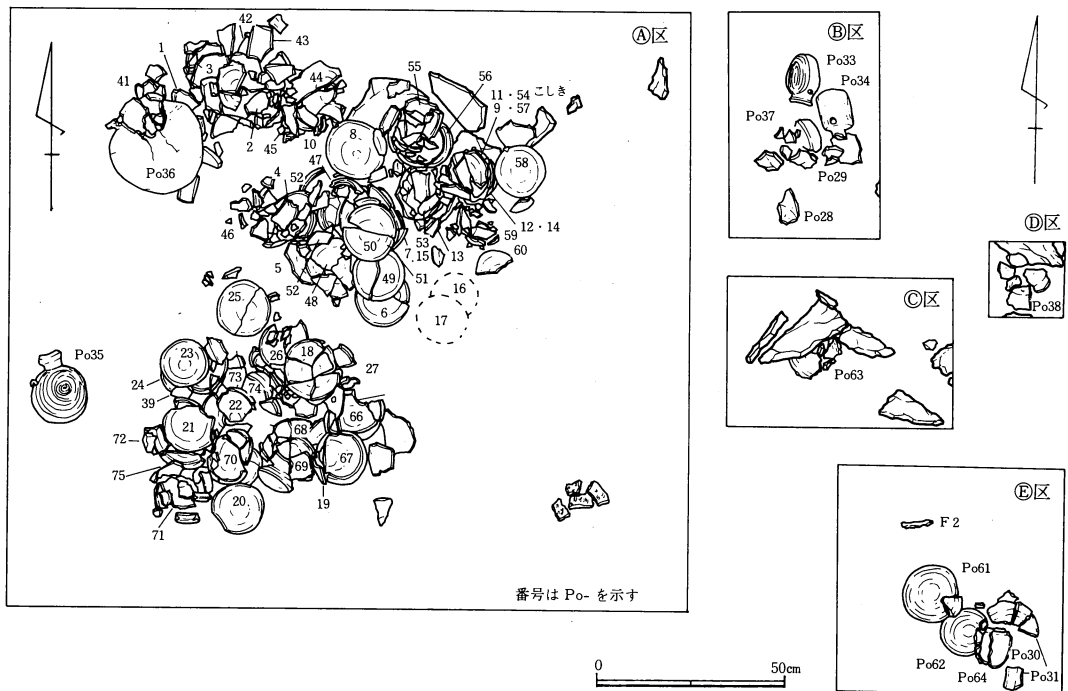
10B S D03～06の西北端で厚い粘土の堆積が認められた。トレンチにより断面を観察した結果、S D03～06のうちS D05・06についてはこの粘土層より下層である事を確認した。06→05→11B S K01の順である。11B S K01は全体に粘土層が埋っており、この粘土を取り除いたところ南北540、東西260cm程度の大きな方形に近い土坑である事が分かった。この土坑の西側の斜面から竈・須恵器が、最下層で大量の須恵器が密集して出土した。北東からの傾斜面には板石が連なっていた。須恵器の器種は蓋坏、有蓋高坏、甕、椀、提瓶、不明土製品(壺か?)である。ほとんどが完形で欠損がないか、もしくはそれに近い状態で出土しており、1点を除いて完形に復元できた。その他に土師器甕1個(P<sub>0</sub>40)、竈(P<sub>0</sub>76)や鉄製品3個(F1～3)がある。須恵器の個体数は74個(P<sub>0</sub>1～39, 41～75)



挿図288 11B SK01須恵器群及びSK02 (左)遺構図(S=1/80), (右)遺物図その1 (S=1/2)



挿図289 11B SK01内須恵器出土状況拡大図 (S=1/40)



挿図290 11B SK01須恵器群出土状況拡大図 (S=1/20), 断面図 (S=1/40)

で器種別の個体数は蓋環かもしくは高環の蓋32個 (P<sub>0</sub>1~32), 蓋環の身25個 (P<sub>0</sub>41~65, 76), 有蓋高環9個 (P<sub>0</sub>66~74), 甕1個 (P<sub>0</sub>36), 椀2個 (P<sub>0</sub>37~38), 提瓶3個 (P<sub>0</sub>33~35), 不明1個 (P<sub>0</sub>39)である。個体数は確実なものとする(挿図291~294)

当初は、北東から底部中心にかけてかなりの量の板石が流れ込む状況で連なっている事、粘土層の比較的上層付近から他に須恵器甕の破片が出土している事、板石の中からも須恵器やこしき甑片が出土している事から、全体として流入したものか、と考えた。

しかし図290で示したように遺物の出土状況はかなりまとまりがある。大きく①—⑤区に分かれ、これ以外の出土遺物は西側の斜面ぎわに近いところから出た甕 (P<sub>0</sub>76) や、やや上層の須恵器片だけである。①区は南北に分かれるようで、一部とり上げてしまった個体

があつて連続性はいまひとつ確かではないが、おおよそ南北に分かれ、間隔をもっていたものと思う。有蓋高坏9個は南の一群に集中しており(P<sub>0</sub>66~75)、北では全く破片も出土していない。高坏はいずれも透しをもたず、脚部に著しい稜をもつものである。南の高坏群の中から蓋が10個(P<sub>0</sub>18~27)出ており、有蓋高坏の蓋としてセットになるものと考えられる。1点蓋の方が多い点疑問が残るが、全体としても蓋と身の数は32個と25個で合わない事を考え合わせると無視してよいかもしれない。北からは蓋坏のみが出土している。きわめて多量に重なっており、一部では4点以上が被<sup>かぶ</sup>さっていた部分もあり、十分に図化できなかった。セット関係もよく分からなかったが、一部P<sub>0</sub>10と47、P<sub>0</sub>15と53は出土位置、形状からセットと考えてまちがいないと思う。この④区の状況は高坏と蓋坏との分布がはっきり分かれており、蓋坏の蓋と考える個体は高坏の蓋と考える個体と若干形状が異なるから、これも分かれると思われる。従つてこれらは流入し堆積したものでなくほほ原位置を保っているものとするに至った。これらの北では土師器P<sub>0</sub>40、須恵器P<sub>0</sub>65が出ている。

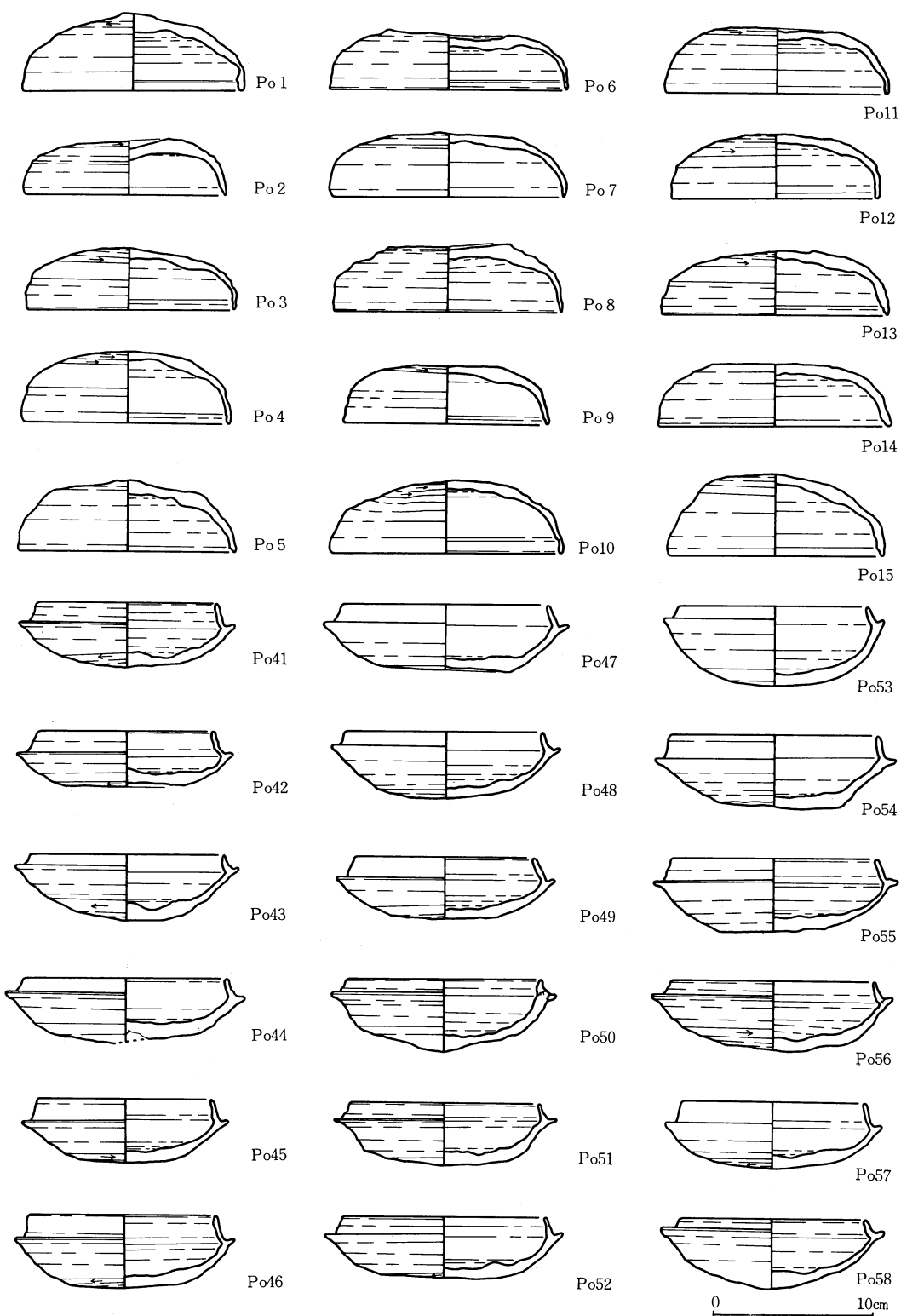
⑤区では蓋坏2点(P<sub>0</sub>28・29)と椀1点(P<sub>0</sub>37)の他ミニチュアの提瓶2点(P<sub>0</sub>33・34)が出ている。この中で小提瓶は吊り手が乳頭状で、P<sub>0</sub>35よりは新しい要素をもつが、蓋坏P<sub>0</sub>28・29は④区のものともあまり時期差はない。③区では板石の下から蓋坏P<sub>0</sub>63が出土した。

⑥区では板石にまぎつて椀P<sub>0</sub>38が、⑦区では蓋坏P<sub>0</sub>30・31・61・62・64、銚<sup>もり</sup>状の鉄製品F2が出土している。板石の中にまぎつて甑片が出ているが、破片で図化できなかった。形状は他の甑と同様で大形のものである。この甑形土器の時期は5世紀前葉を下らないものと今のところ考えており、これらの須恵器と時期的に大きく差がある事になる。下層のS D05から甑が出土しているので、これが混入したものとする。

竈はこの遺構の西側の54年度調査地区や緊急調査地区で破片が数点出土していたが、(報告書II、P<sub>0</sub>143~144、P34)全体を復元できたものはこれが初めてである。(東側の9B地区でももう1個体出土している。)この竈は、これらの須恵器と並行する時期と考えても問題ないだろう。故に甑とのセット関係を考えることは、この例についてはなかなか困難である。しかし全体に遺物間のつながりが強いと思われるので分からない。

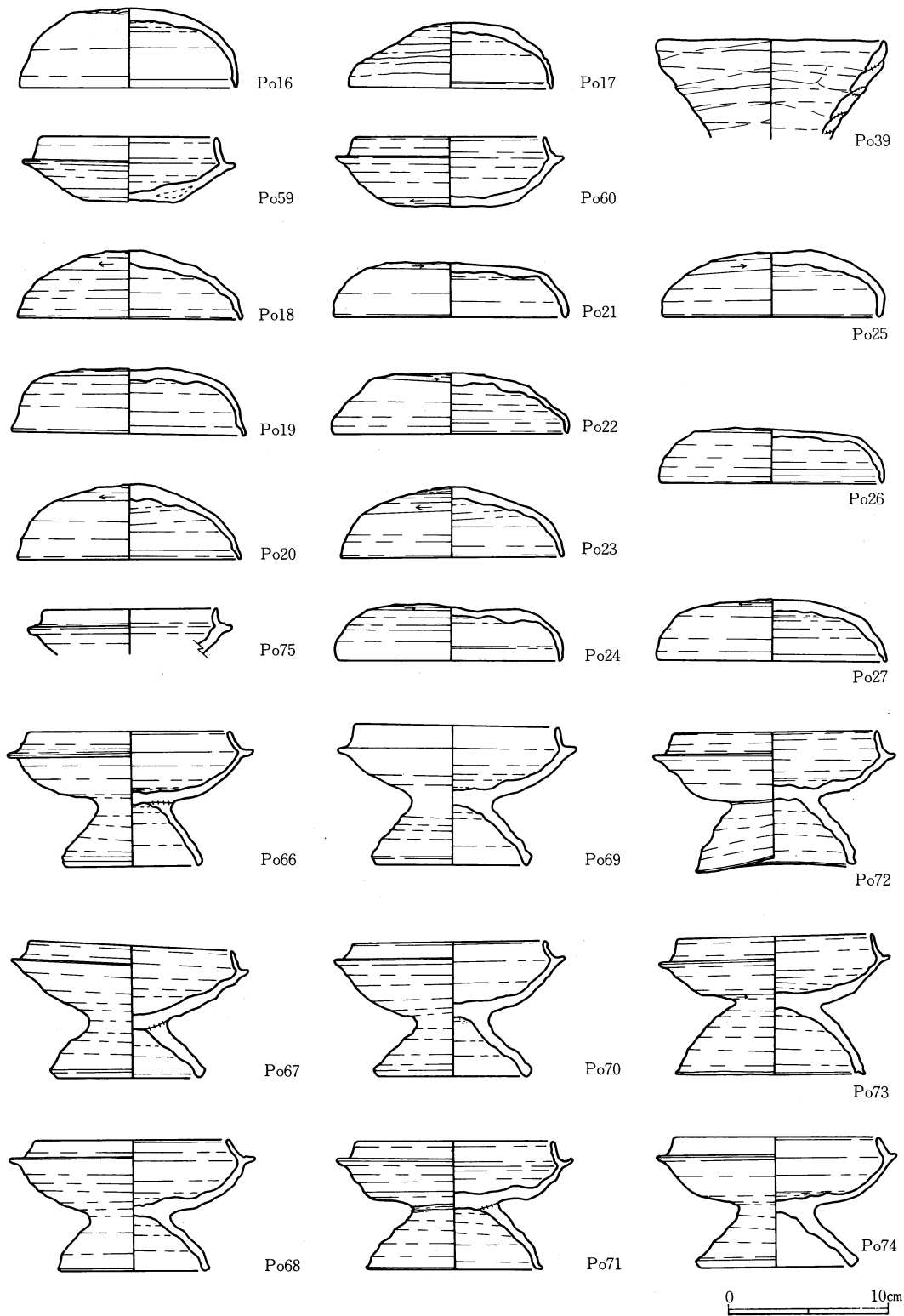
須恵器の時期は6世紀後半(陶邑II-5)であるとする。土師器P<sub>0</sub>40も復元できなかったが完形に近いもので、おそらく1個体が須恵器群と伴つて置かれていたものとする。須恵器、竈、土師器のセット関係と考える。

これらの須恵器をとりあげたところ、鉄製品F1(ヤリガンナ)を検出した。その下から方形の土坑が検出された。規模は長軸190cm、短軸100cm、深さ20cmで軸方向N-0°-Eとほぼ南北である。埋葬施設の可能性もある。遺物は検出できなかった。埋葬施設と考えればF1は副葬品と考えてよいだろう。

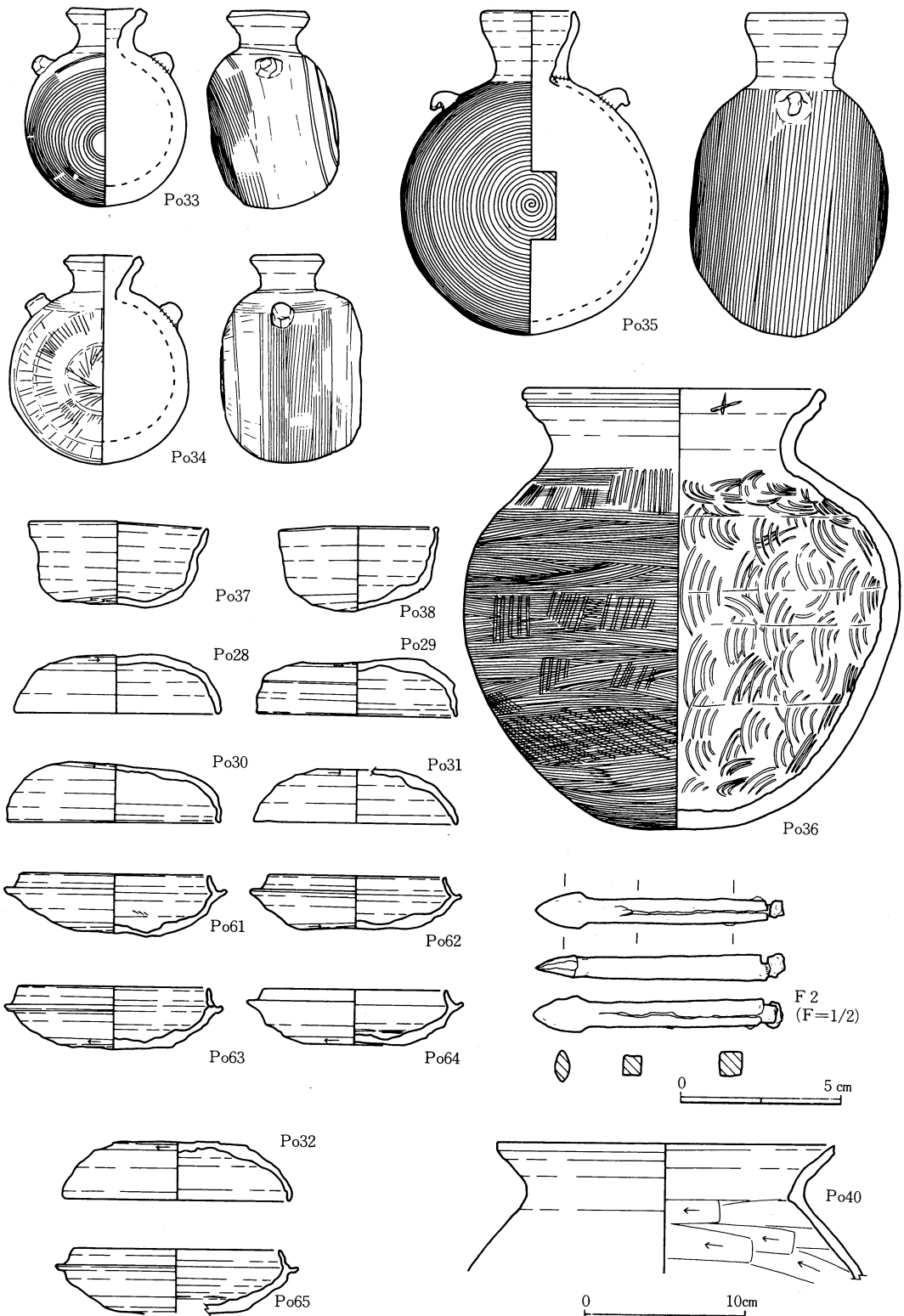


挿図291 11B SK01遺物図その2 (S=1/4)

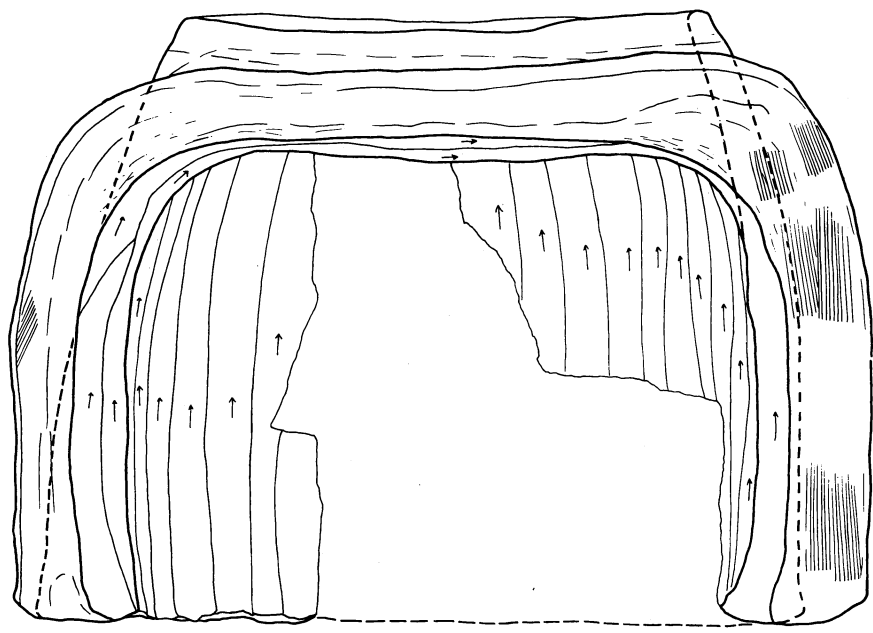




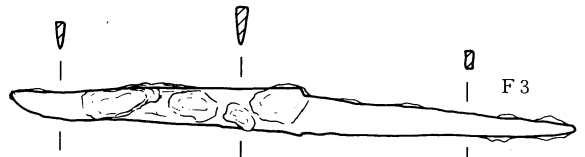
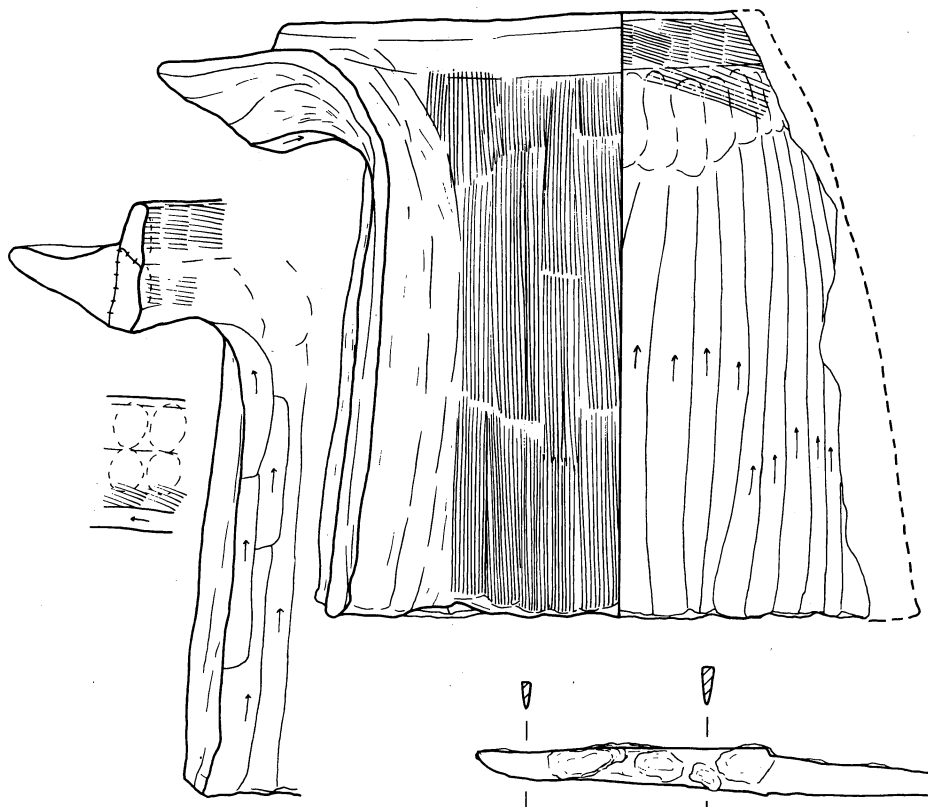
挿図292 11B SK01遺物図その3 (S=1/4)



挿図293 11B SK 01遺物図その4 (土器S=1/4・鉄製品S=1/2)



Po76



0 10cm

0 5cm

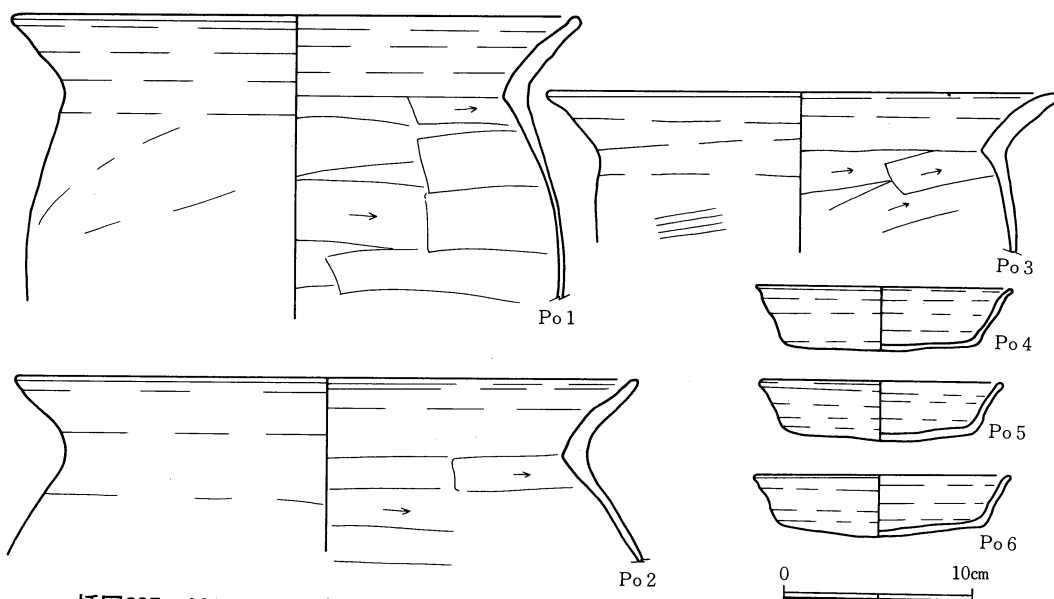
挿図294 11B SK 01遺物図その5 (かまどS=1/4・鉄製品S=1/2)

この土坑は須恵器検出面以上は全て粘土もしくは粘土質の砂で、下は若干褐色砂をもつもののすぐ地山であった。北西には黒褐色砂の長い落ち込みがあり、11BSK01とのつながりはよく分からなかったが、層的に考えてSD03が北西まで延びているものと判断する。北東側のピットを検出している部分はかなり平坦で、このSD05がすぐ北で古墳時代の住居跡SI168を切っている事から、これらのピットはそれに伴うものの可能性がある。これらの状況から見て、11BSK01は南から弧状に延びるSD03を切って深く掘り込まれた土坑であると判断する。その底部に埋葬施設状の土坑があり、須恵器がその上部に置かれ、すぐ粘土が埋まっているという状況である。板石は流入したものか意図的に置かれたものか分からない。これを埋葬施設と考えるとその埋土である粘土は人為的に置かれたものになる。10BSD03埋没後、11BSK01が作られ粘土が堆積したものと考える。粘土のこのような堆積が人為的なものか自然によるものか判断しかねる。埋葬施設的な遺構と考えるなら、埋め戻しがなされたと考えるべきだろうし、その際、粘土を埋め戻したとも考えられる。しかし、その粘土の広がり、この地域全体に広がるものであることから、人為的なものとは考えがたいと思われる。

以下でのべるように、この11BSK01や粘土層の広がりの上層にあたる他の遺構との関係からこの粘土層の広がり下限は8～9世紀と考えられ、11BSK01自体が作られたのも、出土した須恵器の時期以降で6世紀後半以降で8～9世紀までと考える。

10BSD02・SK03・土壘下層面 (挿図295～302, 図版57・64～66)

前項で述べたように、10BSD03の上層はかなり広く粘土層が広がっていた。10BSD02はその粘土層のとぎれたところで検出された。層位的には粘土層より下層にあたるかと考

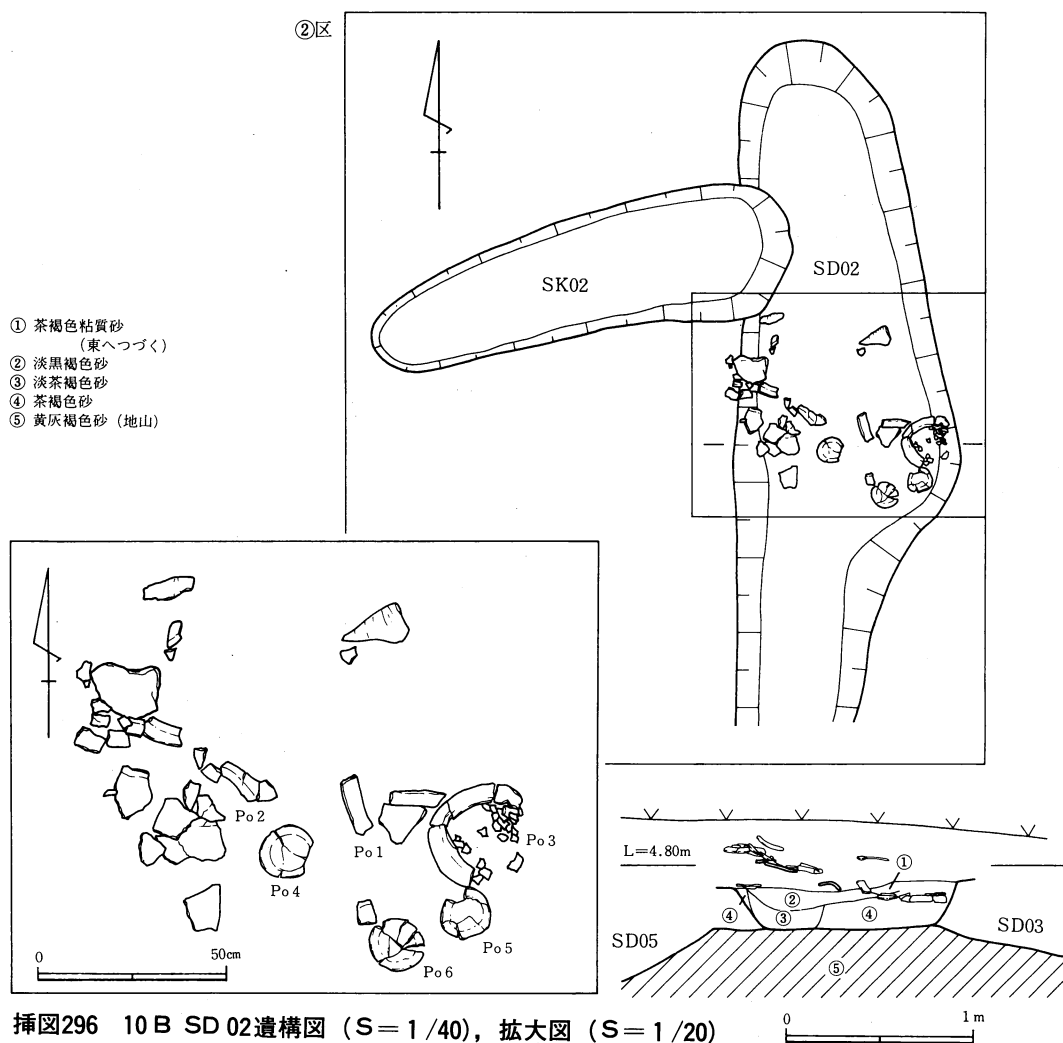


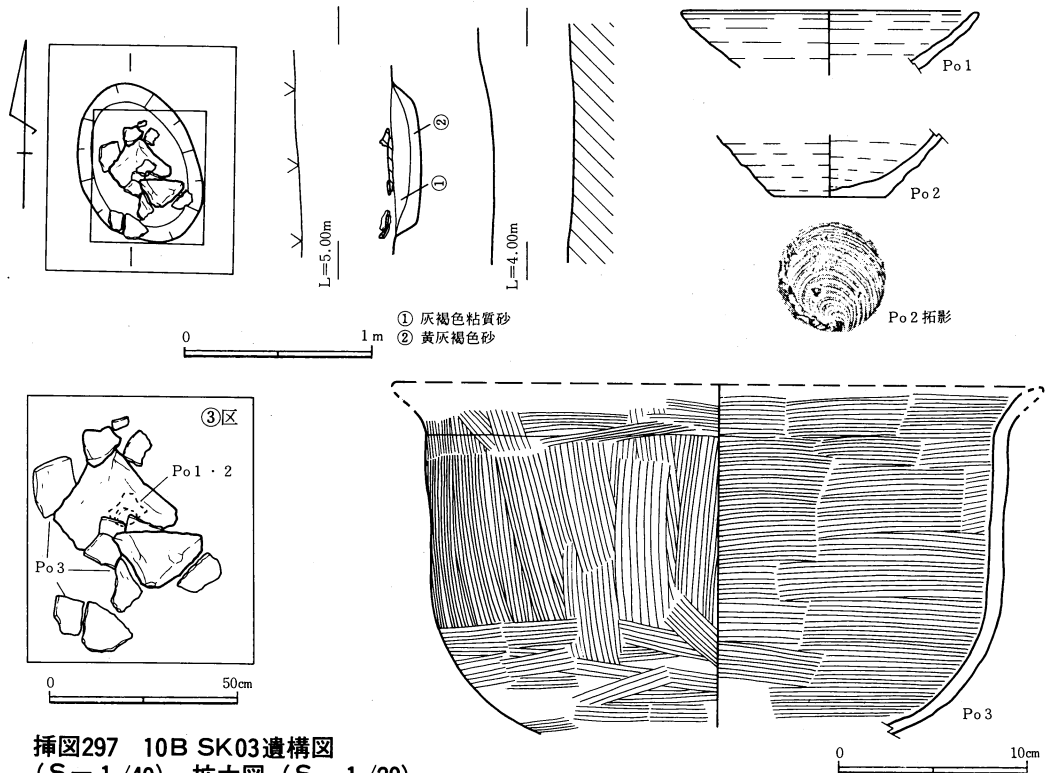
挿図295 10BSD02遺物図 (S=1/4)

えられる。SD02は幅100cm、長さ350cmありSD03とほぼ平行して南北に延びる溝で、北でやや溝状の土坑SK02に切られている。椀P<sub>0</sub>1～3や甕P<sub>0</sub>4～6が集中して出土した。8世紀前後の遺物と考える。

これに対して10BSK03は粘土層の上層で検出された長軸87cmの浅い土壇である。土壇内から板石、その下から坏P<sub>0</sub>1・2（同一個体か？）と土師器甕P<sub>0</sub>3が検出された。（挿図298）P<sub>0</sub>2は糸切りをもつ事から10世紀以降の土器だろう。

また、この粘土面上面では多量の鉄製品・土師器（挿図299～301）やSB37が検出された。海拔460cm前後に広がる粘土面は、土墨状遺構上面（黒砂地表面）から約1m下である。鉄製品は鉄斧F6～9、鉄製紡錘車F1～3、円板形鉄製品F4～5、鎌F11～13、不明鉄製品F10以下（F17は鋸？、F22は釣針？、他は釘・鉄鏃他か）である。同じ面で帯金具B1の他、土師器も多く出土し、その内にはSB37の柱穴内から出土したのと同様な墨書





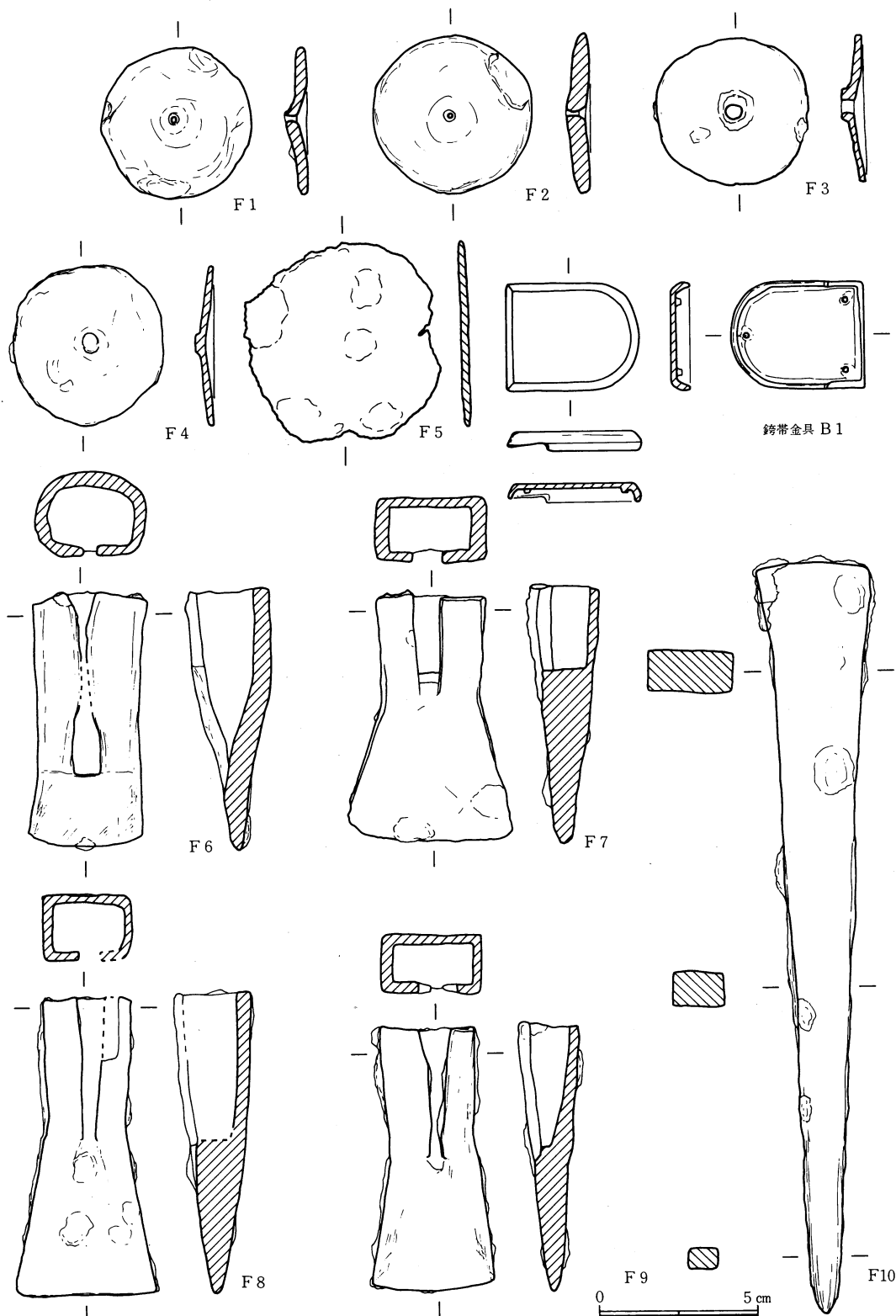
挿図297 10B SK03遺構図  
(S = 1/40), 拡大図 (S = 1/20)

挿図298 10B SK03遺物図 (S = 1/4)

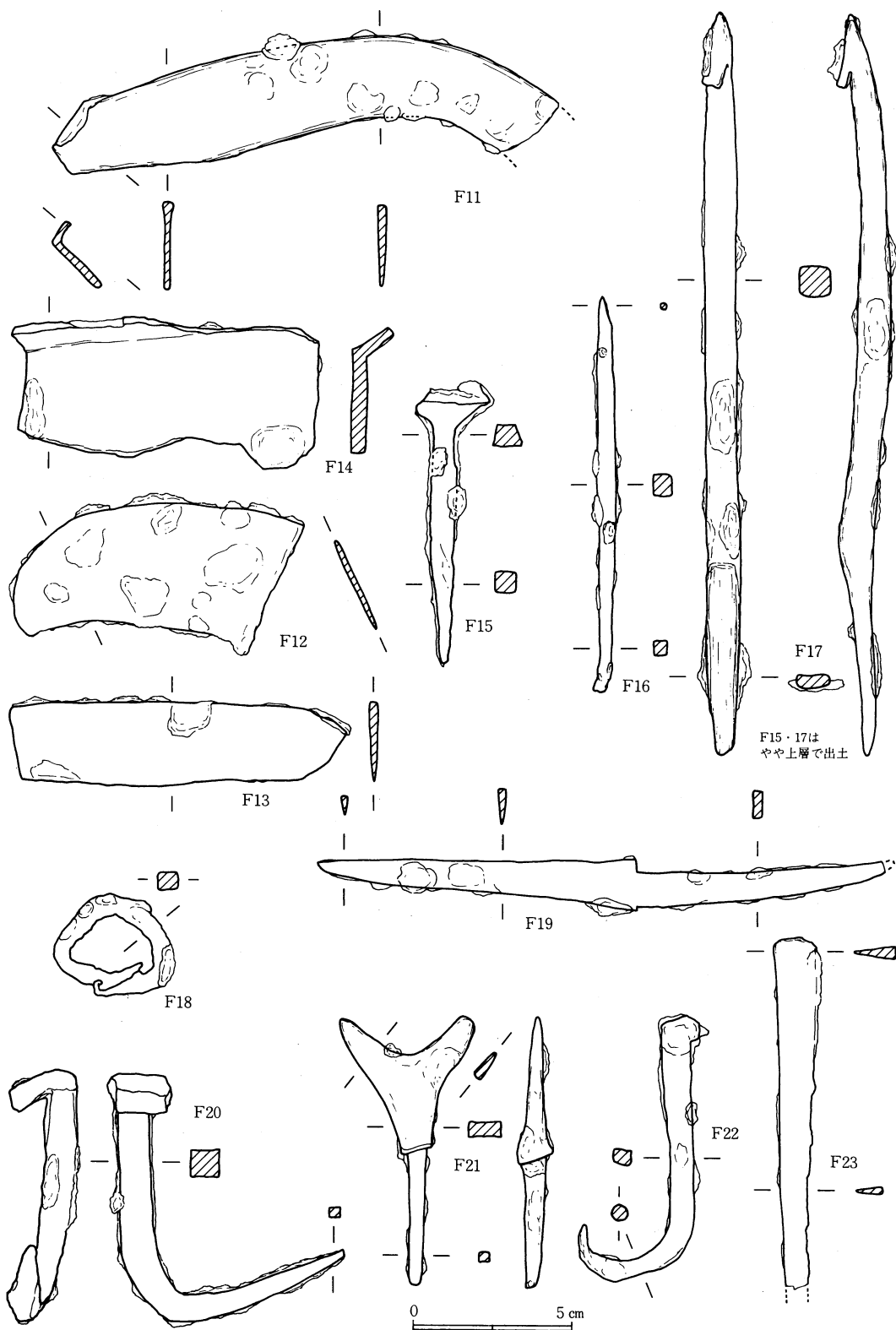
土器がみられた。黒色土器P<sub>0</sub>10~12は内面のみが黒色化したものである。高坏は一点のみ(P<sub>0</sub>13)認められた。

これらの土師器はS B37やその北で検出されたS B41, その周辺の土師器を含むピット群の出土遺物と比べると<sup>註1</sup>, 全体的に8世紀後半から10世紀前後に及ぶとは思われるが, ほぼ並行するものと言えよう。挿図301のP<sub>0</sub>14は底部に断続的なヘラ切り痕をもつ。また墨書土器のうちP<sub>0</sub>24・25はほぼ一周するヘラ切り, P<sub>0</sub>26~28はナデ調整が施されている。その他に底部に丸味をもつタイプの坏もみられる。P<sub>0</sub>6は10DP1のP<sub>0</sub>3や10DP21のP<sub>0</sub>1(挿図282参照)とほぼ同様で, ヨコナデによって器壁に稜が比較的是っきりみられる。挿図301のP<sub>0</sub>19~23も10DP1のP<sub>0</sub>1・2の坏と大差なく同時期と思われる。P<sub>0</sub>22は最も小型で口径10cmを測る。P<sub>0</sub>29は高台の比較的高い坏だが, 11DP25のP<sub>0</sub>1と比べると若干古いものと思われる。<sup>註2</sup>これらに比べると, SK03の遺物や他の同じように浅い土坑内で出土した鉢形土器P<sub>0</sub>3は, より新しい時期のものと思われる。このような糸切り痕をもつ坏類やその他の土器類もやや上層で多数出土したが, 今回図化して紹介するに至らなかった。

このように見ると, S B37検出面(粘土層上面・土塁下層面)には柱穴内出土の土器とほぼ同時期の土器が面的に広がっており, 鉄製品もその時期のものと考えうる。8世紀末~9世紀前半代と考えてよいだろう。銚帯金具の時期とも一致すると思われる。それ以降の

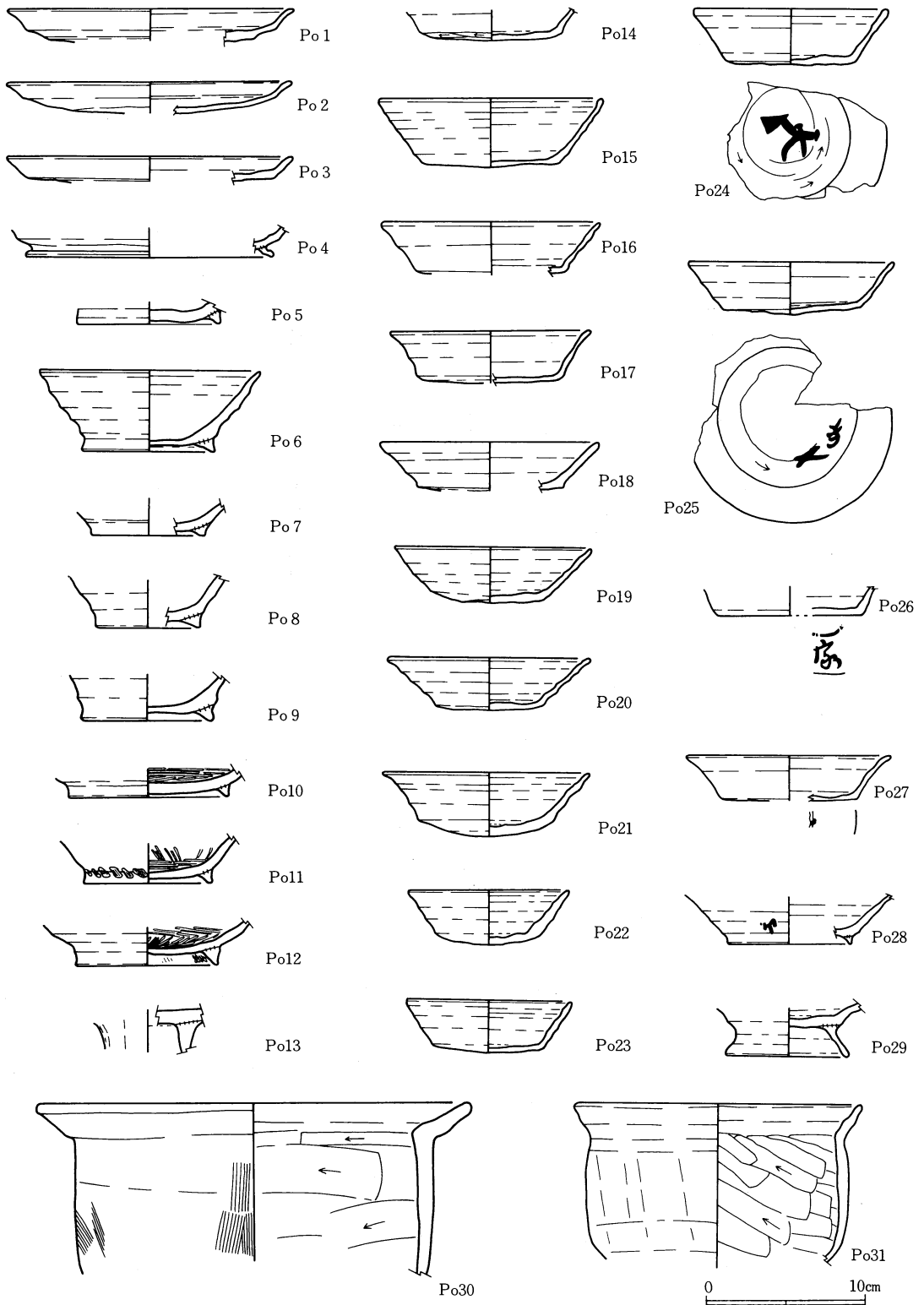


挿図299 土壘下層遺物図その1 (S=1/2)

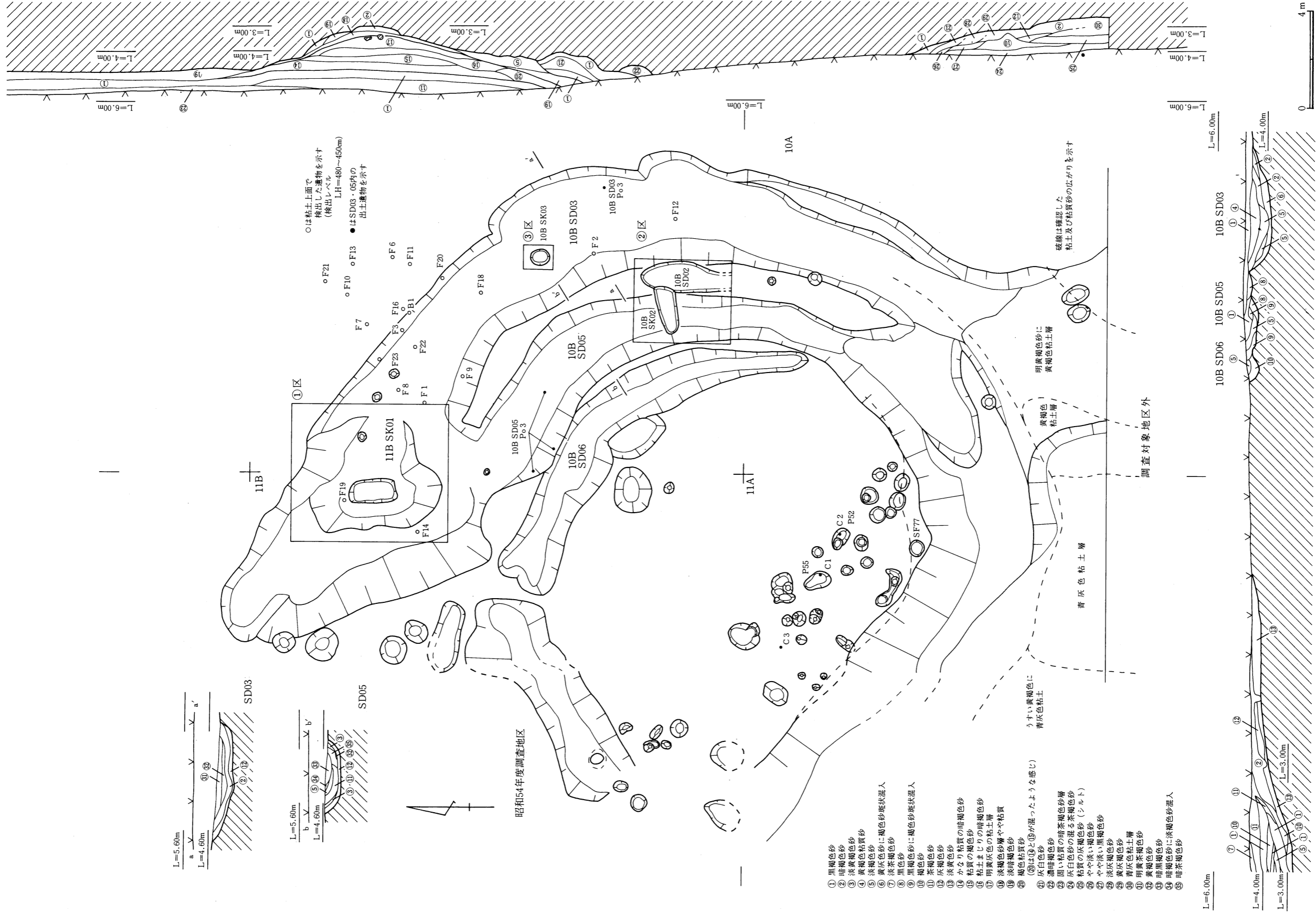


挿図300 土壘下層遺物図その2 (S=1/2)





挿図301 土壘下層遺物図その3 (S=1/4)



- ① 黒褐色砂
- ② 暗褐色砂
- ③ 淡黄褐色砂
- ④ 黄褐色粘質砂
- ⑤ 淡褐色砂に褐色砂斑状混入
- ⑥ 淡茶褐色砂
- ⑦ 黒色砂
- ⑧ 黒褐色砂に褐色砂斑状混入
- ⑨ 茶褐色砂
- ⑩ 褐色砂
- ⑪ 灰褐色砂
- ⑫ 灰黄色砂
- ⑬ かなり粘質の暗褐色砂
- ⑭ 粘質の褐色砂
- ⑮ 粘土まじりの暗褐色砂
- ⑯ 明黄褐色の粘土層
- ⑰ 淡黄褐色の粘質
- ⑱ 淡暗褐色砂
- ⑲ 褐色粘質砂 (⑲は⑬と⑮が混ったような感じ)
- ⑳ 灰白色砂
- ㉑ 暗褐色砂
- ㉒ 暗褐色の暗茶褐色砂層
- ㉓ 灰白色砂の混る茶褐色砂
- ㉔ 粘質の灰褐色砂 (シルト)
- ㉕ やや淡い褐色砂
- ㉖ やや淡い黒褐色砂
- ㉗ 淡灰褐色砂
- ㉘ 黄灰褐色砂
- ㉙ 青灰色粘土層
- ㉚ 明黄褐色砂
- ㉛ 黄褐色砂
- ㉜ 暗褐色砂
- ㉝ 暗褐色砂に淡褐色砂混入
- ㉞ 暗茶褐色砂

挿図302 南側遺構群遺構図 (S=1/160)

黒砂の形成に従って上層からS K03やその他の遺構が設けられているものとする。火葬墓S F76の遺物もそれらの時期と考えたい。<sup>註4</sup>

注1 S B37については本編P98~102, S B41については同P102~104, 土師土器を含むピット群については同P199を参照。

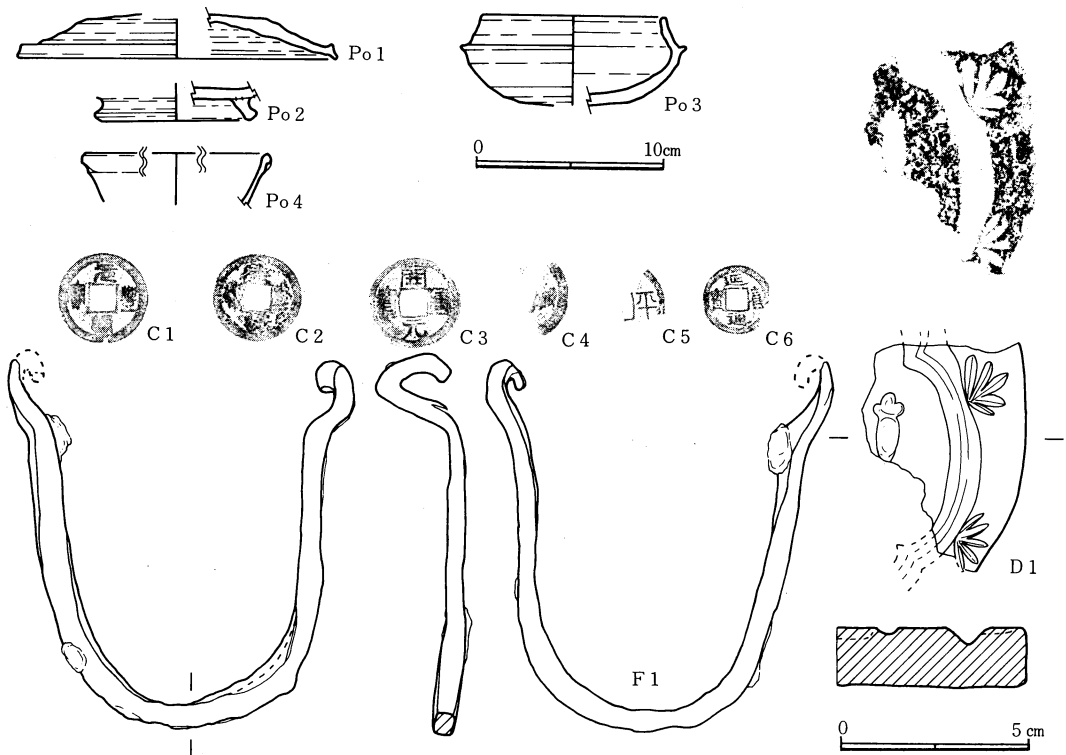
注2 平安末~鎌倉時代ごろと思われる。

注3 報告書IV, 鍔帯金具P200参照

注4 墨書土器の3点についてはP170・171, 挿図242で図示した。

### 11A地区粘土層 (挿図303, 図版66)

10B S D03・05・06は弧状に湾曲して南の10A・11A地区を囲む。この地区でも全体に粘土の広がりが見られた。厳密には黄褐色気味の粘質砂である。この粘質砂面上に掘り込まれたピットもいくつかあった。11A地区南西端はこの粘質砂の下に青灰色の粘土が深く堆積していた。最も深い所で海拔170cm高まで下った。この西側でもほぼ同じレベルまで青灰色の粘土層が広がっており、その東延長線上にあたる。この粘土層は、この地区の西南端でしか検出されず、他の地域ではみられなかった従ってここを東端として南に広がっているか、少なくとも大きく南東に曲がっていると考えられる。粘土面からは須恵器片が多数出土しており、古墳時代以降~10世紀代に至る時期に形成された面と思われる。



挿図303 11A粘土層及びその周辺の遺物図 (土器S=1/4, 鉄・その他S=1/2)

### その他の遺構（挿図303，図版66）

粘土面の北側では多数のピットが検出された。S F77より北は平坦で、地山の白砂が露出しており、黒褐色砂はFライン以南では見られなかった。S F77より南は急に地山が落ち込み粘土が堆積していた。これらのピット群からは須恵器片が数個のピットで出土した他、P52・P55からは古銭（C1，2）が出土した。Aラインの東端でも、やはりいくつかのピット・溝を検出したが、同じく須恵器他の遺物を含む他に、皇朝十二銭の延喜通宝（C6，初鑄907年）・隆平永宝？（C5，初鑄796年）が出土している。平安時代～中世に至る時期にこの地域で何らかの土地利用がなされたものと考えてよいだろう。

### 小結

この地域は土壘状遺構の南に連なる部分であるが、黒砂等高線図（付図1）で示されるように、10ライン付近で北と南に大きく分けられると考えられる。10ライン付近は白砂が露出しており地山の白砂層がこの地点を中心として北と南に傾斜しているのが分かる（Aラインやや北寄り）。南側（Aライン以南）はゆっくり傾斜しているが、全体に埋砂は褐色の砂で北側に見られるような黒褐色ではない。

Aラインより北側は地山が北にむかって傾斜している。つまりより広い範囲でみると、8号墳から24号墳にかけては北東に、24号墳からは南東にかけて小高い地山が続いていてちょうど土壘状遺構のある部分だけが地山がぐっと低まっているのである。というより北西から南東にかけてなだらかに傾斜している平坦地の中に、Aライン付近に小高い盛り上がりがあり、さらにまた南に傾斜しているものと考えられるかもしれない。この地山の起伏は、より広くみれば2号墳西から南東に続くかなり高い地山の盛り上がりの続きであるから、黒砂層下の旧砂丘そのものにもかなりの起伏が複雑にあった事を示すものであろう。

このような状況下で、長瀬高浜の地における土地利用が少なくとも中世に至るまで続いた事は、この地区の調査でより明確となったと思われる。面的・層的に限定を加えて層として細かく把握して考える事は従来黒砂層内では困難であったが、この粘土面の存在によって、その下の6～7世紀以前の面と、それ以降8世紀後半～9世紀代の面を層的にとらえる事ができたのは大きな成果であったと考える。

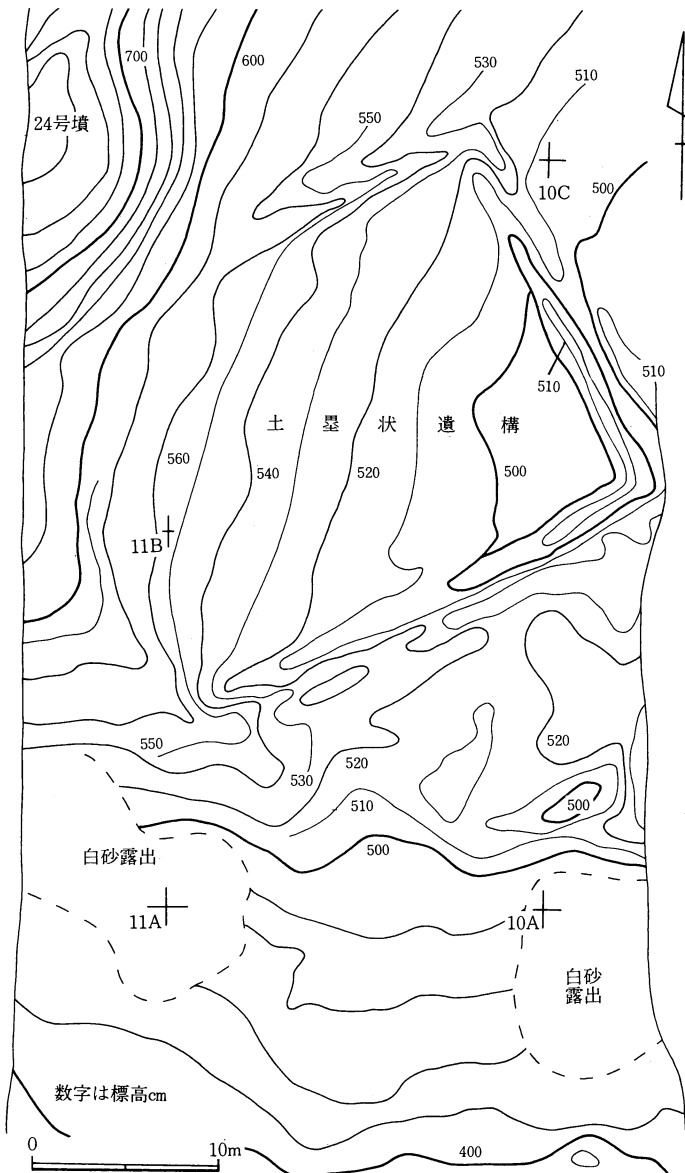
黒砂層の形成と終了の時期を把握するための1つの材料となるだろう。

第8節 土壘状遺構 (挿図304~307, 図版57・66・67)

今年度調査地区の南側10B地区周辺で検出した。黒砂層上層に堆積した灰白色砂(白砂)を除去した時点で、黒砂地表面に「コ」の字状の高まりを確認した。西側ではその高まりは明瞭でなく、主に東側で確認した。(挿図304参照) 軸方向をN-62°-Eとするおそらく方形をなす土壘であったものと考え。土壘最高部間の距離は南北25.5m, 東西推定30m・土壘の高さ20cm, 幅150cmである。地表面で高まりの内側が溝状にわずかに窪んでおり、窪みの最下面から高まりの最高点までの比高差は30cmであった。

トレンチによって断面を観察したところ、全体に西から東に緩やかに層がほぼ平行して

走っており、その上層部分に溝を浅く掘り、土を盛って作られたものと考え。溝の深さは30cm, 外側も高まりに沿ってわずかに窪んでいた。西側は全体に傾斜角1.5°(25cm/100m)で高まっており、東端の土壘検出地点との比高差は70cmある。南北面もほぼ同様に北から南に緩やかに傾斜している。西側では土壘状の高まりを検出できなかったが、等高線では全体に矩形をなしているのがうかがわれる。また一部で南側に高まりが延びていたので、さらに範囲を広げて黒砂地表面の起状の観察を行った結果、挿図304に示したように土壘状の高まりが続いていると思われた。東側は調査対象区外であり、また西側は既に調査を終了した地区であったので、全体としてこの遺構を確認する事はできなかった。西側・北側は自然の高まりを利用し、低い方(東側)に土壘を設けているも



挿図304 土壘状遺構検出状況図 (S = 1/400)

のだろう。「コ」の字状を中心として周辺に何らかの形で広がる遺構であると考え。西北で24号墳を一部削っている可能性もある。

上面から約30cm掘りさげた所、釘などのきわめて多数の鉄製品（F 1～52）の他、数としては少ないが陶磁器（P<sub>0</sub>1～2）、天目茶碗（P<sub>0</sub>3～5）、白磁（P<sub>0</sub>6）、青磁（P<sub>0</sub>7～8）、灰釉陶器（P<sub>0</sub>9・10）、火鉢（P<sub>0</sub>11）、すり鉢（P<sub>0</sub>12～13）、黒色土器（P<sub>0</sub>15）、須恵器（P<sub>0</sub>14）土師質土器（P<sub>0</sub>17～18）、土製品（P<sub>0</sub>13）、古銭（C 1～4）、土錘（D 1～5）他を検出した。鉄製品の多くは釘状のものである。火鉢、天目茶碗については西側の昭和54年度調査地区で検出したものと同一個体があった。（報告書III, pp172～8で南側斜面出土遺物として紹介したものである）遺物としてはBライン以南の地区はほぼ同様の遺物の出方を示している。遺物はやや南よりに集まる傾向があるが特に集中せず全体に広がっている。

土塁検出面には五輪塔石 S 82～88（PP 222～6, 挿図305参照）や石白 S'1 が散在しており、当初は墓域を画する遺構かと考えた。黒褐色砂表面の層を除去した時点で多数の浅いピットを検出した。深さは10cm程度で埋砂は粘質気味の砂である。各々から若干の須恵器片他を出土した他、溶骨らしいものを含むものも1・2あった。ピットに規則的配置もみられず建物跡とは考えられない。この面で中世墓 S X'31 を検出した。これは坐棺墓と思われるものである。S X'28・29・30は土塁状遺構面で検出しており、それを切っていると考えから、S X'31→土塁状遺構→S X'28～30の順と考える。ピットは人為的に掘られたというより黒褐色砂上面の凸凹に地表面に形成された固い砂（粘質度の強い）が堆積したものと考えたい。（黒砂地表面は他の地域でも全体に非常に固く褐色ぎみの砂でみられる。）五輪塔石の位置も中世墓と対応せず、明確に遺構の性格を示すものは確認できなかった。

土塁周辺でも同じく鉄（釘）や陶磁器が出土しており面的広がりをもつ。南側は地山が急に盛り上がっており、この土塁面は築造時に平坦に平<sup>なら</sup>された可能性もあるが、土塁面を除いた他の黒砂面はきわめてなだらかに続くので、もともと平坦であった土地を利用したものと考えられる。下層からは南側の溝から続く粘土層が土塁検出面から50cm以下で広がっており、その面は8～9世紀代の生活面と考えられる事から、それ以降から中世に至る間にさらに黒砂が堆積した後、最上面にこの土塁が設けられたものとする。

土塁内から検出した遺物には14・15世紀ごろと考えうる陶磁器があり（P<sub>0</sub>1～5）、この土塁状遺構の時期も15世紀以降に下りうるものとする。遺構の性格は判断しがたいが、埋葬や葬送に何らかの形で関連する施設もしくは領域であったと考えるべきだろう。

この土塁状遺構から現在の長瀬の集落までは、直線距離でわずかに100m余で、現在の状況からそのまま判断はできないが、当時その集落は既に存在していたと考えられ、これらの遺構とそれとを結びつけて考えることも可能であろうと思われる。



- ① 褐色粘質砂
- ② 黄褐色砂
- ③ 暗赤褐色砂
- ④ 淡黑褐色砂
- ⑤ 暗褐色砂
- ⑥ 黒褐色砂
- ⑦ 暗赤褐色砂
- ⑧ 淡褐色砂

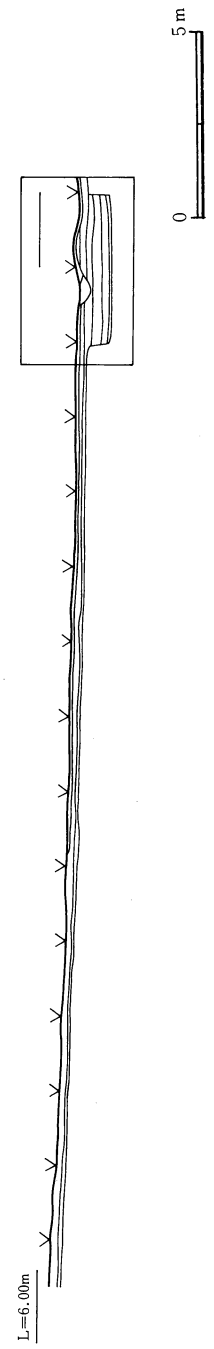
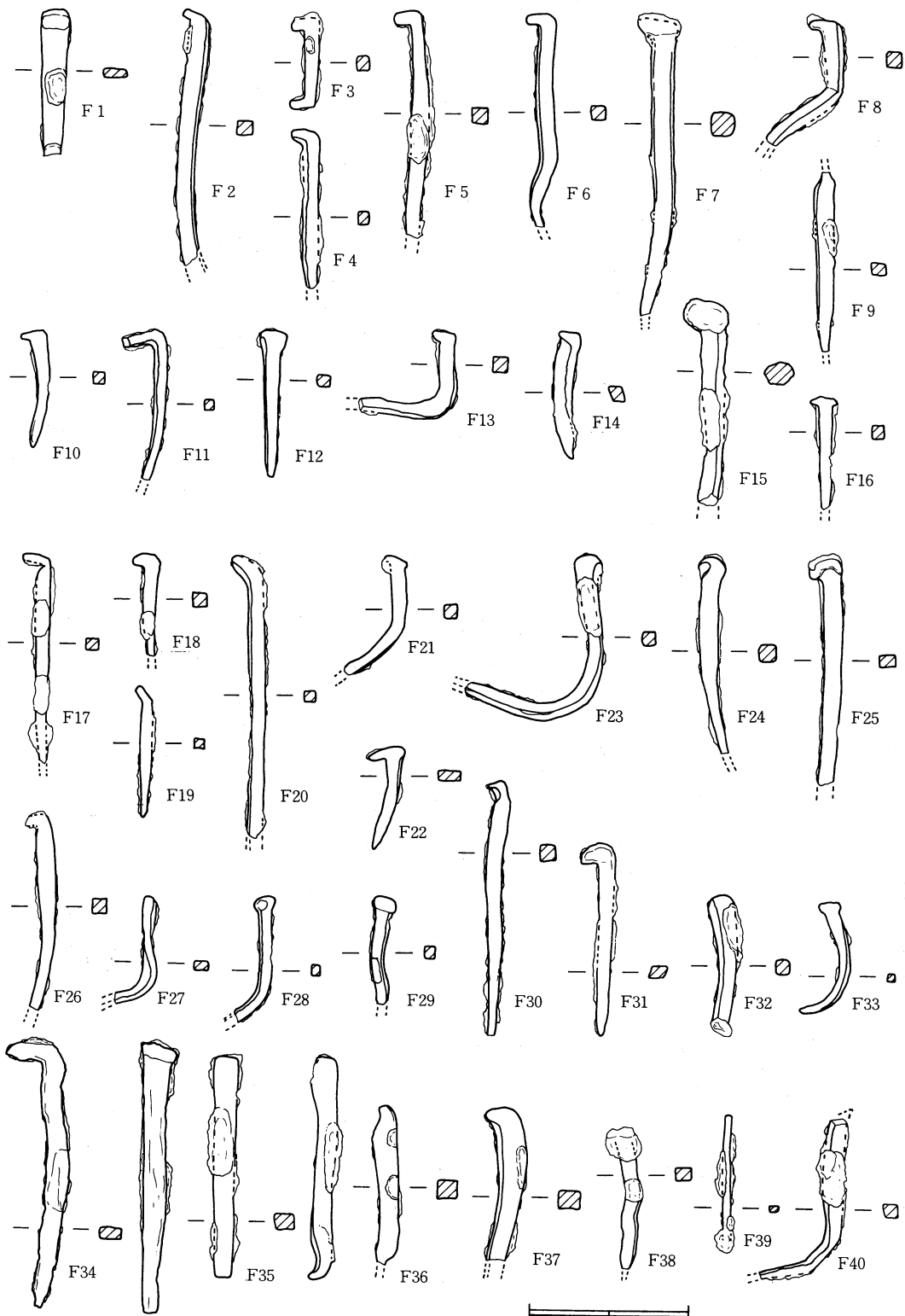
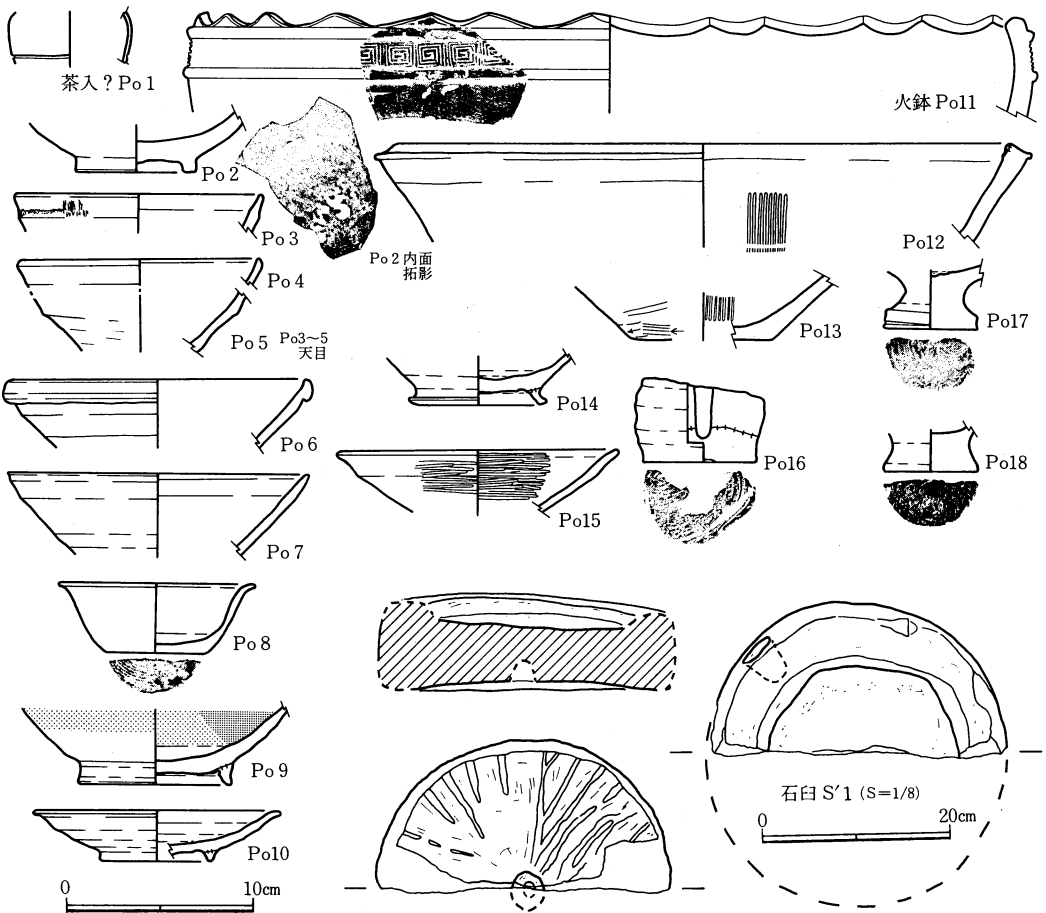
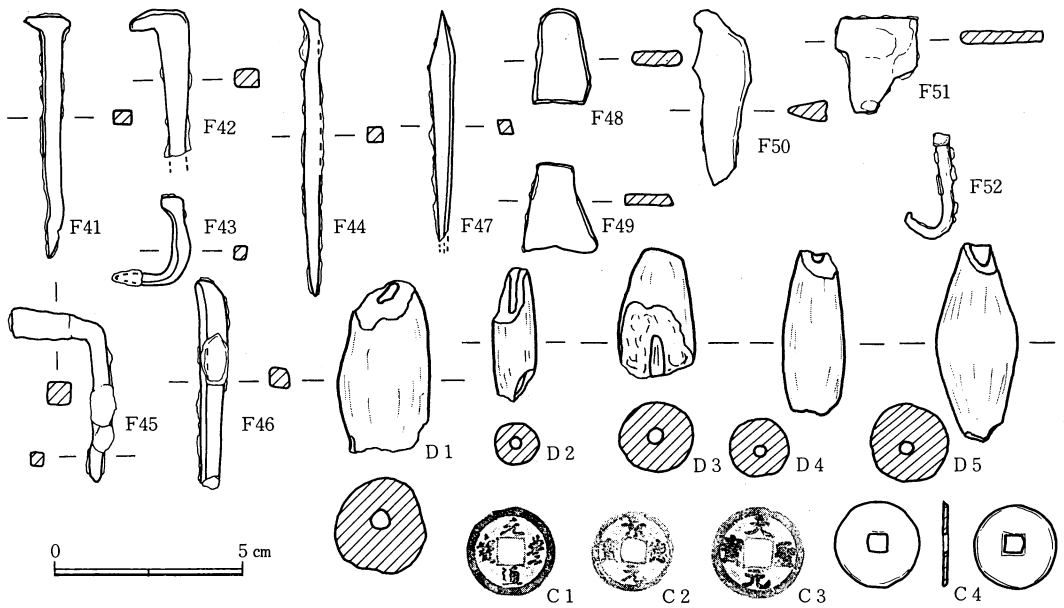


插图305 土壘状遺構遺構図 (S=1/200)



挿図306 土壘状遺構遺物図その1 (S=1/2)





挿図307 土壘状遺構遺物図その2 (鉄他S=1/2, 土器S=1/4, 石臼S=1/8)

## 第9節 L S D〔大型方形周溝状遺構〕（挿図308～318，図版58・59・67～70）

E～Gラインにおよぶ地区で、大型の方形にめぐる溝を検出した。大型方形周溝状遺構と称し、便宜的にL S Dと略称する。8号墳の北，S B 40（特殊大型高床建物跡，報告書V，P 272参照）の南20mに位置する。北から続くと考えられる溝10 F S D 02などの溝が上層にある。このL S Dの溝に囲まれた方形の台状部の，わずかに北東部で接する部分があるが，ほぼ中央部に7号墳が位置する。L S Dと切り合い関係をもつ遺構は西側のS I 146・147の竪穴住居跡，北東側の10 G S K 20，S B 35，東側の6号墳，南東側の81号墳，及び7号墳などである。

L S Dは幅約2.8m・深さ約1mの溝が東西32m，南北37mの方形に巡る遺構である。東側は調査対象区域外で完全には全域を調査確認したわけではないが，トレンチで確認した結果，方形の長辺のほぼ中央部が約6mにわたって陸橋状にあく「**□**」字形の遺構であると判断した。溝にかこまれた台状部は東西26m，南北31m（806m<sup>2</sup>）と極めて広大である。各コーナーは（南東部のみ未確認）やや丸みをもつが直角に曲がり，辺の中央部が微かに外ぶくらの感をうけるが，ほぼ完全な長方形をなしている。

台状部内には多くの遺構がある。7号墳，S I 141～145，S B 33・34・36などである。またL S Dのほぼ中央点付近に東西220cm・南北140cmの方形の土坑10 F S K 03があり，ほぼ中央を東西に断続的につながる溝10 F S D 06～09がある。これらの遺構について，この地域で検出された全ての遺構については遺跡全体遺構図（付図1）を，また明らかに関係しないと判断した幾つかの溝等の遺構を除いた全体図（挿図318）を参照されたい。

L S Dの周溝内からは多量の遺物が出土した。これらの遺物はほとんどが中～上層で出土した。（断面図参照，①・②・⑤層内，黒褐色砂もしくは暗褐色の黒砂に近い砂である）上層～中層にかけては非常に多くの土器が完形に近い状態で出土したのに対し，下層ではほとんど土器が見られなかった。出土位置は北西部から北側～北東側や南西側がかなり多かったのに対し東辺の北側，西辺の南側，南辺の東側では少なかった。全体に甕，高坏の相対的割合が高く，高坏の出土が北西部で非常に多かった事も注目したい。甕では「く」の字口縁のものと複合口縁のものが半々ぐらいである。壺は少ない。鼓形器台は，わずかに2片（同一個体かもしれない）だけだった。下層から出土したP<sub>0</sub>108は弥生時代後期の鼓形器台もしくは壺の口縁部で，当遺跡では遺物のほとんどない時期のものである。周溝の南辺中央部では須恵器甕を利用した墓S X 83が認められた。このS X 83は層的には土器が出土した層と同じ層内に作られている。またL S D最上層では須恵器高台付坏P<sub>0</sub>107が出土したり，他にも須恵器片が認められる。このため6～7世紀代に至ってもL S Dの窪みは残っており，それを利用してS X 83が作られたものとする。

台状部の調査ではLSDに直接関係すると考える遺構は認められなかった。7号墳とLSDの関係は不明であるが、関係すると考える要素もある。S I 141~145は明らかに7号墳に切られており、また各々に切り合い関係があつて同時には最大限1棟しか存在しえない。また西側のS I 146・147については、明らかにLSDがこれを切っている。南のSD 33・34のうち34はLSDに切られていると考えられる。従つてLSD内に存在しうる建物跡はS B 33・36と中央の竪穴住居跡1~2棟分である。このLSDのある地点はやや小高く、古墳時代前期の集落は、これらLSD内外のS I 141~147を東端として西側の低地にひろがっていると考える。LSDを集落を囲う溝と考えることは無理がある。

7号墳については本編P 108で報告した。7号墳は、周溝内に馬を埋葬した馬墓が3基ある事、(内1基はかなり上層である)、周溝上で検出された箱式石棺は小型のものに成人骨を納めた再埋葬墓とみられ、S X 83と同様に周溝がかなり埋った段階で作られている事、墳丘内のS K 01からは多量の土製品が出土した事などから、全体として祭祀関係の遺構とも考えられる。その他に7号墳第2埋葬施設やそれに切られているS K 03も、位置・軸方向からもLSDに伴うものとも考える事も可能である<sup>註1</sup>

またLSD南辺東側で径約1m・深さ60~80cmの土坑が約2.5m間隔で並んでいた。LSD内でみられたS B 36の柱穴や、北側のS A 04~08とほぼ同様の形状を示すが、いずれも性格は分からない。LSDのほぼ中央に位置する10 F S K 03は、位置的にも、また辺の軸方向がLSDのそれとほぼ一致する事から、LSDの中央に設けられた関係する遺構とも考えるが、わからない。東西に走る溝10 F S D 06~09は、断続的ではあるがN-75°-Eの方向に直線的にのびる2本の溝である。これは北で検出されたS D 01・02(報告書V, P 283参照)と同様で、軸方向も一致する。S D 01・02との間隔は約30mある。溝と溝との間に土をもった土塁状のものの可能性も考えられるが、直線的にのびている事から遺跡全体に及んで設けられた遺構の一部と思われる。LSDはこれらの溝を切っている。

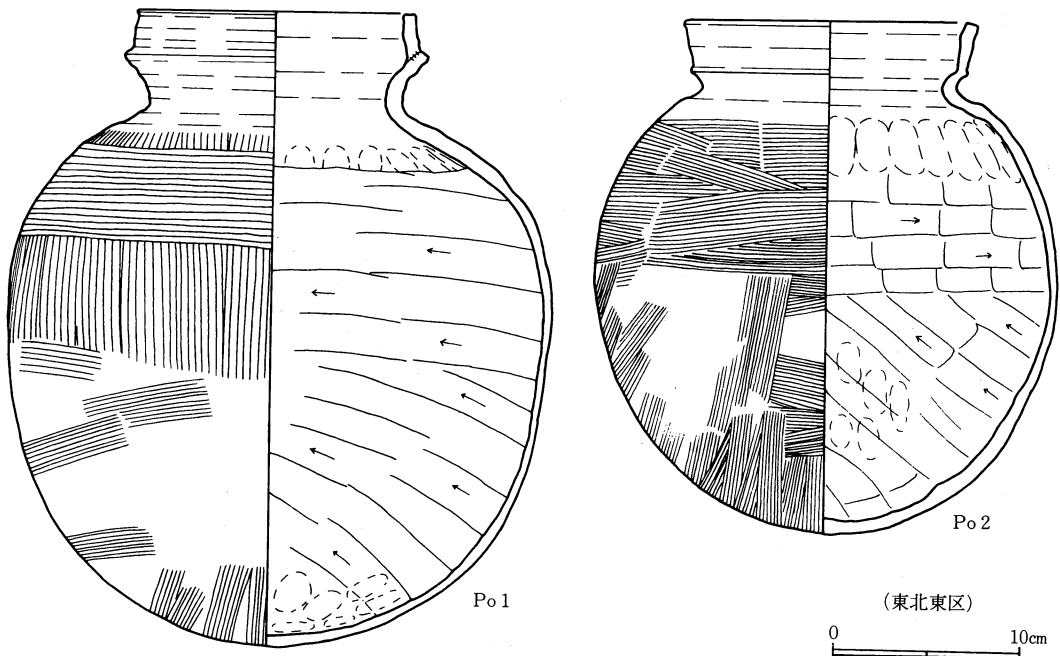
LSDの時期は、この遺構に直接に伴うと即断できる遺物がないため次のように考える。周溝内の遺物はかなり上層である事から明確な時期を示すものではないとも考えられるが、下層からの遺物出土量は少なく、これだけの量の遺物が遺構と無関係の時期に投棄されたとは考えにくい事から、遺構に伴う遺物と考えたい。また少なくとも古墳時代前期後半のS I 146・147を切っている事と、81号墳他の古墳に切られていたりS X 83が作られている事から、LSDの築造時期は古墳時代後期までは下らず、古墳時代中期に限定できよう。出土土器から中期前葉~中葉(前半代)と考えたい。

遺構の性格も明確にできない。遺跡全体としてみるなら、西側の集落群の東端の小高い所にある事(小高いといっても比高差は黒砂地表面で40cm前後である)、このLSDより東側は未調査地区で黒砂の起伏状況も明らかではないが、おおむね緩やかに低くなっていく

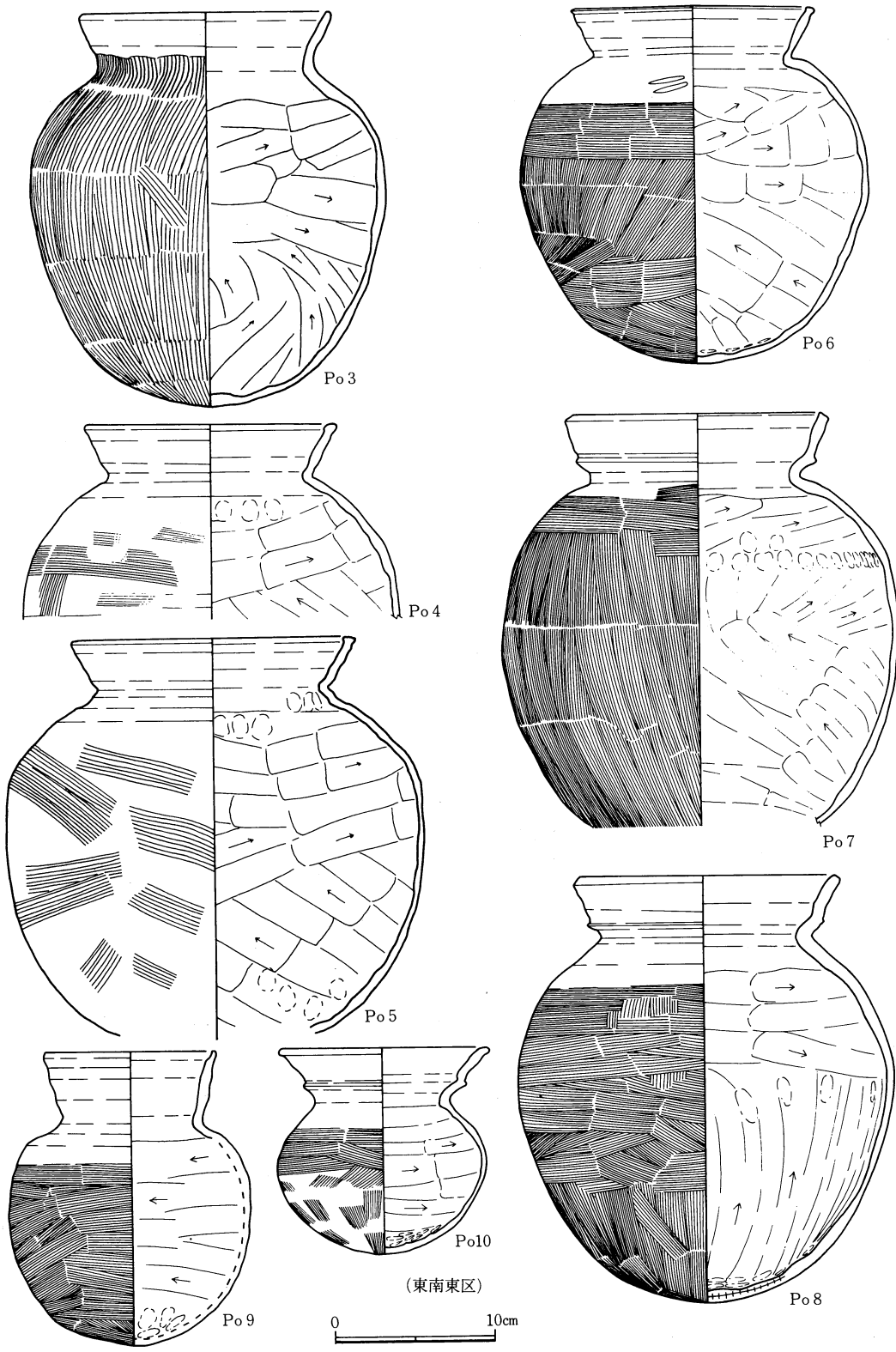
ものと推定する。その場合、このLSDのある地点は東にかけても、西にかけても傾斜する中央のやや小高いところと考える。東側に集落があるかどうかは全く不明だが、その可能性は十分にあると考える。古墳時代中期中葉ごろの遺構と考えると、長瀬高浜遺跡で集落が営まれた時代と古墳の時代との転換点であり、16K埴輪群とほぼ同様の時期となる。これらの状況から台状部には特に施設をもたない、溝で囲まれた台状部をそのまま何らかの目的で利用する遺構と考え、墳墓や建物を伴う溝ではないと判断したい。7号墳との時期差もほとんどないと考えられるから、方形周溝内に円形周溝をもつ遺構と考えてもよいと思われる。遺物は何らかの祭祀が最終的におこなわれた後に周溝内に投棄されたと考えられるなら、それよりやや先行する時期に遺構の作られた時期はおかれよう。

注1 大阪府四条畷市奈良井遺跡で1辺約40mの方形周溝遺構が検出され、その方形周溝内から5頭分の馬の骨・歯、土器、土製の人形・馬形が出土したとの事である。うち1頭は板上（約2m）の上に横たえられ、別の1頭は土壌内に頭蓋骨のみ埋納されていた。6世紀初めの須恵器を伴うと言われる。これらの出土遺物は当遺跡例と比較すると、時期としては5世紀前葉～中葉と6世紀初めとで約1世紀の時期差を考慮するもの、LSDと7号墳をくみあわせたものとほぼ同様の遺物の組み合わせをもつことになり興味深い。奈良井遺跡については四条畷市野島稔氏の丁寧な御教授をうけた。記して感謝したい。

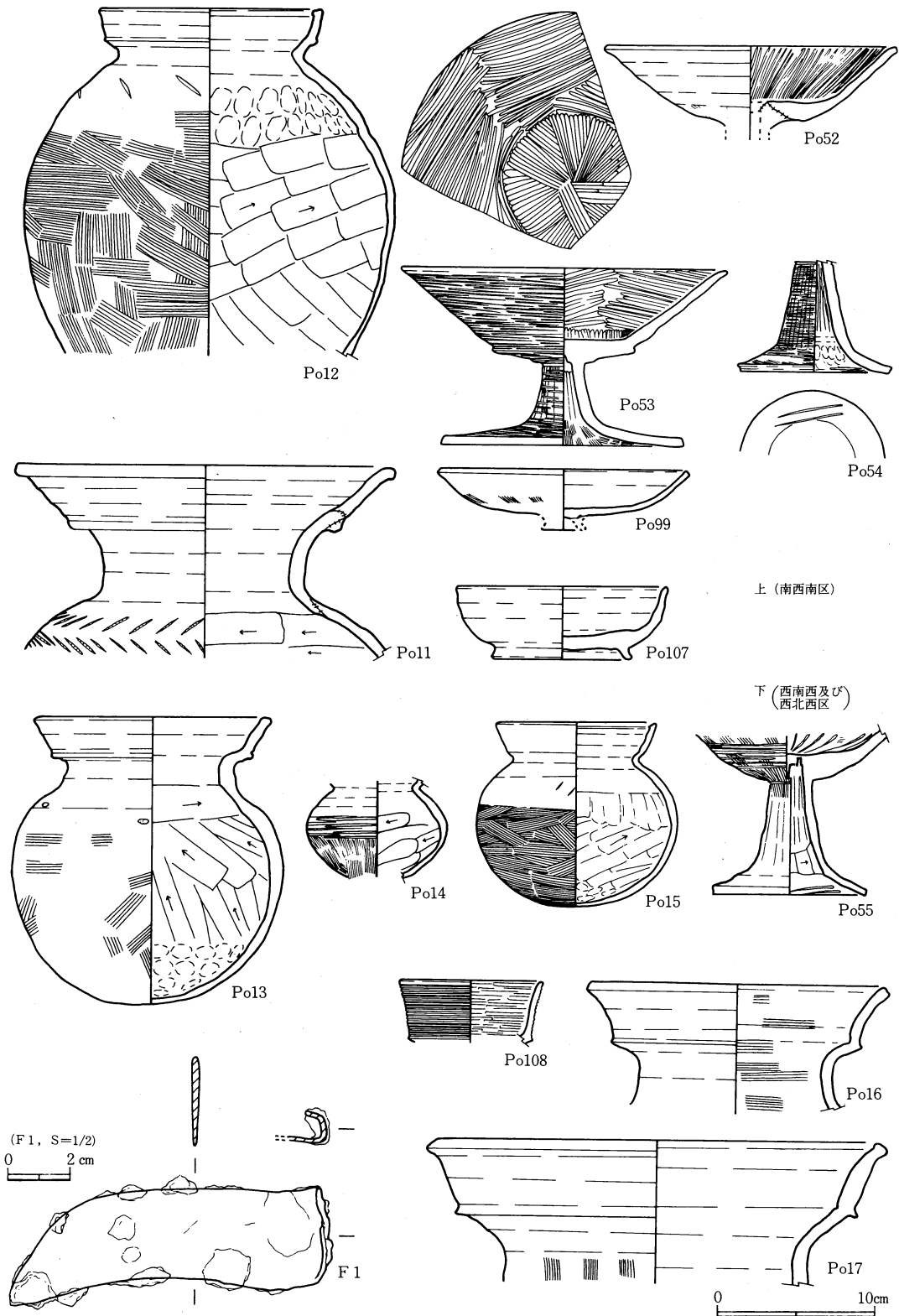
参照、奈良井遺跡現地説明会資料 大阪府四条畷市 1979年



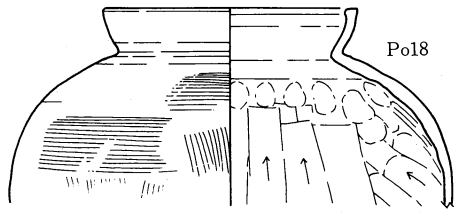
挿図308 LSD遺物図その1 (S=1/4)



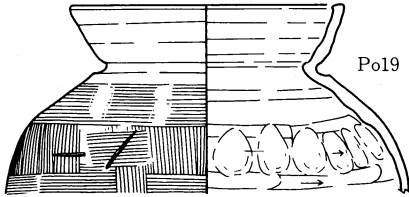
挿図309 LSD 遺物図その2 (S=1/4)



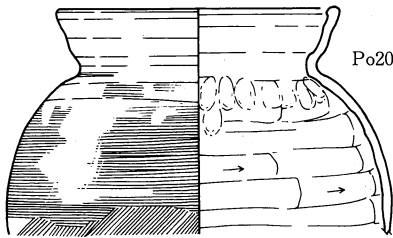
挿図310 LSD遺物図その3 (土器S=1/4, 鉄=1/2)



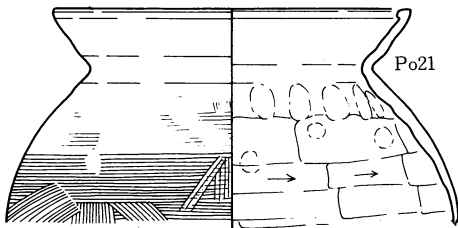
Po18



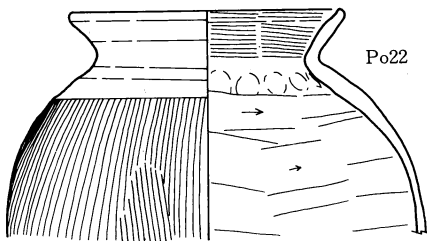
Po19



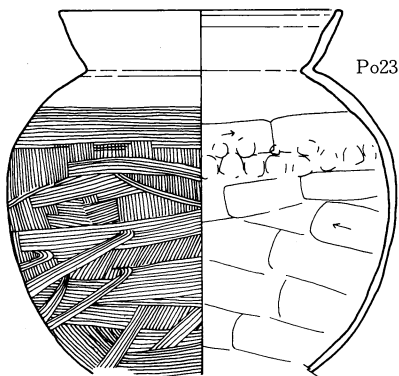
Po20



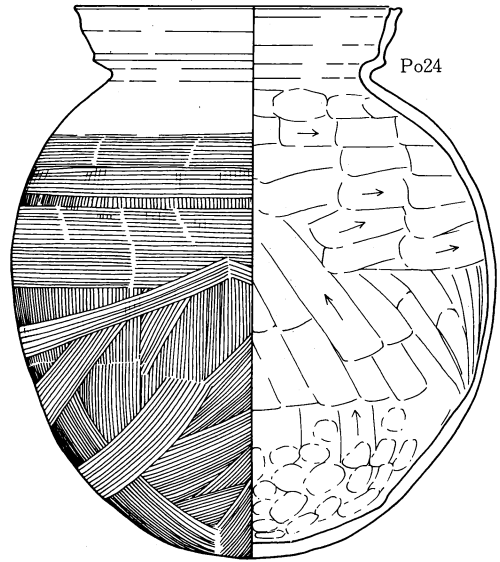
Po21



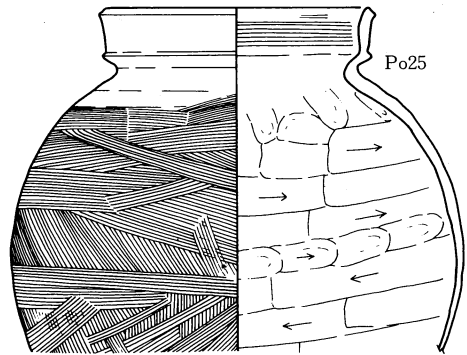
Po22



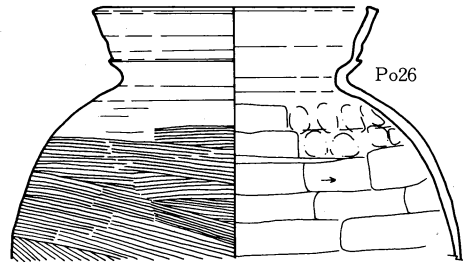
Po23



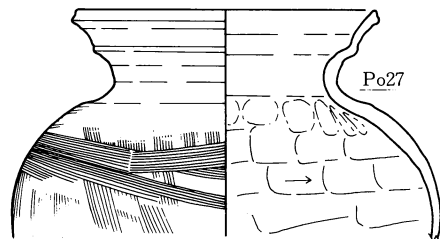
Po24



Po25



Po26

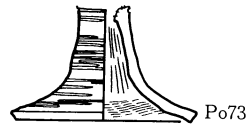
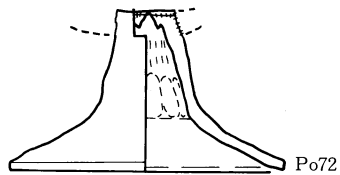
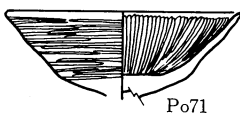
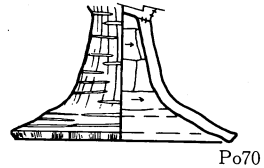
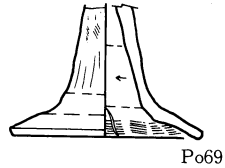
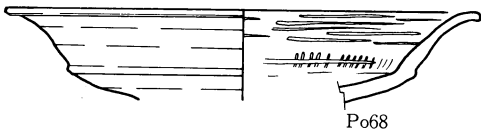
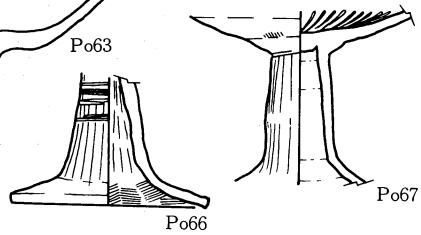
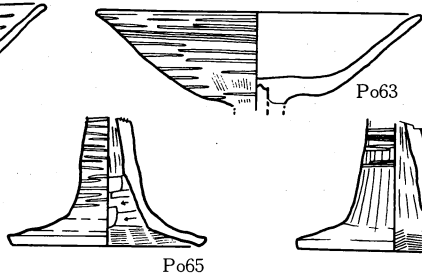
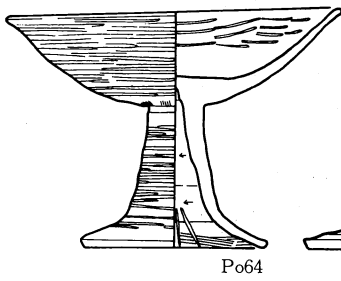
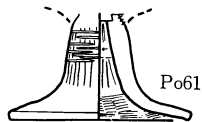
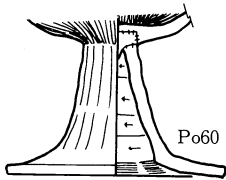
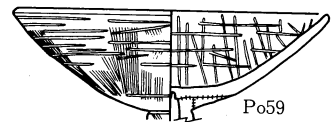
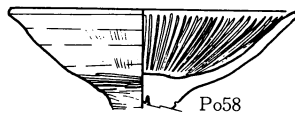
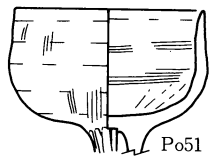
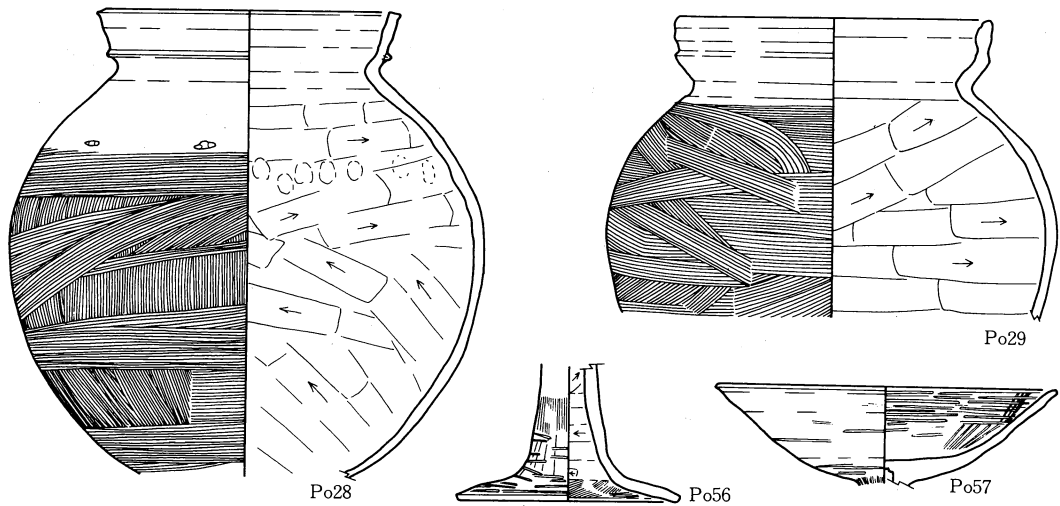


Po27

(西北西区)

0 10cm

挿図311 LSD遺物図その4 (S=1/4)

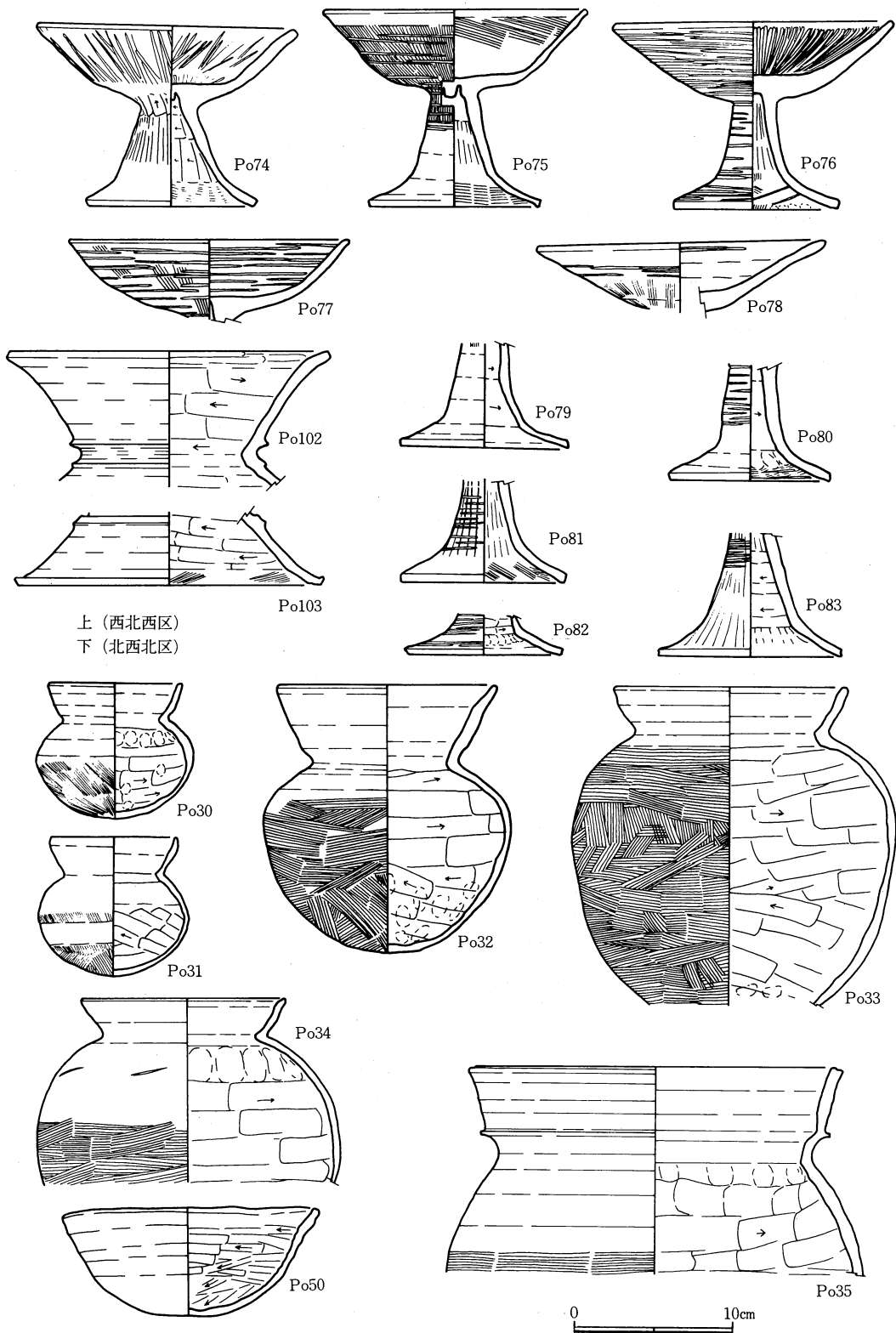


(西北西区)

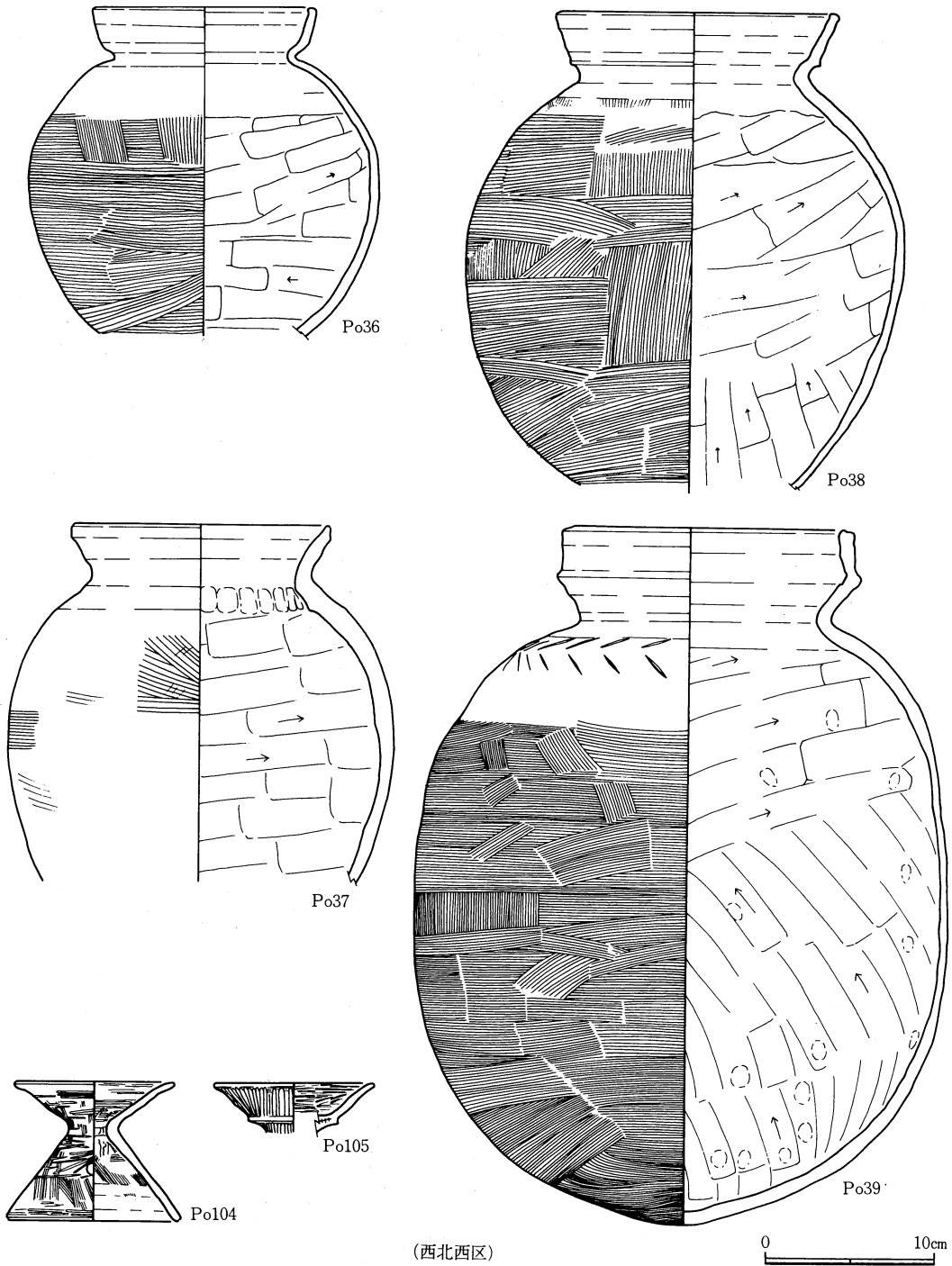


挿図312 LSD遺物図その5 (S=1/4)



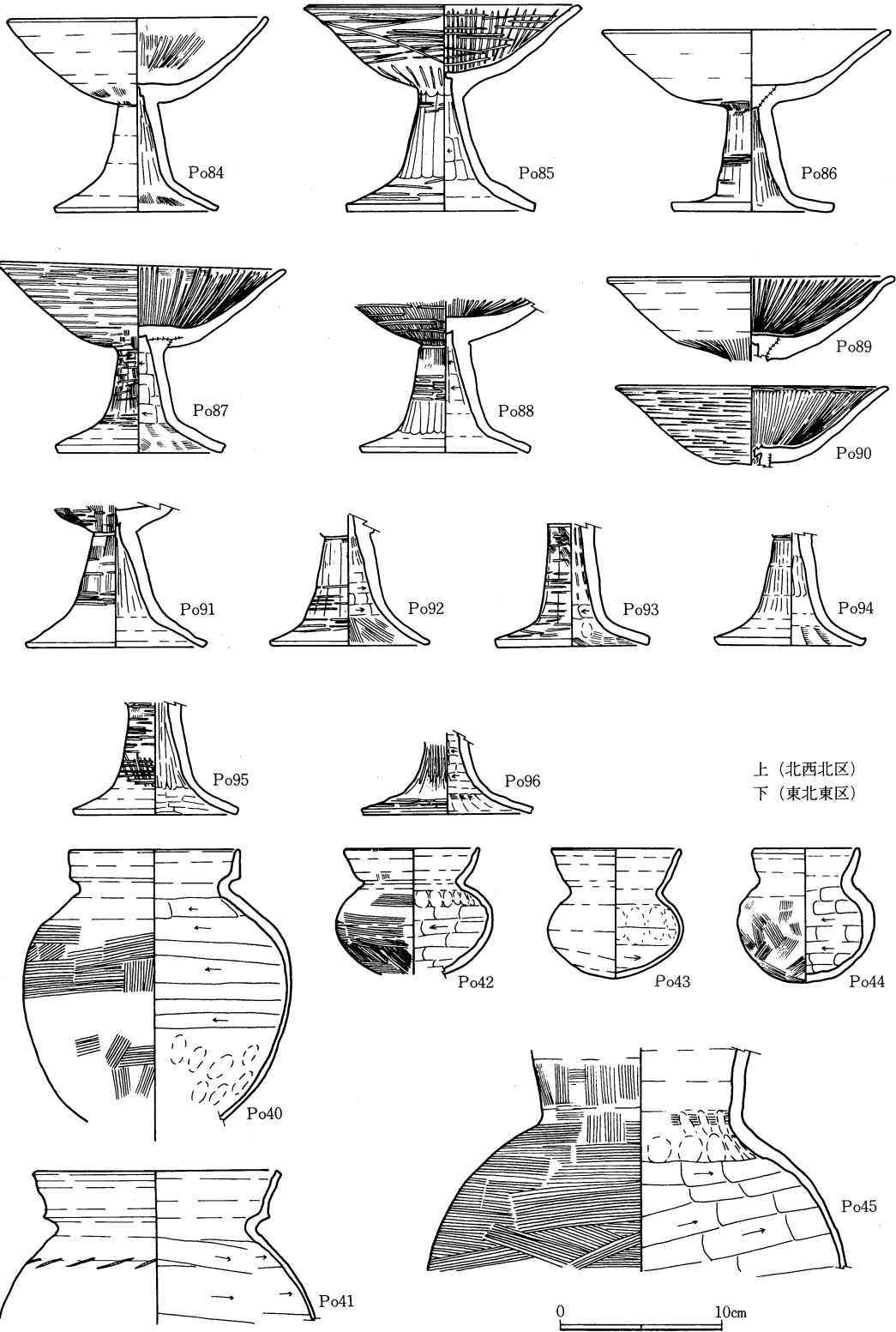


挿図313 LSD遺物図その6 (S=1/4)

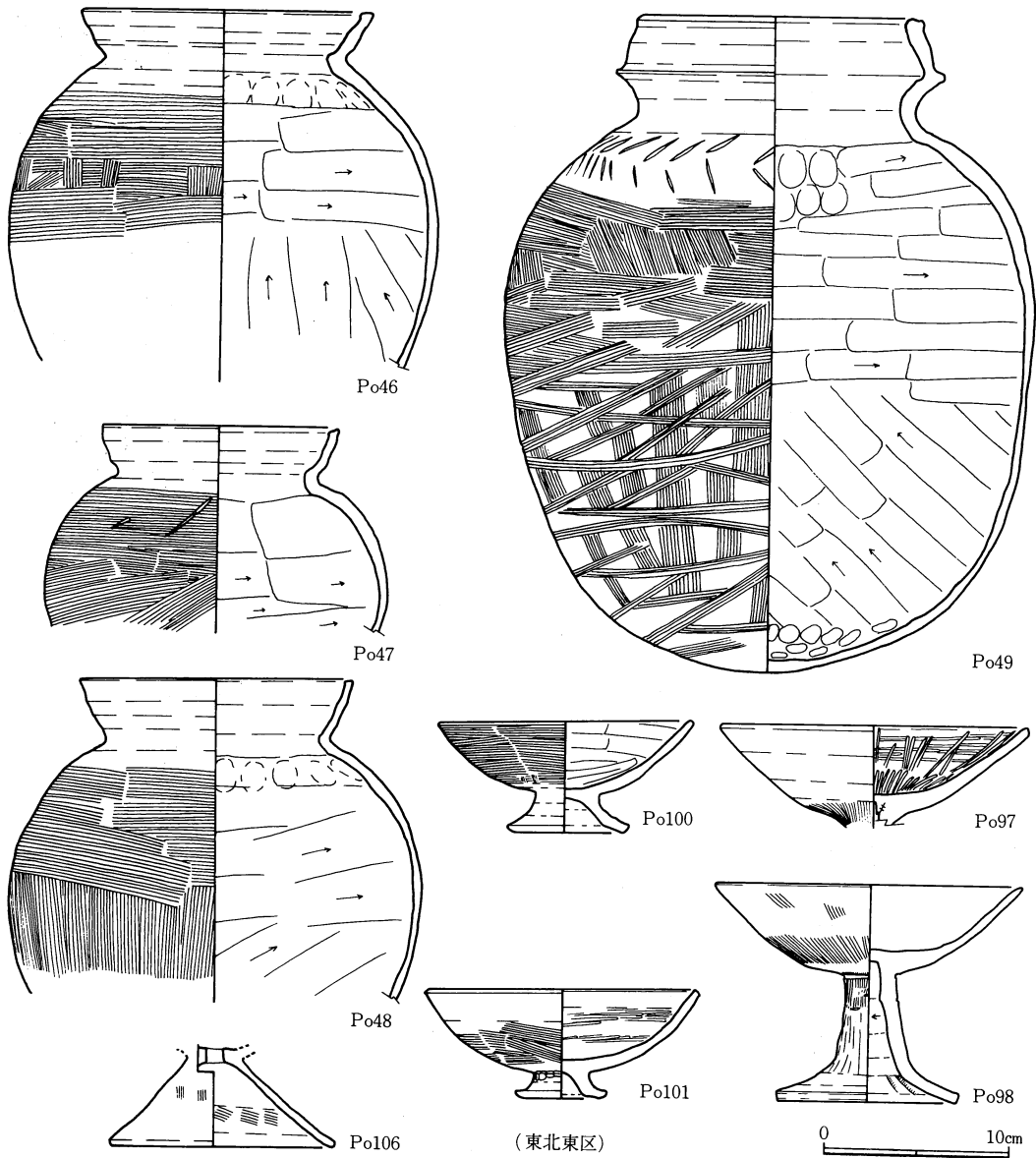


挿図314 LSD遺物図その7 (S=1/4)

注 LSDの遺物の分布について各々の区域的まとまりを考慮して北東より右まわりに場所をわけて図示した。8方位にむけてベルトを残して調査したので、遺物もそれに応じて8区にわけ、各々東北東地区等のようにしてこれを示した。Po番号は壺・甕類 (P.1~49) と高坏その他の類 (P.50~107) にわけた。こうしてみると全ての遺物について図化したのではないもの、北西区に土器が多く集中し、なかでも高坏の量が多い事が注意される。



挿図315 LSD遺物図その8 (S=1/4)



挿図316 LSD遺物図その9 (S=1/4)

小型丸底壺・高坏群 (挿図317, 図版59)

11F地区のLSD外肩で検出した。LSDの上面にあたるどころだが、この土器の出土した場所もすでに地山に達しており、LSDも既に平面的に検出されていたため新旧関係は不明である。LSDに伴う可能性もある。伴うとしてもLSDが作られた後のものであろう。約2㎡の範囲内に4個体以上の小型丸底壺と5個体以上の高坏、2個体以上の甕が集中して出土した。完形の土器が集中して出土するのは多数あるのですがすぐには遺構とは考えられないが、何らかの遺構の可能性があろう。これらのうちP.01~14を図化して示したが、土器群の中から須恵器片と管玉が各1点検出されている。須恵器P.01は壺か蓋坏蓋の

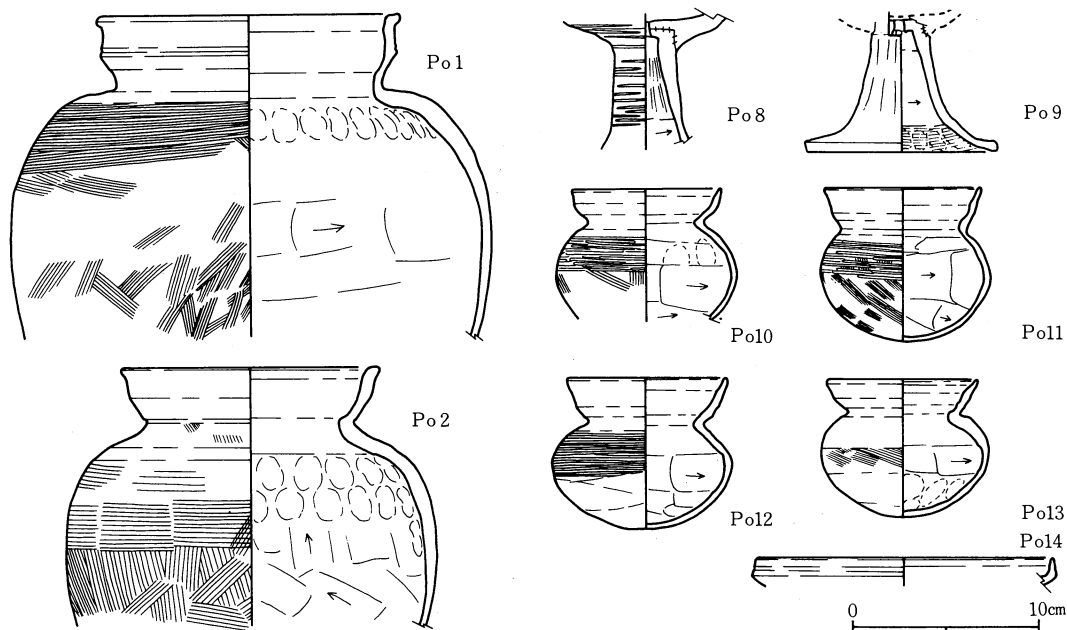
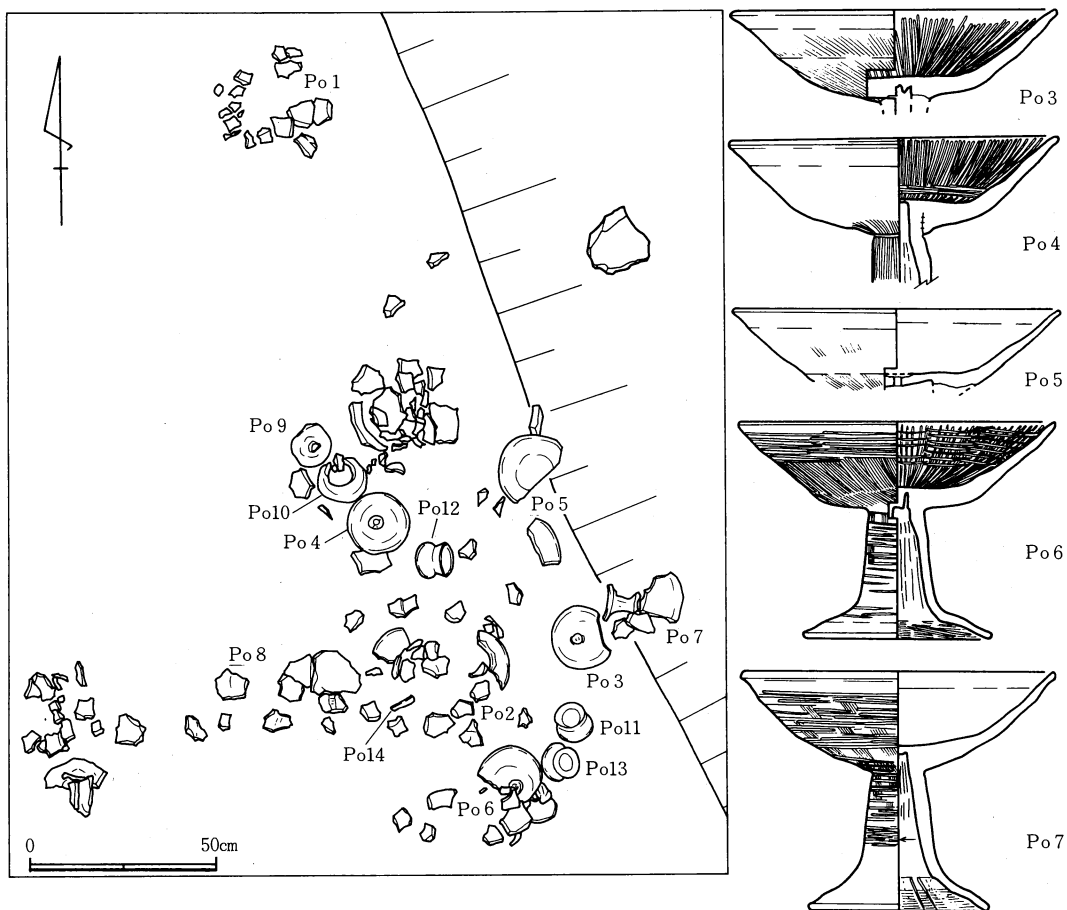
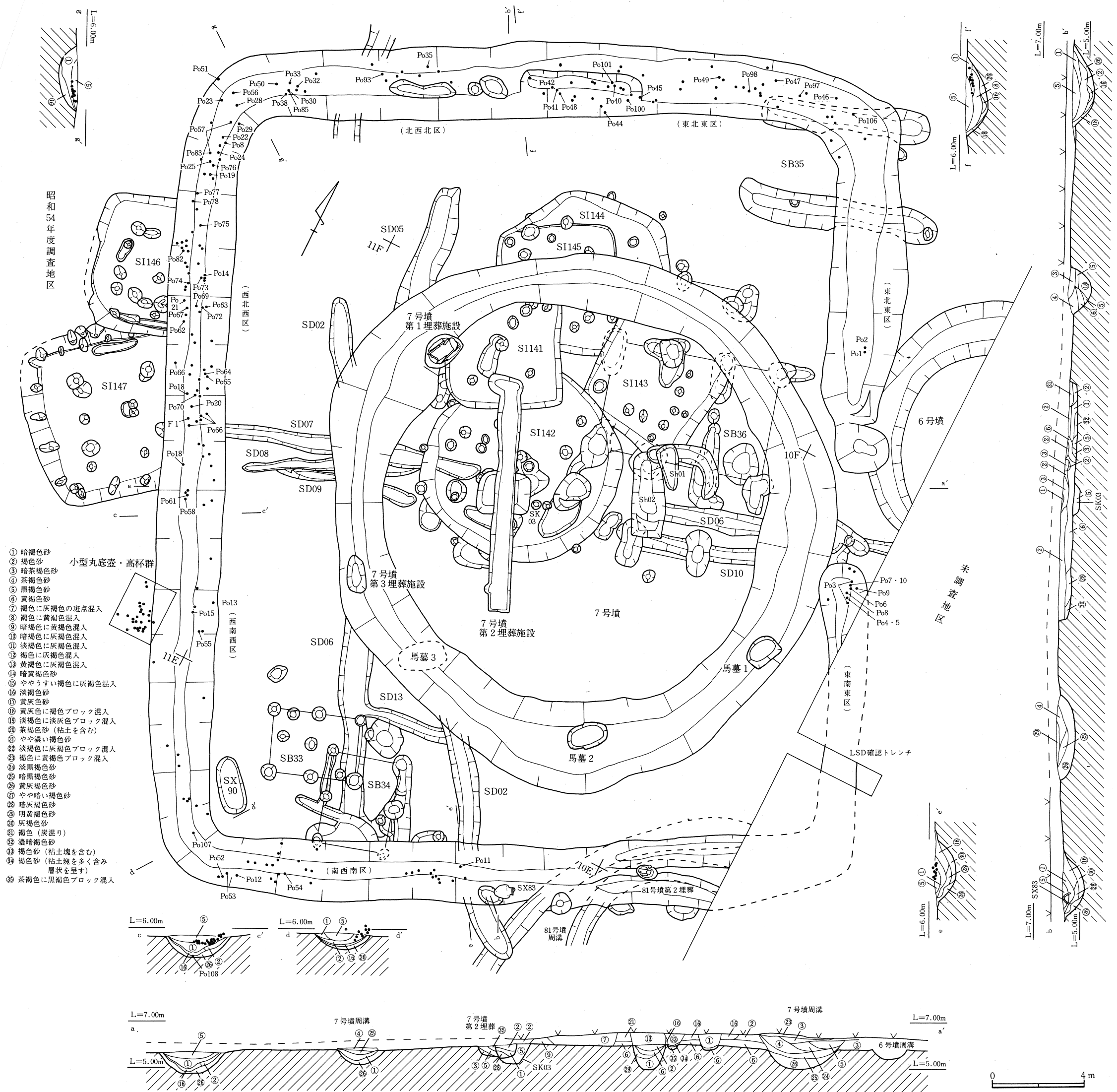


插图317 LSD小型丸底壺・高坏群遺構図 (S=1/20), 遺物図 (S=1/4)



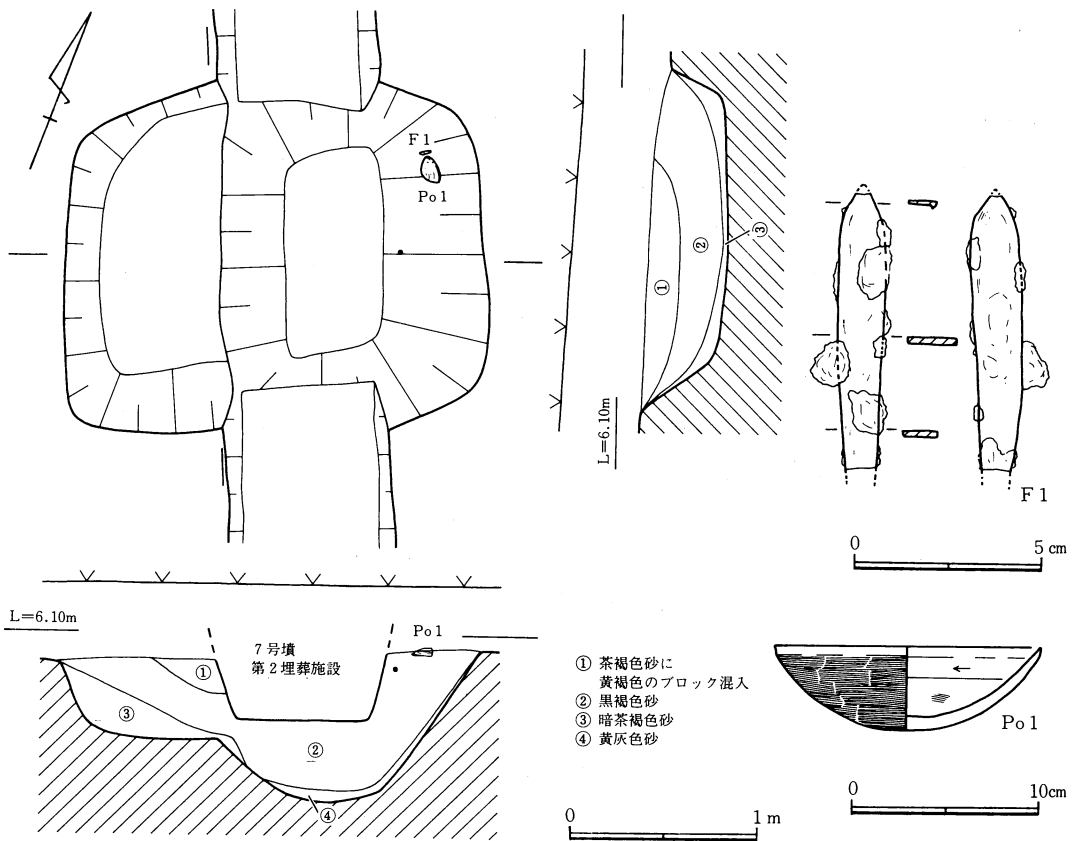
- 昭和54年度調査地区
- 小型丸底壺・高杯群
- ① 暗褐色砂
  - ② 褐色砂
  - ③ 暗茶褐色砂
  - ④ 茶褐色砂
  - ⑤ 黒褐色砂
  - ⑥ 黄褐色砂
  - ⑦ 褐色に灰褐色の斑点混入
  - ⑧ 褐色に黄褐色混入
  - ⑨ 暗褐色に黄褐色混入
  - ⑩ 暗褐色に灰褐色混入
  - ⑪ 淡褐色に灰褐色混入
  - ⑫ 褐色に灰褐色混入
  - ⑬ 黄褐色に灰褐色混入
  - ⑭ 暗黄褐色砂
  - ⑮ ややすすい褐色に灰褐色混入
  - ⑯ 淡褐色砂
  - ⑰ 黄灰色砂
  - ⑱ 黄灰色に褐色ブロック混入
  - ⑲ 淡褐色に淡灰色ブロック混入
  - ⑳ 茶褐色砂(粘土を含む)
  - ㉑ やや濃い褐色砂
  - ㉒ 淡褐色に灰褐色ブロック混入
  - ㉓ 褐色に黄褐色ブロック混入
  - ㉔ 淡黒褐色砂
  - ㉕ 暗黒褐色砂
  - ㉖ 黄灰褐色砂
  - ㉗ やや暗い褐色砂
  - ㉘ 暗灰褐色砂
  - ㉙ 明黄褐色砂
  - ㉚ 灰褐色砂
  - ㉛ 褐色(炭混り)
  - ㉜ 濃暗褐色砂
  - ㉝ 褐色砂(粘土塊を含む)
  - ㉞ 褐色砂(粘土塊を多く含む層状を呈す)
  - ㉟ 茶褐色に黒褐色ブロック混入

挿図318 LSD遺構図 (S=1/160)

口縁部である。この須恵器と小型丸底壺他とは同じ時期のものとは考えがたい。小型丸底壺などは長瀬Ⅲ期（5世紀前半）のものと思われる。従ってこれらの小型丸底壺・高坏群が現在ある場に置かれた後、何らかの理由で攪乱を受けた際にこの須恵器片が混入したものと考えるべきだろうが、特に根拠がない。LSDの埋砂のもっとも上層の堆積はSX83やPo14の時期まで降りうると考えられ、周辺からも須恵器が比較的出土しているから、6～7世紀前後の時期にこの小型丸底壺・高坏群が攪乱をうけたと考えるのもよいだろうと思う。小型丸底壺・高坏群とLSDとの関係は不明だが、LSD内から出土する土器との差はほとんど無く同じような時期の遺構と考える。

10F, SK03 (挿図319, 図版59)

10F地区北西区, 方形周溝状遺構LSDの中央に位置する。7号墳第2埋葬施設に切られている。平面形は長方形をなす。西側には段がありテラス状になっている。大きさは長辺222cm, 短辺186cm, 深さは床面まで68cm, テラスまで42cmで床面は長辺108cm, 短辺56cmを測る。主軸はN-70°-Eである。遺物は, 土師器碗(Po1), 刀子(F1)が出土している。遺構の性格は不明だが, LSDの中央部に位置し, 軸方向もほぼ一致する事からLSDに関係する遺構と考えられる。時期は出土遺物より長瀬Ⅲ期と考える。



挿図319 10F SK03遺構図 (S=1/40), 遺物図 (鉄製品S=1/2, 土器S=1/4)

### 第 III 章 遺物

#### 第 1 節 遺構外出土の縄文土器、弥生土器

調査地区内では、堆積砂中に数片の縄文土器と多量の弥生土器が土師器と混在して検出されている。中でも弥生土器は、主に弥生時代前期の土器がC～Eラインに沿って集中して出土している。以下、58年度調査地区の遺物を中心に、未報告の遺構外出土の縄文土器、弥生土器について説明する。(後で詳しく述べるが、いわゆる刻目突帯文土器の多くはここでは縄文土器の特徴を残す弥生時代の土器と考え論をすすめてゆく。)

#### 縄文土器 (挿図 320・329, 図版 70)

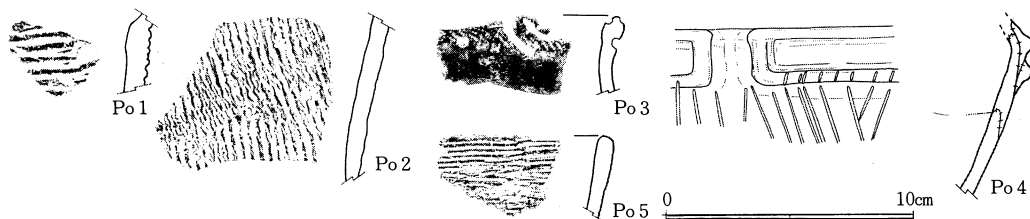
遺物は小片であるため、全形を窺い知ることのできるものはなかった。この為、主に胎土、成形、施文方法等を中心として時代順に述べたい。

Po.1 は直立する胴部から外方へ屈曲する頸部をもつ。外面は半截竹管で平行沈線を施す。燃糸文地土器 Po.2 は胴部片で、器表には燃糸文が施され、結び目痕もみられる。Po.238 は燃糸文を施した沈線を施す。「里木II式」系統土器と考える。磨消縄文土器 Po.3 は口縁部を肥厚させた「縁帯文土器」で、肥厚部は棒状の工具で渦状に刺突する。Po.4 は最大径付近に刻み目を施し、楕円形をモチーフとする突帯を貼付する。胴部には沈線文を施す。Po.5 は直立する口縁部で、平行沈縁を主たる文様とする土器である。

#### 刻目突帯文土器 (挿図 321～324, 図版 70～73)

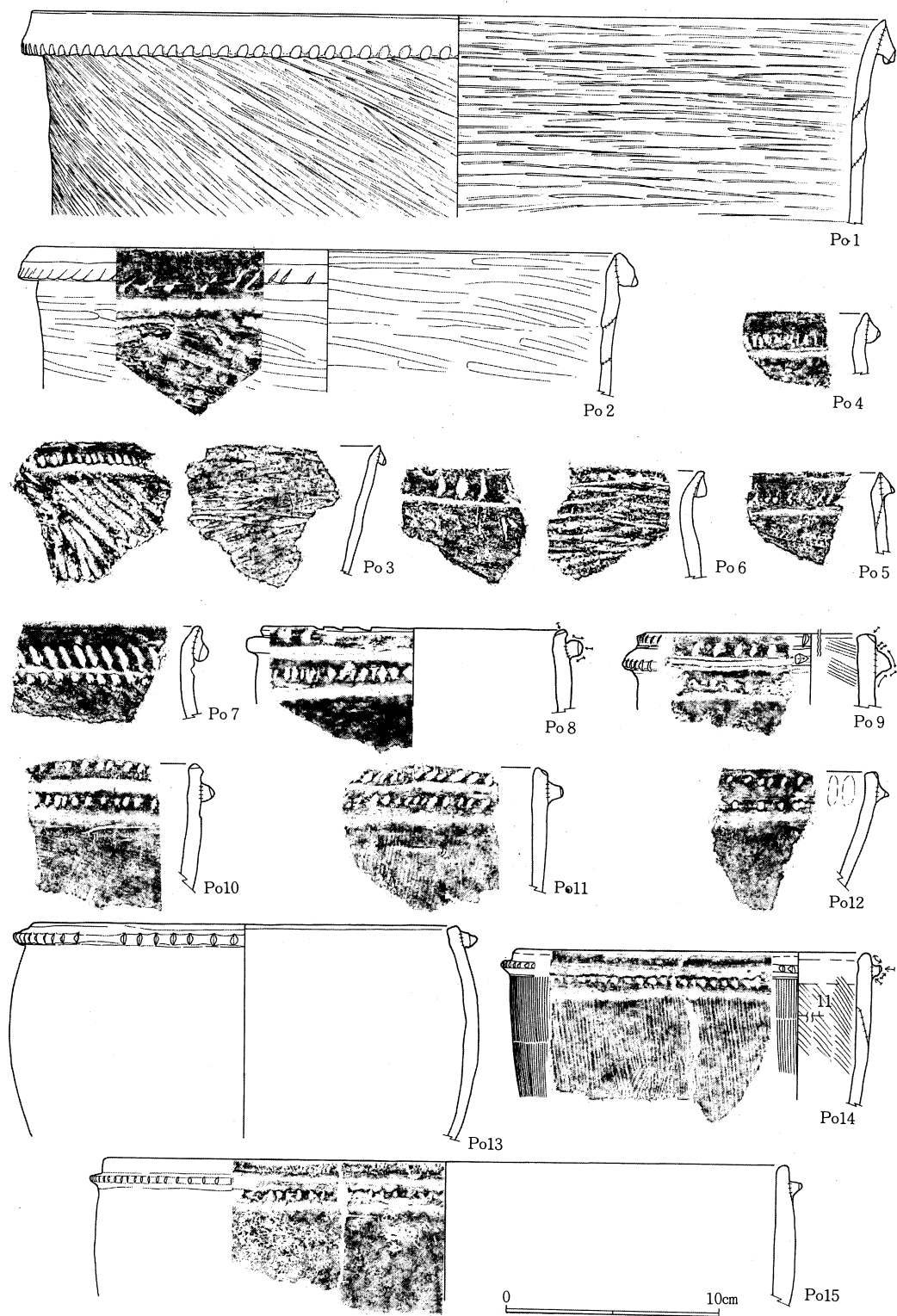
刻目突帯文土器の出土破片数は約 300 点で完形をなすものは皆無であったが、器形はそのすべてが深鉢形をなすと考えられる。2 条の刻目突帯をもつ器形はなく、ゆるく内湾、あるいは直立気味の口縁部に突帯をもつ A 類と、外側にゆるく開く口縁部に突帯がつく B 類とに大きく分けることができる。A 類と B 類は刻目突帯文の位置と形態によってさらに細かくわかれる<sup>#1</sup>。まず、突帯を施す位置及びその施し方について分類する。

- 1 型 面取りをしない口縁端部に上端を沿わせて突帯を施すもの。突帯の貼付と口縁端部の調整とを同時に行う。
- 2 型 口縁端部よりやや下って突帯を施すもの
- 3 型 口縁端部に上端を沿わせて突帯を施すが、端部と突帯間には僅に段をもつもの。



挿図320 縄文土器拓影 (S=1/3)





挿図321 刻目突帯文土器拓影その1 (S=1/3)

4型 丸味をもつか、軽く面取りを行う口縁端部に上端を沿わせて突帯を施すもの。  
次に、突帯それ自体の形態について分類する。

a型 突帯を上下から押えて貼りつけるもの。その結果、突帯断面は▷形を呈す。

b型 突帯を上から押えて貼りつけるもの。その結果、突帯断面は△形を呈す。

c型 突帯を下から押えて貼りつけるもの。その結果、突帯断面は▽形を呈す。

d型 a型の突帯の上下を強くナデたもの。その結果突帯は外側に長くのびる。

e型 a型の突帯がさらに外側に鋭く突出する突帯。

f型 突帯を上下・側面から押えて貼りつけるもの。その結果、突帯断面は□形を呈す。

g型 低く平たい突帯

また、突帯上の刻み目は位置により3つに分類した。

I型 突帯及び口縁端部に刻み目をもつもの。

II型 突帯のみに刻み目をもつもの。

III型 突帯にも口縁端部にも刻み目をもたないもの。

IV型 突帯に刻目をもたず、口縁端部に刻み目をもつもの<sup>※2</sup>

刻み目については断面が「O」、「D」、「V」字状を呈するものなどがある。形状的に判別困難なものが存在するので細分はせず、特徴的なものについてのみ述べる。

**深鉢A類** 屈曲を持たない単純な器形。最大径が口縁部にあり直立気味のもの、口縁端部がややすばまるものがある。器面調整は、条痕を施したものからヘラ磨きを施したものまで見られるが、横方向のナデ調整が多く、ハケ目もみられる。

1 b型 (P<sub>0</sub>1～7) P<sub>0</sub>1～3の内外面、P<sub>0</sub>6の内面、P<sub>0</sub>7の外面に条痕がみられる。またP<sub>0</sub>1, 2で確認された輪積み痕はともに内傾している。P<sub>0</sub>1～3・6・7は胎土、焼成、色調ともにP<sub>0</sub>4・5とは異なる。P<sub>0</sub>4, 5は他の刻目突帯文土器のそれと同様。

2 a型 (P<sub>0</sub>8～19) 多数確認された。口縁端部は面取りをする。調整はナデが主流だが、ハケ目も認められる。P<sub>0</sub>8は突帯の上下、P<sub>0</sub>9は上、P<sub>0</sub>18は下にヘラ描き沈線がめぐる。おそらく突帯の接合に関係するもので、より強く付着させるための調整と考える。

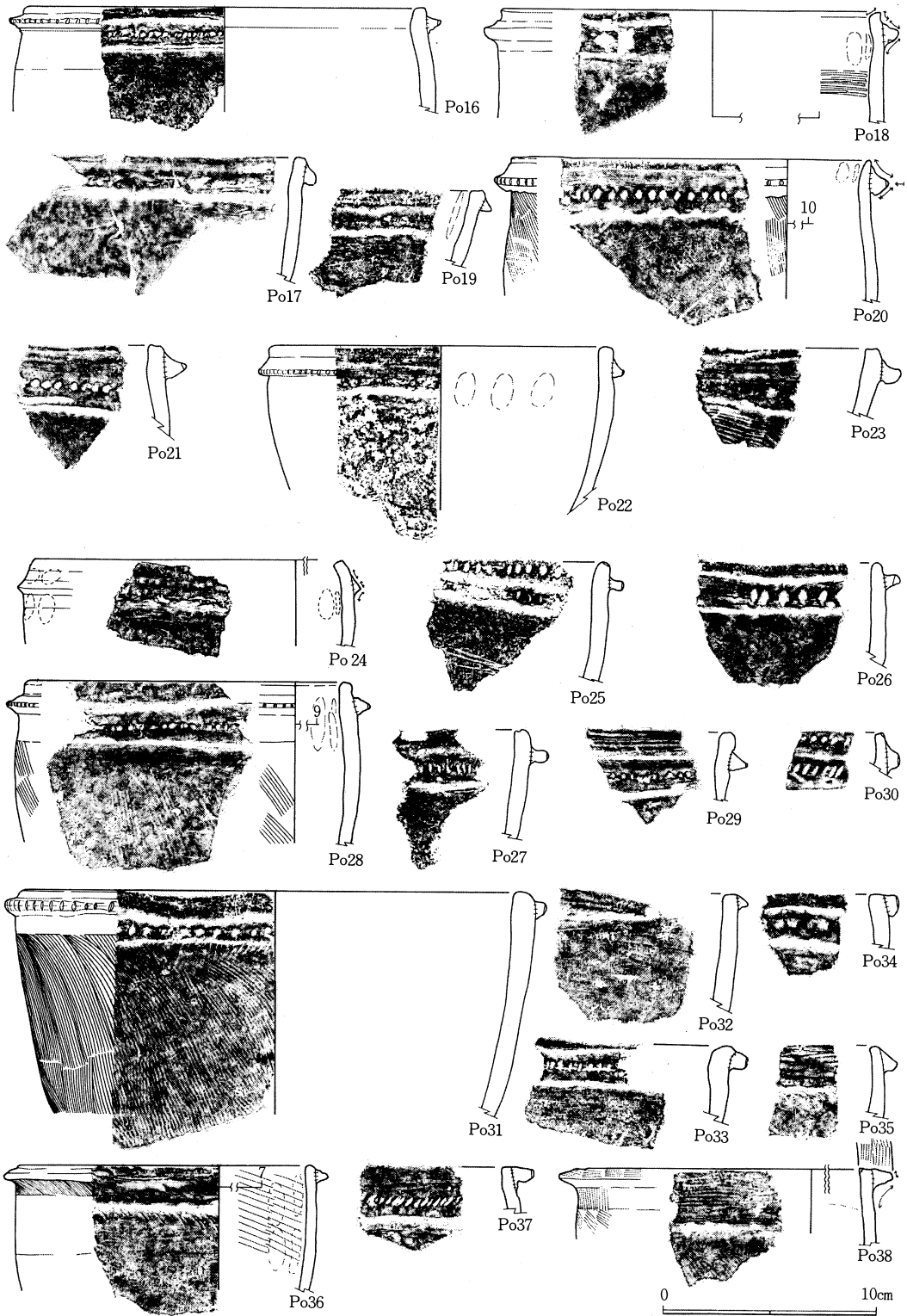
2 b型 (P<sub>0</sub>20～24) 口縁端部は面取りをする。調整はヘラ磨き、ハケ目等が認められる。P<sub>0</sub>21の突帯下側にはヘラ描き沈線が施される。刻み目はO字状が多い。

2 d型 (P<sub>0</sub>25～27) 口縁端部は丸味をもち、突帯は強く突出する。調整はナデが主だがP<sub>0</sub>25には外面に一部ヘラ磨きも認められる。刻み目はO字状が多い。

2 e型 (P<sub>0</sub>28, 29) 突帯上下のナデが強い。刻み目はII型、O字状が多い。

2 f型 (P<sub>0</sub>30) 突帯の断面が□状を呈す。内外面ナデ仕上げ。

3 a型 (P<sub>0</sub>31, 32) 突帯の上側は面取りした口縁端部に沿うが口縁端部と突帯は別々のナデで仕上げられる。P<sub>0</sub>31の突帯下には強いナデが入る。



挿図322 刻目突帯文土器拓影その2 (S=1/3)

3 f 型 (P.33, 34) 突帯の粘土紐が明瞭に認められる。調整はナデ。P.33は突帯先端部にヘラ描き沈線を施した後刻み目を入れる。P.34の突帯刻み目はヘラを押しあてて横方向に引き「□」状を呈す。

4 a 型 (P.35, 36) 突帯はなでられるが、P.35は口縁端面及び突帯上側全面を、P.36は一部をヘラ削りする。ナデのみの個体もある。調整はナデが主体だが、ハケ目も認める。

4 e 型 (P.37, 38) 口縁端部と突帯上側は平坦面をなし、ナデあるいはハケ目調整である。胎土、調整ともに弥生土器と考えられる個体である。

4 f 型 (P.39~43) 口縁端部と突帯上側は平坦面を作る。調整はナデが主流。P.41の突帯は他より低く趣が異なる。刻み目はD字が多い。

**深鉢B類** 屈曲を持たない単純な器形で、口縁部分で外反する。調整はナデ、ハケ目、ヘラ磨きと弥生土器にみられる調整が認められる。

2 a 型 (P.44~56) 数多く存在する。口縁端部は強く外反する。調整はナデ、ヘラ磨きが主流でハケ目もある。胎土、焼成も弥生土器的である。なかでもP.52は弥生時代前期の特徴であるヘラ描き沈線が2条、突帯下部に施されており、弥生土器とのかかわりを推察させる。またP.53は突帯貼付位置が下っており、弥生土器P.72等と類似している。刻み目はO字、V字状等がある。III型も多い。また、大O字状の刻み目<sup>43</sup>もある。(P.48, 49)

2 b 型 (P.57~60) P.58は口縁端部が突帯上側につながる。P.59は口縁端部が外側に肥厚し、幅の広い口縁端面を有す。

2 c 型 (P.61~63) 突帯を貼付した後口縁端部内面と突帯下側を1つの単位とし横に強くなでたと考える。

2 d 型 (P.64) 突帯は低く幅が広い。刻み目はヘラにより大きく刻む。

2 g 型 (P.65) 突帯上をナデた後刻み目を施す。

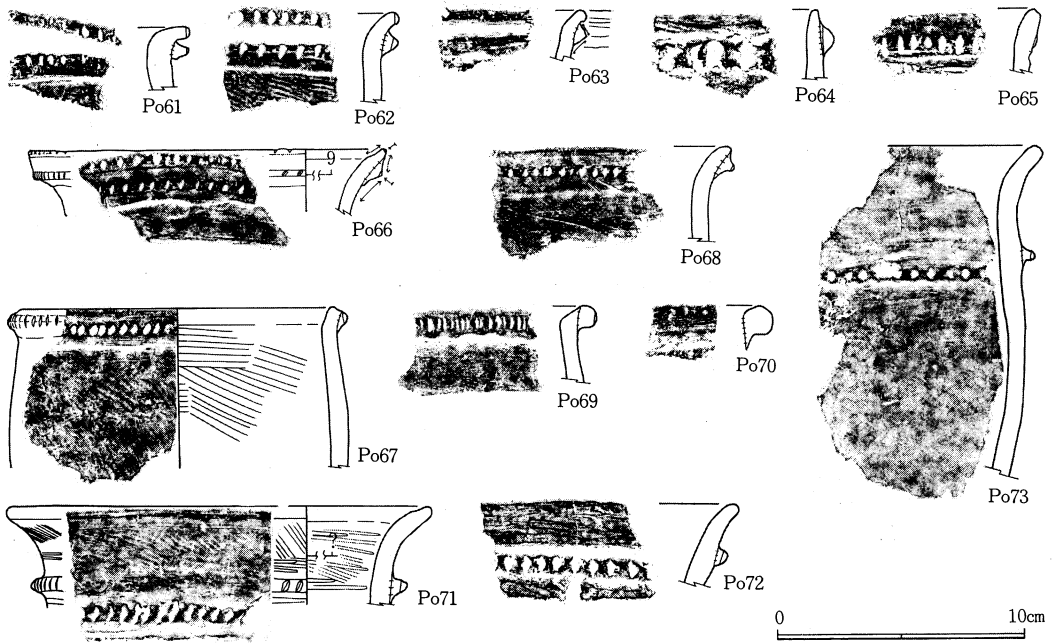
3 a 型 (P.66~68) 口縁部は強く外反する。調整はナデが主流。

4 f 型 (P.69~70) 口縁部は端部で外反する。一見すると折り返しに見える口縁部に丸味をもった突帯が貼付される。P.70は無文土器あるいはそれに近い形態の遺物と考えられるが、胎土は他の弥生時代前期の土器とほとんど同じである。無文土器片と考えられる突帯破片はこれまでに数点出土している。これらはいわゆる縄文晩期の刻目突帯文土器とは異なるが、突帯を口縁端部に貼付していることからこの類に入れて考えた。

以上、刻目突帯文土器の大まかな分類を試みた。大きくA類とB類に分けたが、これらは器面調整、胎土、焼成等からA-1 b類の中でも条痕のある土器とその他の土器(P.1~3・6・7)とそれ以外の全ての土器とに大きく分かれる。A-1 b類のこれらの土器はいわゆる縄文土器である。A-1 b類の条痕がある土器以外のA類とB類の形態差については、B類は弥生甕形土器と同じカーブを描く、外反する口縁で、突帯下部に弥生土器的



挿図323 刻目突帯文土器拓影その3 (S=1/3)



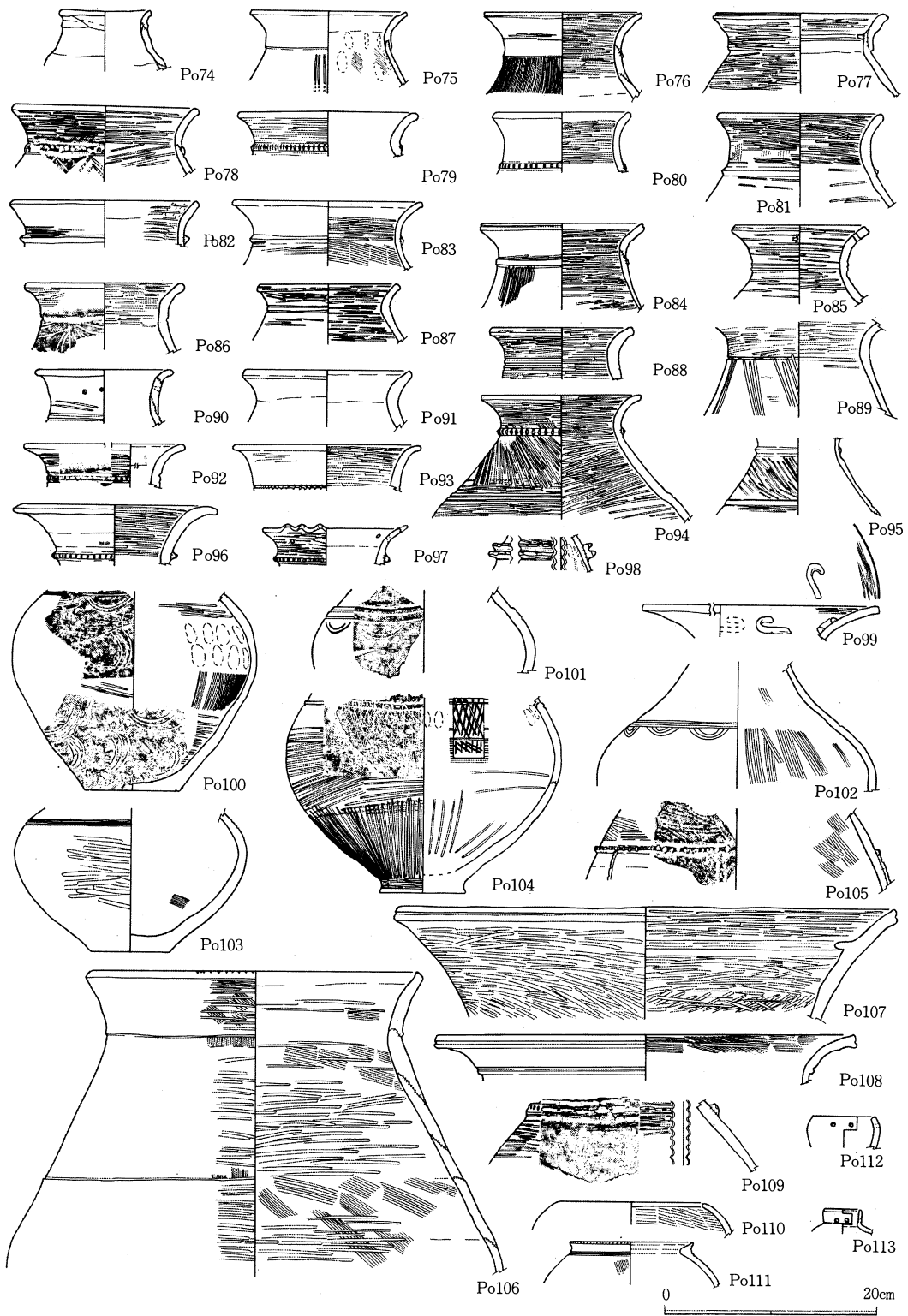
挿図324 刻目突帯文土器拓影その4, 弥生土器拓影 (S=1/3)

なへら描き沈線を施す個体もあることなど弥生土器の特徴を共有するのに比べ、A類は内湾あるいは直立する口縁部で縄文土器と似かよった形態をもっている。しかし内湾あるいは直立気味の口縁端部にいわゆる刻目突帯が貼り付く例は弥生土器(Po262, 263, 284)にもみられること、刻み目に差はなく、ともに弥生土器にも認められることから、一群のA類とB類の形態差は時期差でないと考えられる。さらに、これらの胎土、焼成、調整は弥生土器と共通している。このことからA-1 b類の条痕をもつ土器以外のA類とB類は共存していたと考える。A-1 b類の一群の土器を縄文土器と考えたので、A-1 b類→他のA類及びB類の流れが認められる。しかしA-1 b類の条痕のある土器は刻目突帯文土器の中で絶対量は少なく、また、縄文時代晩期の他の器種と考えられる土器は1片しか認められないことなども考えあわせるなら、両者は共存していたとも考えられる。いずれにしても、長瀬高浜遺跡の刻目突帯文土器は形態的には縄文土器の特徴を残した弥生土器と考えられる。

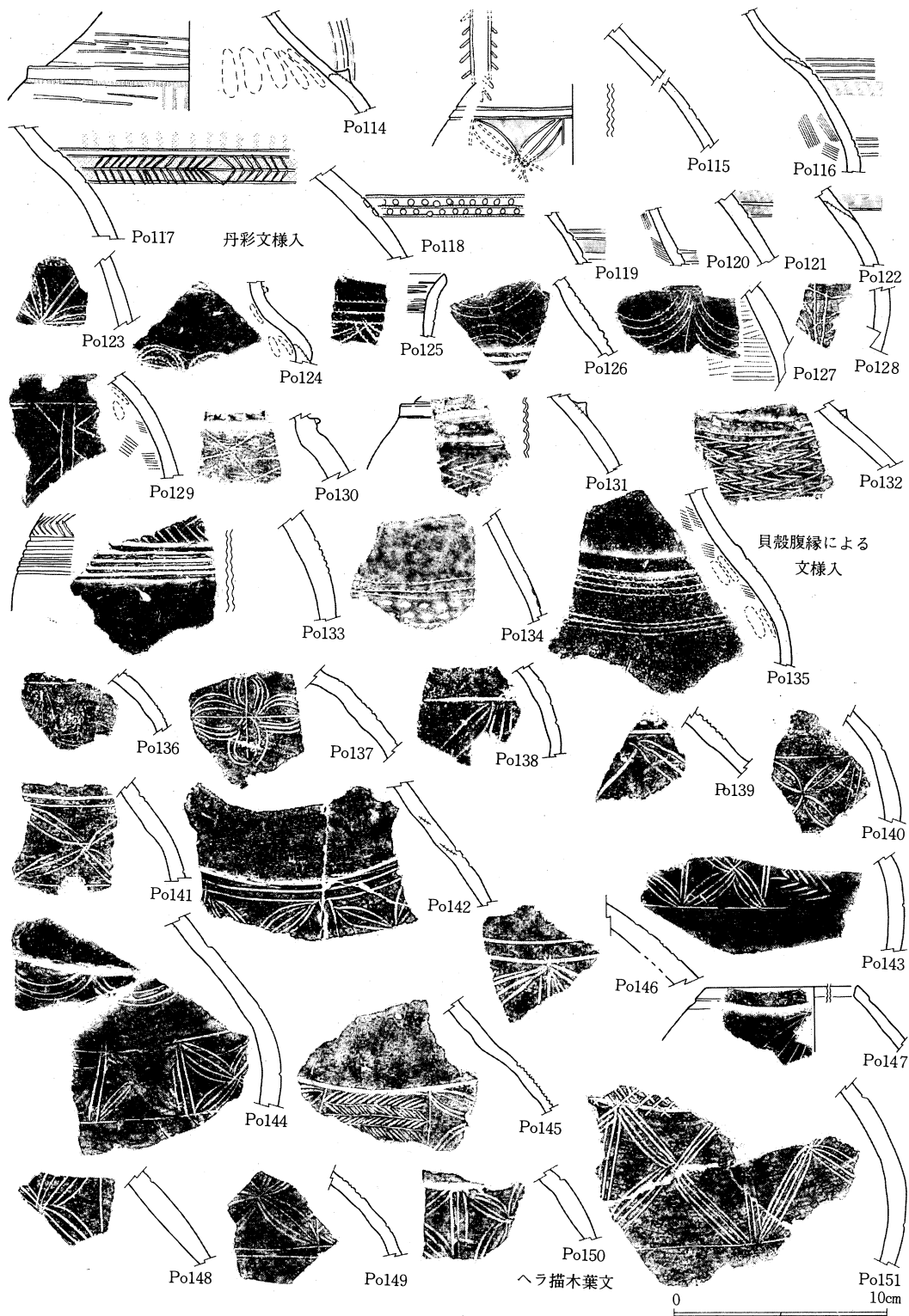
#### 弥生時代前期の土器 (挿図 325~332, 図版 73~78)

器種としては壺形土器, 甕形土器, 鉢形土器, 蓋形土器等がある。

壺形土器 (Po74~237) 口縁部の形態からほとんどの土器は2つに分かれる。壺A (Po74~95, 100~104, 231, 234) はゆるく外反する口縁部から「八」字状に開く頸部につづき、扁球形に張る胴部は安定した平底に終わる。外面は丁寧なへら磨き、内面もへら磨きあるいはハケ目で調整される。口縁部と頸部との境および頸部と胴部の境に段ないし

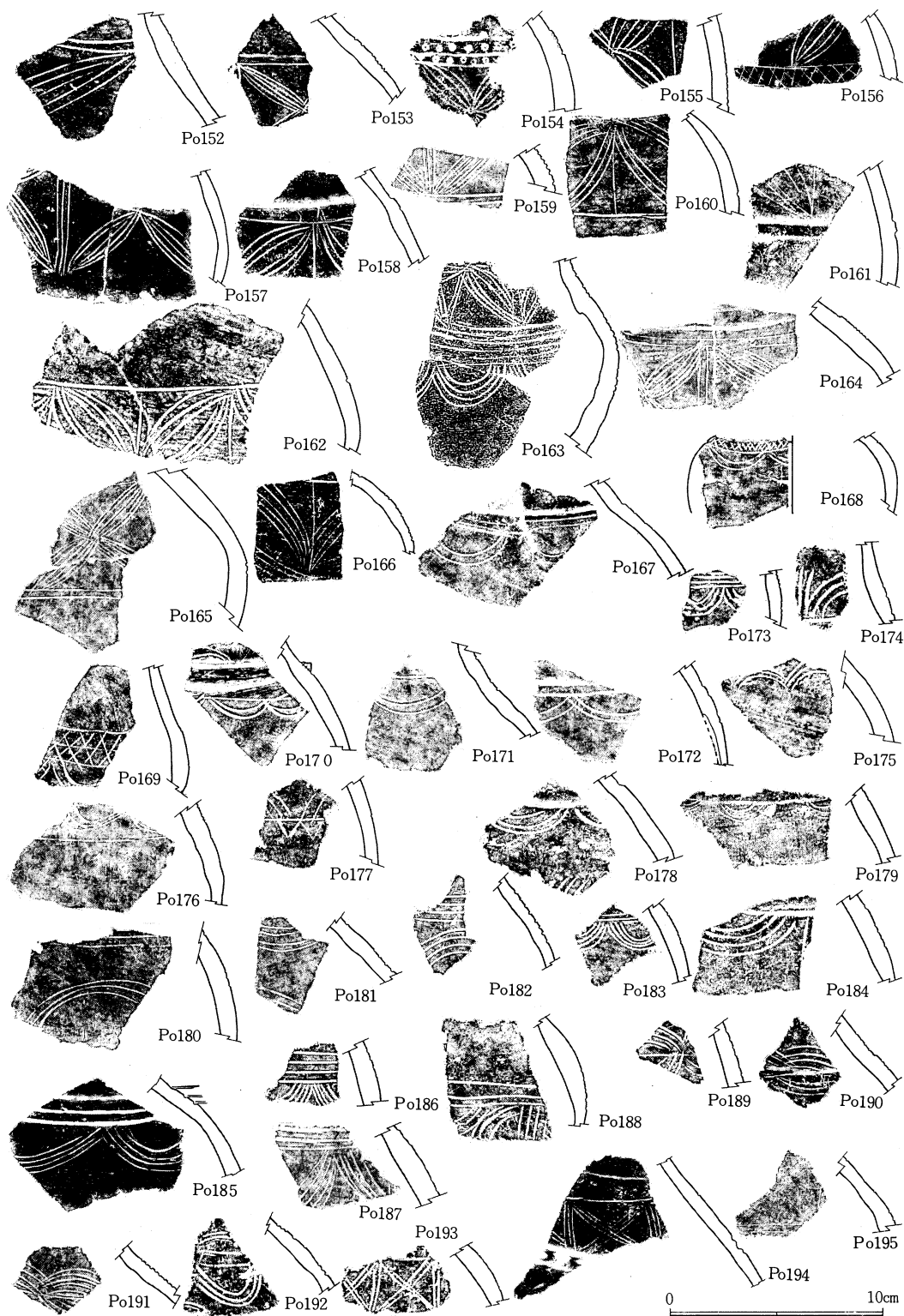


挿図325 弥生土器実測図その1 (S = 1 / 6)

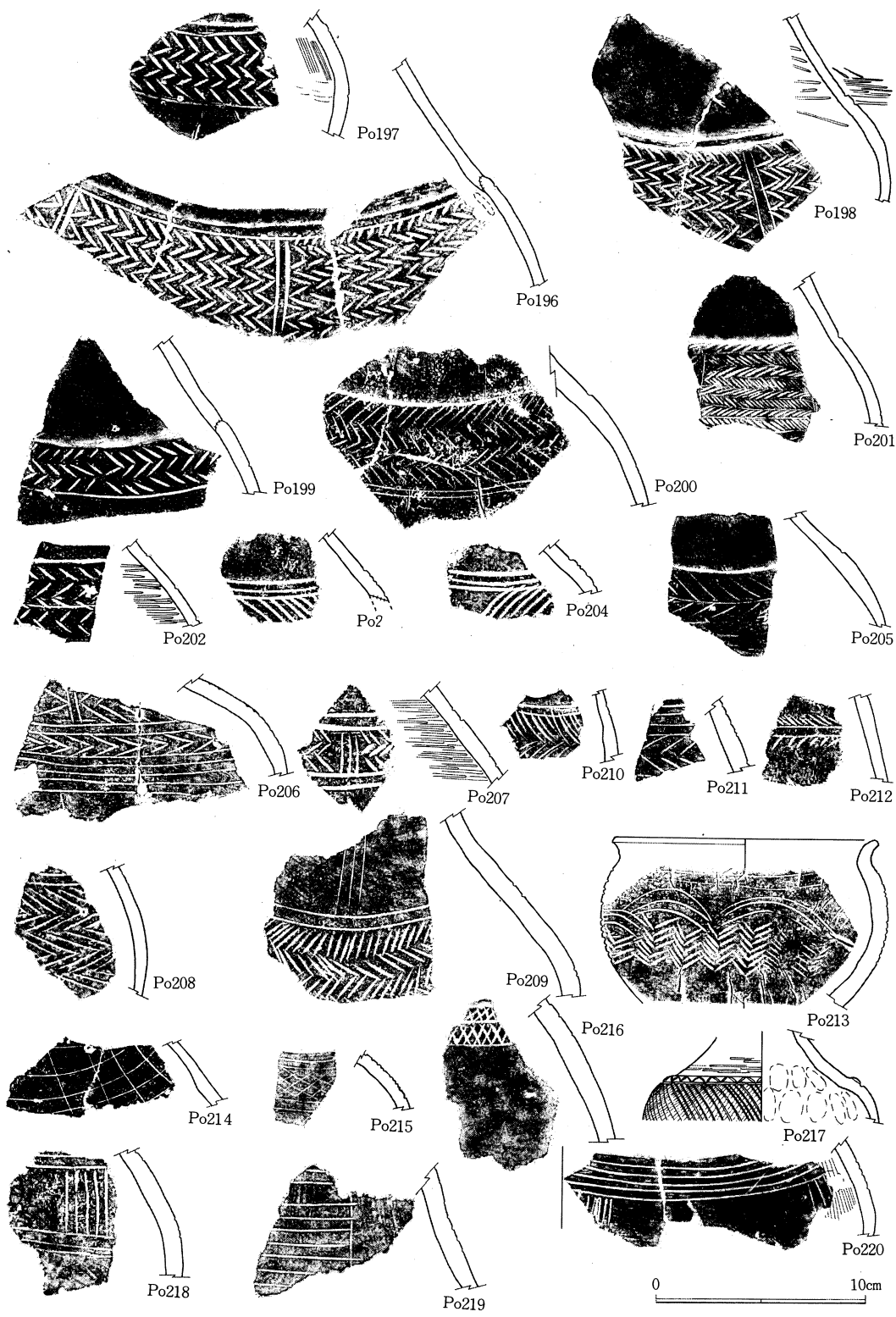


挿図326 弥生土器拓影その1 (S=1/3)

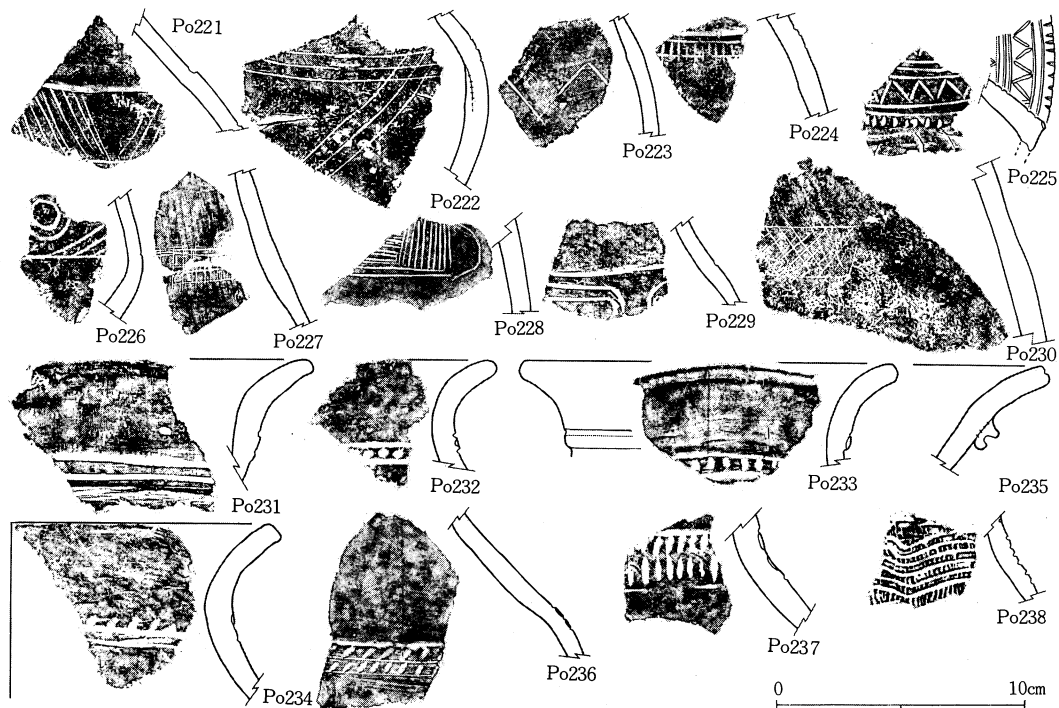




挿図327 弥生土器拓影その2 (S=1/3)



挿図328 弥生土器拓影その3 (S=1/3)

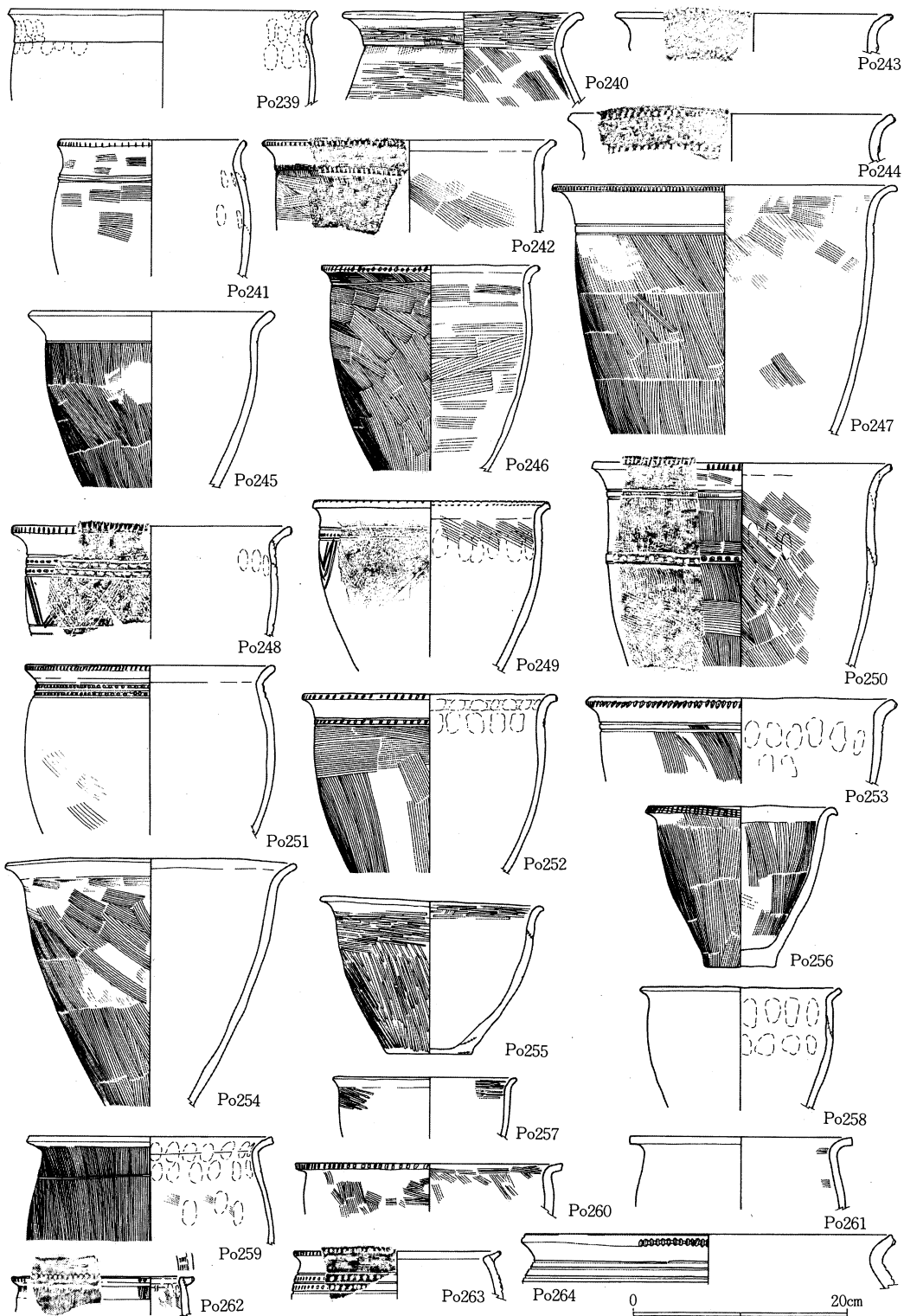


挿図329 弥生土器拓影その4 (S=1/3)

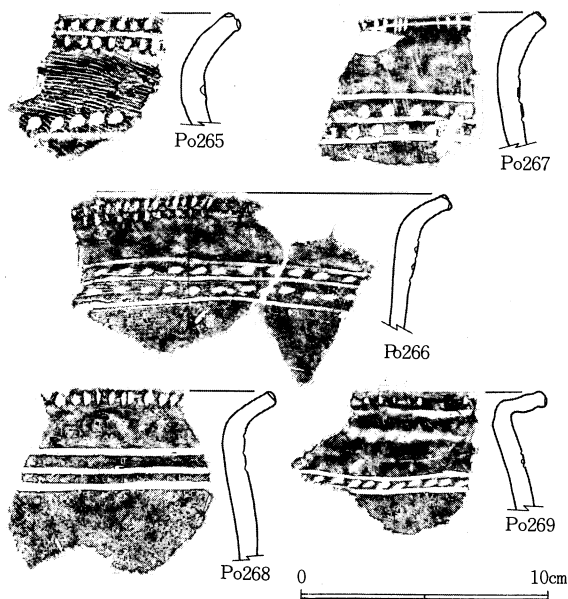
ヘラ描き沈線を施す。貼り付け突帯をもつものもある。沈線の上下部分を浅く削って突帯状にした削り出し突帯もみられる。無文のものも多いが、突帯あるいは沈線間に列点文を入れたり、さらにその下の胴部上半に羽状文や木葉文、重弧文等を施すものがある。P.100は胴部下位にまで重弧文を施している。主流はヘラ描きだが、貝殻腹縁を利用したものも認める。また丹彩文土器もある。壺B (P.96~97, 99) は口縁部がやや大きく外反して開き、頸部は筒状に長くなる。P.97は口縁端部が波状になっている。少数であるが内面突帯も認められる。P.99の内面突帯は一周せず途中でカーブして上方へぬける。頸部には刻目突帯などが施される。大型の壺形土器 (P.106~109) は短い口縁部で頸部に段、肩部に沈線を有するもの、大きく口縁部が外反するものなどがある。調整はヘラ磨きであるが、内面ハケ目も認める。その他、無頸壺 (P.110~112)、小型壺 (P.113) 等がある。

甕形土器 (P.239~269) 大小あるがいずれも口縁部は短くゆるく外反し、胴部はほぼ直線的にすぼまるものと、ややふくらんだ後すぼまって平底につづくものがある。(P.239~258) 調整はハケ目、ヘラ磨きが主である。無文のものもあるが、口縁端部に刻み目を入れたり、頸部にヘラ描き沈線を施したものがある。その他頸部に段を有するもの、さらに段に刻み目を施したもの、沈線間に刺突列点文を加えたものがある。これらの甕の他、口縁部が肥厚して逆L字状になるものも認められる。(P.259~263)<sup>註4</sup>

底部 (P.270~281) 円板を貼り付けた様な大きく安定した底部 (P.270, 271, 274)



挿図330 弥生土器実測図その2 (S=1/6)



挿図331 弥生土器拓影その5 (S=1/3)

部に双頭に分かれたつまみ (P<sub>o</sub>293), あるいは中凹の棒状のつまみ (P<sub>o</sub>294) を有するもの等がある。P<sub>o</sub>286 は口縁端部外面に断面三角形の貼付突帯がつく。小型蓋形土器は紐孔等をもつ。

以上、弥生時代前期の土器について概要を述べた。これらの土器は具体的な整理はできていないが、前期でも古い一群と中期に近い新しい一群に大別できよう。そして、量的には弥生時代前期でも新しい時期の土器が多いようである。これら弥生時代前期の土器と前述の刻目突帯文土器が同一の包含層内から出土している。刻目突帯文土器に弥生土器の特徴が認められるだけでなく、弥生前期の土器と共存するという事実を示す好例として 12 I・SK 01 内出土の弥生土器<sup>45</sup>がある。壺の胴部内側に甕の破片が入っていたもので、壺は頸部に 11 条、肩部に 6 条のへら描き沈線を施し全体になだらかな胴部をもつことから弥生時代前期でも中期前葉に近い新しい時期の土器と考える。これに対し共存していた甕は小型ではあるが、刻目突帯の分類によると A-4 a-III にあたると考えられ、胎土、焼成、調整を含め P<sub>o</sub>36 に類似している。このことから刻目突帯文土器は弥生時代前期の新しい段階まで存在していたと考えることもできよう。

さらに詳細な整理、他地域との関連など今後の課題としたい。

#### 中期の土器 (挿図 333, 図版 79)

絶対量は少なく壺形土器しか確認していない (P<sub>o</sub>295~P<sub>o</sub>298)

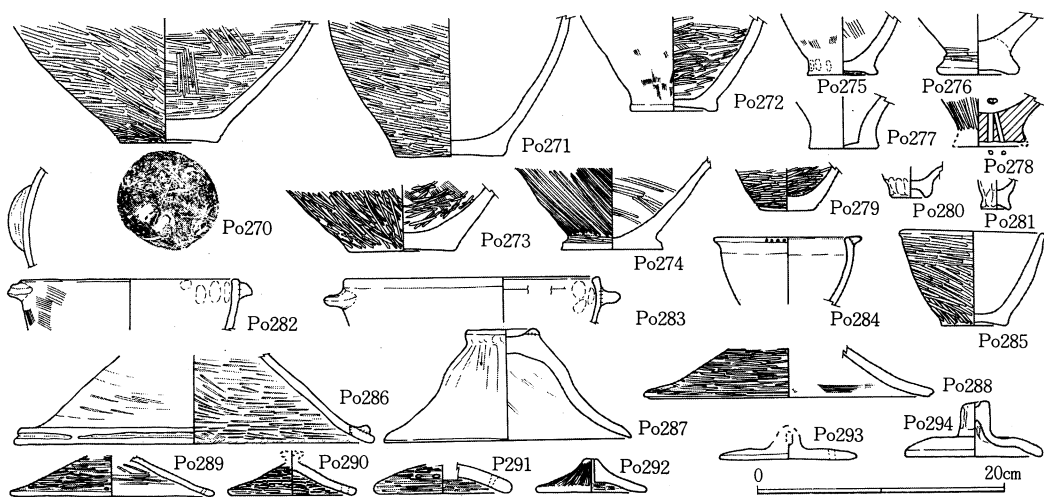
#### 後期の土器 (挿図 334, P<sub>o</sub>299~301)

これも量が少なく小片である。後期の特徴である口縁部に櫛描き波状文が施される。

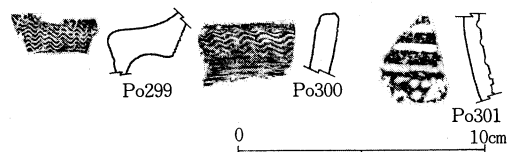
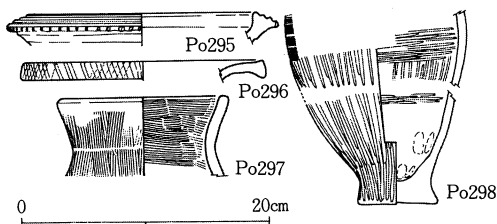
と底面が内側に凹む小型の底部 (P<sub>o</sub>272, 275, 276) に大きく分かれる。底面にへらにより「○」や「×」あるいは放射状に沈線を描いたものがある。また、ミニチュア土器の底部? (P<sub>o</sub>280, 281) もある。

鉢形土器 (P<sub>o</sub>282~285) 甕形土器とほとんど同じだが、口径に対して器高の低いもの (P<sub>o</sub>285), 内湾気味の口縁部に半円形の円盤状の把手が付くもの (P<sub>o</sub>282, 283), 口縁部が横方向に張り出すもの (P<sub>o</sub>284) 等がある。

蓋形土器 (P<sub>o</sub>286~294) 笠形を呈するもの (P<sub>o</sub>286~292), 平坦に近い蓋

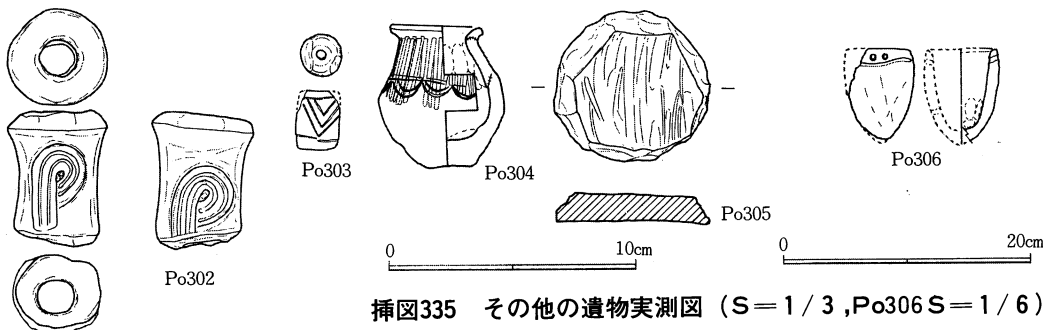


挿図332 弥生土器実測図その3 (S=1/6)



挿図333 弥生土器実測図その4 (S=1/6)

挿図334 弥生土器拓影その6 (S=1/3)



挿図335 その他の遺物実測図 (S=1/3, Po306 S=1/6)

その他の遺物 (挿図 335, 図版 79)

Po302は「P」字形の凸面に沈線を施す不明土製品。縄文時代の遺物とも考えられる。Po303は耳栓かと考える。Po304は肩部に重弧を施すミニチュア壺で弥生時代前期の遺物である。Po305は弥生土器片を円盤状に整えている。用途不明。Po306は陶損だろうか？

注1 家根祥多『長原遺跡発掘調査報告書 I』1979年 大阪文化財協会 第V章 第2節縄文時代 第i項 縄文土器』で行なわれた分類を参考にした。

注2 IV型は整理中1片も確認できなかった。一応可能性があるので分類した。

注3 刻み目は大きく、家根氏の御教示によれば指頭による刻み目と考えられる。これを氏の言う大O字状と考えるなら、他の刻み目は小さいので小O字状と言える。

注4 岡山大学大学院生(当時)秋山浩三氏の御教示によれば、Po262, 263は瀬戸内地方で弥生時代前期の新しい時期によく認められる個体である。

注5 「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 III」1981年 鳥取県教育文化財団 P270

末筆となったが本稿作成にあたっては、刻目突帯文土器について京都大学大学院生・家根祥多氏から温かいご教示をいただいた。記して厚く感謝します。

## 第2節 遺構外遺物について（挿図 336～338，図版 79・80）

遺構外より検出された遺物は多くみられるが，ここでは昭和 53 年度から 57 年度調査分で未報告のものを載せる。

そのうち P<sub>0</sub>1・6・13 については遺構内出土と考えられるものである。）

**壺** 複合口縁の壺（P<sub>0</sub>1・2），直口壺（P<sub>0</sub>3），無頸壺（P<sub>0</sub>4）

P<sub>0</sub>1 は大きく外反する口縁部にやや中ぶくらの頸部をもつ。口縁部，頸部の外面には竹管による円状の文様が施される。頸部の欠損端部がわずかに丸味をもって外反すること，胎土が精良であること，口縁内面の調整が丁寧なことなどから壺としたが，器台になるかとも考えた。復元した土器片は S I 138 からの出土である。S I 138 は古墳時代前期（長瀬 II 期）であるが，庄内式の甕と考えられるものが一点出土している。<sup>#1</sup> P<sub>0</sub>2 は小型の壺で，口縁部内外面と胴部外面に爪による「ノ」の字文がめぐる。P<sub>0</sub>3 は外面に半截竹管を利用した S 字状の文様が施される。<sup>#2</sup> P<sub>0</sub>4 は内湾する椀状の体部で，口縁端部を外へわずかにつまみだす。外面には有軸羽状文と無軸羽状文がめぐる。胎土・焼成などから壺と考えたが高坏の範疇に入るかもしれない。P<sub>0</sub>5・6 は壺片になると考える。ともに竹管を利用して文様が施されるが，P<sub>0</sub>5 は 6 条を一単位とした凹線間に貝殻腹縁による「ノ」の字状の文様がみられる。竹管文は凹線上に施される。

**甕** 「く」の字状口縁の甕（P<sub>0</sub>7～8）

P<sub>0</sub>7 は口縁端部をつまみあげる。内外面ともにナデ。胎土は精良で在他のものとする。焼成は良好。庄内式の甕と考える。この甕片は S E 01 から出土している。S E 01 の時期は古墳時代前期（長瀬 I 期）である。<sup>#3</sup> P<sub>0</sub>8 は口縁端部をわずかにつまみあげる。P<sub>0</sub>7 より新しい時期のものとする。P<sub>0</sub>9 は口縁部が外方へ開き，丸く終る。

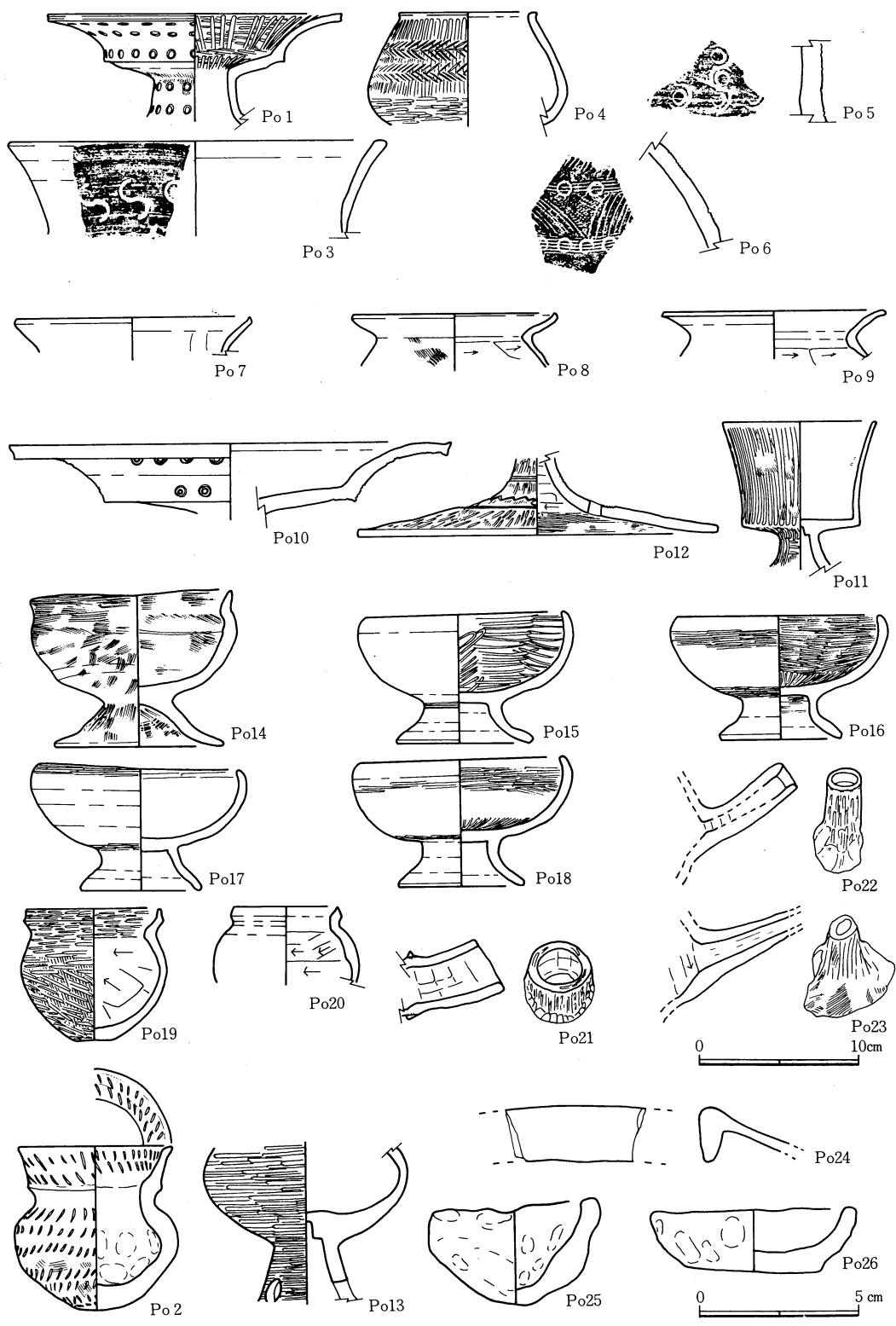
**高坏** いろいろな形の高坏がみられる（P<sub>0</sub>10～13）

P<sub>0</sub>10 は稜のある浅い坏部から口縁部が大きく外反する。口縁端部はナデにより凹む。外面には竹管を利用した二重円の文様が施される。P<sub>0</sub>11 はカップ形をした坏部。外面は磨きで胎土は精良。P<sub>0</sub>12 は裾部の大きく開く脚部。3 条と 5 条を一単位とする凹線間にヘラ状工具による鋸歯文がめぐる。P<sub>0</sub>13 は小型の高坏。調整は丁寧で胎土は赤っぽい。

**台付椀** 椀状の坏部と短かく外方へ開く脚部（P<sub>0</sub>14～18）

P<sub>0</sub>14 は口縁部が「く」の字状になる。口縁口唇部は数カ所カーブをもつ。胎土は粗く調整も雑で作りが悪い。S I 69 より出土している。S I 69 は古墳時代前期（長瀬 I 期）であるが，畿内系の土師器の出土がみられた。<sup>#3</sup> P<sub>0</sub>15～18 は椀に短い脚部をつけたような器形である。坏部内面は丁寧な磨きがみられ，胎土は赤っぽい。P<sub>0</sub>14 とは胎土・調整・作りともに異なる。

**鉢** 複合口縁をもつ小型の鉢（P<sub>0</sub>19・20）



挿図336 遺構外遺物図その1 (S=1/2・1/4)



P<sub>0</sub>19 は短く直立する口唇部と鈍く丸い稜をもつ口縁部で、底部は平らである。外面全面に磨きが施される。P<sub>0</sub>2 は破片で、小型の甕になるとも考えられる。

**注口土器** いずれも注口部のみである (P<sub>0</sub>21~23)

P<sub>0</sub>21 は外面が丁寧な磨きで胎土は精良。内外面ともに一部丹塗の痕跡が認められることから、もとは全面に丹塗がされていたと考える。P<sub>0</sub>22・23 とも外面に磨きはみられるが、P<sub>0</sub>21 に比べ作りが粗い。

**手焙型土器** 開口部の口縁上端部にあたると考える。端部は逆「L」字状を呈し粘土の貼り付けである (P<sub>0</sub>24)。

**手握ね土器** 椀状のもの (P<sub>0</sub>25) と皿状のもの (P<sub>0</sub>26) である。いずれも胎土は粗い。

**須恵器蓋坏** 蓋 (P<sub>0</sub>27・28)、坏身 (P<sub>0</sub>29~34)

P<sub>0</sub>27 は内外面ともに横ナデで、外面の天井部は末調整に近い。6 世紀末の頃の蓋と考える。P<sub>0</sub>28 は外面肩部<sup>注4</sup>前後がヘラ削り、内面横ナデ。天井中央部に輪状のつまみを有する。奈良時代の蓋と考える。坏身は、口縁部が逆「ハ」の字形で、高台が底部に「ハ」の字形に付くもの (P<sub>0</sub>30・31) と口縁部が S 字状のカーブで、高台が底部に「ハ」の字型に付くもの (P<sub>0</sub>32)、高台が底部に直立して付くもの (P<sub>0</sub>29) がみられる。P<sub>0</sub>33 は平底の坏で口縁部は逆「ハ」の字形である。底部はヘラ削り後ナデ。P<sub>0</sub>34 は椀状の坏部と底部に「ハ」の字形に高台が付く、調整は内外面横ナデ。皿に高台を付けたと考えるならば盤でもよいが、盤とするならば口径が小さいと考えた。坏身は奈良時代の頃のものと考える。<sup>注4</sup>

**須恵器壺、長頸壺 (P<sub>0</sub>35~37)、罍 (P<sub>0</sub>38)**

P<sub>0</sub>35 は底端部から「ハ」の字形に高台が貼り付けられる。肩部は丸味をもち張る。P<sub>0</sub>36 は肩部が角ばり張る。広口壺としてもよいと考える。P<sub>0</sub>37 は肩部両側に円盤状の粘土を貼り付ける。外面平行叩きの後ナデ、内面縦方向に横ナデ。P<sub>0</sub>35・36 は奈良時代の頃の壺と考える。<sup>注4</sup> P<sub>0</sub>38 は扁平な球形の胴部で平行叩きをナデ消し、平行叩きはほとんどみられない。肩部には櫛状工具による刻み目が施される。

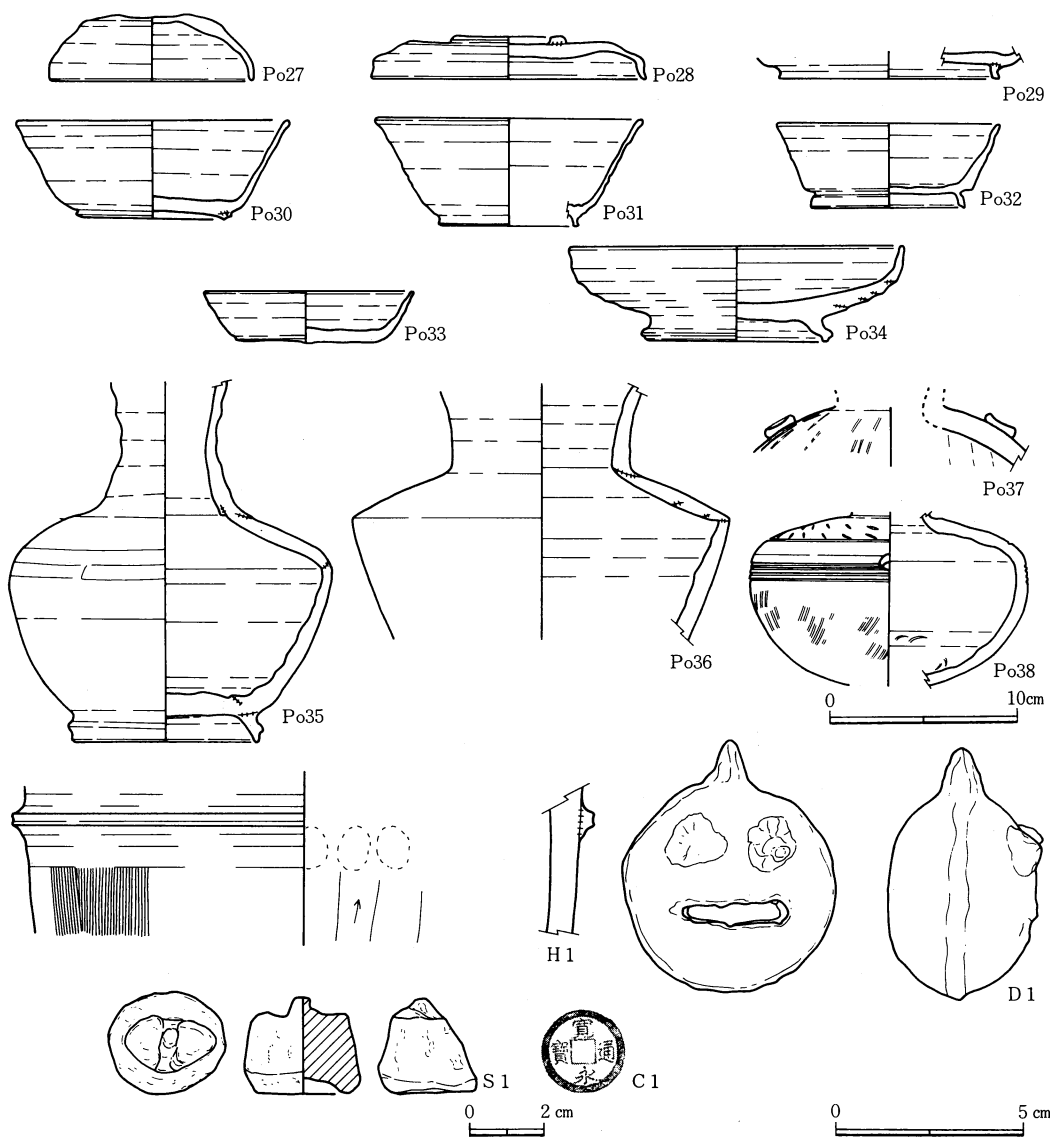
**埴輪** 円筒埴輪片 (H1)。外面縦ハケ、内面削り。

**土鈴** 目と口と角とを意識して作っている (D1)。振ると鈍い音がする。

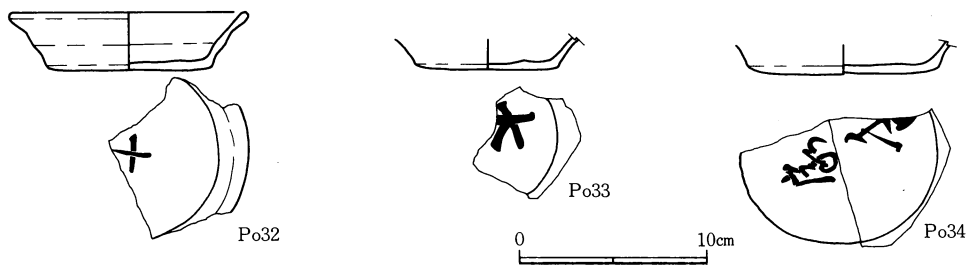
**銅鐸型石製品** 軽石で作られている (S1)。上部はつまみ状に削られ、下部は丸くえぐられている。銅鐸、あるいは鈴などを意識したものかと考える。

**古銭** 寛永通宝 (C1)。

注 1	『長瀬高浜遺跡報告書 V』	鳥取県教育文化財団	1983
注 2	『長瀬高浜遺跡 I』(概報)	〃	1978
注 3	『長瀬高浜遺跡報告書 III』	〃	1981
注 4	『陶邑 III』	大阪府教育委員会	1978



挿図337 遺構外遺物図その2  
 (須恵器・埴輪 S=1/4, 土鈴 S=1/2, 石製品・古銭 1/1)



挿図338 土壘下層土師器 (S=1/4)

### 第3節 石器・石製品（挿図 339～345，図版 80）

5年にわたる発掘調査で出土した石器・石製品は数量とも多く、器種も様々である。当遺跡が古くは縄文時代晩期にさかのぼる大規模な複合遺跡であり、石という素材が最も身近で手軽な材料であるから当然の事かも知れない。特に鉄器使用の一般化する古墳時代前期以前は石は万能の道具であろうし、またそれ以降現代に至っても石は道具として各所に活用されている。このことは古墳時代については当遺跡の竪穴住居跡の伴出遺物に土師器・鉄器にまじって様々な石器がみうけられることから分かる。しかし、それらの石器・石製品の大半は遺構外出土であり、しかも散乱していて原位置を保つような例は少ない。ここでは従来の分類に基づき当遺跡出土の石器・石製品をいくつか紹介する。

#### (1)石斧（S 1～14）

打製・磨製とも存在するが、個体数は磨製が大半を占める。完形品は少なく、一部あるいは大部分を欠くものが多い。S 2・3の太型蛤刃石斧，S 6の乳棒状石斧，S 1の打製石斧は表面，あるいは側面に部分的に凹みや抉りがあり，着装部がよく分かる。S 4・6は「へ」の字状に密着して横たわっていたことより人為的に置かれた（捨てられたか？）原位置を保つものと思われる。石斧は製作に手がかかり，その上切れ味は良いにしても刃こぼれ，破損が著しく，S 5のように壊れた面を研磨して再利用しているものもある。扁平片刃石斧や，柱状片刃石斧も出土している。S 9には製作時石材を切り離すのにつくられた施溝が認められる。S 13・14は抉り入りの石斧である。

#### (2)敲石（S 15～17）

完形品も多いが破片はさらに多い。長円形・楕円形を呈し，重さも50～200gと持ち易いものである。台石あるいは石皿とのセット関係で出土しているものはなく，住居跡内あるいは遺構外より単独に出土している。石材は河原石状の安山岩が多く，表面に光沢を持つものもあり，磨石と非常によく似ている。上下端部にネズミ歯状の痕が残ることから敲石としたが，他にも違った使われ方をしたものと思われる。敲石の中には持ち易くするため両側を削っているものもある。S 15～17は石球を思わせる石器であるが，所々に使用遺が認められ敲石として扱った。

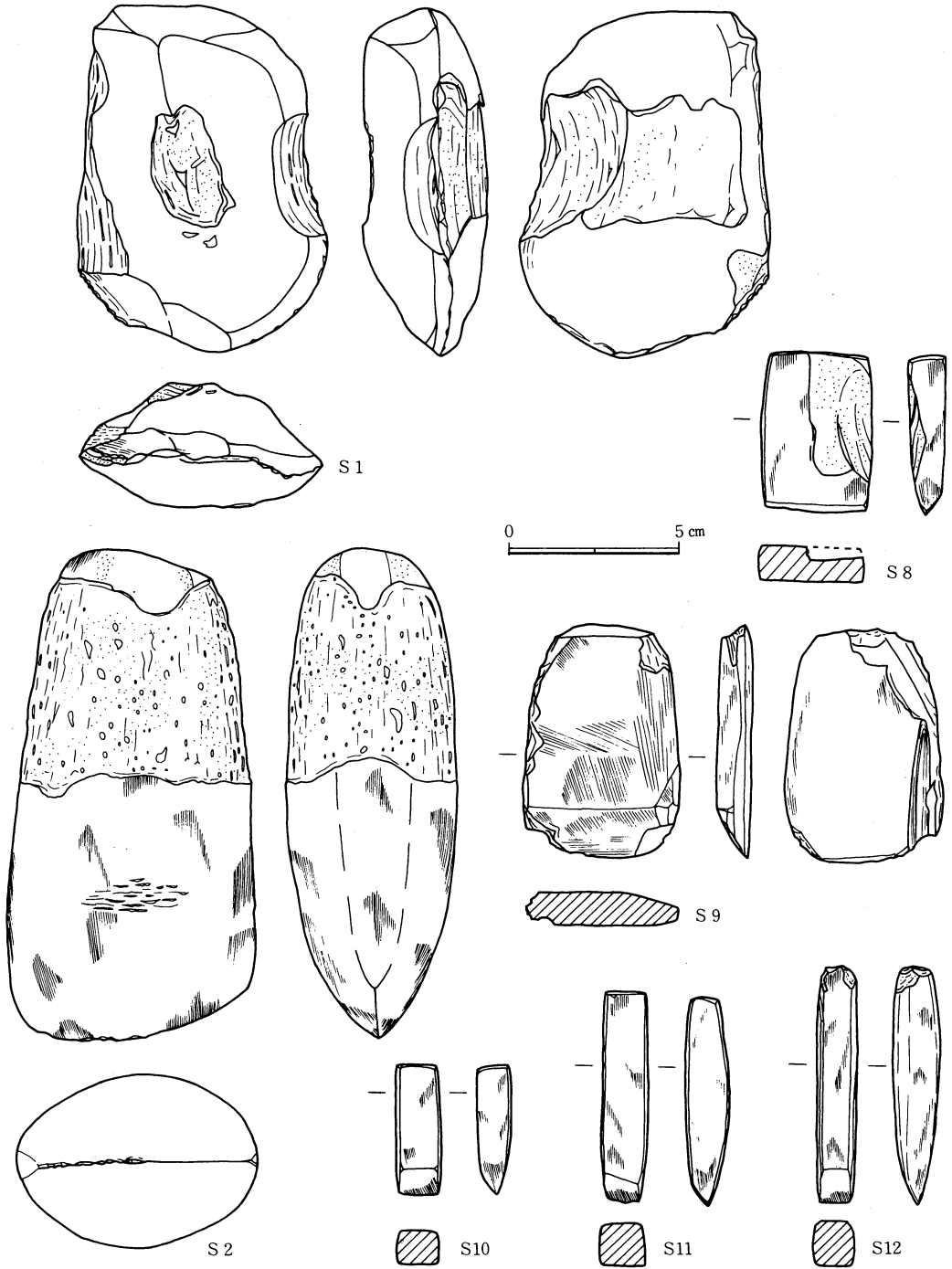
#### (3)石皿（S 18）

比較的出土が少ない。S 18は粗粒の斑晶をもつ安山岩で，中央部が浅く凹んでいる。側には敲石としても使用されたらしく痕跡が認められる。同様な石器がS I 146からも出土している。敲石とセット関係があると考えするには出土が少ないように思われる。

#### (4)砥石（S 19～24）

最も数量が多く，大きさ・重さも広きにわたる石器である。遺構出土の数も多く，当遺跡の竪穴住居跡20棟より25点出土している。砥石は単に石器・鉄器を研磨するのに使われる

だけでなく、骨角器や木器の整形，研磨にも使われ，その形状も幅広の凹みを持つもの，  
 線条痕のあるもの，平坦でなめらかなもの，中央部が弓状に反るもの等様々である。弥生  
 前期の竪穴住居跡S I 156や，他の古墳時代の竪穴住居跡出土の砥石と現代のそれとの間

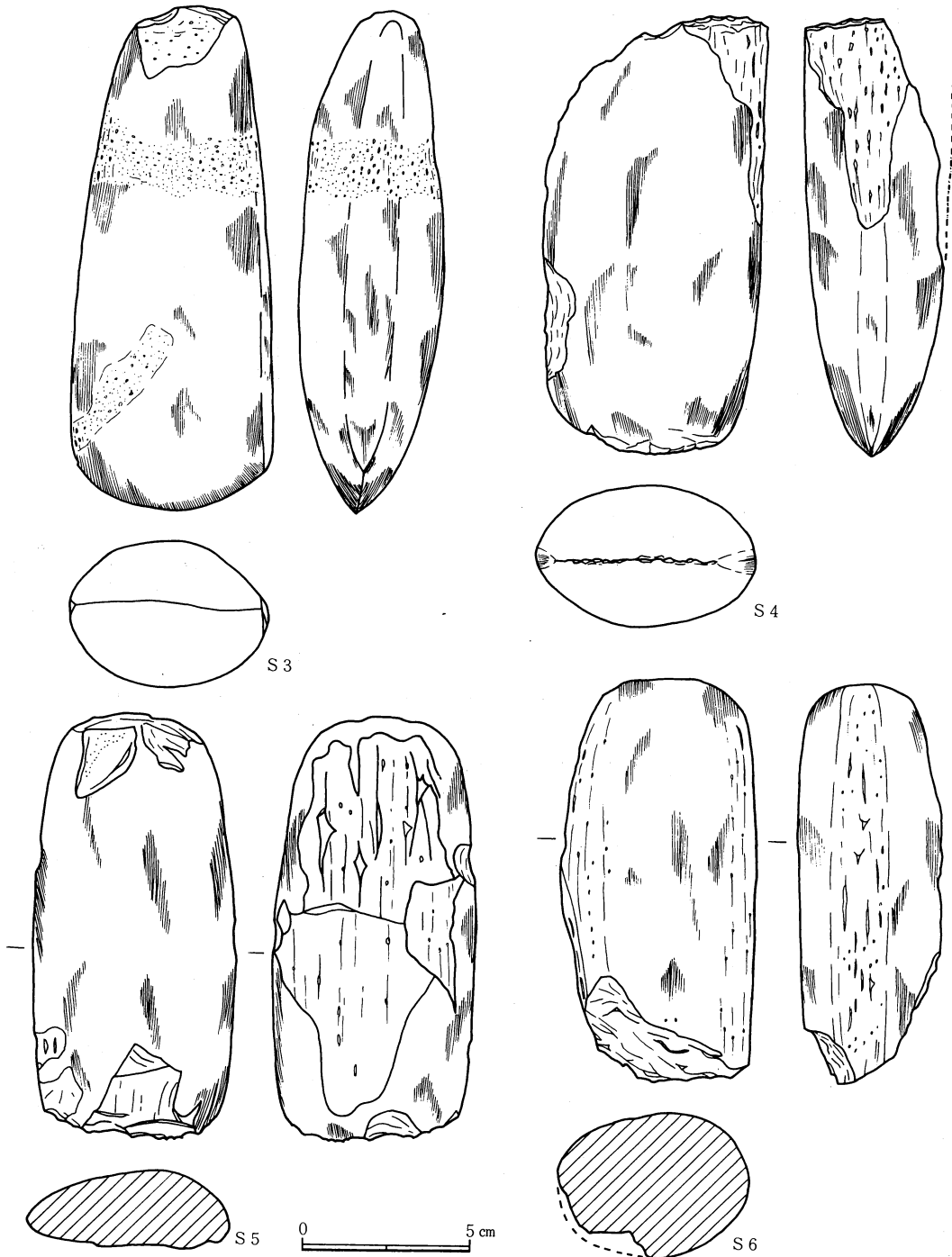


挿図339 石斧実測図その1 (S=1/2)

に違いは認め難く、砥石は少なくとも弥生時代以降普遍的な形態をとる石器のようである。

(5) 施溝軽石 (S 40~42)

軽石はかなり多く出土しているが、道具としての使用の有無は判定し難い。線刻とか、

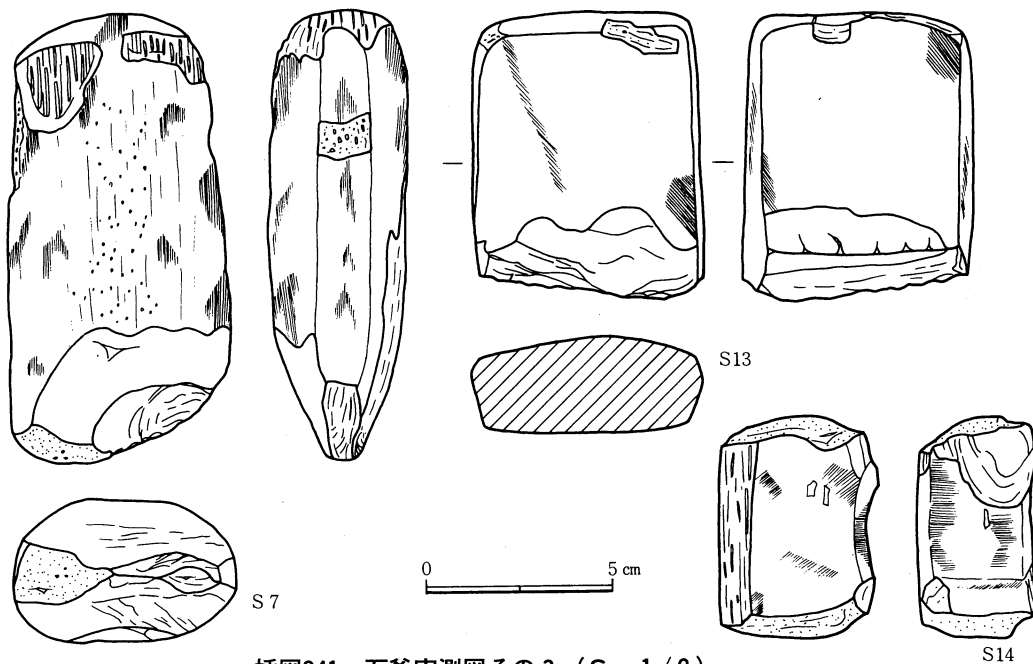


挿図340 石斧実測図その2 (S=1/2)

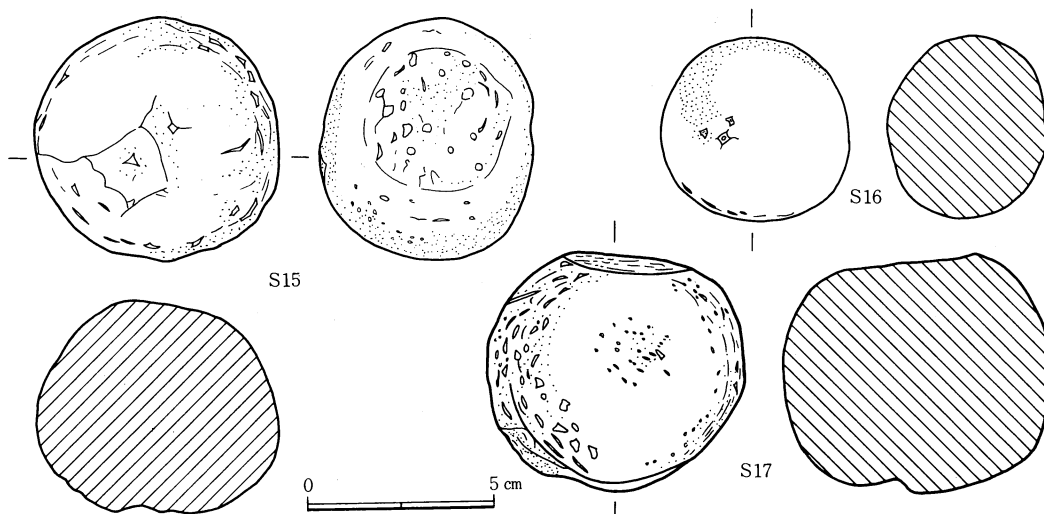
擦痕のあるものを石器として3点載せた。使用法は鉄器・石器・木器等の研磨，あるいは網漁，釣漁の浮子が考えられよう。

(6)石鏃 (S 25~39)

石鏃は他地方の遺跡出土例が多く，研究もかなり進んでいて，時期的変遷とか地域性が比較的容易に分かる石器である。材質は当遺跡ではサヌカイトが大半であり，黒曜石，粘板岩がそれに次ぐ。ほとんどが無茎式であるが，1点のみ有茎式(黒曜石製)も出土してい



挿図341 石斧実測図その3 (S=1/2)

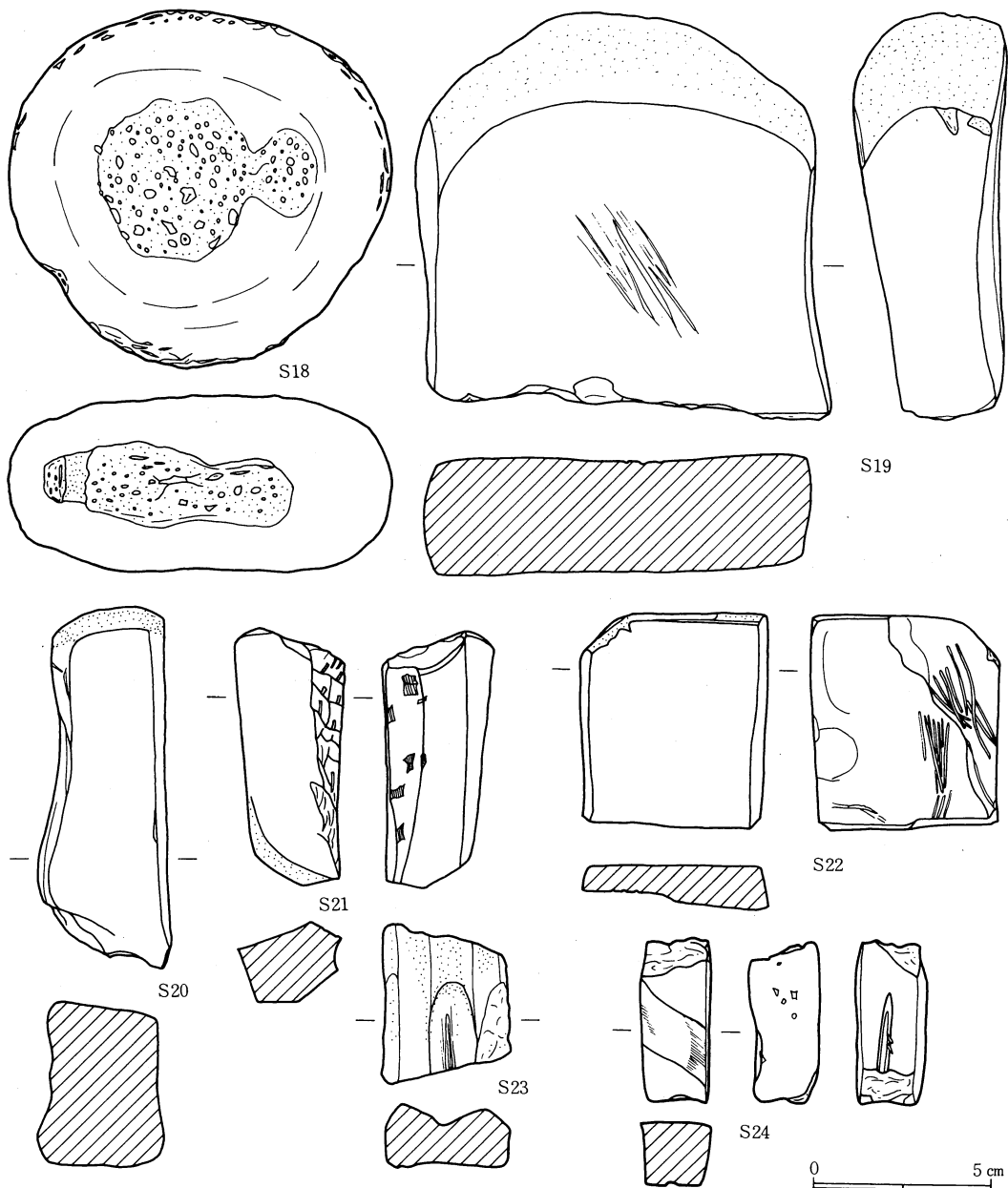


挿図342 石斧実測図 (S=1/2)

る。また打製のものが多いが、S 36 には局部に研磨痕が認められる。碧玉製の磨製石鏃も出土しているがこれは実用性に欠けるものである。大半の石鏃は凹基無茎鏃であり、大きさは長さ1.7~4.3 cm, 幅1~3 cm, 重さ0.35~3.45 gである。S 33~35は軽い段をもつ5角形状の無茎鏃であり、縄文時代晩期の近畿地方に特徴的なものである。

(7)その他の石製品 (S 43~47)

用途不明だが明かに使用痕,加工痕の認められる石製品も多い。S 46は半壊しているが、



挿図343 石皿・砥石実測図 (S = 1/2)

表面には全面研磨が認められ、しかも上端面に小孔が施されている。S 44 は打製で一部に突起や浅い溝が認められる。S 45 は下端部に敲石としての使用痕、側面上方には抉り状の擦痕が残る。その他石匙、石庖丁、ナイフ状石器、石刃、石剣等も少ないながらも出土している。

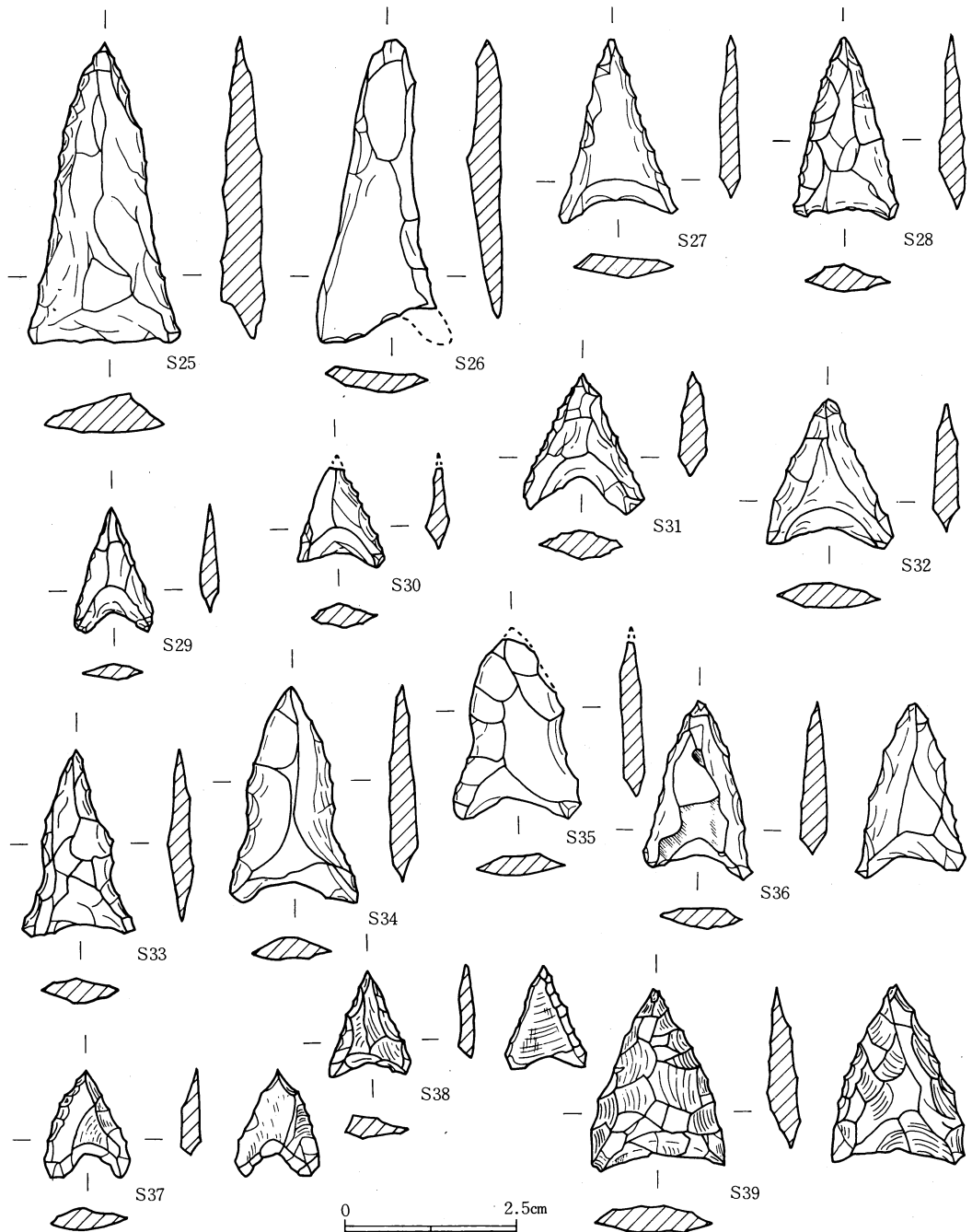
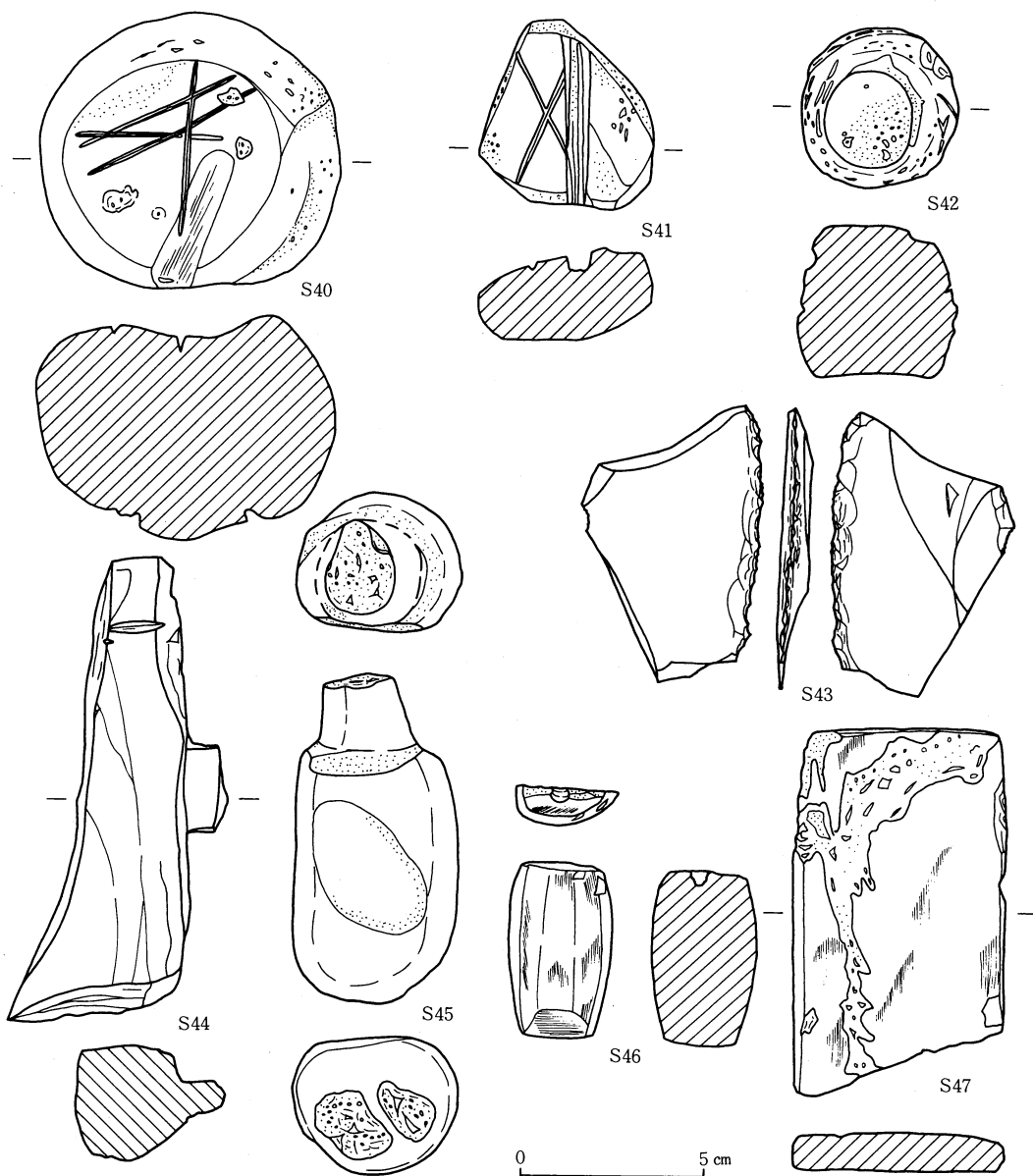


插图344 石鏃実測図 (S=1/1)



以上手もとにある資料をいくつかピックアップして紹介して来たが、昭和52年～55年度のほとんどの遺物については見る機会がなく、器種各々の総体的研究は现阶段は断念せざるを得なかった。また遺物の中には「石器・石製品」以外の、知られざる「石器」も数多く存在していようから、石器・石製品の全体的な把握は極めて困難と言わざるを得ない。もっとも広い砂丘地に大小の石が存在すること自体自然では理解できない事であり、そう考えれば、当遺跡出土の石は何らかの目的で人為的に運ばれて来たものであり、石器でないにしても単なる「石」ではないことは間違いない。それらの石の供給地は分らないが、そ



挿図345 施溝軽石・その他の石製品実測図 (S=1/2)

の形状、材質から天神川流域が考えられる。また黒曜石については隠岐島があげられる。碧玉については近くにそれを産する地域を全く知らず、供給地は今後の課題として残ろう。

#### 第4節 土錘（挿図 364・347，図版 80）

52年8月より57年11月に至る5年余りの調査で出土した土錘の数は明確にはわからないが数百にのぼると思われる。そこで今回長瀬高浜遺跡出土の土錘を主に形態分類を中心にまとめてみた。

一般に土錘の分類は漁網との着装技法から土製品の縦方向に孔を貫通させたもの（管状土錘）、土製品の表面に溝状のものをめぐらしたもの（有溝土錘）の二つに大別される。前者は土錘の管の中に網紐を通して後者は溝に網紐をまきつけて使用したものであろう。この他棒状土製品の両端に貫通孔を施したもの（棒状土錘）がある。この種は主に瀬戸内海沿岸を中心とした土器製塩遺跡で出土をみており当遺跡では例がない。また管状土錘と有溝土錘の両方の機能を備えたもの（有溝管状土錘）もある。この種は当遺跡でも一点だが出土している（D 31）。

さて当遺跡の土錘をみるとその多くは管状土錘であり、しかもさまざまな形態をしている。以下図と照らしあわせながら考察していく。D 1～5は長さに対して横幅が $\frac{1}{2}$ 以上で縦断面が楕円形あるいは隅丸長方形をなすものである（タイプA）。重量140gのもの（D 1）から3.5gのもの（D 5）までである。このタイプは出土数は少ない。D 6は縦断面が扁平な球形をなすもので稀少な例である。D 7～9は長さに対し横幅が $\frac{1}{2}$ 以下で縦断面が菱形に似たものである（タイプB）。このタイプは当遺跡でも多数出土しており、D 7は重量470gと最大級のものであり、D 9は2gと小さいものである。D 10～15は縦断面が長方形をなすものである（タイプC）。D 10は280gと大型だがその他は30g以下のものばかりである。D 11はタイプA、タイプBの中間的形態をなすものである。これに類するものは多く出土している。D 16～19は縦断面が正方形に近いものである（タイプD）。D 16, 17は孔径が大きく、D 18, 19は小さい。D 20～24は断面が球形のものである。（タイプE）。D 20はこのタイプで最大のもので孔径も大きい。他はほとんど30g以下で重量に均一さがみられる。このタイプはいわゆる土玉との区別は明確ではない。以上当遺跡出土の管状土錘について形態上さらに細分類は可能ながらA～Eの5タイプに分けることができた。

有溝土錘は管状土錘に比べ出土数は少ないがそれでも20～30は出土している。D 25・26は縦方向に幅広い溝が一条めぐるもので、これに類したものは胎土も似ており出土範囲もきまわってわりによりまとまって出土している。D 27・28は有溝土錘の範疇に加えたが別にしてもよからう。仮に有溝直交孔土錘とでも名づけよう。このタイプは重量70～170gの範囲で10点ばかり出土している。D 21は不完形であるが細く浅い溝がみられる。D 30は報告書Vで報告されたもので、長軸に4本短軸に3本の溝が走り表面にはハケ目、磨き調

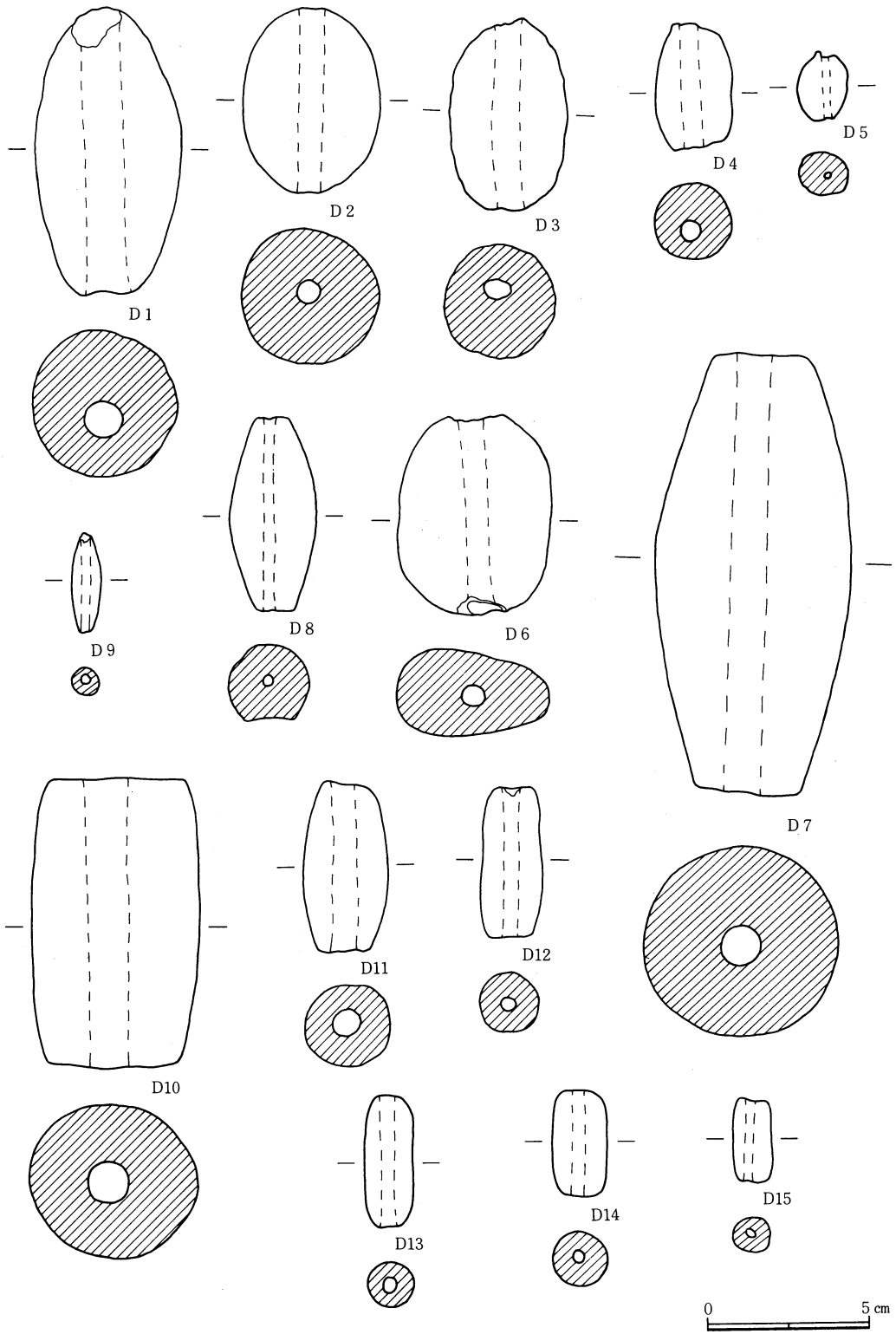
整がなされている。これと同種のものが不完形ではあるがもう1点出土している。これらを土錘として用いたかは疑わしい。D 31は唯一の有溝管状土錘といえるものである。長軸に2本、短軸に2本の溝がめぐり、長軸方向に孔が貫通してある。

長瀬高浜遺跡出土の土錘は、出土地の多くが遺構外であり、遺構に伴出したものを除けば、それらは弥生前期から中世に至るどの時期の遺物としてもおかしくはないものである。それは土錘、とりわけ管状土錘に関しては、古代から現代までほとんどその形を変えることなく用いられているからである。今回当遺跡出土の土錘を紹介しそれらを形態上分類したにとどまった。今後さらに土錘に関する研究がなされることを願う。

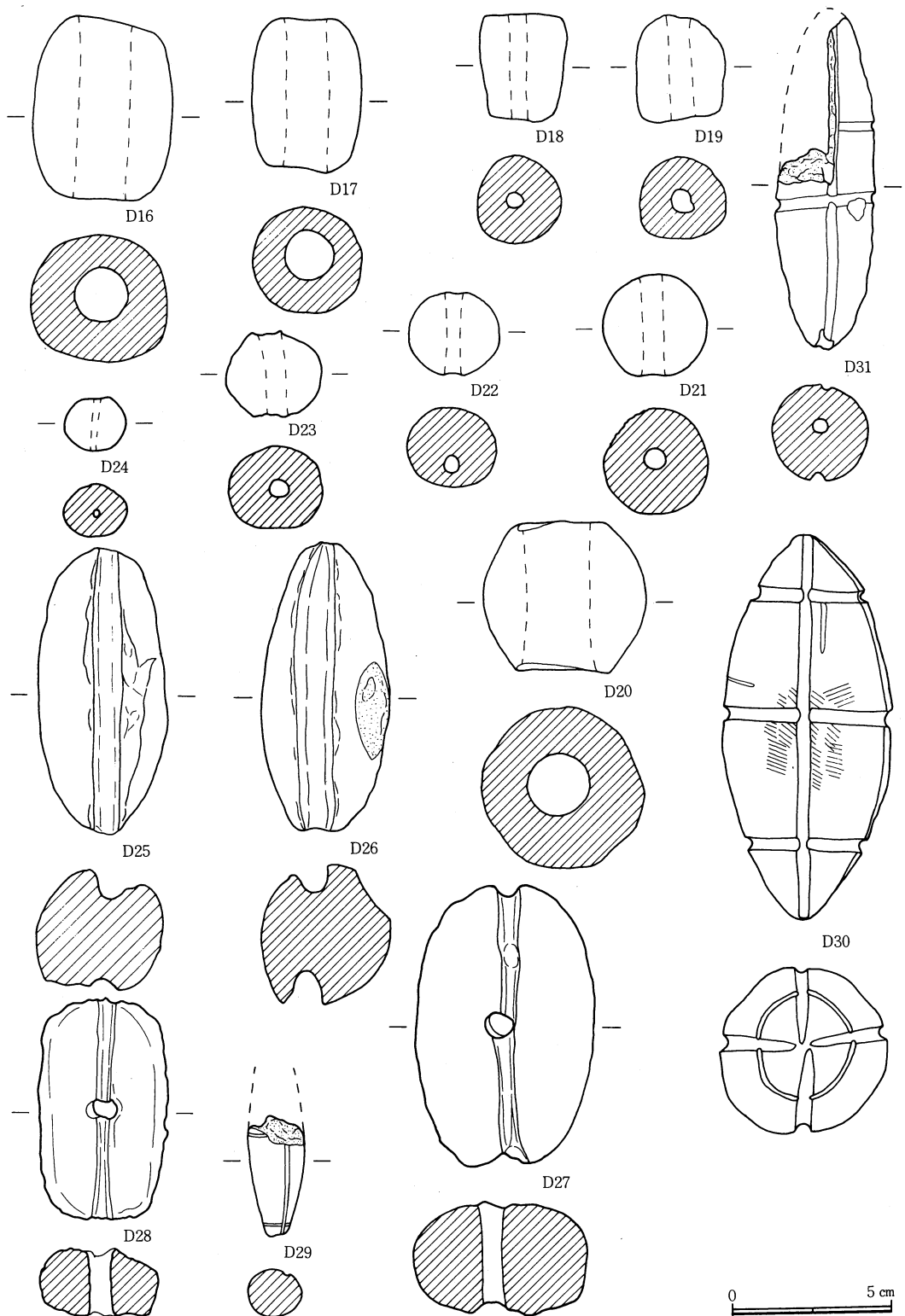
番号	長さ	幅(径)	孔径	溝幅	重量	出土地・備考
D 1	8.8	4.5	1.2	—	140	16 H・NWG 黒褐色土中
2	5.7	4.2	0.7	—	100	1号墳主体部周辺・黒斑あり
3	5.9	3.5	0.6	—	70	20 D黒砂中
4	3.9	2.3	0.6	—	20	10 J, SWG
5	2.0	1.5	0.2	—	3.5	14 G, SWG
6	6.2	4.7	0.7	—	78	19-D黒砂直上
7	13.5	6.0	1.1	—	470	20 D, NWG 当遺跡最大
8	5.9	2.5	0.3	—	30	10 A 端面カット
9	3.0	0.9	0.3	—	2	11 B, NEG 当遺跡最小
☆10	9.0	5.2	1.2	—	280	11 I・S G 40 (長瀬II期古)
11	5.2	2.6	0.8	—	30	10 E・SWG 橙褐色
12	4.7	1.8	0.4	—	17	19'Eの表砂中
13	3.2	1.7	0.3	—	9.5	11 B・NEG
14	4.0	1.4	0.4	—	8	10 B・SEG
15	2.6	1.2	0.3	—	3.5	12 F
16	5.7	4.4	1.7	—	100	10 B・SWG 黒斑あり 孔径大
17	4.7	3.4	1.5	—	50	19-E・19'-D 孔径大
18	3.3	2.6	0.5	—	27	1号墳主体部周辺
19	3.3	2.7	0.6	—	18	1号墳墳丘C区、孔のだぶつきがみられる
20	4.7	5.0	2.0	—	94	10 E・SEG 孔径最大
☆21	3.2	3.3	0.6	—	29.5	14 G・S E 02 井戸跡 (長瀬II期)
22	2.6	2.8	0.6	—	17	10 B・NEG
23	2.7	3.0	0.6	—	18.5	20 F・SWG
24	1.7	1.9	0.2	—	5	12 F, IIC
25	8.9	3.9	—	0.8	112	10 C・SEG
26	9.0	4.0	—	1.0	119	10 D・NWGS X 08 C区 カット状の傷痕あり
27	8.6	5.6	0.8	0.6	170	20 F・S K 03?
28	6.8	4.0	0.6	0.6	70	11 D・NEG
29	3.7	1.8	—	0.2	(8)	10 B・NEG
☆30	12.0	5.2	—	0.4	295	20 E・S I 117 (長瀬III期)
☆31	10.4	3.0	0.4	0.4	(60)	15 I・S I 85 (長瀬III期)

長さ(cm)・重量(g) ☆遺構出土のもの

表7 土錘一覧表



挿図346 土錘実測図その1 (S=1/2)



挿図347 土錘実測図その2 (S=1/2)

参考文献

「考古学論考」—弥生・古墳時代の漁具— 和田晴吾

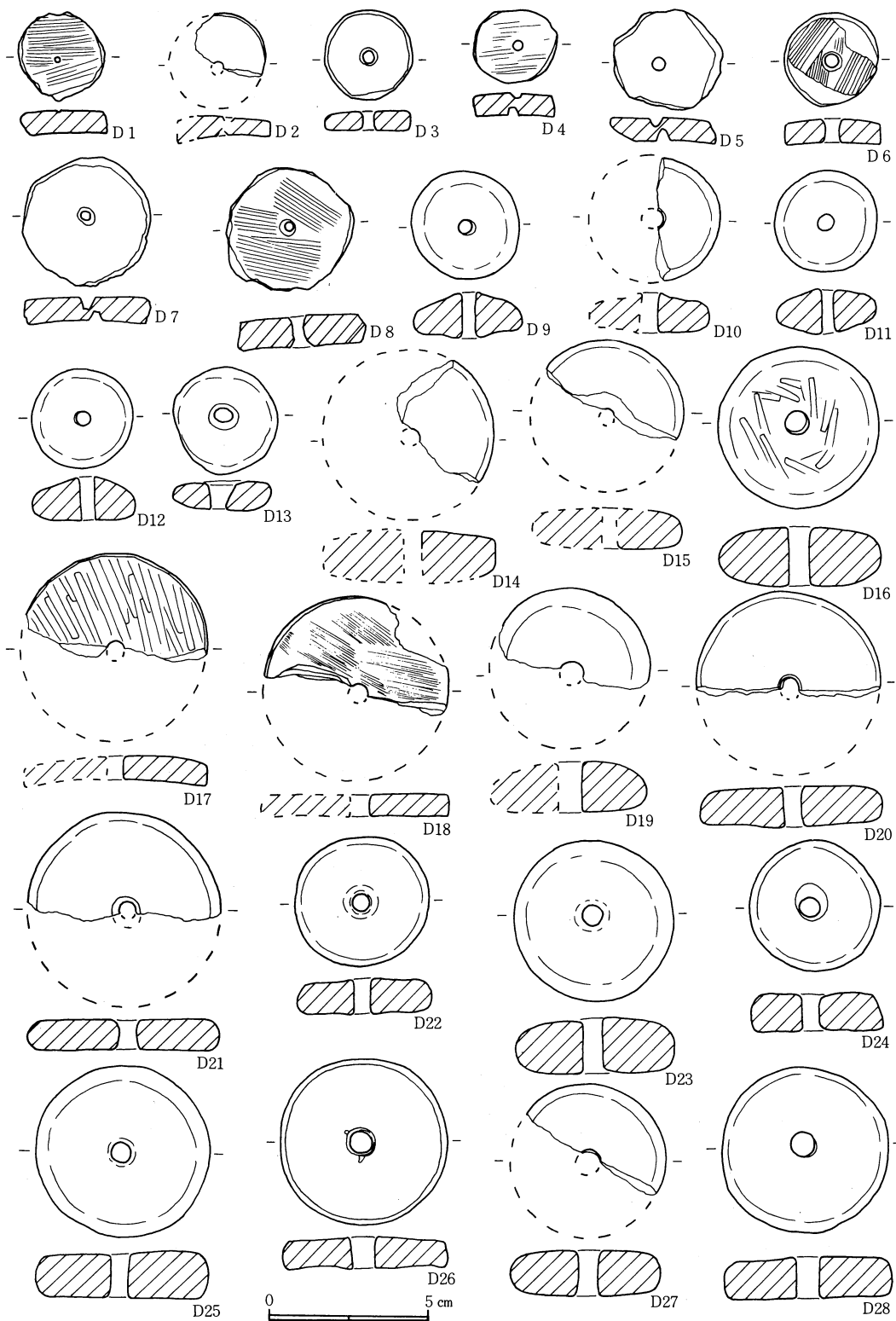
「縄文時代における網漁業の研究」 渡辺誠

第5節 紡錘車（挿図 348・349，図版 80）

当遺跡で紡錘車は44個出土している。遺構の中から出土した紡錘車はD2, D26, D29, D31, D36～D38などで、その他は黒砂層中、遺構付近および上面の出土である。D1～D8とD17は弥生土器片を転用したもので、D1～D6は径が4.0cm未満の小型のもの、D7は径が5.5cm以上のものである。D1・4・6・8は土器のハケ目が残る、D17はヘラ磨きが残る。D1・4・5・7は孔が貫通しておらず、D2は不明である。土器片転用のものはいずれも縁は形を整えるため削ってある。B9・11・12・14～16は胎土・焼成などから弥生時代のものとする。D18は磨製(粘板岩)の紡錘車で、両面、縁がやや荒く、擦られている。D10・13・19～37は土製紡錘車で、D10・13は小型、以下は中・大型のもので、断面形はいずれも隅の丸い方形か、わずかに算盤玉状をなす。D38は円錐形をなし、縁もカットされる。D39は滑石製、截頭円錐形の紡錘車で、孔は両側からあける。D

番号	形態材質	径・厚さ・孔径(cm)	重量(cm)	出土地	番号	形態材質	径・厚さ・孔径(cm)	重量(g)	出土地
D1	弥生土器転用	2.7 0.7 —	5.9	20 E	D26	土製円板	5.2 1.0 0.7	—	S I 169 上面
D2	〃			S I 116	D27	〃	4.7 1.5 (0.6)	—	8号墳C区
D3	〃	2.7 0.7 0.4	4.8	20 D・NWG	D28	〃	5.1 1.3 0.7	42.0	10 B, SWG
D4	〃	2.6 0.7 —	5.1	20 E	D29	〃	5.1 1.2 0.6	—	S I 160
D5	〃	3.3 0.8 —	13.6	21 D	D30	〃	4.8 1.5 0.7	—	1号墳墳丘C区
D6	〃	3.0 0.7 0.4	6.3	10 BSK 88 下層	D31	〃	4.5 1.4 0.6	26.1	20 E, S I 04
D7	〃	5.0 1.0 —	16.5	20 D	D32	〃	5.1 1.5 0.6	—	10 D, NWG
D8	〃	4.0 1.0 0.3	17.0	1号墳周辺	D33	〃	4.6 1.4 0.6	—	20 C, NWG
D9	土製円板	3.4 1.4 0.4	15.5	1号墳第3ベルト	D34	〃	4.9 1.1 0.7	25.8	11 C, NWG
D10	〃	4.0 1.2 0.5	—	—	D35	〃	4.6 1.4 (0.5)	—	1号墳表採
D11	〃	3.2 1.4 0.3	13.1	—	D36	〃	(5.0)(1.4)(0.6)	—	S I 160
D12	〃	3.2 1.4 0.4	14.0	1号墳墳丘C区	D37	〃	4.5 1.7 0.6	34.0	15 KSK 11
D13	〃	3.4 1.0 0.5	11.5	10 E, SX 08	D38	土製円錐形	(6.0) 2.1 0.5	—	10 F S I 03
D14	〃	(5.3)(1.2)(0.6)	—	10 D, SEG	D39	截頭円錐形	4.2 1.0 0.4	22.2	滑石
D15	〃	(4.7)(1.2)(0.4)	—	9 B, SK 88 D区	D40	〃	— 2.5 0.7	—	凝灰岩, 丹塗り
D16	〃	5.0 0.6 1.8	50.0	9 C, SEG	D41	鉄製円板	5.0 0.4 —	—	緊急調査地区
D17	弥生土器転用	(5.8)(0.8)(0.6)	—	1号墳墳丘C区	D42	〃	4.9 0.4 0.4	—	OB
D18	粘板岩	(5.7)(0.7)(0.6)	—	1号墳北側	D43	〃	5.0 0.5 0.2	—	〃
D19	土製円板	(5.0)(1.6)(0.7)	—	10 B, NEG	D44	〃	4.6 0.4 0.2	—	〃
D20	〃	5.8 1.3 0.6	—	10 C, SEG					
D21	〃	6.0 1.0 0.6	—	13 F					
D22	〃	4.2 1.1 0.5	23.1	13 E					
D23	〃	5.0 1.7 0.6	50.5	10 D, SD 01					
D24	〃	4.1 1.3 0.5	23.5	1号墳礫土墳					
D25	〃	5.4 1.5 0.5	50.6	9号墳周溝					

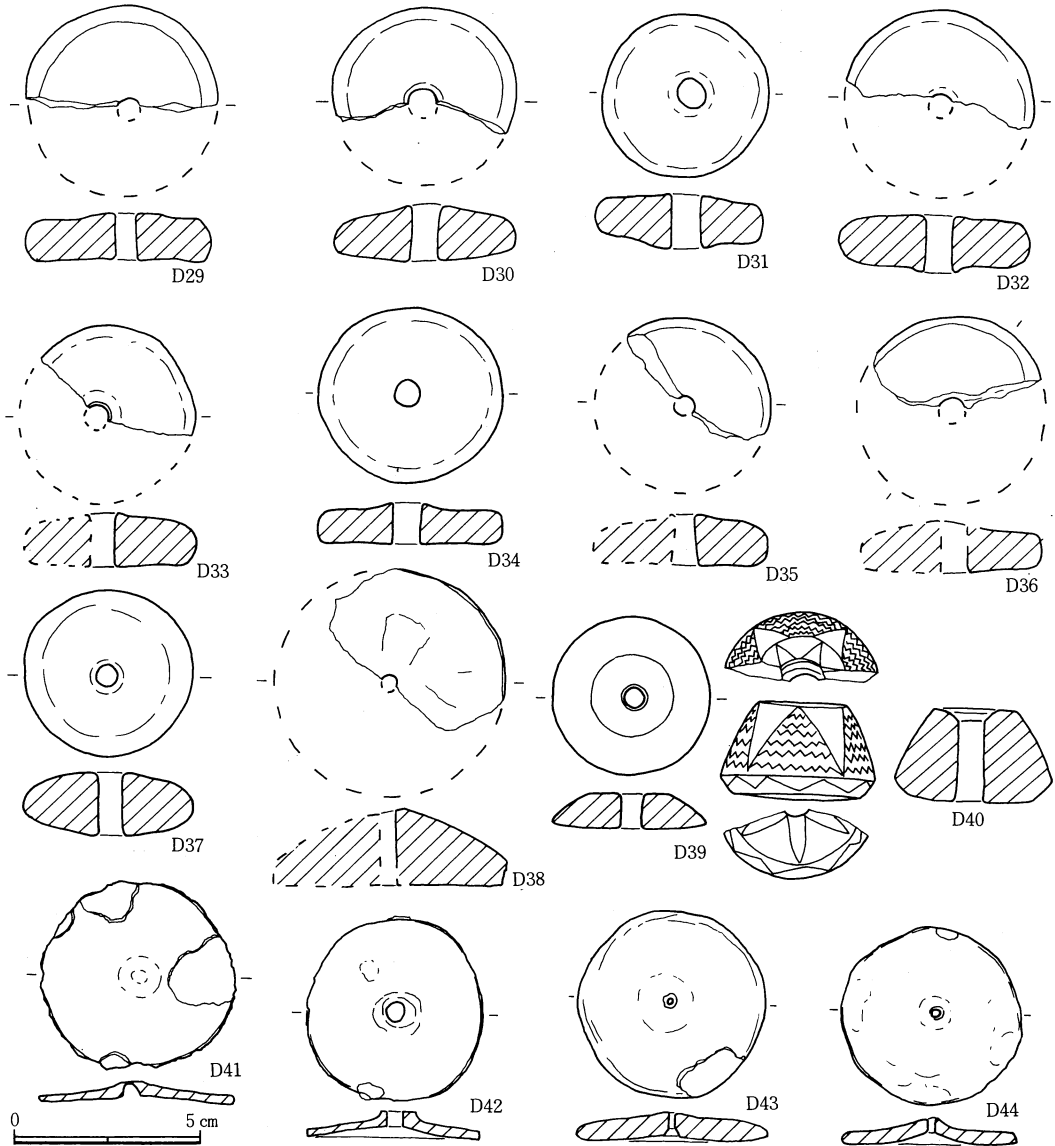
表8 紡錘車一覧表



挿図348 紡錘車実測図その1 (S=1/2)

40 は凝灰岩製の截頭円錐形のもので上下面・側面に鋸歯文が施こされ、赤色顔料が塗られている。D 41～D 44 は鉄製の紡錘車であろう。

重量の点から見れば、最も重いもので 50.6 g，軽いもので 4.8 g と大きく差がある。これは紡錘以外のはずみ車や同じ紡錘車の中でも繊維の太さ，よりの強さなどで重さを変えていったものと思われる。



挿図349 紡錘車その2 (S=1/2)

第6節 77号墳 (長瀬高浜遺跡報告書V掲載) 第1埋葬施設出土の小玉

77号墳第1埋葬施設から出土した小玉の計測値を一括してここで載せる。

77号墳第1埋葬施設出土の小玉の計測値を滑石製，ガラス製，メノウ製の順に示す。

(初項 番号，2項 径，3項 厚み，4項 孔径)



滑石製小玉

1	4.2	2.9	1.8
2	4.1	2.2	1.1
3	3.3	2.7	1.1
4	3.0	1.8	1.3
5	4.7	1.7	1.2
6	3.0	1.4	1.3
7	3.0	1.3	1.1
8	3.9	2.7	1.2
9	3.6	2.4	1.3
10	3.4	1.7	1.6
11	4.0	2.1	1.0
12	4.1	2.5	1.1
13	3.5	1.1	1.1
14	3.2	1.6	1.1
15	3.0	1.6	1.1
16	3.3	2.0	1.2
17	3.3	2.0	1.3
18	2.7	2.6	1.3
19	2.8	1.6	1.2
20	3.3	2.3	1.2
21	4.2	2.5	1.1
22	2.2	1.2	1.0
23	3.8	2.0	1.2
24	3.1	1.6	1.2
25	3.5	1.2	1.2
26	3.9	2.5	1.2
27	3.7	1.7	1.1
28	3.4	2.1	1.3
29	2.8	2.2	1.2
30	4.3	1.3	1.5
31	3.1	2.0	1.3
31	3.3	2.6	1.2
33	3.3	1.9	1.2
34	3.5	2.9	1.3
35	3.6	2.6	1.4
36	3.0	2.0	1.2
37	3.6	2.2	1.2
38	3.3	1.6	1.2
39	3.4	2.3	1.3
40	3.9	3.6	1.7
41	4.4	3.0	2.0
42	4.0	2.2	1.0
43	3.3	2.2	1.2
44	3.2	1.4	1.1
45	3.2	1.4	1.1
46	4.3	2.2	2.0
47	4.5	2.2	1.8
48	3.0	2.5	1.1
49	3.2	1.0	1.1
50	3.0	1.4	1.1
51	4.5	2.5	1.5
52	3.1	1.5	1.1
53	3.5	1.7	1.1
54	4.5	3.2	1.4
55	3.2	1.3	1.2
56	4.2	2.6	1.4
57	4.2	3.2	1.5
58	4.2	3.0	1.3
59	3.4	2.6	1.2
60	4.2	3.5	1.4
61	4.1	2.2	1.3
62	3.9	2.8	1.6
63	2.8	1.9	1.3
64	3.6	1.6	1.1
65	3.5	2.0	1.1
66	3.4	2.0	1.3
67	3.7	0.7	1.2
68	3.4	1.8	1.2
69	3.3	1.5	1.1
70	3.4	1.6	1.0
71	4.5	1.9	1.2
72	2.9	2.5	1.3
73	3.5	2.3	1.2
74	3.3	2.5	1.3
75	4.2	1.5	1.6
76	3.5	1.7	1.1
77	3.4	1.7	1.1
78	3.4	1.5	1.5
79	3.3	1.3	1.1
80	3.4	3.0	1.3
81	3.4	1.9	1.2
82	3.3	2.1	1.1
83	3.5	1.5	1.1
84	4.3	2.4	1.4
85	3.2	2.6	1.2
86	4.3	3.0	1.4
87	3.3	1.9	1.3
88	3.3	1.6	1.2
89	3.4	2.0	1.2
90	3.5	1.7	1.1
91	3.2	1.6	1.2
92	3.5	1.4	1.1
93	3.4	2.1	1.1
94	3.2	2.2	1.2
95	3.4	1.9	1.2
96	3.3	2.4	1.3
97	4.1	3.0	1.8
98	4.1	2.4	1.5
99	3.4	1.7	1.2
100	4.1	3.4	1.7
101	2.9	2.2	1.1
102	2.9	2.1	1.3
103	2.8	0.5	1.0
104	4.5	2.3	2.0
105	3.5	2.1	1.1
106	3.6	2.2	1.1
107	3.6	1.6	1.1
108	3.5	2.0	1.3
109	3.4	1.6	1.2
110	3.5	1.7	1.1
111	3.8	1.3	1.3
112	3.8	1.8	1.5
113	3.3	1.7	1.2
114	3.6	1.8	1.1
115	3.2	2.2	1.2
116	2.8	2.2	1.2
117	3.2	1.7	1.3
118	3.1	2.2	1.1
119	3.8	2.5	1.2
120	2.8	1.7	1.2
121	3.1	2.0	1.2
122	3.2	1.3	1.2
123	3.4	2.2	1.2
124	4.2	4.0	1.4
125	3.3	2.2	1.3
126	3.4	1.6	1.3
127	3.3	2.3	1.2
128	3.4	1.4	1.4
129	3.8	2.3	1.2
130	3.6	2.6	1.2
131	3.7	2.7	1.4
132	3.8	2.6	1.5
133	3.4	1.7	1.2
134	3.3	1.5	1.3
135	3.7	2.4	1.4
136	4.7	1.8	1.5
137	4.5	2.0	1.8
138	3.7	1.9	1.3
139	3.5	2.1	1.2
140	3.4	1.4	1.1
141	3.6	1.6	1.7
142	3.5	2.4	1.5
143	3.8	1.4	1.5
144	3.3	1.9	1.3
145	3.3	2.3	1.2
146	3.3	1.3	1.7
147	3.2	1.9	1.1
148	3.8	1.7	0.9
149	3.5	2.8	1.2
150	3.4	1.5	1.1
151	3.3	1.5	1.3
152	3.2	1.6	1.4
153	3.3	2.2	1.2
154	3.4	1.3	1.3
155	4.0	1.7	1.1
156	3.8	2.4	1.2
157	3.9	2.8	1.2
158	3.3	1.6	1.2
159	3.2	1.9	1.2
160	4.4	2.6	1.3
161	3.5	2.0	1.2
162	3.1	1.8	1.2
163	4.4	3.5	1.9
164	2.7	1.8	1.2
165	3.4	2.3	1.2
166	2.8	1.8	1.3
167	3.1	2.1	1.2
168	3.5	1.9	1.3
169	3.4	1.7	1.3
170	3.4	1.6	1.3
171	3.1	3.3	1.2
172	3.5	2.3	1.4
173	4.2	3.3	1.4
174	4.1	3.2	1.4
175	3.6	1.8	1.4
176	3.4	1.3	1.3
177	3.4	1.6	1.2
178	4.2	2.0	1.2
179	3.1	2.1	1.2
180	3.1	1.0	1.1
181	3.6	2.1	1.4
182	4.5	3.0	1.9
183	3.4	2.7	1.2
184	3.2	1.2	1.4
185	4.7	2.1	2.0
186	4.6	2.3	1.9
187	3.4	1.4	1.6
188	2.9	2.1	1.3
189	3.0	1.9	1.4
190	2.8	1.8	1.2
191	3.3	2.1	1.2
192	3.3	2.0	1.3
193	3.1	1.6	1.2
194	3.3	2.0	1.1
195	3.3	2.0	1.2
196	3.3	1.6	1.2
197	3.4	2.2	1.2
198	3.3	1.4	1.3
199	3.5	2.7	1.8
200	3.4	1.1	1.9
201	3.1	2.0	1.1
202	3.4	1.6	1.2
203	4.1	3.2	1.5
204	3.3	2.9	1.4
205	3.6	2.2	1.2
206	3.5	2.0	1.1
207	3.1	2.2	1.0
208	3.4	1.9	1.3
209	3.4	1.7	1.2
210	3.4	1.6	1.2
211	3.4	2.7	1.2
212	3.5	1.6	1.4
213	3.5	1.8	1.1
214	3.1	1.5	1.1
215	3.3	1.5	1.1
216	3.1	1.8	0.9
217	3.8	2.7	1.5
218	3.4	0.8	1.3
219	3.5	1.4	0.9
220	3.3	1.2	1.2
221	2.9	1.2	1.0
222	3.4	2.4	1.3
223	3.4	1.7	1.1
224	3.5	2.1	1.1
225	3.0	1.9	1.0
226	3.5	1.5	1.2
227	3.7	3.1	1.2
228	3.1	1.8	1.5
229	3.3	1.7	1.1
230	3.1	1.9	1.0
231	3.1	2.2	1.2
232	3.4	3.0	1.1
233	3.1	1.9	1.3
234	3.8	1.6	1.3
235	3.4	2.1	1.2
236	2.8	1.5	1.2
237	4.6	1.9	1.8
238	3.7	3.0	1.2
239	4.2	2.7	1.4
240	3.0	1.2	1.2
241	3.4	1.6	1.1
242	3.4	1.6	1.2
243	3.1	2.1	1.0
244	3.7	1.6	1.2
245	3.4	2.0	1.1
246	4.6	2.4	1.8
247	3.6	2.8	1.2
248	3.5	2.0	2.3
249	3.3	1.7	1.0
250	3.4	2.6	1.0
251	3.4	1.8	1.0
252	3.6	2.7	1.1
253	3.5	1.5	1.1
254	3.5	2.7	1.0
255	3.3	2.3	1.0
256	3.4	1.5	1.2
257	3.7	3.0	1.6
258	4.1	3.3	1.7
259	3.2	1.7	1.1
260	4.2	3.2	1.5
261	3.5	2.2	1.2
262	4.3	1.4	1.2
263	3.0	2.6	1.0
264	4.6	2.0	1.6
265	4.1	1.9	1.2
266	3.5	2.0	1.2
267	3.0	1.3	1.1
268	3.3	1.8	1.3
269	3.3	1.5	1.3
270	3.3	2.2	1.1
271	3.3	1.8	1.0
272	4.0	3.0	1.4
273	3.7	2.8	1.5
274	4.1	2.6	1.6
275	3.3	1.8	1.2
276	3.3	1.4	1.2
277	3.3	1.9	1.1
278	4.2	2.3	1.8
279	4.0	2.3	1.2
280	3.2	2.1	1.4
281	3.5	2.2	1.3
282	3.7	1.9	1.3
283	3.9	2.2	1.2
284	3.7	2.3	1.6
285	3.2	1.3	1.3
286	3.0	2.0	1.1
287	3.9	3.1	1.5
288	3.7	2.7	1.6
289	3.9	2.4	1.1
290	3.6	2.0	1.4
291	4.3	3.0	1.5
292	3.3	1.8	1.2
293	3.4	1.8	1.4
294	3.9	2.8	1.6
295	3.8	2.0	1.2
296	4.0	3.5	1.2
297	3.4	2.3	1.3
298	3.8	3.0	1.4
299	3.3	1.6	1.0
300	3.3	1.6	1.1
301	3.3	2.0	1.1
302	3.4	1.7	1.1
303	3.2	1.6	1.0
304	3.8	1.8	1.5
305	3.3	1.5	1.1
306	3.3	2.0	1.3
307	2.8	2.2	1.1
308	2.8	1.6	1.2
309	3.7	2.1	1.3
310	3.8	2.1	2.1
311	4.1	1.8	1.4
312	3.6	1.8	1.2
313	3.4	2.1	1.3
314	3.4	1.7	1.3
315	3.0	1.7	1.7
316	3.7	1.8	1.2
317	3.2	1.4	1.1
318	3.2	1.8	1.1
319	3.9	3.1	1.8
320	3.7	2.9	1.0
321	3.5	1.7	1.2
322	3.3	1.2	1.0
323	3.3	1.8	1.1
324	3.5	2.9	1.2
325	3.7	1.5	1.1
326	3.7	1.4	1.1
327	4.0	1.8	1.1
328	3.6	2.0	1.1
329	3.3	2.1	1.1
330	3.0	1.7	1.0
331	3.8	3.7	1.4
332	3.7	2.0	1.5
333	3.7	2.0	1.1
334	4.1	3.3	1.7
335	3.3	2.0	1.3
336	3		

341	4.1	3.6	1.2	413	3.3	1.7	1.1	485	3.1	1.8	1.2	557	3.9	1.7	1.3	629	3.2	1.9	1.0
342	3.4	2.0	1.0	414	3.3	3.0	1.3	486	3.0	2.4	1.0	558	4.0	3.0	1.2	630	3.1	1.6	1.0
343	2.9	2.2	1.0	415	4.6	3.0	1.8	487	3.9	1.6	1.2	559	4.3	3.0	1.6	631	3.1	1.8	1.1
344	3.6	2.0	1.1	416	3.8	2.0	1.1	488	3.9	3.1	1.4	560	3.2	2.1	1.3	632	4.2	3.0	1.5
345	3.3	2.1	1.0	417	3.4	1.9	1.4	489	3.7	2.7	1.6	561	3.2	2.3	1.1	633	4.0	1.3	1.1
346	3.2	2.1	1.0	418	4.0	2.3	1.4	490	3.2	1.7	1.3	562	3.3	2.0	1.0	634	4.0	2.0	1.3
347	3.4	2.3	1.2	419	3.5	2.0	1.1	491	3.2	1.0	1.6	563	3.2	1.9	1.1	635	4.0	2.2	1.1
348	3.7	2.0	1.5	420	4.3	2.3	1.5	492	3.5	2.3	1.3	564	3.3	1.8	1.2	636	4.0	2.2	1.3
349	3.1	1.8	1.2	421	3.4	1.5	1.2	493	3.9	3.2	1.3	565	3.2	2.0	1.2	637	3.4	1.8	1.1
350	3.3	1.9	1.3	422	3.6	2.0	1.3	494	3.4	1.4	1.1	566	3.5	2.0	1.2	638	4.3	2.2	1.3
351	3.6	1.7	1.1	423	3.9	2.0	1.7	495	3.4	2.1	1.1	567	2.7	2.0	1.1	639	4.2	2.1	1.3
352	4.0	3.7	1.3	424	3.6	0.0	1.2	496	3.5	2.0	1.2	568	3.8	2.6	1.6	640	4.3	1.4	1.2
353	3.9	2.1	1.4	425	4.2	2.2	1.6	497	3.5	1.8	1.2	569	3.3	1.8	1.3	641	4.3	2.5	1.3
354	3.8	2.8	1.3	426	4.2	2.4	1.4	498	2.9	2.3	1.0	570	3.3	1.5	1.2	642	3.6	2.1	1.1
355	4.8	1.7	1.8	427	3.6	1.7	0.9	499	3.2	1.6	1.1	571	3.3	2.2	1.2	643	3.3	1.3	1.4
356	4.1	2.6	1.4	428	4.3	1.8	1.0	500	3.4	2.1	1.2	572	3.0	2.8	1.5	644	3.6	2.0	1.2
357	3.9	1.9	1.1	429	3.0	2.5	1.2	501	3.3	2.0	1.5	573	4.6	2.0	2.5	645	3.6	1.9	1.1
358	3.3	1.5	1.2	430	3.2	2.2	1.1	502	3.1	1.8	1.4	574	3.5	2.5	1.5	646	3.7	2.3	1.1
359	3.3	1.3	1.2	431	3.6	2.8	1.2	503	3.3	1.8	1.2	575	3.1	1.5	1.3	647	3.6	1.8	1.1
360	3.7	2.4	1.2	432	3.0	2.4	1.2	504	3.0	1.8	1.2	576	3.1	1.8	1.2	648	4.2	3.9	1.3
361	3.3	2.1	1.1	433	3.0	1.8	1.0	505	3.2	1.8	1.3	577	3.0	1.8	1.2	649	3.7	2.7	1.3
362	3.4	1.6	1.2	434	3.2	2.2	1.1	506	3.1	1.3	1.4	578	3.7	1.7	1.3	650	3.7	2.1	1.0
363	3.5	1.8	1.3	435	3.8	3.1	1.8	507	3.4	2.5	1.4	579	3.1	2.0	1.2	651	3.4	2.0	1.2
364	3.6	1.9	1.2	436	3.0	1.3	1.1	508	3.1	2.0	1.2	580	3.1	1.7	1.2	652	3.4	2.1	1.1
365	3.6	2.6	1.3	437	2.8	2.7	1.0	509	3.5	2.1	1.2	581	3.2	1.4	1.1	653	3.1	2.1	1.2
366	3.2	1.3	1.5	438	3.9	3.0	1.1	510	3.7	1.8	1.3	582	3.0	1.7	1.2	654	3.6	1.2	1.2
367	3.6	1.2	1.1	439	3.2	1.5	1.1	511	3.1	2.2	1.6	583	3.1	1.4	1.2	655	4.2	1.9	1.3
368	3.7	1.8	1.0	440	3.6	2.2	1.1	512	2.9	1.3	1.6	584	2.8	1.2	1.3	656	3.9	2.2	1.1
369	3.5	1.8	1.1	441	4.1	2.3	1.2	513	3.2	2.1	1.2	585	3.2	1.8	1.1	657	3.3	1.6	1.3
370	3.6	2.0	1.1	442	4.7	1.8	1.1	514	4.5	3.2	1.8	586	3.5	2.1	1.1	658	3.2	1.9	1.1
371	3.5	1.2	1.2	443	4.1	3.0	1.5	515	3.3	1.8	1.2	587	3.5	1.4	1.2	659	3.2	2.1	2.1
372	3.5	1.6	1.2	444	3.2	1.5	1.3	516	3.2	1.8	1.1	588	3.3	2.0	0.9	660	3.5	1.6	1.1
373	3.4	1.8	1.1	445	3.2	2.2	1.0	517	3.0	1.1	1.4	589	3.4	1.8	1.2	661	4.1	3.2	1.3
374	4.1	3.0	1.3	446	3.5	1.5	1.1	518	3.2	2.2	1.3	590	3.5	1.7	1.2	662	3.1	1.4	1.2
375	3.5	1.7	1.2	447	3.5	2.0	1.3	519	2.6	2.0	1.1	591	3.1	1.8	1.2	663	3.4	1.8	1.2
376	3.5	1.8	1.3	448	3.3	2.5	1.2	520	2.8	1.8	1.2	592	3.8	2.2	1.2	664	3.1	2.1	1.1
377	4.0	1.5	1.3	449	3.5	2.2	1.1	521	3.3	3.8	1.3	593	4.0	2.3	1.4	665	3.5	2.3	1.2
378	3.9	2.1	1.2	450	3.4	2.1	1.1	522	2.9	2.2	1.3	594	3.2	1.2	0.9	666	3.6	1.2	1.2
379	3.6	1.9	1.2	451	3.3	2.2	1.1	523	3.1	1.7	1.1	595	3.7	2.5	1.2	667	3.6	2.7	1.4
380	3.3	2.0	1.1	452	3.4	2.0	1.0	524	3.0	1.8	1.3	596	3.3	1.2	1.1	668	3.6	2.2	1.0
381	3.6	1.8	1.3	453	3.5	2.2	1.2	525	4.4	2.6	1.8	597	3.2	2.1	1.2	669	3.4	2.2	1.2
382	3.6	1.6	1.2	454	4.3	2.2	1.2	526	3.2	2.0	1.3	598	3.5	1.5	1.2	670	3.2	2.2	1.2
383	3.6	1.7	1.2	455	3.0	2.0	1.0	527	3.0	1.2	1.0	599	3.2	1.6	1.1	671	3.3	2.0	1.3
384	3.4	2.0	1.1	456	3.8	1.4	1.1	528	3.1	1.2	1.1	600	3.6	1.7	1.2	672	4.3	1.7	1.2
385	3.3	2.0	1.1	457	4.5	2.2	1.5	529	2.7	2.0	1.4	601	3.6	2.8	1.2	673	2.9	2.0	1.4
386	3.5	1.9	1.2	458	3.2	1.8	1.0	530	3.4	1.6	1.2	602	3.4	1.7	1.2	674	3.8	2.2	1.5
387	4.7	1.8	1.8	459	4.2	2.0	1.3	531	3.4	1.7	1.2	603	3.3	1.9	1.3	675	3.2	2.4	1.4
388	4.7	2.1	1.8	460	3.5	1.6	1.1	532	4.1	2.8	1.6	604	4.0	3.5	1.2	676	3.3	2.0	1.2
389	3.8	2.8	1.5	461	4.2	2.2	1.4	533	3.6	2.6	1.6	605	3.8	2.6	1.3	677	3.4	1.6	1.1
390	4.0	2.1	1.6	462	4.6	2.5	1.8	534	3.5	2.2	1.5	606	3.6	2.0	1.3	678	3.1	2.0	1.2
391	3.7	1.8	1.7	463	4.0	2.3	1.5	535	3.2	2.2	1.5	607	4.2	3.3	1.2	679	1.2	1.8	1.1
392	4.0	3.5	1.4	464	3.3	1.7	1.1	536	3.8	3.0	1.6	608	4.5	2.8	1.9	680	3.2	1.5	1.3
393	3.8	1.9	1.5	465	3.3	2.5	1.0	537	3.2	1.7	1.2	609	3.7	2.3	1.3	681	4.1	2.9	1.4
394	2.8	2.5	1.0	466	3.2	2.0	1.2	538	3.1	1.1	1.1	610	3.2	1.7	1.2	682	4.2	2.2	1.9
395	3.1	1.7	1.0	467	3.3	1.5	1.2	539	3.1	1.6	1.4	611	4.2	2.2	1.3	683	3.6	1.6	1.2
396	3.7	2.2	1.2	468	4.8	4.0	1.5	540	4.4	2.3	1.6	612	4.2	3.0	1.4	684	4.1	3.0	1.3
397	3.0	1.7	1.1	469	3.5	2.8	1.2	541	3.1	2.0	1.3	613	4.2	3.0	1.5	685	3.9	1.8	1.1
398	3.6	2.2	1.1	470	3.6	2.1	1.0	542	2.8	1.5	1.3	614	4.9	2.6	2.0	686	3.7	1.8	1.2
399	3.8	2.8	1.3	471	3.2	1.7	1.0	543	2.6	1.5	1.2	615	3.7	1.9	1.2	687	4.0	2.8	1.2
400	3.2	2.1	1.1	472	3.6	2.8	1.0	544	2.9	1.8	1.0	616	4.7	2.2	1.9	688	3.5	2.5	1.1
401	3.8	2.6	1.1	473	3.8	2.6	1.4	545	2.7	2.0	1.1	617	3.8	3.0	1.3	689	4.2	3.3	1.3
402	3.6	2.1	1.2	474	4.6	3.1	1.9	546	3.2	1.8	0.8	618	4.0	2.9	1.5	690	3.3	2.0	1.2
403	4.0	2.8	1.3	475	3.6	2.0	1.2	547	3.2	1.7	1.0	619	3.7	2.2	1.2	691	3.1	1.6	1.0
404	4.0	3.0	1.3	476	4.4	4.0	2.1	548	3.5	1.8	1.3	620	4.2	3.3	1.4	692	3.3	2.0	1.2
405	3.4	2.0	1.1	477	3.4	1.9	1.1	549	4.1	2.0	1.7	621	3.2	2.9	1.2	693	4.1	2.1	1.4
406	3.3	1.3	1.3	478	6.3	3.7	1.8	550	4.0	2.0	1.6	622	3.4	1.6	1.3	694	3.8	1.5	1.2
407	4.7	4.0	1.6	479	3.9	2.6	1.4	551	4.2	2.5	1.9	623	4.1	2.8	1.5	695	3.0	2.2	1.1
408	3.9	1.7	1.3	480	3.9	2.3	1.3	552	3.8	2.8	1.3	624	3.7	2.8	1.2	696	3.9	1.9	1.2
409	3.6	4.0	1.3	481	3.7	2.6	1.0	553	3.7	2.3	1.1	625	3.2	1.6	1.1	697	3.6	2.0	1.2
410	4.8	1.8	1.3	482	3.0	1.5	1.1	554	3.1	2.8	1.3	626	3.7	2.5	1.3	698	3.8	1.8	1.0
411	4.0	3.5	1.2	483	3.6	2.3	1.1	555	4.0	3.0	1.3	627	3.1	2.0	1.1	699	3.2	1.6	0.9
412	3.9	2.2	1.1	484	3.3	1.0	1.2	556	3.8	2.9	1.1	628	2.9	2.1	1.2	700	3.5	1.8	1.0

表10 77号墳第1埋葬施設出土の小玉計測表 その2 (単位 mm)

701	3.6	1.9	1.1	773	4.3	2.2	1.1	845	3.2	1.8	1.0	917	3.1	1.5	1.2	989	4.2	3.4	1.2
702	3.4	2.4	1.0	774	4.3	2.4	1.3	846	3.3	1.2	1.2	918	4.2	2.9	1.4	990	3.8	2.8	1.5
703	3.3	1.8	1.1	775	2.8	2.1	1.1	847	3.2	1.6	1.2	919	4.3	2.6	1.3	991	3.5	1.4	1.1
704	3.3	2.2	1.3	776	3.2	1.3	1.0	848	3.3	1.8	1.1	920	4.2	3.0	1.4	992	3.4	2.0	1.1
705	3.6	1.7	1.3	777	3.8	1.8	1.2	849	3.9	3.2	1.5	921	3.1	1.8	1.0	993	3.5	2.3	1.3
706	3.7	2.5	1.2	778	3.7	2.0	1.2	850	3.7	2.7	1.4	922	3.4	1.7	1.2	994	3.7	2.8	1.4
707	3.9	2.5	1.0	779	3.5	1.8	1.2	851	3.8	2.0	1.1	923	3.2	2.8	1.4	995	4.5	2.2	1.7
708	3.4	1.8	1.0	780	3.4	1.9	1.2	852	4.0	2.4	1.2	924	3.4	2.9	1.3	996	3.8	2.2	1.3
709	3.2	1.8	1.1	781	3.6	1.7	1.2	853	3.0	2.0	1.1	925	3.4	1.3	1.2	997	4.6	2.1	1.4
710	3.6	2.1	1.2	782	3.0	1.9	1.0	854	3.0	1.9	1.1	926	3.6	2.0	1.2	998	3.3	2.8	1.2
711	3.7	2.1	1.1	783	3.7	1.7	1.2	855	3.6	2.1	1.2	927	3.2	0.9	1.2	999	4.1	2.2	1.0
712	2.8	2.6	0.8	784	3.6	2.8	1.5	856	4.0	2.2	1.2	928	4.3	2.0	1.3	1000	3.9	2.2	1.2
713	3.3	1.1	1.0	785	3.5	1.8	1.2	857	3.4	1.9	1.1	929	3.3	1.7	1.4	1001	3.6	3.1	1.2
714	3.7	1.6	1.1	786	3.3	1.5	1.2	858	3.3	2.1	1.3	930	4.0	2.2	1.4	1002	3.4	2.2	1.2
715	3.6	1.8	1.2	787	3.3	1.9	1.0	859	3.6	1.9	1.2	931	3.5	1.4	1.2	1003	4.2	2.1	1.1
716	3.3	1.6	1.3	788	4.1	3.2	1.8	860	3.2	1.6	1.1	932	3.4	1.8	1.2	1004	4.1	3.1	1.1
717	3.5	2.2	1.3	789	3.6	1.8	1.2	861	3.6	1.8	1.2	933	3.4	1.7	1.2	1005	3.7	2.0	1.3
718	3.2	1.6	1.2	790	3.6	2.7	1.2	862	3.9	3.0	1.3	934	3.1	1.5	1.2	1006	3.1	1.6	1.2
719	3.4	1.3	1.2	791	3.7	1.4	1.1	863	2.9	1.3	1.1	935	4.8	2.8	2.0	1007	3.3	2.3	1.2
720	4.1	3.1	1.7	792	3.5	1.9	1.2	864	3.2	1.3	1.0	936	3.3	3.2	1.3				
721	3.6	2.1	1.2	793	3.4	1.9	1.2	865	3.7	2.2	1.1	937	3.5	2.0	1.2				
722	3.2	2.1	1.1	794	3.3	1.5	1.0	866	4.0	2.2	1.7	938	3.2	1.9	1.5				
723	3.1	1.2	1.0	795	3.6	2.0	1.2	867	3.5	2.2	1.2	939	2.8	1.6	1.2				
724	3.2	2.2	1.0	796	3.5	2.0	1.0	868	4.1	2.2	1.0	940	3.4	2.0	1.1				
725	3.5	2.1	1.2	797	3.4	1.9	1.2	869	3.6	1.8	1.1	941	3.9	1.7	1.4				
726	2.9	1.9	1.0	798	4.0	2.2	1.3	870	3.4	2.0	1.2	942	3.2	1.8	1.2				
727	3.3	2.0	1.4	799	4.0	2.9	1.2	871	3.3	2.2	1.1	943	3.5	1.9	1.2				
728	3.0	2.2	1.1	800	3.1	2.1	1.1	872	3.8	1.6	1.4	944	4.0	1.7	1.5				
729	3.6	1.9	1.1	801	3.2	2.1	1.2	873	3.8	2.2	1.4	945	3.5	1.8	1.2				
730	3.3	1.7	1.1	802	3.1	1.5	1.2	874	3.7	2.1	1.5	946	3.2	1.7	1.1				
731	3.2	1.5	1.4	803	3.5	2.1	1.2	875	3.2	2.1	1.2	947	3.1	1.8	1.0				
732	3.6	2.0	1.0	804	3.9	2.1	1.2	876	3.5	1.8	1.2	948	3.1	1.8	1.2				
733	3.6	1.7	1.1	805	3.6	2.2	1.4	877	4.1	3.2	1.8	949	3.8	2.8	1.8				
734	3.5	2.1	1.1	806	4.3	3.0	1.6	878	3.0	1.8	1.0	950	3.4	1.6	1.3				
735	3.0	1.8	1.1	807	3.4	2.8	1.1	879	2.7	1.2	1.2	951	3.4	2.0	1.1				
736	3.6	1.8	1.2	808	3.6	2.2	1.1	880	3.6	1.5	1.2	952	3.6	1.8	1.1				
737	3.9	2.1	1.3	809	4.2	2.3	1.2	881	3.6	2.6	1.5	953	3.8	2.3	1.3				
738	3.3	2.0	0.9	810	4.2	2.3	1.2	882	3.5	2.5	1.3	954	3.4	1.8	1.7				
739	4.8	3.0	1.6	811	3.2	1.8	1.1	883	3.8	1.8	1.3	955	2.8	2.1	1.1				
740	3.7	2.4	1.2	812	4.2	2.2	1.2	884	3.5	1.5	1.1	956	3.4	1.6	1.2				
741	3.1	1.6	1.1	813	4.1	3.0	1.3	885	4.2	2.2	1.9	957	3.4	1.5	1.1				
742	3.6	2.0	1.3	814	2.9	2.0	1.1	886	3.3	2.3	1.1	958	3.4	1.7	1.2				
743	3.3	1.8	1.2	815	2.9	2.2	1.0	887	3.6	1.6	1.0	959	3.5	1.3	1.3				
744	3.2	1.8	1.0	816	2.9	1.5	0.9	888	3.2	2.2	1.2	960	3.2	1.5	1.3				
745	3.1	1.9	1.2	817	3.1	1.8	0.9	889	3.5	1.5	1.1	961	3.8	2.5	1.2				
746	2.9	1.8	1.0	818	3.2	1.4	0.9	890	3.6	1.6	1.1	962	3.3	1.8	1.2				
747	3.7	2.5	1.2	819	3.3	2.1	1.1	891	3.9	1.9	1.6	963	3.9	2.5	1.2				
748	3.6	2.0	1.1	820	3.3	2.4	1.2	892	3.7	1.7	1.4	964	4.2	2.9	1.3				
749	3.9	2.9	1.0	821	4.1	3.0	1.3	893	3.2	2.2	1.4	965	3.6	2.8	1.3				
750	3.5	1.9	1.2	822	3.2	1.5	1.4	894	3.7	1.7	1.2	966	3.4	2.2	1.2				
751	3.2	2.0	1.3	823	3.1	2.2	1.0	895	3.7	2.7	1.2	967	3.6	3.1	1.2				
752	3.4	1.2	1.2	824	3.8	1.8	1.2	896	3.8	1.8	1.2	968	3.3	2.5	1.2				
753	3.3	2.8	1.2	825	3.0	2.6	1.1	897	3.3	2.3	1.2	969	4.5	2.0	1.8				
754	2.9	1.5	1.1	826	3.4	2.5	1.0	898	3.1	2.1	1.1	970	3.0	2.1	1.0				
755	3.1	1.7	1.2	827	3.4	3.0	1.5	899	3.8	1.8	1.2	971	4.0	2.1	1.0				
756	3.8	2.1	1.3	828	3.7	1.8	1.1	900	3.4	1.4	1.2	972	3.5	2.7	1.2				
757	3.2	1.7	1.1	829	3.8	1.3	1.1	901	4.3	1.3	1.2	973	3.4	2.4	1.3				
758	3.5	1.9	1.2	830	4.4	1.6	1.2	902	3.1	2.1	1.3	974	3.1	1.8	1.4				
759	3.4	1.8	1.0	831	4.0	2.8	1.2	903	3.8	1.8	1.2	975	3.2	2.2	0.9				
760	4.9	3.4	1.7	832	3.8	1.8	1.0	904	4.4	2.4	1.6	976	3.2	2.4	1.2				
761	3.8	2.1	1.3	833	3.8	1.8	1.0	905	3.0	2.0	1.0	977	3.3	1.2	1.3				
762	4.4	2.3	1.9	834	3.3	2.2	1.0	906	3.2	2.2	1.2	978	3.2	1.6	0.9				
763	3.7	2.2	1.3	835	4.2	1.9	1.3	907	3.2	2.2	1.3	979	3.7	2.3	1.2				
764	3.8	2.2	1.4	836	4.5	2.0	1.4	908	3.1	2.1	1.2	980	3.6	2.8	1.1				
765	3.6	2.5	1.0	837	3.8	2.2	1.2	909	3.3	2.3	1.1	981	2.8	1.3	1.1				
766	3.3	1.7	1.2	838	3.8	1.8	1.1	910	4.7	2.7	1.2	982	3.0	2.1	0.9				
767	4.2	3.6	1.3	839	4.6	2.8	2.0	911	2.7	1.7	1.2	983	3.4	2.6	1.2				
768	3.6	2.8	1.1	840	2.9	2.0	1.0	912	3.7	1.7	1.0	984	3.2	1.6	1.3				
769	3.6	1.9	1.2	841	3.3	2.0	1.0	913	3.9	1.9	1.1	985	2.9	2.3	1.0				
770	3.1	2.3	1.0	842	3.3	1.5	1.1	914	3.5	1.5	1.3	986	3.4	2.0	1.2				
771	3.6	1.9	1.1	843	3.2	2.8	1.1	915	3.2	1.2	1.3	987	3.0	1.4	1.0				
772	3.9	2.8	1.4	844	3.3	2.7	1.2	916	3.8	1.8	1.1	988	3.1	1.5	1.0				

ガラス小玉

1008	5.1	4.8	2.0
1009	4.8	2.8	2.0
1010	4.5	3.7	1.3
1011	4.9	3.5	1.8
1012	5.3	4.7	1.4
1013	4.8	3.5	1.3
1014	3.1	1.8	1.2
1015	4.8	3.8	1.2
1016	5.2	2.3	1.7
1017	4.3	2.8	1.2
1018	5.2	4.0	1.3
1019	5.0	4.2	1.4
1020	4.0	3.3	1.1
1021	4.4	3.1	1.5

メノウ小玉

1022	6.0	4.6	0.9
------	-----	-----	-----

表11 77号墳第1埋葬施設出土の小玉計測表 その3 (単位 mm)

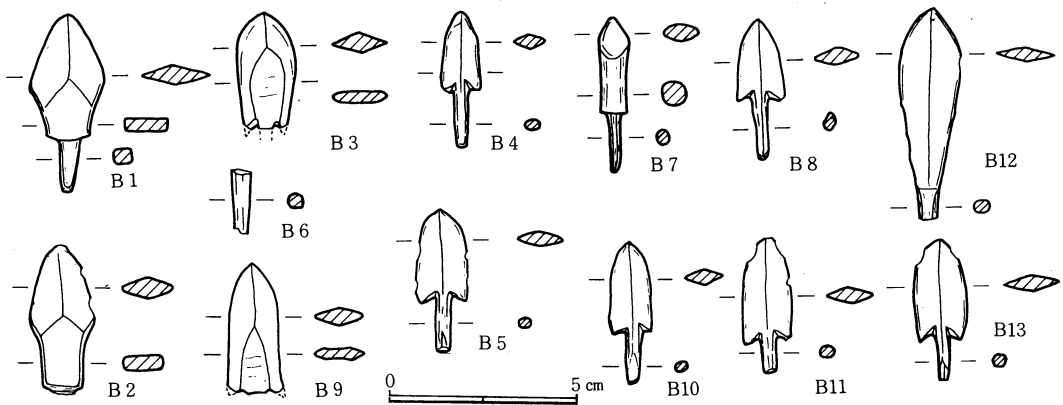
第7節 銅製品・鉄製釣針 (挿図 350~352, 図版 80)

銅鏃 (B 1~B 13)

銅鏃は、これまでに計 13 本が出土している。そのうち B 1~7・13 は、これまで報告されているものである。B 10 は 57 年度調査で出土したもので、B 8・9・11・12 はまだ報告されていないものである。B 8~12 までの出土場所について簡単に説明すると、B 8 は、9 I 南西区の掘り下げ中に出土し西側には S B 29 がある。B 9 は、10 G 南西区掘り下げ中に出土し、北側には 77 号墳、南側には柵列状遺構がある。B 10 は、10 B 南東区で土壘状遺構上面からである。B 11 は、11 J 南西区から南側に S B 40・S I 90 がある。また、B 12 は、11 H 北西区で S B 40・5 号墳がある。B 8~12 はすべて遺物包含層掘り下げ中に出土したものであり、遺構に伴っていない。

長瀬高浜遺跡から出土している銅鏃は、茎があり腸袂式とよばれる逆刺を有するものが大半を占める。その他にも定角式、鑿頭式、柳葉式(?)といわれるものが出土している。B 3~5・8~11・13 は、腸袂式である。B 3・9 は、鏃身に平坦面があり、茎が極めて短かく終っており、有茎鏃というよりも無茎鏃に入れた方が良いのかもしれない。平坦面の部分まで篋がさし込まれたのであろう。次に B 4・5・8・10・11・13 は、平根腸袂式とよばれるものである。無尖身<sup>註1</sup>で内湾から直線に流れるものである。刃部の断面は菱形になり、茎は比較的長いものが多く出土している。腸袂式の中は 2 タイプにわかれている。B 1・2 は、有茎定角式である。鏃は三叉になっており、刃部はあまり尖らない。内湾から外湾に流れる形態である。刃部の断面は菱形を呈する。B 4 は、鑿頭式といわれるものに属すると思われる。刃部の断面は楕円形で、基部はやや稜が残るが円形を呈する。B 12 は、内湾から直線に流れる形態をもつ。断面は菱形を呈する。どの形式に入るかわからないが、柳葉式に入れておくことにする。

当遺跡で出土する銅鏃は、6 つの形式が出土している。遺構から出土しているのは B 2・



挿図350 銅鏃実測図 (S=1/2)

5で、竪穴住居跡より出土している。また、B3は、4号墳周溝から出土しているが、混入した可能性が強く4号墳に伴うものとは言い難い。時期的には、銅鏃が出土した竪穴住居跡が古墳時代前期であること、古墳時代中期から後期に造られた古墳の埋葬施設や他の墳墓からは出土していないこと、弥生時代中期から後期の遺構がほとんどないことから、古墳時代前期ごろの銅鏃と考えられよう。

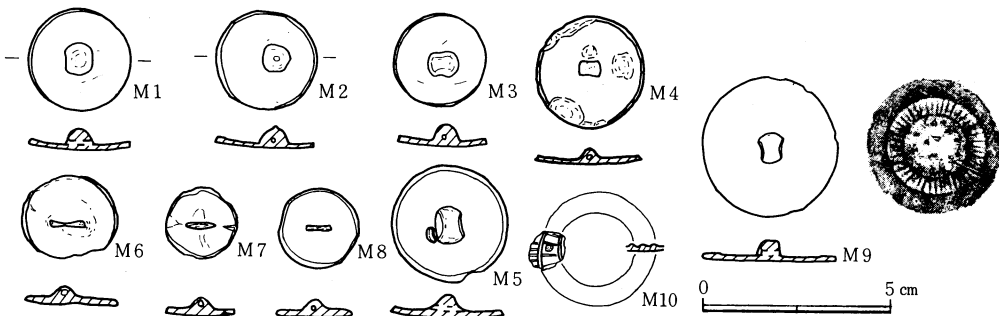
番号	形式	断面	長さ (cm)	重量 (g)	出土地	番号	形式	断面	長さ (cm)	重量 (g)	出土地
B1	定角	菱形	4.8	11.2	11 I IV d 西ベルト	B8	腸扶	菱形	3.7	4.0	9 I SWB
B2	定角	菱形	—	—	S I 87 直上	B9	腸扶	菱形	—	6.0	10 G SEG
B3	腸扶	菱形	—	—	4号墳周溝内	B10	腸扶	菱形	3.8	4.0	10 B SEG
B4	腸扶	菱形	3.6	4.1	12 F III C	B11	腸扶	菱形	3.6	5.4	11 J SWG
B5	腸扶	菱形	3.7	4.5	S I 132	B12	柳葉 (?)	菱形	5.6	8.5	11 H NWG
B6	—	—	—	—	12 J III a, 茎のみ	B13	腸扶	菱形	3.7	5.5	12 J 地区
B7	鑿頭	楕円	4.1	7.5	13 F IV a						

表 12 銅鏃一覧表

(2)小型銅鏡 (M1~M10)

長瀬高浜遺跡から出土した小型銅鏡は計12面で、櫛歯文鏡2面(M9, 10)、小型素文鏡(以下素文鏡とする)が10面である。そのうち2面は少片のため図化できなかった。M1~7は、これまで報告されているものである。M1~3までは15 I 地区祭祀遺構(以下15 I S P 01とする)より出土し、剣先形・短形鉄製品が共に出土している。M4~5はそれぞれS I 100, 138, 16 L・S K 01の竪穴住居から出土している。M7は13 E・II d 区の掘り下げ中に、M8は、10 I 地区から採集されたものである。図化できなかった2面は、竪穴住居から出土したものである。

大きさは1.8~3.5 cmまでのもので、鈕の形状から2つに分類することができる。鈕が半円板状のものと、半円球状のものがある。半円板状の鈕のつくものにはM6~7があり、鏡面が薄くやや粗雑である。M1~5・9が半円球状の鈕がつき、鏡面は厚くなり丁寧に作られている。また、裏面の湾曲が大きくなるものが多い。素文鏡が出土している遺構の



挿図351 小型銅鏡実測図 (S=1/2)

時期は、15 I S P 01 (M 1～3) 長瀬 I 期, S I 100, 138, 16 L S K 01 はいずれも長瀬 II 期となる。III 期及びそれ以後に造られた古墳からは今のところ出土していない。I 期では 15 I S P 01 からは 3 面の素文鏡が出土している。

このことは 15 I P P 01 で行った祭祀は、ある程度大きな集団で行ったと考えられる。II 期になると各竪穴住居内から 1 面ずつ出土していることから、小単位の集団で祭祀が行われたものとも考えられよう。

### (3) その他の銅製品 (B 14～B 18)

B 14 は銅釧である。9 B 地区北西区から出土し、すぐ南側には 89 号墳があるが、古墳に関係するものかどうかは不明である。銅釧の大きさは、長径 5.6, 短径 5.4, 高さ 0.6, 厚さ 0.4 cm を測る小形のものである。断面は角の丸い三角形を呈する。内面中央にも稜がわずかに残る。外面は研磨され光沢をもっている。

B 15 は銅製容器。11 A 北東区から出土し、すぐ北東には土壘状遺構がある。口縁部内外面に段があり、外面には 2 条の凹線がめぐっている。底部は内側にやや凹み、底面には 4 重の孤がわずかに残っている。体部はやや内湾気味に上外方に開いている。口径 4.2, 器高 2.0 cm, 器壁は 0.1 cm と薄く均一である。時期・用途不明。

B 16 は、鉈刃部のようにそり、裏面は凹む。その反対側には穿孔がある。鉈状銅製品としておく。長辺 3.6 cm, 幅 1.2 cm を測る。時期・用途不明

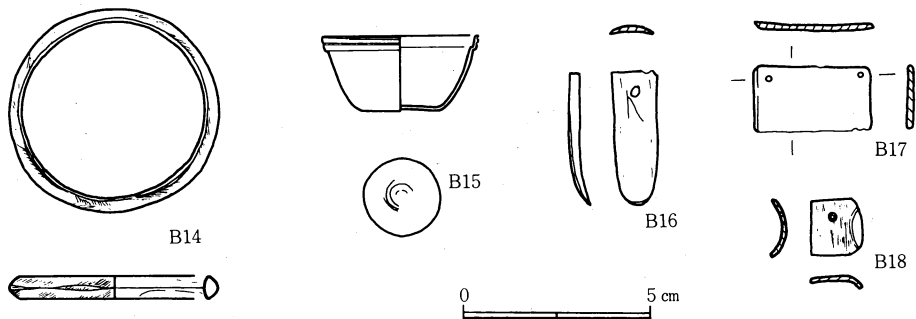
B 17 は板状銅製品で方形を呈すると思われる。コーナーには留め穴のような穴があいている。時期・用途不明。

B 18 は、20 E 北西区から出土している。何らかの金具と思われる。長辺 1.4 cm, 短辺 1.5 cm で中央部やや上部に小孔がある。

以上紹介してきた銅製品の他に長瀬高浜遺跡からは銅鐸<sup>#2</sup>・銅劍<sup>#3</sup>なども出土している。銅鐸, 銅釧, 銅鏡と小型のもので、そのころ小型のものを作る傾向があったのであろうか。

### (4) 鉄製釣針 (F 1～F 26)

長瀬高浜遺跡で出土している釣針は 37 本で、大きなものは長さ 12.5 cm, 小さなもので



挿図352 その他の銅製品実測図 (S=1/2)

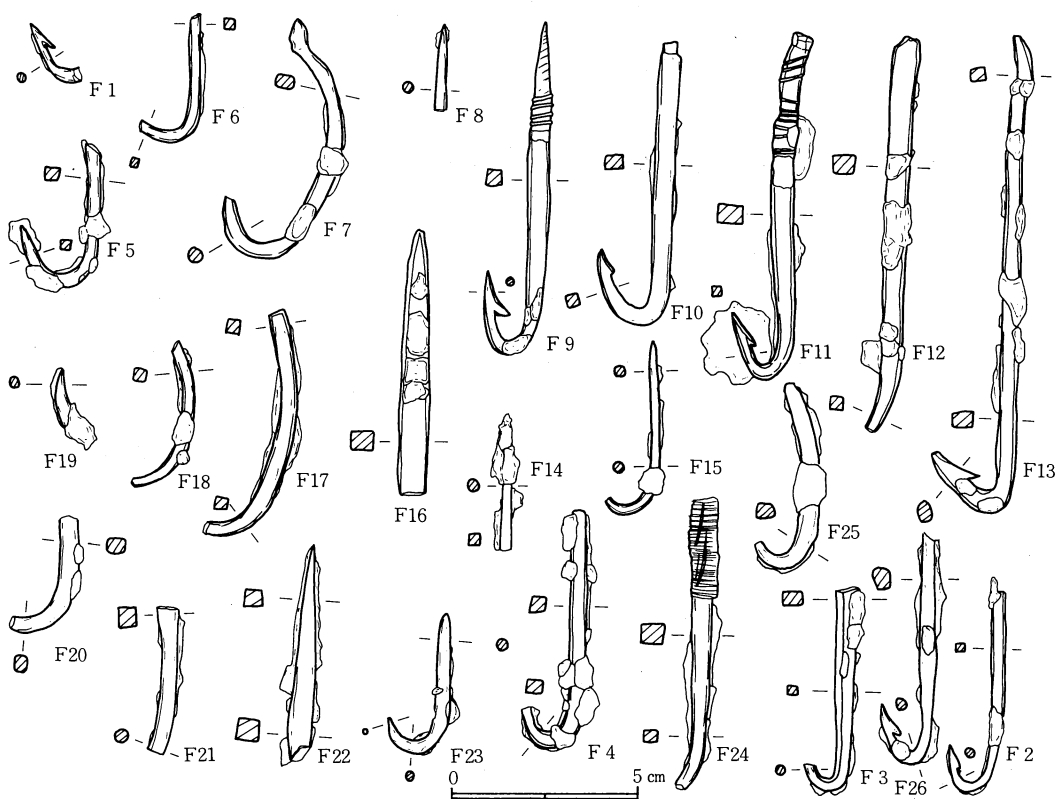
も 4.6 cmを測り，全体に大きい。ほとんどの釣針は，すでに報告されているものであるが，一部報告されていないものがありここで報告することにした。

F 1は，11 I・S K 01内から出土したものであぐ部のみが残っている。F 2は11 I地区にあるS D 09からほぼ完全で出土し，長さは5.3 cmで，長瀬II期の竪穴住居である。F 3は，13 G地区南東区にあるS I 40（長瀬II期）からで，あぐ部とちもと部を欠く。F 4は，15 K地区のほぼ中央部にあるS I 100（長瀬II期）からで，逆刺部を欠く，他に素文鏡，勾玉，管玉などの遺物も出土している。F 5は，12 J地区にあるS I 02から出土し釣部先端を欠く。この住居からは釣針の他に鉄鏃・鉈などの鉄製品が多く出土している。F 6は14 J地区，F 7は12 J北東区の掘り下げ中に出土したものである。

26本の釣針には，逆刺の有るものとないものがあり，また，それぞれ大型のものと小型のものがある。これは時期的なものではないかと考えて時期ごとに区分を試みたが，どの時期にもそれぞれ出土している。このことは使用する目的によって大きさや逆刺の有るものとないものを使用していたのだろう。

注1 「古墳時代銅鏃の二、三について」『古代探叢』1980 杉山晋作

注2 「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 V」 鳥取県教育文化財団 1982



挿図353 鉄製釣針実測図

番号	形態の特徴	出土地	番号	形態の特徴	出土地
F 1	鈎部のみ。逆刺鋭い。断面円形。	11 ISK 01	F 14	軸上部のみ。先端尖る。断面四角形	S I 10
F 2	断面は軸四角形、屈曲部円形の長さ5.7 cm	S I 09	F 15	鈎部先端部欠損。断面は軸四角形、屈曲部円形。長さ4.5 cm	S I 29
F 3	断面は軸四方形、屈曲部円形。	S I 40	F 16	軸上部のみ断面四角形	S I 25
F 4	鈎部先端部欠損。断面は軸・屈曲部四角形。長さ6.4 cm。	S I 100	F 17	鈎部欠損。軸はやや内湾する。断面軸・屈曲部四角形。長さ6.0 cm	S I 91
F 5	軸上部欠損。逆刺なし。断面四角形	S I 100	F 18	軸・鈎部先端欠損。軸やや内湾する。	S I 47
F 6	軸・鈎部先端欠損。軸、屈曲部四角形。	S I 02	F 19	鈎部のみ。逆刺なし。断面やや隅の丸い四角形。	S I 05
F 7	鈎部先端欠損。軸は内湾し端部は上方へのびる。長さ6.3 cm。	S I 54	F 20	軸上部、鈎部欠損。断面四角形。	24号墳墳丘
F 8	軸先端部のみ。断面円形。	S I 04	F 21	軸上部・鈎部欠損。軸上部四角形、下部円形。	不明
F 9	軸先端部尖る。逆刺鋭い。糸痕残る。長さ9.0 cm。	S I 13	F 22	軸先端部のみ。断面四角形。	12 J NEG
F 10	断面は軸・屈曲部四角形。逆刺やや鋭い。長さ7.5 cm。	S I 69	F 23	軸端部尖る。逆刺なし。断面は軸・屈曲部とも円形。	24号墳墳丘
F 11	軸部はやや反る。逆刺鋭い。軸・屈曲部とも四角形。長さ9.3 cm。	S I 12	F 24	軸端部、鈎部欠損。軸上部に糸痕残る。断面四角形。	緊急調査地区
F 12	鈎部欠損。軸部断面四角形。	S I 18	F 25	鈎部先端欠損。軸はやや内湾する。断面は四角形。	S I 133
F 13	断面は軸・屈曲部四角形。逆刺鋭い。長さ12.7 cm。	S I 80	F 26	軸上部欠損。逆刺鋭い。断面は軸・屈曲部四角形。	S I 133

表 13 鉄製鈎針一覧表

## 〈長瀬高浜遺跡出土の人骨・動物遺体の報告と保管〉

当遺跡では墳墓その他から約111件の骨その他が出土した。その内昭和53年度発掘分は主に京都大学理学部自然人類学教室・池田次郎教授に調査を依頼した。報告は長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V（1983）に載り、遺物は同教室に保管。昭和55・56年度発掘分は鳥取大学医学部法医学教室・井上晃孝助教授に鑑定を依頼した。結果は長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V（1983）に掲載し、遺物は同学部に保管。昭和54・57年度発掘分は鳥取大学医学部解剖学第2教室井上貴央講師に調査を依頼した。報告は当報告書第8節に掲載し、遺物は同教室に保管を依頼した。

注 人骨の年齢等は下記の表記を用いた。

乳児期 0～1才

幼年期 1～5才（前期1～3才、後期3～5才）

少年期 男 5～13才（前期5～10才、後期10～13才）

女 5～10才（〃 5～9才、〃 9～10才）

青年期 男 13～20才（〃 13～17才、〃 17～20才）

女 10～17才（〃 10～14才、〃 14～17才）

成人期 壮年 20～40才

熟年 40～59才

老年 60才～